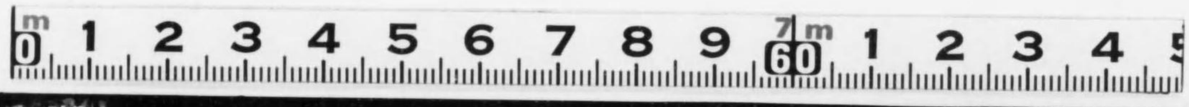


914.5-095ウ
1200501971004

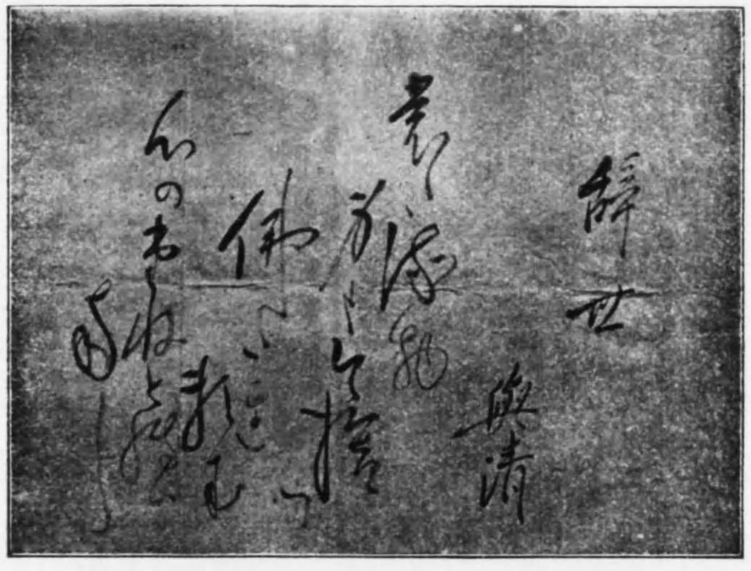
914.5
095,1

松屋筆記

第一

国立国会
26.3.1
図書館

U 20553



松屋先生稱號再興記

門人 下總 平建胤謹撰

松屋先生、姓平朝臣、稱號小山田、諱與清、字文儁、別號知非齋、父田中本孝、母平戸稻子、（武州倉岐郡下大岡人平戸忠八郎女）以天明癸卯三月十七日生于武州多西郡上小山田村、幻名虎之助、師昔陽古局南（屍後隈本教授）織錦村田春海、而問倭唐之學焉、弱冠繼三潴漕運事高田氏之家、而移住于江戸神田河邊通船屋敷、稱庄次郎、後改六郎左衞門、文政九年十二月、病而致仕、明年春、再出仕爲三緣山倭學士、改稱將曹、同十一年七月、再興先祖之廢號、而稱號小山田、小山田平氏、出於桓武天皇皇子葛原親王、其子高見王、其子高望王、始賜姓平朝臣、其子良兼、其子公雅、其子致賴、其子致經、其子將恒、稱號秩父、其子別當武基、其子十郎武綱、其子下野權守重綱、其子太郎大夫重弘、其子別當有重、改稱號小山田、仕于鎌倉幕府爲重臣、其子有三人、稻毛三郎重成、榛谷四郎重朝、小山田五郎行重也、（已上吾妻鏡、及行重居于下小山田村、安貞二年二月三日死、法名雪嶺松公禪定門、上小山田田中谷觀音寺五輪石塔銘、）其子小太郎久重、其子又太郎高家、建永元年十月三日、父子共戰死于北野鄉片倉城邊、其子前次郎高貞、文永二年二月三日死、其子小太郎高治、其子小次郎高重、從新田義貞朝臣、而有戰功矣、（已上阿合系圖、）其子四郎某、其子小太郎有茂、其子伯耆義保、文明九年三月、爲長尾景春之黨賓相寺及吉里宮內左衞門尉等、所陷下小山田之居城、遁潛居于上小山田村、（已上家傳、及鎌倉大草紙、寺記、）其居住之地、號伯耆澤、（土俗呼伯耆谷邑之野中谷正山寺所藏四本願寺古文書作伯耆澤、）後呼田中谷者、田中氏族、數十家處于此之故也、義保有女、妻於越後浪士田中大炊助義綱、而讓以其家園焉、義綱有二子、長曰彈正善昌、次曰與次郎長吉、永正元年、率長吉移住于由木鄉大塚邑、而使善昌繼舅家、從事於義保夫婦、義保永正九年五月廿六日死、葬于高昌寺後岡、法名照翁清光禪定門、高昌寺眞言宗、後遷其地、改其宗門寺名、稱曹洞宗大泉寺、其寺今尙存、此小山田氏代々居城跡也、（已上家傳、寺記、墓碑、口碑、別所村蓮生寺藥師堂享祿四年三月八日鰐口銘、及慶長三年木帳、）善昌遂去小山田稱號、而爲田中氏、田中氏源姓、安田遠江守義定男、田中越後守義資十二代之孫也、（系圖）善昌子和泉助義純、永祿九年九月十七日死、

其子宗右衛門光孝、慶長十年四月十一日死、法名一翁無心禪定門、其子有二宗右衛門、次郎右衛門、三郎左衛門三人一、年始飾レ門之例、宗右衛門家松竹並用焉、次郎右衛門家立レ松焉、三郎左衛門家立レ竹焉、其意在レ爲二子孫不一レ亂二友于之順次一之證一也、宗右衛門、寛永十六年三月三日死、法名梅岩宗香禪定門、其子宗右衛門光重、承應四年八月八日死、法名外翁宵雲居士、其子佐次右衛門政吉、天和三年五月廿日死、法名悦翁參喜居士、其子太左衛門政光、正德四年十二月六日死、法名喜翁淨觀居士、其子有二二人一、長權兵衛、次喜四郎政義、政義住二于邑之藤左入一、方言谷奥之地呼二之入一、言藤左衛門者所レ住之谷奥也、已上、系圖、墓碑、及水帳、政義、享保五年六月十九日死、法名無相護心居士、其子左次右衛門政詡、娶二小山邑萩原四郎兵衛女一、而生二一男二女一、長女嫁二於相州津久井縣根小屋村嶋崎宗藏律直一、第二女嫁二於多東郡宇奈根村荒居喜左衛門治郷一、男子本孝也、政詡安永六年十二月廿三日死、法名芳林軒實相圓心居士、本孝幼名德三郎、長而稱二忠右衛門一、享和三年六月十六日死、年六十三、法名添水園大義元孝居士、自二善昌一至二本孝一九世、以二田中一爲二稱號一矣、先生所レ繼之高田氏、亦清和源氏、出二於播磨國高田城主兵庫助者一、此山田氏之同族也、先生致仕之後、嗟二小山田氏之廢絕一、而有二再興之志一、於レ是使二其胤子繼二高田之家一、而自改號二小山田將曹平與清一、實小山田別當有重廿二代之正統、而桓武天皇三十五代之後胤也、高田氏家紋用二九曜巴一、小山田氏家紋用二窠中鳥葉一者、共舊例也、今也抄二出先生之家集一、而加二於南都藥師寺佛足結緣集中一、乃記二其改號之所由一、以附二于卷尾一云、

松屋筆記

例言

一本書は、松屋高田先生の筆記にして、頗る浩瀚に且つ有益なるを以て、學者間に知られたれども、其書たゞ東京帝國大學附屬圖書館に秘藏せる自筆の一本あるのみにて、其他には絶えて存する所なく、帝國圖書館すら僅かに其抄錄本を藏するに過ぎず、是を以て世間徒に其名を耳にして、其書を見ざる人多し。よりて本會特に東京帝國大學の許を請ひ、その自筆本に據りて刊行することゝなせり。

一抑〻先生は早くより好學の念篤く、博覽洽聞に最も恰當の資性を稟け、加ふるに、資產藏書の豐富なるあり、日夜靜に擁書倉中に書見するを得て、其一生著すところの書、百餘種の多きに及べり、就

中此筆記は、廣く群籍を渉獵し、適意の箇處を拔萃し、考を加へ、案を施し、多くの例證を擧げて說明し、其引用するところの各原書には、卷數丁數を附して出處を明にし、孫引の如きは極めて少し、殊に詞の解釋に就きては、深く留意せられ、其引例該博適切にして、古人の說を匡補せられしところ多きを以て言語の研究には勿論、有職故實等を學ばんとするにも、最も有用なる良材といふべし。先生は、文化三年、二十四歲にて高田家の養子となり、同十二年三十三歲の時、擁書倉落成したり。この筆記も、其頃よりの起筆かと思はる。そは筆記三卷に、同十二年に類字函を設けし由見え、同六卷に文政元年(三十六歲)のこと見え、同五十一卷には文政十年(四十五歲)同百十二卷には弘化二年(六十三歲)の頃のこと見ゆ。即ち先生歿年の前々年なり。且つ每卷首の署名も、五十六卷迄は源高田與清、五十七卷以下は平小山田與清とあれば、五十七卷以

後は、文政八年、小山田家を再興せられし後の記述なるべきか。

一本筆記中、九十卷後に、松屋外集とせるところ四五卷あり、又本文中にも、擁書漫筆松屋棟梁集に委し、松屋外集何篇何卷に出づなど記し、又高田家に松屋外集、松屋棟梁集など題せし寫本十數册現存せり。これらに據りて考ふれば、別に松屋外集をも編纂するの意にて、記しおかれたるにて、今傳ふる板本の外集は、其一部分なるべし。

一本筆記現存するところ第一卷より第百二十卷に至る。但し其中、十七より三十六に至る二十卷、及び四十一、四十四の二卷を缺く、高田家其他に就きて其缺卷を搜索したれども獲るところなくして之を補ふこと能はず、又四十二三卷及び四十五卷より四十八卷迄、燒焦げて文字不明の箇處多く、之を刊行するを得ず。甚だ惜むべし。

一本筆記中、其文章は完全しながら、藍又は朱にて抹殺せし箇條まゝあり、こは先生が不用として省かれしか、或は既に他の考證に採用したるより玆には除かれしか詳ならず、されど兎に角に、後人の參考となるべきものなれば、姑く原の儘に存し、『』を加へて之を區別す。

一本筆記の送り假名、假名遣等は、原書の儘を存し、又引用せる漢文の振假名は、特に訓讀に注意せられしものなるべけれど、今活版の都合上、大概省きて反點のみを附し、詩歌及び本文中、――を畫せる詞には、「」を加へて之を區別す。

一本筆記は筆に隨せて記せしのみにて再修を經ざりし故にや、往往文章に脫誤あるを免れず。それらの中引用の文は原本に就き て訂正し、或は〔〕を加へて補ひ、又引用書の中、前後の文四五字を擧げ、中間――を附して略せる所あり。それらは成るべく、原書に就きて之を補ひ、或は冗長に渉るものは省略のまゝに從ふ

一本筆記原本に頭書あり、今刊行に際し之を本文の終若くは中間に移し、六號字にて附記す。又頭書に何卷何段とのみ記して書名なきは、本筆記を指せるものなれば、上に筆記の二字を加ふ。又水戸藩の學者吉田令世氏の押紙二三あり、そは〔押紙〕の二字を加へて之を區別す。

一本卷の首に揭げたる肖像は、高田家の所藏にして、辭世の歌は、先生眞蹟の摸寫なり。松屋先生稱號再興記は、先生の略傳に代へてこゝに收む。

明治四十一年一月

松屋筆記第一目錄

卷之一

(一)高野明神の使犬……一
(二)傳教受三灌頂於弘法……一
(三)六觀音本說……一
(四)大安寺の堂……二
(五)聖天の圖……二
(六)仁壽殿二間の觀音……二
(七)高野傳法院兩界の背障……二
(八)中川實範上人の歌……三
(九)南都行念房の歌……三
(十)弘法大師の歌并賴瑜の歌……三
(十一)貞松房最後……三
(十二)空晴僧都最後……三
(十三)義淨三藏并鑒眞の墓……三
(十四)蒙古の使最後の詩……三
(十五)賴瑜夢想の歌……三
(十六)十齋日六齋日并藥師觀音等の緣日の事……四
(十七)善惡夢の呪……四
(十八)庚申夜の誦頌……四
(十九)鼻曳時の頌……五
(廿)長吏三綱所司……五
(廿一)七僧……五
(廿二)奈良七寺……五
(廿三)歌書撰者……五
(廿四)賴瑜が九月十三夜の歌……七
(廿五)諱號……七
(廿六)南都解脫房詠歌……七
(廿七)辰書得業が歌……七
(廿八)弘法大師誕生日……七
(廿九)大日本國表示……七
(卅)芥子供……七
(卅一)不動の辮髮……七
(卅二)黑善阿彌陀佛發心……七
(卅三)聖德太子胎中の語……八
(卅四)右流左死……八
(卅五)拾の字……八
(卅六)百字を度と訓……八

卷之二

(一)面已をのみと訓……八
(二)油と朱を用方……八
(三)斛に石字を用……八
(四)諸寺門の二王……九
(五)神泉苑請雨……九
(六)安然非二弘法大師一……九
(七)荒神……九
(八)弘法傳敎の約……九
(九)たばねと云詞……九
(十)最明寺時賴辭世の句……九
(十一)木幡上人の歌……一〇
(十二)錢の形……一〇
(十三)勸酒次第……一〇
(十四)指油の故實并かき立木……一〇
(十五)箸下箸……一〇
(十六)折紙消息の故實……一〇
(十七)隱居を菟裘と云……一〇
(十八)會稽の耻……一〇
(十九)問民苦使……一〇
(廿)長惟が聯句……一一
(廿一)唐人の連歌……一一
(廿二)圖扇にもの書……一一
(廿三)報恩院僧正の歌……一一
(廿四)法の扇……一一
(廿五)鴻門鴟戶……一一
(廿六)公相大臣の歌……一一
(廿七)樽尾上人并木幡上人の歌……一一
(廿八)逢磨の讖樣……一二
(廿九)和歌九首……一二

(卅)眞俗雜記十六の卷奧書……一二
(卅一)四十より老に入……一二
(卅二)大幅の寸法……一二
(卅三)爪を剪事……一二
(卅四)瓜を割故實……一二
(卅五)覺鍐上人の銘……一三
(卅六)法務僧正の銘……一三
(卅七)扇を懷中に入……一三
(卅八)打鳴……一四
(卅九)大安寺并眞言院東寺……一四
(四十)丹生高野使者犬黑狗……一四
(四十一)弘法大師投三三杵一……一四
(四十二)弘法大師入定……一四
(四十三)弘法大師贈號并僧の位階……一五
(四十四)弘法遺告の奧書并東寺の舍利……一五
(四十五)土屋井土屋倉……一五
(四十六)經机の外題を書故實……一六

卷之三

(一)類字圖の銘……一六
(二)河面に螢を見る詞井序……一七
(三)相摸國の鐘が淵……一七
(四)繪馬……一七
(五)應仁の比の足輕の出立の覩并茶の湯……一八
(六)蓍筮の變爻となる……一八
(七)六十六部同國の經聖……一八
(八)めんつ……一八
(九)草履の燒綿紋并履棚……一九
(十)茶屋井わたくし物まめやか物……一九
(十一)よこ樋井樋の名種々……二〇
(十二)順禮の札……二〇
(十三)湯桶文章并牛一頭二頭……二一
(十四)馬一疋二疋并絹一疋二疋夫一疋二疋……二一
(十五)料足十疋廿疋……二一
(十六)茶四五ふくのむほど……二一
(十七)太皷の家并船のあかなかゐる……二二
(十八)がんじやう……二二
(十九)かみ樓……二二
(廿)小兒の衣を夜外に曝を忌……二二
(廿一)雜物所……二二
(廿二)經帷子……二二
(廿三)鳥さし竿……二二
(廿四)こうざい者……二二
(廿五)硯より龍ののぼる事并大所……二三
(廿六)掛繪……二四
(廿七)美濃紙……二四
(廿八)柿餅……二四
(廿九)貝おほひ……二四
(卅)ふくだ……二四
(卅一)左ばらみ右ばらみ……二四
(卅二)動搖則不レ生レ病……二四
(卅三)叡夢……二五
(卅四)墓相……二五
(卅五)泥鰌の訓義……二五
(卅六)呼子鳥……二五

卷之四

(一)混柄の甕井混柄之鎚……二六
(二)しら樫……二七
(三)ヒヤウヒヤク蠹……二七
(四)役者薄老……二七
(五)猫をなやませし童……二七
(六)蜻蛉を捕術……二七
(七)スツホンといふ名義并龜の鳴……二八
(八)オイラン松位大夫などの義……二八
(九)本居氏が神道……二八
(十)しきの羽がき……二八
(十一)神の濟井神通河……二八
(十二)みそうづ……二九

(十三)盧扁……二九
(十四)すげなう幷くさ〳〵としたと云俗語……二九
(十五)いんぢ……二九
(十六)三國同日之談……三〇
(十七)べそをつくりて泣……三〇
(十八)萬和倍留……三〇
(十九)享保十五年江戸屋形舟の員數……三〇
(廿)俗語の出所を思ひよれる儘に書つく……三〇
(廿一)辻捕……三一
(廿二)天皇の謚號……三二
(廿三)田地の字并某名田……三二
(廿四)様々のつくり物……三二
(廿五)日本國行程……三二
(廿六)八幡大菩薩託宣……三二
(廿七)武藏國與野郷井番帳燒絵……三二
(廿八)朝鮮用二本邦之里數一……三三
(廿九)公方様……三三
(卅一)諸司代……三三
(卅二)政所……三三
(卅三)遙授官……三三
(卅四)秩滿……三四
(卅五)揚名據揚名を倉に積……三四
(卅六)宵女房賓侍……三四
(卅七)御巫猿女……三四
(卅八)北政所……三四
(卅九)大北政所……三五
(四十)北の方……三五
(四十一)南の方……三五
(四十二)地子……三五
(四十三)德政……三五
(四十四)公解出擧本額……三五
(四十五)私俤……三五
(四十六)隱首括出……三五
(四十七)隱田……三五
(四十八)贓物……三六
(四十九)公家の家領をおとす……三六
(五十)女の采地……三六

卷之五

(一)ダイラボッチの足跡……三六
(二)左遷の時七種の遙事……三六
(三)下手人……三七
(四)京中兵仗停止……三七
(五)禁色をたゞす……三七
(六)奴原男原法師殿原并メラ……三七
(七)奈木奈多……三七
(八)武藏の釜形山……三八
(九)豆腐の田樂并玉味噌……三八
(十)ぼうゞ〳〵眉……三八
(十一)寸切……三八
(十二)十關子并めらう……三八
(十三)年わすれ……三八
(十四)物賣聲……三八
(十五)鷹皮紙……三八
(十六)蚊の大將軍并紙帳……三八
(十七)手洗所の水門并ぬれ縁……三八
(十八)福は内鬼は外……三九
(十九)厄おとしに錢を乞貪にさらす……三九
(廿)物の名を呼に某もじと云詞……三九
(廿一)餅花……三九
(廿二)ごろばうどらものどうらく……三九
(廿三)昨日一昨日一昨々日今日明日明後日明々後日明々後日なごの訓義……三九
(廿四)銀公がから衣……四〇
(廿五)わすれ艸しのぶ艸并われかと云詞……四〇
(廿六)あらいみまいみ……四〇
(廿七)ふりがたきと云詞……四〇

(廿八)母子の餅……四〇
(廿九)千鳥百千鳥……四〇
(卅)都鳥なく……四〇
(卅一)目路と云詞……四一
(卅二)たきのはん……四一
(卅三)あうすち……四一
(卅四)梅櫻を論ぜし歌并紅の梅……四一
(卅五)鶯の聲にはかられつゝて殺せし事……四一
(卅六)とりかぶと……四一
(卅七)目は空……四一
(卅八)蠟歌……四一
(卅九)木から落た猿……四二
(四十)動而得ル謗名亦隨ル之……四二
(四十一)古今集の名義……四二
(四十二)詞の林筆の海……四二
(四十三)よにあふ坂の關はゆるさじ……四二
(四十四)橘千隆が扇の歌……四二
(四十五)日下元泰が詩……四二
(四十六)建綾足が歌……四三
(四十七)村田春道が別業にて人々のよめる歌……四三
(四十八)橘常樹が追悼の歌……四三
(四十九)紙釘幷竹筵……四四
(五十)後普光園院殿万卷の書を讀……四四
(五十一)畑水練井火中の書……四四
(五十二)西はれの家……四四
(五十三)ちきり……四四
(五十四)三ヶ月形……四四
(五十五)まち……四四
(五十六)ふすぶり幷うるむ……四五
(五十七)うこと云詞并集侍……四五
(五十八)くけ入て……四五
(五十九)こけら葺……四五
(六十)大辨慶小辨慶……四五
(六十一)ひこ緒井産帶……四五
(六十二)たゞ〳〵指幷くすり指……四五
(六十三)そんばうかしらに結ぶ……四五
(六十四)れなのうさぎ耳……四五

卷之六

(一)秀句緣の字緣の詞……四六
(二)歌の冥加……四六
(三)紳樂の詞は延喜の御代の撰……四六
(四)とふ〳〵と云詞……四六
(五)うぬといふ罵詞……四六
(六)内裏……四六
(七)朝廷……四六
(八)妙澤和尚の不動の繪像……四七
(九)小童なテッチといふ事……四七
(十)文畝改元の詔……四七
(十一)朝山意林庵墓碑……四七
(十二)御物忌……四八
(十三)氏神氏院……四八
(十四)後取……四八
(十五)屠蘇……四八
(十六)齒固……四八
(十七)内膳……四八
(十八)盖擎子……四八
(十九)錦額……四八
(廿)通障子……四八
(廿一)衾床子……四八
(廿二)胡床……四八
(廿三)三節御酒……四八
(廿四)獨床子……四九
(廿五)簀子敷床子……四九
(廿六)中墨物……四九
(廿七)版位……四九
(廿八)俘囚夷俘……四九
(廿九)腹赤奏……四九
(卅)笏……四九
(卅一)近伏稱謂……四九

(廿二)謝座再拜……四九
(廿三)傍行一兩步……四九
(廿四)空盞……四九
(廿五)唱平……四九
(廿六)見參……五〇
(廿七)平張……五〇
(廿八)追物(フキモノ)……五〇
(廿九)飾劍……五〇
(四十)荻蟲樣……五〇
(四十一)棚子ヤス……五〇
(四十二)肘怠ヒヂタユシ……五〇
(四十三)式乃司……五〇
(四十四)槇櫨カラナシ……五〇
(四十五)二宮三宮……五〇
(四十六)包燒栗蘇甘栗……五〇
(四十七)中取……五〇
(四十八)細屯……五〇
(四十九)荒染……五〇
(五十)零餘子燒……五〇
(五十一)清キヨラ……五〇
(五十二)卵童(トリノコガサキ)……五〇
(五十三)入眼……五〇
(五十四)馳道……五〇
(五十五)內敎坊……五〇
(五十六)小安殿……五二
(五十七)三晒……五二
(五十八)渦漬……五二
(五十九)御薪……五二
(六十)麴塵青色御袍……五二
(六十一)書伏……五二
(六十二)度物……五二
(六十三)闕官帳……五二
(六十四)笏長……五二
(六十五)內記所……五五
(六十六)本領條并三色稻出擧稻……五六
(六十七)不動條并本領不動穀……五六
(六十八)綿條……五六
(六十九)格率分條……五六
(七十)神社佛寺大垣之稻……五六
(七十一)無直交易……五七
(七十二)里倉……五七
(七十三)多計久長戶(コノシサ)……五七
(七十四)己分差……五七
(七十五)風記……五八
(七十六)唱平……五八
(七十七)音博士……五八
(七十八)文屋竜……五八
(七十九)栟櫚……五八
(八十)螺盃銅盞……五二
(八十一)揷頭……五二
(八十二)多胡建郡碑考……五二
(八十三)堅魚の訓義并四谷の角筈と云地名……五四

卷之七

(一)杳の字……五五
(二)さあと云詞……五五
(三)中倫堂詩删序……五五
(四)懷紙に同詠と書事……五六
(五)金短冊に自歌を書まじき事……五六
(六)詞書の長きを短冊に書事……五六
(七)句題の歌よみやうの事……五六
(八)龍の口……五六
(九)カヘルの名義……五七
(十)圖居……五七
(十一)鏡を神鉢さす……五七
(十二)女の膽より出し石の記……五七
(十三)儒佛の道芝居におつ……五八
(十四)にび色の扇……五八
(十五)松と竹とは親子……五八
(十六)氏神の花……五八
(十七)花をこふ……五八

(十八)ゆふつげ鳥……五九
(十九)ふし原しば原の差別……五九
(廿)うたうまだき……五九
(廿一)水無瀨川……五九
(廿二)東海道を字音によみたる歌……六〇
(廿三)ほそをそこ……六〇
(廿四)鳴瀧……六〇
(廿五)摘と爪とは同語……六〇
(廿六)男に髮切られし女……六〇
(廿七)たてまたし井とりうてゝと云詞……六〇
(廿八)猿の烏帽子……六一
(廿九)いひころし井いひそしと云詞……六一
(卅)とわたるといふ詞……六一
(卅一)もちひの假名……六一
(卅二)鳴門井波の名義……六二
(卅三)はすみと云詞……六二
(卅四)山櫻にほふ……六二
(卅五)たびといふ履(クツ)……六二
(卅六)あらいみまいみ……六二
(卅七)つく……六三
(三)名なかくしてよめる歌……六四
(四)交淡如レ水……六四
(五)ながむと云詞……六四
(六)さゝき津にすがきさばせり并え
りさす……六四
(七)もとあらの櫻……六五
(八)雀の子たつ……六五
(九)長びく……六五
(十)青み原……六五
(十一)しろ綿ひける野邊……六五
(十二)すゝめがくれ……六五
(十三)おもとじの乳ぶさのむくい……六五
(十四)大あらき(カゼロヒ)……六五
(十五)玉限……六六
(十六)清濁音よみかけの歌……六六
(十七)半と毛は常に通はし書例……六六
(十八)かいとの道……六七
(十九)かひたるきと云詞……六七
(廿)すぐろの薄……六七
(廿一)おほあらきの駒……六七
(廿二)あさけのま人……六八
(廿三)めぐりくる……六九
(廿四)ほふげづき……六九
(廿五)まれくる……六九
(廿六)落花の歌……七一
(廿七)氷の魚……七一
(廿八)郭公の名義……七一
(廿九)すげなくしよすがすがるなど
云詞……七一

卷之九

(一)よぶこ鳥……七二
(二)曉月房……七二
(三)すゐき……七三
(四)くらぶの里……七三
(五)わたりあひ川……七三
(六)立居といふ詞……七三
(一)身をしる雨……六三
(二)もろこし人のよすめかいておち

(七)すはうに書つく……七三
(八)いひとき井鰯(イヒトヨ)歟……七四
(九)ほき道ほきの陰道ばさ……七四
(十)まぜくだ物おこし米……七四
(十一)穂笠……七五
(十二)ふくばし井瓜まろび……七五
(十三)さくりの上に尻かけて……七五
(十四)おもさるがく……七五
(十五)かぶき……七六
(十六)扇のかの目……七六
(十七)名に高き二夜……七六
(十八)寺にて手習ふ……七六
(十九)むくれにし井むくの木むくの實七六
(廿)ほだきりくべて……七七
(廿一)反故を紙に漉て經をかく……七七
(廿二)白薄樣の色々の公事を書たる…七八
(廿三)ぐた〳〵……七八
(廿四)新井白石の俳諧……七八
(廿五)船靈神記……七八
(廿六)おのが田へ水を引水かけ論…七九
(廿七)三月盡井小三月盡……七九
(廿八)ぜゝらき……七九
(廿九)三月三日の草餅……八〇
(卅)二子栗……八〇
(卅一)こめ噸……八〇
(卅二)冬のおぼろ月……八〇
(卅三)よめの子……八一
(卅四)老のふくろ……八一
(卅五)うゑめ……八一
(卅六)はごにかゝれる鳥……八一
(卅七)たふといふ布……八一

卷之十

(一)あめのみかど井雲霄そやみ……八二
(二)によび……八三
(三)草かり笛……八三
(四)火鼠のかはほり……八三
(五)ふけらかす……八三
(六)蜘蛛のい……八三
(七)身のしろ衣……八四
(八)ふんたみたる文箱……八四
(九)層に初雪降日を記す……八四
(十)なげき……八四
(十一)霞の色墨染……八四
(十二)上衆下衆……八四
(十三)ろうさうの剋……八四
(十四)きしのひたひ井めなれ木……八五
(十五)手ふりをして……八五
(十六)舟のもとろき……八五
(十七)田の坪……八五
(十八)火きりの餅……八六
(十九)以呂伴之事井への字川の字……八六
(廿)傳馬を給事……八七
(廿一)小兒を慰るにインノコ〳〵と云詞……八七
(廿二)了譽上人の生國……八七
(廿三)鳥居……八八
(廿四)鹿島立同祭の詞同撰不レ拔……八八
(廿五)鹿島の神標井廟札……八八
(廿六)鹿島社の本地……八八
(廿七)北野天神御歌……八九
(廿八)スル〳〵と云詞幷金切リタル音と云詞……八九
(廿九)釋門をくろかごとよめる歌……九〇
(卅)みなの河……九〇
(卅一)師衛……九〇

卷之十一

(一)正親町院御即位の用途丹波國水上家より奉事……九一
(二)イボヒといふ詞……九二
(三)提筒提籠……九二

(四)カセ者……九二
(五)釣合合戰……九二
(六)はた物……九二
(七)カケオチと云詞幷ムゴキと云詞…九二
(八)水論……九二
(九)遊寄井蒸夜討蒸松明……九三
(十)トハウを失ふ……九三
(十一)粮井日記中所載之和歌……九三
(十二)人を制するに東西々々と云詞…九四
(十三)おめくと云詞……九四
(十四)ふりつけると云詞……九四
(十五)おしれ……九四
(十六)山のとばら……九五
(十七)平禮にて引つくろふ……九五
(十八)瓜茄子を酒肴にする……九五
(十九)かひ數……九五
(廿)たゞ〳〵あゆみ……九五
(廿一)扇子拍子……九五
(廿二)百首歌よむ事……九五
(廿三)折數の裏にて切る物……九六
(廿四)古今傳授……九六
(廿五)七神たゝく事……九六
(廿六)はだか文……九七
(廿七)そら取ル鷹……九七
(廿八)歌合の判に心得べき事……九七
(廿九)鹿島香取の名義……九七
(卅)實錄……九八
(卅一)色事といふ詞……九八
(卅二)爪じるし……九八
(卅三)蘇居翁贊……九九
(卅四)守山といふ地名……九九
(卅五)ざりせばと云てになはの格…九九
(卅六)ぐし井おこと……九九
(卅七)振鉾……一〇〇
(卅八)立樂……一〇〇
(卅九)鷄庖丁之事……一〇一
(四十)朱椀黑椀にて剛臆を別つ事…一〇一
(四十一)口分田といふ氏……一〇一
(四十二)すつば……一〇一
(四十三)伏がまり……一〇一
(四十四)合詞幷羽織三引兩……一〇一
(四十五)芝虎……一〇二
(四十六)江島詩……一〇二
(四十七)富士山詩……一〇二

卷之十二

(一)いりといふ詞……一〇二
(二)はゞかる……一〇三
(三)すゞましと云詞……一〇三
(四)屯食……一〇三
(五)手拭のかぜ……一〇三
(六)ゐなかづと井みやげ……一〇三
(七)女に殿といふ例同「おとうと」といふ例……一〇三
(八)かいもちひ……一〇四
(九)えぶな……一〇四
(十)鷺を百千鳥とよめる歌……一〇四
(十一)たまらぬと云詞……一〇四
(十二)矢合……一〇四
(十三)賣餅家……一〇四
(十四)砦……一〇四
(十五)羅拜呼万歲……一〇四
(十六)醫井茱萸……一〇五
(十七)野鹽藪……一〇五
(十八)役人……一〇五
(十九)栗橋……一〇五
(廿)芝虎……一〇五
(廿一)菊花塔……一〇五
(廿二)近習……一〇五
(廿三)短册書法……一〇五
(廿四)たつ春……一〇五
(廿五)季書懷紙……一〇六

(廿六)室……一〇六
(廿七)北の方……一〇六
(廿八)母妻女と書例……一〇六
(廿九)出駕……一〇六
(卅)千葉介三浦介などいふ介の事……一〇六
(卅一)八景の圖及詩……一〇七
(卅二)近江八景の所見……一〇九
(卅三)南都八景の所見……一〇九
(卅四)宗門……一〇九
(卅五)そゝうと云詞并そしう……一一〇
(卅六)飯をめしといふ訓義……一一〇
(卅七)草木の名に馬犬熊などを冠せていふ詞……一一〇
(卅八)遠江今切……一一〇
(卅九)一揆……一一〇
(四十)緒初……一一一
(四十一)勘合の印……一一一
(四十二)位牌……一一一
(四十三)武者修行……一一一
(四十四)陣僧……一一一
(四十五)巡の舞……一一一
(四十六)近迎遠迎……一一一
(四十七)木遣なうたふ……一一一
(四十八)おはせし……一一一
(四十九)みあれ木……一一一
(五十)圭田……一一二

卷之十三

(一)貢茶……一一二
(二)西國廿三所順禮の札并彌勒と云ふ年號の事……一一二
(三)某所くだりと云詞……一一三
(四)番場辻堂の鐘銘……一一三
(五)定額……一一三
(六)小野篁征二東夷一……一一三
(七)名利の學……一一三
(八)能書用二好筆一……一一三
(九)柑子……一一四
(十)井澤彌三兵衛が墓碑……一一四
(十一)陽明の御家……一一四
(十二)陽の太刀……一一四
(十三)布衣……一一四
(十四)冬樓……一一四
(十五)武藏八王子なる武田信玄の遺物……一一四
(十六)笈好が歌……一一四
(十七)掃部助憲朝が書簡……一一五
(十八)木下川藥師寺の神君御影の讖……一一五
(十九)博學腹破裂……一一五
(廿)鐘馗……一一五
(廿一)繪馬……一一六
(廿二)葬に玉を用ふれば不朽……一一六
(廿三)十八公……一一六
(廿四)尸を焚は罪科にひとし……一一六
(廿五)吳の侍中李仁が語……一一六
(廿六)山伏……一一七
(廿七)夜半といふ詞……一一七
(廿八)李の字諱の字……一一七
(廿九)實名を呼は不禮……一一七
(卅)大審當番定番人……一一八
(卅一)踰宮論宮御誕生……一一八
(卅二)著衰中の年を忌……一一八
(卅三)御袋……一一八
(卅四)菖蒲刀……一一八
(卅五)下賤の者姓氏を書例……一一八
(卅六)涙人……一一八
(卅七)大內裏……一一八
(卅八)ゆゝで……一一九
(卅九)みといふ詞……一一九
(四十)ことふく……一一九
(四十一)狐付をおとす妙方……一一九

(四十二)馬長……一一九

卷之十四

(一)關防の印……一二〇
(二)根津祠の詩……一二〇
(三)芝居の金主したる文人……一二〇
(四)文人の素性……一二一
(五)名號……一二一
(六)愚人……一二二
(七)夜の錦……一二二
(八)なもじを助詞に用る格……一二二
(九)石川年足朝臣墓誌……一二二
(十)常陸板子長勝寺鐘銘……一二二
(十一)つまと云詞……一二三
(十二)野郎といふ罵詞……一二三
(十三)ほゝ鳥……一二三
(十四)たのしきなげき……一二三
(十五)きゝがまり……一二三
(十六)金人……一二三
(十七)ダンボ風并お七風……一二三
(十八)陸沈……一二四
(十九)七を見るに貧に失す……一二四
(廿)捧腹……一二四
(廿一)今昔……一二四
(廿二)逆に取て順に治……一二四
(廿三)松柏百木の長……一二四
(廿四)三瓦を成さず……一二四
(廿五)德……一二四
(廿六)交絕不レ出二惡聲一……一二五
(廿七)すむづかり……一二五
(廿八)タギマ道……一二五
(廿九)山東京傳……一二五
(卅)淨土宗……一二六
(卅一)南无阿彌陀佛と申す……一二六
(卅二)鯨鬚の尾の繩……一二六
(卅三)念佛……一二六
(卅四)すかしほらかすと云詞……一二六
(卅五)ひらにと云詞……一二六
(卅六)いそ〳〵と云詞……一二六
(卅七)げに〳〵しくと云詞……一二七
(卅八)乘物……一二七
(卅九)身の毛いよだつ……一二七
(四十)あら〳〵井ことん〳〵しくと云詞……一二七
(四十一)ふされてと云詞……一二七
(四十二)智惠ありがほ……一二七
(四十三)淋唾便利四方を背向かす……一二七
(四十四)大胡太郎實秀……一二七
(四十五)異ざとり(コト)の人……一二七
(四十六)あてがひと云詞……一二七
(四十七)葷臭を食ても念佛を忌まず……一二七
(四十八)いがけと云詞……一二七
(四十九)卷經井草子……一二七
(五十)佛に煮皮を用……一二八
(五十一)まふり……一二八
(五十二)わいく……一二八
(五十三)歌讀……一二八
(五十四)酒を呑……一二八
(五十五)楊枝……一二八
(五十六)子生れて百日の忌……一二八
(五十七)みそうづ……一二八
(五十八)時のくひ物并常行水……一二八
(五十九)酒の忌……一二八
(六十)いかけ……一二八
(六十一)灸治の禁忌……一二八
(六十二)葷臭を食……一二八
(六十三)產忌……一二八
(六十四)烏帽子も着ざる男……一二八
(六十五)いま〳〵しく……一二九
(六十六)小阿彌陀經……一二九
(六十七)舌の根すくみて……一二九

(六十八)佛を四の壁に安置す……一二九
(六十九)印板……一二九
(七十)政井社稷……一二九
(七十一)周文王殺二父季歷一……一二九
(七十二)潤筆……一二九
(七十三)ぜくといふ詞……一三〇
(七十四)ぜしといふ詞……一三〇
(七十五)城なシロと訓例……一三〇
(七十六)糜汰……一三〇
(七十七)アラと云俗語……一三一

卷之十五

(一)つゝぐれ井つゝやく……一三一
(二)濕烟……一三一
(三)日本紀竟宴歌……一三一
(四)五月五日甲……一三二
(五)假名を假字と書……一三二
(六)荷葉椀……一三二
(七)木の擣穀……一三二
(八)茶籠……一三二
(九)大物の濱……一三二
(十)ものゝあらがひ……一三三
(十一)雪ほど黑き物はなし……一三三
(十二)牒狀……一三三
(十三)竟宴歌に期の假字を用……一三四
(十四)八月十五夜……一三四
(十五)しやうれと云俗語……一三五
(十六)あしづゝ……一三五
(十七)つくも髮つゝつゞれつゞらおりつゞしる……一三六
(十八)手兒奈手兒手兒呼坂古奈……一三七
(十九)詠草の名乘の下に上の字を書事……一三九
(廿)自詠の歌をうたふ事……一三九
(廿一)梅花をさして君とよめる歌……一三九
(廿二)天鷲絨の羽織并朱傘大鳥毛の鎗……一三九
(廿三)袖無羽織……一三九
(廿四)月山鍛……一三九
(廿五)千手といふ地名……一三九
(廿六)鍾帷子……一三九
(廿七)會津蠟燭……一三九
(廿八)笑平……一三九
(廿九)鎌矛弓のつく打たる……一四〇
(卅)田所……一四〇
(卅一)土倉……一四〇
(卅二)驚取……一四〇
(卅三)木屋……一四〇
(卅四)峯河(みなの川)……一四〇
(卅五)河道……一四〇
(卅六)庄倉并庄屋……一四〇
(卅七)大坂小坂鼈坂押坂などの類坂の名くさ〴〵……一四〇
(卅八)コシヤク者……一四一
(卅九)鰾の字……一四一

卷之十六

(一)寺所……一四一
(二)村屋并庄屋……一四一
(三)瓦屋所并紙屋……一四一
(四)稻の名……一四一
(五)轆轤……一四二
(六)力車……一四二
(七)猛者……一四二
(八)多々羅……一四二
(九)後室……一四二
(十)筆付綱……一四二
(十一)一里三十六町并一里六町……一四二
(十二)八木……一四二
(十三)採色佛師……一四二
(十四)菩提樹始渡……一四三
(十五)水車舂米……一四三

(十六)手を拍てよろこぶ……一四三
(十七)寺物の別……一四三
(十八)鏡の形……一四三
(十九)足釜懸釜行竈……一四三
(廿)蠟燭……一四三
(廿一)賜院兎院倉垣院花園院……一四四
(廿二)並屋井屋雉屋政所院……一四四
(廿三)田代……一四四
(廿四)登山道登道……一四四
(廿五)牛屋窪……一四四
(廿六)堺江堺川堺橋堺山堺野……一四四
(廿七)倉の名……一四四
(廿八)雲のかけはし……一四四
(廿九)梅花を杯に浮る事……一四四
(卅)重荷に小附……一四四
(卅一)八葉領……一四四
(卅二)大岑横岑小蜂長峰中峰曾根
宇根小根横根中根……一四四
(卅三)尾と生の別……一四五
(卅四)鳥居戸……一四五
(卅五)四面庇并開戸車戸……一四五
(卅六)葺工并家根屋……一四五
(卅七)柿葺……一四五
(卅八)忌日……一四五
(卅九)神武天皇の靈……一四五
(四十)庄鄉領の別……一四六
(四十一)傘準傘城盖山三笠山……一四六
(四十二)小字并眞人……一四六
(四十三)口代并畝歩……一四六
(四十四)北條の郡……一四六
(四十五)番の鴉……一四七
(四十六)客人の神……一四七
(四十七)御手印……一四七
(四十八)錢幣……一四七
(四十九)火本并升形うづまき……一四七
(五十)順禮……一四七
(五十一)晩出家……一四七
(五十二)倭歌……一四七
(五十三)擔夫……一四七
(五十四)五十音の配字……一四七
(五十五)あなだまはや……一四八
(五十六)重點の字行を隔ては書まじきと云は非……一四八
(五十七)野口野中野上上野野田……一四八
(五十八)色紙形に名をかく……一四八
(五十九)常磐堅磐の字を書例……一四八
(六十)佛神……一四八
(六十一)石鏡を墓表とす……一四八
(六十二)やす幕……一四九
(六十三)明神……一四九
(六十四)鷹報二母仇一……一四九
(六十五)如木……一四九
(六十六)落板敷并鳴板……一四九
(六十七)別當權別當修理別當俗別當少別當御殿司入寺僧……一五〇
(六十八)後普光園院攝政眞基公万卷の書を讀……一五〇
(六十九)鳥の曹司并曹司……一五〇
(七十)畠水練并火中……一五〇

卷之卅七

(一)御代官の碑を立て土民祭祀する事……一五一
(二)風雷を吹き井に及ば家蟄の災……一五一
(三)上道……一五一
(四)賣買私約……一五一
(五)蚊舞町……一五一
(六)佛神……一五一
(七)石鏡を墓表とす……一五一
(八)胎息胎食……一五二
(九)虎と見て石にたつ矢……一五二

(十)白波絲林……一五二
(十一)活版銅版井聚珍版……一五三
(十二)將軍樹……一五三
(十三)雷洞……一五三
(十四)石佛……一五四
(十五)鄉倉……一五四
(十六)神社の緣起……一五四
(十七)禍來病……一五四
(十八)倭漢合運……一五四
(十九)しての田をさ……一五五
(廿)弓筆の道……一五五
(廿一)紫蘇卷井崔裏……一五五
(廿二)新撰和漢合圖下……一五五
(廿三)富士塚……一五六
(廿四)名書に姓氏を細書するは藤原末家の例……一五六
(廿五)眞むすび……一五六
(廿六)ホイタウ井承仕……一五七
(廿七)同朋……一五七

卷之卅八

(一)制度擬二唐禮一……一五七
(二)家宅の制三變……一五七
(三)代物……一五八
(四)御湯殿……一五八
(五)講師讀師警蹕……一五八
(六)うはさしの矢井落矢……一五八
(七)おゝ長の御膳……一五八
(八)髮の中制……一五九
(九)薄疊井ウスベリといふ數物……一五九
(十)チヤ〳〵ムチヤカウ井ヤタラ濱……一五九
(十一)身屋……一五九
(十二)女房文に月日をしるす……一五九
(十三)繪の上に歌を押す……一五九
(十四)筧ため形……一五九
(十五)藏法師……一六〇
(十六)大方殿御方……一六〇
(十七)十六島薀……一六〇
(十八)鈴生(山言語)……一六〇
(十九)忌詞……一六一
(廿)數の調字の字……一六一
(廿一)浦わけ衣……一六一
(廿二)願文祭文の自作……一六一
(廿三)年給……一六二
(廿四)河藥……一六二
(廿五)名の片字……一六三
(廿六)大尺……一六三
(廿七)六借井目ハジキと云草……一六三
(廿八)風流井馬長……一六三
(廿九)酒氣……一六四
(卅)天狗……一六四
(卅一)荒和被の實質……一六四
(卅二)東庄……一六四
(卅三)和歌所……一六四
(卅四)遊女の鄙曲亂舞……一六四
(卅五)猿樂候二御前庭一……一六四
(卅六)宮廻……一六四
(卅七)スミトクサの狩衣井五絲不具の襪……一六五
(卅八)持佛堂……一六五
(卅九)梅花三月開……一六五
(四十)和歌の讀上……一六五
(四十一)懷紙井柳筥……一六五
(四十二)玉のつがり井結染及雜色……一六五
(四十三)袖のしわ……一六五

卷之卅九

(一)遊女井遊君別當……一六六
(二)涌生秀實が俳諧歌論の跋……一六七
(三)天日嗣井某朝廷……一六七
(四)彌五郎男申狀……一六七

(五)增上寺成譽僧正辭世……一六八
(六)花嚴八會章の跋……一六八
(七)如來出現品抄……一六八
(八)諸侯の年號を書す……一六九
(九)印章は白字を古とす井銀……一六九
(十)繪馬……一六九
(十一)中風の妙藥……一六九
(十二)武藏多摩郡矢部八幡宮の棟札……一六九
(十三)小山田領の永高……一七一
(十四)一向宗の御白藥……一七一
(十五)燒米……一七二

卷之四十

(一)行德といふ地名……一七三
(二)馬入といふ地名……一七三
(三)神塵經……一七三
(四)唐竹枯……一七四
(五)大黑祭大黑講……一七四
(六)白波……一七四
(七)行幸の時諸社修造……一七四
(八)太平御覽……一七四
(九)市餅井紛物……一七四
(十)百塔禮……一七四
(十一)茶染……一七六
(十二)青仁井郎等郎從……一七六
(十三)姪喰……一七七
(十四)小佛師……一七七
(十五)後家……一七七
(十六)小持佛堂……一七七
(十七)風爐……一七七
(十八)藤氏長者の朱器拳盤……一七七
(十九)鬘髮……一七七
(廿)魚味……一七七
(廿一)散米……一七七
(廿二)辛繪隨身……一七七
(廿三)五十日の餅百日の餅……一七七
(廿四)門を立る禁忌の日の事……一七八
(廿五)耳金井梁形……一七八
(廿六)立沙井盛沙……一七八
(廿七)諸輪差に結井錢をあしとい ふ……一七八
(廿八)日は禰の門……一七八
(廿九)打……一七八
(卅)交代……一七八
(卅一)多謝……一七八
(卅二)丁寧什物布施比校……一七八
(卅三)當日地主料理消息……一七八
(卅四)功夫普請手下……一七九
(卅五)本色古老商量不實備……一七九
(卅六)私名不審爾來見在……一七九
(卅七)老境先輩如今居士通人……一七九
(卅八)某甲道士主人公我輩人……一七九
(卅九)十八九若干物色本師祖師……一七九
(四十)贄遣本貫十字街見錢……一七九
(四十一)稱緣薯……一七九
(四十二)德政井土倉……一七九
(四十三)八丈富士……一七九
(四十四)およろ……一七九
(四十五)田むき……一七九
(四十六)朝所……一七九
(四十七)稻實公井標山……一七九
(四十八)廻立殿……一七九
(四十九)機……一七九
(五十)入道はまはり道にもいふ……一七九

卷之四十九

(一)視髮……一七九
(二)左衽……一七九
(三)鷹葉の逢磨……一七九

(四)耳の大小……一一七九
(五)森子井後坊同腑……一一七九
(六)字音を用の語にとり成せし例……一一七九
(七)「は」を「わ」と通ふいひかけの歌……一一八〇
(八)川竹のうき身……一一八〇
(九)蛇の裏へるを食ふ因緣……一一八〇
(十)姓氏望族……一一八〇
(十一)番椒ハジカミ……一一八〇
(十二)八月韭ニハ佛を開ノ日井韭ヲ喫ヒユニヨレ……一一八〇
(十三)麝香草……一一八一
(十四)嘉禾……一一八一
(十五)尊容鈔……一一八一
(十六)楠桐……一一八二
(十七)大家名家の差別……一一八三
(十八)酒名……一一八三
(十九)瘟花……一一八三
(廿)「だに」ガリニ「さへ」ヤウニ……一一八三
(廿一)九輪草ケリンサウ……一一八三
(廿二)唐風を載て國體を損ず……一一八四
(廿三)多書を嫌……一一八四
(廿四)長爪の害……一一八四
(廿五)郡縣封建の利害……一一八四
(廿六)小人の差別……一一八五
(廿七)牛さは道具をいふ……一一八五
(廿八)唐ハタウ土ハ文過武劣の國……一一八五
(廿九)宋儒の文佛語を用……一一八五
(卅)日本勝ノ唐入……一一八六
(卅一)和唐合論……一一八六
(卅二)貴にして後衆と富にして後寂ぶ井蛙ニヨリ……一一八六
(卅三)窈して道顯る……一一八七
(卅四)朝臣さ書事……一一八七
(卅五)本朝の物語から國の小說……一一八七
(卅六)外國の橫文字……一一八七
(卅七)樣サマ……一一八七
(卅八)蒙古新字……一一八八

卷之五十

(一)諸道の祭酒……一一八八
(二)廟照帝廟陵に守冢を置……一一八八
(三)臣下私諱……一一八九
(四)富山醫鞬鞬……一一八九
(五)のこぎり山……一一八九
(六)ルビアノ黑千ロ……一一八九
(七)詩樣……一一八九
(八)瓦硯……一一九〇

(廿三)蹊盜人……一一九七

卷之五十一

(一)聖教序福本……一一九七
(二)河豚魚……一一九七
(三)琵琶は接木を住さず……一一九八
(四)亂北に向ひ竹西北に遊ろ……一一九八
(五)厠神……一一九八
(六)輪廻再生……一一九八
(七)殿下足下執事几前……一一九九
(八)燒尾蔗……一一九九
(九)花を美女に比す……一一九九
(十)汗衫明衣……一一九九
(十一)魚袋……一一九九
(十二)腰帶……一一九九
(十三)勃……一二〇〇
(十四)白樂天詩……一二〇〇
(十五)竹馬……一二〇〇
(十六)算經井算盤……一二〇〇
(十七)鯽……一二〇一
(十八)飛魚……一二〇一
(十九)人魚……一二〇一
(廿)海鐵……一二〇一
(廿一)埴輪……一二〇一
(廿二)田宅賣買門戶……一二〇二
(廿三)炙炮煎煮……一二〇二
(廿四)醯……一二〇三
(廿五)氣味……一二〇三
(廿六)卷耳……一二〇三
(廿七)束脩……一二〇三
(廿八)錦繡綾紬……一二〇三
(廿九)玄端衣服衣裳……一二〇三
(卅)蓑笠傘笠……一二〇三
(卅一)蓑笄盛豆……一二〇三
(卅二)朝聘巡狩乘輿警蹕……一二〇三
(卅三)諡位諡號稱諡……一二〇三
(卅四)諡號……一二〇三
(卅五)智慧……一二〇三
(卅六)花……一二〇四
(卅七)委曲消息變化從橫本末……一二〇四
(卅八)千支……一二〇四
(卅九)港鐵草昧……一二〇四
(四十)猶獲……一二〇四
(四十一)斷絕離別……一二〇四
(四十二)外國竹枝詞并日本雜詩異域竹枝詞……一二〇四
(四十三)陳壽三國志の評……一二〇五
(四十四)假面井鐵頰補……一二〇五
(四十五)湖のさし引すゝ井泉の類……一二〇五
(四十六)氷柱……一二〇六
(四十七)ヒバホン笛井口琴……一二〇六
(四十八)占夢……一二〇七
(四十九)喉痺狗咽の良方……一二〇七
(五十)一番煎じ二番煎じ……一二〇七
(五十一)金山寺味噌井納豆……一二〇八
(五十二)松を植る傳……一二〇八
(五十三)焙爐……一二〇九
(五十四)養生管藥……一二〇九
(五十五)杉のさし木の傳……一二一〇

卷之五十二

(一)紙鳶……一二一〇
(二)日本詩井錄……一二一一
(三)西方聖人匿レ佛……一二一二
(四)筆の松脊……一二一二
(五)梁ヨコメ米ヲメ……一二一三
(六)門の關木栗を用れば盜を除……一二一三
(七)猿啼處生レ蔵……一二一三
(八)買春錢……一二一三
(九)苦ニヨメ吟ス……一二一三
(十)左右ぢり……一二一三

(一)矢矧の橋……一一二六
(二)根ヂ矢太ト矧……一一二六
(三)トチくンナシ井くンナシ袋……一一二六
(四)女の乘掛馬……一一二六
(五)首清切合……一一二七
(六)六尺袖ノ肩タカくガタ袴ノ肩タカくガタ……一一二七
(七)太耳にきく……一一二七
(八)仇を報ずるに恩を以てす……一一二七
(九)神君四十八騎……一一二七
(十)婢は貞女の節に比す……一一二七
(十一)文昭君の御代武家の風公家の風に變ず……一一二八
(十二)有德君御名……一一二八
(十三)心中相對死井澤録錢……一一二八
(十四)屯田屯倉……一一二九
(十五)萬歲を唱……一一二九
(十六)つくり鍛井搗栗カチグリ及ツクリコ蚊子……一一二九
(十七)武士と下人と女との差別……一一三〇
(十八)さゝくと云詞……一一三〇
(十九)陸奥國……一一三〇
(廿)のさくと云詞……一一三〇
(廿一)心さくさゝいふ詞井茶ヤビン瓶……一一三〇
(廿二)センう井あせるゝと云詞……一一三一
(廿三)ゆさり松の蔭鐘……一一三一
(廿四)鷄の鳴……一一三八
(廿五)大人來……一一三八
(廿六)掃心方……一一三八
(廿七)七月の灯籠……一一三九
(廿八)入丈島……一一三九
(廿九)背低左衛門が名乘……一一三九
(三十)燒食井屯食……一一四〇
(三一)石垣……一一四〇
(三二)矢立硯……一一四〇
(三三)女の帶に手さゝふ事……一一四〇
(三四)アノ山見サイ此山見サイ……一一四〇
(三五)茶の湯茶人歌舞伎茶器……一一四〇
(三六)つぼ〳〵……一一四一
(三七)茶店茶屋……一一四一
(三八)武藏國見沼の歌……一一四三
(三九)河原者……一一四三
(四十)風呂浴室……一一四四
(四一)芸術……一一四四
(四二)新田開發淺にすべからず……一一四四
(四三)世人用ゐるは惡人……一一四四
(四四)淫間……一一四五
(四五)股引……一一四五

巻之五十三

(一)酒に不ゝ酔方……一一三三
(二)君戴井品茶末非茶……一一三三
(三)湯殿井耳ゟ出……一一三三
(四)程氏の學東坡司馬君實共にうけず……一一三四
(五)古代めきたる物好は君子の所ゝ恥……一一三四
(六)和泉樂人の長壽……一一三五
(七)小童婦人の仁……一一三五
(八)養ゝ家治ゝ國の術……一一三五
(九)弄臣……一一三五
(十)永樂大典……一一三五
(十一)兵主神……一一三五
(十二)玉づき……一一三六
(十三)雁髮席……一一三六
(十四)八丈草……一一三六
(十五)寒忽涼井犬我……一一三六
(十六)天目山……一一三七
(十七)陰陽石……一一三七
(十八)牡丹石……一一三七
(十九)岩梔……一一三七
(廿)青鉄……一一三七
(廿一)火鼠……一一三七
(廿二)烏賊……一一三七
(廿三)龜の鳴……一一三八
(廿四)大人來……一一三八
(廿五)掃心方……一一三八
(廿六)七月の灯籠……一一三九
(廿七)入丈島……一一三九
(廿八)背低左衛門が名乘……一一三九
(廿九)燒食井屯食……一一四〇
(三十)石垣……一一四〇
(三一)矢立硯……一一四〇
(三二)女の帶に手さゝふ事……一一四〇
(三三)アノ山見サイ此山見サイ……一一四〇
(三四)茶の湯茶人歌舞伎茶器……一一四〇
(三五)つぼ〳〵……一一四一
(三六)茶店茶屋……一一四一
(三七)武藏國見沼の歌……一一四三
(三八)河原者……一一四三
(三九)風呂浴室……一一四四
(四十)芸術……一一四四
(四一)新田開發淺にすべからず……一一四四
(四二)世人用ゐるは惡人……一一四四
(四三)淫間……一一四五
(四四)股引……一一四五

巻之五十四

(一)山鹿義目井山鹿流軍學兵法神武雄備集……一一四〇
(二)大將の入不ゝ可ゝ積及士卒の十病……一一四〇
(三)雨天の業纏を除……一一四一
(四)舟に乘時の用意……一一四一
(五)密書を認る用意……一一四一
(六)當術三道……一一四一
(七)たんき足長刀星……一一四一
(八)甘三所觀音……一一四二
(九)ベウ坊……一一四二
(十)京都町地圖數改……一一四二
(十一)小兒の力持井大女大男……一一四二
(十二)道中駄賃增……一一四二
(十三)古作新刀の差別井解紛記……一一四二
(十四)鎖相……一一四二
(十五)前髪向ウ髪……一一四三
(十六)にぎり飯カヒヤウ井屯食トンジキ……一一四四
(十七)片名字カタナヤウ片名下タシ名……一一四四
(十八)井アンドサカナ中……一一四四
(十九)酒ヲ履ラウジヤ……一一四四
(廿)出ヂク狂房ノ酒チヤ遊ヒアソビ……一一四五
(廿一)田樂狐樂五に當る……一一四五
(廿二)はづす……一一四五
(廿三)バサラ……一一四五
(廿四)影德太子馬蹟未來記……一一四五
(廿五)白拍子……一一四五
(廿六)池田氏……一一四六
(廿七)もとのもくあみ……一一四七
(廿八)愛宕山にてかはらけを投る……一一四七
(廿九)猿楽産頭井まいす……一一四七
(卅)權カリの輕重潮の滿干による……一一四八
(卅一)地中に泉を求る方……一一四八
(卅二)雲氣烟氣……一一四八
(卅三)天杯を賜……一一四八
(卅四)鷲の字を譯て總の字に作る……一一四九
(卅五)千秋萬歲天長節井誕生日……一一四九
(卅六)龍馬歌謌は今講洲さいふ……一一四九
(卅七)酒泉……一一五〇
(卅八)蝦夷の言語……一一五〇
(卅九)エトロプ島の名義……一一五一
(四十)食土……一一五一
(四十一)カムサスガ國までの島々……一一五一
(四十二)緞疫癘……一一五二
(四十三)山丹國の一里……一一五三
(四十四)山丹人言語……一一五三
(四十五)水樂錢京錢井たゞこの始……一一三九

巻之五十四

(一)山鹿義目井山鹿流軍學兵法神武雄備集……一一四〇
(二)大將の入不ゝ可ゝ積及士卒の十病……一一四〇
(三)雨天の業纏を除……一一四一
(四)舟に乘時の用意……一一四一
(五)密書を認る用意……一一四一
(六)當術三道……一一四一
(七)たんき足長刀星……一一四一
(八)甘三所觀音……一一四二
(九)ベウ坊……一一四二
(十)京都町地圖數改……一一四二
(十一)小兒の力持井大女大男……一一四二
(十二)道中駄賃增……一一四二
(十三)古作新刀の差別井解紛記……一一四二
(十四)鎖相……一一四二
(十五)前髪向ウ髪……一一四三
(十六)にぎり飯カヒヤウ井屯食トンジキ……一一四四
(十七)片名字カタナヤウ片名下タシ名……一一四四
(十八)井アンドサカナ中……一一四四
(十九)酒ヲ履ラウジヤ……一一四四
(廿)出ヂク狂房ノ酒チヤ遊ヒアソビ……一一四五
(廿一)田樂狐樂五に當る……一一四五
(廿二)はづす……一一四五
(廿三)バサラ……一一四五
(廿四)影德太子馬蹟未來記……一一四五
(廿五)白拍子……一一四五
(廿六)池田氏……一一四六
(廿七)もとのもくあみ……一一四七
(廿八)愛宕山にてかはらけを投る……一一四七
(廿九)猿楽産頭井まいす……一一四七
(卅)權カリの輕重潮の滿干による……一一四八
(卅一)地中に泉を求る方……一一四八
(卅二)雲氣烟氣……一一四八
(卅三)天杯を賜……一一四八
(卅四)鷲の字を譯て總の字に作る……一一四九
(卅五)千秋萬歲天長節井誕生日……一一四九
(卅六)龍馬歌謌は今講洲さいふ……一一四九
(卅七)酒泉……一一五〇
(卅八)蝦夷の言語……一一五〇
(卅九)エトロプ島の名義……一一五一
(四十)食土……一一五一
(四十一)カムサスガ國までの島々……一一五一
(四十二)緞疫癘……一一五二
(四十三)山丹國の一里……一一五三
(四十四)山丹人言語……一一五三

(四十五)端午……二五三
(四十六)くさめ……二五三
(四十七)文選五臣注の誤……二五三
(四十八)小女子を産……二五四
(四十九)紙銭幷金札銀札……二五四
(五十)高汐幷すゐレ風……二五四
(五十一)メシマ瘤……二五五
(五十二)烏帽子子烏帽子親養目親……二五五

卷之五十五

(一)戀せぬ人は無情……二五六
(二)松永彈正が名言……二五六
(三)だれタツタと云詞……二五六
(四)消息文に年號書くはへまほしき事……二五六
(五)疊と女房は新きがよし……二五六
(六)富貴の人必智者ならず……二五六
(七)齒生て生れたる兒を鬼子也とて殺すは日本の弊風……二五七
(八)臣子たるものに見すべき連歌……二五七
(九)利休宇治の上林が茶湯をほむ……二五七
(十)目代幷守目……二五八
(十一)牛のつのもじ……二五八
(十二)かへし刀……二五八
(十三)長柄の人柱の歌……二五八
(十四)行粧調度などにて人の心のしらるゝ事……二五九
(十五)物は一具に調はずとも用に足らばさてあるべし……二六〇
(十六)迫々と云詞……二六〇
(十七)鼻をすゝる……二六〇
(十八)日どり……二六〇
(十九)病者に酸物をくはしむ……二六〇
(廿)やほら幷やはらつゝ……二六〇
(廿一)ゆゝし幷いみじ……二六〇
(廿二)梅雨……二六一
(廿三)四松……二六一
(廿四)狂歌……二六一
(廿五)歌題おほくは詩題を用……二六一
(廿六)竹の丸縁……二六一
(廿七)折檻……二六一
(廿八)古今傳授の德にて玄旨法印圍を免ル……二六二
(廿九)一錢そり……二六二
(卅)剛と云字……二六二
(卅一)鰍初……二六二
(卅二)御袋の歌……二六三
(卅三)八王字瀧山の城……二六三
(卅四)賞榜……二六三
(卅五)痞者に物いはしむる方……二六三
(卅六)板壁……二六三
(卅七)失火出火……二六三
(卅八)羅織……二六三
(卅九)喚を聽といふ事……二六三
(四十)店主……二六四
(四十一)合格幷拔萃……二六四
(四十二)定額……二六四
(四十三)優戲場……二六四
(四十四)稅錢丁錢……二六四
(四十五)寇江賊……二六四
(四十六)老人狂歌……二六四
(四十七)保元物語作者葉室民部少輔時長幷中原師棟……二六五
(四十八)鳥銃……二六五
(四十九)倭學……二六五
(五十)飢た救方……二六五
(五十一)城雉……二六六
(五十二)小そり刃の長刀長柄傘馬約圖……二六六
(五十三)石垣……二六七
(五十四)山門衆議の圖……二六七
(五十五)長刀の鞘……二六七

(五十六)無用の時人の許へ行べからず幷爲人鈔……二六七
(五十七)學者は時を知ルを要とす……二六七
(五十八)もつけと云俗語……二六七
(五十九)息合の藥……二六八
(六十)くひちがひ土手……二六八
(六十一)重箱飯ツギ……二六八
(六十二)衾を取幷鎖衾弓衾鎖床弓床……二六八
(六十三)夜食……二六八
(六十四)元日の昆布栗屠蘇酒……二六八
(六十五)無心ト云詞幷齒羽織佐竹紙……二六八
(六十六)竹流シの金子……二六九
(六十七)鬼に金棒……二六九
(六十八)內股膏藥と云詞……二六九
(六十九)能組の事……二六九

卷之五十六

(一)蝦藥師蛸藥師……二六九
(二)節分の豆打鬼內鬼外……二六九
(三)漢籍施行の例幷孟子……二七〇
(四)山の帶……二七〇
(五)龍燈……二七〇
(六)熱海……二七一
(七)奧地……二七一
(八)時の鐘……二七一
(九)傳馬……二七一
(十)扁舟……二七一
(十一)別號……二七一
(十二)不肖の子家を破らず……二七二
(十三)花の雪……二七二
(十四)烏のかしら白し……二七二
(十五)臣は君によりて患あり……二七二
(十六)貴人あれども貴族なし……二七二
(十七)氣を養……二七三
(十八)橋の勾欄……二七三
(十九)同名異物……二七三
(廿)香の物漬物の名に漑の字を用ふべし……二七三
(廿一)歸雁……二七四
(廿二)南無阿彌……二七四
(廿三)羽子板羽根……二七四
(廿四)飛龍頭といへる油揚……二七四
(廿五)天鷲絨幷海黃絹花布等の名……二七四
(廿六)ミイラ……二七四
(廿七)鳳皇……二七四
(廿八)風領……二七四
(廿九)捨子を救……二七四
(卅)セイライとは鷹の上手をいふ……二七五
(卅一)宿官……二七五
(卅二)小手差原の歌……二七五
(卅三)岩殿觀音の碑……二七五
(卅四)秩父武光山……二七六
(卅五)荒川……二七六
(卅六)薄村藥師堂棟札……二七七
(卅七)飯田村光源院高札……二七七
(卅八)野上總持寺法燈國師の贊……二七七
(卅九)三ツ杯……二七八
(四十)風呂……二七八
(四十一)六地藏參……二七八
(四十二)外郎……二七八
(四十三)卷本草子本……二七八
(四十四)法華宗繁昌……二七八
(四十五)蠻連歌……二七八
(四十六)蟲拳……二七八
(四十七)蛇の人の隱門穴中などに入たるを治る方……二七八
(四十八)ボツといふ息を突……二七九
(四十九)北窓……二七九
(五十)打橋……二七九

(五十一)龍燈……二八〇
(五十二)倉庫鳴ル……二八〇
(五十三)佛像汗を流す……二八〇
(五十四)たまげるたまぎる……二八〇
(五十五)敵將をもて我將とす……二八一
(五十六)反語……二八一
(五十七)廢疾……二八一
(五十八)文字の忌諱……二八一
(五十九)元の世祖日本を犯す……二八二
(六十)利瑪竇井天下の四大教……二八二
(六十一)彌勒佛下生といひて衆を惑す賊……二八四

卷之五十七

(一)神と君の名義并天狗……二八四
(二)服色の制……二八六
(三)村氣井田舍淡……二八六
(四)面に唾せらるゝとも不レ可レ拭……二八六
(五)魚袋……二八六
(六)禿居士……二八六
(七)木息子木 媛 木まじめ木やぼ などいふ木の字并土菜と云 土の字……二八七
(八)酒壺にならんといへる人……二八七
(九)沈惟敬……二八七
(十)胴籌……二八八
(十一)春盡……二八八
(十二)鑓植……二八八
(十三)目に角を立る……二八八
(十四)人頭鹿鹿頭人人面獸身……二八九
(十五)風鈴……二八九
(十六)佛像流レ汗……二八九
(十七)鼠貞……二八九
(十八)歌謌哥の字……二八九
(十九)仁に人を某仁といふ義……二八九
(廿)蹂躙并圈入……二八九
(廿一)楮……二八九
(廿二)布袋は彌勒の俗號……二八九
(廿三)昭穆……二八九
(廿四)大の字點を加へて太に作る……二八九
(廿五)倭……二八九
(廿六)甑の音……二八九
(廿七)碑……二八九
(廿八)算法の歸除并算盤……二八九
(廿九)倭……二八九
(卅)鋪井屋鋪風呂敷……二八九
(卅一)部曲部類并カキといふ詞……二九六
(卅二)并……二九六
(卅三)撒……二九六
(卅四)亡命并不命命者亡酒……二九六
(卅五)道六神……二九七
(卅六)个枚……二九七
(卅七)錢の暮……二九七
(卅八)謳歌……二九七
(卅九)憲字の差別……二九七
(四十)帳……二九七
(四十一)倘は上配の義倘二公主一の類……二九八
(四十二)明暗雙々集……二九八
(四十三)岩船撿挍山川撿挍……二九八
(四十四)久能山……二九八
(四十五)牛籠天神并梅若塚……二九八
(四十六)喜多見氏……二九八
(四十七)大猷院殿の御畫……二九九
(四十八)老生小生先生諸先生老先生……二九九
(四十九)謄寫摸寫……二九九
(五十)撿子草稿……二九九
(五十一)寂の字……二九九
(五十二)鹵簿……二九九
(五十三)花の醫逸花の富貴花の君子……三〇〇
(五十四)士蓮士處士博士居士……三〇〇
(五十五)臣僕の字義……三〇〇
(五十六)權勢權柄執權……三〇〇
(五十七)世……三〇〇
(五十八)法螺の貝……三〇一
(五十九)組 戲……三〇一

卷之五十八

(一)青首の鳧……三〇二
(二)共主……三〇二
(三)家督……三〇二
(四)丈と稱す……三〇二
(五)家老……三〇二
(六)女 坂……三〇二
(七)趙武靈王胡服を用んとす……三〇二
(八)雷の大鼓……三〇二
(九)丸墨并圍炭……三〇二
(十)氷柱雪車……三〇三
(十一)男子不レ死二於婦人手一……三〇三
(十二)龍賓薤……三〇三
(十三)視髮……三〇三
(十四)婚禮に謠曲をうたふは非禮……三〇三
(十五)長人鹿野武左衛門并關學……三〇三
(十六)兩口銚子片口銚子……三〇三
(十七)四文錢小錢……三〇三
(十八)さばの飯……三〇四
(十九)紹介并肝煮及取次者……三〇四
(廿)炊婦……三〇四
(廿一)一切……三〇四
(廿二)歇仙……三〇四
(廿三)稻荷の訓并荷前……三〇四
(廿四)民并蜑の語意……三〇五
(廿五)コミアケル并滂五味など云 ふ詞……三〇五
(廿六)東常胤が東と稱號せるよし 并下總國東の庄……三〇五
(廿七)喜笠元年……三〇六
(廿八)相撲取小鳴澤藏……三〇六
(廿九)吸物并日本三八幡……三〇六
(卅)手習講并碁馬衛兵法……三〇六
(卅一)眞蟲……三〇七
(卅二)辨當……三〇七
(卅三)ぬたをこく……三〇七
(卅四)檜垣……三〇七
(卅五)テンヤ物……三〇八
(卅六)あたけ丸の船……三〇八
(卅七)だにさへの通ふ例……三〇八
(卅八)までと云詞……三〇八
(卅九)坂迎并送坂迎……三〇九
(四十)ぼけ并ほき道……三〇九
(四十一)留守をつかふ……三〇九
(四十二)六道錢……三〇九
(四十三)榮名……三〇九
(四十四)磬折并揖……三〇九
(四十五)屏語……三一〇
(四十六)人は性によりて學べき事 并好こそ物の上手なれ……三一〇

卷之五十九

(一)賀茂の御阿禮……三一〇
(二)水向……三一二
(三)上方下方左方右方……三一二
(四)屏語……三一二
(五)くぼさくぶさ井かへかけ……三一二
(六)強氣なければ事を成すことあ たはず……三一二
(七)鵜編有因……三一三
(八)日かげ月かげ井物の陰かけの 馬……三一三
(九)全器は天災に逢フ……三一三
(十)町人の陰悪武家の貧乏……三一四
(十一)著逃は千歳の尊榮盛大……三一五

(十二)暨明者……三一五
(十三)木石……三一五
(十四)六戒……三一六
(十五)女房は半身上(エイ)……三一六
(十六)永々……三一六
(十七)字を先書て下に諱を書續たる書法……三一六
(十八)正月元日豐凶を占井松飾用ゐ炭……三一六
(十九)左遷左官……三一七
(廿)裘に會して食を貪……三一七
(廿一)後白河法皇幸二于蒔繪師家一……三一七
(廿二)フシヤウ(ヘ)……三一八
(廿三)五節舞裝束及綠物調度食物……三一八
(廿四)假名狀……三二一
(廿五)小兒の垂髮井總角……三二一
(廿六)院分國井小目代……三二一
(廿七)軍役兵粮米井地頭……三二一
(廿八)令旨書樣……三二二
(廿九)殷富門院井門院號の後は〻院に准ず……三二二
(卅)散狀……三二三
(卅一)興福寺金堂及南圓堂再建貴賤引〻網井音頭取(オンドウトリ)……三二三
(卅二)不時に花さくは災……三二四
(卅三)金銀御幣井男女神躰假鏡……三二四
(卅四)文杖……三二四

卷之六十

(一)弓の製……三二五
(二)三日の禮……三二五
(三)弘安坂本三大部(キ、アヂハヘ)……三二五
(四)きくは耳に聞口に味鼻に嗅(カグ)にいふ……三二五
(五)倭語倭言……三二六
(六)奉公(オリナ)……三二六
(七)下名……三二六
(八)火葬……三二六
(九)八幡鷰宮……三二七
(十)梟喰すれば山も盡るの傳……三二七
(十一)なか目八目……三二八
(十二)酒のかん茶甌下酒……三二九
(十三)伊豆駿河古は木瀨川を界とす……三二九
(十四)武藏國乘滿驛……三二九
(十五)ベラ坊……三二九
(十六)羅切……三二九
(十七)蓮の一莖二華は災殃の前表……三二九
(十八)廳司殿角田川の歌……三二九
(十九)佛像不〻用〻膠井御衣木……三二九
(廿)沽價法……三三〇
(廿一)しゝセしの差別……三三〇
(廿二)新田義重の墓……三三二
(廿三)神武紀に見えたる井光が子孫……三三三
(廿四)もろこしの佐國……三三三
(廿五)塙……三三四
(廿六)植木鉢植井布入の植木の始……三三五
(廿七)清文鑑……三三六
(廿八)秤上の奏の名井貝掩……三三七
(廿九)林祭酒の諱……三三七
(卅)船中の紙纏井湊入の火……三三七
(卅一)船玉の去といふ事井天后の傳……三三八
(卅二)雪車橇井蝦夷の犬……三三八
(卅三)曆に黑日多き年は豐稔黑日少なき年は凶作……三三九

卷之六十一

(一)淺草下谷の曹洞宗の寺院塔婆の垣を止る事……三四〇
(二)馬の齒草鞋井肩輿昇大津繪……三四〇
(三)紙子……三四一
(四)桃水の語明惠の語に近し……三四一
(五)極樂を通り過てはと云狂歌……三四一
(六)招提伽藍道場(オコシゴノ)……三四一
(七)酒を聖賢といふ事……三四二
(八)歌に學者の鉢歌讀の鉢ある事……三四二
(九)狂歌……三四二
(十)私鑄錢……三四二
(十一)磬折……三四三
(十二)とほじろく……三四三
(十三)氷魚いさゞ……三四三
(十四)一万春……三四三
(十五)屠蘇……三四三
(十六)河伯馮夷……三四三
(十七)粔籹(オコシゴメ)……三四四
(十八)八座……三四四
(十九)餬飩……三四四
(廿)闥アラヽギの辨……三四四
(廿一)櫻川石の硯……三四五
(廿二)日本寺……三四五
(廿三)麻姑の手……三四五
(廿四)のそ〳〵と云詞……三四五
(廿五)雪燒井鷄目の病……三四五
(廿六)まはり振舞……三四六
(廿七)手子の者手子仕井手子棒……三四六
(廿八)城下を恨小屋井宿城と云差別……三四六
(廿九)はり形井あづま形……三四六
(卅)つぼ〳〵……三四六
(卅一)獵ちごといふ宗祇の句は誤……三四六
(卅二)遑棚……三四六
(卅三)ぜんすりかにつるみ捧の字……三四六
(卅四)地獄の沙汰も金次第……三四七
(卅五)大店タカモロコシ井こがしの粉……三四七
(卅六)かいきの絹……三四七
(卅七)鬼瓦……三四七
(卅八)火吹竹……三四七
(卅九)治國治家の術……三四七
(四十)古錢……三四七
(四十一)字面井熟辭……三四七
(四十二)四方要紀小引五大洲及路程……三四九
(四十三)人魚……三四九
(四十四)四洋風俗……三五〇
(四十五)鯉魚龍と變說……三五〇
(四十六)慟哭記……三五〇
(四十七)神光井三光……三五〇
(四十八)富士山異國より見ゆると云說井長白山……三五一
(四十九)長壽の人……三五一
(五十)茶産地及茶壺……三五一
(五十一)獸を學も詩學に據て心得べし……三五二
(五十二)書法……三五二
(五十三)民の風俗皆水土に因……三五三
(五十四)追儺……三五三
(五十五)鬪雞必勝の法……三五三
(五十六)人主は二目諸民は万目……三五三
(五十七)時を得……三五三
(五十八)水車の詩水碓……三五三
(五十九)舟靈天后の詩……三五四
(六十)聽害……三五四
(六十一)告天子……三五四
(六十二)風棚……三五五
(六十三)知非齋……三五五
(六十四)書燈井學者の用意……三五五

卷之六十二

(一)守〻義之水射〻利之火……三五七
(二)畫像を壁に懸……三五七

卷之八十二

八十六火の玉……三八一
八十五看錢……三八〇
小人……三八〇
　奏朝臣關聖君賢君
八十四勅大人方歲方壽殿
八十三甲手な用て年號を不ン書……三七九
八十二黑島雜役馬……三七九
八十一工夫功夫……三七九
八十句の字……三七九
七十九佛入滅土之始……三七八
七十八非相……三七八
　戒……三七八
七十七息識の字井同の字々用
七十六單手可汗……三七七
七十五屯田……三七七
七十四菊木綿絲井菊木綿……三七七
七十三小春……三七七
七十二四月八日佛誕日……三七七
七十一四方竹井大原無節竹杖……三七六
七十雨頭銑……三七六
六十九袋竹井冬笋……三七六
六十八諸葛孔明の頭銑……三七六
六十七見女狗の妻になる話……三七六
六十六紙錢……三七六
六十五不付子の三變り……三七五
六十四蚯蚓百合に變り參螻に時ナル……三七五
六十三流螢の風……三七五
六十二拔門左拔右拔拔屋造……三七四
六十一紫宸殿井櫛望入閤……三七四
六十龍屋木な以鳥影な打は鳥落ツ……三七四
五十九簽圍……三七四
五十八令歟木忘憂草……三七四
五十七一ト茶な目さまし草といふ……三七五
五十六ひもりのしるし……三七五
五十五朝顏の始……三七五
五十四蛇な夢法……三七五
五十三大醉な醒す方……三七五
五十二九仙の靈山……三七五
五十一烏賊の墨もて書たる書牛な
　經れば消失す……三七六
五十句の字……三七六
四十九鼈の吻……三七六
四十八書狩……三七六
四十七宇鷹……三七五
四十六公の國……三七五
四十五雪公の國……三七五
四十四大醉な醒す方……三七五
四十三胡桃の始……三七五
四十二夢法……三七五
四十一工夫功夫……三七五
四十雜役馬……三七五
三十九佛入滅土之始……三七五
三十八非相……三七五
　戒……三七五
三十七息識の字井同の字々用
三十六單手可汗……三七四
三十五屯田……三七四
三十四菊木綿絲井菊木綿……三七四
三十三小春……三七四
三十二四月八日佛誕日……三七四
三十一四方竹井大原無節竹杖……三七三
三十雨頭銑……三七三
二十九袋竹井冬笋……三七三
二十八諸葛孔明の頭銑……三七三
二十七見女狗の妻になる話……三七三
二十六紙錢……三七三
二十五不付子の三變り……三七二
二十四蚯蚓百合に變り參螻に時ナル……三七二
二十三流螢の風……三七二
二十二拔門左拔右拔拔屋造……三七二
二十一紫宸殿井櫛望入閤……三七二
二十龍屋木な以鳥影な打は鳥落ツ……三七二
十九簽圍……三七二
十八令歟木忘憂草……三七二
十七一ト茶な目さまし草といふ……三七二
十六ひもりのしるし……三七二
十五朝顏の始……三七二
十四蛇な夢法……三七二
十三大醉な醒す方……三七二
十二九仙の靈山……三七二
十一烏賊の墨もて書たる書牛な
　經れば消失す……三七二
十句の字……三七二
九佛入滅土之始……三七二
八非相……三七二
　戒……三七二
七息識の字井同の字々用
六單手可汗……三七一
五屯田……三七一
四菊木綿絲井菊木綿……三七一
三小春……三七一
二四月八日佛誕日……三七一
一四方竹井大原無節竹杖……三七一

三十二龍樹井ヂライ自杖……三七一
三十一火事……三七一
三十人主佛法に惑ふ……三七一
三十九文錢……三七一
三十八文字智惠……三七一
三十七オ智惠……三七一
三十六八大地獄……三七一
三十五八大龍王の館殘大根……三七一
三十四ーと來なきをいふ……三七一
三十三ゆいらしき……三七一
三十二ほくらをはけ付……三七一
三十一山手殿屬さなる……三七一
三十ーはと燃上りヨガ〳〵と燒……三七一
二十九木に同……三七一
二十八ひもりのしるし……三七一
二十七山城……三七一
二十六改……三七一
二十五神事……三七一
二十四羽柴氏秀吉……三七一
二十三豐太閤馬な船にて小田原の
　陣所へ遷されし時彌勒王に
　賜書……三七一
二十二北條出家に魚を食はしむ……三七一
二十一ひうがいでんがく井れんがく……三七一
二十天盃天酌井御通……三七〇
十九天龍の吻……三七〇
十八書狩……三七〇
十七宇鷹……三七〇
十六公の國……三七〇
十五雪公の國……三七〇
十四大醉な醒す方……三七〇
十三胡桃の始……三七〇
十二夢法……三七〇
十一工夫功夫……三七〇
十雜役馬……三七〇
九佛入滅土之始……三七〇
八非相……三七〇
　戒……三七〇
七息識の字井同の字々用
六單手可汗……三六九
五屯田……三六九
四菊木綿絲井菊木綿……三六九
三小春……三六九
二四月八日佛誕日……三六九
一四方竹井大原無節竹杖……三六九

卷之八十二

八十六火の玉……三八一
八十五看錢……三八〇
小人……三八〇
　奏朝臣關聖君賢君
八十四勅大人方歲方壽殿
八十三甲手な用て年號を不ン書……三七九
八十二黑島雜役馬……三七九
八十一工夫功夫……三七九
八十句の字……三七九
七十九佛入滅土之始……三七八
七十八非相……三七八
　戒……三七八
七十七息識の字井同の字々用
七十六單手可汗……三七七
七十五屯田……三七七
七十四菊木綿絲井菊木綿……三七七
七十三小春……三七七
七十二四月八日佛誕日……三七七
七十一四方竹井大原無節竹杖……三七六
七十雨頭銑……三七六
六十九袋竹井冬笋……三七六
六十八諸葛孔明の頭銑……三七六
六十七見女狗の妻になる話……三七六
六十六紙錢……三七六
六十五不付子の三變り……三七五
六十四蚯蚓百合に變り參螻に時ナル……三七五
六十三流螢の風……三七五
六十二拔門左拔右拔拔屋造……三七四
六十一紫宸殿井櫛望入閤……三七四
六十龍屋木な以鳥影な打は鳥落ツ……三七四
五十九簽圍……三七四
五十八令歟木忘憂草……三七四
五十七一ト茶な目さまし草といふ……三七五
五十六ひもりのしるし……三七五
五十五朝顏の始……三七五
五十四蛇な夢法……三七五
五十三大醉な醒す方……三七五
五十二九仙の靈山……三七五
五十一烏賊の墨もて書たる書牛な
　經れば消失す……三七六
五十句の字……三七六
四十九鼈の吻……三七六
四十八書狩……三七六
四十七宇鷹……三七五
四十六公の國……三七五
四十五雪公の國……三七五
四十四大醉な醒す方……三七五
四十三胡桃の始……三七五
四十二夢法……三七五
四十一工夫功夫……三七五
四十雜役馬……三七五
三十九佛入滅土之始……三七五
三十八非相……三七五
　戒……三七五
三十七息識の字井同の字々用
三十六單手可汗……三七四
三十五屯田……三七四
三十四菊木綿絲井菊木綿……三七四
三十三小春……三七四
三十二四月八日佛誕日……三七四
三十一四方竹井大原無節竹杖……三七三
三十雨頭銑……三七三
二十九袋竹井冬笋……三七三
二十八諸葛孔明の頭銑……三七三
二十七見女狗の妻になる話……三七三
二十六紙錢……三七三
二十五不付子の三變り……三七二
二十四蚯蚓百合に變り參螻に時ナル……三七二
二十三流螢の風……三七二
二十二拔門左拔右拔拔屋造……三七二
二十一紫宸殿井櫛望入閤……三七二
二十龍屋木な以鳥影な打は鳥落ツ……三七二
十九簽圍……三七二
十八令歟木忘憂草……三七二
十七一ト茶な目さまし草といふ……三七二
十六ひもりのしるし……三七二
十五朝顏の始……三七二
十四蛇な夢法……三七二
十三大醉な醒す方……三七二
十二九仙の靈山……三七二
十一烏賊の墨もて書たる書牛な
　經れば消失す……三七二
十句の字……三七二
九佛入滅土之始……三七二
八非相……三七二
　戒……三七二
七息識の字井同の字々用
六單手可汗……三七一
五屯田……三七一
四菊木綿絲井菊木綿……三七一
三小春……三七一
二四月八日佛誕日……三七一
一四方竹井大原無節竹杖……三七一

三十二龍樹井ヂライ自杖……三七一
三十一火事……三七一
三十人主佛法に惑ふ……三七一
三十九文錢……三七一
三十八文字智惠……三七一
三十七オ智惠……三七一
三十六八大地獄……三七一
三十五八大龍王の館殘大根……三七一
三十四ーと來なきをいふ……三七一
三十三ゆいらしき……三七一
三十二ほくらをはけ付……三七一
三十一山手殿屬さなる……三七一
三十ーはと燃上りヨガ〳〵と燒……三七一
二十九木に同……三七一
二十八ひもりのしるし……三七一
二十七山城……三七一
二十六改……三七一
二十五神事……三七一
二十四羽柴氏秀吉……三七一
二十三豐太閤馬な船にて小田原の
　陣所へ遷されし時彌勒王に
　賜書……三七一
二十二北條出家に魚を食はしむ……三七一
二十一ひうがいでんがく井れんがく……三七一
二十天盃天酌井御通……三七〇
十九天龍の吻……三七〇
十八書狩……三七〇
十七宇鷹……三七〇
十六公の國……三七〇
十五雪公の國……三七〇
十四大醉な醒す方……三七〇
十三胡桃の始……三七〇
十二夢法……三七〇
十一工夫功夫……三七〇
十雜役馬……三七〇
九佛入滅土之始……三七〇
八非相……三七〇
　戒……三七〇
七息識の字井同の字々用
六單手可汗……三六九
五屯田……三六九
四菊木綿絲井菊木綿……三六九
三小春……三六九
二四月八日佛誕日……三六九
一四方竹井大原無節竹杖……三六九

三十二龍樹井ヂライ自杖……三六九
三十一火事……三六九
三十人主佛法に惑ふ……三六九
三十九文錢……三六九
三十八文字智惠……三六九
三十七オ智惠……三六九
三十六八大地獄……三六九
三十五八大龍王の館殘大根……三六九
三十四ーと來なきをいふ……三六九
三十三ゆいらしき……三六九
三十二ほくらをはけ付……三六九
三十一山手殿屬さなる……三六九
三十ーはと燃上りヨガ〳〵と燒……三六九
二十九木に同……三六九
二十八ひもりのしるし……三六九
二十七山城……三六九
二十六改……三六九
二十五神事……三六九
二十四羽柴氏秀吉……三六九
二十三豐太閤馬な船にて小田原の
　陣所へ遷されし時彌勒王に
　賜書……三六九
二十二北條出家に魚を食はしむ……三六九
二十一ひうがいでんがく井れんがく……三六九
二十天盃天酌井御通……三六八
十九天龍の吻……三六八
十八書狩……三六八
十七宇鷹……三六八
十六公の國……三六八
十五雪公の國……三六八
十四大醉な醒す方……三六八
十三胡桃の始……三六八
十二夢法……三六八
十一工夫功夫……三六八
十雜役馬……三六八
九佛入滅土之始……三六八
八非相……三六八
　戒……三六八
七息識の字井同の字々用
六單手可汗……三六七
五屯田……三六七
四菊木綿絲井菊木綿……三六七
三小春……三六七
二四月八日佛誕日……三六七
一四方竹井大原無節竹杖……三六七

(四十七)明堂……三九一
(四十八)禁中省中……三九一
(四十九)歯龈……三九二
(五十)離宮……三九二
(五十一)桑……三九二
(五十二)杜鵑……三九二
(五十三)五嶽……三九三
(五十四)菊鏡……三九三
(五十五)河伯……三九四
(五十六)帝……三九四
(五十七)三合井三公三台……三九四
(五十八)牡荊……三九四
(五十九)竹……三九五
(六十)火井……三九五
(六十一)蘇生語二國冥事一……三九五
(六十二)中濱……三九五
(六十三)死給無レ口……三九五
(六十四)馬の齒齧……三九六
(六十五)瞎兒二涙……三九六
(六十六)王敎十略……三九六
(六十七)孔子の縞帯子の父四皓
の家……三九六
(六十八)鰹屋……三九六
(六十九)一心可二以事一百君一百心
不レ可二以事一二君一……三九六
(七十)夫婦喧嘩……三九六
(七十一)内學外學内集外集……三九七
(七十二)雪雨風雷雹星……三九七
(七十三)十干の釋義……三九七
(七十四)本政本命……三九七
(七十五)紫微宮……三九七
(七十六)皇帝陛下制詔上
乘輿行在所禁中警蹕
御策書制書詔書戒
書……三九七
(七十七)王者四海王天王天子
天衆大君……三九八
(七十八)皇皇帝天皇……三九八
(七十九)陛井二人……三九九
(八十)陛下殿下閣下執事……三九九
(八十一)上……三九九
(八十二)乘輿車駕……三九九
(八十三)朝廷行在所大家天家……四〇〇
(八十四)禁中省中……四〇〇
(八十五)璽印……四〇〇
(八十六)幸行幸御幸御女御……四〇〇
(八十七)旋……四〇一
(八十八)詔書……四〇一
(八十九)奏……四〇一
(九十)表上表……四〇一
(九十一)朝臣……四〇二
(九十二)百姓……四〇二
(九十三)京師……四〇二
(九十四)命令政……四〇二
(九十五)天子更老叟……四〇二
(九十六)年歳閏月……四〇三
(九十七)后妃夫人婦人妻妾……
嬪公主……四〇三
(九十八)源衆庶黎蒸……四〇三
(九十九)金銀銅鉄理……四〇三
(百)親曾國師の十智……四〇四
(百一)耕地……四〇四

卷之六十四

(一)諒……四〇五
(二)官職の始……四〇五
(三)鰻鱓鰻鱧……四〇六
(四)追儺井豆打……四〇六
(五)配土の人衆作……四〇七
(六)陰嚢睾丸莖氣……四〇七
(七)藥……四〇七
(八)素王素臣素封……四〇七
(九)修……四〇七
(十)文字の始……四〇八
(十一)白雉白鹿九尾狐芝草連
理木……四〇八
(十二)九九八十一……四〇九
(十三)疣贅……四〇九
(十四)望諸耳諸目諸鼻諸齒諸
舌諸心諸牙諸肝諸腎諸
脾諸膽諸膈諸筋諸……四〇九
(十五)風神矛神弓神弊神盾
神……四〇九
(十六)戊虎……四〇九
(十七)七月七日忌方……四〇九
(十八)富術……四一〇
(十九)夫婦の衣を合洗すれば不利……四一〇
(廿)馬を賣て嫁を娶事不吉……四一〇
(廿一)瓜桃梟あるは人を殺す……四一〇
(廿二)一の宮……四一〇
(廿三)屋氣燈一名二漆市一……四一〇
(廿四)野干……四一一
(廿五)魚虎鳥……四一一
(廿六)苓子圖……四一一
(廿七)稍(やがて)枝(がて)謂(クレ)……四一一
(廿八)和炭并炭の語品……四一三
(廿九)箱仮并二仮……四一三
(卅)鑓鎧并鐵炮火藥……四一三
(卅一)宗設宋素卿……四一四
(卅二)大唐唐人韃靼人渡地……四一四
(卅三)酒爲レ體……四一四
(卅四)天保の年號并二吉祥一并年號
(卅五)波(ゞ)の江(エ)字……四一四
(卅六)ふすべ……四一五
(卅七)柏(カシハ)比方(ヒノキ)木ゃくに(シキ)……四一六
(卅八)茶……四一七
(卅九)山椒の魚并はじかみ魚……四一七
(四十)もやし……四一八
(四十一)むかつく……四一八
(四十二)そらめき……四一八
(四十三)文盲……四一八
(四十四)洛物井大法……四一八
(四十五)字の訓くさん……四一八
(四十六)きそげこそげきさげ
そげるこそはやいくす
ぐろ……四一九
(四十七)蘭荷蛇を除……四一九
(四十八)達……四一九
(四十九)田實登滿の法……四一九
(五十)鑽得レ利之法……四一九
(五十一)紙のキシャヲ鐵……四一九
(五十二)名詮……四二〇
(五十三)秩……四二〇
(五十四)牡丹を中日草といふ說并
牡丹の始……四二〇
(五十五)噴嚏(くさめ)……四二〇
(五十六)省字雜字合字借字……四二一
(五十七)無雙の時長べし……四二一
(五十八)勅旨田……四二一
(五十九)公……四二一
(六十)名歌に劣のゃくしせず……四二一
(六十一)義の字をもて物に名づく
井入髮入鍋……四二一
(六十二)帖字……四二一
(六十三)程限……四二三
(六十四)朝敵大夫……四二三
(六十五)封月賦月……四二三
(六十六)素頭……四二三
(六十七)功程長功中功短功……四二四
(六十八)書院……四二四
(六十九)馬のきつりやう……四二四
(七十)鼠井啄木鳥……四二五

四十九……水向
四十三……手留平波の舟者に未舟
四十……飛切緩
四十……女子髪を切て男に送る事
四十……加行
四十……遊日七種の祓くり物
四十二……高尾の文書
四十……佐田の天滿宮
四十……高尾の文書
四十……指を切る
四十一……封建治之本
四十……深氏
四十……遠山
四十……雲の上
四十……花の形
四十……花の形
四十……花の形

(十一)筆塚……四八七
(十二)地氣盛則不ㇾ可ㇾ居……四八七
(十三)聯句……四八八
(十四)明の國號……四八八
(十五)戸ニ竦……四八八
(十六)戸ニ竦帖ツヅミ勸ノ合ヰリバシ印……四八八
(十七)饑饉……四八八
(十八)孟子……四八九
(十九)好男美男……四八九
(廿)朱子迂學……四八九
(廿一)俚言抄國字解俚言釋……四八九
(廿二)八百媛ノ義ノ字解……四九〇
(廿三)郡縣造の霜木折る、時は腹の帶に災あり……四九〇
(廿四)讀書一目十行俱下……四九〇
(廿五)足底の龜文雙趾……四九一
(廿六)俗儒臆說……四九一
(廿七)通天犀帶……四九一
(廿八)屍立爲ㇾ報ㇾ怨之狀……四九二
(廿九)請神一階……四九二
(卅)領狀を取……四九四
(卅一)勘文并年號の訓法及唐音訓馬讀……四九四
(卅二)そなれと云詞……四九四
(卅三)アヨシノの雅名……四九五
(卅四)纐纈カナツアヤリ……四九五
(卅五)宋板をふく……四九五
(卅六)十字ヲ縫ジフモジヌヒ……四九五
(卅七)むく井むくろむしろと云詞……四九五
(卅八)さゝめ……四九七
(卅九)かづはさすかつわざもかい
わざも……四九七
(四十)くれなゐ……四九七
(四十一)まぐれ夕まぐれ……四九七
(四十二)ためすれば……四九八
(四十三)下ダシ衆メの一寸……四九八
(四十四)房州淸カミリヤマの山獻犬明神の神託……四九八
(四十五)金玉の愛……四九八
(四十六)忌服……四九八
(四十七)アノ山見サイ此山見サイ……五〇二
(四十八)秋茄子キヒアノあさノの糟に漬……五〇二
(四十九)六尺……五〇二
(五十)辛……五〇二
(五十一)けがらはしき……五〇三
(五十二)ハジヽ字卍字……五〇三
(五十三)斗攫……五〇四
(五十四)錢數ノ虱不ㇾ與ノ肝……五〇四
(五十五)招ヲキヲキ手……五〇四
(五十六)板ニ綴ノ緒……五〇四
(五十七)虫ニ食ノ字……五〇四
(五十八)老婆心切……五〇四
(五十九)牋は色紙……五〇四
(六十)鰐野といふ船并魚尾參……五〇四
(六十一)龍門登魚……五〇五
(六十二)眉間尺……五〇五
(六十三)不器用……五〇五
(六十四)髻の峰……五〇五
(六十五)日ぐろみ……五〇五
(六十六)髑髏ドクロ……五〇五
(六十七)刎并殺那……五〇五
(六十八)衆流來……五〇五
(六十九)字伊江三音の差別……五〇六
(七十)交忠寺繭慶塞版……五〇七
(七十一)正朔月次の辨……五〇八
(七十二)殉死……五〇八
(七十三)髮の鋭……五〇八
山……四七六
(六十六)軍役無役……四七七
(六十七)琉球……四七七
(六十八)若氣并男婦……四七七
(六十九)三寶……四七八
(七十)かゝし燒がせ紫山千そうゞ……四七八
(七十一)くちまの皮のだんぶくろ……四七八
(七十二)鐘を叩て佛にならば……四七九
(七十三)ざゝみさゝし風……四七九
(七十四)しゆらい錢……四七九
(七十五)卽僧……四七九
(七十六)九千母……四七九
(七十七)三昧火三昧五三昧火消三昧……四八〇
(七十八)事有心可ㇾ知事亦不ㇾ知でもあるべき事……四八〇
(七十九)喝食の髮……四八一
(八十)江島兒が淵井白菊投身……四八一
(八十一)少年島ノ老夢羅ノ成……四八一
(八十二)無心井玉の霰……四八一
(八十三)若衆華髮喝食兒若氣……四八二
(八十四)高野六十那智八十六尺……四八二
中間、小者、火ノ番……四八二
(八十五)二度の食時……四八二
(八十六)念力岩をも徹す……四八二
(八十七)法界客自氣井水を指……四八二
(八十八)念者證人……四八三
(八十九)昵話……四八三
(九十)人を振付る井筒籠に壺……四八三
(九十一)泳の鳴股を裂……四八三
(九十二)男色をヲカマさ云事……四八三
(九十三)神田橋……四八三
(九十四)男色密通若道……四八三
(九十五)大夫神職大夫猿樂大夫……
舞々大夫……四八四

卷之六十七

(一)くらふ……四八五
(二)親母子無盡……四八五
(三)飮ㇾ酒知ㇾ飮ㇾ藥并醉後吃ㇾ茶……四八六
(四)象の詩并天の說……四八六
(五)天穿……四八六
(六)飛梅一夜松の詩……四八六
(七)歌讀も學問すべし……四八六
(八)歌の能見所見……四八七
(九)りきみさ云俗詞……四八七
(十)しやり……四八七

十八公筌筆記巻之一

松屋　高田與清文儒稿

(一)高野明神の使犬　眞俗雜記問答抄イの巻に文永二年九月廿二日晨朝夢想云愚身將レ出レ坊赴二他所一緣前有二流水一去レ水有レ橋降二行此水一爲レ到二橋許一砌邊有二虎毛犬一告レ予云願滿二大金剛輪呪一與レ我我負渡サムト云々爰予求二眞言本一坊內歸入ムトスル時夢覺テ倩案二此事一出二本山一住二酉々寺一雖レ然爲二本山鎭守丹生高野明神一每日捧二小法施一凡夫具縛身文句脫落歟仍有二此勸一歟犬是彼權現使者ナルガ故先年比爲二彼明神鎭守講勤仕一詣二根來寺一或人夢云於二彼神社一入堂與レ予俱法施法施中間自二神社一犬出予前蹲居予一搏食ヲ取二出シテ懷中一食二此犬一彼人問レ予云抑御邊何トシテ此食ヲバ持メ令レ食云々予答云此犬非二今始來一何處ニモ予ニ隨逐ス仍持レ食令レ勸也云々與清按に此書は京都智積院秘藏の本にて廿五冊あり卷の次第はイロハニホヘト或は卷四卷五などしるせしもまじりていとしどけなきさま也さればいづれを首卷とも定がたけれど今は簿(ヘウシ)に片假名のイもじあるを首とす文永弘安の比酉酉寺の金剛資賴瑜の撰也酉酉は醍醐の略字賴瑜は醍醐寺の僧正也四の卷の端に一名秘藏口傳抄ともいふよし見ゆ

(二)傳敎受二灌頂於弘法一　同卷に傳敎大師弘法大師奉レ受二水頂一事或云一院　高野御幸之時被レ開二鳥羽法藏一古記中弘法大師可レ被レ授二灌頂於傳敎一之旨有レ之鳥丸新大納言資季卿披二覽之一

(三)六觀音本說　同卷に問六觀音依二憑何文一耶答小野僧正出二天台止觀文一故彼注進文云六觀音像事注進

大悲觀世音者正觀音反也救地獄道身也青白也左手執二青蓮花一右手施無畏也大悲觀音者千手反也救餓鬼道身也色黃金也十一面左手取二紅蓮花一右手施無畏師子無畏觀音馬頭反也救畜生道身青左手取二蓮花一花上有二梵篋一左施無畏大光普照觀音者十一面反救阿修羅道身肉色左手取二紅蓮花一花上有レ瓶自二瓶口一出二半獨胡杵一右施無畏天人丈夫觀音者准胝佛母也救人道身色紺青右取二青蓮花一左施無畏大梵深遠觀音如意輪反也救天道身色白取二蓮花一花上三古杵左施無畏右六觀

音名號及所反異名出レ自ニ摩訶止觀一但形體色像取物等依ニ先師所傳一所ニ注進一如レ件

治安三年三月廿二日　　權律師仁海

私云先師僧正口決云依ニ御堂關白尋一被ニ注進一云々與清曰右の小野僧正の注進狀誤脫おほかれどしばらく本文のまゝを寫して私にあらためず此卷の奥書に天文十年五月廿一日於ニ十輪院後部屋一書レ之玄領入寺自按畢○天正五年潤七月十日書ニ寫之一畢○寛永十六年己卯文月後一書ニ寫于隅州般若寺中燈前一畢長淳拜（四八オと見ゆ）

（四）大安寺の堂　同書ロの卷に覺洞院仰云唐土西明寺摸ニ寫天竺祇園精舍一院一道慈入唐時在ニ西明寺一引レ琴澄レ心見ニ西明寺樣一摸ニ彼一院一造レ之云ニ大安寺一也云々與清按に覺洞院は實澄法印の仰也口決云は前の段に報恩院口決の聖天の事を載たりこれ也此卷の奥書に弘安元年八月十九日於ニ高野山一以ニ覺洞法印御房御參籠之次一石山道場觀幷妙抄奉ニ傳受一了金剛資賴瑜また琉球國深圓書とあり

（六）仁壽殿二間の觀音　同書八の卷に法印御房仰云仁壽殿（ジムジュウデンノフタマ）二間觀音事御記云六角厨子聖觀音像七寸　梵天帝尺各六寸　仁隆法印被レ作ケルニハ四角厨子十一面觀音梵天帝釋四尊座ケリ云々と見ゆ仁壽殿二間の五字にジムジュウ殿フタマと旁訓せり仁壽殿ヲ塩嚢抄ニハジヾウデント讀タリ法印御房は覺洞院實澄也仁隆法印被レ作とある作の字は仰の誤にや奥書に薩州後堯とあり

（七）高野傳法院兩界の背壁　同書への卷に問高野傳法院兩界背壁本壁下不レ透今度新造時下透事如何答實光院院主云高野傳法院中川成身院是俱寫ニ青龍寺作法一同彼實範上人建立成身院不レ透ニ壁下一此覺一上人建立本不レ透今遺弟等東西列座時歎レ向レ壁忘ニ舊儀一透レ下恐失ニ祖師本意一歎云々予經ニ中川根本成身院一兩界背壁作以ニ臺障子一帳奉レ懸兩界臺下一二寸許復透レ下也兩界背壁西畫ニ龍猛開ニ鐵塔一之義式ニ其塔

一階堵如ニ根來寺小堵一上南角色紙形書ニ龍樹名文一東畫ニ善无畏於金粟王塔下咸ニ見供養法卷一之儀式ニ其塔五重堵也上南角色紙形書ニ善無畏銘文一已上畫珍海已講筆銘法性寺殿筆又本尊金剛界大日頂光中輪光安ニ五佛種子一炎光安ニ五佛三耶形一身光中輪光安ニ四接種子一炎光安ニ四接三昧耶形一也幸助法印作云々背壁障子帳西圖ニ十二天一裏大師於ニ大唐蘇州一投ニ三杵一像書レ之白衣小院（コヽシ）筆私云東寺灌頂堂幷內野眞言院東大寺眞言院皆以背壁下不レ透也眞言院經瑜法印御房仰云傳法院兩界建立寫ニ東寺灌頂堂一云々本願御記分明也云々と見ゆ

（八）中川實範上人の歌　同卷に問中川實範上人歌事如何答遁世初本寺與福寺衆徒來頻可レ被ニ歸任一之由申スニ遣而已「世ヲ捨テ柴ノイホリニスミ染ノ衣ノ色ハカヘルモノカハ」

（九）南都行念房の歌　同卷に南都行念房於ニ中川一向ニ寒飯一ヨミケル「ナトサレハコシキノイヰノムカウヘニヒヘテマタナヲツメタカルラム」與清按に此歌不審なるがゆゑに原本のまゝに寫すこのへの卷の奥書に薩州秀存書とあり

（十）弘法大師の歌幷賴瑜の歌　同書トの卷に大師御歌云（此御歌ハ土佐室戸崎ニテ御詠也）「法性ノ無漏土（ムロド）ト云ヘドモ我スメバ有爲ノ波風ヨセヌ日ゾナキ」愚詠云（私云賴瑜）「性海ノ緣起ハ今ゾシラレヌル无漏土ノ浦ノ有爲ノ浪風」

（十一）貞松房最後　同卷ニ奈智瀧ニテ彼レ行ケル程ニ瀧ノ水局（ツボネ）擧ルヿ如レ局レ帳シテ千手觀音淨土顯現ス彼淨土ヲ拜見シテ後ニ付レ水登上草鞋ヲ片足落シテ去畢ヌ其後行方不レ知矣云々

（十二）空晴僧都最後　同卷に法服持香呂ニテ雲中登上テ都率參給此モ草鞋ヲ片足オトサレケリト云々

（十三）義淨三藏幷ニ眞の墓　同卷に或云依ニ聖武天皇請一ニ來眞和尙來ニ我朝一之時義淨三藏同來給云々俱以日本ニテ入滅云々ニ來眞墓所在ニ於招提寺一義淨ノハ未レ詳ニ來眞屬ニ筑紫一土ヲナメ此處ハ雖レ有ニ惠辨一而非ニ戒法相應地一生馬邊ニテ又嘗テ戒法相應地ナリト云テ唉レケリ云々

（十四）蒙古の使最後の詩　同卷に蒙古朝使於ニ關東一行ニ死罪一時最後詩事無端今日秋風惡吹斷殘魂（アジキナシ）（オモムク）適ニ九境一

（十五）賴瑜夢想の歌　同卷に文永十一年七月八日晨

朝夢想云故廻心御房奥院被レ座許以レ人示二獲麟之由一
予即令レ參之處御前ソリ橋西高亂上種河上空中如二平
生一著二袈裟衣一端座向レ南入滅氣色其前紙一紙和歌二
首カキオカル、ヲ予手ニ取テ見レバ初ノ歌ヲ見畢後
ノ歌ヲ畢ルニ夢覺メテアレバ後ノ歌ハ暗誦セラレテ
初ノ歌ハツヤ〳〵不二覺悟一夢中初テノ歌ニ神妙ニケ
ダカク 脥覺侍リキ後歌云「シルシアラハタモトノ
ツユノ月ソトモマタコム世マテ人ニシラセヨ」

（十六）十齋日六齋日井藥師觀音等の緣日の事　同書四の卷に問齋月齋日如何答云齋月年三長齋トイフ正月五月九月（委ク三寶經ニ見）齋日有二十齋六齋一十齋者一日八日十四日十五日十八日廿三日廿四日廿八日廿九日卅日（但小月廿七八九日也）一日定光佛ヲ念ズレバ四十劫ノ罪ヲ脫ス八日藥師ヲ念ズレバ五十劫ノ罪ヲ滅ス十四日普賢井ヲ念ズレバ百卅劫ノ罪滅ス十五日アミダ佛ヲ念ズレバ千劫ノ罪ヲ滅ス十八日觀音井ヲ念ズレバ九十劫ノ罪ヲ滅ス廿三日得大勢井ヲ念ズレバ万劫ノ罪滅廿四日ビルサナ佛ヲ念ズレバ二万劫ノ罪ヲ滅ス廿九日藥師井ヲ念ズレバ四万劫ノ罪ヲ滅ス卅日釋迦如來ヲ念ズレバ五万劫ノ罪ヲ滅ス六齋日八日十四日十五日廿三日

（十七）善惡夢の呪　同卷に問善惡夢見之時呪如何答南無功德須彌變王如來（惡夢之時之呪ナリ）南無福德增長須彌功德變王如來（吉夢之時之呪也）與清按に籠中抄拾芥抄にも見ゆ

（十八）庚申夜の誦頌　同卷に問庚申夜誦頌如何答彭侯子彭常子命兒子悉入幽冥之中離我身レバ三尸去テ万禍來ルト云々　と見ゆ與清按に拾芥抄上卷諸頌部に庚申夜誦

今按每庚申向竈而呼二其名一三尸永去万福自來　彭侯子彭常子命兒子悉入幽冥之中去離我身云々また籠中抄嚢抄などにもあり

（十九）鼻曳時の頌　同卷に鼻曳時頌如何答伏息万命急々如律令云々與清按に拾芥抄上卷諸頌部に嚏時頌クサメノトキノ事休息万命急々如律令クサメト云ハ是也と見ゆ與義抄下之中卷にははらへするをりはなひるをもいむなどいへり

（廿）長吏三綱所司　同卷に問諸寺長吏三綱所司如何答或云座主撿挍別當是云二長吏一上座寺主都維那師此云二三綱一行事勾當是云二所司一云々與清按に二中歷第四僧職歷に長吏座主撿挍別當（座次或依レ臈三綱上座寺主都維那謂二之所司一）と見えたり

（廿一）七僧　同卷に七僧如何答講師讀師呪願三禮唄師散花堂達云々與清按に二中歷にもかく見えたり

（廿二）奈良七寺　同卷に問奈良七寺如何答東大寺興福寺元興寺大安寺藥師寺西大寺法隆寺云々與清按に拾芥抄嚢抄などに七大寺といへるこれ也

（廿三）歌書撰者　同書五の卷に問新古今序云先抽二万葉集之中一更拾二七代集之外一云々今此万葉集七代集誰人撰集耶又次第如何答如レ次列撰集次第并擧二作者名一風吟之人知ゃ之

古今集　延喜御時延喜五年撰者四人紀友則貫之躬恒忠峯　後撰集　天曆御時梨壺五人元輔（深養父孫下總守春光息）順能宣（輕基息）望城（是則息）時文（貫之息）　拾遺集　花山院御時長能（伊賀守藤倫寧息）道濟（筑前守滋伊豆守方國息）以上三代集歟

後拾遺　白河院御時治部卿通俊撰レ之○金葉集　同太上法皇御時俊頼朝臣撰レ之○詞花集　崇德院御時左京大夫顯輔撰レ之○千載集　後白河院御時俊成三位入道（本ノ名ハ顯光後忠ノ息）撰レ之○已上三代集相二具四代集一云二七代集一歟

續詞花集　二條院御時大宮大進清輔撰　已上皆勅撰歟

問新古今集誰人撰レ之耶答新古今序云仍詔二參議右衛門督源朝臣通具大藏卿藤原朝臣有家左近衛中將藤原朝臣定家前上總介藤原朝臣家隆左近衛權少將藤原朝臣雅經等一不レ擇二貴賤高下一令レ撫二麗句一遺レ久云々問類聚詞林新撰萬葉集等作者何人耶答云々

類聚詞林（山上憶良大同桓武平城御時年中人）○新撰萬葉集（北野御時參議敏頼道成息）○海手古良（枇杷大納言師氏小一條關白貞信公御息）○和詞式（濱成興風之先祖也○與清按に色葉集に濱成和歌式に作八雲御抄に歌經標式に作たり）○豐陰謙德公攝政○廬主（僧基法師亭子

院殿上法師 ○宇治喜撰式○六帖後中書王御撰具平親王 ○多田法眼樹下集與清按に八雲御抄に樹下集二十卷多々法眼源賢撰有二假名序一と見ゆ ○伊勢物語中務母伊勢撰 ○大和物語滋春在次 ○硯破 孔雀御子(スヽリワリ)御子の硯破と見え八雲御抄には二部の名に別られたり ○宇治橋姫 ○源氏紫式部作 ○世繼 ○忠峯十體 ○道濟十體 ○枕雙紙清少納言 ○玄々集 古曾部入道能因俗名相永長門守光恒息 ○歌仙傳 ○金玉集與清按に八雲御抄に一卷と云々 ○朗詠 與清按に八雲御抄に和漢朗詠抄二卷公任云々色葉集に ○深窓秘集 ○與清按に八雲御抄に深窓秘抄一卷と有 ○和歌九品 ○新撰髓腦 ○詞論議 ○詞枕 已上大納言公任卿○與清按に色葉集に諸國歌枕とあり ○難後拾遺帥大納言經信卿民部卿源中納言道房息 ○打網 眞遲紙 ○打網大原入道念首作 ○カゲロフノ日記傳大納言道綱母 ○堀川院日記讀岐典侍 ○伯母口傳 ○隆源口傳○與清按に色葉集に相撰 ○新朗詠與清按に色葉集に新撰和漢朗詠に作 ○新三十六人已上基俊朝臣 ○拾遺古今和歌集抄教長筑前權守盛忠 ○相撲立詩歌與清按に色葉集に相撲立の詩歌二十番に作 ○五葉集宰相 ○童蒙抄 葛葉三位(ハナノタトヘ)法名敬心 ○花譬 祝緒賀度神主重助女○與清按に八雲御抄に花譬祝緒歟と見え色葉集に祝緒か花譬と有祝緒は女の名也 ○花譬 法輪入道大宮大相國伊通後賴髓腦ヂ難シタルハ是也(ボクケキ)○與清按に八雲御抄に卯花譬と有 ○後葉集 長門前司爲經詞花集 ○牧笛記 大宮大進清輔後葉ヂ難シタルハ是也 ○奥義抄 與清按に八雲御抄に色葉集共に奥儀に作 ○一字抄 ○初學抄 ○類聚歌林○與清按に色葉集類題林に作 ○袋造紙 ○今撰集 已上清輔作顯輔息

○現存集 右馬助敦頼 ○續現存集 敦頼息敦仲撰 ○詞撰合 大夫俊惠撰俊頼息 ○難歌撰式部祐盛撰 ○歌苑抄 俊惠 ○拾遺詞苑 安性寺入道時光(ヒカリ)○與清按に色葉集に安住寺入道時光ゝ拾遺と有 ○安門集 高阿闍梨顯昭左京大夫顯輔猶子 ○言葉集 筑前司廣定○與清按に色葉集に高阿闍梨顯昭が言葉集とあり ○宅々玉集 宅字不明筑前守有安色葉集共に作 ○月詣集 賀茂神主重保 ○雜千載 美乃權守入道勝命○與清按に八雲御抄に八雲御抄には二寒玉集に作 ○花月集 左京左大夫入道師光 ○山科集 善光寺宗延紀伊入道息○與清按に八雲御抄惠光房擬已講宗延に作色葉集は光坊已講宗延に作 ○三井集 藏人阿闍梨賢辰 ○山月集 大和公經因 ○荊谿春花集 侍從阿闍梨覺審○與清按に色葉集莉演に作 ○仁和集 歌仙寺卿公○與清按に八雲御抄歌仙兒卿公に作 ○閑林抄 靜緣○與清按に色葉集に諸門和歌集 壹岐入道唯心房寂然攝寂超俗爲經家念が舍弟也丹波守爲忠息 ○寶物集 平判官康賴作 ○三十六人 大夫公覺盛○與清按に八雲御抄○三十六人十八番に作 ○明月集 大夫色葉集共に三十六人法眼宗 ○大原集 圓法房證信○與清按に八雲御抄法信に作 ○古語拾遺 ○日本紀 ○歌語抄 筑前法眼慶竿 ○玉花集 右馬允俊貞○與清按に色葉集前右馬允に作 ○良玉集 太同元年撰○與清按に八雲御抄に良玉集十卷顯仲兵衛佐撰○與清按に八雲御抄に平語抄に作 ○解難集 ○與清按に色葉集共に平治元年嗚ニ大治元年ニ云々 ○難義抄 ○與清按に色葉集醉雜集に作 ○疑開類聚問答抄 付顯昭色葉少々抄出之○與清按に色葉集叔類聚問答抄に作八雲御抄疑開類聚問答抄に作で三部の名とす 按に以上の書目の條は八雲御抄一の卷學書の部色葉集上の二卷撰抄時代者の部などにてらし合せて心得べしさて此五の卷の奥書には薩州文空書とあり

(廿四)賴瑜が九月十三夜の歌 同書七の卷に九月十三夜愚詠事私一千氷敷十三夕煩腦雲消觀念霄「獨居て雲井の月を詠れば心の中そ晴まさりける」

(廿五)諱諡號 又云問存生死後何分耶答諱號ニ存生一諡言ニ滅後一也諱號ニ存生ニ時實名也問イミナト云事如何答禮記云先祖名ヲバ只付ニハ直不レ呼恐義也廟前ニテト文ニテトハ呼レ之隨ニ只付一イミナトイフ也

(廿六)南都解脫房詠歌 又云問答「我戀ハツヒカウソリノアヒカタミマラアリトテモ何ニカハセム」

(廿七)辰壽得業が歌 又云問答年ノ内ニ春ハ來ニケリ一年ヲコゾトヤ云ハン今年トヤ云ハン此ヲ狂云「年ノ内ニ晴ハキニケリ被(ヒタ)レヲコソノヲヤキン今年ノヲヤキン」又「ワカノ浦ニ鹽ミチ來レハ潟ヲナミ葦邊ヲ指テタツ鳴渡ル」此狂云「キヌノ裏ニヤレミチクレハカタヲスヘ足手ヲカケテ我泣渡ル」按に此卷の奥書に薩州秀存書とあり

(廿八)弘法大師誕生日 同書八の卷に問何答或傳云六月十五日云々

(廿九)大日本國表示 又云問何答木幡口傳云大日之本國ト云事也意ハ南天鐵塔爲レ迹高野ノ大塔ヲ本トスル歟

(卅)芥子供 又云理性院觀俊法印傳云後供養方瓶許ニ入器置テ以ニ慈救咒一七反加ニ持寶光虛空藏明一三反投ニ入爐中一也又宗遍僧都說云七反加ニ持寶光虛空藏明一也但用ニ芥子供一事ハ後供養阿伽前ニ用レ之云々此卷の奥書に薩州俊彥書と見ゆ

(卅一)不動の辮髮 同書九の卷に問何答禪定院仰云クミガミト云事也三辮ノ寶珠又准レ之三ヲクミアハスルガ故云レ爾也或云マトフト云事也弁有ニ三字一中書レ言或書レ夕或書レ糸也今三弁與ニ弁髮弁字一糸ヲ書ク字也辮也

(卅二)黑善阿彌陀佛發心 又云問何答本南都ニ住ケル後高野ニ住ケルガ爲ニ學文一他行之間或所ニ宿シテアリケルニ宿所ノ人誦ニ此詞一云有色身後有ニ何事一應向世間無レ所レ求云々黑善聞ニ此詞一所詮學問ト云ハ此マデニテコソ有メト云テ其ヨリ發心メ修行セリ矣云々按に奥書に文應元年十二月三日此□了また薩州文鏡書とあり

(卅三)聖德太子胎中の語 同書十の卷に聖德太子胎中經ニ八月一間云事外聞何言事問何答或說云諸惡莫

レ作諸善奉行等云々或說云衆生無邊誓願度等云々按に此事水鏡欽明の條にも見ゆ

(卅四)右流左死　又云常世間詞右流左死云事問何答大臣故流之時此右大臣ニテ流罪セラレ其時左大臣死亡故云ニ右流左死一也其時ヨリ始ル言也云々按に此事江談抄に出たり

(卅五)拾の字　又云問何答手ヲ合スト書ガ故云レ十也手合スレバ指成レ十故也

(卅六)百字を度と訓　又云百字有ニ度訓一事問或願文云發ニ三百心一凝ニ二百帙一云々左傳ニ百字ニ用ニ度訓一事有レ之云々按に此卷の端に眞俗雜記問答抄第十文應元年十二月四日始レ之奥書に薩州賴順書とあり

十八公舍筆記卷之二

松屋　高田與清文儀稿

(一)而已をのみと訓　眞俗雜記問答抄第十一に而已のみ讀事問何答木幡仰云嘉祥尺云此花不レ有而已有必花實俱結此經不レ說而已說必因果並顯文天台止觀云若無レ心而已芥爾有レ心即具ニ三千一文古此文而已ヤミナムト讀メリ誤歟ノミト可レ讀歟又天台梵網義記云不レ起而已起則性無作假色文與清按に此卷の首に文應元年十二月上旬比記之と見え奥書に薩州賴順書とあり木幡仰は木幡觀音院廻心房の事也

(二)油と朱を用方　同卷に學問時油朱用之用意事問何答或云油盞下盞入レ水用レ之光明殊明油久存也又朱砂白物半分入具用レ之朱多々也

(三)斛に石字を用　同卷に一斛等斛字用レ石事問石字無ニ斛聲一何用レ彼耶答或云昔阮藉云上古アリキ飲ニ酒一斛一全不レ醉或時過ニ一斛一飲之時醉死其腹破見ルニ石一アリ此石酒一斛吸石也故以ニ此因緣一米等ニモ用ニ此字一書ニ石等一也サレバ二三斛已上不レ可レ用ニ石字一也而大師三敕指二千石云々准ニ用一石一如レ此歟又酒一石飲事知彼石所由事彼火葬スルニ彼石却不レ燒懸レ酒時燒文故知レ然也(頭書古事談一和名抄十四ノ四丁オ)

(四)諸寺門の二王　同卷に諸寺門立ニ金剛力士一事問何答金剛力士經云寺大門有ニ金剛力士一能護ニ於三世諸佛門一文取レ意木幡仰云右方持レ杵云ニ金剛一左方無ニ持物一云ニ力士一哉二尊通云ニ金剛力士一矣門立ニ金剛力士一事表ニ智惠法門一安佛表理隱レ內爲レ內爲レ外也云々與清按に隱レ內の內は密の略字也(二王ノ頭引ノ一盛衰記ニ見ユ)

(五)神泉苑請雨　同書十三の卷に請雨經法事問何答御口云此流於ニ神泉苑一修ニ此法一有ニ龍供一別行レ之又此法大師修法時所レ現金色龍出現方角幷所出穴等事習レ之甚深秘事トス

(六)安然非ニ弘法大師一　同卷に安然非ニ大師一事問何答御口云先師口傳云護法請弁空有論ノ如シ此乃相成非ニ相破一也サレバ大師夢中安然破强不レ可レ非之義示レ之

(七)荒神　同卷に荒神事問何答御口云外典云ニ荒神一陰陽師荒神供是也內典云ニ吠那夜迦一聖天供是也或流中付內法修ニ荒神法一云々先師僧正此事未ニ信用一此流都無ニ彼事一矣云々與清按に荒神はかう神の訛也竈神を音便にかくいふ也

(八)弘法傳敎の約　同卷に東寺天台遺誡異事問何答御口云大師隨ニ公請一親ニ近國王々子一成立者爲ニ東寺長者一云々御遺告見傳敎如ニ安樂行品所說一不レ親ニ近國王大臣一住ニ山寺一凝ニ一心三觀觀念一云々此由兩大師約束セラレケリ云々

(九)たばねと云詞　同卷に三摩耶戒壁代前札燈事問口傳云(受ニ報恩院御口一)瓦器中灶心五筋許立合本少タバチヒロゲテ續飯ニテ付ニ瓦器中一末ヲバ取合テ續飯ニテ付テサテ油ヲ入レテ瓦器中燒レ之後器重入ニ折櫃中一前机未申角程置レ之云々按に口傳とは成身院僧都の口傳也此卷の奥書に薩州文啓書とあり

(十)最明寺時賴辭世の句　同書十四の卷に最明寺禪門最後頌事嚴惑說鏡高懸三十七年一杵打碎大道堪然云々與清按に吾妻鏡五十一の卷に廿二日(弘長三年十一月の條)戊刻入道正五位下相摸守平朝臣時賴(御法名道崇御年三十七於ニ最明寺北亭一卒去御臨終之儀著ニ衣袈裟一上ニ繩床一令ニ座禪一給聊無ニ動搖之氣一頌云葉鏡高懸三十七年一槌打碎大道垣然弘長三年十一月廿二日道崇珍重云々とあ

り北條九代記には葉鏡を業鏡に作れり

(十一)木幡上人の歌　同卷に木幡上人讀ニ悟了同ニ未悟一歌(報恩院僧正御房大悟同ニ未悟一云々)

ツユヨリモ雨ニオホエシ夢ノ世ヲ今ハウツヽト見ルワカ身哉云々與清按に木幡上人は例の觀音院の廻心房也

(十二)錢の形　同卷に錢形事問如何答或儒士云外圓象レ天內方象レ地云々頭書(清北集に錢の詩有)

(十三)觀酒次第　同卷に勸レ酒次第事問何答先肴居レ之(折數二種並ニ居之一次酒器居レ之尻リ居非ニ正義一第二行已箸臺盞一二置レ之也內々說歟)後又肴盛レ盞居ニ折敷一酒器居具先肴箸臺右方置レ之餘人次第又可レ同後々如レ此第三行已後箸臺右無レ處先盞取可レ出レ之居瓦氣(スエカハラケ)テバ不レ置ニ折敷一只手持置レ之但上臈ナムド許ニハ一ツ持出置レ之以下人ニハ五六重持出置レ之又中古說ニハ設(タト)御所御酒器ナリトモ已食(ノシテ)後不レ居ニ折敷一也近來我身不レ居ニ折敷一面儛取レ之置ニ折敷一遣ニ他人許一矣

(十四)指油の故實(並かき立木)　同卷に指油(サシアブラノ)故實事問何答別盞油入焚(トモイテ)レ火カキ立テ木ヲモテ灶心本ヲ押テ取ル樣ニ取テ燈臺ナル燈ニ取焚(トモス)也又取焚タルヲモ火滅サズシテ持歸也カキ立木ヲバ端ヲ油ニツキ入テ置レ之又橫サマニヒキ渡テ置レ之カキ立木ノ端ヲ少燒レ之也云々與清按にかきたて木は今世の燈心押(トウシンオサヘ)の事にて物理小識六の卷に挑燈杖といへるもの也濟北集に柱杖と有

(十五)饗下箸　同卷に饗下箸事問何答取レ箸居御折ノサキニ少シ右ノ方ヘカタフケテ立レ之盞飮取テ立也メシ御料ヲバ不レ取ニ盞飮一イツモハシタツル事ハ居ニ御折一立レ之也云々按に御折の下敷の字を脫せるにや

(十六)折紙消息の故實　同卷に折紙消息故實事問何答初行必五字書レ之奧日付不レ書」月唯、日許書レ之頭書(折紙吾妻鏡五ノ廿丁ウ廿一丁オ廿四丁ウ廿五丁オ六ノ二丁オ四丁オ)

(十七)隱居を菟裘と云　同卷に菟裘事問何故隱居云ニ菟裘一耶答左傳菟裘地名也云ニ魯隱公之居地一也故今隨レ彼隱居云爾也頭書(隱居の字後漢書王霸傳に見ゆ)

(十八)會稽の恥　同卷に會稽事問如何答彼又處名也越王雪レ恥山の名也

(十九)問民苦使　同卷に大師別傳問民苦使事問如何答木幡傳云昔國王善政故憐ニ民苦一時々諸國遣レ使問ニ民苦一故云ニ問民苦使一也云々與清按に問民苦使の事

(廿)長惟が聯句　同卷に一院御時於ニ仙洞一當座勸詩長淸卿子息長惟十七才時初參月下催ニ幽思一云題ヲ詠云唐三五夜花陽曉胡十九年柳寒秋

(廿一)唐人の連歌　同卷に唐人未道際許連歌云捨身惜花(ミチステ、ハナチ、シトヤオモヒケン)　打不立鳥有(ウテトモタタヌトリモアリケリ)　云々菟玖波集にも見ゆ

(廿二)團扇にもの書　同卷に道風點ニ御扇一事道風十才時始延喜聖主被レ召白打輪(シロキウチワ)給物ヲカキタリケルヲ御門御覽メ不レ被ニ思食一シテスコシ逆鱗アリケルニ誤テ右軍ガ團扇ノ樣ヲ習テ參忝白圓御扇(ノ)面ヲ點ト怠リ狀ニ書タリケレバ御門一期ノ恥也トコソ被レ仰ケレ云々與淸曰近世三島自寬は誓て團扇にもの書ことをせずその雅物ならぬをいとひて也生涯に中村佛奄がしひてこへるをり白團扇に「おいか身は又こん秋もたのまれす今宵の月そいのち也ける」と一首書るのみ也とぞされどあがりては王右軍や道風朝臣の跡もいちじるくだりては澤奄和尙や松花堂が書畫の團扇を余まのあたり見し事あり自寬は何ばかりのみやび人にてさはおもひあがれりけん

(廿三)報恩院僧正の歌　同卷に先師報恩院僧正御房(ノ)歌事陽山ニシテ僧綱達見ニ閑形一被レ讀レ歌時實用ヲ行ニテカクナム「カタハトテ頭ヲタニモヒキルヽマナンノ秀句ニクヒヽ子ルラム

(廿四)法の扇　同卷に芥心謁我見自心形如月輪意ヲヨメル「ナニトテカ月ヲクモキトオモフヘキアリケルモノヲムチノウチニモ」秘鍵大意ノ心ヲ「ナカキヨノ子フリモナトカサメサラムケフノミノリノ風ノオトニハ」心觀中以(ニ)扇類(ノ)月心(ニ)ヲ「ハレヤラヌクモニカクルヽ月カケヲイツシカノリノアフキニソミル」

(廿五)魂門魄戶　同書十五の卷に魂門魄戶事問何答或云左大指爪本(ノ)(トト)肉間ヲ云ニ魂門一右大指彼處云ニ魄戶一彼處ヨリ魂魄出入故有ニ怖畏事一時ニハ以ニ餘指一握ニ大指一隱ニ彼處一也

(廿六)公相大臣の歌　同卷に問何答大政大臣公相(キンスケ)(スイ)(タロ)ニ住四條大納言隆親爲ニ湯治一侍ニ有馬一ケル許へ遣ケル歌云「タヒ衣サコソハ袖ノシホルラメシクレノ雨ノフルノカケ道」

(廿七)栂尾上人(並木幡上人の歌　同卷に問何答栂尾

上人歌云「ユメノ世ノウツヽナリセハイカヽセンサメユクホトヲマテハコソアレ」木幡上人云「マコトナキ夢ノ世ナレハ今サラニサムルウツヽモイツカ待へキ」與清按に栂尾上人は明惠木幡上人は廻心房也

(廿八)達磨の讀樣　同卷に達磨宗讀樣不レ同事問如何答御口云故僧正云天台ニハ達磨宗ト云ヽ之東寺ニハ達磨宗ト云也云々

(廿九)和歌九首　同卷に御本批云栂尾上人歌云　明惠房「ユメノ世ノウツヽナリセハ」云々木幡上人云　廻心房「マコトナキ夢ノ世ナレハ」云々大輔故性賢「ウツツトモ夢トモナニカタトフラン夢ノ外ナルウツヽナラヌヲ」「マトロマヌウツヽヲ夢トミルユメノサムルウツヽソウツヽナリケル」賴瑜「ウツヽトモ夢トモイハシ中々ニシルモシラヌモヒトツ心ヲ」「ユメノ世ヲウツヽトイフモ夢ナレハユメモウツヽモウツヽナリケリ」櫻町僧都「ナカキ世ノ夢ノウキ橋ウツヽニモカハラヌ道ニナニマヨヒケン」木幡歌云「アシヒキノ山ノ櫻ノ咲シヨリフカヌ嵐ヲナホイトフ哉」笙巖屋ニテヨミ侍ケル大輔故「モラヌニモヌルヽイハヤノナラヒゾトキヽシニ似タル袖ノツユ哉」云々與清按に始の二首已に見えたれば今こゝに略す此卷の奥書に薩州深識書とあり

(卅)眞俗雜記十六の卷奥書　同書十六の卷奥書に私云　道瑜第十六記別在レ之後弘長二年卯月比記也此同年十二月比記ルカ故此卷ヲ第廿六可ニ心得一也十六二卷アリと見ゆされど卷首には眞俗雜記問答抄第十六とあり奥書に薩州慶音書ともしるしたり

(卅一)四十より老に入　同書廿の卷に演義抄云四十已後容顏漸衰即屬ニ於老一文

(卅二)大帷の寸法　同卷に大帷寸法長四尺一寸頸長七尺六寸五分(エリ高六寸廣九寸五分)袖四尺四寸五分大頸三尺五寸スソ廣六寸五分云々與清按に今俗にオクミといふは大頸の轉語なるべし

(卅三)爪を剪事　同卷に人剪レ爪必細剪捨事問如何答唯識述記第十云若剔レ毛剪レ爪如ニ初月一犯ニ偷蘭遮一文推云爲レ失ニ初月形一細切云レ可レ之歟云々與清按に除レ爪日の事土左日記九條殿遺誡などに見ゆ

(卅四)瓜を割故實　同卷に切レ瓜故實事木幡口傳云先アマタニ破テ作ル時ニ結句刀ニ尻(ホソ)ガタヲ切テ捨ル也而不レ知ニ子細一人ハ先尻ヲ切テサテ破テ作ルハ僻事也片端ヲ切ル事ハ作時大指柱(テルカ)故障レ指(レニ)處ヲ切捨ル意也但女房ニ勸ルヲバ大切(レニ)作リ勸レ俗ヲバ小切(レニ)作也俗必一切ヲ一口(ニ)食レ之女房一切(レヲアマタ)數口ニ食スルガ故也衣笠殿ニテ有ニ此サタ(ノ)ケリ又人前ニテ賜レ瓜食スルニハマロムキニシテ共彼中切入(テ)食レ之爲レ吉如ニ作瓜(ニ)一切食(バ)非說也其故ハ俄カニ前人來臨之時取テ起(ブ)時ニマロムキノウリハカヒスクヒテ易レ取ワリ散シタルハ取ニクキ故也云々與清按に前人來臨は客人の誤なるべし削レ瓜事は禮記曲禮上に爲ニ天子一削レ瓜者副レ之巾以レ絺爲ニ國君一者華レ之巾以レ絡爲ニ大夫一累レ之士寔レ之庶人飭レ之と見えたり此卷の奥書に薩州文識書とあり(頭書 續群書類從本拾遺雜抄祖庭事苑二の卷十一丁ウ五雜俎十ノ九丁ウ休源抄十二末卷卅七丁ウ)

(卅五)覺鑁上人の銘　同書廿三の卷に傳法院本願上人銘覺鑁上人者鎭西人也幼日偷發ニ心願一遙望ニ南嶺之雲一少時在ニ彼仁和一早受ニ東寺之流一便以ニ大僧正寬助一爲ニ師主一於レ茲僧正知ニ其法器一奠就ニ南都之名德一先學ニ北宗之幽致一時也上人自夢貴女忽來招ニ寄上人一添ニ居彼膝一以ニ慈愛一相泣摩ニ其髮一告曰汝雖レ爲ニ明器一恨是非ニ我實一遂住ニ他山一可レ恢ニ密法一此宗即法王一官也強忽破レ思我往可ニ擁護一如レ此相示所レ泣之淚類レ珠懸ニ幼童衣一遂乃歸ニ本寺一學ニ密宗一從ニ僧正一受ニ灌頂一其後辭ニ彼文字(キ)容(タリ)ニ身於南嶽一或就ニ定尊一習ニ宗義一或伴ニ永尋一祈ニ興隆一爰永尋早感ニ靈夢一遂成ニ宿願一加之鳥羽法皇並法性寺殿下共驚ニ夢告一同致ニ歸依一又八幡大井拜ニ上人一曰歸命金剛秘密佛靈地令ニ法久住一者世出世間利ニ群生一引導結緣及ニ法界一云々倩思ニ此等一德行匪ニ直也人一者歟

(卅六)法務僧正の銘　同卷に酉酉尊師銘(中川寶心院本　尊師法務僧正者出レ自ニ銀漢之餘波一長ニ于東土之敎門一顯密諸宗之塵一焉訪而皆盡ニ眞雅願曉之流一奚汲而無レ遺肆濟々學徒孜々傳業所ニ職遂爲ニ七大寺之檢校一門迹長留ニ五師子之如意一延喜九年七月六日入滅春秋七十八我師在世居法幾廻廣作ニ佛事一高搆ニ賢才一東室鬼去南山道開上九臨幸花輦再催月捧ニ是說一于レ今門葉寔以煽哉云々與清按に此卷の奥書に薩州俊堯書とあり

(卅七)扇を懷中に入　同書廿四の卷に扇懷中事問何答蓮藏院法印御房仰云扇懷中事可レ依ニ所作體一若用ニ右手許一時移ニ持左手一若用ニ二手一時尤可ニ懷中一(故仁和寺完瑜法印說)或人云不レ論ニ一手兩手一隨レ役時皆可ニ懷中一幡周梨云酉酉樣(ニハ)持ニ花筥一時左手數珠獨古花筥右手持ニナ

ガラ扇ニ散花云々仁和人々扇又持ニ左手ニ以ニ右手ニ散レ花法印御房仰云散レ花手持レ扇不レ可レ然歟私云酉酉異ニ仁和ニ故何必同レ彼矣

(卅八)打鳴　同卷に打ニ打鳴(ウチナラシ)ニ事或云鐘木(シュモク)入ニ打鳴ノ内ニ向レ外内端ヲ打也

(卅九)大安寺並眞言院東寺　同卷に又云大安寺是(ハ)兜卒之攝祇薗精舍葉ナリ矣尊像ハ尺迦智法身相也吾祖師道慈律師遂爲ニ推古天皇御願ニ者也依レ之石淵贈僧正爲ニ本寺ニ隨ニ吾□ニ以ニ彼寺ニ爲ニ本寺ニ也吾弟子門徒以ニ彼寺ニ爲ニ本寺ニ奉ニ仕尺迦大師ニ以ニ西塔院ニ爲ニ根本ニ矣○東大寺眞言院依レ宣賜レ房號(院)ニ雨　又別建ニ立南院ニ名ニ曼荼羅院(名ニ灌頂院ニ)　○東寺弘仁十四年准レ勅永依レ爲ニ密敎根本庭ニ勅使(ニ)眞雅ニ作ニ西院ニ爲ニ阿闍梨房ニ付ニ屬實惠僧都ニ文

(四十)丹生高野使者犬黑狗　同卷に大師云宇治郡(ニノ)逢ニ猶者ニ其形□赤長八尺許大小二犬隨レ之云々

(四十一)弘法大師投ニ三杵ニ　同卷に大師三杵投事大和國宇田郡大藏寺勸進帳云大師延曆季衙ニ鳳詔ニ忽渡ニ李唐ニ大同初掉ニ鷁舟ニ欲レ歸レ華度狐疑未レ浮ニ海上ニ三杵先投ニ雲中ニ于レ時五古者落ニ于平城陶華坊ニ三鈷者留ニ于紀州高野山ニ獨鈷者下ニ于和州雲管峒ニ云々與清按に此文に京都を華と書たり令義解に華夏とあるによれるにや雲管峒の管字は雀(ノ)字の誤にてもあるべし

(四十二)弘法大師入定　同卷に大師御入定事大師云承和二年三月十五日大師又曰吾擬ニ入定(ヒトタチ)ニ來廿一日寅剋自今以後都不レ用ニ人食ニ仁等莫ニ悲泣ニ又勿レ著ニ素服ニ吾入定之間往ニ知足天ニ而參ニ詣慈尊御前ニ五十六億餘歲之後慈尊下生之時必隨從而可レ見ニ吾舊跡ニ吾末世門弟千万親雖レ不レ知ニ吾顏ニ見下一門長者及寄ニ宿此峯ニ者上必可レ察ニ吾意ニ法擬ニ陵遲ニ剋吾必交ニ□徒之中ニ興ニ此法ニ非ニ我執之甚ニ是弘法之計也文　又云又曰東寺座主大阿闍梨耶者吾末世遺弟也門徒雖ニ數千万ニ併吾後生弟子也雖レ不レ見ニ祖師吾顏ニ有ニ心之者聞ニ吾名ニ知ニ恩德ニ吾非ニ白屍之上更人之勞ニ護是爲レ繼ニ密敎之壽命ニ令レ開ニ龍花三會ニ之計也文御弟子記云三月廿一日丙寅時結跏趺坐結ニ大日印ニ奄然入定兼自ニ十日ニ四時行法其間弟子等共唱ニ彌勒寶號ニ唯以ニ閇目无言語ニ爲ニ入定ニ自餘如ニ生身ニ報年六十二夏臈四十一不レ奉ニ喪送ニ儼然安置則准ニ世法ニ矣　○及七々御忌辰

門弟等奉レ見ニ御體ニ顏色不レ衰鬚髮更長加ニ剃除ニ勅ニ衣裳ニ疊ニ石壇ニ壇廣可ニ人出入ニ使ニ石匠ニ安ニ五輪卒都婆ニ入ニ種々梵本ノダラニニ其上更亦建ニ立寶塔ニ安ニ置佛舍利(ヨウドキ)ニ其制眞然僧正一向營レ之文與清按に此文中時尅に四時といふ詞また七々の忌辰五輪(ノ)石塔の事など見ゆ大師御遺告に見合すべし

(四十三)弘法大師贈號井僧位階　同卷に大師贈號事清和天皇御宇時貞觀六年二月始置ニ法印法眼法橋之位ニ定ニ僧正僧都律師之階ニ仍同年三月廿七日以ニ法印大和尚位ニ贈ニ大師ニ御位ニ也　○文德天皇御宇時僧正眞濟上表請レ讓ニ贈僧正於大師ニ其狀云伏乞賜レ許レ讓ニ眞濟(カ)所帶僧正ニ贈ニ禪師之塋魂ニ云々抽レ要了　天安元年十月十七日公家依レ請下ニ綸旨ニ其宣命儞

雖レ知ニ師資ニ某志既切而住ニ於朕情ニ未レ有ニ許容ニ仍今先師乎波大僧正乃官贈賜比治賜不眞濟大法師乎波如レ舊久僧正官爾任賜事乎白左倍詔勅命乎白須天安元年十月廿七日云々

延喜廿一年十二月二日觀賢上表賜ニ謚號ニ眞言根本阿闍梨空海ニ之狀云望請殊蒙ニ天裁ニ被レ號ニ本覺師ニ云々同廿七日下ニ恩綸ニ云故贈大僧正法印大和尚位空海謚號弘法大師云々與清按に此文中法印法眼法橋僧正僧都律師などの始の事見えたり

(四十四)弘法遺告の奥書井東寺の舍利　同卷に御遺告奥書事付東寺御舍利增減事或本云右件遺告承法師等法師實惠法師眞濟法師眞雅　○東寺佛舍利請來云ニ八十粒(ト)大瓶四千三百九十七粒小瓶五百四粒惣數四千九百一粒　天曆四年正月十五日員四千二百五十九粒天祿四年正月十五日四千四百九粒(增加六百粒)安和二年十一月二日員四千四百廿一粒(增加十一粒醍醐)正歷三年正月十五日員四千四百九粒長和三年正月十三日員四千九百一粒(增加五百粒)　○康平六年十一月十九日於ニ東大寺南端ニ奉ニ傳受ニ了生年卅五云々已上心覺傳寫之本奥在レ之○小野僧正仁海法師也持本自筆御遺告奥云右件遺告書努力不レ得ニ遺失ニ故告承和二年三月十五日入唐求法沙門空海

(四十五)土屋井土屋倉　同卷に弘安五年壬午(ノツチヤ)七月廿四日夜丑剋夢想云京中ト省處ニ西ヅラニ東向土屋ト覺キ二階ナル處ニ故若宮僧正御房御家思テ入タレバ入口ニ板敷一間許ナル處ニアレバ戌亥方南壁ニ副西壁三尺許去テ東向ニ古佛像ノ一鋪ナルヲ奉レ懸レ之云々與清按に大和物語に土屋倉と見えしは今の土屋と近

き名也此卷の奥書に薩州文啓書とあり

(四十六)經机の外題を書故實　同書廿七の卷に經机書ニ外題一故實事問如何答或云以ニ奥題一載ニ外題一也云云按に此卷の奥書に薩州俊良書とあり

十八公舍筆記卷之三

松屋　高田與清文儒稿

(一)類字函の銘　文化乙亥の年の三月ばかり了阿法師がまでこしをり何くれの物語のついでにいかで一万卷の書の中にそれはそこにこゝに見えたりと委くあきらめしらばやといひ出しにさらば心をあはせて拔書をこそせめとてやがて筆をおこしつされどかく書つめしはて〳〵はいとらうがばしくなりもて行てなほ見出んたよりよからじとていろはもじを母としてこれにたぐひをわけあてんとせしにその勞おほかたならざればたやすく功をとぐべくもあらざりきさるをおのれはかりとをまうけてひとつの函をつくり出それに四十七の引出しを配りてたよりにそなふそは書つらねたる詞どもをおの〳〵斷切て函の引出しにわかち入さて續飯あるは姫粘生麩粘などして張つけて清書するわざ也この函を類字函とも色葉類函とも名づくかくてさきの勞もうちわすられ類字の書をつくり出るもものならすぞおぼゆる此函のはじめて

なれるは同年の六月十日也今は岸本由豆流山崎美成などそのつくりざまをつたへて余がしわざをまねぶめればするつひに天の下にもしきおよぼさんものをとひとりゑみなんせられたるその銘「いろは箱書あつめつゝ四十あまりなゝつにたぐふちゃのことのは」

(二)河面に螢を見る詞 并序　蚊やりくゆらす夕ぐれのいぶせさにはた心はるゝかたもやとやほら柴の戸を立出つ人のさそふとしもなけれど川のほとりにあゆみつきたるはあつさをうしとおもふ心のおのづからゆく水にひかれしにやうち見るこのもかのもにたがあくがれしたまなりけんといぶかしまるゝまでひむがしに西にとびかひあそぶ螢の光は秋の毫末をもかぞへんばかりにて所がらそのながめえもいはずをかしよしやあかつき露に立ぬるともこゝに一夜はあかさましいましつくりてうたへる詞「螢火にましりて夏をわすれてん鴫(カモ)にたくふ人もある世に」

(三)相摸國の鐘が淵　相摸國餘綾郡花水川の川尻に鐘が淵とて水底に鐘の龍頭の見ゆる淵ありそこは廻國雜記に道興准后の花水川といへる河をわたりて「唉と見えちるとみゆるや風わたる花水川の浪の白玉」とよまれし所也東海道名所記一卷に花水の橋長さ四十三間也とあり

(四)繪馬　武田信英が草廬漫筆に古來は神に祈願を込又其願滿る時は社頭に馬を献じて神馬とす貧賤の人は馬を献ずる事あたはず故に木馬畫馬を以て生馬に換たり此故にや繪馬といふしかるに後世の俗俳優娼婦の畫を以て馬に換るは非禮不敬の甚しきにあらずやと云々與清按に繪馬の事は本朝文粹十三の卷また朝野群載二の卷に載たる大江匡衡北野天神供ニ御幣幷種々物一文に色紙繪馬三疋云々大日本國法華驗記下卷紀伊國美奈倍道祖神の條に沙門恠念巡ニ見樹下一有ニ道祖神像一朽故遥ニ多年歲一雖レ有ニ男形一無レ有ニ女形一前有ニ板繪馬一前足破損沙門見ニ了繪馬足損一以レ糸綴補置ニ本所一畢云々舊本今昔物語十三の卷第卅四語に道祖神ノ形チ造リタル有リ其形舊ク朽テ多ノ年ヲ經タリト見ユ男ノ形ノミ有テ女ノ形ハ无シ前ニ板ニ書タル繪馬有リ足ノ所破レタリ道公是ヲ見テ夜ルハ此道祖ノ云ケル也ケリト思フニ彌ヨ奇異ニ思テ其繪馬ノ足ノ所ノ破タルヲ糸ヲ以テ綴テ本ノ如ク置

ツト云々宣胤卿記永正十七年十一月九日の條に明日多武峰社遷宮闕白御使衛門佐才宣綱云々宣秀相伴下ル繪馬二枚進云々神社啓蒙の或問に問繪馬何義答此蓋奉レ贊之義也不レ能レ引二進神馬一者畫レ之献也云々など見えて馬ならぬ繪を奉るとは太平記廿九の卷阿保秋山河原軍の條に其比靈佛靈社ノ御手向扇團扇ノバサラ繪ニモ阿保秋山ガ河原軍トテ書セヌ人ハナシとあればその頃よりおこれるなるべし

（五）應仁の比の足輕の出立の貌　井茶の湯　奇異雜談集一の卷天文の比江州の中村豊前守が子の撰也其名未レ詳五條の足輕京にて死するに越中にて人これにあふ事の條に應仁の亂中のことなるに東洞院と高倉との間に足輕一人あり名字ハ忘却夏の比なるに清水にさんけいすあさめしいせんに隔子のもんのかたびらにもよぎのもちの十徳にかたなわきざしにてやどをいづ中間はかたぎぬよのばかまにて主の笠を頸にかけ手やりをかたげてあとにゆくと云々又云夏なれどもおうへる炉をあけて釜をつり茶の湯をする也と云々

（六）蓑積の鰻鑵となる　同書同卷江州枝村にて客僧にはかに女に成し事の條にその時ざしきのくわしの殘りの山のいものありしを和尚ゆびざしていはくやまの芋のうなぎとなれるがごときぞと云々與清按に倭漢三才圖會百二の卷に蓑積溪邊出レ崙時々感二風水一則變レ鰻見二半變者一人往々有と見ゆ頭書鉢源抄土の末に日蓮本尊供養御書を引て云蓁成レ鶫山芋成レ鰻云々

（七）六十六部の囘國の經聖　同書同卷人の面に目鼻なくして口頂の上にありてものをくふ事の條に津の國の聖道一人名藤坊九世戸さんけいのついでに予が居所にきたりて數日逗留の時かたりていはくつの國に一人の聖道あり日本六十六ヶ國を修行するに國どに十日廿日逗留してその國中の名所舊跡大社驗佛殘りなく一覽をとげてかへる也と云々與清按にこは六十六部囘國の經聖をいへるなるべし桂川地藏記上卷に或有二六十六部囘國之經聖負レ笈と見え天野信景が鹽尻五の卷にも六十六部廻國順禮の事いへり頭書新撰和漢合圖承平二年の段に賴朝房納二法花於大社一六十六部始也云云妙法寺記錄甲陽軍鑑二ノ九丁才四國順禮甲陽軍鑑二ノ廿丁才

（八）めんつ　同書同卷古堂の天井に女を磔にかけおく事の條に水呑たきよし申ほどにおりて井をたづねめんつに汲で天井にのぼりてわたふ女人水をのみてよろこびと云々與清按にめんつは今俗にメンツウと

いへり食桶の湯桶讀にや撮壤集中卷家具部に飯銅云云運歩色葉集免の部に面桶云々波部飯筒（ハントウ）などあるものその音かよひきこゆ節用集大全女集第四十に籾桶（シントウ）云々書言字考七の卷に面桶本朝行厨就二一人面一而與二一器一故名云々とあり頭書常山紀談五之上卷慶長十九年黒田孝隆入道如水病重く成て遺言の事ありへる條にめんつと云物は飯を盛物よ上天子より下百姓に至て一日さして食物なくて世にながらふ物はなき事也國を富し士卒を強くするの根本一大事此飯入にあり必忘るべからずかるゆゑに此面桶も形見にまねらするよといはれけり云々

（九）草履の燒繪紋　井履棚　同書同卷作善の齋會に僧衆中酒をのめる時位牌の靈魂の喝食形を現じて火炎に燒し事の條に院主たちて見るにまどにそのざうりあり見れば喝食のざうり燒繪紋まぎれざる也此城履は病中よりくつ棚にありつるにけさ誰がとりいだすぞととへば誰もとり出すものさらになしと云々與清按に今世も下賤の者草履下駄足駄の類の目印に燒印押ものあり

（十）茶屋　井わたくし物まめやか物　同書二の卷糺の森の里胡瓜堂の由來の事の條に糺の森はむかし大木おほく保境ひろし社頭いらかをみがき神威しるしあらた也地下五六町はんじやうし民家おほくつらなる叡山より出京の街道なるゆゑに人の往來たゆるとなし地下の西よりにきれいにしておほきなる家あり茶屋也家ぬしは婦人にして夫なし一二年ひとりやもめ也つねに茶屋の本座に居て茶をうるおもてに板をもつてかりに棚をつりて胡瓜五ッ六ッを出してうる山の小法師原三人同道してとほるがめづらしき胡瓜ありとてよりて見るひとりのわらは手にきうりをとりてわが坊のばうずのわたくし物はたゞ是よかたちも此やうなるぞといふてたなにおきて三人わらひてゆけりと云々與清按に新撰犬筑波集雜部にみな人のまゐるや露のたふくやう笠をもたねば茶屋へこそよれ又のごのかわきはたゞふじの山田子の浦に打出見ればば茶屋もなしと云々宗牧が東國紀行に天文十三年七月に都を立出し紀行也日坂とかいふ茶屋にやすみて跡なる荷物などまつほど此山の名物なりとて巖もちひといふ物しすましてて出したりと云々など見えてやゝふるくより茶屋はありける也又わたくし物は宇治拾遺物語一の卷中納言師時法師の玉莖撿知の事の條に衣のまへをかきあげて見すればまことにまめやかのはなくてひげばかりありこはふしぎのことかなと見給ほどにしもにさがりたるふくろのことのほかにおぼえて人やゐるとよ

び給へば侍二三人いできたり中納言その法師ひきはれとのたまへばひじりまのしをしてあみだ佛と申てとく〳〵いかにもし給へといひてあはれげなるかほけしきをして足をうちひろげておろねぶりたるを中納言あしを引ひろげよとのたまへば二三人よりて引ひろげつさて小侍の十二三ばかりなるがあるをめしいでゝあの法師の股のうへを手をひろげてあげおろしさすれとの給へばそのまゝにふくらかなる手してあげおろしさするとばかりあるほどにこの聖まのしをして今はさておはせといひけるを中納言よげになりにたりたゞさすれそれ〳〵とありければ聖さまあしく候今はさてといふをあやにくにぞさすりふせけるほどに毛の中より松だけのおほきやかなるものゝぶら〳〵といできてはらにすは〳〵とうちつけたり中納言をはじめてそこらつどひたるとのどももろごゑにわらふ聖も手をうちてふしまろびわらひけりはやうまめやか物をしたのふくろへひねりいれてそくひにて毛をとりつけてさりげなくして人をはかりて物をこはんとしたりける也と見えしまめやかものにおなじくて共に隱蓙の事をいへる也また珍寶ともへノコとも麻良ともいふよし別に記すべし

(十一)よこ槌 并槌の名種々 同書同卷獅子谷にて鬼子を產し事の條に父ちやくしをよびてよこづち持來れといへば鬼子きゝて父が手にかみつくを槌をもつてしきりにうつてたゝきころす也と云々與清按に和名抄工匠具部に鐵槌加奈都知 柊槭 散伊都波 あり澁柿文覺上人消息の混柄の槌平家物語祇園女御の段源平盛衰記廿六の卷寶物集一の卷などの打出の小槌の類槌の名もいとおほかるべし

(十二)順禮の札 同書同卷江州の三塚小者をきるに順禮の札代に切られし事の條に江州ひがしのこほり三雲の庄山南のおくに一村あり村の中に妙感寺あり六角殿文明年中に妙感寺に居住す數年に諸侍みな家をつくりて居れり予が父中村豊前守も家をつくりて居する也はうばいに三塚と云人ありすこしぶげんにしてたゞ中間小者二人のみ也ある時三塚早朝に小者松若をよぶに見えず中間門にいでゝたづぬるに隣家の下女のいはくこのへんの小者ども十人ばかり順禮するとてあかつきゆけり云々三四十日にして中入としてかへりて母の家にゆきぬ云々順禮の札一枚よこすちかへにきれてあり中間札をひろひてかへり三塚殿へこれを見せて死骸なきよしをかたれば三塚大におどろき松原へゆきて見ればその跡なきゆゑにふしぎ也松若をゆるす也これより美濃にゆき順禮の結願せよとて路錢をつかはしてやると也と云々與清按に柱川地藏記上卷に或有二三十三所順禮行者一打レ簡と見え拾芥抄下卷に三十三所觀音の寺名を載たりまた坂東卅三番秩父卅四番四國遍地八十八所などいづれも順禮行者の簡所也坂東卅三所の事は沙門亮盛が坂東三十三所觀音靈場記にくはしくいへり

(十三)湯桶文章 并牛一頭二頭 同書三の卷牛觸合て勝負をいたし前生を語事の條に唐には牛をば一頭二頭(ヒキ)といふなり日本のことばに約せば湯桶文章にして牛一疋(ウシヒトヒキ)といふべきかと云々令にも牛一頭と見ゆ

(十四)馬一疋二疋 并絹一疋二疋犬一疋二疋 同書同卷同條に馬を一疋といふいはれは馬の目には絹一疋長の間を見る也字註にいはく一疋は四丈也馬の光景一疋の長也と云々絹を一疋といふいはれは一疋は二きだけ也夫婦二人の衣裳となるゆゑに一疋といふ也夫婦二人相したがふを一疋の夫婦といふ也論語に匹夫匹婦といふ是也匹は配也物を一對といふがごとき也疋の字同也犬を一疋二疋といふいはれは犬追物の時河原者輪の內より犬をはなせば馬上一矢犬をいる若二騎三騎おつかけているといへども本になる矢はたゞ一ッ也馬一疋に犬一なるゆゑに犬を一疋といふなりとなる犬をば一疋二疋とはいふべからずといへども世俗のことばみだりにしてつねの犬をも一疋二疋といひあまつさへ鹿兎狸狐猫鼠小虫にいたるまで一疋二疋五疋十疋といふはまことに下賤愚昧のいひならはし也と云々與清按に佩文韻府九十三の下卷に匹譬吉切偶也配也合也二也說文四丈也俗作疋云々馬四匹繒十匹など見ゆ

(十五)料足十疋廿疋 同書同卷同條に料足を十疋廿疋といふいはれは犬追物の時河原者犬を百疋はなてば一貫文とる五十疋はなてば五百文とる也犬一疋は十錢にあたるゆゑに十錢を一疋といひ百文を十疋といへり是犬追物より出たる詞也と云々

(十六)茶四五ふくのむほど 同書同卷丹波の奥の郡に人を馬になして賣し事の條に茶四五ふくのむほどしてもはやよかるべしとてと云々與清按に今世には

煙草何ぶく呑ほどと煙草にて間(ホド)をたとへいへり

(十七)太皷の家 井船のあかをかゆる　同書同卷伊良虞のわたりにて獨女房船にのりて鰐にとられし事の條に善珍は太皷の家をわきにおきたるをと云々又云波なほたかくうち入ほどに船のあかをかゆる事たゞ手もおかずと云々與清按にかゆるは掻(カク)の訛にてかい出すといふ俗語もおなじ心也

(十八)がんじやう　同書四の卷越後上田の庄にて葬の時雲雷きたりて死人をとる事の條に長老のきぶん強精(ガンジヤウ)也と云々同卷下總の國にて死人棺より出て靈供の飯をつかみくひて又棺に入條に客僧人につげずしてよくこらへたりがんじやうなる人也と云々甲陽軍鑑九の上卷九の下卷などには強盛(ガンジヤウ)なる者と書たり

頭書 大閤記十八ノ十六丁ずがん調なる者をやとひ云々　節用集大全二ノ六十六丁ず強盛ガンジヤウ云々

(十九)かみ様　同書同卷宮根山火金の地藏にて火事を見る條に火金の地藏堂にてこれの上様(カミサマ)を見申候と云々同卷馬細橋に行還り渡らざる條に上様の御命大事也と云々此等みな女房に上様といへり

(廿)小兒の衣を夜外に曝を忌　同書同卷產女の由來の條に姑獲鳥夜隱飛し人の家に行て子をたづぬるに小兒の衣夜そとにおくときはその衣にふるゝゆゑに姑獲の血その衣に點ずる也これを見て姑獲のきたるしるしとする也姑獲は產婦死して變化なるゆゑにその身血におぼるゝか日本にも小兒の衣を夜外にほすことをいむは此儀なりと云々與清按に姑獲鳥の事今昔物語に見ゆ

(廿一)罷物所(ハブシヨ)　同書同卷四條の西光菴五三昧を廻る條に先東寺四塚に行て罷物所において念佛一二百へんかうしやうにとなふと云々此罷物所は葬所にて放所(ハブリドコロ)の義なるべし

(廿二)經帷子　同書同卷同條にみづからの死後の時をしりて行水し身をきよめ經かたびらを下にきてかの布のばうしをきてと云々

(廿三)鳥さし竿　同書同卷三條東洞院鳥屋末期に頭より雀の發生出る條に三條ひがしの洞院の東頬(ガハ)に鳥屋ありむかしよりひさしき鳥屋なり亭主常に黏鷸竿(トリサシザヲ)をもつて野山をかけりまはりもろ〳〵の色鳥をとり籠にみてゝ家にかへりおの〳〵べちの籠にわけておきてうると云々與清按に三十二番職人歌合に春はまたところも花の千本に見せおく棚の鳥の色々とあり

(廿四)こうざい者　同書同卷同條に八十あまりの老人ありこうざいの人也と云々與清按に口才の義也今俗にこうざいものといへり

(廿五)硯より龍ののぼる事 井大所　同書五の卷硯われ龍の子出て天上せし條に武藏の國の人かたりていはくむさしに金河の宿と云大所あり國の兵亂に滅却して今はほろびし也むかし金河全盛の時禪宗の寺あり僧數廿人ばかり沙渴あり寺の靈寶に硯一めんあり水つねにわき出てよきほどにしてありきざくなる硯といふてむかしよりひざうの靈寶なりある年の夏の頃方丈ひろくあけとほし書院のおし板にかの硯をおき前のしやうじをあけて長老侍者沙彌喝食等數人座敷に居てすゞむに午の時ばかりに人も近付ざるにかのすゞりわるゝおとして二ッにわれて一二分はなれのく也みな人たつて見れば硯の中ほど竪にわれて虫出たりくり虫のごとくにして二分ばかりなるが板の上にあり水もこぼれて板にあり沙彌喝食この虫をころさんとす長老制してころすべからずといふて扇のうへゝはねのせて庭の蓮池になげいるゝ也沙喝等庭におりて池にのぞみ見ればかのむし水中にて屈伸すれば見る〳〵大になる五寸になり一尺になりすでに三四尺になりていきほひおそろしきゆゑにみな逃去て座敷に居れば晴たる空にはかにくもり黑雲くだりて蓮池の水さわぐゆゑに長老僧衆みなにげたれば雷電庭におちてめいどうし黑雲寺中におほふ他鄉には寺やくると見て人みなはしりきたれば寺衆門外にありてきもをけしめいわくして雲雷おちたるゆゑをかたる數刻有て雲中に龍の頭見えかくれ天にのぼれば龍の手あし見えあるいは尾のさき時々見えてのぼりゆくはるかにあがりて見えず寺中雲晴たるゆゑに人みな寺にかへり方丈の庭を見れば石木も池水もみだれはて荒田をたがやすがごとし淤泥かきにつき座に□はう〳〵にちり正躰もなくなりて客殿のかきもやぶるゝ也やう〳〵とりしづまつてかの硯を見ればそのまゝあり以後は水出ずわれめそのまゝおきて虫の出たる跡を人に見する也古老の人のいはくおよそ龍子は海に千年山に千年里に千年三千年過て龍となりて天にあがるといひつたへたり知ぬ海底の石に龍子しせんにうまれて千年過てその石山にあること千年の後又里にある事千年の內に此石を硯にきる時龍子

その中興にあたる奇異ふしぎ也たとへば六條の道場歡喜光寺の靈寶箸木の名號のごとく也と云々與清按に近世天明の頃下谷池の端わたりにすめる人が竹のふしの間よりちひさきどちやうの出たるを不忍池に放やりしにやがて龍となりて空にのぼりぬといへり

（廿六）掛繪掛字　蜷川親元日日記文明十三年七月十日の條に大内殿より掛繪到來云々同十一日の條に大内殿より御目にかけらるゝ掛繪被ㇾ返ㇾ下候此内一かざり三幅一對中馬遠觀音脇圖次平山水被ㇾ召ㇾ置之云々同十六日の條に去十日大内殿より御目にかけらるゝ掛繪三幅一對被ㇾ召ㇾ置之殘廿九幅文藏主方へ被ㇾ渡遣候云々與清按に掛字掛繪の名桂川地藏記貞德文集などものにおほく見えたり頭書多門院日記一ノ卷天文八ノ九ノ十四の條に字一鋪進上了云々三才圖會宮室一ノ十七丁ォ齋ノ條ニ掛繪ヲ掛タル圖アリ可考桂川地藏記上十六丁ォに懸字者仁宗皇帝牧溪和尚王羲之虞世南云々

（廿七）美濃紙　同書文明十三年十月六日の條に爲ㇾ御草子いかにもあつき美濃紙可ㇾ有ㇾ進上ㇾ之旨土岐殿可ㇾ被ㇾ申之由以ㇾ鯛阿彌佛ㇾ被ㇾ仰出ㇾ了同八日の條云美濃紙事態以ㇾ飛脚ㇾ被仰ㇾ下之云々按に美濃紙の事台記空華集などに見ゆ頭書空華集七の卷廿三葉十四の卷卅葉寶石ノ七十六翰林五鳳集廿九

（廿八）柿餅　同書同年四月八日の條に佛地院より柿餅三籠まゐると云々頭書猶ノ草ノ子十五丁ウ俗說撰遺編殿中申次記卅二丁ウ

（廿九）貝おほひ　同書文明十三年七月十三日の條に御燈呂御進上上さまへ一女房二人貝おほひ河内作樣へ一唐人上野どの御作貴殿よりと云々按に貝おほひ西行の歌有頭書伊勢貞丈の二見浦にくは甲陽軍鑑二ノ八丁ォ

（卅）ふくだ　大藏卿行宗家集くだ物の歌に「もちひこそいたきやつなれみな人のふくたとのみもなつくとおもへは」此歌さきに擁書漫筆をあらはしゝ時引もらしたればこゝに書つく

（卅一）左ばらみ右ばらみ　魏書廿九方技傳華佗が條に佗視ㇾ脉曰胎已死矣使ㇾ人手摸知ㇾ所ㇾ在在ㇾ左則男在ㇾ右則女云々此語さきに擁書漫筆に引べかりけるものを脫たればこゝにしるす

（卅二）動搖則不ㇾ生ㇾ病五禽之戲　同書同條頭書後漢書にも廣陵吳普彭城樊阿皆從ㇾ佗學普依ㇾ準佗治多ㇾ所ㇾ全濟ㇾ佗語ㇾ普曰人體欲ㇾ得ㇾ勞動ㇾ但不ㇾ當ㇾ使ㇾ極耳動搖則穀氣得ㇾ消血脉流通病不ㇾ得ㇾ生譬猶ㇾ戶樞不ㇾ朽是也是以古之仙者爲ㇾ導引之事ㇾ熊頸鴟顧引ㇾ輓腰體動ㇾ諸關節ㇾ以求ㇾ難ㇾ老吾有ㇾ一術ㇾ名ㇾ五禽之戲ㇾ一曰虎二曰鹿三曰熊四曰猨五曰鳥亦以除ㇾ疾並利ㇾ蹄足ㇾ以

當ㇾ導引ㇾ體中不ㇾ快起作ㇾ一禽之戲ㇾ沾濡汗出因上著ㇾ粉身體輕便腹中欲ㇾ食普施ㇾ行之ㇾ年九十餘耳目聰明齒牙完堅云々

（卅三）叙夢　伴善男が夢を妻があしくかはぜし事　賴朝のふじの夢　同書同傳周宣が條に文帝問ㇾ宣曰吾夢殿屋兩瓦墮ㇾ地化爲ㇾ雙鴛鴦ㇾ此何謂也宣對曰後宮當有ㇾ暴死者ㇾ帝曰吾許ㇾ卿耳宣對曰夫夢者意耳苟以形ㇾ言便占ㇾ吉凶ㇾ言未ㇾ畢而黃門令ㇾ奏ㇾ宮人相殺ㇾ云々與清按に周禮に占夢の官あり御國にも夢合夢解の事蜻蛉日記源氏物語枕草子江談抄などものに見えたるがいとおほかり頭書蕪原宗古隨筆に三日夢なとかすとて夢を見て三日が内は人に語らぬ事也夢といふものは空なるものゆゑよくとけばよくなるあしく解けばあしくなる事也三日過ては能き事をあしくいひてもくるしからず夫故今の世にても三日過て人に噺す事にて云々小世繼廿三丁ォ

（卅四）墓相　同書同傳徐季龍が條に轝管轅なり隨ㇾ軍西行過ㇾ母丘儉墓下ㇾ倚ㇾ樹哀吟情神不ㇾ樂人問ㇾ其故ㇾ轝曰林木雖ㇾ茂無ㇾ形可ㇾ久碑誄雖ㇾ美無ㇾ後可ㇾ守玄武藏ㇾ頭蒼龍無ㇾ足白虎銜ㇾ尸朱雀悲哭四危以備法當滅族不ㇾ過ㇾ二載ㇾ其應至矣卒如ㇾ其言云々與清按に平氏太子傳に太子四十七歲冬十二月命ㇾ鴈科長墓處覽ㇾ造ㇾ墓者ㇾ直入ㇾ墓內ㇾ四望謂ㇾ左右ㇾ云此處必斷彼處必切欲ㇾ令ㇾ應ㇾ絕ㇾ子孫之後ㇾ墓工隨ㇾ命可ㇾ絕者絕可ㇾ切者切云々徒然草に聖德太子の御墓をかねてつかせ給ひける時もこゝをきれかしこをたて子孫あらせじと思ふ也と侍りけるとかや云々吾妻鏡脫漏に珍譽法眼申云法華堂前御地不ㇾ可ㇾ然之處也西方岳上安ㇾ右幕下御廟ㇾ其親墓高而居ㇾ下子孫無ㇾ之之由見ㇾ本文ㇾ幕下御子孫不ㇾ御座ㇾ急令ㇾ符合ㇾ歟云々とも見ゆ

（卅五）泥鰌の訓義　今俗に泥鰌を「ドヂヤウ」といへり與清按にこは泥津魚（ドロヅ）の義なるべしされば假名には「ドヅヲ」または「ドヂヲ」など書べき也頭書增鏡抄一ノ四十九丁左五十九段魚類字の條に鰌ドジヤウ土長同云々運步色葉集ノ魚名部に土挑ドジヤウ文蛮同歟同云々增補多識篇四ノ廿八丁右魚類部に鱧魚和名土知也字異名泥鰌俗（ドヂヤウ）名鰌魚爾雅云々

（卅六）呼子鳥　與清曰呼子鳥を賀茂翁の說にかつほう鳥の事といはしれはびがごと也藻鹽草に陸奥の外の濱なる呼子鳥なくなる聲はうとうやすかたとよみて善知鳥（ウトウ）にもいひたれば一種の鳥をさす名にはあらず何にても音になく鳥をば呼子鳥といふべき也またかほ鳥をかつほう鳥のよしにいはれしもたがへりかつほうどりはかつこうともよびて一種の鳥の名也容鳥（カホドリ）は何鳥にもあれ貌や音のうつくしきによれる名也

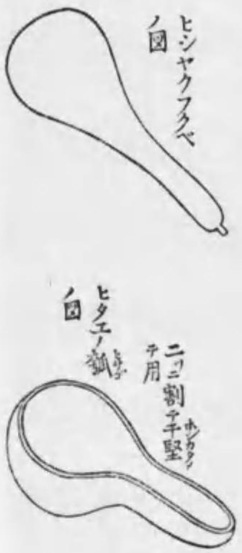
うつくしき事をかほといふよしは已に擁書漫筆にいへり 頭書 エボドリとて春夏の夕或は月夜などになくとりありエボ〳〵となく近比江戸の北郊日暮里村にてとりし事有黒きとりにて羽をのぶれば三尺餘も有といへりエボハヨナの通言なれどヨナ小島はこれなるべし

十八公舍筆記卷之四

松屋　高田與清文儒稿

(一)混柄(ヒタエ)の瓠(ヒサゴ)并混柄(ヒタエ)の鎚(ワヅチ)　更科日記にひたえのひさごとあるものは今俗にいふヒシャクフクベのことも也これを二ッに割て水酌料につかふにいと便よし澁柿の文覺上人消息に響の音に應ずると申たとへのごとく混柄の鎚にて有べく候とも見ゆさてひたえとは親(タヒ)と附(ワヒ)たる柄の事にて延喜式廿四に比太爲延などみえしもおなじ義也ひたえの鎚といふも共柄の鐵槌なるべし

夕皃ノ種類ニテカヽル
覩ノ實ヲ結ブ



(二)志ら檮(カシ)　古歌に志らかしとよめるは今の大葉の檮の事にて材の質白色なるがゆゑ也そは日本紀景行紀御歌に幣遇利(ヘグリ)能夜摩能志羅伽之(ヤマノシラカシガ)餓延塢(エヲ)とよませたまひしを古事記には久麻加志ともあるにて白檮熊檮同物なるを志るべしさて熊檮は葉廣熊檮ともいひて熊は大なる貌にいふ語也今世に白檮とよぶものは葉大きく赤檮とよぶものは葉小ければ理(コトワリ)よくきこえたり赤檮も木の質赤さがゆゑの名也

(三)ヒヤウヒヤク臺　小竹茂仲が談に下總國銚子の海濱にて一夜のからに風の沙を吹ためて小山の形を成せるをヒヤウヒヤク臺とよぶ此臺夕の風に成かと見れば朝の風に吹拂はれていとはかなきもの也といへり按にヒヤウヒヤクは漂泊の義なるべし

(四)役者海老　齋藤謙が談に陸奥坪の碑の近きわたりに市川村といふ所ありそこの浦にて捕海老を役者鍛とよべりこは芝居役者元祖市川鍛藏が生れし里なり鍛藏といふ名は扮里(フルサト)が鍛の名所なれば名づけたるなるに今はかへりて鍛を役者海老とよべりといへり

(五)猫をなやませし童　おなじ人の談に靈巖島にすめりし頃隣の家に伊豆の新島より召おける童ありけるが垣下に猫の晝寐せしを見て息を吹引せるにやがて猫くるひ出てめぐりなどするを見きようじけり謙あやしみてそはなにぞのわざにかとゝひければ童いらへいふやうこは猫に限れる事にあらず何にても生類の寐て息を外へ吐とき此方の息を吸彼が息を引時此方の息を吐やりてかく息を合すると五度に及時は必狂出る也五度に滿ざらん内彼が走去などしたらんにはせんすべなし五度息を合たらんには狂廻とうつなしかくて息を合する間はいつまでもこゑを立ずしておなじさまに狂居れど此方の息を止むればどみにもとのごとくなりて走行なりといへりとなん今按に狐狸などの人をうなすといふもかゝるわざするにや

(六)蜻蛉を捕術　おなじ新島の童が談に蜻蛉を捕へんには彼がとまり居たる所を目當に此方の指してそのめぐりを輪廻(ワグリ)らすまねをする也一度輪廻らしおほせたらんには蜻蛉飛去ことを得ずそれをやう〳〵にめぐらしせばめもて行てつひに蜻蛉がもとまでめぐらしつむればやすく事もなくとらへらるゝ也といへり是も□がきゝたもちて語れる也

(七)スッホンといふ名義 井龜の鳴 鼈をスッホンとよぶはその啼音によれる名なるべし常の龜の啼は鼓の音のごとくホン〳〵ときこゆるよし世人の知所也スッホンもそのころのスホン〳〵ときこゆるをもておほせたらん事うつなし新撰六帖に爲家卿の「河こしのをちの田中の夕やみに何そときけは龜そなくなる」とよまれしは鼈の事にはあらず鼈は河にのみすみて田中などに居ものならねば也

(八)オイラン松位大夫などの義 新吉原の遊女にオイランといふ號あるはもと新造禿などがおいらの所のあねさんといふべきをオイラントコ〳〵などいひさて略てオイラン〳〵といひならへりし也さるを今は他の人よりもオイランとよびて遊女の美稱とすまた字に松位と書くは大夫といふべきを秦の始皇が松を大夫に封せしといへる故事によりて松位とは書る也さて遊女を大夫といふはもと白拍子のともがらにてみづからうたまひするがゆゑに淨瑠璃大夫になすらへてよべる也淨瑠璃大夫の號は院中にめされて叡聞ありし時かりに五位を賜はりしに起れり

(九)本居氏が神道 聖道布而異端廢釋敎行而外道滅

魚書欺伏二秦民一黃巾詐化二漢俗一本居氏之復古之神道振二于世一則遂難レ欲レ無二廢滅之道伏化之民一得焉矣乎

(十)おぎの羽がき 一とせ日光山よりのかへさに下野藥師寺の舊跡下總の結城堺の津など經て夜舟にて江戸にかへりしとあり三月のするの日かげ申の時ばかりにや堺もほど近うなりし所の野中にて鴿よりもちひさく見ゆる色しろき鳥の一町ばかりの間にていみじう羽音して舞あがり舞おつるがあり馬の口取にあれはなぞとたづねしに田鳥といひて曉またには日の入ころなどにあまたゝびまひあがりおつる鳥也曉のほどにはとにおほかりといへりこれにて百羽がきとよみけん古歌のさまもあきらかにおもひ得られぬ此鳥をむさし相摸などの國にては海つばめとよべりとなんまた武藏深谷人の談に田鳥は水中に群居て色淺黑く音あはれに鳴ものなりといへりさては田鳥にも二種ありて余がまのあたり見しは百羽がきとよみし方也また万葉にものこひしきのなくころなどよみたるは水中にむれ居てあはれになくといへる方なるべし

(十一)神の濟 井神通河 公式令に北陸道神濟以北と

あるを義解に謂二越中與一レ越後一界河一也と注せられし神濟は今世に神通河とよびてブラリ火といふ怪の出る所也神濟を吳音にジンズイとよべりしを後にジンズウと訛て文字をも神通と書ひがめたる也

(十二)みそうづ 散木集隱題の部に田上に侍りけるころこもりがいねといふ物をもちひにしてとり出て侍りけるをまたの日みそうづにして侍るを見てよめる「ほうしこのいねと見しまにもちぬれはみそうづまでも成にける哉」と見えたるみそうづは增水の事也撮壤集食物類部に曾水をみそうづとよめるにて古るべしみそうづは砂石集にも見え增水は節用集蓮歩色葉集などに出たりみそうづは味噌水の義なるべし漿をコンヅといふも似たる詞づかひ也此考は荻野長が問に答し也頭書尺素往來七日のみそうづ

(十三)盧扁 醫家のいひならはしに盧扁といふ語ありこは列子力命篇に見えたる盧氏と史記の扁鵲とが事なるべし醫說に矯氏兪氏盧氏並周之良醫也とありまた多紀氏の醫賸上卷扁鵲墓の條にも諸書を引て盧醫の事をいへりこれも荻野長が問にこたへし說也

(十四)すげなう 井くさ〳〵としたと云俗語 源氏桐

壺の卷にすげなうそねみ給ひしがと見え蜻蛉日記下卷に「打そはみ君ひとり見よまろ小すけまろは人すけなしといふ也」などその外物語書にいとおほかる詞也按にすげなうは進氣無の義なるべし新撰字鏡連字部に嘻囉心中不二悅樂一貟坐歎貟須加奈加留又佐久佐久之とあり此すがなかるといふ詞の意よく物語にかなへり人すげなきは人の進氣無て愛せざる也又佐久佐久之は今の俗語にくさ〳〵としたなどいふにおなじ後按によすがなくの略也八の卷にいへり

(十五)いんぢ 或人の談に上野國渡瀨川を境て石投といふ戲をする毎年の正月のころ川の兩岸に少壯あまた陣をなしていみじうのゝしりさわぐとなむこれいにしへの石擊の遺風なるべしこは端午の遊戲のよしなれど今も熱田の社にては正月十五日に此式あり弁内侍日記正月十五日の條にまことやけふは人うつ日にかしとも見ゆそも〳〵いんぢの事は平家物語盛衰記義經記世諺問答尺素往來增山井甕纒輪日次紀事雍州府志滑稽雜談北條五代記鹽尻和訓栞などにいでて東國通鑑五十一の卷高麗辛禑六年の條に五月禑欲レ觀二石戰戲一知申事李在性諫曰此非二上所一レ當レ觀禑不

レ悦使ニ小竪一殿ニ存性一存性趨出槻取ニ彈丸一射レ之國俗於ニ端午ノ時一市井無賴之徒群ニ聚通衢一分ニ左右一隊一手ニ瓦礫一相擊或雜以ニ短梃一以決ニ勝負一謂ニ之石戰一ともいふはべし口の轉語也源平盛衰記にあまた所出し中に十の卷には壓口と書たり

（十六）三國同日之談　東國通鑑六の卷に先道解語ニ金春秋一云子亦嘗聞ニ龜兎說一乎昔東海龍女病レ心醫言得ニ兎肝一則可レ療也然海中無レ兎龍王患レ之有ニ一龜一曰吾能得レ之遂登レ陸見レ兎言海中有ニ一島一清川白石茂林佳果寒暑不レ能レ到鷹隼不レ能レ侵爾若得レ至可ニ以安居無ニ患因負レ兎游行二三里顧謂レ兎曰今龍女病須ニ兎肝爲一レ藥故不レ憚レ勞負レ汝來耳兎曰噫吾神明之後能出ニ五藏一洗而納レ之日者小覺ニ心煩一遂出レ肝洗レ之暫置ニ巖石之底一聞ニ爾甘言一徑來肝尙在レ彼若歸取レ肝汝得レ所レ求吾雖レ無レ肝尙活豈不ニ兩相宜一哉龜信レ之乃還纔上レ岸兎脫入ニ草中一謂レ龜曰愚哉汝也豈有ニ無レ肝而生者一乎龜憫然而去と見えしは古事記上卷の稻羽之素兎が海和邇を欺しと舊本今昔物語五の卷第廿五語の龜が猿に謀られしとに相似たる三國同日の談也

（十七）べそをつくりて泣　俗語にべそをつくりて泣

物の澤山なるとにもいへり鳥追詞にくろごめをがしやうむしやうたきと見ゆ○ひよつといふは蜻蛉日記中卷にこゝにある人ひやうとより聞てとあり堀川題狂歌百首にかひひよくとともよめり○某づらといふは蜻蛉日記下卷にあなかしかまし子づらぞかしと有○人間の皮をかぶつた畜生は弁内侍日記上卷に出人面獸心は梁書（卷五十列傳第四十四文學下）劉峻傳○つゐしやう詞は大鏡四の卷に前の帥殿のみぞつゐしやうふかきおい狐かなと有○べつかつかう大鏡中卷にたかんなのかはをおよびごとにいれてめかつかうしてちごをおどせばかほをあかめてゆゝしうおぢたると見ゆ○いちはりものは大鏡中卷に心いちにておはせし殿にてと有○ひづらひくは大鏡六の卷にあれはまはじとひづらひきと見えたり○帶紐ときてふす大鏡七の卷○づぶといふ詞は大鏡七の卷にいづれの御ぞもほどへぬれば色どものづぶとわすれ侍りにけるとと有○外法あたま增鏡五の卷○やれ〳〵と云詞は砂石集一の卷十四葉にやう〳〵と有○血みどりは砂石集一の卷廿八葉にチミドロ著聞集十六の卷卅葉にも○おゝといらへの詞は古今著聞集八の卷廿八葉に人のめす御いらへに男はよと申女はおと申也と云々西宮記北山抄江家次第などにも唯とまうすといふ事有ヲヽと書は誤也オヽと書べきよし假字拾要の說也

（廿一）辻捕　道の辻にて女を捕を辻捕といへり今の俗にまはりをとるなどいふに似たるとなるべし物ぐさ太郎の草紙にさても〳〵これほどのた九らたはなしと思ひて又いふやうはその義ならばつじどりをせよといふつじどりとは何ごとぞやつじどりとはをのこをもつれずこしくるまにものらぬ女房のみめよきが目にかゝるをとると天下の御ゆるしにて有なりと云々又やどのをとこのをしへてつじどりをせよとてさするよと思ひと云々北條五代記六の卷夔男とやもめ女うつたへの段に道路の辻において女を捕事御家人においては百ケ日出仕をやむべし郎從以下に至ては右大將家の御時の例にまかせて片かたのびんはつを剃除すべしと云々貞永式目密ニ懷他人妻一罪科の條に於ニ道路辻一捕レ女事於ニ御家人一者百箇日之間可レ止ニ出仕一至ニ郎從以下一者任ニ右大將家御時之例一可レ剃ニ除片方之鬢髮一也など見ゆ今の世にはきこえぬ名也

（廿二）天皇の諡號　天皇の諡號は釋日本紀九の卷に私記曰師說神武等諡名者淡海御船奉レ勅撰也と見えて賀茂翁本居宣長なども此說をうべなひしにわが友蒲生秀實が山陵志に淡海公の撰上られしにて和銅五年より養老三年まで八年が間の事ならんよし親長日記令義解など引ていへるは具眼といふべし通證にも親長日記を引たれど令義解をばもらしたりき

（廿三）田地の字　并某名名田　朝野群載七の卷に大和國山邊郡字上庄田地事と見ゆ今も田地に字某といふことはやくよりありし也また名田といふは俗に草分などいへるにおなじくその處に住てその地名を苗字に名のるがゆゑ也吾妻鏡などに某鄕某名とあるは名字掛の地の名也此名をあまたもたるを大名といひしに今は諸侯の稱にぞなりたるこは安齋隨筆四季草などを考て知べし

（廿四）樣々のつくり物　散木集に瓜にてつくれる牛あり半陶藁に端午の艾虎あり枕草子に雪佛あり蜻蛉日記に紙にてつくれる掃晴娘あり吾妻鏡に草鹿あり日本紀に菊靈あり內裏式政事要略延喜式に假面あり延喜式に馬形金人像銀人像鐵偶人木偶人あり貞觀儀式にも鐵偶人木偶人あり

（廿五）日本國行程　續敎訓抄廿二の卷に國六十六郡百八十一東西八百七十里南北五百卅七里或說東西三萬六千二百町民數四十一億七十二萬九千八百七十六人內男十九億七十三萬八千六百卅四人女廿三億卅一萬五千六百八十八人云々こは寶石類書二の卷地理部に引たる也寶石類書は從四位上若狹守紀宗直の輯也宗直姓は高橋號を圖南といへり制度通に考もらしたりき　張書佛鬼軍拾芥抄國郡部

（廿六）八幡大菩薩託宣　融通念佛緣起畫詞上卷に八幡大菩薩御託宣云法華即我身我亦極樂主汝讀二嘆於我一我來迎二於汝一同御歌云「極樂へゆかんとおもふ心にて南無阿彌陀佛といふそ三心」

（廿七）武藏國與野鄕　井番帳燒繪　同下卷に云去正嘉のころ疫癘おこりて人おほく病死にけり其時武藏國與野鄕に一人の名主あり年來念佛信心の人にて世間の疫癘をのがれんがために家うちの老少をすゝめて明日より別時念佛をはじむべきにて番帳を書て道場におきけりその夜の夢に異形の者どもその數むらがりて行けるが此家の門のうちへいらんとしけるをあるじ出むかひて云是は家中の男女心をひとつにして別時念佛を始べきにて結番してすでに彼番帳を佛前におきたり亂入する事なかれといふこゝに疫神のいはく汝がいふこととまことにしかり然ば番帳を披見すべしといふ主すなはち是を見するに疫神隨喜せる氣色にて結衆の名字の下ごとに判形を加てけりいはく我一人の息女あり他所にありといへども彼名字を書て此念佛にいれんとおもふ疫神これをゆるさずと見て夢さめぬ其夜あけて番帳を見れば實に名字の下ごとに判形ありいろはの字を書損せるがごとし其色燒繪をしたるに似たり夢にたがへず家內の老少いささかもつゝがなきにかの他所にある息女は此病にて終にけり此事其聞ありて彼番帳をば將軍家へめされてけり是併祇園部類眷屬等もみな融通念佛の結衆にて御坐ば彼異類異形と申も別のものにあらず皆祇園部類眷屬どもなれば元より此念佛衆に入たる疫神也眞實に深志を致して道場を莊嚴して番帳をくり明日より別時念佛を始べき信心の誠色にあらはれければ行疫神も番帳に判形を加へ隨喜して過にけり應永廿一年卯月八日書レ之烏丸殿道孝花押有　與清按に與野鄕今も足立郡大宮宿の西にあり日光例幣使道の驛也燒繪は古今著聞集今物語などに見ゆ　張書番帳かしら甲陽軍鑑十上十五丁ウ六條一遍聖繪十卷十四丁ウに時衆も番帳には俗衆四十八人尼衆四十八人其外の四部の衆は數をしらず云々

（廿八）朝鮮用二本邦之里數一　經國大典道路用二日本數一其一准二我國十里一計レ田用二日本町段一其法以二中人平步兩足相距一爲二一步一六十五步爲二一段一十段爲二一町一一段准二我五十負一云々實積類書二の卷地理部に引たり

（廿九）公方樣　康富記寶德二年七月五日是日室町殿著二直衣一依二御參內一也于レ時櫃大納言從二位征夷大將軍　公方樣御直衣也令レ騙二絲毛車一給

（卅）大名　吾妻鏡文治五年十月廿八日景時申曰安藝國大名葉山介宗賴依二伊澤五郎催一爲二奧州御下向御共一

（卅一）諸司代　庭訓往來八月に菅頓執事奉行人檢斷所司代賦訴狀

（卅二）政所　吾妻鏡建久二年正月十五日甲子被レ行二政所吉書始一云々同六　四十七丁ウ上政所云々　張書宇治殿高野詣紀行二丁オに政所船三艘云々仰二淀山崎ノ刀禰政所等一令レ造二板屋形一云々政所はマツリゴト所にて万事を取扱元ヲメ役所也

（卅三）遙授官　續日本後紀承和七年五月丙子中略勅內外之吏無祿之人夙夜服レ事身乏二衣食一因レ茲或兼二牧

宰ニ猶直ニ本任ニ或拜ニ外吏ニ留ニ身京華ニ皆將レ潤以ニ俸料ニ令レ得ニ代耕ニ而諸國背ニ忘舊貫ニ便附ニ遙授人ニ諸使遂使レ公文惑ニ於失錯ニ貢物煩ニ於麁惡ニ非ニ唯一身兩營ニ復失レ辨ニ成雜務ニ宜レ下ニ知五畿內七道諸國ニ播ニ殖黍稷稻麥大小豆及胡麻等類ヲ爲レ救ニ民急ニ也 頭書遙授頓渠三氏格普書地理志上廿九丁遙領同下十七丁オに二處見ユ

(卅四)秩滿 江次第除目 大隅國掾正六位上藤原朝臣篤孝 前大皇大后宮永祚二年御給伊豫掾越智隆盛不給任符秩滿代 云々增韻云秩職也官也云々

(卅五)揚名掾揚名ヲ倉に積 權記長保四年九月廿四日置始實奉申任陸奥掾 故院御給揚名 云々空穗祭の使廿九丁オ に裝飾をし從者をつかふ事のいみじう形身のざえのすぐれたるぞえうなきや內は空しとてその揚名をやは倉には積んとすや云々又卅一丁ウ 揚名ざえはありがたしやなどこれかれ打笑ふを云々

(卅六)青女房青侍 明月記元久元年十二月二日押小路女房家云二條殿青女房又有ニ御子之名ニ予付歟閣梨一七日事若可ニ沙汰ニ歟由觸ニ送押小路ニ 今三人欠故也 云々吾妻鏡一の卷 四十三葉 にも青女と見ゆ 頭書青ハ「ナマ」ト云心也盛衰記卅三丁青與サメテトアリ青侍ノ青モオナジ幼クモナク老モセヌナマ〳〵ノ躰ヲ云也昔傳拾要三ノ九丁オ宇治拾遺五ウ八丁ナマ女房ノ青侍百練抄十三丁廿三ウ

(卅七)御巫猿女 延喜內藏式御巫六月神今食裝束料白紗一疋赤紫絹三丈深紫絹三丈紫絲二絢進內侍司 十二月亦同 康富記永享二年十一月十八日乙卯是日大嘗祭也次中臣祭主三位清忠仰ニ忌部親雄ニ前行次御巫 小女總角 猿女 亦小女歟 等前行

(卅八)北政所 玉海治承三年十二月十日兵部卿入道信達來數刻談語 中略 御一家習大臣之後 雖ニ攝籙ニ以前ニ以ニ室家ニ稱ニ北政所ニ延久元永例也補ニ家司ニ供ニ節供ニ云々○後成恩寺殿下記御當職之時被ニ迎申ニ候ヲ必北政所ト申候歟御職以後者申候歟承度候宣下ナド候歟雖ニ當職以前ニ有ニ娉婚之禮ニ者可レ稱ニ北政所ニ候延久元永等例如レ然候近代大略攝籙之後始儀式有レ之補ニ家司ニ供ニ節供ニ候不レ及ニ宣下沙汰ニ也大中納言女ヲモ北政所ト申候歟必非ニ大臣女ニ者不レ可レ申候歟六條攝政後京極攝政等例女然歟於レ有ニ娉禮ニ者不レ背ニ道理ニ歟近代不ニ婚禮之沙汰ニ以ニ大中納言ニ如レ被レ稱ニ北政所ニ歟不レ可レ然乎

(卅九)大北政所 增かゝみ村しぐれの卷に元德元年にもなりぬることしいかなるにかしはぶきやみはやりて人おほくうせ給ふ中に伏見院の御母玄輝門院前坊

の御母代の永喜門院近衛大北政所などやんごとなきかぎりうちつゞきかくれ給ひぬればと云々

(四十)北の方 小右記寬弘九年六月廿九日左大臣殿 御堂 大北方 一條左府姬 云々後拾遺集に右大臣北方云々峴江入楚 きり つぼ 母北のかた 河羽々トアリ更衣の母也 河後漢書曰陽以ニ傳旋ニ爲レ德陰以ニ不專ニ爲レ德男ハ南女ハ北に住べき謂也陰陽につかさどるゆゑ也仍貴賤ともに妻室を北方と號スルなり后妃を椒房と號ルモ北むきに住たまふゆゑ也云々

(四十一)南の方 永享九年十月朔日行幸日記に後花園院御宇行ニ幸義敎將軍亭ニ其後室町殿御直衣被レ改內々有ニ御參ニ諸司の御所之西の於ニ御六間ニ有ニ一獻ニ嶋御盃の臺あり破籠折り物など常の御所被レ置レ之女房たちみなき袴也伏見殿の南の御方參らせ給に御衣はかま也春日局中納言局みなひきをりにて御供にさふらふ

(四十二)地子 延喜大政官式凡諸國例進地子仰ニ所司ニ每年七月以前申ニ見進未進之數ニ隨即下レ符令レ催ニ進之ニ同大學式 上略 徐博士十五文先生十文後生五文用ニ越後國槻田五十町地子物ニ充レ之江次第定受領功課事の條にも見ゆ

(四十三)德政 玉海嘉應二年十二月廿七日 上略 赤氣事有ニ諸道勘文ニ 人々申云施ニ德政ニ可レ被レ攘ニ其災ニ者上卿左府云々又有ニ軒廊御卜ニ百練抄久安元年四月五日吾妻鏡文治元年九月四日宣胤卿記永正元年九月十二日 上略 中納言退出相語云於ニ禁中ニ者搆不レ可レ苦人々指ニ小屋ニ運ニ置雜物ニ京都之程言語道斷也土一揆蜂起之間德政被ニ許容ニ土藏已出ニ質物ニ云々康富記享德三年十二月十八日乙未晴後聞ニ德政大法ニ壁書內去十月廿九日條目三ヶ條被レ改レ之今日壁書被レ押ニ改之ニ云々

(四十四)公廨出擧本穎 江家次第 定受領功課事 本穎條 本穎國司貯積之惣名也正稅公廨雜稻出擧是也諸國置ニ此三色ニ稻見ニ主稅式ニ又レ本謂ニ之稻ニ切レ穗謂ニ之穎ニ出ニ擧十束稻ニ加ニ利稻三束ニ春時出擧秋收ニ納之ニ 頭書 公廨ノ事制度通五

(四十五)私佃 日本紀略大同二年秋七月己酉畿內國司聽ニ私佃ニ守十町介八町掾六町目四町史生二町云々

(四十六)隱首括出 民部式下云凡隱首括出者畿內十月一日外國十一月一日主計寮載ニ功過帳ニ申レ省省押署進レ官得度除帳者移ニ主悅寮ニ不レ申レ省

(四十七)隱田 康富記應永八年九月廿三日 上略 次丹波當司領內黑田里 中略 畠田相論事此間連々執替 中略 今日畠

之段無二子細一之由折紙予書下了次五隱田タウハ其時又可二明申一之由請文云々

(四十八)贓物　江談抄上畧公任卿云然者雖レ致二放火殺害一不レ可レ加二禁遏一歟他罪科者皆加二刑罰一於レ著二美服一條上者有二指證文一歟齊信卿答云贓物所二出來一物染摺成文衣袴等件日揭焉之故所レ令二著用一歟四條大納言頗被二甘心一云々

(四十九)公家の家領をおとす　南方記傳延元二年四月五日關白左大臣經忠公吉野に來り給ふ同十六日經忠の弟基嗣北朝の關白たり尊氏細川和氏におほせて公家の家領をおとす頒書公家ノ字而文選四十二ノ十九オ

(五十)女の采地　女の封戸は續紀天平寶字四年十二月戊申に見え知行は御湯殿記天正十六年三月十六日の條に見ゆ

十八公舍筆記卷之五

松屋　高田與清文儒稿

(一)ダイラボッチの足跡　武藏相摸などの國人が常にダイラボッチとて形大なる鬼神のやうにいひあざむものあり相摸野の中に大沼といふ沼ありそれはダイラボッチが富士の山を脊負はんとせし時足をふみしあと也といひまた此原に藤のたえてなきはそのをり脊負し縄のきれたれば藤をもとめけれどもなかりしゆゑの因緣也といひつたへたり笈埃隨筆にも大多法師が足跡と云ふ事を記したり與清按に台記久安二年九月廿七日の條に此日詣二石山寺一云々見二閼伽井一乘惠曰道場法師以レ爪掻二出此水一又有二道場法師屐跡一井一二石と見え本朝文粹日本靈異記舊本今昔物語などにも道場法師が怪力のよしあればそのころことゝ〳〵しく世にいひつたへけん諺が今になほ田舍にのこれるなるべし

(二)左遷の時七種の逆事　職原私記に納言已上云々大中納言以下ニイタルマデ左遷セラルヽトキ七種ノ逆事アリ一ニ其人ノ居ルタヽミヲ逆サマニシク二ニ飯左ザマニスユル三ツニ折箸ヲスユル四ニ咒狀書硯水ニ其人ノ影ヲウツシテ提子ノ口ヨリツグ五ニコノシロノスシヲ杉ノ俎ノ杉ノマナハシニテ切ル六獨盃ヲ用フ七ニ車ニ倒ニノスル如レ是皆逆ニスル也

(三)下手人　玉海承安二年八月十三日の條云或云依二此事一自二公家一山僧等被レ召二下手一云々同文治二年五月廿三日の條云仰云如レ聞者理非難二分別一事歟然而委尋二事之濫觴一以二下手之重者一可レ處レ科歟且又可レ奏二事由一難二自由一之故也云々左經記長元四年正月廿八日の條云大和守賴親郎等散位宣孝朝臣依レ打二彼國住僧道覺之下手一公家有レ召仍國司召進今日撿非違使等向二賴親宅一請二宣孝一衣冠乘馬放免者二人取二馬口一二人抑レ鐘云持二到左衛門弓場一令レ候云々吾妻鏡建久二年四月の條にも見ゆ

(四)京中兵仗停止　百練抄保元元年十二月十二日制二止京中兵仗一云々按に近世江戸にても町人の武藝を習ことを禁止せられし事あり十年計むかの事也

(五)禁色をたゞす　新古今雜下に延喜の御時女藏人內匠白馬節會見はべりけるに車より紅の衣を出したりけるを撿非違使のたゞさんとしければいひつかはしける女藏人內匠「大空にてる日の色をいさめても天の下にはたれかすむへき」かくいへりければたゞさずなりにけり

(六)奴原男原法師原殿原　井メラ　奴原殿原男原法師原などいふ原は「とも」といふにおなじくて朋黨の義也難字記一の卷月部に朋(ホウ)を「トモ」とも「ハラ」とも「カタチ」とも訓たり是にて知べしまた盛衰記などに「メラ」といふ詞も見ゆこれも「バラ」の通音にて通義也亦按に履中紀元年の條に安曇目とあり通證に見林曰後世罵レ人曰レ目蓋起二于此一云々これによれば部(ベ)の通音にて「ハラ」も「メラ」も部(ベ)等の義也けり部(ベ)は群(ムレ)といふに同じ

(七)奈木奈多　外記日記十三の卷久安二年三月九日戊寅の條に夜半大雨雷鳴霹靂前齋院官子內親王(綾小路北東洞院東)居宅爲二雷火一燒失內親王傍親源經光被二震死一畢經光日來依二風病一寢臥于レ時雷聲殷々經光驚執二兵杖一(俗號こゝろの奈木奈多)爰如二流星一物穿二屋上一飛來經光忽以顚臥其腹二尺計割畢于レ時經光妻在レ側被レ衣臥レ地云々經光者前下野守源明國男也雖二累葉武士一雷公不レ物レ之云々

(八)武藏の益形山　宗長手記上卷に早雲の陣益形著陣敵退くやと見えきおひすかひ一夜野陣云々此外形は今も橘樹郡登戸の南の方にあり稻毛三郎が古城地といひ傳へて光福寺といふ寺のうしろに稻毛三郎が墓印の五輪もあり景地にて櫻樹おほし

(九)豆腐の田樂　井玉味噌　宗長手記上卷に越年は薪酬恩菴傍捨蜜下爐邊六七人あつまりて田樂の味噌のついで俳諧たび〳〵に「あすの汁玉かきりなるあらめかな」云々同下卷に爐邊ひざをならべ田樂どうふの盃たびかさなりて云々 頭書れんがくとも有禮ノ部に見貞丈雜記六ノ廿二丁ウ梅花無盡藏三上ノ十七丁オ豆腐田樂アリ別本ノ三上ノ五十二丁オ

(十)ぼう〳〵眉　同上卷廿三丁オに「霞こまかに引廻しけり」と云附句に「うつくしなたゞ丸貞(ガホ)のぼゞほまゆ」と有 頭書海東諸國記ノ國俗ノ條に婦人抜二其眉一而黛二其額一云云大女鳳御名之事類從四百十四ノ廿二丁オにぼうまゆのほどほんのまゆのけをしたばかりとる也

(十一)寸切　同書上卷に神の代よりもすきのすんぎりと有是は茶の寸切にて今俗に青切といふがごとし青切は筒茶碗の口に青き筋ある所をいふ也

(十二)十團子　井めらう　同書上卷に宇津の山に雨やどり此茶屋むかしよりの名物十だんごといふ一抄子に十づゝかならすめらうなどにすくはせ興じてと云云按にめらうは女等を引ていへる也 頭書新撰狂歌集羇旅部にうつのやまにてだんごといふものかひけるとて一つそへよといへどもそへざりければ「駿河なるうつの山べの十だんごゆめにも一つそへぬなりけり」

(十三)年わすれ　同書上卷に折にあひ侍ればとしわすれの一折張行と云々

(十四)物賣聲　同書上卷に市女あき人さりあへずな候いも候なすび候白瓜候ところ〴〵に門をとほれどとあり物賣呼ごゑは和泉式部艸子文正草子などにも見ゆ

(十五)鷹皮紙　同上卷に豐原統秋が宗長へおくりし文に御約束之鷹皮之紙上給候雖レ不レ始二于今一儀候上御芳情之至難レ盡二紙面一候畏入候と有

(十六)蚊の大將軍　井紙帳　同下卷に園の竹に陣ごる蚊ども大なるちひさきもおほく打出家中にみち〳〵蚊の大將軍勢時の聲たゞ雷のごとし蚊火もたいていかにふすぶれどもおもてもふらずこみ入古紙帳の城はらふかたなく夜もすがら團扇の粉骨もかひなし 頭書紙帳半紙藻四ノ十二丁オ鷹筑波一ノ卅五丁ウ同三ノ十三丁ウ新撰狂歌集上ノ十四丁オ同十四丁ウ

(十七)手洗所の門水　井ぬれ椽　同書下卷に竹の椽ひかし南ぬれ椽にして手洗所の水門石四五たて梅に椿

篠つくしうるそへすな入させてすゞしげにぞありしと云々是今も手水鉢の下に石などたてゝ搆ること也

(十八)福は内鬼は外　同書下卷に廿五日節分の夜大豆うつを聞て「福は内へいり豆の今夜もてなしをひろひ拾ひや鬼は出らん」と云々大豆うつ事は世諺問答に見ゆ

(十九)厄おとしに錢を乞食にとらす　同書下卷に京には役おとしとて年の數錢をつゝみて乞食の夜行におとしてとらするとをおもひやりて「かそふれは我八十の雜事錢やくとていかゝおとしやるへき」

(廿)物の名をよぶに某もじと云ふ詞　同書下卷にめしつかふもの油斷して雜事錢などゝられて事かくるまゝに「こゝもとの不辨をいへは雜事錢こよひぬもしにともしせらるゝ」云々是はぬす人をぬもじといひとられしをともじせらるゝといひし也今も御新造を御しんもじおとゝ樣を御ともじ樣おかゝ樣を御かもじ樣氣の毒を御きもじはづかしきを御はもじなどあまたいへり

(廿一)餠花　同書下卷に正月に童の餠花つけたるやうにと云々

(廿二)どろばうどらものごうらく　「ドラモノ」は蕩者也放蕩にてとりしまらぬよしの名也「ドウラク」も「トロクル」の訛語也「ドロバウ」も蕩坊也坊はもと法師をいふより轉りてたゞの人にも某坊などいへり「ドウロク」神といふも放蕩神の心也 頭書世事百談三ノ似弊キ物ナド食フ者チバ度羅人トハ云事也ケリ云々

(廿三)昨日一昨日一昨々日今日明日明後日明々後日明々々後日などの訓義　昨日を「キノフ」といふは「サキノヒ」なり「さ」を省て「ひ」を「ふ」に通はせし也一昨日を「ヲトヽヒ」といふは遠津日也津は助語也一昨々日を「サキヲトヽヒ」といふは前遠津日也今日を「ケフ」といふは來日也今來たれる日也「き」を「け」に通はせたり明日を「アス」といふは明過なり「あけ」の「け」と「すぎ」の「ぎ」を省ける也過を「す」とのみいふ例は「夜もすがら」「晝はすがら」などにおなじ明後日を「アサッテ」といふは明日去而の次の日なれば也明々後日を「シアサッテ」と云は重明後日也古言に重なるを「し」といふ重浪などいへり「しき」の「し」を省ける也明々々後日を「ヤノアサッテ」といふは彌明後日也田舍人は「ヤナアサッテ」といへり「の」と「な」は

通音なればおなじ

(廿四)銀公がから衣　貞徳の紅梅千句に「紅梅やかの銀公がから衣」といふ發句ありこは古今榮雅抄春上「色よりも香こそあはれとおもほゆれたか袖ふれし宿の梅そも」といふ歌の注に漢仙記云銀袖匂移二木花一古情留といふ漢武帝の后銀公の袖の香梅花にうつりて匂ひをとゞめたりとある故事によれる也

(廿五)わすれ草しのぶ艸　井われかと云詞　和泉式部家集二の巻に人のもとにわすれ草しのぶ艸つゝみてやるとて「ものおもへはわれか人かの心にもこれとこれとそしるく見えける」とあり此歌の詞書にてしのぶとわすれ艸の二種なるをしるべし又物語書にわれかの時などいふ詞あるも此歌にてよく心得られる

(廿六)あらいみまいみ　同集二の巻にかたらふ人のきたりけるをきよまはるとありとてかへしければつとめてかういひやりたる「ちきりしをたかふへしやはいつくしき荒いみまいみきよまはるとも」返し「すさのをのみとをいのるともなしにこえてそ見なしなみのやへかき」頭書闕大曆十六ノ卅八丁ヲ散齋者荒忌致齋者眞忌也

(廿七)ふりがたきと云詞　同集三の巻歌に「いにしへはありけるとゝきゝながらなほかなしさのふりかたきかな」此ふりがたきと詞はふり捨がたきといふ心にて五の卷にも「ひまもなくしぐれ心地はふりがたく」とよめり

(廿八)母子の餅　同集三の巻に石藏より野老おこせたる手箱にくさもちひいれて奉るとて「花のさと心もしらす春の野にいろ〳〵つめるはゝこもちひそ」按に母子餅の事は文徳實錄に見えて歌にも「三日の夜のもちひはくはしわつらはしきけは淀野に母子つむ也」ともよめり

(廿九)千鳥百千鳥　同集四の巻に水のほとりに千どりのたゝひとつたてるを見て「ともをなみ河瀬にのみそ立居けるもゝちとりとは誰かいひけん」此歌によれば千鳥は一種のものと見ゆ百千鳥さへづる春とよめるとはと也萬葉に五百津鳥とも有興清再按に万葉十七丁四十五丁オ　に朝猟爾伊保都登里多底暮猟爾知登理布美多底とあるによれば五百津鳥と千鳥とむかへし語にておほくの鳥をさせる也

(卅)都鳥なく　同集四の巻にかり屋してはまつらにふしてきけば都鳥鳴「事とはゝありのまに〳〵宮古とり都のことをわれにきかせよ」按に此歌のさまを考れば鷗の事にて今下總の海邊にて濱猫といふ鳥にやその鳥の啼聲は猫にやゝ似たり

(卅一)日路と云詞　同集四の巻に秋の夜の月いとあたうくもりたるに「なかむれとめちにも霧の立ぬれは心やりなる月をたに見す」按に此めぢてふ詞は俊頼の歌にもよみてそは袖中抄にも引たり目路の義にて目のかよふほどをはるかに見やる心也

(卅二)たきのはん　同集四の巻にたびにたつ人のもとよりたきのはむといひし物のありしたまへといひたれどうせにければ「いたつらにあれはわか身もあるものをはなれむまとて人やとりけん」

(卅三)あうすち　同集五の巻にあうすちをよめる歌「こつたひし梅をはおきてこれたにも鶯の木と人しいふらん」

(卅四)梅櫻を論せし歌幷紅の梅　同集五の巻にむめさくらいづれおもしろしと人のいふに「櫻より色はさこそはふかゝらめ香さへことなりくれなゐの梅」

(卅五)鶏の聲にはかられつとて殺せし事　同集五の巻にとりのこゑにはかられていそぎ出てにくかりつれば殺しつとてはねに文をつけてたまへれば「いかゝとはわれこそおもへ朝な〳〵なほきかせつる鶏をこゝろせは」

(卅六)とりかぶと　同集五の巻にけさうする人の來て物などいひたるほどにこと人の來ぬればこれかれたちわかるゝほどに扇をかたみに取たがへてけりつとめてはじめの人にいひやる「かたらはん人もなかりつとりかふとおもひしはゝやあふき成けり」鳥頭をとりかぶとゝいへり

(卅七)目は空　同集五の巻歌に「ひと夜見し月とおもへと詠れは心はゆかす目は空にして」按に心も空あしも空などいふにおなじ枕草子抄一の巻廿一葉にも見ゆ

(卅八)蠟歌　万葉九の巻登二筑波嶺一爲二蠟歌會一日作歌に未通女壯士之往集加賀布蠟歌爾とある蠟歌は注に蠟歌者東俗語曰二賀我比一常陸風土記また仙覺抄に俗云二宇太我岐一又云二加我毘一也など見えて男女あつまりて遊樂すること也常陸風土記に自レ坂已東諸國男女春花開時秋葉黄節相二携飲食齎賚一騎歩登臨遊樂栖遲とへるにてもしるべしさて賀我比は嗚呼の意にて万葉十四の卷常陸歌に筑波禰爾可加奈久和之

能禰乎乃未可奈岐和多里南牟安布登波奈思爾和名抄羽族體部に文選蕪城賦云寒鴟嘯レ雛師説嘯讀加々奈久舊本今昔物語廿六の卷第七語に大キサ人計ノ猿寶倉ノ高ノ方ヨリ出來テ一ノ寶藏ニ向テカハメケバ云云一ノ寶倉ノ猿カハメキ云ニ隨テ云々木ニ走リ登テカハメキ合タリなどあるかゝといふ語とおなじく聲をあげてうたふさまを嚇呼とはいへる也けり景行紀五十三年の條に鷦鷯而失レ木枝〔戰國策四〔齊閔王〕盛衰〕にや〔淮南子覽冥訓に猨狖顚蹶而失レ木據レ水則不レ若二魚鼈一〕頭書魯連謂二孟嘗君一曰猿猶猨錯レ木據レ水則不レ若二魚鼈一記廿四ノ十一丁ウ水チ離レタル猿ノ迎ヤ儲セヨトテ云々

（四十）動而得レ謗名亦隨レ之　韓文尺牘に動而得レ謗名亦隨レ之とあり人生誠にさると也張九齡が美服憂二人指一高名逼二神惡一とつくれるも似たると也

（四十一）古今集の名義　文選東都賦に能精二古今之清濁一と見ゆ清濁は善惡也古今集の名これにもとづけるなるべし

（四十二）詞の林筆の海　宗牧が東國紀行に「秋深し詞の林筆の海」といふ句あり文選序の李善が上表に寧二中葉之詞林一酌二前脩之筆海一と見えしによれり

（四十三）よにあふ坂の關はゆるさじ　清少納言が「夜をこめて鳥のそらねははかるとも世にあふ坂の關はゆるさし」とめる歌の注にふるく史記の孟嘗君が傳を引たれど文選東都賦の識二函谷之可レ關といふも引もらせり

（四十四）橘千蔭が扇の歌　橘千蔭がもとにて或人扇に歌書てよと乞けるにその扇に賀茂の葵立田の紅葉嵐山の櫻などの類を押繪したりければ「打日さす都に近き春秋の野山の風を手にまかせけり」

（四十五）日下元泰が詩　加賀國大聖寺の藩醫に日下元泰字を子實といへるは皆川愿が門人にて詩つくるざえすぐれたり愿常にいへらくまのあたり唐人に見せてほこらまほしきは子實が詩つくるさま也絶句より長扁をあはせて一年に三万餘首にあまれるは和漢にためしなしとて讃稱しけりとなん太田元貞が此よしをものがたりせしに酒井時中かたはらにありていかでさるとあらんとてかたぶけいひけるがひとゝせ

元泰江戸へくだりしをり元貞が家にて時中試に支韻にて梅の詩を乞けるに元泰筆とるまゝに出たるからうた二十四番風一吹滿林氷玉出幽姿羅浮夢斷三更月水部毫奇一首詩隔水未看花發處穿雲更覺馥蘸時此種稱兄稱魁帥千年吟客費陳詞此外律詩や廻文の絶句など山壑の雲を吐がごとくにつくり出ければ時中もあきれはてゝものいふなかりし

（四十六）建綾足が歌　陸奥人建綾足字孟喬は賀茂翁の門人なり畫をよくし俳諧の片歌をよくす一號を寒葉齋凌岱といへり著書いとおほし橘常樹が身まかりける一年のはてに人々追福の歌よみけるに衣を「妻もかたみの衣とり出てまきてあかせしむかししのはん」おなじ時に村田春郷は鳥を得て「舟きほふ水門のをしかもみくまりに音をそなくなる友なしにして」春海翁は煙を「わたつみの汐やく煙打なひきたつもたゝすも常なかりけり」藤原宇万伎は雲を「大空にうきたつ雲のはかなきをいやはかなにも風そ吹ける」また風を「ひちま山木するはるけき風のおともつねきくよりはかなしかりけり」此ひちま山は常樹が古鄉の土左國なる山也

（四十七）村田春道が別業にて人々のよめる歌　卯月の十七日に人々村田春道が深川六軒堀の別業につどひて歌よみけるをり橘常樹「いめたてゝとみの岡へに奈良人の折しなてしこけふそおもほゆ」維寧「かへるまもわすれ草おふる此そのを□□かりそめにおもひてそこし」小野古道「とひくれはいつこもしけき夏なから木すゑよしあるやとはまとはす」河津美樹「夏の來てよしある人のすむやとは池の心もすすしかりけり」日下部高豐「世中のたのしき道を人とはゝけふのうたけをまつそかたらん」橘枝直「たちかへし夏の衣はうすけれと猶色そこき庭のふちなみ」橘千蔭「しめおきしかきほにさける卯花のうきとしらぬやとにさりけり」大宅公庸「とこしへに春をしめつる夜となるやつゝしもふちも見しにかはらぬ」峯行「五月雨ははやもふりなん大河の渡瀬なしとてこゝにやとらん」文剛「なかき日もあそひくらして池水の月をさへこそ見まくほしけれ」永世「たちかへりまたも問こん此やとのすゝしかるへき竹の下風」

（四十八）橘常樹が追悼の歌　橘常樹が身まかりける

一年のはてに人々つどひてかなしみの歌よみけるにのぶよしが家を「やつかまてすゝたれぬれとあるしなき里の古家はさむけかりけり」多豆万侶が文を「行水は常にしゆけとくみし人のかけさへ見えすなりにけるかな」さちをが井を「ふるさとの板井の清水いたつらにみくさこもれりくむ人なしに」春道は日を「多の日のはかなくくるゝかけ見れははやく過にし友をしそ思ふ」千久遐は月を「ほから〳〵月すみわたる夜半にこそむかし人をはおもひ出けれ」眞とは書を「今も又相見ることきとのはを殘して過つあはれこのきみ」又艸を「百艸のみきりの花もかれはてゝ夕しも寒き今となりぬる」ましほは莚を「土左なるや十市の池のすかむしろなれて久しきとしのふ哉」又まがきを「うゑおきしもとあらの木萩うつろひてまかきあらはに立るさひしさ」千蔭ハ太刀を「いその上ふるやいほりはふりたれどはきけんたちの名は殘りけり」

(四十九)紙針 井竹筵　新修鷹經下卷治二鼻塞一方の條に以二紙針一著二清胡麻油一云々又治レ瘡方の條に以二爪若竹筵一搔二膚上一云々このかう針竹へらなどは今の世にもかくよべり竹筵は神代紀に竹刀と見えて和名抄に阿乎比江と訓たるものに同じかるべし禮記に聶とあるも阿乎比江の比江と同義にきこゆ

(五十)後普光園院殿万卷の書を讀　嵯峨野物語 後普光園院眞基公之作 に本朝の諸傳をうかゞへるに既に一万卷にあまれりこれ世の玄る所也とあり室町將軍の代にはこの殿と一條禪閤 後成恩寺殿兼良公 を博識といふべし

(五十一)畑水練 井火中の書　同書にはたけずるれんとかやの風情ばかりおほく侍りやがて火中に入らるべしとあり 頭書 太平記十四ノ卅六丁ウ

(五十二)西はれの家　同書に鷹をば所によりて左右の手にするやうかはるべし西ばれの家の南庭をわたる時はかならず右の手にすうと云々この西ばれの家は西向の家の事にや

(五十三)ちきり　禰津松鴎軒記に「すきふ」といふは「ちきり」のごとくきる也と云々按に和名抄織機具部に楊氏漢語鈔云織縢知岐利 と見え義經記にちきり木さい棒といふものありちきりの貌は輪鼓に似たり 頭書 名物六帖器財箋四喪葬祭祀門に荏ヂキリ其外多ク見ユ

(五十四)三ヶ月形　同書に大さかふといふはふのなり三ヶ月なりになる也と云々按に撰集抄砂石集太平記などに人のさかやきを月代といへるも心同じ

(五十五)まち　同書にうしろのまちみじかくと云々又町形尾などもありまちは筋などいはんがごとくにて巷坊の町も義おなじかるべし眞筋の略語にや

(五十六)ふすぶり 井うるむ　同書にふも黒くふすぶりて目の内もあかくうるむ也と云々

(五十七)うこと云詞 井集侍　同書に鳥のおちたる所をば「はまり」といふむれをば「うこ」といふと云々按に祝詞に集侍といへる「うこ」も同義にて群集の事也

(五十八)くけ入て　同書に足緒の中にくけ入てつかふべしと云々按に今世にも衣服を縫にくけるといふ詞あり

(五十九)こけら葺　同書に龍苔ふといふ事有龍のこけらのごとく切を云也と云々按にこけらぶきなどいふも鱗のさまにたゝみふくがゆゑの名也

(六十)大辨慶小辨慶　同書にふちまき尾に小辨慶巢と云かけとり尾に大辨慶巢と云と有按に鷹の羽のふの名にいへり今の世布のもやうに辨慶じまなどいふもふるくよりの名と見ゆ

(六十一)ひこ緒 井彦帶　同書にひこのを三寸と云々按に今坂東の田舍人が語に小兒のつけ帶をひこおびといへりふるき名なるべし 頭書 和名抄に矜帶小帶也比岐於比云々

(六十二)たか〳〵指 井くすり指　同書に大鷹のをばたか〳〵ゆびにくらぶべし又小鷹の緒は藥ゆびに三分みじかくすべしと云々按にたか〳〵指は中指也

(六十三)とんばうかしらに結ぶ　同書にとんばうかしらにてむすぶ也と云々按に蜻頭などいふ結目の名今もいへり 頭書 體源抄序にとんばうがへり云々著聞集歌詠部にもとんばうがへりとあり 軍陣聞書十五丁ウ廿一丁オ 隨兵次第九丁ウ

(六十四)ねをのうさぎ耳　同書にねをのうさぎ耳とあり按に今世にへびくちといふこれ也

十八公舍筆記卷之六

松屋　高田與清文儁稿

(一)秀句緣の字緣の詞　悦目抄にえんの字といふは秀句也えんの詞とは事のたよりあると也たとへば秀句といふはものを兼たる也浪のよる〳〵めもあはずとつゞけつればなみのよせともよるの夜ともかねたる也これ體のものをえんの字とはいふ也えんの詞といふは秀句にあらで只事の便ある事也たとへば沖津浪たちこそまされなどいふやうなると也これを心得べしと云々

(二)歌の冥加　又云歌の冥加をおもはゞ雨の夜雪の朝を不レ關一首二首よむべし人丸赤人の御口をゆづり給ふと也と云々

(三)神樂の詞は延喜の御代の撰　又云國々の風俗どもも撰さだめられける時延喜のかぐらの歌にもくはへられけるにうたひそへられける也そのこまも其御時くはへられたりとぞ云々與清按に袖中抄四の卷廿三丁同六の卷十二丁　などにも見ゆ

(四)とふ〳〵といふ詞　俗言にトフ〳〵尋出したトフ〳〵去おほふせたなどいふトフ〳〵は問々の義也伊勢大輔集に跡くれてむかし戀しき敷島の道をとふ〳〵たつねつる哉」と有因に云俗にシオホフセタと云語は仕終(シヲヘ)たの訛也されば假字は志乍(シヲウセタ)字世太と書べし

(五)うぬといふ罵詞　今俗に人をのゝしりてウヌメといへりこは犬メといふ語の通へるにて犬に比していやしめいふ也崇神紀に犬を宇奴と訓じたり

(六)內裏　大塚嘉樹が百寮要抄一の卷に內裏の字出處見えずこは中國の作字ならんよしいへりひがごと也舊唐書列傳卷第一百三十四李輔國傳に代宗即レ位輔國與二程元振一有二定策功一愈恣横私奏曰大家但內裏坐外事聽二老奴處置一代宗怒二其不遜一以方握二禁軍一不レ欲二遽責一乃尊爲二尚父一政無二巨細一皆委云々とあれば漢辭にもとづけることゝうづなし

(七)朝廷　中國の古書に淨御原朝廷または難波長柄朝廷などやうに都の名の下にやがて朝廷と書つゞけたるは漢文の法にはあるまじき事と心得る人もりひがごと也史記始皇本紀卅五丁に二世還至二咸陽一曰先帝爲二咸陽朝廷小一故營二阿房宮一と見ゆ此外にもおほか

るべし

(八)妙澤和尚の不動の繪像　鎌倉大草紙下卷十三丁に古劔妙澤和尚と申は夢想國師の御弟子にて不動明王の化身也兒の時より好みて不動明王の御形をゑがき給ふ中年にて餘り不動の像數多ありければ取集め箱に入ふるき藏に入おき給へばその箱より火炎もえ出けり寺僧おどろき此火を消箱をひらき見れば不動の像より火炎出けるなり是より妙澤和尚の書給ふ不動の威德ありける事を人あまねくゝりける也さてこそ此和尚を不動の化身とも申けり云々與清曰吾友石井盛時が家に妙澤のかゝれし不動の畫像を秘もたりといへり余未レ見レ之

(九)小童をデッチといふ事　鎌倉大草紙下卷十六丁に狂言者のでつしをもてあつかふごとく心のまゝにしてありしかども云々與清按にでつしは弟子(デシ)をさとびていへる也今の俗に僕僮をデッチといふもこのデッシよりうつりし語也

(十)文政改元の詔　詔古聖膺レ籙欽若二昊天一授レ時新主握レ乾建二立徽號一紀レ年考二之異域一既爲二累葉玉條一尋二之本朝一亦是列代龜鑑肇承二神器一心之憂危若レ涉

春氷一庶幾遵二奉　上皇文敬一恩化益敷倚二賴大臣良佐一德政彌行方今孟夏長養之時也宣下穆二風聲一以新中民聽上其改二文化十五年一爲二文政元年一主者施行　文政元年四月二十二日○與清曰今茲文化十五年三月都にのぼりしに清岡三位長親卿改元撰辭の詔を奉られしをりなりき

(十一)朝山意林菴墓碑　京都長講堂に朝山意林菴の墓碑あり碑面に○前侍講待　詔意林菴源素心先生とあり側面に○先生姓源名素心字藤丸號二意林菴一父宮內少輔久綱母秦氏天正十七己丑九月八日生二于洛一雲州朝山鄉之主清仁親王之裔也幼爲レ孤倚二附于僧徒碩學一專宗二儒術一長而朝鮮儒士李文長到二于洛一之日相見受二聖學之道一統一寬永中遊二事于亞相忠長卿一三年致仕歸洛且與二細川家一有二舊要一故來二往于豐肥二州一講レ儒先生之高德達二于後光明院帝之聖聽一承應癸巳春正月　勅令二昇殿一難二固辭一不レ許終登二玉階一列二公卿之席一服烏紗巾素紗深衣講二經書一矣此時所レ賜之書器傳以爲二家珍一　帝崩後群國諸侯雖二重レ禮厚レ祿以招レ之不レ應相二地於祇林幽閑之境一養レ志寬文四甲辰九月己酉卒壽七十又六

葬二于洛之長講堂一居諸五二十年于茲一矣孝子不レ勝二追慕一使二予記一之銘曰

先生高德　可齊青穹　幼孩能勤　老大立功　不混衆俗　得與儒風　馳譽雲上　流芳無窮

正德三癸巳年季秋二十有一日後學岡原仲撰孝子久丸建レ之　○與清按に意林菴或は彝倫菴とも書けり閑散餘錄諸家人物志先哲叢談などに見えし人也清水物語二冊此意林の作也慶長板節用集の跋に易林誌とあるも同じ人也頭書正保遺事に朝山素心天正十七年九月八日生寛文四年九月己酉終跋に寛永三年孟商吉朝山意林菴素心書レ之云々（七十六歲）按意林菴碑文云先生姓源名素心大閤記

（十二）御物忌　江次第抄後成恩寺關白公撰全七卷　卷一云御物忌物忌鬼神王之名依二其人年一有二可レ愼之日一伴日禁二一家之出入一也云々與清曰源氏物語帚木の注釋どもに物忌の事くはしく見ゆ

（十三）氏神氏院　又云次氏神諸神社隨二其入之所爲一可レ拜レ之云々與清曰こは四方拜の時氏神を拜する也頭書朝野群載七ノ卅六丁ヲ處分記十五丁ノ廿二丁ヲ神嘉抄廿丁ウ廿二丁ウ圖大層十二下ノ八十五丁オ

（十四）後取　又云後取藏人式云侍臣堪二大飲一者奉二仕後取一云々四位五位多非職之雲客也元日不レ用二近衞次將闕腋帶一無レ便故也

（十五）屠蘇　又云屠蘇醫心方云屠蘇八物細切絳袋盛以二十二月晦日日中一懸二流井中一勿レ令レ至レ泥云々

（十六）齒固　又云御齒固齒謂人年齡也齒固者延レ年固レ齡之義也禮記文王世子曰古者謂二年齡一齒永齡也大戴禮云男八月生レ齒八歲而齡レ齒是人壽也云々與清曰八歲而齡レ齒之齡宜レ作レ毀

（十七）內膳　又云內膳宮內省所屬也職員令云奉膳二人掌レ惣二知御膳進食先嘗事一云々

（十八）蓋擎子　又云蓋擎子蓋青瓷之蓋也擎子青瓷之尻居也青瓷者所請之蓋擎子者內膳設レ之女藏人役送之時留二青瓷許一蓋尻居每度持返也

（十九）錦額　又云錦額延喜大藏式云大極殿懸二綠額一云々錦額者簾之帽額也

（廿）通障子　又云通障子或訓二透障子一訛也長一丈二尺高七尺許上下張レ錦內張二隼人簀一大ナル衝立障子懸二御簾一者也

（廿一）囊床子　又云囊床子其體面圓如レ鎖長二尺廣一尺五寸高一尺許有二三足一

（廿二）胡瓶　又云胡瓶胡國酒瓶也

（廿三）三節御酒　又云三節御酒元日七日十六日供レ之故曰二三節一北山云廿糟也云々土記長曆二正十六節令レ供二三節御酒一三度內辨能信卿云元日七日今日相合三節也專不レ可レ及二三度一每節一度可レ供之由仰二采女一

（廿四）獨床子　又云獨床子三位參議散三位等一人著レ之故稱二獨床子一

（廿五）簀子敷床子　又云簀子敷床子長床子也四位參議著レ之

（廿六）中墨物　又云中墨物或中純物トカク又掌中歷盛レ物有二此名一也臺盤中純所レ備二果子等一歟

（廿七）版位　又云尋常版位定二群臣百官之列位一者也職員令云劍レ木曰レ版列立曰レ位常不レ撤故號二尋常版一一云八尺曰レ尋一丈曰レ常以二此版一爲レ法立二群臣列位一故尋常者丈尺之意也頭書和名抄十三ノ十丁オ文書具ノ部

（廿八）俘囚夷俘　又云俘囚大政官式云凡正月七日十一月新嘗二節預二給祿一俘囚夾名別レ紙而奏雖レ帶二五位一猶同二此例一俘囚本是王民而爲レ夷所レ略遂成二賤隸一故云二俘囚一或云二夷俘一其屬在二陸奧出羽一後分居二諸國一見二類聚國史風俗部一頭書國語七卷四丁ウ晉語ノ一に安レ俘女一云々注に俘芳夫切軍獲曰レ俘云々

（廿九）腹赤奏　又云腹赤鱒魚也內膳司奏レ之此司又屬二宮內省一景行天皇御宇於二筑紫宇土郡長濱一釣得獻二天皇一其後天平十五年正月十四日大宰府進レ之每年節會可レ供之由被レ定云々年中行事秘抄の說も亦同

（卅）笏　又云笏紙彈正式云五位以上通用牙笏白木笏前詘後直六位以下官人用レ木前挫後方

（卅一）近仗稱警　又云近仗稱警近仗謂近衞次將也出二警入蹕一唐禮也故天子出御之時近仗稱レ警入御之時稱レ蹕也上古其音高聞云々

（卅二）謝座再拜　又云謝座再拜凡揖拜向レ方有二三說一此次第載二一說一也謝座者內辨大臣蒙二昇殿一著レ座之詔命而先致二拜謝之禮一也先後一揖者起居之節也再拜者拜二天子一之意也知足院關白被レ命云乾者是天位也拜レ天者是拜二天子一之儀也

（卅三）傍行一兩步　又云傍行一兩步兩儀之時謝座傍行兩說也

（卅四）空盞　又云空盞者未レ盛レ酒之盞也故上首人乍レ捧拜レ之酒正授二空盞一者告下示今日可レ賜二恩酒一之由上於レ此致二拜謝之禮一也

（卅五）唱平　又云唱平兩行愚案平者稱レ壽之意歟

(卅六)見參　又云見參今曰朝參五位以上交名也可レ預レ祿者也

(卅七)平張　又云平張如レ幄者也

(卅八)追物　又云居二追物一謂菜也云々與清按に宇治拾遺にめぐりどいへり今世の飯のサイの事也

(卅九)飾劍　又云飾劍彈正式云凡畫飾太刀五位以上聽レ之

(四十)荻蟲樣　又云荻蟲樣荻蟲者尺蠖也進足留起揚伏足留落居其體如二荻蟲之步一異說也他家人多用レ之近代大炊御門流相傳云々號二唐練一云々

(四十一)糊子ヤス　又云糊字子ヤスト可レ讀也

(四十二)肘怠ヒヂタユシ　又云肘怠ヒヂタユシト讀ベシ

(四十三)式乃司　又云召二式乃司兵乃司一當家說式乃司フンノツカサト召レ之他家說ノリノツカサ云々

(四十四)樸櫨カラナシ　同書卷二云樸櫨和名唐梨云々

(四十五)二宮三宮　又云二宮謂二中宮東宮一也小右記寬仁四年正月二日有二太后大饗東宮大饗等一中宮無二大饗者一依レ無二三宮大饗一例上歟

(四十六)包燒栗蘇甘栗　又云包燒鮒燒物也○蘇牛乳也○甘栗平栗也

(四十七)中取　又云中取其體似レ案有二二層一

(四十八)細屯　又云五位細屯一連細屯謂レ綿也延喜中宮式云五位綿一連云々

(四十九)荒染　又云荒染退紅仕丁也退紅ノ一通雜卅七ノ廿二丁ウ

(五十)零餘子燒　又云零餘子燒王餘魚燒也

(五十一)清キヨラ　又云阿奈木與良キヨラハ清也嘆二美祿物一詞也

(五十二)卵重　又云卵重江次第云紅掛上重白掛也或次第云蘇芳一領上重白一領爲二鳥子重一云々

(五十三)入眼　又云一々入眼無名位記書二入姓尸名等一謂二之入眼一

(五十四)馳道　又云馳道輩路也當二南階之庭中一也

(五十五)內教坊　又云內教坊唐世置レ之教二女樂一之坊也

(五十六)小安殿　同書卷三云小安殿大極殿後房也

(五十七)三僧　又云三僧講師讀師咒願也

(五十八)湯漬　又云入レ湯於二茶垸瓶子一入レ之由見二江記一

(五十九)御薪　又云御薪訓曰二御釜木一也

(六十)麴塵青色御袍　又云青色御袍麴塵云々

(六十一)書仗　又云插二於書仗一件文持參之時スヂカヘテ插レ之披見之後鳥口縱插レ之

(六十二)度物　又云度物謂二賭布一也

(六十三)闕官帳　同書卷四云闕官帳有二二卷一正官權官也取二當時內外官之闕一也最先奏二此帳一者爲二主上一令レ知二其闕一給而被レ任レ人也長二尺五六寸家說用レ此或二尺三寸或一尺七八寸此外有二說々一

(六十四)笏長　又云笏長式部判官記云笏長一尺二寸上廣二寸七分下廣二寸四分厚二分

(六十五)內記所　又云內記所延政門者日華門東也內記所在二延政門外北掖一

(六十六)本穎條　并三色稻出擧稻　又云本穎條勘解由勘文第一條載レ之本穎者國司貯積之惣名也正稅公廨雜稻出擧事也諸國置二此三色稻一多少見二主稅寮式一春以二此稻一借二於人一取二其利一充二雜用一不レ失二其本一也其本利共至レ秋返レ之本稻者又充二明年種子一也○九抄云稻者苅本謂二之稻一切穗謂二之穎一束ナガラヲバ稻ト云モミナガラ置ヲバ穎ト云出擧者借二於人一取レ利之謂也十束ヲ人ニカシテ三束ノ利ヲトル也正稅者官物也公廨者國司各〻處分也雜稻者有二諸色修理國分寺料等一也新司勘狀與二前々司證狀一所レ載之本穎束數可レ同也延喜式所レ定者巨多也其後失墜之定也○加舉者諸社諸寺修理料ヲモテ正稅等本穎混合取二利分一事也

(六十七)不動條　并本穎不動穀　又云不動條不動有二二色一古委與二新委一也古委者不二增減一依レ國其數不レ定前司後司證帳數同也新委者每レ任加二增委一納レ之委者積之意也不動者不動用之義也穀若干石糙若干石納レ之備二于不虞一也鈎題者進京以二官符一開レ之也本穎莖二付タル稻也不動石ト云スリタル米也又新委不動國見二康保元年官符一無二新委一國十一ヶ國寬治七江記八ヶ國也云

(六十八)糙條　又云糙條不動倉中所レ委也交替式云糙支二二十年一云々用殘之有無者見在之數也

(六十九)格率分條　又云格率分條北山抄云有二舊吏交替欠之國一以二公廨十分之一一塡一之謂二之格率分一分法見二天長九年官符一今案任二天長官符一故謂二之格率分一者何分之一云心也假令正稅之中有二舊吏欠負一之時當國司以二公廨一入立也公廨本穎十万束之利稻三万束三万束之十分一三千束以二此三千束一塡二納舊欠一也

毎國司入立改二欠數一可レ減二於前任數一也○遺字ノコルトヨムベシ不二入立一ノコル不定分ヲ云フ也

（七十）神社佛寺大垣之稻　又云神社條十分之二三加二條理一可レ開二抽賞一之由見二長保四年宣旨一　○佛寺條同上○大垣之大内大垣造築之法充二諸國一也

（七十一）無直交易　又云無直交易以二正稅之利一交二易絹布之類一也

（七十二）里倉　又云里倉負名賴隆抄云正稅公廨雜稻之類不レ納二本倉一納二百姓私倉一謂二之里倉一又云以二正稅一置二百姓宅一云々

（七十三）多計久良戸　又云多計久良戸先勘二注當任功過一次勘二注前司功過一爲二其證一其事如レ同故多計久良戸云也前司若不レ勘二公文一者雖二其前々司勘申一勘畢時例謂二之越勘一也頭書守武千句廿九丁ウ

（七十四）己分差　又云己分差國司史生已上共作二差法一各可レ塡二己分一弘仁三年符也塡二當任欠負一不レ謂レ塡二舊欠一舊欠者依二格率分法一塡レ之也式曰凡諸國未納官稻幷欠物當時國司史生以上共作二差法一各塡二己分一且給二解由一

（七十五）風記　又云風記小折紙事也

（七十六）唱平　同書卷五云唱平長兼記云仰二唱平一事自飮之時受レ酒自唱レ之可二自飮一之由或注レ之予案レ之自唱平自飮其理不レ可レ然仍奉二上卿一時行唱レ之也

（七十七）音博士　又云音博士西宮云禮服冠今案讀二七經一之音義者也延喜式執讀是也

（七十八）文屋童　又云文屋童大學寮謂二之文屋之司一故學生名二文屋童一也

（七十九）栟櫚　同書卷六云栟櫚棧櫚也東庭有二此木一陪從青摺棧櫚文舞人青摺竹文各有二其寄一者歟

（八十）螺盃銅盞　又云螺盃銅盞近代不レ行延喜三年十一月廿日賀茂臨時祭五獻後夜久螺觴進二使等一左中將公綱右中將伊衡次銅觴進二陪從一云々

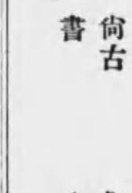
（八十一）挿頭　又云挿頭今案巾子ノ前ヲ云ヒタル所ニ指レ之

（八十二）多胡建郡碑考　上野國山田郡桐生の里人星野貞暉橘千蔭が門に入てふるごとの學に心よせたる人なりことし文政のはじめといふとしのはづきばかりわが松屋のかどおとなひきて何くれとかたらふ中多胡のいし文の事いひ出しに貞暉がおほぢの齊伴甘樂郡池村の里にゆきて手づから摺得しを父春伴よ

り今に三世傳へもたればまゐらせんといふこは余もとしごろ得まくほりせしが形木にうつしゐれる本のみ世におほくてまとの石すりの本はいと〳〵まれなれば心にまかせずてあり經しをほ意とげんうれしさはたとふべきかたなしかくて十日あまり經てもでこしを見るに常にめなれたるかた木のすり本にはにくまさりてめでたしともめでたしやそも〳〵此碑文の心ときあかせしものもこれかれきこゆれどいかにぞやおもはるゝふしありて甘なひがたきをいさゝかおもひよれるすぢをとわるべし辨官符は左右の辨官奉りて下せる宣符にて太政官符などもおなじ和銅四年三月辛亥上野國甘樂緑野片岡三郡の内六鄉を割て多胡郡を建られしよし續日本紀に見ゆ三百戸郡成ば家三百戸を一郡に成れしにて戸令に据るにこれ下郡也給羊はむかし羊大夫といふ人ありてそれに多胡郡を給しならんといふ舊說うけがたし羊大夫のゆゑよしは神道集に出てふるき傳へなれど正しくもおぼえず又郡を賜ふ例もをさ〳〵物に見ゆるとなし給レ半とよめる說もありこは歷史に賜二田租之半一などあればそれよりおもひなしなめれど碑のおもてのさまうづなく羊の字にて半の字にまがふべくもあらずこは給養の養の字を省て書るなるべし養の字古文には敍とも敍とも書ていづれにしても羊に並たる字なればかたへを省ける也說文には从レ食羊聲ともいひたりき此時新に郡を建て民に給養せられしとおぼゆ多胡郡は和名抄に七鄉を管たりはじめ六鄉割置れし後俘囚等をして新田を墾開れしゆゑに俘囚の鄉くはゝはりて七鄉とはなれるにや左中弁正五位下多治比眞人を先に書けるは弁官符なれば也穗積親王は慶雲二年九月壬午詔して太政官の事を知らしめたまふ石上尊は石上朝臣麻呂公にて和銅元年三月丙午左大臣に任ず藤原尊は藤原朝臣不比等公なり麻呂公と同時に右大臣に任ず尊は高稱の字なれば用ひしにや万葉集に石上乙麿卿を石上振乃尊とも書る例あり神代紀の注に至貴曰レ尊自餘曰レ命とあるは日本紀の上の定と見ゆさてこのいしぶみの名は多胡郡建置之碑といふべきなり文政元年長月の三日筆を染て星野貞暉におくる

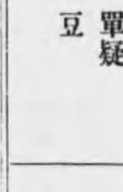
六書通

說文供養也余兩切 單疑 豆


說文繇緩也余兩切 同文小異

脩能 印書

鍾鼎字源


單疑 生豆

金石韻府

尙古 書

單疑 豆

（八十三）堅魚の訓義　井四谷の角筈と云地名　舊說に「カツヲ」は堅魚の義にて堅魚干の堅きにおこれる名也といへり堅魚干もふるく延喜式などに見えたれどなほ生魚の名なるべし干たる名をもて生魚におほせんはことわりたがへれば也年中行事秘抄內膳司供二忌火御飯一事の條に磐鹿六雁命云々顧レ舳魚多追來六雁以二角弓一當二遊魚之中一即著レ弭而出忽獲二數隻一仍號二頒魚一此今諺曰二堅魚一以レ角爲二釣柄一此由也云々とあるによれば頒魚の通音也「カタ」は「カタクナ」の「カタ」にて愚なるよしの名也愚者はものに片依がゆゑにさる名もおへるにこそ亦按に今四谷に角筈といふ地あり六雁が角弭の弓によれるにもやあらん 頭書 高橋氏文カツヲノ說本朝月令年中行事秘抄クボノスサビ右に見ゆ

松屋筆記卷之七

東都　高田與清文儒稿

（一）沓の字　沓をクツと訓は踏の省字也沓には履の事に用べき字義なし禮部韻略五の卷合韻部に踏踐踏亦作二蹹蹈一玉篇七の卷足部に踏他帀切足著レ地など見えその外の字書にも踏の字は履に通ふよしいへり說文十の卷足部に蹋踐也从レ足昜聲徒盍切とありまた鞜の省字にても有べし和名抄可レ考

（二）さあと云詞　下野國人の語に江戸サアへユク京サアへノボルなどいへり江戸サアヨリ歸る京サアヨリ下ルとはいはず此「サア」は「さう」にて「さま」の通音也大和物語舊本今昔物語などに某ざまへゆくといふ詞おほかり「さま」は方の義にて某の方へ行といふに同じこの「さま」を音便に「さう」といひさて訛て「サア」ともいへるにて古言の殘れる也けり

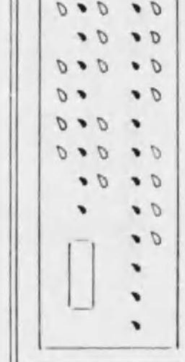
（三）中倫堂詩刪序　からうたははやく大友皇子河島皇子のつくり出たまひしを懷風藻に載たるに日本紀や古今集のはしがきに大津皇子におこれりといはれしは壬申の年の事によりてはゝかられしにやあらんそのころかしこの隋のする唐のはじめにあたりて學傳へし手ぶり古體近體の間に出入す弘仁の御世よりくだりては樂天の風天の下にしきみちて上中下の人々あふぎしたはざるはなし神泉苑嵯峨の山院これによりて宴を催し菅原氏大江氏これをもて家をおこす保元平治のみだれよりあとなくなりはてにしを室町將軍のころより五山の禪僧宋元の風をいざなひて一時のみさかりなりしに伊藤仁齋新井白石などいへるすぐれ人やゝ唐詩をひらき物部茂卿服部元喬大にその風をおこせり近頃六如法師山本信有龜田興ありて宋詩また世にあらはれ大窪行菊池桐孫柏木祝などさきがけして天の下をぞなびかしたる市河世寧ひとり樂天の風をあふぎていにしへにかへさんの心ありといへどもたまあへるともすぐなくして遂にふるふとなしたゝに李白杜甫が跡をしたひ元稹白居易が風をついで唐三百年の花實をひろひあつめんとこゝろざす人あり美濃國人梁卯なりこのごろ中倫堂詩刪をあらはしてそのこゝろざせるおもむきをのべるしこれがはし詞をそへてよとこふ余なにごとをい

ふべくもあらねどいなみがたくていさゝかよしなしごとをばいひ出るになん文化十三年の葉月のはじめに松屋のあるじ高田與清筆をそむ

(四)懷紙に同詠と書事　懷紙に春日同詠――和歌など書く同の字は同席を憚る人ある時の事也同輩の人どちの會に同の字を書くはひがごとなるよし持明院家の口傳也屋代弘賢主の談なり近頃の古學者はこのつたへを知となしまた事ある時などにもその事を書入るゝことはなしたとへば春日某賀詠――和歌また秋日某年忌詠――和歌などゝは書べからずとなんこれも持明院家の口傳也

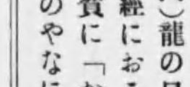
(五)金短冊に自歌を書まじき事　持明院家の口傳に金粉金泥などまきたる短冊には自歌をば書ぬと也又雲紙の短冊は青色を上にすべしと也是は誰も聞知れる事ながら筆のついでに書つく

(六)詞書の長きを短冊に書事　詞書長き歌を短冊に書く時は歌の間へまじへ書也



かくのごとく詞の長短によりて幾段にもまじへ書下すべしまた詞書長く書はてがたき時は右の肩の所へ注有と二字書べしこれ持明院家の傳也

注有



(七)句題の歌よみやうの事　句題の歌の時は本歌の句を外の句におきてよむ也たとへば古今雜にて雲のかよひぢ二の句の時は此雲の通路を初句三四五の句におきて二の句に忌也さて本歌によりて四季雜戀はわかる也雲の通路は古今の雜にて「天つ風雲のかよひ路吹とちよをとめの姿しばしとゞめん」といふ本歌なれば余「御幸せしこかねの橋もあとたえぬ雲の通路名のみのこりて」「みよし野の袖ふる山にしをりして雲の通路とめやいらまし」などよめるとありこれにて心得べし

(八)龍の口　水の落口に龍の口とて龍の形を構るは佛經におこれる事也公事根源の灌佛の條に見ゆ拾遺雜賀に「から衣龍よりおつる水ならでわか袖ぬらすものやなになる」ともよめり　頭書三國志魏志三ノ廿丁ウ明帝紀ノ注に通ニ引穀ニ

水ニ過ニ九龍前ニ爲ニ玉井綺欄ニ蟾蛇含受霤龍吐出云々　後漢書六十八張譲傳に又鑄ニ天祿蝦蟆ニ吐ニ水於平門外橋東ニ轉レ水入レ宮云々　此天祿蝦蟆も龍ノ口の類成べし

(九)カヘルの名義　蟇を「カヘル」といふは蘇生によれる名なり蟆を打殺して車前の葉につゝみおけばやがてよみがへるとは世人の知れるがごとし蜻蛉日記にもそのよし見ゆ中務集にかへるのかれたるをおこせて人「かれにけるはつの聲を春立てなとか啼ぬとおもひけるかな」返し「誰かかくからをおきてはしのふらんよみかへるてふ名をや賴みし」とあり此かへしの歌にてよみがへるより出し名とは知らるゝなり

(十)圓居　神樂歌の榊に佐加幾波乃加乎加久者之美止女久禮波也曾宇治比止曾乃万止爲世利計留とある万止爲を今井似閑が万葉緯に納し本には滿登比につくれりこは必寫誤なるべくおもひをりしに中務家集に「おもふとちまとひてをれは梅の花心にくゝやふかく見ゆらん」とよめる歌ありこのまとひては打纏とのの義ときこゆれば爲と書べきにあらずつら〳〵おもふにまとゐは纏居の心にて圓居のよしにはあるまじくや比と爲は通音なればかよはして書るなるべし鷹の木居を戀によみかけ今昔物語に底ヒを底井とも書

たれば例おほき事と見ゆ　筆記五十九ノ三十三

(十一)鏡を神體とす　鏡を神體とするは天照太神の御形見の鏡におこりていづれの神にもしかすること也惠慶法師が家集に稻荷の中の社の歌「いなりやま三ツ杉中にますかゝみ我ことたてゝ賴むかひあれ」とありこは稻荷三社の神體を三ツ杉中に在す鏡とよめる也三ツハ滿によせて杉の滿たてるさまをもよそへしなるべし　頭書神道集一ノ廿丁ウ廿一丁ウ八ノ五丁ウ今昔書廿一ノ廿三丁ウ稻荷考下ノ二丁オ神社啓蒙或問七丁オ太平記十六ノ四十丁オ廿五ノ十一丁ウ同卅九ノ廿三丁オ一遍六條聖繪八中卷廿五丁ウ百練抄八ノ十九丁オ列子上百四丁オ仲尼篇

(十二)女の臍より出し石の記　飯田町九段坂なる近藤五千石辰松君の家臣に伊原佐助といふ人あり齡は(朱書)五十九六十に近くて妻の年は五十九ばかりになんありける此妻今より七とせ八とせのむかしに病づきて臍より長さ一寸或は二寸許の柔なる毛のさませし物を出すとおほかりまた尿にまじりて色白く堅鹽のごとくて大さ五分あるは六分ばかりの物くだるとあまたゝび也稜あるもあり丸きもありて小石などの形になずらふべし近きころは臍より出る毛はとゞまりて角の

端などいふべき物やうやくにあらはる途にもぬけにもぬけて出ぬその長さ二寸あまり幅は六分許にて平やかなる石也重きこと石にたがふことなく擊にも石のひゞきありてきこゆかくて日を經るまゝに金色の光出て今は黃金の質にもまがふべきばかりになん此ゆゑよしは佐助が同僚なる余が門人上原建胤が物語をしるせしなり文政元年十一月朔日高田與清

（十三）儒佛の道芝居におつ　正木千幹語曰このごろ了阿法師が老松といへる淨瑠璃本の注釋をつくれるに小文字太夫が序をくはへ岸本由豆流が跋をそへて刋本とし今玆文政元年十一月の顏見世狂言に土間の見物人にわかちあたへんと搆るとなんこの由豆流は余が師村田翁の世をさり給ひし後後室の尼にこひゆるされて翁の門人の末にくはゝりし人なりしが尼このよしを千幹本間游清などにきかしてさるふるまひあらんには故翁の恥にもなりなんといたくはらだち門人の列を省てんなど余が訪らひしをりもかたられしをいかでかさるとの候べき由豆流は三好某が紹介にて林祭酒の君の御門に入りし人也祭酒だに見ゆるし給ふをさまでに忌ませたまはんはあまりしきわざにやなどなぐさめしかばげにもとやおもはれけん言なくてやみにき抑儒佛の道は天下の大道なり儒門の由豆流釋門の了阿など小文字太夫とゝもに書をあらはすは實に文化のいたりいたれるがゆゑといふべし儒佛の道は地に落すして芝居に落たりともいひつべくや刋本は十月廿八日に刻成れりといへり序を長崎屋某とて坂本わたりにすめるをのこも書たりとぞ

（十四）にび色の扇　安法法師が家集に和泉守やすあきらのおやのぶくにて鈍色の扇おとしてかへりにけるに書つけてやる「墨染の扇の風は秋よりも心すこさはよゝまさりけり」と有詞書にはにび色の扇とありて歌には墨染の扇とよめり薄墨色を鈍色といへる也

（十五）松と竹とは親子　貫之家集三の卷に承平六年右大臣殿御障子おやこすみ給ふ中へだてなる畫に松竹鶴かける所「おなし色の松と竹とはたらちねのおやこ久しきためしなりけり」

（十六）氏神の花　同集同卷に四月神祭「まつる時さきもあふかな卯花はなほ氏神の花にそありける」

（十七）花をこふ　古今集序に花をそふとてたよりなき所にまどひとある「そふ」を古學者の說に「こふ」の誤なりといへるはよしされど證歌を引ざるは臆斷に似たり貫之家集三の卷に承平七年依レ仰奉レ之「年立は花こふへくもあらなくに春今さらに雪のふるらん」といふ歌ありこれにて花を戀といふ詞の出所明也といふべし

（十八）ゆふつげ鳥　敏行家集に近江の關寺にわづらひてこもりて侍るに前よりかう院のご石山へまで侍りけるを見ておひてつかはしける「あふ坂のゆふつけになく鳥のねは聞とかめてそ行過にける」後撰雜二にも出て四の句聞とかめすそ」と有此歌の意は鳥もゆふべを告てくれにむかふころなるに關守はきゝとがめもせずて關の戸も閉ざれば人は行過ぬると也鷄は申の時に夕をつげて塒にこもるがゆゑに夕告鳥と云にや關市令に凡關門並日出開日入閉と見え史記孟嘗君傳に關法鷄鳴而出レ客ともあれば雞の夕を告るによりて閉曉を告るにより開く定にてもあるべしかゝれば木綿付鳥といふ古說どもゝ治定しがたくや

（十九）ふし原しば原の差別　猿丸大夫集に「しなかとり猪名のふし原青山にならん時にを色はかはらん」

此歌によりておもふにふし原は木立の青葉にならぬ間をいへるにやふしづけの木も葉なき柴を水中に漬たる也さればしば原は茂葉原の義にて葉の有にいひふし原は葉なき枝のさまをいへるなりふしは節にて葉の散たる後は木節のあらはに見ゆるよりいへるなるべし和名抄木具部に四聲字苑云節草擁腫處也和名布之今按從レ竹者竹節從レ草者草木節見二玉篇一とあり神代紀に蒼柴籬といへるは生柴籬にて今の世にいふ生垣也是も葉のなき間はふし垣といひ葉のある時は青柴垣といへりと見ゆ後世「しば垣」といふは葉のつきたる枝もてゆへば也「ふししば」といふも葉のなき柴なるを「しば」をそへて重言に「ふしゝば」といへるにや

（廿）うたうまだき　元眞家集にりうたうを物名によめる歌「おもひきや秋の下葉の露はかりうたうまたきにうつろはんとは」とありりうたうは龍膽也うたうまだきは憂たう早也古言にウレタキといふに同じ

（廿一）水無瀨川　水無瀨川はもじによりて水なき瀨の川なりと思ふ人ありひがごと也元眞家集に七月七日の歌「天川今はみな瀨に成ぬらんけふ彦星の舟路

こくへく」とよめりこれによれば皆瀬(ミナセ)の義にかこりし名と見ゆ

(廿二)東海道を字音によみたる歌　元眞家集に武藏の守ひでしげが鶴のかたのとうがいあせち殿に奉れり其使にしろがねのかめの箱に藥いれたりそれには「ことしより君に千年をゆつるをそとうかいたうに求いてたる」

(廿三)ほそをとこ　元眞家集にほそをとこを物名によめるうた「春の田を打かへしつゝほりたてるほそをとこともおもひけるかな」按にほそをとこは半夏の和名にや今も武藏相摸の方言に半夏をヘンボソといへり

(廿四)鳴瀧　鳴瀧といふ地名は瀧の音の鳴よりおひけんとは誰もおもふめれどその詞のより所をしらではえあるまじきこと也元眞家集に「大井河ゐせきの浪になる瀧はおのか上こそかなしかりけれ」此歌の詞を證(アカシ)といふべし

(廿五)摘と爪(ツメ)とは同語　實方家集に小一條にある人のむすめをしのびてかたらふに女おやきゝつけていみじうはらだちてつみなどするときくころ三日の夕がた北の方もちひまゐれとあれば「みかの夜のもちひはくはしうかりけりきけは淀野にはゝこつみけり」と有母子草(ハヽコグサ)を摘と母の子を爪(ツメ)せたむるをよせたる也此爪を今の世には「ツメル」ともまた訛て「ツヲル」ともいへり右の歌の三の句後拾遺釋教部にはくはじわづらはしと有

(廿六)男に髮切られし女　實方家集に小一條院に宮内といふ人男に髮きられたりときゝて「よそなからきえすきえすみある雪のふるの社のかみをこそおもへ」と有こは今世にも例あること也

(廿七)たてまたし并とりうてゝと云詞　高光家集にたゞきよの衛門督ごせちたてまたしたまふに薰物かうばしうわはすとてそらだき物すこしと多武の峰に乞たまへるに橘のなりたる枝に實を取うてゝそれにいれてたてまたすとて「するの世に成もてゆけは橘のむかしの香には似るへくもあらす」云々按に詞書のたてまたすは奉らずといふ詞也「つら」の約は「た」なればなりたもじ清てよむべし又「とりうてゝ」は取捨て也神代紀にふきうつるいぶきのさぎりとあるも吹捨(フキウツ)る氣吹(イブキ)の眞霧(サギリ)の義也「す」と「う」は横に通ふ音也

(廿八)猿の烏帽子　相如家集にねたがうて鏡のかたに紙をしてをかしげなる女と猿の烏帽子したると書ならべて「ならへてももるさは君こそますかゝみさるやうつれるかけにても見よ」云々猿のゐばうしせし形は今の世にも畫にかきひゝな人形などにつくれること也

(廿九)いひころし并いひそしと云詞　相如家集に「たましひもなくなるまでにひとめわかいひころしてし人はいけるか」とよめり此いひころしといふ詞は源氏物語のいひそしといへる語にかよひてきこゆ菅家万葉に殺の字をソサシムともまたソスともよめり本居宣長が玉の小櫛にいひそすを言殺の義といふはうけがたきよしいへるは菅家万葉に心づかざりし說也明石廿丁(ウチ)にしひそしとも有

(卅)とわたると云詞　とわたるといふ詞は門渡(トワタル)義にいひしと飛渡(トビワタル)義との二ッあり古今雜上に「わかうへに露そおくなる天の河とわたる舟のかいのしつくか」此歌伊勢物語にも見ゆこのとわたる舟とよみしは川門(カハト)を渡るよし也新勅撰雜二に前關白「河浪をいかゝはからん舟人のとわたる梶の音はたえねと」とあるも同じ飛渡(トビワタル)よしよめるは相如家集に「かけろふの水にとわたる螢よりもはかなく見しは夢かうつゝか」拾遺愚草中に「はまひさしなけのかたみか友千鳥とわたり過る沖の小島に」同下に「あまつ風初雪しろしかさゝきのとわたる橋のあり明の空」月清集下に「をちかたの浦人今やねさめしてとわたる千鳥ちかく鳴らん」續後拾遺冬昭慶門院一條「さえまさるさほの河原の月影にとわたる千鳥聲そふけぬる」これら也又唯わたるとのみにいへるものありされど後の誤なるべし壬二集中に「住吉の松やつれなき夕しくれとわたりかへるあはちしま山」續古今秋上爲家「見るまゝに秋風さむし天の原とわたる月の夜そふけにける」玉葉雜二万里小路前右大臣「沖つ風更行まゝにあかしかたとわたる月の影のさやけさ」この外にもおほかれどいとふるき歌にはをさ〳〵見えず

(卅一)もちひの假名　用をモチヒと書べき證は經衡家集夫木集の俊賴の歌など引て餅に用とよみかけしよし本居宣長いへり按に相如家集に「あつまりて物なおもひそをのこともあけんみかとのもちひなりけり」此歌も餅と用とをかけし歌也

(卅二)鳴門并波の名義　鳴門とは浪の鳴門なるよしは誰もしれる事ながら證歌なくては正しからず源重之家集上に「天原波のなるとをこく舟のみやこ戀しき物をこそおもへ」とよめる歌を引べし又奈美といふ言の意は鳴水の義也日本紀の歌に「ナヅノキノオトノサヤ〳〵」とあり古き注どもに夏の木の音の亮亮なりと解る說はたがへり鳴水の略にて浪の音のさやかにきこゆるよし也尾張の鳴海潟も鳴水よりおひし名なるべしさて浪はなり水の義なるをうつりては音なく平なる江海にも浪とはいへる也

(卅三)はすみと云詞　物の勢かゝれるにはすみといふは走進の略語にや重之家集下にげすにはあらぬ人世中にすみわびて鍬すきとりておりたちたるほどもなくしぬるを見て「打かへし鍬のはすみにまみれつつ秋のたのみもなかからぬ世に」とよめり鍬の及に走進をよせ走進に墨に塗れつゝとよせ秋の田の實に頼をよせてよめる歌也假名も墨によみかけたれば必波須美と云べし印本に波豆美と書るはひがごと也

(卅四)山櫻にほふ　重之家集上に「消はてぬ雪かと見ゆる山櫻にほはさりせはいかてしらまし」云々此にほふは色のにほふ也すべてにほひは色にも香にもいふは常なれど眞白色の物には色のにほひといふはなし櫻は白色の中に薄紅の櫻色にほふものなればかくよむべき事もとより也さるに近頃正木千幹が「浪あらふにほの浦和のしらつゝしにはさりせは誰かしらまし」とよめる歌ありひがごと也つゝじは香もなきがうへに白つゝじに色のにほひあるべくもあらず

(卅五)たびといふ履　重之家集上に春くら人たびといふくつを花につけて得させたる「あし引の山の櫻も見にゆかしこのたびえたるくつのをしさに」云々和名抄履襪類部單皮履唐令云諸爲履並烏色爲重皮底履單皮底云々和名與レ履同今按野人以二鹿皮一爲二半靴一名曰二多鼻一宜レ用二此單皮一二字一乎云々按に今世足袋といふはこれに起れる名にや足袋は宗五大草子上卷に見ゆ

(卅六)あらいみまいみ　和泉式部家集二にかたらふ人の來たりけるをきよまはることありとてかへしければつとめてかういひやりける「ちきりしをたかふへしやはいつくしきあらいみまいみ來てとはるとも」返し「すさのをの尊をいのるともなしにこえてそ見まし浪のやへかき」重之集上におもふ君にあひやなりたりけんまいみいむとて播磨へくだりてかへりて「はりまのやしかまの市にそめかすし我かちにのみ君を見つかし」頭書散齋致齋の事也年山紀聞

松屋筆記卷之八

東都　高田與清文儒稿

(一)身をしる雨　倭訓栞美部上にみをしる雨身を知る雨也思ひある身を知つゝをりからにふれる小雨なり又泪をいふと云說はあらず伊勢集に「かたみにも身をしる雨の降し我われもせきあへす君もこしかは」古今集を本にて世人身を知雨とはよみ侍ると顯昭いへりと云々與清按に此說ひがごと也忠峰集に「身をしれは出る泪もあはれ也春のなかめは常にふると」後拾遺戀二和泉式部「見し人にわすられてふる袖にこそ身をしる雨はいつもをやまぬ」この外泪の事によめる歌すくなからず倭訓栞の說かたくなゝ也此詞は伊勢物語古今戀四にはじめて見ゆ

(二)もろこし人のよすめかいておちつく　忠見集に小野の好古の朝臣の大貳にてもろこしの人の樣子めかいておちつくもといはれけるにそのといひ出したる人をさもいひけるにあひかはり侍りて「夢をこそねさめのほとにかたりけめ見たくまてにもきこえけ

るかな」云々よすめかいておちつくは樣子(ヨウス)めかしてもてつけおちつくさま也今世はもろこし人めかす人はいとすくなくて歌仙めかしておちつくをのこをんなぞおほかる

(三)名をかくしてよめる歌　忠見集にはじめて召あげられけるに「君か代にさかゆくへしとおもひせはしらまし物をたゝみねの道」此歌忠見といふ名をかくしてよみ入たり俊頼の散木集にもとしよりとよみたる歌あり頼政の歌に「ひをけさいかによりまさるらん」とも有此外おほかり曾丹集長歌にも「名をよしたゞと名づけつゝ」とあれどこれはかくしたるにはあらす

(四)交淡如レ水　忠見集に「底にして深しといふはたのまれすあさくて影のたえせすもかな」與清按に此歌の意友まじはりの龜鑑とすべし禮記表記に君子之接如レ水小人之接如レ醴君子淡以成小人甘以壞とあるによくかなへり

(五)ながむといふ詞　物をながむといふは長目にて遠きを長くと見やるよしの語といふはひがと也こは長く守り居て見るよしにて時刻の長きに出し語也古事記に「恒に長眼(ナガメ)にふれども」とあり曾丹集に「にははねとほゝゑむ梅の花をこそわれもをかしと折てなかむれ」「山かくれ風にしられぬ花しあらは春はすくともをりてなかめん」この外打守(ウチマモ)るよしによめる歌おほかり又聲をながむるなどいふは長く引てうたふ事也

(六)さゝき津にすがきさぼせり并えりさす　曾丹集に「さゝき津にすかきさほせり春とにえりさす民かしわさならしも」夫木抄春五にも見ゆ異本にさゝき津にをさゝきづまともさゝみづきともあるは共にひがと也果の句を夫木抄にしづがしわざなるらしと有こはいづれにてもきこゆさてさゝき津は近江の地名に佐々木ありふるく佐々貴山の君などいふ姓氏あるもこゝにおこれり後に宇多源氏此所にすみて佐々木氏といふ湖邊なれば佐々木津といへるなるべしすがきさぼせりは簀掻晒乾(スガキサボセリ)なり簀がきの上に雜魚を晒乾(サラシホ)せる也「サラシ」の「ラシ」を省ていふ日にさらしなどよめるにおなじ「えりさす」は言塵集三の卷に江に垣(イレ)をしまはして魚を入てとる也と見ゆ今も大津勢多わたりにて水中に葭簀(ヨシズ)を立まはして氷魚(ヒヲ)或は雜魚(ザコ)などとれり

頭書 和漢三才圖會廿三卷三丁ヶ漁具部に「琛音桑掻同澤同和名布之都介原音戸俗云惠利掻郭璞曰積レ柴於水中一聚レ魚而取レ之者也魚得レ寒入二其裏一因以レ簿圍捕二取之一者也臆海中取レ魚竹也云々下學集增補下二ノ廿七丁ヶ飫(スヂ)エリ云々

(七)もとあらの櫻　曾丹集に「わかやとの本あらの櫻さかねとも心をかけて見れはたのもし」云々宗久都の裝にもとあらの里といふ所云々もとあらの萩とは春やきのこしたる去年の古枝にさきたるをいふ也ときゝ侍りそれを木萩とも申也これは枝ざしなどもなべての萩よりもこはぐ〳〵しくあらはなるにやもとあらの櫻などもよみて侍ればとおもひたまひしに今きゝ侍ればもし此里の名によりてもやよみけんとはじめておもひあはせられ侍り」と見えて里の名ともしたれど曾丹集にまた「宮木野や燒生の萩も下葉よりもとあらにさかん花をしそおもふ」とあるによれば地名は後の傳會にてうけがたし萩に本荒(モトアラ)の義にて本のまばらに見ゆるよりいへる名にや

(八)雀の子たつ　曾丹集に「ねやの上に雀の聲そすたくなる出立かたに子やなりぬらん」此長びくといふ詞今も俗にいへり

(九)長びく　同集に「花見んと古郷さして行道をなか引ほとに風もこそふけ」此長びくといふ詞今も俗にいへり

(十)青(アラ)み原　同集に「道芝も今日はは(ハル)る〳〵あをみ原おり居るひはりかくろへぬへみ」

(十一)しろ綿ひける野邊　同集に「つはなぬくあさちか原もおいにけりしろ綿ひける野へと見るまて」

(十二)すゝめがくれ　同集に「淺ちふもすゝめかくれになりにけりむへ木の本はこかくれにけり」

(十三)おもとじの乳ぶさのむくい　同集長歌に「目も白妙に色わかす雪よりけなるおもとしのちふさのむくいする程に」云々按におもとじは母刀自(オモトジ)なり和名抄に辨色立成云孀母和名知於毛(チオモ)今按即乳母也と見ゆ異本には知(チ)もじなくてたゝ和名於毛(オモ)とありされど寶生院本にも知於毛とあれば異本の方は字落(モジ)たるなるべし母の一名を於毛(オモ)ともいへるにや乳(チ)ぶさは遊仙窟に奶房をよめり後撰に手ぶさにけがる云々曾丹集に手ぶさをひぢて云々などある「ふさ」も同義也頭書 實物集一廿三丁ウに行基菩薩ノ母ノ爲ニ孝養報恩シ玉ヒケルニハカクゾ詠玉ヒケル「百坂ヤ八十坂コエテ給ヒテシ乳フサノクムイ今日ソ我スル」

(十四)大あらき　万葉三に「太皇之命(オホキミノミコトカシコミ)恐　大荒城(アラキ)乃時爾波不有跡雲隱坐(クモガクレマス)この荒城は荒籬(アラガキ)の略語にて殯(モガリ)をいへりと云説さもあるべし同七に如是爲而也尚哉將老

三雪零大荒木野之小竹爾不有九二」兼盛集に「君か代をまちしもしるく大あらきの里のさかえを見るかたのしさ」曾丹集に「おほあらきの小笹か原や夏を淺みはたまく葛はうらわかみかも」夫木抄雜四に長能「大あらきの遠野の外にすむ人を見すてゝゆけは袖そつゆけき」これらは地名ときこゆれば神名帳の大和宇智郡荒木神社ある所なるべし古今雜上に「おほあらきの杜の下草おいぬれは駒もすさめすかる人もなし」後撰雜二忠岑「おほあらきの杜の草とや成にけんかりにたに來てとふ人のなき」同躬恒「人につくたよりたになし大あらきの杜の下なる草の身なれは」拾遺夏忠岑「大荒木の杜の下草しけりあひてふかくも夏のなりにけるかな」同雜春躬恒「いたつらにおいぬへら也おほあらきの杜の下なる草葉ならねと」六帖二に「おほき鷹いまとしなれは大あらきの杜の下草人もかりけり」此歌貫之集三に初句おほつかなとありこれらの下草をよみ合せたるは地名にあらず大なる荒木の立る杜也曾丹集十二月中の歌に「大荒木のおほくの枝もなひくまてよはにさひしき冬の夜の風」とあるをも思ふべし万葉十一に如是爲哉猶八成

牛鳴大荒木之浮田之杜之標爾不有爾といふも浮田の杜に大なる荒木たてればしかよめる也されど此万葉十一の卷の歌は七の卷の歌の誤にてもあるべし曾丹集四月中の歌に「大荒木の下草までに風ふけはなひきて神をまつりあへるかも」と有は賀茂の社をいふにやともおぼゆおほあらきといふ詞かくさまたゝなればよく思わきて知べし

（十五）玉限　万葉一の卷廿一丁ウ長歌に玉限夕去來者云云此玉限を玉蜻の誤といふはしひごと也限の字をカギロヒとよみて蜻蛉に借たる也さて玉はほめて添たる字にて外に意なしされば玉限二字をカギロヒとよむべきをさかしらに改しはひがごと也

（十六）清濁音のよみかけの歌　万葉一の卷廿七丁オに旅爾之而物戀之伎乃鳴事毛不所聞有世者孤悲而死萬志此歌鳥の鳴に戀敷とよみかけたり鳥の鳴は濁音戀敷は清音なれば清濁をかよはせてよめり此體後の歌にはいとおほき例にて悉盡しがたし

（十七）牟と毛は常に通はし書例　万葉集二の卷廿五丁ウ「向南山陣雲之青雲之星離去月牟離而」此牟を毛の誤として改るは臆說也此外万葉に牟を毛に用し所おほ

かり牟は音「ボウ」にて呉音は「ム」なり「モ」にも通はせし例は秋萩帖にもあり毛も「ム」に用しと字鏡に聲を毛古梓を毛保古など書り草假名の「ん」も毛の略字なるに貫之自筆の古今集堤中納言集などに「モ」にも「ム」にも用ふされば牟と毛はいづれにかよはし用てもくるしからぬ字也新撰万葉にも牟を「モ」に用し所あり

（十八）かいとの道　曾丹集に「山里はかいとの道も見えぬまて秋の木葉にうつもれにけり」此かいとの道を詞花集秋にはゆきゝの道と改て入られたり按に「かい」とは「かいたをり」の略にや「たを」の約「と」なれば「かいとり」といふを「り」を省けるなるべし光行海道記に粟田口の堀道を南にかいたどりてあふ坂山にかゝればと有今も坂東の方言に道を「かいだう」といへりこれ「かいと」の訛れるにてもあるべし

（十九）かひたるきと云詞　俗に「かひたるき」とも「カッタルキ」ともいふは「かひたゆき」の訛也曾丹集に「わきもこかけさの朝いにひかされてせなさへあまりかひたゆきかな」と有肘タユキの「な」もじを省し語也「タユキ」は手もたゆき足たゆきなどのたゆきにおなじ江戸にては「ダルキ」又「ダルイ」などいへり

（廿）すぐろの薄　袖中抄十九に顯昭曰すぐろのすゝきとは春の燒野のすゝきのするの黒き也云々又曰すぐろはすこし末黒き草といふべきなめり云々與清按に末黒き草といへる說よろし童蒙抄にも見えたれど此外の說どもはいづれもうけがたし又万葉八の卷十四丁の春山之開乃乎爲黒爾春菜採とあるを引けるも誤也こは縣居翁の考に手島里を寫誤しならんといはれしぞしかるべき曾丹集に「春霞たちしはきのふいつのまに今日は山邊のすぐろかるらん」袖中抄十九基俊歌に「春山のせきのをすぐろかきわけてつめる若菜にあわ雪ぞふる」これらは皆末黒の義也されど基俊の歌の方は万葉をひがよみしてとられたりと見ゆればいかゞあらん曾丹がすぐろかるらんとよめるは未黒なるとうづなし

（廿一）おほあらきの駒　曾丹集に「よそに見しおほあらの駒も草なれてなつくはかりに野はなりにけり」此歌夫木抄廿七の卷には二の句おほあらきの駒とありさては大荒木の木間とつゞけし序歌にて駒

といはん料に縁語もてよせたる也大荒木は已にいへるがごとく三くさの義あるが中にこれは木のまばらに立るさま也

(廿二)あさけのま人　曾丹集に「をたまきはあさけのま人わかことや心の内に物はおもはし」夫木抄卅六の卷にも此歌出て初句をだまきに云々果句物おもふらんと有そも〳〵曾丹集の標注は安田躬弦岸本由豆流片岡寛光など心をあはせてつくれりしに事もなき歌にも不レ解よしにて注をくはへず誤多きとはあげつくしがたきまでなるはいかにぞや此あさけのま人の歌をば不レ可レ解とて注をくださずこは古事記中卷崇神の條に活玉依毘賣其容姿端正於レ是有二神壯夫一其形姿威儀於レ時無レ比夜半之時倏忽到來故相感共婚供住之間未レ經二幾時一其美人妊身爾父母怪二其妊身之事一問二其女一曰汝者自妊無レ夫何由妊身乎答曰有二麗美壯夫一不レ知二其姓名一每レ夕到來供住之間自然懷妊是以其父母欲レ知二其人一誨二其女一曰以二赤土一散二床前一以二閉蘇(ヘソ)紡麻一貫レ針刺二其衣裳一故如レ敎而旦時見者所レ著レ針麻者自二戸之鈎穴一控通而出唯遺麻者三勾耳爾即知下自二鈎穴一出之狀上而從レ絲尋者行至二美和山一而留二神社一故知二其神子一故因二其麻之三勾遺一而名二其地一謂二美和一也とある故事をよめるにて誰もしれると也「まうと」は眞人にて男子の美稱也源氏物語に男子を美稱してまうとともあそんともいへるとおほし

(廿三)めぐり〳〵　曾丹集に一日めぐりの歌「わかひとひめくりめくりをせし程にしらき舞する年は來にけり」與清按に榮花物語本の雫の卷(四十丁)に御ねぶつはじまりてめぐりよむさまあはれにたふとしこのまと居たち皆ちやう衆しよ衆にてなかどこにさぶらふ云々又ちごものめぐりするとも見えたり云々この兒どものめぐりもめぐり〳〵も同事にて今も兒輩の大道(ダイダウ)めぐりといふ戲(タハブレ)するに似たりしらぎ舞は新羅舞也

(廿四)灰きえてわかちし玉　相摸家集佛舍利の歌に「はひきえてわかちし玉もつとむれはいとゝ光そかすまさりける」云々此灰消てわかちし玉といふは舊本今昔物語三の卷八國王分二佛舍利一語に佛滅度したまひしをり舍利を分取て舍利塔瓶塔髮塔などつくりしよしありてその故事をよめりし也こは三藏法數卅

一の卷大藏法數四十三の卷などよりして佛書にあまた見えたり光のますといふも義楚六帖に見ゆ

(廿五)まねくる　相摸家集に「わくらはにまねくるふしやたえなましいとあやまちのしけく見ゆれは」云々此まねくるは手して糸繰(イトクル)とをいへる也人をまねくも手をうごかすよりいへばいづれも同語なるべし

(廿六)ほふげづき　源氏物語帚木の卷に吉祥天女をおもひかけんとすればほふげづきくすしからんこそ又わびしかりぬべけれとてみな人わらひぬ云々此ほふげづきといふ詞古き注釋どもによくときたるはなし按に法氣付の義にて佛法氣づきて佛くさきよしをいへる也

(廿七)泪川　泪川は後撰離別にをとこのいせの國へまかりけるに「君かゆくかたにありてふ泪川まつは袖にそなかるへらなる」夫木雜六に輔親「泪川舟出やせまし伊勢の海のみかはへ渡る湊たつねて」此等の歌は伊勢にある證とすべし又相摸家集に「陸奥の袖の渡りの泪川心の中に流れてそすむ」此歌にては陸奥にあるよし也袖の渡も陸奥の名所也又新撰歌枕三の卷に泪河多本伊勢國に入雖レ然古今に八幡河を涙河と云と見えたり其故は彼序に男山のむかしを思ひて女郎花の一時をくねるといへり彼根源をみなへしとなりし女八幡にて身をなげてうせぬ賴風もおなじくうせぬ賴風うづみし所を男山といへり其ふもとに女塚とてあり彼女うづみし所也故に對して女塚男山といふ也八幡川を泪川といふ事も此事におこれり歌云「いかはかりいもせの中をうらみけんうき名なかせる泪川かな」此歌は彼二人の夫婦の恨の事をおもはせてよめりこれにより彼川をば泪川といふにや伊勢物語云「いつくまておくりはしつと人とはゝあかぬわかれの泪川まて」此歌は有常が娘の京へ行けるがよみて業平が奈良に有ける所へ泪川のはたよりおくりのものゝかへりけるにとらせける歌と見えたり然ば泪川伊勢に不レ可レ限歟又うちまかせて戀と云らんあり歌に「泪川その水上をたつぬれは世のうきめよりいつる也けり」と有此歌も又物おもふ時の我身也けり」とよめるもひたすら戀ときこえたり云々與清按に泪川は伊勢にも陸奥にも京より奈良へ行道にもあり又名所ならでたゞ泪の事によめるもありよくよく思ひわきて知べし

(廿八)夢ぬしの神　相摸家集に「うき事をいそきも見せんよとゝもにたゝゆめぬしの神をゝかまん」とも有此夢ぬしの神は夢を主ごる神にや

(廿九)よごる井しほとゝ云詞　俗言に物のけがれたるを「よごれる」といふ古きと也相摸家集に「さなへひきもすそよごるといふ田子もわかと袖はしほとからしな」と見ゆしほとからしなは今俗に「ジメ〳〵スル」又シメッホイなどいふに同じ鹽染たるさまよりいへる詞也頭書雄長老百首廿一丁オ苔の歌に「君かかほ千世に一たびあらふらしよごれ〳〵て苔のむすまで」

(卅)いなかた　小町家集に「秋の田のかりほに來ゐるいなかたのいなとも人にいはまし物を」云々此いなかた何とも知がたし堀川百首仲實朝臣歌に「秋田かるをしねのひたはかけたれといなおほせ鳥の來なくなるかな」とよめるをおもひあはすれば稻負鳥の類にや

(卅一)まほかたほ　小馬命婦家集にこのしたの汀にあし穗やう〳〵出てたてり「人しれぬかけとや賴むあしの穗の今日はまほにも出にけるかな」云々此歌によればまほは眞秀の義なるとうづなしきてかたほは眞秀ならで事たらはねば片秀といへる也千載集の歌に眞青の義によみかけしは後の誤にや

(卅二)河屋　小馬命婦家集に御山のしりへに種々のものおほしたる中に立石あり水の尻はかはやなり「おとにきく立島かとそ思ひぬるからき水にもつけて見るかな」云々按に古事記神武段に爲大便之溝流下ともありていにしへは川上に屋をつくりて厠とせりこゝのかは屋も庭の泉水の尻に厠あるよしなりされば厠の訓義は河屋也といふ說よろし厠舍の義といへるは後の事也頭書下學集和爾雅類聚名物考宮室部倭漢三才圖會八十一

(卅三)むまや〳〵いまや〳〵　小馬命婦家集にみま屋のしりへにいたりてすさびして「ひとりねはかひなかりけり駒なへてかけのむまやとまちて賴まん」云々按にこのむまやとまちては今やと待てとよせたる也古今六帖にあつまちのうまやうまやとかそへきて云々大和物語にしの塚のうまやうまやと云々などよみかけ神道集に午の時を今の時など書るみな同義にて馬と今とかよはせたる也

(卅四)あさえ　馬內侍家集にくれなゐの花ををとこの見せにおこせたれば「くるしとて色に出れはあさえけり染てくやしき花を見るかな」云々此「あさえ」は「あさゆ」ともはたらく詞にて「わかゆ」などの「ゆ」に同じ色の淺くなる事也

(卅五)しのぶ摺　しのぶ摺は縣居翁の說にしのぶ艸の形を紫の色して摺たるを春日野の若紫のすり衣とよめるよしいはれしはさると也敦忠家集にちかもりがからものゝ使にくだるいはにかねの火打をほくそに沈をしてしのぶをすりたる布の袋に「打つけに思ひいつとや故郷のしのふ草にてすれる也けり」云々此詞書にてしのぶを形にすれるとしられたり歌にてはしのぶ艸もて摺れるかともきこゆれどさにはあるまじくなん

(卅六)落花の歌　余が落花の歌に「もろともに一木にさけとちるをりは所さためぬ花の行すゑ」とよめるが有此頃梁書をよむに之によくあへる故事あり梁書四十八列傳四十二儒林の卷范縝傳に初縝在レ齊嘗侍二竟陵王子良一子良精二信釋敎一而縝盛稱レ無レ佛子良問曰君不レ信二因果一世間何得レ有二富貴一何得レ有二貧賤一縝答曰人之生譬如二一樹花一同發二一枝一俱開二一蒂一隨レ風而墮自有下拂二簾幌一墜上於茵席之上自有下關二雞牆一落上於溷糞之側上墜二茵席一者殿下是也落二糞溷一者下官是也貴賤雖二復殊一途因果竟在二何處一云々

(卅七)こほりの魚　海人手子良集大納言師氏集に「しもつきのひよりも宇治のあしろ木にいたもこほりのいをにさりける」云々このこほりの魚は氷魚をいへる也いたもはいたくもの略也十一月の氷よりもいたくもこほれる魚とよめる也

(卅八)郭公の名義　守覺法親王御集に「ほとゝきす名のるにしるしこれそこのたれその杜のありすなりける」云々按に江談抄にもホト、ギス鳴て飛去よし見ゆさてはホト、ギスはなく聲よりおぼせし名也

(卅九)「すげなくし」「よすが」「すがる」など云詞　源氏物語桐壺にさまあしき御もてなしゆゑこそすげなうそねみたまひしか云々少女に世のひがものにてざえのほどよりはもちひられずすげなくて身まづしくなん有ける云々與清按に縣居翁の新釋に因所無(ヨルトコロナキ)の義といはれしがよしよすがなくの「よ」を略き「か」を「け」に通はせし詞也万葉十七の卷四十七丁に「心にはゆるふとなくすかの山須可奈久のみや戀ひわたりなん」蜻蛉日記下卷に「打そはみ君ひとり見よまろ小菅まろは人すけなしといふ也」顯季集にいかにせん野

澤におふる丸菅のまろすけもなき戀にけぬへし」此等の歌をかうがへ合せて「ヨスガナキ」の略轉語なるを思ふべしさて「ヨスガ」の「ヨ」は寄(ヨリ)の略也「ス」は「ツ」の通音抔を「ツキ」とも「スキ」ともいふに同じ「カ」は「キ」の通音にて附(ツキ)といふを「スガ」と音を通はせし也「スガル」「スガリ」などいふ語も「ス」は「ツ」なり「カル」は「ク」の延語「カリ」は「キ」の延語にて附(ツク)といふよし也こを倭訓栞に末枯(スエガレ)の義といひしはいみじきひがごと也堀川百首上顯仲歌に「まきのはにすかるたる氷(ヒ)の春風に打とけてなく鶯のこゑともよみ金葉に露のすからぬ草の葉もなし盛衰記に童(ワラハ)すがり宇治拾遺に杖にすがりてなどあるみな附(ツキ)の意也俗言に取付(トリツク)すがりなどいふをもてらしあはせて知べし又虫の名に蝶贏(スガル)あり細腰蜂のことにてものゝ枝葉にすがるものなればいへるなるべし

松屋筆記卷之九

東都　高田與清文儒稿

(一)よぶこ鳥　源賢法眼集による喚子鳥(ヨブコドリ)をきゝて「跡たえて人もかよはぬ山里のなに夜もすからよふ子鳥そも」云々與清按に喚子鳥の説まち〳〵にて決定せず縣居翁ハクワツホウ鳥の事にてカホ鳥といふもこれ也といはれたれどクワツホウ鳥は夜鳴鳥(ルク)ならねばうけがたし又カホトリといふも貌(アヤガホ)のうつくしきによれるにて朝臣また良花(カホバナ)などの「カホ」に同じくて別物也此外の諸説ひとつもむべなはるゝはなしそもそも喚子鳥は何鳥(ナニトリ)にもあれその鳴聲より喚子鳥(ヒトクサ)とおほせしにて一種の鳥にはあるまじき也子鳥は小鳥(コトリ)にて大鳥(オホトリ)に對(ムカヘ)たる稱也都鳥も鷗(カモメ)の屬(ダグヒ)はみなみや〳〵と鳴がゆゑにみや小鳥といひ鷗子鳥(ヌエコドリ)もヌエ〳〵と鳴よりヌエ小鳥といへるなるべしされば喚子鳥(ヨブコドリ)は何の鳥と定めずたゞ打鳴(ク)小鳥をいへる也と知べし　頭書リハエボドリの通音也エボドリはエボウエボウとなく春夏の比夕或は夜なく鳥也

(二)曉月房　夢窓國師御詠草に二階堂出羽守道蘊亭にて中納言爲相卿曉月房など參會法談の後人々歌よみけるに迷情之中假有二生滅一と云題にて「夜のほともいくたひ出て入ぬらん雲間つたひに出る月影」云云此曉月房は爲守朝臣にて爲相卿の弟爲家卿の子母は阿佛也十六夜日記に大夫と書れたる是也　頭書他阿上人集に所々に見ゆ

(三)ずゐき　夢窓國師御詠草に俳諧「芋の葉におくしら露のまたらぬはこれやすゐきの涙なるらん」云云芋莖をズキといへるもやゝふるきと也いにし文化十三年といふとしの夏ひでりしてたなつ者みなかれはてなんすと世中いひさわくにこゝかしこの寺々にて請雨の法など行はれししるしにや雨ふりける後石井盛時が許よりずゐきのいとながうのびたるをおこせしに余がよみてやれるうた「之も又御法の雨のめくみかと芋からにさへすゐきせらるゝ」　頭書多門院日記一の卷天文十三ノ三ノ二の條に蛭(ヒル)ニ唐の隨喜(ズキ)テ黒焼(クロヤキ)ニシテカケタルハ水ノ如クニ消ヌルト云々

(四)くらぶの里　祭主輔親家集に近江の國のくらぶの里といふ所にて月あかき夜とゞまりて「よそにてはくらふの里ときゝしかとあかねく照す秋の夜の月」云々此歌續万葉論春上に引もらされたれば補べし

(五)わたりあひ川　祭主輔親家集にしりたる人の承香殿のみこの齋宮にてくだり給ふ御供にある神宮の九月まつりにまうでゝわたりあひ川といふ河わたるによるなれようちそひていふ「君にかくわたりあひ川なからへて思ふ心のあせすもあるかな」返し女「わたりあひの川わたりにもそのかみのうかりし瀬をはわすれやはする」常には渡會と書てワタラヒといへど此歌にはワタリアヒとよみたり

(六)立居といふ詞　祭主輔親集に故堀川どのゝ御ざうしにをんなものまうして立たり瀧のほとりに男かくれて見る所に人々歌よむにおしつくる三月なり「行人は影やゝとると瀧つ瀬の浪もろともに立居こそみれ」云々此詞書と歌とをてらしあはせておもふに立居は立たり居たりにあらず立てある事にいへる也されど立たり居たりを立居といひしもあり

(七)すはうに書つく　祭主輔親集にむかしかたらひし人のもとにある女の扇そめにやるを見て蘇芳にかきつく「そめ姫の色にしあへは夏の扇うすき物からうつろひやせん」云々按に江戸人などは物染るとは

染屋にうちまかすれど京人は染草をそへて染屋につかはしたゝ染る手間賃ばかりにて染さするものおほかりこれ古風の殘れる也といぶべし

(八)いひとき 井鴈鷁 祭主輔親集に人々あまた居て物などいひて手まさぐりにおものをまろかして鳥のかひこのかたをしてかくいふ「かひにしてあまたしあれは知かたしこやいひときのこにはありけん」むまのじようかねすみ「はしよりもたつぬへけれとかへらねはまたいひしらすなに鳥の子そ」云々與清按にこのいひときはいひとよの書誤也和名抄羽族名部に張華博物志云鴈鷁鳥人截二手足一棄レ地則入二其家一拾取之一漢語抄云以比止與云々新撰字鏡鳥部に鷁甘之反鷁伊比止與云々皇極紀三年に三月休留產二子於豊浦大臣大津宅倉一私記に休留茅鴟也云々天武紀十年に八月壬午伊勢國貢二白茅瑪一云々

(九)ほき道ほきの陰道ぼさ 山家集上に山寺の花ざかりなりけるに昔をおもひ出て「よし野山ほきちつたひにたつね入て花見し春は一むかしかも」同集下戀百十首中に「あやふさに人目そ常によかれける岩のかとふむほきのかけ道」夫木雜三道部にも見ゆ藻鹽草道部にほきとは狩する人の鹿をまつ時山人などのとほる道にはあらす狩人ばかりとほる道と云々ただ道或は云たゝ山人などのとほるをもいふといへりまことに常にいふ詞也云々山ほきぢづたひほきのかけ道云々倭訓栞保部に岸險をいふ今も京北山邊にはいふ詞也又ほきともよめり筑紫人はほきといひ因幡などにはぼけともいふ也云々與清按に武相の國にてはけといひ下總常陸にては赤ぼつけなどいへり夫木の抄本にほさのかけ道とあるは誤也ほさは笹村艸村などを武藏相摸にて「ほさ」又は「ボサカブ」などいへり余がこの詞をよめる歌あり「心なくまゝなきはらひ行道のほさにおとして山鳥のたつ」頭書顯季家集にわきも子は栗にやおこし米は和名抄麴糵類部に粔籹和名於古之古女と見え舊本今昔物語桂川地藏記などにも出たり頭書貞文雜記六ノ四十三丁 ヲガコシゴメノコミュ

(十一)袖笠 行宗家集に「雨ふれはまちしもせしなおしたかへ今よゐはゆかん袖笠をきて」云々袖笠は袖をかづく事にてひぢかさといふにおなじひぢかさ雨は袖中抄に久かたの雨の誤也といひしはさるとなれど源氏物語などのは臂笠雨の義也催馬樂にもヒヂカサノ雨もふらなんとあり又按に笠雨は漬笠雨にて笠を漬ばかりの小雨をいへるにてもあるべし頭書袖笠盛衰記四十二ノ十三丁ウ

(十二)ふくぼし 井瓜まろび 行宗家集に保延三年侍從中納言許へなどうりはたばぬそといひしかば中納言「ときのよに君かふくほし見ゆるかなたゝ今人のこれをたひたる」返し「ふくほしのけふより見ゆる身にしあれは瓜まろひしてよろこひそする」云々按にときのよには時の間にの寫誤也ふくぼしはひきほしの通音なるべし源氏夢の浮橋にひるあなたにひきほし奉れたりつる云々とあり細流に海草なるべしといひしはうけがたしこは瓜をむきて干たるものにやあらん空穗ににひ色のをしき四してひきぼしくだものなどゝもあればいにしへ菓物どもに賞翫せしものにや

(十三)さくりの上に尻かけて 行宗家集に田家秋雨「山里のさくりのうへにしりかけてをしねこく間に雨そ降ぬる」異本にさくりをつくらと有與清按に「さくり」は今關東の俗語に「サタル」又「サクヲ切ル」なごいへり鍬もて畑を條々に打かへすと也祝詞に「サクナダリ」とあるも意はおなじさて右のごとくさくりて畝つくりたるをもサクといへり横ザク縦ザクなごいふその「サク」の上に尻かけて稻こくをよめるなるべし又異本につくらとあるは土塵にや土塊の通音ともきこゆ新撰字鏡土部に墝高也岡也壤也豆牟禮云云和名抄田園類部に風俗通云培壠田中小高也漢語鈔云豆牟禮云々なども見えたればこの豆牟禮を寫しひがめてつくらと書るにても有べし「つむら」とはかよはしいふべき事なれど「く」は聞えがたし頭書高忠聞書上四十四丁ウに小牛を射べきやうの事さくりに乘て追也云々三議一統上ノ七十八丁ウ梅花無盡藏二ノ一丁ウ疏サクリ犬追物ノ詞ニ見ユ

(十四)おもさるがく 行宗集に「いかにせん橘くひに負ぬれは面猿樂をするそうたてき」云々與清按に此歌の意は橘の喰くらべして喰負たる者面猿樂をす

る事也おもさるがくは面(オモテ)してさま〴〵の物まねし打さるがちて人笑かすわざなるべし

(十五)かぶき　かぶきといふ語は頭振(カブキ)の義也神代紀上に後手(シリヘデ)に振(フキ)つゝとも万葉に棟業(ヤマブキ)に山振(ヤマブキ)とも書るなど皆振(フル)とをフキといへり今俗上方(カウベガタ)勝(カブク)にて物の傾(カウバ)を上かぶきなどもいへり行宗集に田の家の秋の雨「雨ふれは門田の稲そしとろなる心のまゝにかふきわたりて」

(十六)扇のかの目　行宗集に内にて大夫のすけの扇のかのめかためてとてつかはしたりしかためてつかはすとて「かにの目のはなるゝたひにいとゝしく君か心のうしろめたさよ」返し大夫のすけ「今日よりは君かかのめにかたまりぬ人もあふきはおもひはなたん」云々輿清按に延喜式に蟹目釘(カシラ)あり蟹の目のさまに頭を丸くつくりし釘なるべし源平盛衰記には扇ノ蚊ノ目と書たりかのめといふは後の通音なるとしるし

(十七)名に高き二夜　右京大夫家集に秋の月あかき夜「名に高き二夜の外も秋はたゝいつもみかける月のかけかな」云々按に二夜とは八月十五日夜九月十三夜をさせる也十五夜を賞するは延喜の頃の書におほく見えてから國の風をまねばれしわざ也十三夜は寛平の御門めではじめたまひしこと中右記に見ゆ

(十八)寺にて手習ふ　右京大夫集に太皇太皇宮よりおもしろき御綿どもを中宮の御かたへまゐらせたまへりし中に寺のもとに人の手ならひしてとてことばがきしるのまじりたるいとあはれにて「めくりきて見るにたもとをぬらすかなるしまにとめし水くきの跡」云々按に宇治拾遺にも信濃の國なる人の子寺にのぼりて手習せしが母のとりおとしたるまをとこの文を父の前にてあらぬ事によみ直せし事見ゆ

(十九)むくれにし　非むくの木むくの實　右京大夫集にかねみつ中納言のしきじなりし頃むくを六つゝみおこせたるにいかゝ云べきと播磨の内侍いはれしかば「むつの道をいとふ心のむくいには佛の國にゆかさらめやは」云々むくを六つゝみとは木欒子を六顆つゝみたる也本草和名木部下に欒華蘇敬注云堪レ爲二數珠一者也和名牟久禮之云々　和名抄木部に蘇敬本草注云欒其子堪レ爲二數珠一者也漢語抄云木欒子無久禰遲之乃木云々漢鹽草木部に欒花もくれん志云々などみえしむくれにしをむくといへる也椋の木椋の子などいふことも也天武紀十年に椹此云二武規一云々本草和名木部中に椋子木和名牟久乃岐云々新撰字鏡木部に村牟久乃木云々また椹桑實牟久乃木云々また檓相二字牟久云々また杕杜松二字牟久乃木云々また杜松二字牟久云々和名抄菓部に椋子和名本草二無久云々之らのむくは別物也榮花うたがひの巻にいたじきを見ればとくさむくのはなどして四五百人手ごとになみ居てみがきのごふ云々平家物語殿上闇打の段にはりまよねはとくさか椋の葉か人のきらをみがくは云々和名抄膠漆類部に椋葉無久乃波云々七十一番職人歌合第十三番ゑぼし折に「いかにせん死なれぬ戀の痩やまひむくの實色に身はなりにけり」判詞に左戀にやせくろむ事本說なきにあらずゑぼしのむくのみ色よく思ひよせたるにや云々此むくの實は木欒子の事也木欒子の葉は今世も木賊とともに物みがく具とす

(廿)はだきりくべて　右京大夫集に「うらやましほたきりくへていかはかりみゆわかすらむ秋の山里」云々新撰字鏡火部に爐(火餘木也保太久比云々難字記火部に爐タヽキ云々又ホタクヒ云々又モユクヒ

(廿一)反故を紙に漉て經をかく　右京大夫集におもひおこしてほぐえり出して料紙にすかせて經かき又さながらうたせてもじの見ゆるがまばゆければ裏に物おしかくして手づから地藏六たい墨がきに書まいらせなどさま〴〵心ざしばかりしらせず心ひとつにいとなむかなしさもなほためしなし「すくふなるちかひたのみてうつしおくかならず六の道のしるへに」などなく〳〵おもひねんじてあせう上人の御許へ申つけてくやうせさせ奉るさすがつもりにけるほうぐなればおほくてそんしようだらになにくれさらぬ事もおほく書せなどするに中々見じとおもへどさすがに見ゆる筆の跡ことのはもかゝらでだに昔の跡は泪のかゝるならひなるを目もくれんも消つゝいはんかたなし云々按に榮花物語にもほぐを紙にすきて經書し事見ゆ衣の珠の巻に七月一日正日法住寺には

かの中納言非違別當給(タマヒ)ける也人の申文うれへ文などありけるをとりあつめて紙にすかせてほけきやう書んとおぼしけるかみに經かきまたあみだぼとけつくりその經にぐしてくやうし奉らんとおぼしおきてたりけるをその日はけんしんあざりこうしにて說經せさせ給けるあはれにいみじうたふとかりけり云々

頭書字治拾遺十二の卷八葉に反古のおちいりたるをひろひあつめて紙にすきて經を書寫し奉る云々

(廿二)白薄樣の色々の公事を書たる　右京大夫集に大宮の入道內大臣うせられたりしこゝろきんつねの中納言かきこもりて五節などにもまゐられざりしにしろうすやうの色々の公事を書たるにかきて人のつかはしゝにかはりて「まよふらん心のやみをなけくかなとよのあかりのさやかなる頃」返しうすにびの薄やうに「かきこもるやみもよそにそなりぬへきとよのあかりにほのめかされて」云々辨內侍日記上に十一月廿二日云々ゆつえのおとまでもさえとほりておもしろきにきりみすのほとに藏人の侍從むねまさが聲にてゆゝしき月のひかりかなしろうすやうのころこそおもひやらるれといふげにかぎりなく見ゆれば辨內侍「かねておもふとよのあかりさむけさをましていかにとすめる月かな」云々

(廿三)ぐた〳〵　大槐秘抄にしほ〳〵ぐた〳〵としてあさましげなる雜色一二人ばかりぐして云々此しほ〳〵は今もしほ〳〵としたしほれかへりたなど云詞也ぐた〳〵も今俗にグッタリしたグニャ〳〵したなどもいひて古言の共に殘れる也

(廿四)新井白石の俳諧　新井白石年わかきほどは俳諧歌を好て芭蕉を排せり正德三年正月詩經の出レ自ニ幽谷一遷ニ于喬木一といふ章をよみて頓悟し前非を悔て俳諧を捨ぬといへり白炭の發句に「白炭や朝霜消て馬の骨」玉子を「ゆて玉子糸てひもとく水仙花」人の見物場へ行て下緒(サゲヲ)をぬすまれたるに下緒をおくるとて「もらはるゝ身をは思はすぬすまれし人の下緒のをしくもあるかな」

(廿五)船靈(フナダマ)神記　船靈の神はいづれの神にますといふとさだかならず神名帳に津の國住吉郡船玉神社をのすこれ船玉命とまうす神なりといへどたしかなる書には見ゆるとなし續日本紀に能登(ノト)といふ船の船靈に從五位下のかうぶりを授(サヅケ)られしよしあり日本紀の神功皇后の卷には住吉の和魂(ニギシラマユキ)往來の船を見んとのりごちたまひ延喜式の使を唐に遣さるゝ時の奉幣の祝詞には船路の平(ヒラカ)ならんとを住吉の神に祈るよし見え万葉集には「墨吉(スミノエ)の吾大御神船のへにうしはきいまし船ともにみたゝしまして」ともよみたるなどおもひわたすに舟の守りの神は住吉の大神にて底筒男命中筒男命表筒男命神功皇后の御魂をまうすなるべしまた廿二社注式の異本には豐玉姬を申すとも海童を申すとも見えある說には天石楠船命をますともいへりいづれもいはれあることゞもなればよしあしのことわりは定めがたし元亨釋書には華嚴經の守夜神を船神也といひ神社鎭座歲代考には箕宿神を浮船神也ともいへり今の世西の國また常陸國などから國の天妃の舟の神とし東のくに〳〵には常陸の阿波大杉の神を舟の守りの神とすればいづれの御靈をいつきまつらんも人々の心々なるべし甲斐國吉田の神官たち注式の異本の說をむべないて豐玉姬を舟靈の神としいつきまつること久しくこのいのりのしるしをかうぶれるものおほかりとなん豐玉姬は海神の女にて彦火々出見尊の御妃也こたびその御かたをゑがき余にこと書そへてよとこふまゝに文政のはじめの年の十二月のついたちの日賀茂縣居翁の學の道を村田繩錦翁にうけつげる高田與清しるす

(廿六)おのが田へ水を引水かけ論　俊惠法師が林葉集一の卷に苗代をよめる「苗代の水をひき〳〵あらそひて心にえこそまかせさりけれ」云々按に俗言に己が田へ水を引といひ又水かけ論などいふによくかなへり

(廿七)三月盡　井小三月盡　春のはての日を三月盡といひ秋のはての日を九月盡といへるはから國にまねびていへる語也林葉集一の卷に小三月盡の心を「たか爲にかたみにあすをとゝめ置て今宵は春の立かへるらん」云々小三月盡は三月晦日あれは廿九日也小の月ならは廿八日をいふべし明日をとゝめおきてとよめるにて知べし

(廿八)せゝらき　林葉集二の卷に「窓ならぬ谷のせせらきふみみつる軒もうれしなともす螢は」云々與清按にセヽラキは菅家万葉にセラギとよみ太平記にセヽラキと有セヽラキナガヽル水などもいひて水の淺くさゝ浪立て流るゝさま也嚢抄にも見ゆ後世濁水をセゝナギといふは節用集に見えたり頭書顯昭陳狀に贅養之

家中全不レ可レ堀ニ溺渓一云々又満せゝなぎ云
云鵜飼謡詞におゆこさばしるせゝらぎに云々

(廿九)三月三日の草餅　皇太神宮儀式帳三月例に三日節新草餅作奉　氏太神　并荒祭宮供奉然後禰宜内人物忌等集ニ酒院一直會被レ給云々止由氣宮儀式帳三月例に三日節新草餅作奉　氏二所太神宮供ニ奉御饌殿一然後禰宜内人物忌等直會被レ給云々　文徳實録一の巻に先レ是民間訛言云今茲三月三日不レ可レ造レ饌以レ無ニ母子一也識者聞而惡レ之至ニ于三月一宮車晏駕是月亦有ニ大后山陵之事一其無ニ母子一遂如ニ訛言一此間田野有レ草俗名ニ母子草一二月始生ニ莖葉一白脆毎レ属ニ三月三日一婦女採レ之蒸擣以爲レ餻傳爲ニ歳事一今年此草非レ不レ繁生民之訛言天假ニ其口一云々曾丹集に「はゝこつむ彌生の月になりぬればひらけぬらしなわかやとの桃」後拾遺俳諧に實方朝臣「みかの夜のもとひはくはしわつらはしきけは淀野に母子つむ也」和泉式部家集三に石藏よりところおこせたる手箱に草もちひいれて奉るとて「はなのさと心もしらす春の野にいろ〳〵つめる母子もちひそ」藤原長能集に三月三日草もちひして法師のかたをつくりて是にむろつくりてまゐらせよとおほせごと侍りしかば云々與清按に三月三日草餅の事公事根源世諺問答拾芥抄上本卷などにも見えてもとは荊楚歳時記によれる歳事也三日の夜の餅の事は源氏葵の卷四十七丁ウ同寄生の卷卅四丁ウなどに見えて河海抄に悉く注釋せられたり頭書壒嚢抄一ノ二丁オ

(卅)二子栗　藤原長能家集に物いひ侍し女我は今は老にたりこれが中にとてむすめよびいだして物などいひてはべるほどに栗をものゝふたに入て出して侍りしそのふたに書つけてはべりし「いつれをかわきてしのはんふたこより思ふ心はひとつ也とて」云々今世も栗に二子ぐりといふがあり三ツ栗の中なきをいへり三ツぐりは古事記歌に美都具理能曾能那迦都邇袁云々万葉九に三栗乃中爾向有云々などふるく枕詞にもあり

(卅一)こめ題　權中納言定頼卿集につれ〴〵におはしけるたはぶれにこめだいにすたれがはを人々よみける「跡たえてとふへき人もおもほえす誰かは今朝の雪間わけこん」この外若栗棗もちひ淡路柿燒米などをもこめ題によみたり

(卅二)冬のおぼろ月　定頼卿集にいとあかくしもあらぬ月の折に菊のいみじうさきみだれたれば女房などいでゐて見るとてある人のさゝめきけるを「またきふりぬる雪かとそ見る」とあれば「神無月おぼろ月夜の白菊は」按におぼろ月夜春に限れる事にはあらず

(卅三)よめの子　定頼卿集に尼上の蓮の念珠を鼠のくひたりけるを見て「よめのこのはちすの玉をくひけるは罪うしなはんとやおもふらん」云々按に鼠をよめのこといふは夜目の子の義にや鼠は夜目の見ゆるものなればさもいふべし「子ズミ」といふも不寝目の意と見ゆ

(卅四)老のふくろ　賀茂保憲女家集序に身をもちあまりておいのふくろこしにあまりて云々按に老の袋腰にあまりてとは老かゞまりたるさまの衣の腰など打ふくだみたるをいふにや此序にあさかほにしぼめるこおよなおむなにしわのぶれど露たまりゐてなどいへり

(卅五)うゑめ　保憲女集につまをさだめたる植女ども　もたれをこひちにおりたるかあらん云々按に田植る女をうゑめといへり女の田うゑし事吾妻鏡にも見ゆ

(卅六)はごにかゝれる鳥　俗言にはごを脊負(セオ)た鳥といふ事あり保憲女集にはがにかゝれる鳥ゑにうたれんとをしらずと有に同じ「はが」は和名抄畋獵具部に撲所ニ以捕ヲ鳥也漢語抄云波加云々

(卅七)たふといふ布　保憲女集に雪にあはぬ鳥は雪をよき「たふ」とおもへり云々按に今甲斐國都留郡相摸國津久井縣などに「タフ」といひて「サヨミ」に似たる布あり和名抄絹布類部に本朝式云商布和名多遍云々とあるにその名近くきこゆれば「たふ」は「たにふ」の略にても有べし

松屋筆記卷之十

東都　高田與清文儀稿

(一)あめのみかど井裳瘡(モガサ)ぞやみ　賀茂保憲女集にこの歌はあめのみかどの御時にもがさといふものおこりてやみけるなかに賀茂氏なる女よろづの人におとれりけり云々此瘡のそやみをかきおければやまひさることによくなん見ん人ゆゝしとおもひぬべしとていさゝか色にも出さず云々與清按にあめのみかどは古今戀四の左注源平盛衰記などにも見ゆ歴朝詔詞解五の卷六十二葉に續紀續後紀万葉など引てくはしくいへりもがさは和名抄瘡類部に唐韻云面瘡也類聚國史云仁壽二年皰瘡流行人民疫死皰瘡此間云裳瘡云々續日本紀天平七年閏十一月壬寅の條に是歲不レ穩自レ夏至レ冬天下患二豌豆瘡一天死者多俗曰二裳瘡一云々扶桑略記◎日本紀略誤天暦元年丁未八月十五日丙申の條に爲レ攘二除疱瘡一於二紫宸殿建禮門朱雀門三箇所一有二大祓一去六月間年卅以下男女煩二小瘡一今月以後尤熾盛其瘡爲レ體或如レ粟或如レ豆去延喜十五年有二此瘡一世俗號曰二疱瘡一云々榮花物語峯の月の卷に万壽二年ことしはあかもがさといふもの出來て上中下わかずやみのゝしるにはじめたびやまぬ人此たびやむ也内東宮もかんのとのなどみなやませたまふべき御としどもにておはしませばおそろしういかに〳〵とおぼしめさる云々などみえたりこの榮花にあかもがさといへるは麻疹の事にて今いふ「はしか」也「そやみ」は今俗に序病といひ又某が「そ」になりてなどもいへり序の字音によれる詞也

(二)によび　保憲女集に見る人はさもこそやまひたかしそらめつねにゝよび人なんこれをこのむかはなどいへどきゝいれず云々によび人は吟人也按に万葉十四の卷駿河歌に不盡能禰乃伊夜等保奈我伎夜麻治乎毛伊母我理(ダラモイモガリ)登倍婆氣爾餘婆受吉奴(ニヨバズキス)とよめる氣爾餘婆受(ニヨバズ)も息不呻吟の義也靈異記中卷二十二章に呻爾(ニヨ)與ブ云々類聚名義抄二の同部に吟ニヨブ云々頭書源平盛衰記廿三の卷三丁左右繕方三郎貴二平家一條に彼ノ穴ノ口ニイタミニヨブコエテ立聞ケレバ大ニ痛吟音アリ是ヲ聞ク人身ノ毛竪(ヨダチ)テ怖シ云々此曉ヨトガヒノ下ニ針ヲ立ラレタリ大事ノ疵ニテ痛吟(イタミヨブ)我本身ハ大蛇ナリ云々平家物語八の卷九丁左繕環の條に女岩屋ノ口ニイテ聞バ大ナル聲シテ喚ケリ云々竹取物語雅言集覽吟ニヨフ日本紀

(三)草かり笛　保憲女集に「夏の夜の草刈笛のくちなれてかへるさかなし夕くれの空」云々與清按に草刈童などが吹笛なれば草刈笛といへるにて樂器ならぬ笛也新撰六帖光俊歌に「牛にのり牧のうなゐかふく笛は深きさとりのしるへとそきく」とよめるも草かり笛なるべし同書に信實「みまき野の草かり笛のわらは聲あなかまとのみよそへてそきく」

(四)火鼠のかはほり　保憲女集に「手なるれと猶ひねすみのかはほりはあつさそまさる置やしてまし」云々此歌は火に裘をよせかはほりといはんとて火鼠のかはとかけあつさそまさると心をむすびたるなり蝙蝠(カハホリ)は扇の名にて源氏などにも見ゆ火鼠の皮は竹取物語に火鼠のかは衣とあり契冲が河社に呉録を引て云日南景縣有二火鼠一取レ毛爲レ布燒レ之而精名二火浣布一云々搜神記本草綱目などにも出たり頭書和名抄毛詳類部に神異記云火鼠取二其毛一織爲レ布若汙以レ火燒レ之更令二清潔一矣和名比禰須三云々

(五)ふけらかす　保憲女集に「しをるらん草木にたくふたましひを心をかせやふけらかしつる」云々與清按にふけらかしといふ詞は續世繼ふし見の雪の朝の卷に雪のふりたりけるつとめてとしつながいたく伏見ふけらかすに俄にゆきて見んとて云々又かやうにもてきようせらるゝあまりにふけらかしまゐらせられける云々などに見えしも同語也山岡俊明説にふけらかすは今の俗言にもいふごとくにて吹聽(フイチヤウ)といふも同じ詞也昔はふきがたりなどもいへる也云々

(六)蜘蛛のいい　蜘蛛のいは蜘蛛の糸の事にて「い」は「いと」の略言なるべし「いと」は膽筋(イステ)の義にや虫の膽より出る筋なれば也「ス(イ)チ」の「ス」を省て「チ」を「ト」に通はせし詞ともいふべし保憲女集に「なみならはよも山ことにふきかへすくものいほりそいかゝしつらん」此歌は蜘蛛のいといひかけて菴ぞいかゝしつらんとうけたる也源順集にも上下にいもしを置てよめる歌に「いつみともいさやしら浪たちぬれてしたなる草にかけるくものい」此外端の伊もじにて與の爲にあらぬ證歌おほし

(七)身のしろ衣　保憲女集に「紅葉のふりしく山にましらひてみのしろならぬ色衣きつ」云々此みのしろ衣は後撰源氏物語などに見え八雲御抄に雪のふる時蓑の代りにきる衣也とあり自然居士の謡詞にもみのしろ衣といふ詞あり後に考て記すべし頭書字鏡集六の卷植物

部中帥部に衰ミノ云
云ノ又蓑ミノ正云々

(八)ふんたみたる文箱　清少納言家集詞書にせんたてたるふばことあり「たて」を一本には「たみ」と書たり與清按に「せん」は「ふん」の誤にて「ふんたみ」なるべし金粉たみたる文箱(フバコ)也「たみ」を濁(ニゴリ)てよむはわろし清(スミ)ていふべし「たみ」は疊(タヽミ)の略にてたび〳〵疊(タヽミ)ぬりたるがゆゑにいふ今の高蒔繪などの類也扇などの粉たみも同じ「たみかへし」などもつねいふ詞也

(九)曆に初雪降日を記す　紫式部集にこよみにはつ雪ふると書たる日目にちかきひのゝたけといふ山の雪いとふかう見やらるれば「こゝにかく日野の杉村うつむ雪をくほの松にけふやまかへる」云々按に此詞書にていにしへの曆の書ざまおもひやるべし近き世の曆にはさるとしるせしは見えず好古日錄の古曆の殘缺を載たり

(十)なげき　古歌になげきこるなどおほくよみたるはたゞ「木」といふによりて「こる」といへりとおもひしにさにはあらずなげき長木(ナガキ)にて長き木を切(キ)るよしの詞也紫式部集に歌繪にあまのしほやくかたをかきてこりつみたるなげきのもとに書てかへしやる「四方の海にしほやくあまの心からやくとはかゝるなげきをやつむ」云々これにて心得べし

(十一)霞の色墨染　霧に墨染色をよめるは常のとなれど霞にもいへり紫式部家集にこぞよりうすにびなる人に女院かくれさせたまへる春いとうかすみたる夕ぐれに人のさしおかせたる「雲のうへも物おもふ春は墨(スミ)そめにかすむ空さへあはれなるかな」返し「なにかこのほとなき袖をぬらすらんかすみの衣なへてきる世に」

(十二)上衆下衆　大和物語下卷に返しはじやうすなればよかりけめとえきかねばかゝす云々紫式部家集にいかばかりおもひそしぬべき身をいといたう上ずめくかなといひけける人をきゝて云々按に舊本今昔物語に上衆下衆と書たりげすも上衆にむかへし詞也

(十三)ろうさうの袍(ウヘノキヌ)　伊勢物語にろうさうのうへのきぬをたゞかた時に見出してやるとて「紫の色こき時は目もはるに野なる草木そわかれさりける」云々眞名本には六位(ロクヰ)袍(ウヘノキヌ)と書たり古意にろうさうは綠衫をなだらかにいへる也云々顯季家集にある六位の二位の御許にうちの殿上をまうしけるかとしごろになりけれどゆるされざりけるにろうさうをもとめたまふと聞てこの六位ろうさうを奉るとて「雲の上をよそにのみきく身にしあれはみとりの袖も何にかはせん」おこなひするほどなり此返事せよとの給ひしかば「よそにのみおもはさらなん雲の上をつひはみとりの袖そかさねん」

(十四)きしのひたひ　井めなれ木　六條修理大夫顯季卿集に「浪かへる岸のひたひのめなれ木の目なれて妹とぬるよしもなし」云々守武千句に「青柳のまゆかく岸のひたひかな」とも有めなれ木は水馴(ナレ)木を見馴(ナレ)によせたる也「み」と「め」は通音なり

(十五)手ふりをして　顯季家集に「霞たつくらまの山の薄櫻手ふりをしてなをりそわつらふ」云々按手振をしては手を振さま也手をふるといふと袖中抄の都の手ぶりの條また袋草子三の卷廿葉などにも見ゆ

(十六)舟のもとろき　左京大夫顯輔卿集に基俊の許へ又歌合すべしこのたびも判じたまへときこえたる返事に「もろこしの玉つむ舟のもとろけはおもひさためんかたもおほえす」これは人々何もいひあはれたるとにやとて「風をいたみたまつむ舟のもとろきは君はかりこそまほに定めし」云々按に「もとろき」は戻動(モトロキ)の義也舟の直(スグ)にゆかぬさまをいふ廻を「もとほり」とも「もとへり」ともいへる又同じ語也日本紀に文身を「ミヲモトロケ」とよみ枕草子に山ゐもてすりもとろかしたる水干ばかまなどあるも文(アヤ)の直(スグ)ならぬさまをいへり「もと」の「と」もじ清てよむべし

(十七)田の坪　顯輔家集に琳賢が許より酒をおくるとて萩花さかりはよき酒世中になしこのごろ好酒とり出たるかめには必ず物をいれてなんかへすといはせたれば近江守なりしをりにて坂田郡の撿田の廳宣をいれてやるとて「野へに出て露けき花を見るよりも秋はさかたのかすをかそへよ」返し「かそふへき山田の坪のうちにいれは萩のなさけにしく花そなき」云々按に政事要略五十七の卷(四十三丁)に不堪田坪付帳(六の卷四十八丁)あり朝野群載(二の卷廿二丁)に坪付の文(廿一の卷二丁)あり和名抄越前の鄉名に坪江あり坪の字は平土の義によりてつくりし新字也字書にはさる意なし一坪は一歩の地にて六尺五寸四方也さて「つぼ」といふ語意はつぼみたる地なればいへるにて局引(ツボヂ)つぼねるつぼみなどみな同義也

頭書 主殺式下

廿四丁ォ蜀志秦宓傳注に譙周蜀本紀曰禹本汶山廣柔縣人也生二於石紐一其地名二刳兒坪一見二世帝紀一云々これ渓土にも坪なば地名におほせし例也砂石集二ノ五丁ウ阿彌陀利益ノ事條に鎌倉二町ノツホチトヤランキコエシ德人有ケリ云々異本に一てうのつぼと有余所藏の古劵文に一町坪をイチヤウノツボとも書たり江次第九ノ二丁ウ坪付之文同九七丁オ又八丁オ運歩色葉集太部に田坪云々拾芥抄中末ノ七十一丁ウ七十三丁オ

（十八）火きりの餅（モチヒ）　紫式部家集に火きりとも近江より貢御にまゐらするもちひは國司のれうはことにおびたゞしくおほきにて人々のそうするを前左衞門佐基俊君のもとへふるとて「よしあしも清き鏡そてらすなる心のほとはこれにてを見よ」返し「はし鷹の野守の鏡ならねともよそなる人の心をそ見る」云々按に火鑽（ヒきリ）の餅にて火を切ていはひつくれる餅にや　頭書　橘窓自語江家次第一ノ廿丁オ

（十九）以呂伴之事　井への字川の字　運歩色葉集序曰以呂伴（波）仁保ヘト土知利奴留遠和加與太禮所津門禰奈良牟宇于爲乃於久也末計不今江天安左幾由女美之惠比毛世寸京凡我朝之以呂伴之起專尋二深義一全非二世間淺邊之法一八万法藏之肝心十二部經之骨髓也常住佛性妙理醍醐甚深之秘密也只攝（トリテ）二色葉四十七字一是以弘法大師對二護命僧正一學二法相大乘奥義一以二其次一護命言菩薩之行願不レ如レ度二世間非法衆生一廣濟二群生一之方便者不レ過レ與二大乘至極之法利一乎然者尊二淺機於深法一入二愚鈍於大乘一尤爲二至要一即貴賤同通二書札一上下等讀二文字一可レ作二眞書一依レ之和二涅槃經四句偈一造レ之即今色葉是也彼文云諸行無常是生滅法生滅滅已寂滅爲樂此偈意也色匂（イロハニホヘト）ド散ヌルヲ者諸行無常之句二當（タ）ルも我ガ代誰ゾ常ナラン者是生滅法之句意也有（井ノ）爲奥山今日越ナ者生滅滅已ノ句ノ意也淺キ夢不レ見（ミ）不レ醉（ジズエヒモセ）者寂滅爲樂之意也終加二京之字一事表二涅槃常住之城（ミヤコ）一（ツホヌノ）故問二（ヘ）文字ノ正字一云何答天地八偈經曰以二ノ（ヘ）二字一作レ人云々ヘノ字是也云々與清按に以呂波の事源氏河海抄簾中抄などに江談を引ていへり神代紀環翠軒抄日本紀纂疏釋日本紀高野日記などにも見えたれば考わたして知べし又按に草假名のへの字は皿の略字也秋萩帖にてと書けり皿の草書てなれば略しててと書る也さてうつりて今の體には書りと見ゆつは川の草字也川は日本紀にもありてもと門の字を草書につと書るを誤て眞字に川とも書る也こを肥人書薩人書などゝいふ說あれどいみじきひがごと也古本の神樂催馬樂に門とも川ともつとも書る所おほし

（廿）傳馬を給事　圓光大師行狀畫圖第卅三に云逆鱗なほやまずしてかさねて弟子のとがを師匠におよぼされ度緣をめし俗名をくだされて遠流の科にさだめらる藤井の元彦云々かの宣下狀云

太政官符　土佐國司

流人藤井の元彦

使左衞門の府生清原武次從二人

門部二人　　從各一人

右流人元彦を領送のためにくだんらの人をさして發遣くだんのごとし國よろしく承知して例によりてこれをおこなへ路次の國またよろしく食濟具馬參匹をたまふべし符到奉行

建永二年二月廿八日　　右大史中原朝臣判

左少辨藤原朝臣

翼賛曰府生ハ申下使宣旨撿非違使ノ府生ヲ云○從ハ衞門式云凡撿二校在京非違一者佐一人尉一人志一人府生一人火長九人（二人看督一人案主四人佐尉從各二人志從一人府生從一人）○門部ハ衞士ヲ率テ諸門ヲ守リ監當ノ處ヲ禁察シ配流決杖ノ事ヲ掌者（令集解江次第等）ナリ云々○食濟具馬ハ風糧ト水濟（ワタリ）トノ具ト傳馬トヲ給トナリ云々與清曰此文にていにしへの傳馬を給しさまおもひやるべし

（廿一）小兒を慰るにインノコ〳〵と云詞　寢覺の記五の卷四葉に上東門院の御かたの御帳のうちに犬の子を二ッうみたりけるをおもひがけず有がたき事也とて大におどろかせ給ひて江匡衡といふ博士にとはれければこれはめでたき事也犬の字は大のそばにてんをつけたりそのてんうへにつけば天也したにつけば太也其下に子の字を書つゞくれば天子とも太子ともよまるべししかあれば太子うまれさせたまひて天子にたゝせ給ふべしとぞ申ける云々按に此ころよりいひ出し諺なるべし

（廿二）了譽上人の生國　了譽上人名は聖冏江戸小石川傳通院の開基也內外の書にわたりて和歌の奥義をさへさぐり得られたり古今集の注鹿嶋問答などは此上人の述作也鹿嶋問答は一名破邪顯正義といふ刋本也發端にいへらく余髫年ノ當初ヨリ偏ニ心ヲ講肄ニ留メ五々歲ノ末ヨリ專ラ眼ヲ其扉（トボソ）ニ掛ク自爾已來南北ニ往還シ東西ニ徧歷ス而レドモ徒ラニ旋打（メグン）ノ行纏ヲ費スノミニシテ猶未レ修ニ洛浦笠子ニ云レ內云レ外迷ニ助道方便ニ云レ禪云レ敎失ニ出要徑路ニ適（マカセ）、負ニ葉落ヲ歸レ

根次ニ參ニ詣常州鹿嶋社頭ニ即安居寺ニ寄宿シテ一夜懇念ヲ致サント欲ス云々また第二の問答に愚老モ重代ノ社官ナルガ故ニ所レ知レ之也云々また第三の問答に云愚老も重代ノ社官ナレドモ念佛修行ノ者ナル間淨不淨ト非レ如ニ尋常人ニ何レ時モ任レ心參詣也と見えたるをおもふに鹿嶋の神官の子なり倭漢三才圖會に常州ノ人とのみいへるはくはしからず

（廿三）鳥居　鹿嶋問答上卷四葉第一の問答に無名雉飛降り天稚彦宮前ノ湯津杜ニ居テ鳴ク事シキリナリ神門鳥居ト名タルハ是緣也云々按に鳥居の事神道集に見ゆ（頭書）和名抄ノ十門戸類部に雞栖と書たり大神宮儀式帳於不葺御門アリ

（廿四）鹿嶋立同祭の詞同槪（クヒ）不レ拔　同書同條五葉云始テ八百万神達國々ヨリ神集ヒノ爲ニ當社ヘ立玉ヒシ故ニ何クニモ旅ノ始ヲバ鹿嶋立ト申ス也（但實說は神嶋立是レノミニアラズ釋ノ穗垂レ槌維那師ノ心氣莊ナンド申ス詞モ當社ノ祭ニ有ル事也又動槪（ユルグクヒ）スケセヌト云事モ當社ニアリ凡テ我國ノ万ノ語万ノ業皆悉ク我ガ此社頭ヨリ出タリ其故ハ此御神ハ日本開闢ノ神ニテ御坐スフ故也云々與清按に鹿嶋立の事は下學集苑玖波集詞林采要抄藻鹽草などに見ゆ釋ノ穗垂レ槌ハ釋ハ稻字の誤にて稻ノ穗垂レ槌にやまたは槌は郡の誤にて下につけて都維那師とよむべきにや郡維那は僧職の三綱の一なり心氣莊ナンハ心氣壯ナンにて莊ハ壯の誤にてあるべしまた動槪（ユルグクヒ）スケセヌとは世に要石（カナメイシ）といふものゝ事にやこは夫木抄に見えたりき

（廿五）鹿嶋の神標（シルシ）井廟札　同書同條五葉云其後天津彦尊（ハヤムスビノ）天降時我此三處明神ノ其一ッ津速產靈尊（ムスビノ）四代孫市千靈命（コトヲ）與居登魂（トムスビ）神第四御子天津兒屋根尊（コヤネノ）御手代（ミテシロ）トシテ國ノ政ゴトヲ司リ玉フ但シ此神標タマフ事始ハ神武天皇元年ト云々次神功皇后三年依東太神廟札云々其後孝鎌天皇御宇神護景雲二年八月七日白鹿ニ乘ジテ大和國ニ移リ玉フ則御笠山ニ鎭留リ奉今ノ春日大明神是也云々與清按に天津彦尊ハ天津彦々火瓊々杵尊（ハヤムスビ）也津速產靈（ムスビ）ハ舊事紀神代本紀ニ津速魂尊（ムスビノミコト）兒市千魂尊與登魂（トムスビ）命天兒屋根命（コヤネ）とあり神標をたまふこと東大神の廟札は詞林采要抄に見えたり

（廿六）鹿嶋社の本地　同書第二の問答云六葉女云垂迹ノ御事委ク以テ承リ了ヌ抑神ハ本地ヲ顯スヲ喜ビ玉フトコソ申傳ヘ侍リヌレ然アラバ當社明神ハ御本地ハ何レノ佛菩薩ニテ渡ラセ玉フヤラン事ノ次ニ承ラント思ヒ玉フト云ヘバ翁云機欲既異聖應一ニ非ズト申タレバ和光ノ本意ハ但結緣ノ者ヲ攝セン爲也何ゾ一佛二菩薩ノミニ濫ランヤサレバ昔万卷上人當社ニ參籠アリテ本地ノ御事ヲ祈リ玉ヒシカバ明神ノ御夢想ニ曰本地觀世音常在補陀落ニ爲レ度ニ衆生ニ故示ニ現大明神ニ仍テ上人補陀落ニ渡リ玉ヒテ椎ノ木ヲ三箇伐テ海水ニ浮ベ玉フ其木此浦ニ打寄セタリ還リ玉ヒテ此ヲ取テ三尊觀音ヲ造リ玉フ其內ノ一體ハ今ノ神宮寺ノ本尊十一面是也又筑波山空淨聖人祈誓申サレシニハ即夢中ニ告テ曰ク「ワレヲシレ釋迦牟尼佛ノ名ヲ出テサヤケキ月ノ夜ヲ照トハ」聖人返歌云「世ヲウシト思ヒ入リニシクロカトニナニユカシサニ立チカヘルラン」又明神ノ御歌云「皆人ヲアハレム心フカケレハナホクロカトニ返ルトハシレ」仍テ空淨聖人釋迦堂ヲ造リ玉フ今安居院是也又有ル人ニ大日ト告ケ玉ヒケレバ大日堂ヲ作レリ又藥師ト示シ玉フトテ藥師佛ヲ造ル根本寺是也何レモ本地ト號シテ面々ノ機ニ應ジ玉ヘリ但シ万卷上人御建立ノ神宮寺ノ本尊右脇ニ少宮殿ヲ中ニ打付ケ奉テ在レ之上人掃草以來未レ開レ之上人曰此是正キ明神ノ御本地也佛菩薩得名ハ皆機宜ニ應ジテ不レ可ニ一準一然ルニ諸機ノ利益ニ背故ニ堅ク秘藏スル所也不レ可レ開レ之自釘ヲ以テ御戶ヲ打付ケ玉フ仍テ今ニ人見ルコト無シサレドモ昔ヨリ習傳テ知ル人少々在レ之愚老モ重代ノ社官ナルガ故ニ所レ知レ之也御志切ニマシマセバ語リ申サン（低聲）此ハ是阿彌陀ノ三尊ニテ御坐ス也然則諸佛大悲集テ觀音ト號シ諸聖ノ大智ヲ束子テ勢至ト爲ス悲智不二ノ本分ヲ名テ無量壽ト申シ奉ルサレバ此三尊一ニシテ不レ可レ混如ニ鷲鷲立ヲ雪三ニシテ不レ可レ別如ニ波浪轉ヲ海彼一光三尊豈非ニ此意一耶云々與清按に神道集五の卷春日明神の條にも鹿嶋本地の事見ゆ一光三尊ハ善光寺如來也

（廿七）北野天神御歌　同書上卷第四問答十一葉に云北野天神御歌云「心タニマコトノ道ニカナヒナハイノラストテモ神ハマモラン」云々班女の諺にも此歌見ゆ

（廿八）スル〳〵と云詞　井金切（カナギリ）リタル音ト云詞　鹿嶋問答上卷一葉右發端ニ云於レ是向ニ晚陰一時一人ノ女參社ス形最（イト）アテナレドモ年スデニ老タリ華ヤカナルチハヤニ若女メカシキヒタチ鬠殊不ニ似合一體ニ覺エテ笑シキ有樣哉ト見居レバハテハ浦々タル音ニテ「千磐

破神代ノシルシ是ヤコノ」ト高ラカニ打詠ジツヽ神前ニ麿々ト入テ法施ヲ奉ルヲ聞ケバ打雜ル事モ無クバしかいへり藤原清輔集に「小初瀬の花のさかりやばしかいへり藤原清輔集に「小初瀬の花のさかりや但彌陀ノ名號ノミゾ唱ヘ居タル猶シ不相應ナル所哉ト見侍キ其後暫ク有テ一人ノ翁參宮ス其形最醜陋ニシテ其年亦朽邁也煤色ナル水干破レガチナル立烏帽子殊ニケシカル樣トゾ見エシ是モ神前ニ指入テ金切リタル音ニテ稽首唯識性滿分淸淨者ト指擧ゲカクニタカラカニシテ三十頌ヲ誦シケレバ委ニハ不レ似事ニテ是モ不思議ニゾ覺エケル云々與淸按に麿々ト入テは今もいふ語にて今昔物語宇治拾遺などにツルツルト毛ヲムシリテなどあるに同じ金切タル音も今俗言にいへりふるくシワガレ聲などいへるにおなじかるべし

(廿九)釋門をくろかどゝよめる歌　上の第六章に引たる鹿嶋本地の條の歌にくろかどゝいふ詞ありこれ緇門を訓にいへるにて釋門の事をいへる也出家沙門を緇侶といへば也

(卅)みなの河　後撰戀三陽成院御歌に「つくはねの峯よりおつるみなの川戀そつもりて淵となりける」云々此御歌によりてみなの河は筑波嶺より落る川の名とのみおもへりいみじきひがごと也みなの川は峯の河の義にていづれの所にもあれ峯よりおつる水をばしかいへり藤原清輔集に「小初瀬の花のさかりやみなの川嶺よりおつる水の白波」新拾遺春下にも載此歌は初瀬山によみ合せたりまた拾遺愚草下に「みなの川嶺より落る櫻花にほひの淵のえやはかくるゝ」新後拾遺雜秋攝政太政大臣「みなの川流れてせゝに積るこそ峯よりおつる木葉也けれ」新續古今冬二位義重「みなの川岸より落る紅葉もつもりて浪を又やそむらん」藤川百首に定家卿「行春のなかれてはやきみなの川霞の淵にくもる月かけ」此外夫木抄草菴集などにもいづことも定めずみなの川とよめる歌おほし必筑波嶺に限るべからず筑波嶺のみなの川小初瀬のみなの川などよみたらんは常陸大和の名所ともすべけれどもさらぬは名所にはあらざる也

(卅一)師術　荀子九の卷致仕篇に師術有レ四而博習不レ與焉尊嚴而憚可レ以爲レ師耆艾而信可レ以爲レ師誦レ說而不レ陵不レ犯可レ以爲レ師知レ微而論可レ以爲レ師故師術有レ四而博習不レ與焉水深則回樹落蠹レ本弟子通レ利則思レ師詩曰無レ言不レ讎無レ德不レ報此之謂也

松屋筆記卷之十一

東都　高田與淸文儒稿

(一)正親町院御即位の用途丹波國氷上家より奉事　籾井家日記丹波國波多野家盛衰の日なり　卷之一云永祿年中ニ忝モ人王百七代ノ帝正親町ノ院ト申奉ル御即位アソバサレ候節日本亂世ノ時ナレバ悠紀主基ノ御領ヲ奉ル者モナク御規式モ執行ハルベキヤウナシ關白殿モ涙ヲ流シ玉ヒテ延々ノ沙汰ニ及ビタリケルヲ氷上御館殿聞召レ御規式ノ取行ヒ進上アルベキト思召毛利元就公ヘモ申通ジラレケレバ元就公ハ道ヲ行フ人ナレバ御尤至極ト是亦存ゼラレ申コサレケルハ近年天子ノ御作法万事スタリ申條ナルホド禮義正シク王威モ益候ヤウニ古例ヲモ考ヘ取行ハレ候ヤウニ關白殿御相談アラレ然ルベク候トテ大分ノ金銀ヲ献上致サレ候宗高公思召ニハ今亂世ニテ王威モオトロヘサセ玉フハ急度道ヲ御正シ一天下ヘヒヾカセ玉フコト且ハ弓矢ノ冥加ニテ候トテ廣幡殿ト御内談セラレ關白殿ヘ一一申サセ玉ヘバ關白殿モ感涙ニ袖ヲ御ヌラシナサレ叡慮サラニアサカラズ御心マヽニ御規式ヲ取行ハル御殿マデヲ改メ造リ進セラレ御作法目ヲ驚スバカリナリ則丹波ヨリ米穀黃金白銀絹布土產大分ノ御物入ナリ公家衆女中マデモ引出物進セラル警固ノ奉行ニハ荒木兵部大輔氏好荒木山城守氏綱江田兵庫頭行範大館左近氏忠赤井惡右衞門尉景遠コレヲ勤メ申候其外七頭七組衆モ代リ〳〵上洛シテ勤メラレ候御即位ノ節ハ屋形秀治公モ氷上御館殿モ御上洛ナサレ候御人數一万二千人ト申候行列ノ次第御作法正シク結構ナル體ニ候ユヘ洛中近國ノ見物ハ申ニ及バズ遠國ヨリモ忍ノ者出テ記シ留メ申由ニ候則參內ヲ遂ラレ候處ニ叡感斜ナラズ思召候其時モ樣々ノ內裏ヘ献上ノ品々アリ御門ヨリモ御劒幷ニ御詠歌ノ御短尺マデ銘銘拜顏アラレ禁中ニテノ御威勢中々申モ愚ニ御座候其時御屋形ヘモ氷上殿ヘモ御官位仰付ラレ御兩人トモニ正四位侍從ニ昇進アラレ屋形ノ御弟波多野主殿頭宗貞公ト御兩人ハ從四位ニ昇進アラレ屋形ノ次ノ御弟ニ階堂伊豆守秀香公ハ從五位ニ仰付ラレ候其上秀治公宗高公ヘ桐ノ御紋ヲ下サレ則兩家ヘ桐ノ御旗ヲ頂戴ナサレ候

後マデ屋形ニモ氷上殿モ天錫ノ御旗トテ御進メ候ハ是ナリ又元就公ヘハ菊桐ノ兩紋ヲ下サレ尤官位昇進アラレ叡慮斜ナラズ是ハ當家ノ親方分ナレバ一入ノ御賞翫アサカラズ今度ノ御働キ日本ハ申ニ及バズ大家ユエニテ候云々同書卷之二云信長近習ノカセ働ノ宗徒ノ者ドモ云々此外おほし按にカセはカセグと同じ人柄筋目にもよらずみづからかせぎて立身などするものをカセモノとはいへりと見ゆ甲陽軍鑑武者物語などにもあまた出たり頭書今川大草子上廿丁ウ

（五）釣合合戰　同書卷之一云兩手ノ先手衆心得テ釣合カセンヲ致サル、内ニ搦手ノ強攻メ云々今もつりあひよくなどいふ俗語あり

（六）はた物　同書卷之一云生捕テ桂川ニハタ物ニカケテ見セヨト申ス云々又云モラフ者ヲイク人モハタモノニセヨ云々此外おほく見ゆ礫の事也頭書甲陽軍鑑十七十八十九などに見ゆハタ物ト云詞今書廿九ノ三語女盜ノ條同廿九ノ十語

（七）カケオチ　云詞　并ムゴキ　云詞　又云明智ガ方ヘカケオチ致申候云々又云此度ハ眠リケヲサマサセテ手ゴリサセヨトテムゴキ軍法ナサレ候云々頭書甲陽軍鑑十一ノ下同十二などにもかけおちと有ムゴイハ無期ナルと云詞の轉也舊本今書廿八ノ六語

（八）水論　同書卷之二云他國ノ合戰ヲ承ルニ只野伏

爭ヒ野打水論ノ土民ノケナケ立テタル樣ニ似申シ弓矢ノ正ノ作法ヲバ存ゼズ候云々

（九）遊寄　并蒸夜討蒸松明　同書卷之二云仁木三郎兵衞賴永碓井丹後則近足立右近小野原右京一手ニナリ候テ七百餘キニテ夜中ニ嵯峨ノ邊ヨリ出テムシ夜討ノ勢ト定ム小林修理亮重範同名民部須知主水酒井佐渡ガ七百餘キハ遊寄ト申ニナリテ位ヲツモリテ居申候云々又云夜モフカク候ヘバ蒸夜討ノ遊寄衆ハ峨嵯仁和寺裏寺朱雀ノ邊ノカリ集勢ヲ調テ相圖ヲ待居申候云々又云幾千万トモシラヌ蒸勢ドモ時ヲ作リカケカケテ押ケルホドニ云々又云蒸松明衆ハ東寺九條ヨリオコル云々又云蒸松明夥シク調ヘ云々此外にもおほく見ゆ

（十）トハウを失ふ　同卷二に圖方ヲ失ヒ揉崩サレテ云々

（十一）籾井日記中所載之和歌　籾井家日記卷之二云爰ニ又籾井越中ハ波多野彌次郎秀基細野藤十郎尙國物集女右近ガ陣ヲ合セテ二千五百餘キニテ粟田口ノ山ウラ白川ノ方ヨリ水尾上ノ東ノ山傳ヘニ敵ノ本陣ドモヲ備ヘ申タル腹ヘト出候工夫ナリ折節ト御廟ヘ參詣シ中刺ヲ捧ゲ候テ某モ源家相傳ノ末葉ニテ候今日ノ合戰織田ノ某不義ノ利欲ヲ以テ洛外ヲ汚シ奉ルコト冥慮モ惡ク見玉フベク候願クハ御加護ヲ加ヘラレ候ベシト心中ニ祈誓ヲカケ「水尾山ノ神風今日ハ一入ニ吹麈カシ敵ノ旗色」ト詠ズレハ業光「所コソ多カリケルニ水尾山敵ヲ打出ノ濱ニ殺サン」ト詠ズ八田介次郎治員「水尾山神ニ誓ヲカケヽレハ敵ノシルシヲヌサニタムケン」ト讀ホドニ宗徒ノモノドモ思ニ信心肝ニ銘ジテ感涙ヲ流シ申候同卷云津田孫太郎ハ同郎等金田兵四郎討取候此孫太郎籠負中刺ニ短尺ヲ付候「カソイロノ取傳ヘタル梓弓引シホリテハアタ矢ナキ身ヲ」同卷云東寺ノ簡板書候「明知ドノアクチモキレヌナリヲシテ鬼トヂヤレシテ命カラサキ」「信孝ハ馬糞ダカデノビスギタ鷲ニケラレテコエモイデヌハ」「瀧川ハ清瀧ナラデ濁リ瀧一益ナラデ無益ナリケリ」「ツヽ井筒井筒ニカゲヲウツシテハ我身ナガラモ恥カシキカナ」「村重ハ名ノミ荒木ノ荒鬼ジヤマコトノ鬼ハ荒木山城」「蜂屋ドノ蜂ノ針ニモサヽレヌハ道理ナリケリ丹波鬼ナリ」「細川モ一色コミニナラヌマニ瀧川落テニユルモノカナ」其外色々カキ付

申候又此時ノハヤリ謠ニ「安土横槌フリマハセドモ只一口ニ氷上鬼コハイハ〳〵氷上鬼籾ニモマレテ八田カレタ」卷之四云彦之進殿ノ北ノ方ハ當國山名和泉守ノ姫君ニテ候云々中務殿ヘ形見トテ當座ニ讀テ進セラレ候昔ノ藥師寺ガ歌ヲヨミカヘラレ候トノ事ナリ「トレバヨシトラヂバ人ノ數ナラズスナホニ引ハ弓矢ナリケリ」中務殿ヘ進セラレ候「君ガタメ取ツタヘタル梓弓引シボリテハ身ヲゾ忘ルヽ」雅樂介殿ヘ進セラレ候「天津空惠ミノタヂノアレバコソ千代万代マデ名ノミ殘レル」

(十二)人を制するに東西々々と云詞　枕草子春曙抄四の卷十葉とりもてるものゝ段にたゞ今は見るまじきとて入給ひぬとてとのもりづかさきたりしを又おひかへして袖をとらへてとうざいをさせずこひとりもてこずは文をかへしとれといはしめて云々春曙抄に清少を東西に身ゆるぎもさせず返事とりてきたれ左なくばその文とりかへしてまゐれと也云々按に今俗人をせいする詞又人をとゞむる詞などにとうざい〳〵といふはこれ也　頭書御曹子島渡草子にとうざいをしづめてきゝげるが云々應筑波五ノ十八丁ゥ正依句に「東西と春のしつむる朝哉」

(十三)おめくと云詞　おめきさけぶなどいふ「おめく」の假名は於米久と書べし和訓栞にをの部に載たるはひがごと也おびゆあらびなどの於におなじ唯々を於々といふまた同言也枕草紙春曙抄四の卷十葉におめけばとあり源平盛衰記にも見ゆ易に號咷をオメクとよめり後世「わめく」といふは訛言也顯昭陳狀に狩人の山に鹿をあさふとて宵より立こめて方々に火を燒て「おゝ」とさけびをるをば「あぐむ」といふともあり

(十四)ふりつけると云詞　俗言に人をふるまたふりつけるなどいふはもとふり捨るといふより轉せし語也古歌にふりがたきなどよめるはふりすてがたき事也枕草紙春曙抄四の卷十九葉にいかでさつれなく打ふりてありしならんと云々これ今ふりつけるなどの語のさま也

(十五)おしね　おしねはおそ稻の義にあらずおはそへ字にてしねといふべきをさいふ也と師繼錦翁の說なりされど夫木抄冬三安元元年十月右大臣家歌合初雪清輔朝臣「おしねかるしつのすかゝさ白妙にはらひもあへすつもる雪かな」此歌判者清輔朝臣云田は秋こそかる物にとあるを雪ふらん時はいかゞなど申

人ありしかども其は僻事也十月にかる所おほかりおしねと云はおそき稻なればかきあひてこそ侍れと云云按に此說によれば晩稻の事也さては「おしね」と書べし「オソイ子」の略也　頭書散木集秋に「うき身には山田のおしねおしこめてとつゞけたり」これもおしねおしこめてとつゞけたり

(十六)山のとばら　夫木抄冬三雪部に平時範朝臣歌「つま木こる道たえぬらんみよし野の山のとばらにふれるしら雪」按にとばらは外腹也外原にはあらず山腹は都良香の富士山記に見えたりき

(十七)平禮にて引つくろふ　西公談抄に大貳高遠三位平禮に下の袴こはらかにて雜色など引つくろひて大納言の許に參られたりければと云々又平禮にて引つくろひたるも和歌の談議の故也と云々　頭書平禮ノ「此外にもいへり

(十八)瓜茄子を酒肴にする　又云たとへば鷹狩の野にて肴をたかつきにしたるやうなる事也所にしたがへばあやゐ笠のはにかひを置て　一本にかへで瓜なすびをさかなにする也又さかなをば折敷の裏にて切る也其中に表にて切物二ありそれを裏にてきるは首尾不ニ相叶一面にて切物は生海鼠今一ッはなにぞよとて

いはれず云々與清按に榊巷談苑にさかなの事をいひたりしにこの瓜茄子の肴の事を引もらせり

(十九)かひ敷　菓物菜物魚類など盛たる下に青葉を敷をかひ敷といへりこは柏敷の義也西公談抄にあやひ笠のはにかひをおきて　一本にかへでうりなすびをさかなにする也と有にて知べし

(廿)たゞ〳〵あゆみ　西公談抄に小兒のたゞ〳〵あゆみしたる體云々今世に小兒のあゆみならひをつかまり立といへるこれ也

(廿一)扇子拍子　桐火桶に雲の上人兩三人打出て扇びやうしを一ッ二ッすさびて高からぬほどにうた打吟しと云々　頭書樂家錄にくはし

(廿二)百首歌よむ事　桐火桶に百首の體と申はさだまりてそのすがたあるべし是又大事にて家に秘する事也百首には先地歌をめづらしげなくさつ〳〵とよみ渡してその所〳〵に秀逸めきたる歌をよみまじふる也百首に七八首にはすぐべからずしてにしきを色色におりませよと亡父の卿ものたまひし也俊頼基俊などは百首の歌うけたまはりては四五首に沈吟してあんせられけるにや四五首だにもよまれたりければ

打おきて當日になりて地歌をさら〳〵と口にまかせてよまれしとかや當時も亡父卿西上人慈圓などは左樣にのみよまれし也云々

(廿三)折敷(シキ)の裏にて切る物　桐火桶に亡父卿金吾に今古の說をうけられし時その事をばのたまはでうそぶきてをしきの裏にて切ものは三ありまなこいかはなすびいま一ッはなにやらんとて笑はれけるとなん次の日又とひ申されたりければ三の大事をつたふる人かたしされども貴邊には皆申べしをかだまの木めどにけづり花さすとかはなぐさこの三とおほせられき二をば仰られてなほ一をばおほせられざりききのをしきのうらのきり物にたがはず一をばかくされしとはいかに次の日またたづね申されければ一をもおほせられて侍りけり其次にをしきの裏の物を今一は何にて侍らんと申されたりければ隨分の大事也永の御物にて侍べしとてはやむねはあかして侍とて心やすげにておはしけるとかやげに〳〵かの內宴の御遊なども件の物どもをめし出されたりしを度々有職の人だちをしきの面にてきりきと云々西公談抄にさかなをば折敷のうらにてきる也其中におもにてきる物二ありそれをうらにてきるは首尾不二相叶一面にてきる物は生海鼠いま一はなにぞよとていはれず云々

(廿四)古今傳授　古今傳授といふ事は東常縁などよりおこりし物なるべけれどやゝふるくより似たるとありし也桐火桶にをかたまの木めどにけづり花かはなぐさは秘說のよし見ゆ按にをかたまの木は屋代弘賢ぬしのをか玉考の說よろしくきこゆめどにけづり花さすは打聞續万葉論の說和訓栞の說などよろしかはなぐさは眞淵翁の注よろし祝詞考にもいはれたりき

(廿五)七艸たゝく事　桐火桶に亡父卿金吾に古說をうけられし時云々正月七日七艸をたゝくに七つゞ七度かやうなれば四十九たゝく也と有職の人申けるとばかり也是もしひて問申ければそれまでの事はとて笑つゝ語給ふまづ七艸は七星也四十九たゝくは七曜九曜廿八宿五星合て四十九の星を祭る也唐土の鳥と日本の鳥とわたらぬ先に七艸なづな手につみいれて亢鼓斗張云々青陽唱話(鳥追詞也)に七くさがござりてつむ菜はなに〳〵ごぎやうたのくさすゞぐさはこべ春田のなづなかやうなわかなをつみあつべさぶらうてふく池にすゝいで德板にのせてかうらいはうちやう日本の鳥たうのとりとわたらぬさきにてしりてうといはふた云々注に或人云赤染衞門集に「ひなつとりわたらぬさきに聲す也はや子の日にもけふはなりぬる」とよめりと云々七艸冊子に七いろの艸をあつめて柳の木のばんにのせて玉椿の枝にて正月六日の酉の時よりはじめてこの艸をうつべし酉の時には芹(セリ)といふ艸をうつべし戌の時にはなづなといふ艸をうち亥の時にはごぎやうといふ艸子の時にはたびらこといふ艸丑の時には佛の座といふ艸寅の時にはすゞなといふ艸卯の時にはすゞしろといふ艸をうちて辰の時には七いろ艸をあはせて東の方よりいは井の水をむすびあげて若水と名づけ此水にてはゝがてうのわたらぬさきにぶくするならば一時に十ねんづゝのよはひをへかへり七時には七十年のとしを忽にわかくなりてその後八千年までの壽命をなんぢおやこ三人へさづくる也とをしへたまふぞありがたき云々

(廿六)はだか文　西公談抄に艷書はうすやうにて上をつゝむ也つゝまぬははだか文とてわろし云々

(廿七)そら取ル鷹　與清按にそら取鷹とは鷹がおのれから鳥を取事也人の合せてとるならねば空取(ソラトル)とはいへり顯昭陳狀に延喜六年十二月五日御鷹狩遣遙のために大原野にこそ野行幸は侍しか件度中山の山口いらせたまふほどにしらふと申御鷹いつしか鳥をそら取て御輿の鳳の上に參居て侍けるに暮日は漸山端に近づきて峯の紅葉所々錦をさらせり鷹の色白妙にて雉の上毛は紺青をのべたり其時しも雪打ちりて折ふし取集たる御狩の興也と記したる事心にしめて所得て空取ましらふの鷹とも詠侍也云々歌に顯昭「大原や野へのみゆきに所得て空とるけふのましらふの鷹」と有　頭書　再按に空取は鷹の空にて鳥をとること也散木集冬(ゆふまぐれはれもつかれに立鳥を草とる鷹にまかせてそ見る」とある草取に對へてしるべし六百番歌合七に家隆「いかにして空とるほともはし鷹のしはしも懲に身をやすむらん」

(廿八)歌合の判に心得べき事　蓮性陳狀に歌合に始の歌をまづ難じて後の判をばそれにゆづり候とこそうけ給るに今度の御歌合には爲氏月の歌に同字を上下に詠て候よしうけたまはり候へば末の番の愚詠にはじめて見とがめられ候けるもかれは例の心のやみの故にや候はんと云々

(廿九)鹿島香取の名義　鹿島(カシマ)といふ名は橿原(カシバラ)の義也波良(ハラ)の良を省き波(ハ)を万(マ)に通はせし語也すべて原(ハラ)とい

ふも庭といふもひろく平なる所をいふ語にて海の庭家庭などおなじ大場馬場などの場も爾波の略也景行紀ノ御歌に區珥能摩保邏摩とあるも國之眞廣場にて國中の眞廣き所をいへりさて檀をもて地名におほせし例は神武紀に畝傍山ノ東南ノ橿原ノ地とあるは檀の生たる原の義也万葉廿の卷には可之婆良能宇禰備之宮とよめり古事記ノ神武の段に白檮尾上といへるも檀の生し丘上の心也淡路國ノ三原郡ノ加之乎の郷も白檮丘なるべし仁徳の段に加志能布とよみ神名帳に大和ノ吉野郡ノ鹿蠶ノ神社など見えしも同所にて白檮之生の義也布と保は通音也筑前の檀日の宮も檀生にて亦同じ豊後ノ國御調郡の加之土の郷は檀處にて止古呂を止といふは立處臥處などのごとしさて鹿島といふ所陸奥能登紀伊などにもきこえその外にもおほかるべきを此常陸の鹿島にのみなづみて神島の義といひ或は鹿の栖島のよしなどいふは共にうけがたし瓶島の略語ならんといふも昔物語めきてうきたること也又香取と鹿島とを並ておなじすぢの名義に說まぐるものありいみじきひがごと也鹿島香取の同體の神におはしますよしは古事記傳にいひたれど地の名義はいと殊也香取は繒を織者の住しにおこれる名也檝取の義とも鹿捕の義ともいへるはうするにたらず檝取の義は万葉十一の卷に大舟のかどりの海とつゞけし歌よりふとおもひあやまれる也大舟はかどりといはん料の枕詞なるをや

(卅)實錄　王應麟が玉海卷第四十八藝文部に實錄起ニ於肅梁一至レ唐而盛雜ニ取編年紀傳之法一而爲レ之以備ニ史官採擇一とあり文德實錄三代實錄などこれによられし名なり

(卅一)色事といふ詞　俗言に男女情を通はすを色といふはもと好色の色の字の義よりいへる詞なり古今六帖六に素性「をみなへし色にもあるか松虫を下にやとして誰をよふらん」とよめるはまたく今俗にいふ詞の色とよくかなへり

(卅二)爪じるし　河海抄未通卷に爪じるしとは詩歌などに合點せんとて先爪にてしるしを付ることと也と云々然は寮試を合點に擬して今の內々の試を爪じるしの心地といふ歟一說云角筆の事歟角筆とは假名つけんことを憚て無點のに角などにて白ゝ假名を付ル事有也然ば點なき所々をもつまびらかに讀給事爪じる

しのあるやう也と云歟

(卅三)縣居翁賛　縣居賀茂翁の像をその門人源清良がるゐがきたるに橘千蔭が賛を書たりその賛

縣居翁歌

斯母都奚也迦美能志圖咩之布當良良夜麻不多多毗登陀邇美與波宇期可自

縣居大人　者山城賀茂成助縣主乃裔　留氏承久三年山城與利來利天遠江敷智郡濱松岡部乃賀茂乃御社乃祝　登爲禮留師久主　與利七代　留當里氏掛万久母恐伎可東照　真須大御神乃御軍　留從奉　利天勞有　留依而厚　久賞　佐世給　比之政定主　與利五代　乃孫　奈利彼大神乃五繼　乃御孫　留御座　須田安　乃殿　留皇御國　乃書　乃道　乃博士　登之氏延享三年　與利仕奉給　比明和　閇留我大人齡老而申文奉　而寶曆十年仕　乎退給　比明和六年十月三十日　留奈毛年七十餘三　留之氏身罷給　奴今年廿餘七年　留當　利氏大人　乃像　乎令畫　多留留與里氏其和伎聊識　世里

寬政七年十月

橘千蔭謹書

(卅四)守山といふ地名　守山といふ地名はいにしへ山守を置れし所なれば也大山守などいふもこれ也續日本紀五の卷二丁　に庚戌和銅三年正月也初充ニ守山戶一令レ禁レ伐ニ諸山木一と見ゆ印本の訓は誤れり守山戶をばモリヤマベと訓むべし

(卅五)ざりせばと云てには格　散木集三に月のいらんとするを見てよめる「月見れはすくな御神そうらめしき西には山をつくらさりせは」此歌下によからましといふ詞を餘情に添て心得べし一ッの變格也

(卅六)ぐし　并おこと　下總國取手の宿なる澤近嶺俗稱貞次郎今改ニ與兵衛一がもとより問おこせし條々○ぐし　かや屋根のうへをしむる事をぐしをとると申候そのかや屋ぶきの方にはぐしまつりといひて大工のむねあげ同樣の事も御座候此ほど其ぐしまつり有レ之まづ字にこまり入候保おもふに髮をむすぶ事を御ぐしといふぐしにてつぶりのうへをむすびしむるのよしにていふにかとおもふよりほかに考なし尤此言下總常陸陸奥出羽かけて申候大かた關東はいふ事と相見え候○答ぐしは串の事と見ゆかや屋ふくに棟をとるといひて竹の串もてさしかたむるわざあるその竹串は屋上の要處なる棟をさしかたむる物なればいはひていぐしなどもいひけんをやがてくしとのみもよべるにやいぐしは万葉十三に五十串立神酒座奉とよみ拾遺集堀川百首夫木抄などにもありて神祭の幣物なれど

そのぐしといふにつきて屋の棟さしかたむる竹串にもいひうつせる名なるべしさてくをにごりてよぶは方言のみ髮を御ぐしといふよりとの御考はいかゞあらんうけがたし髮をみぐしといふはさし櫛におこれる名にて高貴の人の髮を打つけに御髮などいはんはなめげのさまにきこゆればその髮にさゝせたまふ櫛をもて呼まゐらする也御眼御鼻御口御頭御手御足などいへど髮は人體の中にて殊に貴き所なれば稱を諱てのわざと見ゆいにしへは男女ともにさしぐししたればいづれにも通はしていひさてうつりては櫛さゝぬ法師にもいふあがまへ詞也されば自己の事又下賤の者などにはいへる例なし○おと　百姓の春種まき仕舞その苗のおふる間にあるは十五日所によりて三日か七日ほど日をかぎりて村中一同あそぶ日とふれて農事も何もやすみてあるは將棊さし笛ふきなどおのかじゝあそびありきいづこの村にても阿波大杉大明神の御こしをかきありき候外はしらず下總常陸には大かたありこのあそぶ日をおとあそびといふ何のよしかわかりかね候御考御しるし可レ被レ下候○答江戸にて正月の八日をおとゝもおとはじめともいひ十二月の八日をもおとゝもおとをさめともいへりいづれも御事の義也何くれの事始事收のよしときこゆこのあそぶ日をおとゝいふも神祭風祭などをさしてひろくいふ詞と見ゆさてはあそび事の日といふよしにて別に清き心あるにあらず物語書に事とあるなどいふもこれ也今の俗に事が出きた事になつたなどいふも又おなじすべて事といひものといふはひろき語にて何くれにつけて用る語としるべし

（卅七）振鉾　安信季尙が樂家錄卷四十八類話篇云或僧難曰舞樂之名目有二振鉾一和訓惠牟不亦樂乎和訓羅久是古人不レ知レ字之誤今爲二樂家之故實一耳余曰然今以二一譬一解レ之也字書菴字烏合切而暗平聲也俗復以二也牟和牟奈牟之三韻一如二喜奄怨奄林奄一可二以レ此知一焉蓋因二上字一易レ韻耳若從二本韻一直呼則礙レ口而不レ穩也凡以レ字辨レ事而易レ辭和レ聲者是吾之國風也樂名越天樂和訓惠天琵琶之名所鹿頭和訓志遠具比此類可二世實多一也

（卅八）立樂　同書卷四十七舊例篇云凡御節會謂二立樂一者列立而奏レ樂之名也元日白馬七日踏歌十六日三節也但三節共一献國栖三献之後立樂也

（卅九）鶴庖丁之事　同書同篇云正月十七日年始舞御覽之時舞樂以前於二舞臺一有二鶴庖丁一但高橋大隅隔年役レ之高舞臺之時於レ階與二舞臺一之間有レ之也或曰此式起者豐臣秀吉公時有二正月被レ献レ鶴其時始行レ之遂爲二永例一云々

（四十）朱椀黑椀にて剛臆を別つ事　淺井物語一の卷淺井新三郎上坂治部大夫所へ奉公に出る事の條に治部大夫歸陣しては陣中の苦勞をなぐさめんとて諸侍をよびあつめ次第をおふてふるまひたまふ百の遊亂さま〴〵也陣中にて手に合たる者には朱椀朱をしきにて振舞たまふおくれをとりたる者には黑折敷くろわんにてふるまひける誠に諸人に貌をまぶられけること生たるかひぞなかりける云々頭書甲陽軍鑑にも此と同說あり深谷の酒禮北條五代記に片着の禮

（四十一）口分田といふ氏　同書三の卷今濱勢上坂面へ出張て備を立事の條口分田彥七といふ名の士あり旁訓にくちわきたとよみたり此後の卷々にも見ゆ旁訓はあやまりにてクブンデン氏なるべしいにしへの口分田が地名になりてそこより出たる氏なるべし口分田といふは男女人別におほやけよりたまふ田の事にてそのくはしき事は令義解に見ゆ

（四十二）すつば　同書四の卷淺井新三郎智略をめぐらし今濱の城を攻おとす事の條に今濱にはしかるべき者もこれなきよし告きたるによつてすつばをつかはし樣子を見とゞくる云々按に此詞北條五代記にも見ゆ忍の者をいへり今の世スッパヌキといふ詞あるも不意に刀をぬく事にて忍の者のおもひかけぬ所に立いりたるにたとへしにや頭書筆記百十五ノ百にスッパ拔アリ可二考合一

（四十三）伏がまり　同書五の卷淺井新三郎上坂今濱兩城を破却し小谷山に城をこしらふる事の條に山峰そばだちて伏がまりを置にもたよりよし云々按にききがまりともいひて敵の來るをうかゞふ者をいへり

（四十四）合詞　井羽織三引兩　同書六の卷淺井夜軍の事の條に夜討にせんとぞ議したりける云々さらばみかたにふれんとて合言葉を定めけり北風ふくといふときは一度に切てかゝるべし南風はげしと云時は城中へ引とれよ谷かとゝはゞみかたは山と答べし敵みかたのしるしには天目さいをわたかみに付ておげ步武者のしるしをば羽おりの後にぬひ付べし脇ざしのしるしには白紙にて三引兩のさやまきをよといひつけて夜討の用意ぞしたりける云々頭書東國太平記十四ノ七丁す政宗信夫郡

U 20553

燒働の條に岡野左内が猩々緋ノ羽織ニ金ノ切(キリウチハコシフケ)團ノ腰著ニテ懸出タルヲ云々同十五ノ九丁ウ松川合戰の條に北川圖書ハ小田切所左衞門ニ申ケルハ云々是ヲ遺物ニ渡候間我子ニ渡シ形見ニ届給ハレトテ具足羽織ヲ脫テ小田切ニ渡セリ云々

(四十五)艾虎　大休語錄　壽福寺大休正念の語錄六卷あり弘安甲申年の自序あり　一の卷住建長寺語錄に端午上堂不レ懸ニ青艾虎ニ不レ貼ニ白澤圖ニ云々また不レ須ニ艾虎當レ門掛ニ云々與清按に半陶葉にも艾虎の事見ゆ

(四十六)江島詩　同書五の卷偈頌雜題部に蘭溪和尙同遊ニ江島ニ歸賦レ此以呈「江島追遊列俊髦馬蹄獵々擁ニ春袍ニ穿レ雲分レ座烹ニ香茗ニ策レ杖徐行踏ニ巨鰲ニ洞口千尋石壁聳龍門三級浪花高須レ知海角天涯外萍水懽迎能兌遭」同六の卷偈頌部に再遊ニ江島ニ因思ニ昔日同行ニ皆爲ニ古人ニ有レ感而作「憶別江濱餘ニ十年ニ故人不レ見一潸然海山眺望渾如レ舊顏鬢彫殘不レ似レ前日暖鳥啼岩上樹浪平龍臥洞中天此行未ニ必重到ニ雲□袂徘徊幽石邊」

(四十七)富士山詩　同書五の卷偈に頌雜題に部題ニ富士山ニ古意「富士名鎭東南坤中ニ有ニ仙靈古跡存ニ群岫回環皆拱レ秀一峯峭峙獨推レ尊四時絕頂雪花積半腰白日昏氣昏人傳高聳二蹤緖問レ津未レ暇レ摩ニ雲根一

松屋筆記卷之十二

東都　高田與清文儒稿

(一)いりといふ詞　源氏帚木の卷におなじくはわがちからいりおしなほしひきつくろふべき所なく心にかなふやうもやと云々此ちからいりのいりは今俗にいふ入用の入なり枕草子春曙抄五の卷九丁ウ　にかいつくろひ二人わらはよりほかはいるまじとれさへておもにくきまでいへば云々とあるも又おなじ古今序に力をもいれずしてとも見ゆ頭書氣ニ入ト云詞筆記九十ノ卷曉月酒百首に「醉てのち太刀ぬく人は酒のいるたいへいらくを舞かとそ見る」砂石集九ノ十三丁ウに入ル事アラバ申ベシ當時ハ用ナシトテ物モトラズ云云

(二)はゞかる　散木集釋敎部に佛の御したはひろく長くしておほ空になんはゞかるといふことをよめる「みそらにも吹かよふらしおほくちのまかみか原のこのした風は」云々又阿彌陀佛の御身は世中にみちてはかりうべからずといへることをよめる「みたの身もあまつみ空にはゝかりてよもせはしとやおもひしるらん」云々右の詞書と歌とにはゞかるといへるは

今俗言にはだかるといふとおなじ心に用たり憚の字の心にはかなはずニクマレモノゝ世ニハゞカルなどいふはゞかるとおなじ頭書盛衰記廿六ノ十五丁ウ坪ニハバカルホドノ大頭ニテ云々

(三)すざましと云詞　古今集序の古注にかづらきのおほきみをみちのおくへつかはしたりけるにくにのつかさことおろそかなりとてまうけなどしたりけれどすざましかりければうねめなりけるをみなのかはらけとりてよめる云々とあるすざましかりければといふ詞の心は無興氣なるよし也源氏末摘花の卷九丁ウにもおもはしくはしたなきこゝちしてすざましげにてよりふしたり云々又十一丁ウ　かうなさけなきをすざましくおもひなり給にしかど云々など有も同詞なればあはせ考て知べし

(四)屯食　屯食はどんじきともどじきとも濁てよむべき事也空穗物語藏開上廿丁ウ　にどじき十ぐばかりと云々國讓下廿八丁ウ　にひわりごたゝのわりごどじきなどいとおほう有云々源氏桐壺廿九丁ウ　にどんじきろくのからびつども云々此外若菜上六十四丁ウ六十八丁ウ　柏木十丁ウ　寄生十八丁オ　などにも見ゆ屯はアツムルと訓字也食はイヒ也飯(アヅ)を屯たる義にて今のにぎり飯(メシ)の事をいふ公家にては

今もにぎりめしをドンジキといへり頭書榊十七丁オ

(五)手拭のかせ　井蛙抄六の卷七丁ウ　に後七百首の時眞觀まゐりて短冊を泉の水の中に吹入られ手のごひのかかせにかけてとりあげなどして見ぐるしかりけり云々此手のごひのかせは今世の手拭掛の事也頭書舊本今昔十四ノ卅五語に御拂係(カケ)タル御衣ヲ召テ纏ケ給とある拂は掛の誤にてカセト訓べし

(六)ゐなかづと　井みやげ　同書同卷九丁ウ　にゐなかづとなどつねはおくりて文にて申承けり云々都のつと家裏などは古歌にもおほくよめり今世の俗にはみやげ(ミヤク)といへりみやげは官倉の心にや官倉より都へもてのぼれるよしにていへるにてもあるべしさては清音に唱べき也貞德文集十　月五日　狀に爲ニ北國宮笥(ミヤケ)一鮭ノ鹽引鱒昆布鳴倉庚贈被レ下度候云々とあり頭書から糸草子十三丁オに梶原はわが家にもかへらずから糸なすぐに御所へひかせてまゐり上野みやげ奉らんとてまゐらせける北條五代記五ノ廿一丁オ江雪入道一興事條に女共いふやう來々年聖殿御歸國のみあげ物をはや今より用意せんと云々

(七)女に「殿」といふ例同「おとうど」といふ例　右京大夫家集八十丁ウ　にもろみつきやうにふだうのむすめくないきやうどのに歌はめされてと云々源氏湖月抄花の宴七丁オ　に女御の御とうとたち云々「押紙」吉田令世云伊勢物語にめのおとうとなもたりけるトモアリ

(八)かいもちひ　宇治拾遺物語古今著聞集にかひもちひあり屋代弘賢は今のぼた餅ならんといへり此頃赤澤某が信濃國伊奈郡よりかへりて物がたれるにかしこにては蕎麥がきの事をかいもちといふといへりかいもちは掻餅の通音なり頭書筆記廿七ノ一信濃内の人ソバガキをソバカイモチといふ云ボタ餅をカイモチといふ犬筑波冬「山寺のしんほちかいもちぬの子かな」ボタモチノ一也

(九)えぶな　山家集下に「種つくるつほねの水のひくすゑにえふなあつまる落合のはた」といふ歌あり此えぶなは江の鮒の義にはあらず赤鮒のこと也近江にてはこれを紅葉鮒と名づけて紅葉の時鮒魚の色赤くなるをいへりされど紅葉の時にかぎらず常にも赤色の鮒おほかりさればこゝによめるえぶなも赤鮒なるべしそはいかにといふにえは物の赤きにいふ詞にて魚の鰈エも鱒エヒも鰕エビもみな赤色也草の地楡エビス子紫葛エビカ芍藥エビスクスリなども赤色を帶たる物なれば「え」は赤き事にいふ古言也けりかゝればえぶなは赤鮒なるべしとはいふ也さて種つくるつほねとはいづこにもあれつぼかなる井に種つけし也その井のながれの末の落合の所に赤鮒あつまると也落合はこの水とかの水と流合所也はたは端也

(十)鶯を百千鳥とよめる歌　拾玉集一十丁堀川題百首和歌鶯の歌に「千とせふる千年の松の枝にゐても色となく百千鳥かな」此歌に正しく鶯を百千鳥とよめり後に逍遙院殿の集にもかくよまれし歌有

(十一)たまらぬと云詞　今の俗にこらへられぬをたまらぬといへり「おもしろさたまらぬ春の小雪かな」などゝ俳諧の發句にもよめり山家集下廿八丁ウに「はらはらとおつる泪そあはれなるたまらす物の悲しかるへし」又六十五丁ウ「澤もとけすつめとかたみにとゝまらて目にもたまらぬゐくのくさゝよ」などよめるこれ也

(十二)矢合　中國の軍に矢合といふ事あり宋史卷一太祖本紀一に會蜀兵來援戰于陳倉始合矢集左目氣彌奮擊大敗之云々と見ゆ

(十三)賣餅家　同本紀一に壽春賣餅家餅薄小云々と有

(十四)砦　又云砦于十八里灘云々これ中國にても「トリデ」と訓り綱目漢紀

(十五)羅拜呼万歳　又云羅拜呼万歳云々中國にても万歳を呼事あり持統紀に羅列して手を拍し事も見ゆ万歳ノ一末ニ委

(十六)鹽井茶稅　又云乾德元年免茶稅云々また禁鹽井とあり茶稅の事は類聚國史に見ゆ鹽井は甲斐國志ほの山にありといへり和漢同日の談也頭書後漢西羌傳廿九丁ウ龜茲ノ「押紙」吉田令世云西土ニテ稅茶ノ始メハ唐德宗貞元九年驛池アリ春正月癸卯初稅茶ト有ルヲ宋ヨリハフルカリケル猥委キコハ顧炎夫カ日知錄ニ詳也鹽鐵等ノコモ日知錄ニクハシ

(十七)野蠶繭　同書卷二太祖本紀二に野蠶繭と有これ山繭の事也

(十八)役人　又云役人云々役人の字俗字にあらず朝倉敏景十七條にも見ゆ

(十九)栗橋　武藏國埼玉郡に栗橋といふ驛あり刀根川にのぞみて東に渡れば下總國結城郡中田の驛也此くりはしといふ地名はいにしへくり舟などのさまに舟橋をまうけしゆゑなるべし梅花無盡藏三の上卷に十一日出ニ柿崎一大半濱路黑井中濱之間有河兩岸插レ柱張ニ大綱一渡者皆轉レ手而遣レ舟號曰ニ轉舟一とありこれらに似たるものなるべし轉舟は余も信濃國の犀川筑摩河などにて渡りし事あり

(廿)艾虎　或詩集作者未詳中に万里和尚と遇し事見えまた予住ニ等持ニ云々解レ印歸ニ万年舊院ニ云々また寄ニ種玉菴ニ詩ありまた延德元年己酉春三月などあればそのころの等持院住寺僧の詩集也幹林五鳳集に此中の詩を載て宜竹と題名したれば宜竹殘稿也に艾虎詩二首あり其一に「凜々清風白額侯朝來艾葉釘ニ門頭一笑ニ吾隨レ俗草爲レ虎反類ニ人狗一不」其二に「有レ虎當レ門意氣添風吹ニ艾葉一市中兼不レ知小草作ニ何用一今日於莵明日蟾」按に艾虎は半陶藁濟北集などにも見ゆ

(廿一)菊花塔　同集に菊花塔の詩三首あり其一に「胡蝶遶レ枝蜂遶レ枝正今塔標菊開時團々影動尤無レ縫中有ニ黃金秋一雜一」其二に「菊正開時塔影濃滿庭風露鎖ニ秋容一雄蜂雌蝶來三匝紅白一重黃一重」其三に「菊吹ニ佳色一況良辰庭下層々結搆新獨向ニ花前一吟(虫嗆)久詩中達磨塔中人」

(廿二)近習　同集に昔開國始大丞相分ニ諸將一自レ一至レ五以侍ニ衛殿中一謂ニ之近習臣一蓋居士之先選在ニ第五番一累世相承一時之望也云々按に丞相は尊氏將軍也居士は南堂居士といへる人也頭書禮記月令韓非子八姦篇

(廿三)短冊書法　短冊は文字ふとく墨黑に書くが故實也といへりげに古人の短冊は細く書たるはたえてなしそは讀師老人にては夜に入たる會の時よみかたきゆゑに文字ふとく書事也とぞ

(廿四)たつ春　立春をたつ春といへるは古今集の詞書にはじめて見ゆ禮記月令に立春之日東風泮凍と有

がかしこに立春といへるはじめなるべしさて立といふは立かへるよしにて浪の立かへるに同じ年立かへる日なれば立とはいへり蜻蛉日記榮花物語などに年もかへりてと書るも又同じ朔をついたちといへるも月立にて前月の盡て後月の立かへる日なればいへり

(廿五)季書懷紙　懷紙に季同と書くは高貴の人の會にはさもあるべしもと天子と同賦するよしの同の字なればみだりには書まじき事也また季のみ書も會主を歡する也さるを近來の人自ら會の兼題書てつかはすに季書懷紙など書てやるは自ら尊重せられんとする心にていといはれなしこはたゞ懷紙とのみ書て會主がおくりたらば季を書くと會主への挨拶也季を書ぬは桑門はさるべし俗人はいと失禮のわざ也

(廿六)室　近頃の人のあらはせし歌の書に平人の妻を某室と書たりいといはれなき事也有職問答四の卷に北政所或はなにがしの室などいふ事は關白の室に限るよし見ゆ桃花藥葉には大臣の妻を室といへる例ありされば室とは必三公の北方ならではいふまじき稱也後室などいふも三公の未亡人の稱と見ゆ愚管抄には政子の事を賴朝か後家と書れたり 頭書 本朝文粹に太政大臣卿室家と有

(廿七)北の方　北の方といふ稱は三公より以下國の受領の妻に至る迄ゑかいへるに空穗源氏榮花など考て知るべしこは必本妻の稱也今も五位以上には書べき也

(廿八)母妻女と書例　父にゑたがふ時は某女と書き夫に適時は某妻と書く或北方とも室とも簾中とも御臺所ともその人の位によりて分るべし夫におくれて子にゑたがふ時は某母と書也右大將道綱母などのごとしこれ婦人三從の義によれる稱也

(廿九)出擧　出擧稻出擧米出擧錢などは今の世の御貸附といふ物におなじ稻を貸付て利稻を取米を貸して利米を取錢を貸て利錢の取る也法曹至要抄に出擧米は借付米の事のよし見え吏學指南に出擧は謂下以レ財得二利潤一者上ともいへりいにしへ民間の者も上に請て出擧せし事歷史に見ゆ所謂御貸付に差金するにおなじ出の字去聲にスキと讀むべし 頭書 出擧の事發心集二ノ五丁オ

(卅)千葉介三浦介などいふ介の事　千葉介三浦介狩野介秋田城介大內介櫻庭介などいふ介はその國の介が住所によりて稱號となれる也千葉介は下總國介なるが千葉に住たる故千葉介とよび三浦介は相摸國介なれど三浦に住るをもて三浦介といへるなり秋田城介も出羽介にて秋田城に住るがゆゑ也必竟はその國內にての稱號なれど遂には公にもゑか呼ならはせし也さて後々は必國の介ならねど國介が居たりし跡に住る豪家をもなぞらへて稱號せしにや鎌倉將軍の時の三浦介千葉介などいづれもその國の介ならずまた大介新介權介などいふ名あり大介は三浦大介などあり今の俗に大殿大旦那の類也新介は若殿若旦那といふがごとし權介はかりに介の役を司るものをいへりいづれも中ごろの稱號と見ゆ太郎介は介の太郎子也次郎介は介の次郎子也

(卅一)八景の圖及詩　石門文字禪 宋ノ江西ノ筠溪ノ石門寺ノ沙門釋德洪覺範が文集卅卷有 八ノ古詩の部 に宋迪作二八境一絕妙人謂二之無聲句一演二上人戲一レ余曰道人能作二有聲畫一乎因爲レ之各賦二一首一

平沙落鴈

湖容秋色靡二青銅一夕陽沙白光漾々翩々欲レ下更嘔軋
一十五々依二蘆叢一西興未レ歸愁欲レ老日暮無レ雲天似レ
掃一聲風笛忽驚飛義之書レ空作二行草一

遠浦歸帆

東風忽作二羊角轉一坐看波面織羅紋日脚明邊白島橫江勢吞レ空客帆遠倚レ欄心緒風絲亂蒼茫初見疑二鳧鴈一漸覺危檣隱映來此時增損憑二詩眼一

山市晴嵐

宿雨初收山氣重炊煙日影林光動靄市漸休人已稀市橋官柳金絲弄隔レ谿誰家花滿レ畦滑唇黃鳥春風啼酒旗漠漠望可レ見知在二拓岡歸路西一

江天暮雪

潑レ墨雲濃歸鳥滅魂清忽作二江天雪一一川秀發浩零亂萬樹無レ聲寒妥帖孤舟臥聽打二窓扉一起看宵晴月正暉忽驚盡卷二青山一去更覺重携二春色一歸

洞庭秋月

橘香浦々青黃出維レ舟日暮柴荊側湧レ波好月如二佳人一矜誇似レ弄二嬋娟色一夜深河漢正無レ雲風高掠レ水白紛紛五更何處吹二畫角一披レ衣起看低二金盆一

瀟湘夜雨

嶽麓軒窓方在レ目雲生忽收圖畫軸軟風爲作二白頭波一倒二帆斷岸一漁村宿燈火荻叢營二夜炊一波心應レ作レ出レ魚兒一絕憐清境平生事蓬漏孤吟曉不レ知

烟寺晚鐘

十年車馬黃塵路歲晚客心紛ニ萬緒一猛省一聲何處鐘寺
在ニ烟村一最深處一隔レ谿脩竹露ニ人家一扁舟欲レ喚無ニ人
渡一紫藤瘦倚背ニ西風一歸僧自入ニ烟蘿一去

漁村落照

碧葦蕭々風浙瀝村巷沙光潑(ソヽグ)ニ殘日一隔レ籬炊レ黍香浮々
對レ門登レ網銀戔々剌レ舟漸近桃花店破レ鼻香來覺醇醲
舉レ籃就儂博一醉臥看ニ江山一紅綠眩

同書卷十五七言絶句の部に蕭湘ノ八景

山市晴嵐

朝霞散レ綺仗ニ天容一無レ際山嵐分外濃風土蕭條人跡靜
林蹊花木自鮮穠

洞庭秋色

秋霽湖平徹底清滄浪隱映曜ニ光輪一寒光烟々爲レ誰好
倚レ岸凭レ欄興最清

江天暮雪

長空暝色黯ニ陰雲一六出飄レ花墮ニ水濱一萬境沉々天籟
息溪翁忍レ凍獨垂レ綸

瀟湘夜雨

嶽麓甍簷蒼莽中蕭々江雨打ニ船蓬一一聲長笛人何去蒻
笠蓑衣宿ニ葦叢一

漁村落照

目斷青帘在ニ水湄一臨レ風漠々映ニ斜暉一漁郎笑傲蘆花
裏乘レ興回レ家何處歸

遠浦歸帆

水國煙光映ニ夕暉一誰家勞棹片帆歸翩々鷗鷺西風急
凝ニ眄滄洲一眼力徹

煙寺晚鐘

輕煙罩レ暮上ニ黃昏一殷々踈鐘度ニ遠村一略狗橫レ溪人迹
靜幡竿縹緲揷ニ山根一

平沙落鴈

寂寞蒹葭亂ニ晚風一江波斂邐浸ニ秋空一橫斜倦翼歸ニ何
處一一點漁燈杳靄中」明一統志卷之六十三長沙府宮室
部に八景臺在ニ府城西一宋嘉祐中築宋迪因作ニ八景圖一
僧慧洪賦レ詩更名ニ八境一陳傳良復ニ其舊一幷建ニ二亭於
旁一八景曰ニ瀟湘夜雨洞庭秋月遠浦歸帆平沙落鴈烟寺
晚鐘漁村落照山市晴嵐江天暮雪一元揭傒斯有レ詩云
云淵鑑類函卷三百四十九三部に八景臺在ニ長沙府城
西一宋嘉祐中築八景曰ニ瀟湘夜雨洞庭秋月遠浦歸帆平
沙落雁烟寺晚鐘漁村夕照山市晴嵐江天暮雪一云々此
外八景の事は潛確類書大法數四十五の卷半陶稿宜竹

殘稿空華集流水稿扶桑名勝詩集などに見ゆ扶桑名勝
詩集上中下三卷あり延寶の比吉田元俊が集し書也上
卷に八景中卷に十景下卷に十二景の詩歌を載たり延
寶八年刋行す安齋隨筆小車錦に云八景詩歌之事詩ハ
南宋ノ詩人瑩玉磵ト云人ノ作也好テ山水ヲ畫ク惠宗
ヲ師トシテ習ヘリ西湖ノ淨慈寺ノ僧也日本ノ繪ヲ學
ブ者玉磵樣(ヤウ)ト云ハ此人也歌ハ冷泉中納言藤原爲相卿
詠也定家ノ孫爲家ノ三男也云々武州金澤金飛院の藏
板に西湖八景の詩歌あり詩ハ南宋堂玉磵歌ハ冷泉中
納言爲相卿也頑書八景三境六境九境十二境廿景ナドノコト圖亭
八景序ニクハシク考證シイヘリ有馬十景日
工集三ノ卅二丁ウ十境同集三ノ卅九丁オ群書拾唾二ノ廿四丁大藏法
數三藏法數五車韻瑞群書拾唾三藏法數槐記二卷享保九甲辰五月十七
日の條に玉澗の八景と云はなき事のよし見ゆ本書百五の卷に抄出セリ可ニ見合一

(卅二)近江八景の所見　扶桑名勝詩集卷之上八景の部　近
江琵琶湖八景の注に江陽日記ノ百五十三曰　明應九年
八月十三日近衞政家公尙通父子依ニ佐々貴高賴朝臣
招請一趨ニ江州一掩留曆ノ日所々有ニ高覽一此時政家公
有ニ八景之詠歌一云々　輿清按に政家公號ニ後法興院關
白太政大臣准三后一永正二六十九薨六十和漢名數地
理第三に近江八景云々近衞政家云々近江名所圖會二
の卷に近江八景明應九年八月十三日近衞政家公尙通
公父子佐々木高賴の招請によりて江州に掩留ありて
詠歌序など作れり八景の題號此時より始る云々或は
永祿五年ともいへり云々これらには近衞政家とすま
た谷口重以が吾妻紀行には近江八景詩相國寺朴長老
歌近衞時嗣公國華万葉記十には詩ハ林長老歌ハ近衞關白時嗣公に作れりといへり閑田耕
筆卷一には近衞三藐院殿御自筆の八景の歌拜見せし
よしいへり遠碧軒隨筆下之上卷に近江八景の歌幷名
は三藐院殿作也云々

(卅三)南部八景の所見　長祿寬正記に寬正六年云々
九月廿一日申刻南都へ御成一乘院殿御所トナル云々
南都ノ八景ヲ被レ記御詠アリ「ハヒカヽル松ニ紅葉ヲ
カスカ山今ヲサカリノ鹿ノコエ〳〵」八景ハ東大寺
鐘春日埜鹿南圓堂藤猿澤池月佐保川釜雪居坂雨轟橋
旅人三笠山雪等也云々重編應仁記卷二に抑當所八景
ノ詩歌ノ事昔日後小松院御宇至德ノ比相定マルニ依
テ其時ノ公卿詩歌堪能人々吟詠一篇謂ニ之南都八景
詩歌一云々和漢名數地理第三にも見ゆ頑書日工集三ノ卅丁

(卅四)宗門　石門文字禪卷二十四記語の部　記西湖夜語に
夫正傳至ニ六世一而大振天下謂ニ之宗門一宗門所レ趣謂ニ
之玄旨一學ニ此道一者謂ニ之玄學一云々

(卅五)そゝうと云詞 幷そしう　俗語に踈漏なるとを「そゝう」といひ「そゝう者」「そゝうをした」などいへり源氏花の宴(湖月抄十丁オ)にたゞおほやけごとにそしうなるものゝ師どもをこゝかしこに尋侍りし也と見えたる「そしう」の轉語なるべしさて「そしう」は細流抄に狎の字かだむ心也と云々賀茂翁新釋に麁習歟踈熟歟云々與清按に俗語の「そゝう」に麁相と書て節用集下學集運歩色葉集などに見ゆされば假名もそさうと書べし

(卅六)飯を「めし」といふ訓義　飲を「めし」といふは召(メシアガル)の通音にて召上(メシアガル)などいふを省る語といふは一わたりは聞えたれどけだしや蒸(ムシ)の義ならん本朝文粹に女郎花を蒸(ムシアハ)粟にたとへし詩あるをおもふべし又食(クフ)の義かともいふ說あれど「ヲ」と「メ」は通ふ例にあらず

(卅七)草木の名に馬犬熊など冠せていふ言　馬蔓馬蓼犬蓼犬ほゝづき犬櫻熊橿能柳などいふ名和漢におほかり本草綱目卷十六馬蓼の條下に凡物大者皆以レ馬名レ之とあるにて馬蓼馬蔓などは常のよりも大きなるにいへると知べし今の俗にもすべて物の大きなるを馬のやうなりといへり關岡野洲良が馬の頭とあだ名せられしも鼻の大なるによりて也また古事記に葉廣熊橿とも見えて大葉のかしを熊橿といひ熊柳も大葉なるをいふはかしこの馬にたとふるにおなじく中國(クニ)には大なるを熊にたとへし也また犬ほゝづき犬櫻などの犬は否(イナ)の義にて似て非なるよしの名也

(卅八)遠江今切　重編應仁記卷十前公方家御沒落事の條に永正六年の秋八月七日の夜大地震夥シ其レヨリ以後七十餘日震動猶止ザリケレバ國々ノ堂社佛院大厦民屋顚倒スル事其數ヲ不レ知多カリケルニ此時天王寺ノ石ノ鳥居モ倒レニケリ剩へ八月廿七日同廿八日ニ遠州ノ海邊夥シク波打來テ數千ノ在家ヲ流シ捨テ死亡スル者數ヲ不レ知陸地三十餘町悉海ト成テ旅人俄ニ船ヲ設テ往行ス其レヨリ此所ヲ今切ノ渡ト名付ケリ云々和漢名數ニモイヘリ可レ考合一(頭書朽木氏藏今切古圖に永正八年未八月高浪にて湖海一ツニナル今切云々皇年代略記に永正七年八月廿七日遠州今切崩出云々)

(卅九)一揆　同卷十二廿一丁ウ)に古ハ花一揆或ハ桔梗一揆ナンド云テ旗ノ紋ヲ一同ニシ侍ノ組々一手々々ヲ分ケ定テ其品々ヲ一列ス何ノ比ヨリカ此作法絶果テ土民ノ徒黨シテ軍ヲ起ス者ヲ名付ケテ土一揆ト云ナラハス民ノ字ヲ略セル者ナラン然ルニ近年ハ土民ノ

徒黨毎度蜂起シ皆人士ノ字ヲ略セシメテ其ヲ只一揆トノミ云ナラハス然レバ今度ノ一揆ヲバ世人皆一向一揆トゾ云ヒナラハシケル云々(頭書漢籍ノ一揆モ義近シ)

(四十)鍬初　同卷十五廿四丁ウ)云十月廿八日彼山ニ鍬初セラレト云々また廿の卷廿七丁ウ)云二月廿七日鍬初有テヨリ御普請成就シテト云々

(四十一)勘合の印　同卷十六四丁ウ)云大內介義隆云々彼家ニハ本朝異國船往來勘合ノ印ヲ預リ其自由ヲ得タルガ故ニ毎年大明朝鮮等ノ國々へ船使ヲ遣シ珍奇ノ書籍器物等種々ノ財貨ヲ買求メ我朝ノ寶物トスト云云

(四十二)位牌　同卷廿六丁カ)云御位牌ハ御家督ノ君主爲レ持給云々万松院殿御逝去の時の事也神の位牌ハ高畑不動尊の側なる五社權現の神體に曆應三年大歲庚辰三月二十八日造と彫たるが五基あり(頭書參考太平記廿五ノ廿一丁ウ開田次筆ノ卅丁ウ按に位牌の圖三才圖會に見ゆ)

(四十三)武者修行　同卷十六廿三丁オ)云一人ハ武者修行シタリケル鑓小傳ト云フ根來衆ナルヲ松山安藝守家人林源八討取タリ云々(頭書北條記一ノ早雲蜂起ノ條ニ七人ル云々于レ時應正三年云々)

(四十四)陣僧　同卷十七廿丁オ)云敵ノ安見美作守ガ方ヘ陣僧ヲ使ニシテ一通ノ謀書ヲ遣スト云々按に陣僧は敵陣へつかはす使の僧也

(四十五)巡の舞　同卷十九十九丁ウ)云巡ノ舞始リ何レモ御緣ノ上ニテ舞フト云々按に三國傳記の序に巡物語といふも見ゆ(頭書國讓下ニモすんの舞空穗藏開ノ上ノ卅一丁ウに此すんの舞は知りたらんかし云々又卅四丁オかくてすんの和歌ゆきまさの少將の書つく云々宗五大紳子上ノ卅八丁ウ)

(四十六)近迎遠迎　同卷廿二丁オ)云新公方家越州ノ一乘ノ谷ヲ御立有リ云々信長ヨリ御近迎ヲ參ラスルト云々按に遠迎といふもあるべし

(四十七)木遣をうたふ　同卷廿九丁オ)云二條ノ御所御普請云々故細川氏綱ガ舊宅ニ藤戸石トテ名石ノ有ケルヲ信長自身奉行ヲシテ絹布ヲ以テ石ヲ包マセ花ヲ粧リ木遣ヲ謠ハセ笛大鼓ニテ囃立多勢ニ引セテ此大石ヲ即時ニ御所へ引付サセケリ云々

(四十八)おはせし　源氏物語葵卷廿四丁オ)むげにいきもたえたるやうにおはせしが云々四十二丁オにも見ゆおはしゝといふは例と也別に記せり

(四十九)みあれ木　貞觀儀式第三踐祚大嘗祭儀中に風俗歌人兩國男女各二十人裝束男細布褶袍各一領

襖子汗衫半臂各一領白綀綿袴一腰細布襪一兩舞人八人着二布帶一末額二各執一云々と見えたる阿禮木は歌に「みあれ木にゆふしてかけし」などよめるものとおなじかるべし

五十九の卷にもいへり

(五十)圭田　總國風土記に圭田何束といふとおほかり三才圖會地理十五卷にその圖を載て曰圭田則公田百畝之半也中二分之一而已故其法一定而不レ可レ亂若公田内除二廬舍二十畝一則田畝互相湊合而畸零之數必至二煩擾一矣云々また同十六の卷にも圭田の圖ありそは田の形の〈□□□〉かくのごときをいへり孟子に卿以下必有二圭田一云々

松屋筆記卷之十三

東都　松屋源輿清文儒稿

(一)貢茶　類聚國史日本後紀などに貢茶の事見ゆ事林廣記茶品集錄に有二稅レ焉者一自二張滂一始也有二經レ焉者一自二陸羽一始也とあり猶くはし

(二)西國三十三所順禮の札并彌勒といふ年號の事　吾友市野迷菴が石山觀音にまうでし時摺得てかへれる西國順禮の簡に

甲州巨麻郡布施庄小池圖書助

西國三拾三所順禮聖

岩時彌勒二年丁卯六月吉日

とあり三拾三所順禮の事彌勒の年號の事など已にいへり妙法寺記錄永正四年の條可二考合一

(三)某處くだりといふ詞　近頃の俗語にドコクダリ(アルク)歩行といふ詞ありまた某處クダリホッキアルクなどもいへり拾玉集四十(四十ウ)に町々くだりよろぼひ行て世を見ればものゝことわりみなしられけりと有いとふるき語也頭書舊本今昔廿九ノ七語に猪熊下二出テ走リケルニ云々同十四ノ四十二に大宮登リニ出テ東ザマニ

行ケルトアリノゾリクダリト對語也

(四)番場辻堂の鐘銘　吾友市野迷菴が近江番場の辻堂の鐘名を摺得て見せたりしに

敬白

奉レ鑄　江州馬場宿蓮華寺突鐘事

右當寺者彌陀安置之道場念佛勤行之靈砌也仍近隣諸人卜二寺中勝地一爲二葬倫之墓所一然因下欲レ醒二靈魂忘想之睡一更無中扣鐘逸韻之響上矣玄能歎二此事一廻二思慮一之處禪定大法主忝爲二大壇那一有二莫大之御助成一亦沙門畜生勸二諸佛果一大願我願既滿衆望亦足伏請堂宇勢不レ傾鐘磬音無レ絶庄内靜謐諸人泰平乃至法界平等利益

弘安七年十月十七日

勸進畜生法師

願主　僧畜能

大壇那沙彌道日

とあり此文中玄能とある玄の字は畜の省字也按に太平記卷九資名卿出家の段に汝是畜生發菩提心ト唱タリケルとあるは此寺に有功の畜生法師なれば聖やがてこの名を唱たりけんを畜類の事にとりなして書るは作者の戲なるべし

(五)定額　定額は員數を定むること也歌にひたひさだめとよめり賜定額といふは定員に定加らるゝよし也五代史劉審交傳に晉高祖拜二審交三司使一議二者請撿天下民田一宜レ得二益租一審交曰租有二定額一而天下比年無二閑田一民之苦樂不レ可レ等也遂止不レ撿而民賴レ撿云々元稹が錢貨議に自二國家置一兩稅一以來天下之財限爲二三品一一曰上供二曰留使三曰留州皆量出以爲入二定額一以給資云々頭書額額通用す小學注に額數也と見ゆ大明會典に額數額外定額原額見額等の字おほく見ゆ延喜式に定額僧定額女孃あり徒然草に定額大納言の説あり明峯草隱叢話が妮古錄一ノ一丁ウに太祖皇帝喜誦二唐李山甫上元懷古詩一大二書屋間一又極喜二順渚茶一定額貢二三十二斤一歲以爲レ常云々

(六)小野篁征二東夷一　性靈集卷一之下に贈二野陸州一歌并序あり序の詞に日本麗城三百州就中陸奥最難レ柔云々髻中插二著骨毒箭一手上毎執二刀與一矛云々唯君一箇帝心抽云々鵬翼一搏睨二此境一毛人面縛側二城邊一云々今見野公略無レ疋など見ゆ歷史には所見なきこと也

(七)名利の學　同卷一之下徒懷レ玉詩に古人學レ道不レ謀レ利今人讀レ書但名財云々

(八)能書用二好筆一　同卷四之上奉宮獻レ筆啓に良工先

利ニ其刀一能書必用ニ好筆一刻鏤隨レ用改レ刀臨池逐レ字變レ筆云々

(九)柑子　同卷献ニ柑子一表に乙訓寺有ニ數株柑橘樹一云々小柑子六小櫃大柑子四小櫃云々

(十)井澤彌三兵衞が墓碑　武藏國埼玉郡柴山村に享保の比の御勘定吟味役格井澤彌三兵衞が墓ありその碑面に八葉の矢車の紋ありて崇岳院殿隆譽賢巖英翁居士」井澤氏」元文三戊午年三月朔日」此石碑修福祭祀之徽意者天下泰平而祈ニ万民於快樂一武運長久而保ニ榮耀於扶桑一家門繁昌而及ニ武勇於異朝一」石碑造立之意趣者享保十三申年見治御新田代用水路當村田畑ニ相當別而當寺境内川鋪ニ相成難ニ相立一事時之御奉行井澤氏痛鋪被ニ思召一忝茂公儀被ニ仰立一寺脇而元荒川御堀替而古川ト成候處ヲ當寺ェ御預ケ地ニ相成揚レ土而埋立耕作爲ニ可レ仕人足一賃金五兩被レ下之外ニ御新田地代金五兩壹分御寄附被ニ成下一候故寺相續仕來候勿論鄕中格別之大水無レ之相應ニ豊作仕增祈ニ風雨隨時一於者也」武州埼玉郡菖蒲縣柴山村願主常福寺五世法印自圓」爾時明和四丁亥年十月吉良辰助力惣村役人惣村百姓」とあり

(十一)陽明の御家　陽明の御家とは近衞殿の御家むかし陽明門の前にありしゆゑにしかいひならはせり半陶藁に陽明殿下とも書たり

(十二)陽の太刀　陽の太刀とは衞府の太刀を誤れる也さて陰の太刀といふ名をさへいひ出しはいよ〳〵ひがごと也

(十三)布衣　布衣は狩衣也別物とおもふべからず

(十四)冬櫻　江戸谷中三浦坂の上なる寺に毎年十月花盛なる櫻あり年によりて十一月まで花葉ともに盛なることあり

(十五)武藏八王子武田信玄の遺物　武藏國八王子宿に眞松院といふ寺ありそこに信玄の調度の古物あまたあり船の鑓形もありといへり同所千人同心頭原半左衞門が家にも河中島にて信玄が本陣へ上杉謙信切込たる時半左衞門謙信が乘りたる馬の脇腹を鑓にて突たりその鑓またその時着用の具足肌帶など持つたへたりといへり同千人頭萩原賴母が家には茶臼丸といふ左文字の刀ありといへり

(十六)兼好が歌　世人の口に膾炙する歌に「よの中をわたりくらへて今そしる安波の鳴門は浪風もなし」此歌誰が作とも知もの少なしこは兼好法師が家集(流布本上卷九丁)に「ある人にいざなはれて四國見にわたりし時浪風のあらかりしことおもひいでゝよめる」といふ詞書ありて右の歌あり一本には此歌落たるもあり

(十七)掃部助憲朝が書　武藏國多摩郡下小山田村の若林三右衞門平盛隆が所藏に掃部助憲朝が書簡あり雖レ未レ遂ニ面上一候ニ富士參詣付而去度以ニ代官一路次中之義申宣候之處色々御懇切故無ニ相違一罷透候忝本望至候内々其以來以レ使此等趣可ニ申達一候へ共兎角取紛故令レ遲候本意之外候如何樣重而參詣之時分可ニ申入一候於ニ自今以後一者此口相當之御用等可レ承候不レ可レ存ニ無心底一候仍雖ニ散々候一緘ニ具進レ之候令レ期ニ後音之時一候恐々謹言

五月廿四日　掃部助憲朝(花押)

謹上　小山田殿(御宿所)

とあり小山田殿といふは小山田の氏族その村の今の大泉寺の立りし所に住て鎌倉大草子などにも小山田が城と見えたり河合系圖に見ゆ

(十八)木下川藥師寺神君御影の讃　葛西木下川藥師寺なる東照大神君御影の讃に

歸命滿月海　淨名瑠璃光　法藥救人天

因中十二願　東照大權現

三國傳灯　山門執行探題　大僧正天海開眼

(十九)博學腹破裂　法苑珠林に大智度論を引て曰有ニ一婆羅門一云々是人入ニ王舍城一頭上戴レ火以レ銅鍱レ腹人問ニ其故一便言我所レ學經書甚多恐腹破裂是故鍱レ之

(廿)鐘旭　鐘旭の事七修類稿陔餘叢考などに見ゆまた堅瓠廣集卷之五に高郵李毛保母爲ニ五通一所レ據屢治不レ能然家漸裕一日欲レ得ニ金首飾一五通曰向見ニ姑蘇徐守家姬所レ戴首飾一頗珍異往可レ得也已跛蹇而返曰首飾已得レ過堂西小樓遇ニ里瞼醜惡鬍子一擊レ我一鐵簡傷ニ左股一投ニ於井一而逋爲レ汝幾喪ニ我命一毛保聞レ之欲レ祭ニ其所一懼因假ニ賣卜一抵ニ徐守家一果以失ニ首飾一爲問ニ疑其奴婢一毛保布レ卦成曰物在ニ井中一徐命撈取果得詫以爲レ神奴婢德レ之尤甚延歎ニ西小樓一見レ所レ供ニ鐘旭像一正如ニ五通所一談給レ之曰惡神不レ宜ニ以鎭宅一我爲ニ汝家一移祀ニ廟中一其家許レ之即携歸置ニ堂中一五通避不ニ敢入一遙屬ニ耳於毛保母一曰此神正向擊レ我

者我以二汝故一竊レ物得レ禍又向所レ遺物無レ算今反毒二治我家一禍不レ遠矣因去不二復至一云々

（廿一）繪馬　法華驗記卷之下四十七丁に樹下有二道祖神像一朽故遥二多年歲一雖レ有二男形一無二女形一前有二板繪馬一前足破損沙門見了繪馬足損一以レ糸綴補置二本所一畢云々此事元亨釋書第九道公傳神社考下六十一丁などにも見ゆ舊本今昔物語卷十三第卅四語には板ニ書タル繪馬有リ足ノ所破レタりと有南郭遺契に唐鄭還古博異曰王昌齡馬當山謁レ廟乃命使レ賽二酒脯紙馬一獻二于大王一また丹鉛錄曰吳泰伯祠在二閶門之東一每二春秋一市人相率牲醴多二善馬一絣輿美女以獻レ之云々南嶺遺稿卷一云繪馬に武者繪を書事古き事也園記といふ書には建暦年中伊豆の三島の社へ八幡太郎陸奥の軍の圖有又太平記の阿保と秋山との河原軍の圖ありその比靈佛靈社へ手向として懸たる也云々與清曰南嶺遺稿に園記といふ書を引たるはいぶかし蓋桂秋齋が何の僞ごとならん繪馬の事倭訓栞にも見ゆ

（廿二）葬に金玉を用れば不レ朽　三國志吳志孫休傳注に葛洪抱朴子曰吳景帝時戍將於二廣陵一掘二諸冢一取レ版以治レ城所レ壞甚多復發二一大冢一內有二重閣一戶扇皆樞轉可二開閉一四周爲二徼道通車一其高可二以乘一レ馬又鑄レ銅爲レ人數十枚長五尺皆大冠朱衣執レ劍列二侍靈座一皆刻二銅人背後石壁一言二殿中將軍一或言二侍郎常侍一似二公主之冢一破二其棺一棺中有レ人髮已斑白衣冠鮮明面體如二生人一棺中雲母厚尺許以二白玉璧三十枚一藉レ尸兵人輩共舉二出死人一以倚二冢壁一有二一玉一長一尺許形似二冬瓜一從二死人懷中一透出墮レ地兩耳及鼻孔中皆有二黃金一如二棗許大一此則骸骨有レ假レ物而不レ朽之效也

（廿三）十八公　同孫皓傳注に吳書曰初固（丁固也）爲二尚書一夢松樹生二其腹上一謂レ人曰松字十八公也後十八歲吾其爲レ公乎卒如レ夢焉

（廿四）尸を焚は罪科にひとし　同注に江表傳曰定（何定也）汝南人本孫權給使也云々定爲レ子求二少府李勗女一不レ許定挾レ忿譖二勗於皓一（孫皓也）皓尺口誅レ之焚二其尸一云云

（廿五）吳の侍中李仁が語　同注に吳平後晉侍中虞峻等問二皓（孫皓也）侍中李仁一曰聞吳主披（ハグ）二人面一刖（キル）二人足一有レ諸乎仁曰云々夫受二堯誅一者不レ能レ無レ怨受二桀費一者不レ能レ無レ慕此人情也云々

（廿六）山伏　慈慧大師傳に頭戴二杜欽（トキン）手綰一百八摩珠一報言吾乃役小角之徒臥行者也久聽二師名一偶出二羽丘霞一遙入二叡峯之雲一云々按に山伏の杜欽をいたゞくこと早くより見ゆ後撰雜一桂川地藏記和事始鈴かけ衣河海抄初音の卷同明石の卷濱松中納言三の十一丁四の十九丁源氏物語所々に（見ゆ）空穗同海道記廿四丁とりかへばや所々古今六帖二（卅八）丁長烏帽子義經記所々などに山伏の事見えたり其外おほし頭書下學集上ノ九丁ウ

（廿七）夜半と云詞　夜半は夜間の意なるよし賀茂翁いはれたり万葉には三更を「ヨハ」とも「ヨクダチ」とも「ヨナカ」ともよめり（万葉に三更と書きたるが五所あり七の卷八の卷九の卷十の卷十九の卷也）與清按に「よは」は「ヨフカ」の約也古今雜下に「風ふけはおきつしら浪立田山夜半にや君かひとりこゆらん」と云歌の左注に月のおもしろかりける夜かうちへいくまねにてせんさいの中にかくれて見ければ夜ふくるまで琴をかきならしつゝとあるをおもふに夜ふけしを夜半とよめる也後撰には此詞見えず拾遺夏「み山出て夜半にやきつるほとゝきす　曉かけて聲の聞ゆる」同戀二に「こぬかなとしはしは人は思はせんあはてかへりし夜半のねたさに」これらいづれも夜深き方に近し六帖「玉の緒のたえてみしかき夏の夜の夜はになるまでまつ人のこぬ」此歌は正しく夜深きことの證とすべし大和物語にも忠岑「かさゝぎのわたせる橋の霜の上をよはにふみわけことさらにこそ」

（廿八）李の字訶の字　九經字樣の禾部に季年（上ハ說文ニ從ヒ禾從レ千聲下經典相承隸變）云々欠部に歌訶（二同詠也）云々と見ゆ九經字樣凡七十六部四百廿一文二帖にわけたり唐玄度が開成丁巳歲の序に大曆中司業張參撰二衆字之謬一著二爲定體一號曰二五經文字一專典學者實有レ賴焉臣今參詳頗有二條貫一傳寫歲久或失二舊規一今刪二補穴漏一一以正レ之又於二五經文字本部之中一採二其疑レ誤舊未レ載者一撰二成新加九經字樣一卷一凡七十六部四百廿一文云々按に五經文字にも大曆十一年六月七日司業張參承レ詔與二諸儒一撰よし自序あり跋に乾符三年孫毛詩博士自牧以二家本一重按勘定と見ゆ石本三卷分て六帖とす

（廿九）實名を呼は不禮　吾妻鏡十六（十丁右）に尼御臺所還御令レ獻二彼狀於羽林一給以二此次一被レ申云々云々源氏等者慕下一族北條者我親戚也仍先人頻被レ施二芳情一常令レ招二座右一給而今於二彼輩等一無二優賞一剩皆令

レ喚ニ實名一給之間各以貽レ恨之由有ニ其聞一云々 頭書梅花無盡藏六ノ十五丁ヲ枕草子春曙抄二ノ十二丁オに殿上人宰相などをたゞなのるなをいさゝかつゝましげならずいふはいとかたはふるなり云々 蜀志馬超傳注に山陽公載記曰超因見ニ備侍一之厚與ニ備言常呼ニ備字一關羽怒請ニ之備曰人窮來歸レ我殺レ呼ニ我字一故而殺レ之何以示ニ於天下一也云々 五代史六十三ノ五丁ウ 困學紀聞十九ノ三丁オ 唐書二百四十六ノ七丁オ 說苑二ノ三丁オ 南史十七ノ八丁オ

(卅)大番當番定番人　吾妻鏡脫漏十五丁に嘉祿元年十二月廿一日東西侍御簡衆事有ニ其沙汰一若君御幼稚之間就ニ御所近々東小侍一可ニ著到一之由御下向之始被レ定上者不レ及ニ子細一但西侍無レ人之條似レ背ニ古例一乎仍相州以下可レ然人々者著ニ進名代一門々如ニ警固之事一連日夙夜可レ令レ致ニ其勤一也遠江以下十五箇國御家人等十二箇月依ニ彼分限多少一而可ニ著宛一雖レ爲ニ自身出仕之日一可レ進ニ名代於西侍一(號ニ之大番一)之由議定畢是右大將軍之御時稱ニ當番一或亘ニ兩月一限ニ一月一長日每夜令レ伺ニ候之一也次同所始被レ置ニ定番人一也云々

(卅一)聖宮倫宮御誕生　文政三年正月十七日女御御著帶五月十七日皇子御誕生六月十七日御宮參の規式紫宸殿ニテ行ハル主上初テ御膝ニ抱カセ玉フ皇子御童名ヲ聖宮(すさ)ト申奉ル仙洞御所ニテモ五月十七日皇女誕生アリ局方ノ御腹ナリトゾ御名ヲ倫宮(つね)ト申スト云云

(卅二)著裳半の年を忌　大石千引曰今世に袴著或は髮置などすべて長の年を忌て半の年を用ふるはいにしへにたがへり榮花かゞやく藤壺に大殿(御堂關白道長公)の姫君(上東門院彰子)十二にならせたまへば年のうちに御裳着有てやがて內にとおぼしいそがせ給ふと有

(卅三)御袋　母を御袋といふ事永享御產所日記に御袋御方と見え康富記享祿四年正月九日今曉室町殿姫君誕生也御袋大館兵庫頭妹也とあり 頭書鎌倉年中行事上一丁同三丁ウ花營三代記下九丁ウ新撰狂歌集下廿七丁隱入記四十六丁ウ

(卅四)菖蒲刀　諸社根元記藤森の條又藤森緣起などに菖蒲刀の事見ゆ 辨內侍日記には甲人形あり

(卅五)下賤の者姓氏を書例　三代實錄仁和元年十二月廿二日信濃百姓辛犬甘秋子とあり法隆寺の古調布にも常陸國信太郡中家鄕戶主大伴何某と有賦役令に調布國郡姓名を記すべきよし見ゆ

(卅六)浪人　浪人の名天武紀に浮浪人(うかれひと)と見ゆ 釋紀に海賊と注せしはたがへり三代實錄元慶三年二月十五日の條にも見ゆ今の牢人也桓武紀にも浪人とあり

(卅七)大內裏　崇峻紀に覌博士あり皇極紀に大極殿十二門あり孝德紀に八省百官を定らる元正紀神龜元年十一月甲子大內裏立られしよし見ゆ

(卅八)ゆゝで　榮花月宴に御風などいひて候湯ゆでなどして云々同もとの雫に御風にやとてゆでさせ給ひてのぼらせ給ふ云々同衣の珠には風などいひて有馬へと出立給へどゝもあり風を治るに湯治するとなり續詞花雜に大齊院御あしなやませ給ふを杉の湯にてゆで給ふべきよし申ければゆでさせたまへとしるしもみえざりければとも有字鏡に煠以(ニ)榮入(レ)湯奈由(ナユ)(赤染右衛門歌)豆(ヅ)ともありて由豆は湯に入ることなりゆでかたびらといふもあり

(卅九)みどいふ詞　風をいたみ苫をあらみなどの「み」は「さに」と云心なるよし玉霰にいへりされど万葉二の卷(四十一丁オ)に若草其嬬子者不怜彌可念(ワカクサノソノツマノコハサブシミカオモヒコフラム)而寢良武(ヌラム)悔彌可念(クヤシミカオモヒコフラム)戀良武とよみまた万葉の卷十に「みよしのの石本さらずなく河津(カハヅ)うべも鳴けり川をさやけみ」などの「み」は「さに」といふ心としては聞えず「風をいたみ」「苫をあらみ」などの「を」もじを加へていふ時「風をイタサニ」「苫をイタサニ」といふべき語例もなければこはみな「ガリ」の心なりと知べし

(四十)こさふく　蝦夷人の胡沙吹といふは胡沙笛といふ物ふくよし舊說にて夫木抄にも歌によめり與清按にこさは笛の名にあらず武藏相摸の方言に物の蔭のおほへるを「コサ」といへり田畑の木蔭にて日の照さぬ所を「コサ」といひその木蔭を刈採を「コサガリ」といへり蝦夷人が吹笛もその氣にて空かいくもるゆゑに日も見えず蔭になるをもて「コサフク」とはいふなるべしさて「コサ」てふ言の意は籠氣の義なり「コ」は「こめ」也立こめかくすより出たる語也「サ」は氣也古語氣の事を「シ」といへるは嵐時雨あなじ虹しはぶきなどおほかり今擧盡數べからず

(四十一)狐付をおとす妙方　マチン鐵粉黑大豆石の三味を煎じて呑しむれば狐大に恐れて落る也大概この藥を用んとすれば呑すして狐おつる也都て獸類には大禁忌也 頭書守武千句廿丁オ人になどかうやく狐付ぬらん 康富紀に狐付あり狐祟(ムツフ)

(四十二)馬長　吉部秘訓抄一の卷に東宮被レ騎御靈會馬長事云々同四の卷に御靈會馬長以下裝束事云々又年中行事秘抄續古事談などにも見ゆ吾妻鏡八の卷四丁(カ)にアゲムマと訓たるはひがごと也むまをさと訓べし馬長は田樂の類也○園大曆十六(廿二)丁ウ觀應二ノ三ノ四の條に穢中賢所渡御之例云々安元二年六月十四日

祇園御靈會也依ニ内裏院中觸穢一無ニ所々馬長幷田樂一云々 頭書 筆記卅八ノ廿八則ニモ見ユ

松屋筆記卷之十四

東都　松屋源與清文儒稿

(一)關防の印　余が關防の印に令題知非齋とゑれるは清人孫岳頒が關防印に御題墨雲堂とゑりたるによれる也彼は天子の題なれば御題とはしるせるなるべし余は華頂法親王御筆染たまひて知非齋の扁額たまひしによりて令額とはしるせる也 頭書 名物六帖器財第一十丁ウ制度通五一ノ印章ノ條奇説雜編八卷卅一丁ウ後に法王御筆に余が著述を寶たまひて軸ニ皆金玉と遊ばしてたまはりしこと又關防印にゑりぬ

(二)根津祠の詩　今茲文政三年の夏松平冠山君 雄殿頭 武藏名所考なりぬとて竟宴の詩勸進し給へり余に根津祠の詩をとのたまへば作りて奉る七絕「聞說武尊鎭ニ海東一歸來到レ此繫ニ花驄一清風吹起吾孀俗今日昇平祈ニ盡忠一」

(三)芝居の金主したる文人　今茲文政三年の秋葺屋町玉川座の芝居の金主は岸本由豆流也日々に從僕を率て葺屋町玉川座の帳場に諸居ると也さきに山本信有 號は北山俗稱喜六 も芝居の金主せしことあり文人にて芝居の

金主せしは此二人而已

(四)文人の素性　太田蜀山は御徒也今は支配勘定に登用せらる太田元貞は加賀國の鄕士の子也今吉田侯の儒員となる谷文晁は田安御殿の御家人也龜田鵬齋は横山町の鼈甲屋也今は浪人片倉鶴陵は相摸國スヽガ谷といふ所の民の子也今一橋御殿の醫官となる狂歌堂眞顏は數寄屋橋の家主也曲亭馬琴は飯田町の家主也北愼言は新橋金春屋敷の屋根屋にて俗稱を三左衞門といふ釋了阿は淺草黑船町村田といへる煙管屋の弟也隱蓬大にして女に逢こと叶はざるを憤て出家し戒を保て律僧となる今は破戒肉食の凡僧也正木千幹は小船町鰹節屋の主也隣家の妻と密通のこと顯れて所を去て淺草タウガラシ横町にすみ今は兩國矢の倉に家す一柳千古は仙臺侯の御馬役の子也清水濱臣は町醫者也片岡寬光は神田仲町の地守也岸本由豆流は金座の手代の孫也その祖父引負金して金座を逐はれて遂に町人となる其子は草造紙に圓 圓ハ圓藏歟 次郎と作られし男也由豆流は其圓次郎が子也近來弓絃御用達の株を買て御用達町人となれり村田たせ子は儒家渡邊玄六の娘にて春海翁の養女となれる也鍬形紹眞は畳屋也今津山侯の畫所となる大石千引は龜井戸の湯屋也關岡野洲良は武藏八王子宿の梅原といふ豪農の子也今富澤町能裝束師となるその子は安躬とて隅田川にて杯流したる高名の人也高井宣風は道具屋也今かうじ町にて和歌の師を業とす其子を八穗といふ齋藤彦麿 秋田侯藩士也 は三河人也今濱田侯の御茶坊主となる平田篤胤は下總香取郡大和田といふ里の民の子也本居大平は伊勢松坂の豆腐屋也かくいふ與清は武藏國小山田の鄕士田中本孝の次男也母は同國倉岐郡大岡の里の平戸忠藏女俗名稻といへり與清生れし日母やがて死す天明三年三月十七日也與清生れしは十六日の夜八ツ時母死せるは八ツ半時也年三十三父は享和三年六月十六日身まかりぬ年六十三同年九月廿四日見沼通船方高田氏の養子となる

(五)名號　與清幼名を寅吉といひ後に虎之助貴長といふまた仁右衞門と改高田の家を繼て庄次郎與清といふ後字を正に改て正次郎といひまた茂右衞門と改今は六郎左衞門といへり字は文儒號をはじめ玉河亭といひまた樂山堂といふ後に松屋と改む別號は報恩舍また報國恩舍また知非齋ともいへり

(六)恩人　與清父母の恩はさらにもいはず繼母の養育にてひとなれり繼母名は喜能相摸國鶴間村北島林右衞門女也素讀手習の師は順德といへる浪人也父の家の食客なりき後に漢學の師は古屋十次郎高也高は熊本侯の敎授にて肥後人也日本橋大工町新道に家居せり和學の師は村田平四郎春海也春海は小舟町ホシカ問屋也後に白河侯の臣となる八丁堀地藏ばしに住乳母は小山田村の百姓伊左衞門が妻にて名をカナといへり

(七)夜の錦　夜の錦は後撰の歌によみて漢書の朱買臣が故事也されど買臣に起るにあらず史記項羽本紀(十九丁ウ)に項王曰富貴不レ歸二故鄕一如二衣レ繡夜行一誰知レ之者とあり頭書後漢書杜篤傳注に韓生勸二項羽一都二關中一羽曰富貴不レ歸二故鄕一如二衣レ錦夜行一乃婦都二彭城一而高祖自二豐漢一出襲擊レ之也見二前書一史記短長說下十六丁ウにも項羽の語を出せり漢書項籍傳十三丁ウ後撰秋下和泉式部集貫之集後撰正義南史劉之遷傳三國志魏書徐晃傳注十七ノ十七丁

(八)をもじを助詞に用る格　「を」もじを助詞につかふ歌古歌におほし古今秋上に「萩が花ちるらん小野の露霜にぬれてをゆかんさよはふくとも」是等の類皆「よ」に通ふ「を」也詞たらぬ時みだりにおくはひがごと也戀三に「人はいさ我はなき名のをしければ昔も今もしらすとをいはん」

(九)石川年足朝臣墓誌　文政三年正月元日攝津國島上郡眞上村の里正田中六右衞門といふをのこそこの荒神塚といふを掘毀きて古松の根下より銅牌を得たり長一尺一寸七分横三寸四分弱ありその銘に曰

武內宿禰命子宗我石川宿禰十世孫從三位行左大辨石川年足朝臣長子御史大夫正三位兼行神祇伯年足朝臣當二平成宮御宇天皇之世一天平寶字六年歲次壬寅九月丙午朔乙巳一春秋七十有五薨二于京宅一以二十二月乙巳朔壬申一葬二于攝津國島上郡白髮鄕酒垂山墓一禮也儀形百代冠蓋千年夜臺荒寂松柏含煙嗚呼哀哉

按に平成宮の成の字は城の省字也

(十)常陸板子長勝寺鐘銘　常陸國行方郡潮來の里に長勝寺といふありこの洪鐘の銘に曰

常陸國海雲山長勝禪寺鐘銘

寺始二於文治元年一右大將殿時所レ立也迄二今元德庚午一百二十餘載乃爲二鎌倉殿御願所一大檀度道曉禪門以二七鐘未一レ宏與二貴春一等共施レ財新而大レ之住持妙節長老請二於圓覺淸拙叟一爲二之銘一曰云々(銘長ければ今)

(略)之元德庚午十月二日書(中略)大工甲斐權守助光　住持傳法沙門妙節　大施主下總五郎禪門道曉　大檀那相摸禪定門崇鑑

とあり崇鑑は相摸入道高時の法名なり

(十一)つまと云詞　物の端を「ツマ」といふは「家のつま」「衣のつま」などおほかり源氏須磨の卷(三丁)に中中物おもひのつまなるべきと有を端なることの證とすべし

(十二)野郎といふ罵詞　人を罵る俗語に野郎(ヤラウ)といふこと常也こは丁(ヨボロ)の通音ならんとおもひ居しに猶さにはあらじ童(ワラハ)の轉語なるべし今も近江人が人を罵る詞に彼ワロそのワロなどいへり童の心と見ゆいにしへは冠を放てわらは形なるをいたくいやしむる世なれば童といふを罵ごとにいひしなるべし

(十三)はこ鳥　はこ鳥は今クワツコウともクワツホウとも鳴鳥也ハツコウと鳴を今はくわつこうともくわつほうとも聞誤れる也ハツコウを約れば「はこ」也啼聲によてはこ鳥とはいへる也またカンコ鳥ともいへり「カコ」と啼と聞てしかも名づけし也本草綱目に鴪鴣とあり搏黍とも護穀とも搏穀とも郭公鳥とも布谷ともいふ其名異名おほき鳥也

(十四)たのしきなげき　万葉五に梅ををりつゝたのしきをつめとよめるは樂木(タノシキ)といふ心にとりなして木を積めとよめりと見ゆ古今の歌にはなげき(ナゲキ)を長木によせたるいとおほし

(十五)きゝがまり　中昔の合戰の書にきゝがまりと云詞有敵の動靜をうかゞはんが爲に陣外に埋伏せしむる者をいへり史記衞將軍傳に伏聽者と有におなじ頭書武邊咄聞書九天正三年五月廿一日長篠合戰といへる段に信長詞に酒井左衞の忍取かまりかせぎはその方などの三ヶ遠州にて百騎二百騎の小道合の事也云々

(十六)金人　史記霍驃騎傳に收二休屠祭一レ天金人注に如淳曰祭レ天爲レ主索隱曰案張晏云佛徒祠二金人一也云云與淸按に佛法後漢孝明帝ノ時より漢に傳はれりといへど此文に據ればいとはやかりし也陂餘叢考を考べし頭書蜀志五ノ廿六丁ウ越王勾踐カ范蠡ガ金像テイルコト見ユ

(十七)ダンホ風幷お七風　文政四年正月十八日南風いと烈しく塵埃掠レ天往來の人目を開くことあたはず芝片門前に火事ありけるが二町あまり燒て止りぬ此日江戶中の家々火事を恐れて土藏に目塗し藏なき者は家財雜具を運びさまよひぬ午の時ばかりに芝片

門前に火事ありといひさはぎ未の時には尾張町申の時には日本橋わたりまで火きたれりとのゝしりあひしが皆ねなしごとにて片門前の火事のみにて事しづまりにき同二月中旬より彌生のはじめに及まで疫癘流行十に八九はこの憂にかゝらざる家なしことし今様の囃にダンホサン〳〵とはやすこと流行せり越後國より起りて檀方様といふよし也といへり或ナンホサン〳〵ともはやしたり太田南畝が號をはやしにせし也ともいへりこれにより疫癘を名づけてダンホ風といへり今より十八九年前お七風といふも流行せりそは八百お七といふ狂言をノゾキの口説に作りたりしを世人いひきようせしよりお七風といひける也此頃執政青山野州土井大炊頭主大久保加州水野羽州皆ダンホ風に犯されて出仕したまはず阿部備中守主一人つゝがなくおはしませりとなんこれに政府命ありて出仕の宮人長髪を許さる

(十八)陸沈　史記滑稽傳東方生が傳に酒酣據レ地歌曰陸ニ沈於俗一避ニ世金馬門一宮殿中可ニ以避レ世全レ身何必モ深山之中蒿廬之下ニシモセン云々注に索隱曰司馬彪云謂無レ水而沈レ之云々

(十九)士を見るに貧に失す　同傳東郭先生傳に諺曰相レ馬失ニ之瘦一相レ士失ニ之貧一云々

(廿)捧腹　同日者傳に司馬季主捧レ腹大笑云々

(廿一)今昔　同龜策傳に今昔壬子云々注に索隱曰今昔猶ニ昨夜一也以ニ今日一言レ之謂ニ昨夜一爲ニ今昔一云々

(廿二)逆に取て順に治　同傳云故云取レ之以ニ暴疆一而治以ニ文理一云々頭書筆記卅六の卷廿七段後漢書ヲ引蜀志龐統傳注七ノ四丁オ

(廿三)松柏百木の長　同傳云伻ハ外有ニ節理一中直空虛松柏爲ニ百木長一而守ニ門閭一頭書初學記廿八ニ引レ之

(廿四)三瓦を成さず　同傳故世爲レ屋不レ成ニ三瓦一而陳レ之以應レ天云々注云徐廣曰一云爲レ屋成欠ニ三瓦一而陳レ之也正義曰言爲レ屋不レ成欠ニ三瓦一以應レ天猶ニ陳列而居一之頭書輟耕錄廿六ノ四丁オ

(廿五)德　同貨殖傳云諺曰百里不レ販レ樵千里不レ販レ糴居レ之一歲種レ之以レ穀十歲樹レ之以レ木百歲來レ之以レ德德者人物之謂也

(廿六)交絕不レ出ニ惡聲一　同書樂毅傳に古之君子交絕不レ出ニ惡聲一忠臣去レ國不レ潔ニ其名一云々注に正義君子之人交絕不レ說ニ己長一而談ニ彼短一云々頭書筆記卅六廿七段戰國策九下卷四丁ウ燕惠王篇ノ樂毅報ニ燕王一書に臣聞古之君子交絕不レ出ニ惡聲一忠臣去レ國也不レ潔ニ其名一云々注に毅其君ニ而自潔云々

(廿七)すむづかり　字治拾遺物語四の卷十九丁ウにすむづかりといふ物あり其製法大豆をいりて煖なる時酢をかけたる也よく箸にはさまるゝ物也と或人いへりさるに武藏國埼玉郡菖蒲の里の近邊にてすみづかりといふ物を製(ツク)りて正月年神に供することありその製法は黒豆を炮(イリ)てそれを升の底にて押つぶし二つにわれたるを實も皮も共に大根おろしにかきませ醬油をかけたるをすみづかりといへりこれいにしへは酢をもかけたりけんゆゑに酸みつかりとはいへるなるべし右の宇治拾遺のむづかりも音通へば似たる作りざまの物なるべし

(廿八)タギマ道　蒲生秀實曰河内國杜下神座(座)經津主命也此社を近飛鳥神社ともいふ別當を金剛輪寺といへり其社に土鏡(ハニカヾミ)ありその社ノ邊の高麗が谷といふ所より出たりと別當覺峰上人の談也其銘に大同二年矢作連以ニ天香山之土一造レ之とあり按に姓氏錄河内神別に矢作連あり

土鏡

銘曰
大同二年 矢作連 以ニ天香
山之土一造レ之

また杜下(モリモト)社より東南三四町許に若宮ありその社の地中より寛政申年に長二尺許の切石をほり出たり

伊波別命
瑞齒別天皇
袁登賣命

切石ノ銘如レ此

といふ銘あり此伊波別命は經津主命の後也袁登賣命は未レ詳但日本紀反正紀に大坂ニアフヤヲトメとあり瑞齒別命は反正天皇なればよしあることゝ見ゆ

與清按に常陸風土記に車駕所レ經之道狹地深淺惡路之義謂ニ之當麻一俗云多支と見えて當麻路はアシキ道の義也タヾニハノラズとは直路をば告ず曲道を告しよ

しの御歌也日本紀を考合すべし

(廿九)山東京傳　山東京傳姓は磐瀬名醒(サムル)京橋銀座一丁目東側中程に住て東屋傳藏といふ煙草入屋也文化十三年九月七日死辨譽智海京傳信士と法號す兩國龜澤町廻向院に葬るその妻もいくほどへずして病死せり

(卅)淨土宗　黒谷上人語燈錄の沙門了惠が自序に中比黒谷ノ上人勢至菩薩ノ化身トシテ始テ彌陀ノ願意ヲ明ラメ專ラ稱名ノ行ヲ勸メ給ヒシカバ勸化一天ニ普ク利生万人ニ及ブ淨土宗ト云事ハ此時ヨリ弘リケルナリ云々按に淨土宗起源の事圓光大師傳十六門記元亨釋書など見て知べし黒谷上人語燈錄は文永十二年正月二十五日了惠が自序ありて世に和語燈錄といふ七卷あり漢語燈錄とともに寛永癸未孟春刊行す

(卅一)南无阿彌陀佛と申す　同卷一(十四丁オ)御誓言書第二に云モロコシ我朝ニモロモロノ智者タチノ沙汰シ申サル、觀念ノ念ニモアラズ又學問ヲシテ念ノ心ヲサトリテ申ス念佛ニモアラズタヾ往生極樂ノ爲ニハ南无阿彌陀佛ト申セバ疑ナク往生スルゾト思ヒトリテ申ス外ニハ別ノ子細候ハズ云々

(卅二)騏驎の尾の蠅　同卷二(二丁オ)念佛往生要義抄第四に只一筋ニ我身ノ善惡ヲ顧ズ決定往生セント思テ申ヲ他力ノ念佛ト云フ喩バ騏驎ノ尾ニ付タル蠅ノヒトハ千ニ千里ヲ翔輪(カケリ)王ノ御行ニアヒヌル卑夫(ノグル)ノ一日ニ四天下ヲ輪ガ如シ云々

(卅三)念佛　又云(三丁オ)女人ニモ近付ズ不淨ノ食モセズシテ申サン念佛ハ貴カルベシ朝夕ニ女境ニムツレ酒ヲノミ不淨ノ食ヲシテ申サン念佛ハ定テ劣ルベシ功德イカデカ等シカルベキヤ答テ云功德等クシテ勝劣アルベカラズ其故ハ阿彌陀佛ノ本願ノ故ヲ知ザル者ノカ、ルヲカシキ疑ヲスル也

(卅四)すかしほらかすと云詞　同(十四丁オ)七箇條起請文第六にユクヘ邊(ホトリ)モナキ虛言ヲタクミ出シテ物ヲ知ヌ男女ノ輩ヲスカシホラカシテ云々

(卅五)ひらにと云詞　同(十五丁オ)云只ヒラニ信ジテダニモ念佛スレバ、ロニ三心ハ有ナリ云々

(卅六)いそ〳〵と云詞　同(十五丁ウ)人ノ心ザマハイタク目モナレ耳モナレヌレバ急々(イソ〳〵)ト進ム心モナク云々

(卅七)げに〳〵しくと云詞　同(十七丁オ)ゲニ〳〵シク念佛ヲ行ジテゲニ〳〵シク人ニ成スレバヨロヅノ人ヲ見ルニ皆我心ニハ劣リタリ云々

(卅八)乘物　同(廿丁ウ)念佛大意の條に家豐ニシテ乘物憧僕モ叶ヒ云々 頭書 還老物語八に乘物と云物は豐臣秀吉公ふは馬に乘事のわづらはしとてこしらへはじめられし也

(卅九)身の毛いよだつ　同(廿四丁オ)淨土ノ法門ヲ說ヲ聞テ悲喜ヲナシテ身ノ毛竪(イヨダツ)事ヲナシテ拔出スガ如クスルハ云々七の卷(廿七丁オ)往生淨土用心第四に責テハ身ノ毛イヨダツ程ニ思ベキニテ候云々

(四十)あら〳〵井こと〴〵しくと云詞　同(廿七丁オ)淨土宗略抄に三心ノ有樣アラ〳〵カクノゴトシ云々別々ニシテ事々シキ樣ナレドモ云々

(四十一)ふさねてと云詞　同(三十八丁ウ)此正行ニツキテフサヂテ二ツトス云々

(四十二)智惠ありがほ　卷三(六丁ウ)鎌倉の二位禪尼へ進する御返事に我モ〳〵ト(ソムカ)知惠アリガホニ申ス

(四十三)涕唾便利西方を背向(ソムカ)す　同(廿一丁オ)行住坐臥ニ西方ヲソムカズ涕唾便利ニ西方ニ向ハサラント云々

(四十四)大胡太郎(オホゴノ)實秀　同(廿四丁ウ)大胡太郎實秀へつかはす御返事あり大胡は今の武藏豐島郡尾久(オグ)なるべし四の卷一丁オにも大胡太郎實秀が妻室のもとへつかはす御返事あり 頭書 東鏡ニモ見ユ

(四十五)ことざとりの人　卷四(十丁オ)津戸三郎入道へつかはす御返事に念佛ノ行アナガチニ信ゼザラン人ニ論ジアヒ又アラヌ行異解(コトザトリ)ノ人ニ向テイタクシヒテ仰ラル、コト候マジク候異解異學ノ人ヲ見テハ是ヲ恭敬シテ輕シメアナドルコトナカレト申シタル事ニテ候云々

(四十六)あてがひと云詞　同(廿一丁ウ)禪勝房に示す御詞第十九に阿彌陀佛ハ一念唱ルヲ一度ノ往生ニアテガヒテ發シ玉ヘル本願也云々卷七(廿丁オ)往生淨土用心第四に一ツ所多クアテガヒテカ、ンヨリハ少ク申サン云々 頭書 壒嚢四ノ四十四丁オ 砂石集九ノ十八丁オ

(四十七)　葷臭を茹ても念佛を忌まず　卷五(三丁ウ)百四十五ケ條問答第廿二に韮葱蒜鹿食テ香失セ候ハズトモ常ニ念佛申候ベキヤラン云々

(四十八)いがけと云詞　同(三丁ウ)六齋ニ時ヲシ候ハンニハ兼テ精進ヲシイガケヲシキヨキ物ヲキキテシ候ベキ歟云々

(四十九)卷經幷草子　同(六丁オ)卷キ經ヲ草子ニタヽム(からとぢやまとゝ) 頭書 草子ハ罪ト申候云々 守武千句廿六丁ウ

(五十)佛に煮皮ヲ用　同六丁　佛ニ煮皮ヲ具シ候ガキタナク候云々

(五十一)まふり　同七丁　人ノマフリヲ得テ候ハンハ供養シ候ベキ歟云々

(五十二)わゝく　同同丁　ソヽクニ物クルヽハ罪ニテ候歟云々　頭書 續教訓抄二上五十丁ウ明賢と云ワク法師云々狂惑チワヽクト云也

(五十三)歌讀　同八丁　歌讀ハ罪ニテ候歟答フアナガチニ得候ハジ但シ罪モ得功德ニモナル

(五十四)酒を呑　同八丁　酒ノムハ罪ニテ候歟答實ニハノムベクモナケレドモ此世ノ習イ云々

(五十五)楊枝　同九丁　節ノアル楊枝ヲバツカハズ續帶青帶無文ノ帶スルハイムト申候ハ答クルシカラズ　頭書 三議統下十五丁ウ雍州府志七ノ十五丁聞書秘傳十六ウ書言故事四ノ十六丁ウ

(五十六)子生れて百日の忌　同十丁　子生テ佛神へ參ル事百日憚リト申云々

(五十七)みそうづ　同十一丁　時ヲツトメテミソウヅイカヾ答苦シカラズ云々

(五十八)時のくひ物井常行水　同同丁　時ノクヒ物ハキヨクシ候ベキ歟答例ノ定行水モ候マジ兼テ精進モ候マジ引入モ只ノ折ノニテ候ベシ時ノ誦文モ女房ハセズトモ只念佛ヲ申サセ玉ヘ指シタル事アリテ時ヲ闕タラバイヅレノ日ニテモセサセ玉ヘ

(五十九)酒の忌　同十二丁ウ　酒ノ忌七日ト申候ハ實ニテ候歟云々

(六十)いかけ　同十二丁ウ　魚鳥食テハイカケシテ經ハヨミ候ベキ歟答イカケシテ讀本體ニテ候セデ讀ハ功德ト罪ト共ニ候但シイカケセデモ讀マヌヨリハヨムハヨク候

(六十一)灸治の禁忌　同十三丁ウ　灸治ノ時物詣デセズ其折ノキ物モ捨ルト申云々

(六十二)葷臭を食　同同丁　葫鹿食シテ三年ガ内ニ死候ヘバ往生セヌト申候云々

(六十三)產忌　同十四丁オ　產ノ忌イクカニテ候ゾ又イミモイクカニテ候ゾ答佛敎ニハイミト云フ事ナシ世間ニハ產ハ七日又卅日ト申スゲニ候イミモ五十日ト申ス云々

(六十四)烏帽子も着ざる男　同二十二丁ウ　辨阿上人ノ云ク故上人ノ給ハク我ハ是レ烏帽子モ着ザル男ナリ十惡ノ法然房ガ念佛シテ往生セント云ヒテ居タル也又愚痴ノ法然房ガ念佛シテ往生セント云フ也安房ノ介ト云フ一文不通ノ陰陽師ガ申念佛ト源空ガ念佛ト全ク替リ目ナシト云々

(六十五)いま〳〵しく　同七丁オ　十丁　御消息第三に此世ノ名聞利養ハ中々ニ申シ雙ブルイマ〳〵シク候

(六十六)小阿彌陀經　同廿五丁　往生淨土用心第四に百万遍ノ事佛ノ願ニテハ候ヘ共小阿彌陀經ニ若ハ一日若ハ二日乃至七日念佛申人極樂ニ生ズルト說レテ云云

(六十七)舌の根すくみて　同廿八丁オ　舌ノ根スクミテ云ハント思フ事モ云ハレズ候也　頭書 舌ナメズリ今普十四ノ廿九

(六十八)佛を西の壁に安置す　同廿九丁オ　先德達ノ敎ニモ臨終ノ時阿彌陀佛ケヲ西ノ壁ニ安置シマヰラセテ病者其前ニ西向キニ臥テ善知識ニ念佛ヲ勸メラレヨトコソ候ヘバ云々

(六十九)印板　同七の卷跋に元亨元年辛酉ノ歲偏ニ上人恩德ヲ報ジ奉ランガ爲又モロ〳〵ノ衆生ヲ往生ノ正路ニ趣カシメンガ爲ニコノ和語ノ印板ヲヒラク一向專修沙門南無阿彌陀佛圓智謹疏沙門了惠感歎ニタヘズ隨喜ノアマリ七十九歲ノ老眼ヲノゴヒテ和語七卷ノ印本ヲ書之元亨元年辛酉七月八日修謹疏

(七十)政井社禮　政の字をマツリゴトと訓は先王ヲ祭リ功臣を祭るによれる也文獻通考卷之一百三宗廟考祀先代帝王賢士の條云祭法夫聖王之制ニ祭祀一也法施ニ於民一則祀レ之以レ死勤レ事則祀レ之以レ勞定レ國則祀レ之能禦ニ大菑一則祀レ之能捍ニ大患一則祀レ之是故厲山氏之有ニ天下一也其子曰レ農能殖ニ百穀一夏之衰也周棄繼レ之故祀以爲レ禖共工氏之霸ニ九州一也其子曰ニ后土一能平ニ九州一故祀以爲レ社云々

(七十一)周文王殺父季歷　晉書東晳傳に晉大康二年汲郡人盜發ニ魏襄王墓一或云安釐王冢得ニ竹書數十車一其中與ニ經傳一大異者云夏年多レ殷益干ニ啓位一啓殺レ之太甲殺ニ伊尹一文王殺ニ季歷一自ニ周受一レ命至ニ穆王一百年非ニ穆王壽百歲一也幽王既亡共伯和者攝ニ行天子事一非ニ二相共和一初發レ冢者燒レ策照取ニ寶物一及ニ官收一レ之多ニ燼簡斷策一

(七十二)潤筆　容齋隨筆云作レ文受レ謝自レ晉以來有レ之至レ唐始盛云々言鯖錄上卷云潤筆之說昉ニ于晉宋一而極ニ盛于唐一元和長慶間墓碑廟記爭以レ得ニ韓文一爲レ榮故禹錫祭ニ退之一文云一字之價輦金如レ山蓋實錄也李邕長ニ于碑頌一受ニ饋遺一亦至ニ鉅萬一皇甫湜在ニ裴公

幕中ニ爲レ作ニ福先寺碑一度贈ニ車馬繒綵一甚厚猶大怒索ニ縑九千一乃止樂天與ニ微之一情如ニ昆弟一及レ爲ニ元墓銘一猶酬以ニ臧獲與馬綾帛銀鞍玉帶之類一價當ニ六七万一則他可レ知矣宋太宗時又立ニ潤筆錢一數降レ詔刻ニ石于金人院一毎朝謝日移レ文督レ之前代之重レ文輕レ幣如ニ此今則重レ貨輕レ文作者鮮レ有ニ賣文爲レ活者一矣頭書詞知錄十九

（七十三）せくといふ詞　今世の俗語に人をせくといふことあり吉原深川などの娼家にて娼女が心かはせる客を忌てわげぬを客人をせくといへりこは枕草子春曙抄六の卷十五丁オにおもひかはしたるわかき人の中にせくかたありて心にしもまかせぬとありこれを出所とすべし

（七十四）せしと云詞　万葉三廿八丁ウに歌思辭思爲師三湯之上乃云々

（七十五）城をシロと訓例　日本紀略延暦十三年の詔に山城國は山河襟帶自然作レ城によりて山城國と改むべきよしあり其時城の字を「シロ」と訓たれば也繩代又は一代十代五百代などいふも一區の所をいふ名也繩向日代宮なども檜原の邊なれば檜城の義にやかにかくに城を「シロ」といふも後の詞にあらず

（七十六）糟汰　砂石集四の卷道人可レ捨ニ執著一事の條に法然房云々俊乘房ニ申サレケレバ秦太瓶一ナリトモ執心トマラン物ハスツベシトコソ心得テ候ヘトカタラレケル云々一言芳談抄一の卷に俊乘房云後世を思はんものはじんだがめ一ももつまじき物とこそ心得て候へ云々抄に云ぬかみそつぼも云々徒然草九十八段に後世を思はん者は糟汰瓶一も持まじき事也云々慰草に糟汰瓶じんだはぬかみそも也瓶はつぼも也糠糟とも糠粃とも秦太ともかけり云々下學集飲食門に增水糠也云々與清曰糠は糟と通ず增水は節用集にミソウヅとよみたりみそうづは俊頼の散木集砂石集などにも見ゆ今のぞうすゐといふものはもと糟太をもて製りしこと知べし節用集食服門に糟太云々運歩色葉集志部に糟汰云々海篇犀炤に糟以レ米和レ羹汰ハ淘汰也云々書言字考服食部に糟汰又云糠味噌云々同奴部に糠味噌一名糠汰云々節用集奴部に糠味噌云々法然上人和語燈錄に世諺に云女郎買のぬかみそ汁云々又云隣のじんだで味がよい云々與清下總國銚子の里に遊びし時そこの川向に常陸原といふ所あり常陸國鹿島郡波崎村といへりそこの上山平藏義旭はわがをしへ子なりその母をふさ女といふ紀伊國人にて糟粃の製方をつたへしれりまづ糯粳の米の糠を水にて七日ばかり淘汰しそれに鹽を加へて二三日にして嘗むこれをじんだといへり或は汁に烹て食もよし糯米の糠ことに味よしといへりおのれその製方によりて試につくり用しにいと妙味也これ淳朴の世の美漿といふべし但今の俗口にかなふべき物にあらず今の糠味噌漬といふも此中に菜物を漬たりしが根源にて今のさまにはなれるなるべし此糠味噌漬を武藏相摸の俗にはドブ漬といへり頭書貞丈雜記六ノ廿四丁ウ四十四丁ウドンノフスマ水デシメシフカス蓮ヘヒロゲテオクト十日計ニテカウジニ成テ花ガ付ク夫ヲ碓デヒキ豆チニヨル汁ニテカキマゼ鹽カゲンチスル一日モオケバ直ニクハレル念入レバ麥カウジカ米カウジヲ加ヘレバ彌ヨシ

（七十七）アラと云俗語　俗語に「アラ」といふ詞ありて「アラオモシロ」「アラウレシ」「アラカナシ」などおほかりこは「アナ」の轉せし語也砂石集一の卷一丁ウにアラ面白トイフ事ハ其時ヨリイヒ始タリとあるは古語拾遺の阿那於茂志呂の語をアラオモシロと云かへたるなればおもふべし其外此ころの書に「あら」といふ詞おほかれどみな「あな」の心に用たり

松屋筆記卷之十五

東都　高田與清文儁稿

（一）つゝぐれ井つゝやく　舊本今昔物語に九月のつつぐれの時といふ詞ありこは小暗（ヲグレ）といふよし也長門本平家物語十四の卷志雄軍の條にさゝやきつゝやきせんほどに源氏も事のいはれを得知らでとあり私語小語の義なれば思ひ合せて知べし

（二）狼烟　狼烟を「ノロシ」といふは野（ノ）ら氣（シ）の義にて「ノロ」は「ノラ」也秋の野らなど歌にもよみて「ラ」は助字也「シ」は息也氣也野に立氣（タツキ）なればしかはいへるなるべし息（イキ）を「シ」といふ事は棟梁集にいへるがごとし倭訓栞に野狼（ノロ）矢（シ）の義といへるは笑にたへぬ説なり古語にトブ火といふ万葉六古今春上などにトブ火とよめり日本紀の訓には烽を「ス、ミ」とあり進（ス、）む心にやと契沖いへり烽火の事軍防令に委頭書北條五代記八卷十八丁オ

（三）日本紀竟宴歌　夫木抄秋二登蓮法師が歌「秋の野の花に心をそめしよりくさかや姫もあはれとぞおもふ」左注の判詞にかゝると日本紀竟宴歌にも「とし

ことの春やむかしのかやの姫とこそよめ」云々又兼良公御書の古今三鳥傳に日本紀竟宴の歌に「玉かしはをかたまの木のかゝみほに神のひもろきそなへつるかな」とも見えたり玉勝間十三廿八丁に竟宴の事見ゆ

(四)五月五日甲　五月五日の甲人形も古代の遺風也延喜式四十一の巻十丁に五月五日甲と見え辨内侍日記にも出たり頭書藤袴縁起

(五)假名を假字と書　假名も假字も同義にて周禮注に名は字也と見ゆ字を「な」といふは物の名をしるす物なれば也

(六)荷葉椀　延喜式廿八の巻廿一丁ウに荷葉椀とあり今の世精靈祭に荷葉を用るに引注すべし

(七)木の績穗　今の世木の績穗をするは古代の遺風也延喜式卅九の巻廿九丁ウ績梨と見ゆさて物つぐには都て節をかけて折てそのふしの所を土にさしこめば必根を生じてつく也

(八)茶籠　茶の事は日本後紀類聚國史性靈集經國集などに見えたれど茶籠といふ物の延喜式廿八の巻廿一丁オにあるは何に用しにや

(九)大物の濱　長門本平家物語十六の巻一谷合戰の條に警六東をさして申けるはあれに見える所は大物の濱なにはの浦こや野打出あしやの里と申るはあのあたりにて候也云々吾妻鏡元暦二年十一月六日の條に行家義經於二大物濱一乘レ船之尅疾風俄起而逆浪覆レ船之間慮外止二渡海之儀一云々これらの外諸書に大物の濱と見ゆ後太平記には大物の沖ともあり與清按に大物を「ダイモツ」と訓べし近江にも陪膳濱あり日吉祭禮の日神膳を奉るよりいへり今の膳所也拾遺集に知家「近江なるおものゝ濱」とよみしより後歌おほし津國廣田の社の前の海を御前の沖といふ俗に西宮の沖也といへど實は廣田社の御前の沖なるよし陸西遊行嚢抄三の巻にいへり大物の濱も住吉神の御膳よりおほせし名にや又は朝廷のお者の料の魚捕濱にや近江なるも天子のおものゝ鮒など捕所と聞えたれば津國もさぞあるらん延喜式など考て追而記すべし尚可レ考

頭書 築島草子にあしたうめたるだいもつを滿汐はやくてさしのくろ岩を重れ人夫をまし宵にうめけるに大もつを曉引鹽はやくして沖へばつて引てはいでうむれば大もつ大石かすしらするうぎがいさごの塔にはおもはゞたよりも有ぬべし五万人の人夫をもつて十日計はうめけれども少のしるしの見えざるはりうじん納じゆうなきやらん云々

(十)ものあらがひ　後撰戀五にせうそこかよはしけれどもまだあはざりけるをとこをこれかれあひにけりといひさわぐをあらがはざなりとうらみつかはしければよみ人しらず「はちす葉の上はつれなきうらにこそ物あらかひはつくといふなれ」按に此歌の心は蓮葉の表の方はスベリてつれなければ裏の方にモノアラガヒといふ虫は附くといひて下にはたとへ逢し中なりともうへはつれなくあはぬ氣色して人のいひさわぐには物あらがひしてこそあるべければまたあはぬゆゑにあらがひもせぬよし也つれなきのきもじはしの誤にや異本可レ考今の世蝸牛の屬にていとちひさき虫を物あらがひといへりから國の緣桑贏なるよし本草啓蒙卅八の巻十六丁にいへりされど緣桑贏を物あらがひといへるは後撰の歌よりふと思ひ誤て後にいひ出し名と見ゆ後撰のはたゞ貝の事にいひてものあらがひと爭ふとにとりなせしなるべし相摸家集に「よさの浦にもしほ草をはかきつめてものあらかひはひろはさらなん」菴主にものうたがひは罪うなりとてひろひたる貝を手まさぐりになげやりたればものあらがひぞまさるなるがうなあらがひたまひそとてがうなのからをなげおこせたり云々定家卿の僻案抄に池の蓮にも水の中には貝に似たる物も有云云倭訓栞毛部に藻の荒貝の義藻にある小貝をいふ又蓮葉のうらに著たる虫をいへりこれ蝸牛の類云々按に倭訓栞の說非也藻のあら貝と云も臆說也戀忘貝などの類にてあら貝といふ物あるを物あらがひにとりなせしにてもあるべしあら貝は裏貝の義にて水草の葉裏にとりつくよりいふ歟かにかくに蝸牛の屬にはあらじ

(十一)雪ほど黑き物はなし　俳諧の句に「よく見れば雪ほどくろき物はなし」といふは雪の白に對ふべきほどの黑き物はなきよし也といへり香祖筆記卷十一丁ニに唐の尉遲匡が詩を引て夜々月爲二青家鏡一年年雪作二黑山花一と見ゆ

(十二)牒狀　盛衰記平家物語吾妻鏡日蓮注畫贊圓光大師傳畫詞傳などの類の書に牒狀をおほくのせて其文全く見ゆこの字義注せる物なければ試にいふべし色葉字類抄節用集運步色葉集などにも字をば出したれど註せず選叙令義解七丁に其外官者申二牒國一國即依二牒狀一申レ官也云々 牒式は公式令義解十四丁に見ゆ 唐書百官志に司

記二人掌二宮内文簿一入出錄爲二抄目一審付行焉牒狀無レ違然後加レ印典記佐レ之云々 正字通に 牒說文札也古人書版手簡謏詞皆曰レ牒 冷壽光有下謝二賜肉一牒上 宋元瀝下思古人之情知レ有レ以也菅師匠 儒林之翹楚文苑之英花 便對二三更之晴一以玩二一家之月一云々 又廿四丁ウ菅淳茂の八月十五夜亭子院詩序あり 又廿五丁オ都在中の文章院詩序云于レ時天入二仲秋一夜當二三五一排二紙隔一而玩レ月出二苔衡一以擧レ杯云々 又廿五丁ウ江匡衡 頭書 江吏部集同 の仲秋三五夕於二江州野亭一對レ月言レ志詩序あり 去年八月十五夜營二吏務一以在二尾州一今年八月十五夜事二湯藥一以在二江州一云々 田氏家集上に八月十五夜宴月の詩あり 又八月十五夜惜レ月詩あり 同下に八月十五夜宴各言レ志詩あり 菅家文草卷一 三丁ウ に八月十五夜詠史詩序至二貞觀六年甲申歲八月十五日一訓說雲披童蒙霧散三多用足百篇功成云々 三千之徒式二宴于三五之日一云々 又六丁ウ八月十五夜月亭遇レ雨待レ月詩あり 又十三丁ウ八月十五夕待レ月席上各分二一字一詩あり 又廿二丁オ八月十五夜月前話レ舊各分二一字一詩あり 同卷六五丁オ八月十五夜同賦秋月如二珪應製詩に聖主何憐三五夜云々 和漢朗詠三十丁カ八月十五夜の詩歌あり 新撰朗詠上十六丁ウ八月十五夜の詩歌あり 橘正通後中書王江以言四條大納言など

(十三)竟宴歌に朗の假字を用 日本紀竟宴歌にシラタへの假字に朗の字を用たり 神道集十の卷に載たる諏方緣起に波浪々々と泣とありこれには浪の字をラの假字に用たり 諏方緣起は康富記に見えて古書也

(十四)八月十五夜 本朝文粹八廿一丁カ 善相公詩 頭書 三卷 清行延喜十四年四月奉二意見一 序に八月十五夜者秋之仲月之望也風驚蕭索蒼天卷二其群翳一雲收朦朧碧落晴而踈瀾今夜初更銷レ暗團月褰レ光 清景外徹照二天地於冰壺一浮彩傍散變二都城於玉府一長安十二衢皆蹈二萬頃之霜一高宴千萬處各得二一家之月一斯乃良夜之美足二愛玩一者也云々 又廿二丁カ 紀納言詩序に八月十五夜者 天之秋月之望也 更闌人定雲淨月明 十二廻中無レ勝二於此夕之好一千萬里外各爭二於吾家之光一云々 又十三丁オ 紀納言 頭書 紀長谷雄延喜中人菅師匠所著公也

の詩を載たり 本朝續文粹八藤實範朝臣の八月十五夜於二遍照寺一翫レ月詩序に 夫天下之翫レ月者 今宵爲レ最 洛外之擇レ地者斯處爲レ先 寔謂清光之勝絕 多在二遍照之道場一云々 貫之集十丁カ 八月十五夜海のほとりなる家に男女出ゐて月の出るを見る「なにはかたしほみちくれは山のはに出る月さへみちにけるかな」忠見集に八月十五夜の月にあそぶ人あり「大空をてらす月をはおきなから桂のかけはくらくやありけん」公忠集に朱雀院御時八月十五夜を見てあそぶ心「秋のよの月とはよそに聞つれと時にあへるはこよひ也けり」又延喜五年八月十五夜「いにしへもあらしとそおもふ秋のよの月のためしはこよひ也けり」後撰秋中藤原雅正八月十五夜「いつとても月見ぬ秋はなきものをわきてこよひのめつらしきかな」又清正「秋風にいとゝふけゆく月影をたちなかへしそ天の川霧」拾遺秋延喜御時八月十五夜藏人所のをのこども月の宴し侍けるに藤原經臣「こゝにたにひかりさやけき秋の月雲のうへこそおもひやらるれ」空穗物語藏開上六十五丁ウ こゝに月のえんし給ひし時にせうそくいはせ給へりし云々 源氏鈴虫十丁オ 内のおまへに今よひは月の宴あるべかりつるをとまりてさう〳〵しかりつるに云々 榮花月宴に康保三年八月十五夜月宴せさせたまはんとて清涼殿の御前にみなかたわかちて前栽うゑさせ給ふ 頭書 事林廣記四卷節令記載門中秋條東里新談下ノ七丁ウ開元天寶ノ比ヨリ八月十五夜チ月見ト定ンテ「歐陽脩が序文ヲ引テイヘリ此序事文類聚ニ載タリ

(十五)しやうねと云俗語 俗言にしやうねがあるしやうねがないなどいへり 性根と書りそはいみじきひがごと也 こは佛經に臨終正念などいふ語あるより出たる也 撰集抄七の卷三段にやみくるひておよそ正念も侍らざりけるをとかくこしらへしづめてと有此外物に見えたるいとおほし

(十六)あしづゝ 後撰集兼輔歌に「難波かたかりつむあしのあしつゝのひとへも君をわれやへたつる」新撰六帖夫木抄にも引 知家歌に「けふもこすうきに刈てふあしつゝの薄きや人の契なるらん」奥義抄云あしつつとは芦のよの中に薄やうのやうにてある皮也薄きもの也云々 僻案抄說亦同倭訓栞に漢書王莽傳の葭莩を引たり 信友曰あしづゝは芦の笹ごとに薄き皮のまつひ著たるがあるを云る名にして芦の笹の籜といふ義なるべし云々 此說よろし 和名抄に箨竹皮也竹乃加

波とあるを字鏡集に簝「カハタケ」「タケノカハ」「タケノッ・」新撰字鏡に窓竹筒竹乃與又竹乃豆々類聚名義抄に笻无ㇾ節竹竹ノッ、竹ノヨなど見えたるにて思ふべし顯昭説にあしづゝは芦筒の義といへるも葦の節の外皮をいへるにや

(十七)つくも髪つゝつゝぐれつゞらおりつゞしる

信友曰伊物にもゝとせに一年たらぬつくも髪云々こはもとつゝもなりけんを寫誤れるなるべし若狹の海に「ツ、モ」といふ藻あり今のホダハラと云物の事也一ふさの貌長さは二三尺ばかりにも成て莖も枝もいとほそく連りて髪を垂亂したるごとく海中にある時は色黒くいさゝか黄ばみたるがかわきたるは薄く黄になる也そはいかにも老嫗の髪のたれみだれたるにたとへつべき物なればつゝも髪といへるなるべし所謂ほだはらは本草綱目に海藻生ニ海島上一黑色如ニ亂髮一また馬尾藻ともいひて近海諸地采取亦作ニ海菜一と見え外產秘要に馬尾海藻とあるもこれ也といへりナノリソもほだはらの事也といへりさて「つつ」とは物のいま少し滿足はぬやうの事にいへり

頭書字鏡集口部に噉手業の足りとゝのはざるを手筒とクナヅ、ナリ

云も紫日記長明無名抄に見ゆ宇治拾遺に口手つゝと有も轉りて口語のたりとゝのはぬにいへりと見ゆ又若き人の年齒を「ツゞハタチ」ばかりといふも十九か廿といへること也十九にかぎりて「ツ、」と云にはあらずこは廿を地として其二十に滿足らぬをいふ詞づかひ也地名にも大和吉野郡九ツゞ越前敦賀郡筒を其地より出せる布を古文書に九十布など書たり字鏡に玄孫を「ツ、コ」とあるも脉のへだゝりて親みのやゝとほくたらぬにいへり又ツ、ム、ツ、シム、ツゞマヤ、ツ、シルなどいへるツ、も物事を滿て足はせざる義ときこえたり俗言にツ、一杯といへるも滿足らぬにいふと云々與清按に此説よろしツ、シルといふも物を十分にくはぬ貝ツ、シリウタフも十分にうたはぬ貝ツ、グレも薄暮にて未暮了らぬほど也ツゞリツゾレなども不足なる物をとり集るよりいふ九折坂をツゞラオリといふもツ、は登りおほせぬさま登らんとしては背ざまへおりらるゝより云なるべし六帖二廿八丁ウ寺の歌に「さゝ浪やしかの山道のつゝらおりくる人たえてかれやしぬらん」此歌におり來る人とよせてよめり枕草子に鞍馬のつゞらおりと見ゆおりを

をりと書はひがごと也源氏若菜の卷三丁ウにも見ゆ

頭書ツゞクレ今昔廿七ノ四十一語

(十八)手兒奈手兒手兒呼坂古奈　万葉三四十八丁ウに勝牡鹿乃眞間之手兒名之奥槨乎云々又間々能手兒名之云々又四十九丁オ手兒名志所念云々同卷九廿四丁ウに勝牡鹿乃眞間乃手兒奈我麻衣爾云々又廿五丁オ手兒名之所念云々卷十四九丁ウに麻萬能手兒奈我云々曾丹集に「うつぎ原てごなが布をさらせる」と見えしは花の咲る也けり已上てごなとよめり又万葉十四十一丁オに伊思井乃手兒我云々又廿三丁ウ手兒爾安良奈久爾云々又廿一丁オ左和多里乃手兒爾伊由伎安比云々同十六廿二丁ウ氏戸等我課役云々地名にも手兒の呼坂あり万葉十四十七丁オに安豆麻治乃手兒乃欲妣左賀云々又廿二丁ウ安都麻道乃手兒乃欲婢佐可云々寶治百首藤原光俊「いましはやとりも鳴也あつまなるてこのよひ坂誰かこゆらん」宗長手記に「夜をふかく道まよふらしふる雪に手兒の呼坂人とよむ也」結歌林良材上十四丁オに駿河國風土記云盧原郡不來見の濱に妻をおきてかよふ神有其神つねに岩木の山より越て來るにかの山にあらぶる神の道さまたぐる神有てさへぎりて不レ通件の神あらざる間をうかゞひてかよふかるがゆゑに來るとかたし女神は男神を待とて岩木の山の此方にいたりてよる〳〵待に待得るとなければ男神の名よびてさけぶよりてそこを名付ててごといふ田子の浦も手子の浦也云々万葉仙覺抄十六十七丁オに東路のてごのよびざかといふ歌の侍るをあるは上野の碓氷坂を云といふ説ありあるはうつの山の坂也ともいへりしかるを今の歌の心にては「坂こえてあへのたのもにゐるたつの」とよめるはうつの山の坂にあたれるをや云々万葉略解十四上廿五丁オに宣長云手兒はたゞにて即田子浦同所にて今の薩埵山也紫式部集にもたゞのよび坂とよめりと云々代匠記十四四十二丁オにあづま道の手兒のよひざか云々此二首は駿河風土記ニ異説有て神の歌とす委ク長流が續歌林良材集にかけり第十二に有ける「いはき山たゝこえきませ」といふ歌は此神の女神の歌といへりしかればてごの呼坂は駿河國也此集にては神の歌にもあらず東の歌ながらいづれの國の歌とも定がたし紫式部家集云みやこのかたへとてかへる山をこえけるによびて

ざかといふなるところのいとわりなきがけぢにこしもがきわづらふをおそろしとおもふにさるの木の葉の中よりいとおほく出來たれば「ましもなほ遠方人のこゑかはせわれこしわふるたこのよひ坂」これはかへる山といへば越路也同處にや可レ尋云々與清按ニ岩木山こぬみの濱末レ詳礒前はたゞ礒の前をいへりと見ゆ常陸に大洗礒前神社あるをもおもふべしさて岩木山こぬみの濱の歌を女神の歌とせしは風土記の附會なるべくおぼゆ此風土記續歌林良材に假名に改て引たればその文體考べからねど蓋今の駿河風土記の殘缺に同く所謂總國風土記のさましたれば取用がたしされど田子の浦と通音にて今の薩埵山の古名岩木山ならんも知がたし今の由比の宿も余比の通音なればき所を顏といひ貝花貝鳥朝貝などもうつくしきにいふよし已に擁書漫筆にいへり小兒を子といふも少き間はうつくしければいふ女に子といふもおなじく美きによれりさて「ヲトコ」といふも「ヲ」は雄々しき貝「ト」は助詞の「ッ」に同じ「コ」は美しきよしの美稱なるべし根子などの子もこれにや那は禰の通音にて「イロ子」「ナ子」などの「子」におなじく美稱也「イ

呼坂は今倉澤とて由比より薩埵山に登る所の坂をいへりとおぼゆ源氏眞集に「山の名の岩木もあはれしら浪の清見か月をおろす秋風」此歌には清見をよみあはせたりされど後の歌なれば岩木山を必駿河と定むべき證にはしがたしかにかくに手兒は田兒と通音なれば同所なるべし宣長がたごの呼坂とよむべきよしいへるもあまりに新奇の說也古くみなてごとよみたればさてもくるしからじ紫式部が集にたこのよび坂とよめるはかへる山をこえけるにと詞書してそは若狹にある山なるに越前よりかへさにこえけんとうつなければ北國なるべし吾路のてこのよび坂は若狹なればかなたの一所の假名を證にしてこなたの古くてことよみ來れるを改んといかにぞやさて田兒浦は越中にも同名あり又手兒奈を兒奈とのみよめるは万葉十四廿丁オ二に宇倍兒奈波和奴爾故布奈毛云々同廿丁ウ四に和奴等里都伎弖伊比之古奈波毛云々與清按に手兒奈は手は多和の略轉語にたわ〳〵と弱き貝たよわくして衣にもたへぬを美人の體とすると長恨歌にも作れり兒は加保の約也加保は物のうつくしきにいひて人の體中に殊に美し

ロ」は親む詞「子」は美稱してイロ子といひナは名にて名夫名妹名持などの名即美稱也名根は汝根にて貴む詞なりさて女の美稱にも用たりされば手兒奈は柔和美麗の女にて柔美女の義也省ては「たごな」といひ通はしては「てごな」といふ又約て「てご」とも「こな」ともいへる也けり

(十九)詠草の名乘の下に上を書事　和歌の詠草の名乘の下に上の字をかく事中古の定と思ひしに万葉集五の卷六丁に筑前國守山上憶良上とあるは大伴旅人卿歟又は別人に見せたるなるべきに上の字を書也さてはいと古きためしといふべし此卷には此外にも見ゆ

(廿)自詠の歌をうたふ事　源氏須磨湖月卅三丁オに「戀わひてなくねにまかふ浦浪はおもふかたより風やふくらん」とうたひたまへるに人々おどろきて云々此は自詠の歌をうたひたまへる也

(廿一)梅花をさして君とよめる歌　万葉五十六丁ウに「春なればうへも咲たる梅の花君をおもふとよいもねなくに」とよめるは梅花をさして君とよめる也

(廿二)天鵞絨の羽織并朱傘大鳥毛の鎗　東太平記卷一六丁に先一番に天鵞絨ノ羽織ヲ著シ金ノ北斗付ノ太刀刀ヲ帶シ朱傘ノ指物ヲ持タル足輕千人次ニ大鳥毛ノ鎗千筋次ニ猩々皮ノ羽織著セル足輕長柄五百筋ヲ持云々

(廿三)袖無羽織　同七丁紅ノ袖無羽織ニ金ノ丸ノ紋ヲツケ云々

(廿四)月山鍛　同九丁月山鍛ノ鎗百筋ヲ信長ニ献ジ云々按に出羽國月山の鍛冶が打たる鎗也月山は鍛冶多く住める所の名也同十二月山鍛ノ長身ノ鎗云々

(廿五)千手といふ地名　同十六丁に千手堂ト云所ニ打出云々按に武藏の千住ももと千手と書て千手觀音の堂ありしにおこれる名と見ゆ石清水權別當宗清法印立願文にも千手堂建立の事見えたり

(廿六)鎌帷子　同十七丁に鎌帷子ニ黑糸威ノ鎧ヲ著云云

(廿七)會津蠟燭　同十九丁ウ去程ニ葦名盛隆云々織田上總介信長朝臣武威サカンニ震云々某モ使者ヲ上セ降參ノ實ヲ顯スベシトテ家人荒井万五郎ヲ使者トシテ駿馬三疋幷ニ土產ノ蠟燭千挺ヲ進献セラル云々

(廿八)笑平　同卷三十八丁オに政宗云々小手ノ森ニ出ベ

シトテ川俣ニ出テ笑平ニテ清顯ニ對面セラル云々按ニ俗に物の成得すして放れたるをわらふといへり器物などつくらんとして整ざるにもいへりさる心より名づけし地名にや

(廿九)鎌矛弓のつく打たる　同卷四四丁に握太ナル鎌矛弓ノツク打タルニ猫潜ト云大雁俣ヲ打ツガヒ云云頭書金ヲ机ニシタル杖云々今昔廿九ノ九語愚得隨筆附考下ニ盛衰記ニ弭ノ字ニ「ツク」ト假名ヲ付タルハ誤也

(卅)田所　古文書に田所といふ職名おほく見えて氏にも田所氏などありそは田令九丁に田司といふがありそは官田に就たる司也義解に宮内省差二管内雜任一令レ掌二其事一是爲二田司一也と見ゆ頭書新猿樂記十三丁ウ田所アリ受領支配ノ役所也

(卅一)土倉　土倉もいとふるき物にや宮根山緣起に豆州土倉鄕あり大和物語には土屋倉と見ゆ主税式下十五丁ウ土倉若干宇とあり頭書昔々物語廿二丁ウ

(卅二)鷲取　西大寺私財帳に一卷宇治鷲取献入墾田帳云々按に鷲取は鳥捕部の類にて矢の羽の料の鷲を捕る者あるよりかく人の名にもおほせしなるべし

(卅三)木屋　西大寺私財帳に山城國相樂郡泉木屋云云按に泉は地名也木屋は柚木を納るゝ屋也宮木引泉の柚は山城相樂郡泉の里の柚を云也頭書大安寺私財帳に山背國相樂郡泉木屋また藥師寺木屋云々慈憲大僧正遺告に木屋一宇云々右屋燒亡後行事安置竭レ力所二造立一也

(卅四)峯河みなの川　大安寺私財帳に伊勢國三重郡宮原肆拾町云々四至云々南峯河云々按に此峯河はみなの川也

(卅五)河道　大安寺私財帳に伊勢國奄藝郡長濱五十町云々四至東海南沼西河道北道之限とあり河道は河を渡行道なるべし

(卅六)庄倉井庄屋　大安寺私財帳に合處々庄拾陸處庄之倉合廿六口屋卅四口とあり今庄屋といふ名あるはこの庄屋を司れる者をいへるよりうつれる詞也

(卅七)大坂小坂鷲坂押坂　などの類坂の名くさぐさ夫木抄雜三坂部に山城の小坂をよめる歌二首あり今も小坂越とて三井寺より都に出る道也日本紀万葉などに大坂とよめる歌ありこの大坂小坂は坂の大小によれる名也また遠州に西坂あり佐夜の中山の西なる坂也山城に久世の鷲坂あり家隆卿の歌あり氏にも鷲坂氏ありさがり坂の義にて「がり」の反「ぎ」なればさぎ坂といへる也長坂高坂中坂石坂赤坂など地名にも氏にもあり記紀に押坂も見ゆ大和國にて長谷より塔

峰へ越る間にある里也押は大の略語にて大河内を凡河内といふ類也また御坂熊坂あり御坂は眞坂熊坂は隈坂也

(卅八)コシャク者　俗言に「コシャク者」と云詞あり小賢者也「サ」を「シヤ」と云は「サレ」を「シャレ」「サクリ」を「シャクリ」など云に同じ「サク」と「サカ」とは通音也小ざかしきと云心也また源氏物語にかうざくなる名をとりて須磨四十三丁ウなどいへるかうざくかとも思はるれどしからずかうざくは遠迹にて俗言に結搆など云におなじくよき事にいふ

(卅九)鑢の字　やがてと云詞に鑢の字を書たるは康富記太奏牛祭詞運歩色葉集などに見ゆ

松屋筆記卷之十六

東都　高田與清文儀稿

(一)寺所　大安寺私財帳廿四丁ウ云大和國高市郡古寺所云々按に寺所は田所などに同じく寺田を支配する者をいふよりやがてその住里をも寺所といひさてここは古き寺所の跡なれば古寺所ともいひけんかし

(二)村屋井庄屋　又云大倭國式下郡村屋云々按に村屋は庄屋瓦屋木屋などゝ同じく村を支配する役所也今の世の庄屋などの類也されど庄屋は一等上にて今の割元也村屋は名主也と知べし庄屋ハモト庄司ノスム處ノ名也庄司ハ庄官ニテ領家ノ代官也頭書本朝文粹二延喜二年三月十三日の官符に新立二庄家一多施二荷法一云々續聚三代格にも見ゆ領主より庄家を立置て其事を執行はしむる也

(三)瓦屋所井紙屋　又云大倭國添上郡瓦屋町云々按に瓦を燒く役所也紙屋など同義拾芥抄中末に紙屋院は圖書別所在二野宮東一云々

(四)稻の名　同書廿五丁に通分稻僧分稻功德分稻孟蘭盆分稻溫室分稻あり和名抄に救急稻本稻雜稻などあり主税式に考合すべし大安寺緣起に施加封邑七百戸

公田三百町利稻卅万束云々

（五）轆轤　東大寺造立供養記に柱一本長或九丈十丈或七丈八丈口徑五尺四五寸也一本別作法者建二轆轤一張以附二人夫七十人一而押二轆轤一引二大綱一也綱口六寸長五十丈也五十人而持二擧綱一丈一也此綱二筋附二柱本末一而引レ之若无二轆轤一則令二千餘人以引一レ之云々按に三國傳記に「ろくろひくちがひの糸」とよめる歌あり頭書名物考調度部十一和名抄空穂春日詣廿六丁ウ同吹上の上ノ十三丁オ同十九丁オ同吹上の下ノ六丁オ同六丁ウ

（六）力車　又云到二泉木津一之時以二大力車一而載レ之懸二牛百廿頭一也云々按に萬四に「戀草を力車に七車」とよめり

（七）猛者　東大寺造立供養記云奥州猛者藤原秀平眞人云々按に十訓抄にも坂東のまうさと有舊本今昔物語に勢徳ある人と見ゆいづれも富豪の者をいへる名也

（八）多々羅　又云自二春日山一白鳥飛來翔二多々羅上一或飛二廻火爐之邊一或上二下炎煙之中一云々和名抄十五の卷には日本紀私記云蹈鞴太々良と見ゆ日本紀に姫蹈鞴とあるは人の名におほせし也

（九）後室　又云重衡卿後室云々こは三公ならぬ人の妻にも後室といへり頭書吾妻鏡にも相同じ

（十）筆付綱　又云文治元年八月二十八日被レ行二開眼供養一兼日被レ仰行事官等云々有二御幸一取筆開眼師禪定法皇法名行眞筆付二綱十二筋一長有二七町一配二十二光佛一引二諸方一矣參入集會之人皆悉付レ綱同准二開眼之儀一也

（十一）一里三十六町并一里六町　又云木津至二于海一七里三十六町爲二一里一云々與清按に拾芥抄にも三十六町を一里とする事見ゆ古代の一里は五町ばかりならんよし制度通にいへり六町一里は拾芥抄中末卷國郡部に自レ京陸奥際行程三千五百八十七里六町爲二一里一自レ京長門西ノ濱ノ行程一千九百七十八里六町爲二一里一と見ゆ尾張國民部省圖帳に見エタル里數モ六町一里也頭書臥雲日件錄下ノ八十九丁オ海東諸國記凡例〇一里壕擁書漫筆に見ゆ名物考にも〇一里ノ下見陽漫錄二並澤筆塵二年山紀聞四

（十二）八木　又云八木一万石云々又云令レ春二數年之八木一也云々按に百練抄吾妻鏡などにも八木と見ゆ米の字を二にわけたる也

（十三）採色佛師　又云採色佛師合八十人一體別廿人也云々按に大佛師は佛像を彫刻し採色佛師採色する也源氏須磨の卷につくりゑといへるも色どるをいへばそれにおなじかるべし多武峰略記下卷別院の條に寶積院柱幷後壁板佛菩薩像圖レ之黑盡十禪師智永彩色清舜とも見ゆ

（十四）菩提樹始渡　又云抑傳二四天之道樹一移二東土之庭前一殖二鯖木之古跡一期二龍花之三會一古人傳云宋求那跋陀羅三藏至二廣府一立二戒壇一種二菩提樹一其後聊瑯道邃和尚傳レ之以種二天台山一也日本紫西上人往二天台山一住二萬年寺一經二五ヶ年一以レ種歸二當寺一也歸朝之時得二彼樹葉一而種二於香椎宮一建久元年也傳二彼樹一以種二當寺一也紫西上人書云今大和尚者予幼少之時兄弟二人投以爲レ師今暫別也此菩提樹來二我朝一之最初也云々

（十五）水車舂米　又云搆二水車一令レ舂二多米一也依レ出二水力一无レ爲二人煩一是故息二巨多之衣食一令レ舂二數年之八木一也云々與清按に類聚國史日本後紀日本逸史などに見えたる水車は今の淀の水車におなじく水を引料の事也米を舂水車は物にをさ〳〵見えず頭書後漢書西羌傳に水舂河漕云々注に水舂即水碓也晉書四ノ十丁ウ惠帝紀永康二年條（張方退屯十三里橋二十一月辛巳云々王師攻二方壘一不レ利方）決二千金堨一水碓待涸乃發二王公奴婢一手舂給二兵糧一云々紹海錄偈頌の部に修二水碓一偈あり沿レ溪分得碧潺湲撥二轉機輪一不二暫閑一傾二出明珠一何日了大倉紅腐積如レ山日本紀廿七ノ十六丁オ水碓云々盛衰記廿二ノ四丁ウ水車云々又四十二ノ十七丁ウ水車ヲ廻シ云々慶仁記三ノ廿四丁ウ三才圖會器用十卷卅一丁卅八丁

（十六）手を拍てよろこぶ　拍手の禮は持統紀よりはじめて延喜式などすべて公事の書どもにおほく見ゆそは喜ぶ時のわざを禮にうつし用て八開手兩段再拜などいふ事も出來しなるべし天平十九年の大安寺私財帳に後岡基宮御宇天皇云々齊明天皇手拍慶賜云々と見え後々の書にも手を打てわらひよろこぶとおほく見えたるを思ふべし

（十七）寺物の別　寺の私財に佛物菩薩物聖僧物僧物通物溫室物法物悲田分物通分物四天王物などいふ名大安寺私財帳其外緣起流記私財帳等に見ゆ聖僧はヒジリにて律僧也律僧分の寺物を聖僧物といひ普通の僧のを僧物といへり溫室物は溫室に付たる物也悲田分物は施行の方に付たる也通物通分物は都てに通じたる物也

（十八）鏡の形　大安寺私財帳に花鏡圓鏡方鏡鐵鏡雜小鏡などあり多武峰略記下に八花形鏡圓形鏡あり觀世音私財帳に圓花形鏡花形鏡

（十九）足釜懸釜行竈　同書に足釜懸釜鐵釜銅釜などありまた行竈一口ともあり

（廿）蠟燭　同書に蠟燭肆拾斤捌兩とあり蠟燭は令に

も見えたり

(廿一)賤院苑院倉垣院花園院　同書に塔院禪院大衆院倉垣院苑院賤院花園院など見ゆみな寺中の院舍也賤院賤僧の居處歟花園院は花園(ハナバタケ)を司り苑院は苑を司る院歟倉垣院塔院などもそれを守る者の住む司歟又はその近邊にあるゆゑの名歟

(廿二)並屋井屋碓屋政所院　同書に並屋あり家の二ツならびたる也井屋あり井上の屋歟碓屋あり碓をおく屋也政所院あり寺の役者の所居なるべし

(廿三)田代　同書に未開田代と見ゆ今地名に田代といふ所おほしいにしへ田代氏あり

(廿四)登山道登道　同書に河胡登山道鎌山登道などあり山に登る道をいふにや

(廿五)牛屋窪　同書に伊勢河曲郡牛屋窪あり牛屋ありし地の窪なるべしさて里の名ともなれりと見ゆ

(廿六)堺江堺川堺橋堺山堺野　同書に津高堺江あり隣郷との境にある江也堺川堺橋堺山堺野などいふ地名もおなじ心也

(廿七)倉の名　同書に雙倉板倉甲倉棚倉などいふ名あり延喜式主税下(廿五丁)に不動倉正倉法倉甲倉板倉瓦倉土倉屋倉借倉穀倉粟倉糯倉穎倉など見ゆ和名抄をも考合すべし

(廿八)雲のかけはし　長谷寺緣起に菅原朝臣道眞得二靈夢一十一面堂下二百餘步下岐有レ岡名二雲懸梯一高不二幾許一從二厥頂一攀レ雲有二三金梯一至二金峯山一云々

(廿九)梅花を杯に浮る事　万葉五十九丁歌に「梅のはな夢(イメ)にかたらくみやひたる花とあれもふさけにうかへこそ」一本に「いたつらにあれをちらすな酒にうかへこそ」と有杯にうかべよと也

(卅)重荷に小附　俗言に重荷に小附といふとあり万葉五(廿七丁)に重き馬荷(オモキウマニ)に表荷うつといふとのごと云々と見ゆこれ出處也後撰賀歌に「年のかすつまんとする重荷にはいとゝこつけをこりもそへなん」(頭書筆記九十三ニ委シ)

(卅一)八葉嶺　觀心寺緣起に峯聳二八葉一自表二華藏蓮剎一谷行二四方一更摸二月國達池一云々八葉の事已既に國鎭記といへり敦盛草子(廿二丁オ)に高野山と申は云々八えうのみね八の谷がゝとして云々

(卅二)大岑横岑小峰長峰中峰曾根宇根小根横根中根　多武峯略記上卷四至ノ條に限レ東椋橋大岑堀越都子尾限レ南吉野垣城野岑限レ西彈琴尾幷志波尾彈琴谷限レ北阿由谷鷹取岑云々」又云限レ東大峰幷堀越都子尾限レ南垣城野横岑限レ西彈琴尾彈琴谷志波尾限レ北鮎谷椋橋河孕女淵云々按に椋橋大岑は大なる峰の義をとりて大岑と名づけ垣城野横岑は横たはれる峰の義をとりて名づけし也今も地名姓氏などに横根あり横岑(ヨコミネ)なるべし又氏に小峰あり武藏相摸の方言に峰を「をね」といへりいづれも小峰なるべし長峰は長き峰中峰中根は中なる峰也又曾根氏あり關東の國にて「そね」といふは背峰(ソデ)の義と聞ゆれば氏の曾根もまたおなじかるべしまた伊豆駿河に「ウ子」といふ語有足高山を「いらうね」といへりウ子は小峰(ウヂ)にて畠の畝(ウボ子)といふもおなじき歟されど足高山は高山なれば大峰の「ホ」を省き「オ」を「ウ」にかよはしたる語にてもあるべし

(卅三)尾と生の別　地名に椎生(シヒノフ)椎尾(シヒノヲ)櫃生(カシフ)櫃尾(カシヲ)などいふありて誤りやすし生(フ)はその草木の生じたるよりいへる名にて麻生(アサフ)篠生(シノフ)秩生(チブ)稻生(イナフ)などおほかり尾(ヲ)は山の尾によれる名にて多武峰略記上四至の條に堀越ノ都子尾彈琴ノ尾志波ノ尾などみえ相摸に柏尾あり筑波の麓に椎尾あり氏に西尾姉尾あり山に松尾栂尾の類あり餘は押て知べし

(卅四)鳥居戸　多武峰略記上卷に於二西鳥居戸一令レ拷二問之一云々また各出二向鳥居戸一云々など見ゆ鳥居處の義にやまた關戸などとおなじよしにや

(卅五)四面庇幷開戸車戸　同書下卷堂舍の條に四面庇其中南孫庇也云々また開戸一具車戸一具などあり

(卅六)葺工幷家根屋　同書同條に檜皮葺ノ葺工とあり今の家根屋也

(卅七)柿葺　多武峰略記下卷別院の條に南院堂號二遍照堂一柿葺一間四面前有レ庇元檜皮葺云々治承四年三月依二朽損一改二檜皮一以レ柿葺云々此外柿葺おほく見ゆ瓦葺檜皮葺賞葺と殊也

(卅八)忌日　同末寺の條に當二大臣之忌日一始二修法華八講一云々(頭書魏志四ノ三丁ウ齊王紀に詔曰烈祖明皇帝以二正月一棄二背天下一臣子永惟忌日之哀其復用二夏正一云々)

(卅九)神武天皇の靈　同條に舊記云國源寺在二高市郡畝傍山東北一天延二年三月十一日早朝撿挍泰善過二彼地一途中有レ人戴二頭白髮一身著二茅簑一告二泰善一曰師於二此地一爲二國家榮福一講二一乘一矣泰善問云公姓名亦

住處何乎答曰我是人皇第一國主也常住二此處一言訖不レ見故泰善毎年三月十一日到二彼地一講二法華一云々

(四十)庄郷領の別　同書下卷田園の條に信濃國筑摩郡蘇我郷字草茂庄云々これは郷の下に庄あり南山巡狩錄卷六に引たる正木氏古文書には上野國新田庄の内由良成摹兩郷と見ゆこは庄下に郷ありかゝる例いとおほし必竟庄は庄園にて采邑といふがごとしされば大采邑の下には郷あるべし小采邑は郷の下にあるべし後に某領といへるが庄におなじされど庄といふには小采邑もあり領は大采邑にいひていと狹少の小村にはいふとなし頭書戸令集解に朱云里者如レ郷也云々弘福寺古文書國郡

(四十一)傘峯傘城蓋山三笠山　多武峯略記上卷に池尻四郎助成於二傘峯一死云々入住法師廿一日於二傘城一死云々按に傘峯は峰の形の傘に似たるよりいふ歟傘城も傘峰にある城なればいへるなるべしさて傘の字今は「カラカサ」とよめり唐笠は公任卿の集舊本今昔物語などに古書におほく見ゆこゝの傘はたゞ「カサ」と訓べき歟カサ峯は上にある條なればいふともすべし上を「カサ」といふはかさよりおとすなど歌にもよみ俗言にもカサニカ、ツテまた關東の方言に上の方を「カサノ方」上隣を「カサドナリ」などいへりそは上方の略語なるべしまた水かさまさるカサガ多イカサガ少イなどいふ「カサ」も近き詞也山城の笠置山も上城にや三笠山は眞笠の義也續日本紀に蓋山とあるは「ミカサヤマ」と訓べき歟キヌガサヤマと訓べき歟他日可レ考

(四十二)小字并眞人　同上卷住侶の條に定慧和尚云云其性聰明絶倫故小字曰二眞人一云々按に小字は小兒の時の名也小兒なれどもそのオウマ人の如きがゆゑに眞人とはいへりと見ゆ

(四十三)口代并畝歩　同下卷田園の條云留二男戸田四町二畝百七十歩一行二其口代一矣云々脩丁六人以二畠各三段一行二其口代一矣云々按に口代は人代也人の代に田畠を宛たる也又此文に依て町段畝歩の名の古きを知るべし余が公事根元下卷書入に委頭書畝歩の事晉書地理志上八丁ウ

(四十四)北條の郡　白峰寺緣起に讃岐國北條の郡大椎の與とあり伊豆にも北條ありこは南條北條東條西條と一里の内を割たるにおこれる名なり北庄南庄などゝは別也

(四十五)番の鴟　同書に白峰の御廟前には番の鴟として毎日一羽祇候する也云々

(四十六)客人の神　同書に野澤の井の邊に社檀をかまへ天王の社と申侍り正面門客人には爲義爲朝父子の影像をつくりたりと云々按に相殿は同殿に配祭する也客人の社は別殿に祭る也

(四十七)御手印　同書に各廿一通の御手印の補任を下さると云々按に今の御朱印は古の御手印の轉れる物也頭書吾妻鏡六ノ四十七丁ウ朱印ト手印ハ別也手印ハ好古日錄卅四丁オ左右ノ指ノ節ノ間ヲ證トルス也

(四十八)錢幣　聖福寺佛殿記に錢幣之献材木之奉云云按にこれ今の賽錢也

(四十九)火本并升形うづまき　高野山燒失記に火本ハ西院福智院也云々炎大塔ヘ飛ヒ諸人向レ空ニ心ヲ亡ス一兩人升形ヘ上リ命ヲ捨消レ之畢又西塔ヘ移ル煙升形ヲ廻ル事如二烏頭卷一云々

(五十)順禮　又云東國ノ順禮主從三人參合中門ニ立テ金堂ノ燒ヲ見テ折リ幸ナル哉トテ炎中ヘ走入ト云々順禮の事は桂川地藏記など中比の物におほく見ゆ頭書宋高僧傳五十九丁オ大閤記十九ノ七丁オ廻國順禮云々

(五十一)晩出家　又云西塔承仕晩出家云々按に今の晩年僧也

(五十二)倭歌　歌のことをやまとうたといふは古今の序よりして物語書におほかりまた倭歌と書も古今和歌集とも題號したればそのころは專なりけんはじめて物に見えたるは万葉五廿五丁カに書殿ニ〻餞酒スル日ノ倭歌四首とあるをはじめとすべし

(五十三)擔夫　歌に戀のもちぶなどよめるもちぶは擔夫にて主稅式下七丁に擔夫若干人程粮料若干束と見ゆ又十四丁オ處々に出たり

(五十四)五十音の配字　五十音の配字ふるく「アイウエヲ」に起て「ワキウエオ」に結たる「ヲ」と「オ」の居處たがへりとて本居宣長が古き通音の語を引て改たるはさることなれど天文本の和名抄字切の條に阿伊烏衣於和爲有惠遠とあれば延喜天曆の比はかくありけんと論を待たずして知べし

(五十五)あなだまはや　神代紀下の歌に玉ノミスマルノアナダマハヤとあるハヤは光映の義なるよし宣長が古事記傳にいひておのれがかうがへ得つるよしほこらしげに書たるはいかにぞやこは渡會の延佳が龜頭古事記の傍注にはやく光映の字を下したるを取

れる也

（五十六）重點の字行を隔ては書まじきと云は非　今の人行をへだてゝ重點をば書まじきよしいへど弘法大師眞蹟の學法目錄に和尚告曰吾昔嬰亂之時初見三々藏々一目之後偏憐如レ子と見ゆ三々藏と行の終に書て次の行に々一目之後と揭書したり此外古寫經などにもまゝ見えたり學法目錄は東寺の所藏なり近頃掛川侯の家にて尚古法書の中に收らる

（五十七）野口野中野上上野野田　小右記永觀三年二月十三日の條に今月御子日也御二御車一令レ向二紫野一給云々左大臣追候二野口一太上天皇於二野口一乘二御御馬一云々按に野の入口の事を野口といへるにて山口も同義の名也さて野中は野の中也野上は野の上の方也上野は高き所の野なるよし万葉の歌にてしるし野田は野中の田也 頭書 千五百番歌合雜部千四百五十五番左顯昭歌に「鈴舟をよせくるおとにおどろきてすまの上野にきゝすなく也」

（五十八）色紙形に名をかく　同書長德五年十月卅日の條に右大辨行成書二屏風色紙形一華山法皇主人相府右大將右衞門督宰相中將源宰相和歌書二色紙形一皆書レ名云々

（五十九）常磐堅磐に盤の字を書例　同書寬仁元年十一月廿五日賀茂行幸時の宣命に寶位無動久常磐堅盤仁云々康治元年大嘗會記中臣壽詞に堅盤常盤仁齋奉利云々

（六十）國領村井驛鈴の聲を停　武藏國多摩郡布田宿の邊に國領村ありこは府中六社の神領と國司の領との界にて國領につきたるゆゑの名なるべし西宮記伊勢例幣使發遣の事をいひたる條に多氣川渡下樋小川或云レ停二鈴聲一云々自注に神領與二國領一之界也とあり因に云停二鈴聲一とは使の官人伊勢の國領を離て神領にいたらんとする時驛鈴の聲を停て神威にかしこまる也驛鈴はその音をして公用のよしをしらしめ威嚴を示すものなれば神領にてははゞかる也 頭書 國ハ國司領ニテ國司ノ代官ナル下司ガ支配スル也下司ハ目代也庄領ハ領家ノ代官ナル庄司ガ支配スル也神領寺領國領庄領ト云名目アリ國料也

（六十一）りやらめきと云詞　中務內侍日記に御すそに火打形のからかねをつけられたればふげんのごとくにりやらめかせ給ふ云々又云玉佩のたとかやみちにりやらめきて云々按にリヤラメキは金玉などのおとするさまをいへりと見ゆ今の俗にリヽシキなどいふはこのリヤラメキの心歟

（六十二）やす幕　同書にくわんきよの儀になるほどにこの御やすまくへいらせたまひぬ云々やすまくは休幕也幕を張てその內にて休息する也

（六十三）明神　石清水八幡宮護國寺略記に諸明神社云々明神の事已に棟梁集にいひたれば考合すべし

（六十四）鷹報二母仇一　宮寺緣事抄に村上天皇御時有二名鷹一其名稱二鳩屋一件鷹自二陸奥國一所二貢進一也而陸奧奉二國解一曰鳩屋所レ生レ巢在二府廳前一鳩屋母鷹爲レ鷲被レ噛畢職事奏二聞此解狀一之時鳩屋被レ繫二清涼殿廣庇之間一傾レ耳聞レ之其後不レ食レ餌不レ居レ講雖レ無レ病似レ有二病氣一御鷹飼等見レ之更以無二治方一奏レ可レ被レ放之由依レ玆被レ放二南殿櫻樹一于レ時鳩屋刷二羽毛一指二東方一飛去御鷹飼以レ餌呼レ之敢不二歸來一天皇太驚殊御恪惜之御氣色依レ之解二件鈴一被レ献二石清水宮一可二歸來一之由有二御祈請一云々其後第七日來二著陸奧舊巢一云々在廳官人等見レ之鳩屋本巢上假搆二新巢一仰臥三箇日于レ時鷲鳥就二青雲一廻翔良久落逢二鳩屋一欲二割喰一其時鳩屋自二新巢一落二入舊巢一鷲鳥空攀二朽本一不レ得二其身一鳩屋自レ底取二鷲鳥二目一喰二割其喉一鷲鳥忽悶絕遂落二樹下一在廳等見レ之以レ餌呼二鳩屋一飛來仍相二副國解一重以貢二進之一則大菩薩御加被歟云々與清按に白鷹記に抑上古の名鷹は天智天皇の磐手野守延喜聖主の白兄鷹一條院の鳩屋赤目みさこばらは一條院の藤花韓卷藤澤山娥等と見ゆ宮寺緣事抄に村上天皇の御時といへると不レ合可レ考

（六十五）如木　石清水放生會記 明德四年八月十五日 左大史狼治宿禰記也（ヒシヨボクヂフシキ）に如木一人步雜色四人舍人二人云々また如木雜色一人云云また憶僕不二召具一如木云々遊學往來に承仕ハ淨衣中童子ハ狩衣大童ハ如木水干中間男共者色々直垂也云々伊勢貞丈が位袍に云如木ノ水干ト云ハ緒ヲ強ク張テ水干ニシタル也コハク張テ木ノ如シト云意也今世ニモ仕丁ナドノ著ル白張ヲ如木ト云モ麻布ヲコハク張テ木ノ如クナルヲ云也是如木ノ白張也云々正安大嘗會記に御手飼彌松丸拘云々 頭書 類聚雜要四に白古者張アリ強張の心にやさては如木に同戶田茂睡が職原口決大事に如木雜色白色の物を着て手をひろげて群臣の先に立てやなゝゝと云てあるくもの也與清手振ト云者ヲヽニヤ貞丈雜記四

（六十六）落板敷井鳴板（オチイタジキ　ナルイタ）　石清水放生會記に大外記師豐起レ座降二西落板敷一往二南大床一跪云々按に落板敷

は卑き板の間をいふ也また鳴板といふは打付ざる板敷にて今のあげ板也名目抄に見ゆ

(六十七)別當權別當修理別當俗別當少別當御殿司入寺僧　權別當宗清法印立願文に別當權別當三人修理別當二人俗別當神主正權三綱等山上執行少別當などみえたり石清水の宮僧の職名也また御殿司六人入寺僧十人權入寺權御殿司各一人なども見ゆ

(六十八)後普光園院攝政良基公万卷の書を讀　嵯峨野物語に余管をうかゞひ墻をたもてにする分際にて何事か申侍るべき但本朝の諸傳をうかゞへると一万卷にあまれりこれ世のしる所也と云々此書は良基公の御作也

(六十九)鳥の曹司幷曹司　又云大内にては鳥の曹司といふ所に鷹を數連つなぎたかる曹司とは局の儀也云々

(七十)畠水練幷火中　又云はたけすゐれんとかやの風情ばかりおほく侍りやがて火中に入らるべしと也云々按に今の世にも火中といふと有他見を憚てのわざ也畠水練は史記滑稽傳補七下に東方朔歌曰陸沈於俗ニ避二世金馬門一注に索隱曰司馬彪云謂無レ水而沈レ之とある陸沈を同日に談(カタ)る語といふべし十九の卷廿四段にも畠水練の事あり可レ考

松屋筆記卷之三十七

東都　源與清文儒稿

(一)御代官の碑を建て土民祭祀する事　近來有德の御代官死して後土民その墓を作り碑を建或は叢祠を建て祭ると有竹垣三右衛門といへる御代官の碑を立て下總人祭れりといへり後漢書許楊傳に百姓思二其功績一皆祭二祀之一とも見え詩の甘棠の章の類百姓信附して其德を稱せるためしなど古今少なからず因に云近來の御代官に早川八郎左衛門大貫次右衛門小野田三郎右衛門など其仁德世に風聞す此人々は上に忠有て諛はず下に惠有て猥(ワイロ)ならず早川小野田は手附に山崎新次郎あり竹垣は手附に松岡啓右衛門あり此二人躬儉約にして情僞に通じよく上につかへ民を治たりき大貫の手附にもさる人ありけるにや

(二)風竈を吹き井に及は家婦の災　後漢書李南傳に疾風卒起先吹二竈ノ突(ソコフキ)一及レ井此禍爲二婦女主一レ爨者一云云按に拾芥抄には釜鳴怪の咒法あり

(三)上道　皇國の古書に旅立するを上道と書たるいとおほかり後漢書樊英傳に駕載上道とあり

(四)賣買私約　後漢書公沙穆傳注に謝承書曰穆嘗養レ猪々有レ病使二人賣一之於市一語レ之言如レシ售ラバ當下告二買者一言レ病賤取中其直上不レ可二言レ無レ病欺レ人取二貴價一也賣レ猪者到レ市即售亦不レ言レ病其直過レ價穆怪レ之問二其故一齋二半直一追以還二買レ猪人一告語言猪實病欲二賤賣一不レ圖賣者相欺乃取二貴直一買者言賣買私約亦復辭レ錢不レ取穆終不レ受レ錢而去也云々按に猪は今の「ブタ」の事と聞ゆ

(五)蚊無町(カナイチヤウ)　江戸日本橋佐内町に蚊の出ぬ所あり俗これを蚊無町(カナイ)とよぶ往古弘法大師の蚊を封じて出ることなからしめしよしいへり後漢書徐登傳に趙炳能爲二越方一(越方禁咒也)章安令殺レ之人爲立二祠室於永康一至レ今蚊蚋不二能入一也注に炳故祠在二今婺州永康縣東一俗呼爲二趙侯祠一至レ今蚊蚋不レ入二祠所一云々とあり

(六)佛神　日本紀に佛を佛神とも蕃神とも書けり後漢書楚王英傳の註に袁宏(ガ)漢記を引て初明帝夢見二金人一長大頂有二日月光一以問二群臣一或曰西方有レ神其名曰レ佛陛下所レ夢得レ無レ是乎云々

(七)石鏡を墓表とす　後漢書任文公傳に公孫述時蜀

武擔石折云々注に武擔山在二今益州成都縣北百二十步一楊雄蜀王本紀云武都丈夫化爲二女子一顏色美絕蓋山精也蜀王納以爲レ妃無レ幾物故乃發レ卒之二武都一擔レ土葬二於成都郭中一號曰二武擔一以レ石作二鏡一枚一表二其墓一華陽國志曰王哀二念之一遣二五丁一之二武都一擔レ土爲レ妃作レ冢蓋地數畝高七丈其石今俗名爲二石笋一云々神の御正體に鏡をするも似たると也

（八）胎息胎食　後漢書王眞傳に能行二胎息胎食之方一嗽二舌下泉一咽レ之不レ絕二房室一云々注に漢武內傳曰王眞字叔經上黨人習二閉レ氣而吞レ之名曰二胎息一嗽二舌下泉一而咽レ之名曰二胎食一眞行レ之斷レ穀二百餘日肉色光美力並數人一抱朴子曰胎息者能不レ以二鼻口一噓噏一如レ在二胎之中一云々按に伴信友この胎息の術を信じて自ねこなひ人にもいひすゝめけり

（九）虎と見て石にたつ矢　古歌に虎と見て石にたつ矢もあるものをとよめるは韓詩外傳に昔者楚熊渠子夜行見二寢石一以爲伏虎彎レ弓而射レ之沒レ金飮レ羽下視知二其石一也因復射レ之矢摧無レ迹熊梁子見二其誠心一而金石爲レ之開而況人乎とある故事をとれる也此文後漢書廣陵思王荊傳の注に引たり 頭書 祖庭事苑三の卷十四丁オ荷子解蔽篇に冥々而行者見二寢石一以爲二伏虎一也見二補林一以爲二後人一也呂覽季秋紀養由基射レ虎中レ石矢乃飮レ羽誠乎虎也能改齋漫錄十四

（十）白波綠林　後漢書劉玄傳に新市人王匡王鳳爲二平理諍訟一遂推爲二渠帥一衆數百人於レ是諸亡命馬武王常成丹等往從レ之共攻二離鄉一聚二藏於綠林中一數月間至二七八千人一云々注に綠林山在二今荊州當陽縣東北一云云同書王常傳に與二王鳳王匡等一起二兵雲杜綠林中一聚レ衆數萬人云々強盜を綠林といふはこの故事によれる也同書靈帝紀に中平元年張角反皇甫崇討レ之角餘賊在二西河白波谷一爲レ盜時俗號二白波賊一云々また中平四年云々黃巾餘賊敦大等起二於西河白波谷一寇二太原河東一云々同書獻帝紀に冬十月云々白波賊寇二河東一注に薛瑩書曰黃巾郭泰等起二於西河白波谷一時謂二之白波賊一云々同書趙典傳に典兄子謙云々轉爲二前將軍一遣レ擊二白波賊一有レ功封二鄠侯一云々同書董卓傳に初靈帝末黃巾餘黨郭太等起二西河白波谷一轉寇二太原一遂破二河東一百姓流二轉三輔一號爲二白波賊一衆十餘萬云々同書南匈奴傳に單于將二數千騎一與二白波賊一合レ兵寇二河內諸郡一云々賊をしら浪といふはこの故事也と云古今伊物のおきつしら浪たつた山とよめるも必盜の事をよせつゝと見ゆ海道記にも白波綠林の事ありさて

しら浪といふはもと逆浪などゝ叛逆の者をいふより出たる詞にやたつといへる緣語も山だちなどによしあり尙可レ考 頭書 海道記に白輪のかげにあらはれて緣林の人なしきる所といへるは初學記一の卷三丁ウ星の條に輪星桂月の注に古樂府詩曰天上何所レ有歷々種二白輪一とありて白輪は星の事也星月夜を白輪のかげと書る也

（十一）活版銅板　井粟珍版　東觀漢記の武英聚珍版の乾隆爺御製題十韻序に沈活筆談記宋慶歷中有畢昇爲二活版一以二膠泥一燒成而陸琛金臺紀聞則云毘陵人初用二鉛字一視二版印一尤巧便斯皆活版之權輿顧埜泥體鹿鎔鉛質輭俱不レ及二鍛木之工緻一茲刻二單字一計二二十五萬餘一雖二數百十種之書一悉可二取給一而校讎之精今更有レ勝二於古所一云者一第活字版之名不二雅馴一因以二聚珍一名レ之而系以レ詩稽二古搜一四庫一於レ今突二五車一開鑑思二壽世一積レ版或充レ閭張帖唐院集周文梁代餘同爲製二活字一用以印二全書一精越二鵝冠體一富過二鄴架儲一機圓省二雕氏一功倍謝二鈔胥一聯腋事堪レ例埜レ泥法似レ疎毀レ銅昔悔レ彼刋レ木此漸レ予既復羨二黎棗一還教レ愼二魯魚一成レ編示二來學一嘉惠志符初云々この詩は乾隆爺の詩也精越二鵝冠體一といふ句の下の細注に昨歲江南所レ進之書有二鵝冠子一卽活字版第字體不レ工且多訛謬耳また毀レ銅昔悔レ彼の句の下の細注に康熙年間編二纂古今圖書集成一刻二銅字一爲二活版一排印藏工貯二之武英殿一歷レ年既久銅字或被レ竊缺少司レ事者懼レ干レ咎適値二乾隆初年京師錢貴一遂請毀二銅字一供レ鑄從レ之所レ得有レ限而所レ耗甚多已爲二非計一且使二銅字一尙存ㇾ則今之印書不レ更事半功倍乎深爲惜レ之とあり按に活字の事陔餘叢考器財箋一文史卷帙條名物六帖和事始などに見え銅板のことは駿府事略御代々文事表などにしるしたれば閱て知べし 頭書 類聚名物考書籍部一文教温和下卅七丁オ夢渓筆談通雅駿府事略右文故事三才圖會人事四ノ廿五丁オ

（十二）將軍樹　物の長たるを將軍といふはぬすびとの大將軍などの類おほかり南昌府志卷之二山川上新建縣西山の條に乃至二香城寺一榜曰二咸通香城蘭若一八年鎭南節度使嚴景書昔東晉隆安中曇顯肇居二此山一嘗與二陸靜修一搉論見二北齊高僧傳一今長老如晦妙喜弟子也方丈側娑羅樹兩株葉皆下垂又羅漢菜常以二正月一生飯罷杖レ策登レ山初過二樞林一其間一株最大者圍丈五號二將軍樹一相連近二十年一矣云々按に蘭若の下八年の上盖咸通の二字を脫す十年の年字盖寫誤也

（十三）雷洞　同書卷三山川下武寧縣部に雷洞縣南八十里一名雷巖洞中常有レ雷與極靈異人不二敢入一云

云按に常陸岩間山の近邊に男體山ありそこに雷洞ありて雷出入す近邊の樹木悉皆こがれたりといへり

(十四)石佛　相摸築井縣土屋山(トヤ)の拘盧尊佛(クロソンブツ)下野井出(ノイデ)觀音岩船地藏の類皇國に石佛いとおほかり南昌府志卷之三山川下寧州部に石佛州南二十里高丈餘宛若ニ鐫刻一水旱居民禱焉とあり自然に佛の形せし石これかれきこえたり追記すべし頭書石像ノ始元亨釋書十七ノ七丁ガ

(十五)鄉倉　今の世村里に年貢米を積貯る倉を鄉倉といへり南昌府志卷之八公所部に縣倉鄉倉の名ありまた東鄉倉西鄉倉南鄉倉北鄉倉などもありまた舖あり總舖某舖などいへり屋敷の事也院あり館あり役所をいへり

(十六)神社の緣起　緣起はもと由來をしるしたる記にて佛書の字也緣記など中比のものに書たるもあれど誤也按に神社の緣起はふるくよりいひし名なれどおなじくは祠記といはまほし南昌府志卷之二十一曲祀下徐孺子舊祠の條に曾鞏撰ニ祠記一とありまた徐孺子新祠の條に郡人朱善撰ニ祠記一などあり

(十七)福來病　日本紀略天德三年の條に今年人民頭腫世號ニ福來病一云々同長元二年十月の條に自ニ去月一至ニ今月一京中人病ニ頭腫一世謂ニ之福來病一云々倭漢合運長元二年の段に京人腫世謂ニ福來病一云々玉勝間三の卷に頭のふくらかなるよりかくいひなせし成べしといへりこは世にいふ腹ふくれの金持などいふやうに心得たる說にてひがごと也福來は「フクレ」の語にかり用し字にてやがて「フクレ病」といふ事也福來病「フクレヤマヒ」と訓べし頭書百練抄十五ノ廿九丁ウに不レ漏レ之世以爲ニ内竹房一

(十八)倭漢合運　倭漢合運は洛陽の僧圓智が撰にて古書也圓智は時代未レ知人なれど蓋永祿の比にやとおぼゆ屋代弘賢藏本に慶長八年活版の倭漢合運あり延寶の刋本とは異同少からず此本上下二卷とす武將略紀などもなしまた春日社本は天正十五年までをしるし後陽成院を今上とせり加賀儒官大島忠藏が本は正親町院を今上と書たり常陸和光院の本あり余未レ閱また鎭西梁山沙門蓬庵叟釋道器が新選和漢合圖あり正親町院を今上とし天正三年までの事をしるしたりこれ古き倭漢合運に對へて新撰となづけたるめればこれよりもはやき物なるとは論なし今の延寶刋本はその比吉田光由が加筆おほければ校合せずして

は引用がたし

(十九)しでの田をさ　古今集打聞俳諧に「いくはくの田をつくれはかほとゝきすしてのたをさを朝な朝なよふ」とふ歌の注に郭公はいくばくの用を作ればにやしてたをさ〳〵と朝毎に田長を啼よぶぞといへりしてたをさとなくを田長をよぶことに今はいひなしたり云々遠鏡にドレホドノ田ヲ作ルトテ時鳥ハアノヤウニシテノタヲサヲ毎朝々々ヨブコトゾ云々按に此歌の注釋顯注密勘槩雅抄餘材抄續万葉論の類にこれかれ見ゆ今按にしでのたをさは郭公の鳴聲にてほとゝぎすともしでのたをさともなくゆゑ二名有也しでのたをさを郭公の異名といふ證は榮花物語御賀卷に「さなへうゑをりにしもなくほとゝきすしてのたをさとむへもいふ也」伊勢物語に「名のみたつしてのたをさは今朝そなく莓あまたとうとまれぬれは」これら皆郭公をしでのたをさとよめりまた拾遺にうみたる子のなくなりて又の年ほとゝぎすのなくを聞て伊勢「しての山こえてやきつるほとゝきす戀しき人の上かたらなん」これもしでのたをさといふによりて死出の山をこえてや來つるとよめる也さて古今の歌はしでの田長をあさな〳〵よぶの「を」もじ蓋「と」もじの誤にてしでの田長と朝な〳〵よぶと郭公が自名のりてよぶをよめるなるべし

(廿)弓筆の道　文武の道弓馬の道敷島の道などいふは常なれど雪玉集に弓筆の道とよみ給へる歌あり「弓筆の道の外にも思ふときゝとる春を宿にしるらん」弓筆の道はめづらし

(廿一)紫蘇卷　并荏(エゴ)裏(ヅヽミ)　今の世しそまきの唐がらしそまきのめうがしそまきのうごしそまきの蓮根などいふものいとおほかり延喜大膳式下に醬瓜糟漬瓜荏裏各一顆また鹽七斗二升八合醬四斗一升七合幷味醬漬及荏裏料などありて荏裏は荏の葉に裹みたるにて今の紫蘇裹の類也今も紫蘇のみにも限らず荏の葉をも用る也同式に茄子荏裏料一顆中子料半顆云々また荏裏四百七十六顆吳桃子二斗生薑六升山蘭龍葵子各一斗苦就(舌就一本仙沼子に作)また荏裏六斗料瓜九斗冬瓜七斗茄子六斗菁根四斗鹽一斗二升醬未醬滓醬各一石云々

(廿二)新選和漢合圖下　釋道器が新選和漢合圖下といふ書あり序に鎭西梁山沙門蓬菴叟釋道器謹圖吾高

祖從二摩訶迦葉尊者一天竺第廿八世復震旦初祖菩提達磨圓覺大師南身毒舍至國異見大王第三王子也當二于人王第二十七代繼體天王十四年庚子一而蕭梁武帝普通元年庚子幷後魏孝明帝正光元年庚子歲始來至二梁金陵一以降如來心印播二敷眞丹一佛心宗風吹二南閻一高扇二於震宮帝網一而遙徹二于扶桑根抵一故從二大師東漸之年紀一始書下如レ圖とあり繼體十四年より起て永祿四年までのことを記し正親町院を今上皇帝と書たりさては永祿四年に鎭西梁山の禪僧道器が撰なることしるし屋代弘賢藏本に古寫本ありてそれには寬永十年まで後人の加筆あり倭漢合運に習て作れるものと見ゆされど取べきことおほくめでたき書也その所見ひとつふたつを左にあぐ頭書名物六帖器財篇三ノ廿丁ウ

○額の始 推古四年の段に云十二月元興寺成太子額レ之○大山寺 天平勝寶三云大山寺立○加筆云山 ○慈光寺 延曆廿四云武州慈光寺立 ○仙波寺 號阿部利山ナリ相州ニ在レ之一 天長七云武州仙波寺立 ○花見御幸 天長八云花見御幸始 ○上野一宮 元慶六云上州一宮立 ○六十六部 承平元云賴朝房納二法花於大社六十六部始 ○北面の始 承保元云北面臣始レ置二院功者也 ○武州洪水 德治元云九十六武州洪水 ○年忌 永祿廿七云庶飛院十三回忌天下殺生禁斷 ○分配原合戰 康正元云正廿三 ○二宮 康正元云上州二宮原軍 ○三宮 寬正元云上州三宮合戰 寬正三云武州岡部原合戰 ○五十子陣 文明七云五十子陣竣 ○武州洪水 文明十四云武州洪水 ○富士塚 文明十八云關東處々築二富士塚一 ○武州村岡万吉村 明應三云十一十六政氏武州村岡處々於二万吉村一御動座顯定荷擔○明應四云六廿六顯定陣二万吉一 ○上戸 明應六云武州上戸御陣 ○立川原 永正元云九廿七於二武州立川一合戰兩軍五千餘人討死 ○鉢形 永正九云七武州鉢形城沒落城主御簾子軍主長尾景長法名禪香 ○杉山城 大永元云十廿三武州杉山城落 ○江戸城 正十三武州江戸城落 ○武州葛西 享祿三云上州寺尾城落憲寬武州葛西落散 ○淺間山燒 天文四云正二自二東國一 ○河越城 天文六云七十五河越城落城主上杉朝定 ○鴻臺 天文七云十七義明薨二於下總國鴻臺一御討死法名道 ○河越 天文十四云自レ秋東兵陣二武州河越一着陣城主北條氏康臣下晴氏上杉憲政武州河越城○頭書云鎌倉 ○沙窪 天文十五云四廿武州沙窪合戰 ○鉢形再興 天文十七云武州鉢形再興氏康 ○鏤阿寺學校 永祿四云十二廿七鏤阿寺學校俱炎上 ○武州洪水 加筆天正三云八廿武州洪水同廿六大洪水

(廿二)富士塚 新撰倭漢合圖文明十八年の段に關東處々築二富士塚一云々按に小田原記六の卷富士山事の條に武州高尾山に富士權現を勸請せし事も見えたり

(廿四)名書に姓氏を細書するは藤原末家の例 懷紙の名書に姓氏の字を細書するはもと藤原氏の人本家末家を分んために位署に本家は藤原朝臣を筆太に書き末家はそれにまがはざるやうに細く書く例也これにより源平の人も細く書事と心得たるはひがごと也藤原氏の本家とは攝政家也末家は外々の藤氏をいふ此事伊勢貞丈が二上峰にいへり

(廿五)眞むすび 山槐記除目の條に夾竿の圖を出して件夾竿大外記師元朝臣作レ之與レ予也寸法如レ此以レ竹作レ之長甲方也其員廿許以二細紙捻一眞二結之一云々とあり

(廿六)ホイタウ承仕 ホイタウは陪堂と書く也禪家僧司の名にて飯米を司る僧をいふまた承仕といふも禪家の鐘を突ものゝ名也

(廿七)同朋 同朋を俊坊の訛也といふはいかゞあらん同朋の字はもと禪家の力者を同朋といへばそれに出たるにや御成の御供に必從ふものなれば力者の頭を同朋と名づけしも知べからず

松屋筆記卷之三十八

東都 源與清文儒稿

(一)制度擬二唐禮一 皇國の制度は應神仁德の御代より漢土の禮をほのぼの傳たりけん字遲稚郎子百濟の阿直岐(アチギ)王仁(ワニ)を師とし學れしは西晉武帝の代にて晉の禮未百濟には及まじければ後漢三國の禮也三國は惚忙の時にて禮樂定らず後漢はもはら西漢の制度に據たれば皇國最初にまなびしは漢の制度也そのゝち聖德太子の學れしは隋の世の禮に佛家の禮をとりまぜたる也孝德天皇の改新の政は初唐の禮也こは中臣鎌子連の作意と見ゆ文武天皇大寶元年の紀に正月朔天皇御二大極殿一受レ朝其儀於二正門一樹二鳥形幢一左日像青龍朱雀幡右月像玄武白虎幡蕃夷使者陣二列左右一文物儀於レ是備矣とあるは唐禮全備せる也三代實錄貞觀十三年十月の條にも本朝制度擬二唐禮一と見えたるを思ふべし

(二)家宅の制三變 與清畿內を歷覽して家宅の制の三變せしをしる大和の國內橘寺法隆寺などは隋唐の

制を學たる也京都五山は宋の制也宇治の黃蘗寺は明制也之らの佛寺の例にて在家の造作のさまも押はかるべし大和の古寺にはいにしへの皇居をそのまゝ金堂に用たるがおほかり頭書無住雜談五ノ廿二丁ヵ鐘樓事ノ條ニ大安寺ハ唐ノ西明寺ノ一院ヲ移シ西明寺ハ天竺ノ祇園精舍ノ一院ヲ移セリ本朝ノ諸神此ノ大安寺ニ學テ作レリト云

（三）代物（シロモノ）　奥州會津年譜に天文十九年庚戌九月十日捨ニ永樂通寶錢一用ニ京錢一京錢者縣代之雜錢也傳云駿府大相國公一夕夢レ換レ城醒告ニ忘於本多佐渡守一佐渡守敬曰是公不レ所レ可レ患志路可ニ相換一太易也以ニ京錢一換ニ永樂一公尤容ニ其言一終如レ此云其事倭俗謂レ錢曰ニ代物（シロモノ）一代ノ訓志路也故取レ義然也云々按に代物はカハリノモノといふべきをシロといふは字によりていひ出たる詞也俗言に賣しろなすなどもいへり

（四）御湯殿　禁中の御湯殿は浴殿に限たる名にあらず浴殿の外に男末（トノスエ）といふ所ありそは主上の陰（カゲ）の御膳を調る所也御茶の湯など常に湧したる所なれば御湯殿といふ也陰（カゲ）の御膳といふは主上の常の供御也晴の御膳は濱島家調進し常の御膳は高橋幷大隅長門より調進すれどいづれも規式而已にて當時ノ供御にはならぬ料理也さて晴御膳常御膳ともに供御にならねばら

（五）讀師講師發聲　和歌御會の時歌の讀師は懷紙をひらくのみ也講師はふしなしによむ也發聲は節をつけて歌ふ也これは神樂の家のわざにて飛鳥井持明院小倉などの人々也樋口秘記に見ゆ今の世下賤の會に披講などするはいみじきひがごと也

（六）うはざしの矢井落シ矢　軍將神社に祈請のをり上指（カハザシ）の矢を奉るとものにおほく見ゆうはざしの矢一名おとし矢といふそは籙には矢廿本さす定也壺籙の時は十九本は内に入てさし一本の大雁股を外の方にさすこれを公家にはおとし矢といひ武家にはうはざしといふ也うはざしを奉るといふは雁股（カリマタ）の矢を奉ると也

（七）お夜長の御膳　婦女の詞に夜食をオヨナガといへりこは禁中にて大床子の御膳のおろしを女中の夜食にくふを夜長といへりこれより出たる詞也

（八）髮の中剃　髮の中を少しばかり剃て毛のおほきをすかすは二條康道公髮あつかりしゆゑ髮の中を剃られしに始るよし樋口秘記にいへり與清按に撰集抄砂石集太平記などに月白といへるものこれ髮の中剃也二條康道公に起るにあらず

（九）薄疊　幷ウスベリといふ敷物　今の世うすべりといふはいにしへの薄疊（ウスダヽミ）也今の「タヽミ」はいにしへ厚疊（アツダヽミ）といへり

（十）チヤ〳〵ムチヤカウ　幷ヤタラ漬　近江より禁中献上にチヤ〳〵ムチヤカウといふもの有郁子籠（ムベカゴ）などの類にて女房執奏也色々の木の葉を取あつめて漬物にしたるもの也鞍馬の木芽漬は顯注密勘庭訓往來などに見ゆ近來江戸にヤタラ漬とて茄子や瓜やとり交て漬たる香ノ物あり大森の里の梅びしほ屋にて賣也チヤ〳〵ムチヤカウは俗言にわけもなく混雜せしをチヤ〳〵ムチヤクといふにおなじ心の名也ヤタラも俗にヤタラムシヤウなどいふのヤタラの義にて名付たる也頭書ヤタラハ拍子ノ名也体源抄十一末別名說事條にヤタラ拍子（ホンヤ）

（十一）身屋（ムヤ）　越後人の方言に家の本家を「ムヤ」といひその「ムヤ」の左右に作りそへたる家を一ッを廂屋（ビツヤ）とし一ッを雜屋（チヤウヤ）とすいづれをも中門とよべりとなん中門は帳の屋などいふ事にや心得がたし「ムヤ」は身屋とも母屋（モヤ）とも古書に見えたるこれ也母屋寢殿などの類にて女房執奏也色々の木の葉を取あつめて漬物にしたるもの也鞍馬の木芽漬は顯注密勘庭訓往來などに見ゆ近來江戸にヤタラ漬とて茄子や瓜やとり交て漬たる香ノ物あり大森の里の梅びしほ屋にて賣也チヤ〳〵ムチヤカウは俗言にわけもなく混雜せしをチヤ〳〵ムチヤクといふにおなじ心の名也ヤタラも俗にヤタラムシヤウなどいふのヤタラの義にて名付たる也頭書ヤタラハ拍子ノ名也体源抄十一末別名說事條にヤタラ拍子（ホンヤ）

（十二）女房文に月日しるす　源氏提要四の卷　若菜上に惣じて女房文には月日付はなき物なれどもこれはこの月その日としかとしらせんがためにもと思ひて書たるなるべし云々

（十三）繪の上に歌を押す　源順集に内裏に女親王たちの御れうに月次の繪かゝせ給うて殿上人に歌をおしつけさせ給ひ云々今傳はれる古畫に上に色紙の押て歌書たるおほしこれいとふるくよりの體裁也

（十四）篦（ノ）ため形（ガタ）　大河内秀元（茂左衛門）が松平物語一の卷元龜三年五月神君駿州田中城の信玄が勢を攻給はんとて大井川を渡し給ふ時大河内善一郎伊良尾が瀨をわたして功名せし事をしるせし條に大河内善一郎進出何條事の候べき水かさの干落るをまつ迄も候まじ某先瀨ぶみ仕て御見に入奉んとて手勢幷に七十五騎に下知をなし各障泥をとり鐙をつなぎ肛帶をしめ瓦に鑓筏を組て向の洲先篦ためがたに渡すべき旨機を賦る家康公聞召おびたゞしき大水也危きとなれば無用たるべしと再三制し給ふ大河内聞もあへず伊良

尾が瀬へ馳下り眞先に進み漲る早川に馬を颯と馳入云々此外篦タメ形といふ詞合戰の書に所見おほし今俗筋違といふがごとし

（十五）藏法師　今世江戸深川の藏守をクラボウシといへり藏家守の事也蜷川親元日記に正實房定泉房などいふ御倉法師あり將軍家の御倉預也足利の代には同朋倉法師など五山の僧徒の官を用られし事ありそは學問の道僧家にありて何事も五山僧に問はからるる世なれば自然かゝる事も出來し也同朋は僧家の供法師の名目をやがて將軍家の御供の人の名目にも用し也俟坊などゝいふ說はうけがたし 頭書 甲陽軍鑑十七四丁右藏法師同四卷八丁オ又十二丁ウ眞丈雜記四

（十六）大方殿御方　太平記伯耆の巻などに大方殿とあるは母堂の事也親元日記にも將軍の御母堂をば大方殿と書たりまた御方といふは御方御所ともいふ御方住居の義にて將軍家の御嫡子の事也親元日記には御方御所と書たり

（十七）十六島藻　雲州の產に十六島海苔ありこれをウッフルヒといふ讀耕齋文集六の卷に十六島藻贈二金節一書あり其文に自二雲州一到二東武一之一輩贈レ余以二十六島海苔一告曰入二之水中一挑出而浸以レ醋飡レ之或點以二醬且煮酒冷汁一亦可也十六島倭二訓一島都不流比一此是雲州之海島依二其所一レ出以名レ之余素聞二十六島之名及訓一矣其品味乃始見レ之其色紫黑色如二脩髮之垂結一如二束髮之亂披一因以爲二盤之貳一輕滑淡脆頗含二潮氣一可レ謂美之珍也箸之助也倘有二不識之者一則唯察二十六島之可一レ爲二地名一而豈解一レ其爲二海苔一與俗訓一也哉夫絹之於二八丈島一也鰒之於二竹島一也鰑之於二五島一也銃之於二多襪島一也皆今世就二其所產之島一而爲二其物之稱一十六島亦此例也海月之訓二久良介一海松之訓二美留一梅法師之訓二保也一淡菜之訓二宇美多介一皆海味訓釋之最難レ讀者也豈獨怪二十六島之得レ問而後知一レ之也哉十六島固是非二八割八別之相遠一也惟其小洲曲汀淺灣直坻離々累々偶有二二八之數一乎所謂八十不足之隈及八十瀨宝八島等之類乎且既是雲州之地也試援二雲州之往蹤一認レ之八重雜之八雲可二併擬一十六島之算一者耶非耶云々と見ゆ按にウッフルヒといふは打篩て製造するゆゑの名歟土人の考を俟べし

（十八）鈴生（繩）山言語　菓物のおほく枝になりてだれたるを俗言に鈴生といへり堀川百首夏廬橘の部顯仲歌に「わかそのゝ花橘の色見れは金の鈴をならすなりけり」一本には金の鈴のなれる也けりとも有夫木抄夏一にも收むこは朗詠花橘詩に枝繫二金鈴一と作れるにおなじく橘の枝になりたるをやがて金の鈴にたとへし也俗言の鈴生はこれに出たる也けり

北越雪譜下卷廿六丁オ山言語の條に深山にありて事をなすには山ことばといふものありてこれをつかふ忘れて里のことばをつかふ時は必山神の祟りありといひ傳ふ他國はしらずその山言語とは米を草の實味噌をつぶら鹽をかへなめ燒飯をざわう雜水をぞろ天氣の好をたかゞいゝ風をそよ雨も雪もそよが舞といふ蓑をやち笠をてつか人の死をまがった又はへねた男根をさったち女陰を熊の穴此餘あまたありさのみはとて記さず女陰を熊の穴といふをもて思ふにこれらのことばゝ商家の符調といふものにおなじかるべし云云

（十九）忌詞　古く齋宮齋院の忌詞ありて延喜式に載らるまた常の詞にも病を歡樂吾妻鏡その外家記におほし大草料ホソノヲ、繼グ菜花卵梨をありの實理の書などいふ類

古書におほかりこれをしらずしては皇國の古書に解しがきこと少からず或儒者の吾妻鏡の註釋せしものに賴家御歡樂によりて人に對面なきよしを書たる處にかく放逸の振舞なれば天下を失るよしをこと〳〵しく論じいひたるはかたはらいたき論者也此書二冊刋本也取に足らぬ說ども也

（廿）數の調半の字　物の數の調半の字を今は丁半とも長半とも書くは借字也調半と書べし調は「トヽノフ」義半は「ハシタ」の義也定家卿の愚秘抄に調半の字を書れたり

（廿一）浦わけ衣　山わけ衣露わけ衣などは常に歌によめり浦わけ衣ともよみたる有壬二集下に「夕嵐浦わけ衣吹はらへもしほのけふり立やそふらん」此歌夫木抄雜十五にも載たり

（廿二）願文祭文の自作　父祖の碑文墓誌などは有名の博士に乞て書しめ行狀は自記することから國の例也近比服元喬が其子の祭文書たるをあるまじきことのやうに世人いひかたぶくめり源氏夕顏に源氏自夕顏の願文を書て文章博士に添削させられし事見ゆ河海抄に清和天皇自作の願文を例に引て注したり一概

にはいふべからず頭書制度通五

（廿三）年給　除目抄に公卿給事云々執筆大臣除目月之一分ヲ別シ天一分召ト天任レ之普通召名ニハ不ニ書加一也云々年給の事建武年中行事あがためしの條蟬翼抄大間ノ書江次第魚魯愚抄などに見ゆそは毎年除目の時給はるもの也年官ともいふ縣召除目の時に諸國掾一人目一人一分史生の事也二人を給ふまた京官除目の時内官一人を給ふ又年爵として除位の時從五位下を一人給ふ也除位は正月五日に行はる大臣年官年爵を給はりて己が心に任せ從五位下を一人申除する也また内官一人諸國の掾目史生などを申任す大臣にかぎらず納言參議親王内親王などの給にて受領し國の掾目史生などに任ずる人おほかり官職難義に年官年爵とは春除目に諸國の掾一人目一人秋除目に内官を給ひ叙位叙爵を一人給はる也給をば誰にても申任じ給ふ事也云々頭書公卿補任に四位の人にも院親王内親王などの御給ありそれは別段の事なるべし

（廿四）河藥　侍中群要四の卷御浴殿條に御厨子所參上供ニ御河藥一事了云々江家次第十五の卷大嘗會の條七丁主殿寮供ニ御湯一云々治暦長元御記乍レ著ニ天羽衣一入令レ下ニ御槽一給又以ニ一領一奉レ拭云々承保供ニ御河藥一入ニ土器一居ニ折敷一云々江家次第考十五の卷の條に御河藥白米也自ニ御厨子一所レ進レ之入ニ土器一居ニ四足一云々禁秘抄上卷恒例毎月次第の條に早旦供ニ御湯一云々内侍候ニ御垢一（アカニ）典侍或上臈女房進ニ御湯帷一奉ニ河藥一次典侍取ニ河藥器一抛レ板于レ時藏人鳴絃云々旁注に香ヲカリテ出也云々此旁注流布の印本にあり禁秘抄階梯上卷廿九丁ウに奉ニ河藥一（ツクル）江次第大嘗會承保供ニ河藥一入ニ土器一居ニ折敷一侍中群要第四御湯殿御厨子所レ進參上供ニ御河藥一日中行事四ッあしにするゐたる御かはぐすりをとりて云々又云次典侍取ニ河藥器一抛レ板于レ時藏人鳴絃云々日中行事御かは藥をとりてまゐらせてなぐる時かはらけのおとを聞てとのもりの助なるくら人弓の絃をうつ云々日中行事に御ゆどのへおりさせたまひて御ゆめしぬれば典侍（スケ）もしは上臈の女房御ゆかたびらを奉る四ッあしにするゐたる御かはぐすりをとりてまゐらせてなぐる時かはらけのおとを聞てとのもりのすけ（とのもりなりはいづれにても）なる藏人（すはいづれにても）弓の絃をうつ云々略解に御抄の傍注に香をかりて出すとあれば薫藥なるべし云々與清曰河藥は白米を水に漬してその水を天子の御膚にぬり給ふ也河藥と書は借字にて實は皮藥也皮膚をしてうつくしからしむる藥也薫藥と心得たるはいみじきひが事也

（廿五）名の片字　照光記建久七年五月五日の條に次手結文令ニ請印一云々持來更卷ニ懸紙一令レ封々了持來書ニ名片字一返給了云々照光記は十九卷ありといへり余が見しは建久七年五月六月の卷と建仁二年二月三月の卷との二冊のみにて百五十年許の古色の寫本也

（廿六）大尺　同書同月十一日の條に午時許相扶參内大臣殿御出了云々追參ニ大内一今日依ニ御歴覽一一昨日有ニ其召一以ニ人々指圖一委被レ注ニ大尺等一云々與清按に大尺は丈尺の誤歟又は丈尺の異名を大尺といへる歟丈尺は今の世の尺杖（シャクヅエ）といふ物の事也盛衰記など古書に丈尺の所見おほかり

（廿七）六借　并目ハジキと云草　むつかしといふ詞はいとふるくより見え字も六借と書たる所見おほかり照光記建久七年五月十四日の條に今朝脚有ニ小瘡一雖レ不レ可ニ驚喚一直能令レ見之處頗似ニ六借物一無ニ懈怠一可レ付レ藥之由示レ之目ハジキ也乍レ驚付レ之云々メハジキは節用集に天麩草蔚草萑薙荒蔚などをメハジキとよみ即益母也と注したり

（廿八）風流　并馬長　照光記建久七年六月十四日の條

に於北大路棧敷見物入道殿同御坐今年梶井宮内力者有別願渡之云々以金銀錦繡施風流皆悉著指貫平笠馬長廿餘騎云々按に風流の所見既にいへり馬長はムマノヲサ也吾妻鏡に見ゆ（筆記十三ノ四十二則可考）頭書下學集下卷三丁ウ藝能門に風流ハ風情ノ義也日本俗呼拍子物曰風流一枠川地藏記上ノ八丁ウ風流囃云々

（廿九）酒氣　同書六月廿一日の條に内大臣殿自昨日御風氣之由聞之午時許馳參謁女房昨日於泉候御前之間御心地違例之由被仰入御其後事外六借御酒氣相加今日同事之由云々今按に御酒氣は御腫氣也音の通ずるをもて借用し也

（卅）天狗　同廿三日の條に今日刑部語云昨曉侍雜仕開妻戸出之間著柿法師走懸欲取付仍逃入妻戸内止思之間絶入了所司見付令舁出昨今猶度度絶入是天狗所爲歟此一條殿病中の事也天狗の所見は村瀬氏が藝苑日渉に擧たりき

（卅一）荒和稜の菅貫　同廿九日の條に荒和稜不堪著如雁衣之間以衣令菅貫今夜陰陽師資元（ガ）門生也云妊者不菅貫也俗說云六度菅貫之如何此各大謬說也只如例稜雖向贖物不立之由稱之仍今夜用此

說云々按に如雁衣の如の字善衍歟または加の字などの誤にや可考　頭書政治要略廿九

（卅二）東庄　照光記建仁二年二月七日の條に最勝金剛院領伊賀國大内東庄云々按に東庄とは庄の東の方をいふよしの名也本庄新庄北庄などももとよりの庄園を本庄新しきを新庄庄の北の方を北庄といへる名也庄内といふも其庄の内の義也　頭書東鑑六ノ十七丁ウ印東庄成就寺領云々

（卅三）和歌所　同月九日の條に自和歌所有三首題云々按に和歌所の事明月記家長日記古今著聞集などはじめとして所見おほかり

（卅四）遊女鄽曲亂舞　同月十五日の條に今朝頭々遊君各賜衣裳云々また申時遊女鄽曲等了云々同月廿一日の條に遊女列座亂舞如例云々

（卅五）猿樂候御前庭　同十六日の條に巳時參上今日猿樂依召參御前庭施其藝公卿以下候御前末座殿上人上北面等自閑所見之申時許事不訖以前退下各賜馬一疋等之外出云々

（卅六）宮廻　同廿二日の條に巳時許出京參日吉酉時許宮廻通夜御輿云々又三月十日の條に天明之後出京參日吉巳時參著沐氷宮廻了入宿所小倉踈京未

一點入高倉云々按に沐氷は沐水の誤歟水をあみて後宮廻せられしなるべし小食は明月記抔にも見えて臨時の食也此時の小食も巳時と未時との間なれば午時なるべし

（卅七）スミトクサの狩衣　并五體不具の穢　同三月朔日の條に一日午天晴内裏有三五体不具穢云々午時參院（スミトクサノ狩衣着）之白衣也依老屈也但スミトクサハ壯年時着之歟云々

（卅八）持佛堂　同六日の條に持佛堂北廂稱北面方（カタ）昇左進大夫定佐來談云々按に持佛堂は古書所見おほし　頭書下學集家屋門に持佛堂

（卅九）梅花三月開　同十五日條に近日梅花之盛也今年花甚遲梅及二月晦開遲梅近日猶盛也云々按に三月十五日梅花の開ことにおそしとめづらし

（四十）和歌の讀上　同廿二日の條に秉燭之程御供參院今夜和歌六首其内三体可詠進之由有仰極以難計得亥時許出御和歌所有召參御前依仰置和歌又依仰讀上大臣殿令取進給應喚輩長明家隆定家寂蓮座主大臣殿御製之外六首有家雅經有催不參所勞云々自餘無催今夜歌各宜次有當座會季能加之暮春又依仰讀上了入御退出大ニフトキ歌春夏からひ申せすこき由也云々秋冬艶體立旅云々按に大にふ

ときこ歌からひたる歌などのことと長明無明抄に見ゆ

（四十一）懷紙　并柳筥　同廿四日の條に攝政於南面方召院司長兼令書手結給保近朝臣書之云々仁安ノ内裏日左方行事中將實守書之云々長兼取硯懷紙持參柳筥如恒書訖持參御所奏之御所ハ北面簾中也文入柳筥云々按に此懷紙は和歌の懷紙にあらず競馬の手番を記す料の懷紙也　頭書下學集下ノ十三丁ウ節用集也部器財門に柳筥ヤナイバコ編柳枝作之一尺四方也云々

（四十二）玉のつがり　并結染及雜色　同廿六日の條に春宮權亮定通朝臣各捌袴諸院宮調進給玉ノツカリ錦腰等也隨身ハ朽葉ノ結染ノ袴ニ付藤童ハ紫ノ結染ニ付山吹雜色ハ青ノ結染ニ薔薇云々また右少將雅平朝臣ヌキ布袴隨身二人同童二人歯ニ付ル鍍甚黒又施ニ紗綾一四十九　頭書雜色東鏡一ノ十二丁ウ又四十七丁ウ雜色中間ノ差別宗五大草子下ノ廿五丁ウ

（四十三）袖のしわ　同日の條に大將笏左袖のしわニ入レ天抽取テ奏シ給云々按に衣のしわ衣のひだなど所見おほし

松屋筆記卷之三十九

東都　源與清文儒稿

(一)遊女幷遊君別當　吾妻鏡十の卷廿八丁於二橋本驛一遊女等群參有二繁多贈物一云々頼朝上洛の時遠江國橋本驛にての事也同十三九丁手越黃瀨河已下近邊遊女令二群參一列二候御前一而召二里見冠者義成一向後可レ爲二遊君別當一只今即彼等群集頗物忩也相二率于傍一撰二置藝能者一可レ隨レ召之由被二仰付一云々其後遊女事等至二訴論等一義成一向執二申之一云々また十二廿丁發祐經王藤内等所レ令二交會一之遊女手越少將黃瀨河之鵜鶴等云々また十四丁曾我十郎祐成妻大磯遊女虎云々又十五丁故曾我十郎妾大磯虎雖レ不レ除レ髮着二黑衣一製袈一迎二亡夫三七日忌辰一於二宮根山別當行實坊一修二佛事一捧二和字諷誦文一云々同十七六丁に賴家卿相摸河遊遙云々到二大磯一令二止宿一給召二遊君等一被レ盡二歌曲一云々遊君愛壽俄以落餝云々平治物語參考二一五十一丁に義朝は兎角シテ美濃國靑墓宿ニ著玉フ彼長者大炊ガ娘延壽ト申ハ頭殿御志淺カラズシテ女子一人オハシマシケリ云々又五十二丁都ニテ江口腹ノ御女鎌田ニ仰セテ害セラル云々又五十九丁大炊延壽ヲ初テ遊君共參リ斜ナラズモテナシ奉ル云々長門本平家物語五の卷室ノ泊に著れたり彼所の習なれば遊君共參りておもひ〳〵に幸をひく云々新撰字鏡女部に嫋ハ遊逸也戲也宇加禮女云々和名抄二の卷乞盜部に楊氏漢語抄云遊行女兒宇加禮女一云阿曾比今案ニ又有二夜發之名一俗也保知本文未レ詳但或說白書遊行謂二之遊女一待レ夜而發二其淫奔一謂ニ之夜發一也云々大鏡八の卷廿丁河尻のあそびしろ云云大和物語下卷に亭子院の御前にて遊女しろうたよむ云々古今集離別に白女が歌いのちだに云々万葉十八に遊行女婦士師云々同十九に蒲生娘子其外遊女の歌見ゆ云々住吉物語五十丁河尻のあそびもの云々壒嚢抄二の卷白拍子遊女傀儡云々新續古今後京極殿たれとなくよせてはかへる浪枕云々夫木抄慈圓浪の上にこがれて過る云々又仲正川の瀨に浪の萍云々庭訓往來四月に傾城白拍子遊女夜發之輩云々朝野群載三大江匡房遊女記云々又傀儡子記云々世事談綺五の卷七丁傾城云々六百番歌合うかれめのうかれてありく旅やかた云々又浪のうへにうかれて過るたはれめも云々續千載に

一夜あふ行來の人のうかれづま云々一目千軒に傾城町云々和事始一廿四丁十訓抄十一廿一丁此外遊女の所見擧盡しがたし今心にうかぶまゝに書つく落標ニ云當津の柳陌は往昔天正慶長の比より諸所に遊女を抱渡世の者有しを寛永年中に今の土地を下しおかれ諸所の遊女を一所にあつめ一廓の內に軒をならべさせ其比木村亦次郎といへる浪人者に右廓の庄屋年寄を被レ爲二仰付一永く傾城町となる今寶曆七年まで凡百卅年餘になる也前にいふごとく新に町となりしより世人新町とよぶ惣名也又當津にては中といふ云々古樂苑廿六の卷二丁に遊女ノ曲氣氳蘭麝體芳滑容色玉耀眉如レ月珠珮媒姬戲ニ金闕一戲ニ金闕一遊ニ柴庭一舞ニ飛閣一歌ニ長生一云々按に柴庭は紫庭にや可レ考紅毛雜話五の卷に嫖客はいづれも獨身者にて有妻の人は遊女の樓に登らざるよし見ゆ頭書照光記建仁二年二月十五日條に今朝路頭遊君各賜二衣裳一云々如レ予貧人不レ入二此中一兼定一昨日被レ仰調儲以二如レ此事一已以出身云々申時如レ例遊女鄙曲等了早出不レ知二其後事一云々同廿一日ノ條に大臣以下會合如レ例懸二御簾一立二障子一(定事也女房見物料也)手時計出御云云遊女列坐亂舞如レ例云々新猿樂記遊に女夜發之長者云々

(二)蒲生秀實が俳諧歌論の跋　下野人蒲生秀實は俗名を伊三郎といふ號は修靜菴聲官志の撰者也余が俳諧歌論に跋して云國欲レ有レ禮士欲レ有レ學學以講レ禮以レ禮體レ政所謂君子之道蓋在二於斯一若二巫醫樂師百工一即其業雖レ賤各能守二其職一以レ此食二農之所一作衣二紅之所一織其所以資用供令多矣頭書紅者工女也見二于漢書董仲舒傳一夫如レ此而無レ罪二於國一嗚呼自二俗儒一以下淫レ書而醉レ詩志不レ存二典刑一口不レ分二名分一沒レ世唯唐是拜其愚與二所謂俳諧師一何異而俳諧師之徒世爲二最多一松屋高田先生有レ觀二於此一將レ就二其多者一而喩之素雖レ成二乎戲造一亦有二深旨一乎哉蒲生秀實識此文のむなしくちりぼひうせんことを哀てこゝに書つく

(三)天日嗣井某朝廷　天日嗣の字は大戴禮に出たるを本朝の古書にかり用て書たる也また淨見原朝廷難波朝廷など書は史記秦本紀に咸陽朝廷と見え詩藪外編一四丁に秦朝廷などもあればもとから國の字を用たる也

(四)彌五郎男申狀　目黑村高峯山長泉律院に南都東大寺より得し古き經論おほかり古文書なども相まじれりその中に七條大和路住人彌五郎男が申狀あり其文云

七條大和路住人彌五郎男謹言上

欲レ早召二賜海印寺御領內長法寺□人松女幷阿佛等

所ニ隱置一彌陁女之子細事

右子細者於ニ彼彌陁女一者自ニ又次郎男之手一令レ賣ニ買歟取之一多年間雖ニ召仕一更無ニ子細一之處去年二月之比不慮令ニ逃失一之間賣主懸ニ于又次郎男一相尋之處同四月於ニ海印寺御領内長法寺一尋ニ相手一而彌陁女之母松女幷阿彌陁佛等于レ今恠不ニ返渡一之間則又次郎男捧ニ訴狀一訴ニ申于本所一之處女陳申云於ニ彼又次郎男一者雖レ爲ニ本主人一賣ニ渡于彌五郎一後者更以不レ可ニ相綺一云云取意此條爲レ遁ニ當難一所レ搆ニ奸謀之也歟其故者又次郎男爲ニ本主人一可レ相ニ懸彌陀女之逃失一之由及レ約就レ賣ニ渡于彌五郎男一任ニ彼契約一致ニ其沙汰一之條更非□何寄ニ事於左右一可レ申ニ子細一哉所詮望又次郎男一旦雖レ申ニ子細于彌五郎男一者更不レ可レ申ニ子細一之條其理況必然也爰同申狀被ニ買取一之後雖レ被レ相ニ憑夫妻一得レ暇罷去云々取意此條頗不レ足レ言□事歟也賣ニ買歟取彼彌陁女一之後至ニ去年一爲ニ主從之儀一不レ爲レ妻品品條且在ニ地近一顯然也未曾有申狀也而只無レ何非ニ召仕一既自ニ他人之手一賣買歟取豈□賜レ暇乎尤可レ有ニ上察一者也若又實暇給者尤放狀可レ在レ實作レ有之若不□所實申狀旁以爲ニ顯然一所詮任ニ道理一速爲レ召ニ賜彼彌陁女一□者歟言上如レ件按に此申狀蓋六七百年前の物歟彌五郎は五郎の子を小五郎その子を又五郎その子を又次郎といふ又次郎は次郎の子を小次郎その子を又次郎といへる也放狀は暇を給よしの狀なるべし

(五)增上寺成譽僧正辭世　芝三緣山增上寺第四十五世成譽僧正は寶曆六丙子年八月四日年七十七にて寂し給ふ辭世に「七十七年夢忽覺還ニ西天一無礙光明裡瞻仰彌陀山」「八十までひさしくかりしかりの身をかへして今は西へ行也」前大僧正速蓮社成譽上人信阿大玄和尙と號す武藏荏原郡下目黑村高峯山大玄寺長泉律院は此成譽僧正の開基也

(六)花嚴八會章の跋　長泉律院の古經論の中に花嚴八會章あり紙員廿一枚あり奧書に華嚴八會綱目章一卷

天平神護元年四月廿二日東大寺僧興顯此書學者重內終不文當成ニ眞佛子一廻ニ此功德一施ニ法界一皆願當得ニ寂靜樂一

とあり學の字は與の古字歟學の略體歟天平神護元年の墨痕今に傳はれるもの珍重すべし

(七)如來出現品抄　長泉律院に如來出現品抄の古寫

本あり卷首に「如來出現品抄十九上淨辨」また「大方廣佛華嚴經隨疏演義鈔卷第十九上」清涼山大華嚴寺沙門澄觀述」と見え跋に「嘉祿三年四月一日於ニ石水院御前一讀ニ始之一同六月六日讀レ之了」「安貞二年八月十八日午時終許於ニ高山寺草菴一點レ之」「同年九月十八日未時許於ニ栂尾住菴一以ニ石水院淨辨御本一校了」貞永元年七月九日自ニ禪師御房一給レ之淨照」とあり

(八)諸侯の年號を書す　因宜堂法帖丑集に載たる漢五鳳石刻に五鳳二年魯卅四年と見ゆ跋に石曰ニ五鳳二年一者宣帝號也曰ニ魯三十四年一者餘孫魯孝王時也先書ニ天子大一統之年一次書ニ諸侯封國之年一此漢人之例也といへり

(九)印章は白字を右とす并鈕　清人張應が清秘藏上卷晉漢印章條に印章以ニ小篆白文一爲レ古其或朱文及大篆鐘鼎篆者皆變體也鈕以レ龜爲レ正螭與ニ辟邪駝一次レ之其或以レ鳧以レ虎以レ兎以レ馬以レ豕以レ鹿以レ羊以レ魚以ニ狻猊一以ニ異獸一以レ錢以レ亭者皆變體也と見ゆ同文通考に印章の事をいへり考べし

(十)繪馬　神社に繪馬を奉ることは法華驗記下卷四十第三冊七元亨釋書卷九七神社考下六十一丁舊本今昔物語十三丁南嶺遺稿一の卷和訓栞惠の部神社啓蒙或問梅窓筆記四語下本朝文粹十三朝野群載二の卷太平記廿九阿保秋山河原軍の條宣胤卿記永正十七年十一月九日の條運步色葉集四の卷衝部軍器考十二の卷鞍の條同集古圖說などに見ゆまた南郭遺契に唐ノ鄭還古博異志云王昌齡馬當山謁レ廟乃命レ使賚ニ酒脯紙馬一獻ニ于大王一丹鉛錄云吳泰伯祠在ニ閶門之東一每ニ春秋一市人相率牲醴多善馬絲輿美女以獻レ之云云演書神馬ヲ木偶馬ニスルコト史記東寺文書抄九の十九丁オ木像馬云々。板立馬トモ松の落葉四ノ四丁オ同五丁オ

(十一)中風の妙藥　中氣は醫療の難とする病にて天刑ともいひつべしこれに一の奇藥あり榎(シュロ)櫚の若葉を黑燒にして即時に用れば忽に平愈して再興ることなし若葉なければ古葉にてもよし用時遲きものは功なし常に貯持て人を救べしこれ仁術也

(十二)武藏多摩郡矢部八幡宮の棟札　武藏國多摩郡小山田領下矢部村に八幡宮あり別當は修驗山伏の大先達覺圓坊とて隣村木曾村にありその宮の棟札は天文年中の物也といへりそれに近邊の人々の姓名をしるしたるをこゝにあぐ

朱書
三澤五右衞門　木曾村ニ三澤五右衞門ト云者アリ
石川藏人　其祖歟トイヘリ
同
木曾村ニ石川團助ト云者アリ

井上惣兵衛　同　木曾村ニ井上氏アリ
高梨子　同　同上
三澤　同　同上
井上　同　同上
石川兵庫　同　同上
飯田權兵衛　同　木曾村ニ飯田五兵衛ト云者アリ
朝野間縫右衛門
秋元隼上　朱書　隼上ハ隼人ノ誤歟
小野路村中
眞光寺村中
大澤玄蕃　朱書　木曾境川ト云處に大澤氏アリ
五十根次郎右衛門
武藤佐次右衛門　朱書　原町田ニ武藤氏アリ
三橋
新野
松
神倉
石川小八
酒崎圓心
長左衛門

勘左衛門
磬崎彦左衛門　朱書　磬ノ字未詳
河合
守屋左近　朱書　根岸村ニ守屋氏アリ
中里喜三郎
次左衛門
小池三次郎
河井又八郎
河井宮内
天野喜左衛門
川本吉左衛門　朱書　木曾村ニ川本氏アル歟
澁谷三十　同　森村ニ澁谷氏アリ
同
若林但馬　朱書　下小山田村ニ若林氏アリ
小山内記　同　上小山田村ニ小山氏アリ
薄井主馬　同　下小山田村ニ薄井氏アリ
田中万太郎　同　上小山田村ニ田中氏アリ

右の棟札を天文比ならんといふは下小山田村に薄井三左衛門とて舊家あり薄井主馬が子孫にて主馬が子に與右衛門とてあり主馬及與右衛門が墓今存す主馬は天文中の人なるよし三左衛門いへり右の朱字も三左衛門が談を書入し也

（十三）小山田領の永高　武州多摩郡小山田村は小山田氏が舊領にしてその城蹟今は下小山田村の禪宗大泉寺の境内の山にあり鎌倉大草紙に小山田が城と有もこゝ也さて小山田氏が所領の村々を今も小山田領といふ下小山田村の舊家薄井三左衛門が家に小山田領永分といへる書付あり古色にして二百年前の物と見ゆ其文云

小山田領永分

九拾六貫六百三拾貳文　成瀨村
九貫五百廿壹文　小川村
拾三貫七百六拾五文　高坂村
貳拾三貫四百四拾五文　森　村
四拾五貫五百七拾文　木曾村
五拾壹貫貳百八拾三文　山崎村
拾貳貫六百四拾七文　町田村
貳拾九貫八百九拾三文　熊ヶ谷村
拾壹貫七百九文　眞光寺村
貳拾八貫四百拾三文　黒川村
拾六貫貳百七拾貳文　鶴間村
拾七貫六百文　金森村
拾四貫七拾貳文　大谷村
廿六貫貳百九拾文　金井村
七貫六百九拾文　廣袴村
拾四貫六百八拾六文　大カ木倉村
〃四百拾五貫八百八文

按にこは北條分限帳の書抜也木倉は今は金井村の内の小名になれり又は大倉の誤成べし上小山田村田中宗右衛門といへる舊家に慶長三年の水帳ありみな永錢の定にて石高にはあらずそは上小山田下小山田と別れざる以前也

（十四）一向宗の御白藥　紀州法然寺圓成上人ハ十八歳ニシテ出家ス則一向宗ノ人也其母初嫁シテ圓成ヲ生再緣シテ一向徒ノ妻トナル其寺先ニ一子アリ此以圓成淨土宗トナル其母語云我宗ニ御白ト云フアリ何ヲ以テ作ル事ヲ知ラズ或云白犬ヲ養ヒ其犬ヲ全ク地中ニ埋ミ首ノミヲ出シテ種々ノ珍味ヲツラヌ其首ノ前ニ置ク白犬此ヲ喰ント食物ヲ念ジテ氣單ニ逼ルニ及ビテ犬ノ首ヲ切テ是ヲ燒灰トナス此灰ヲ人ニ與ル

時其人大信ヲ起シテ單ニ身命ヲ願ズ財寶ヲナゲウツト云如レ此邪教ヲナス汝此宗ニ居ルベカラズト終ニ鎭西ニ投ジテ出家シ淨土奮迅鈔ヲ作リ敎行信證ヲ破斥スト云々兩本願寺東都參向ノ時分道俗均ク御杯頂戴ト云コト有リ御盃頂戴ノコトニアラズ御灰頂戴ノヨシ各土器一枚ヲ得テ歡喜ス此灰ハ親鸞聖人ノ遺灰ニシテ此灰ヲ服スル時此身則親鸞聖人ナリト傳受ス一說ニ此事ヲ御白ト云ト云々運頗上人及當麻奧院幡海上人（始住二條清光寺一爲二役者一）ハ兄弟也其父ノ家ハ一向門徒ノ豪富也曾テ門跡歷代死相ノ不善ヲ聞テ二子ヲ淨家ニ投ジテ出家セシム兩門跡歷代將レ死時七顚八倒其相不レ可レ忍見一此時ハ籠中連枝トイヘドモ其傍ニ入レズ家老ノ下妻氏ナド云フ如キ譜代昵近ノ者ノミ介抱ス死了テ沐浴シ灰ノ如キ物ヲ死骸ニ散ズ其時惡相忽變ジテ無上殊勝ノ好相トナルサテ諸人ニ拜セシムルコト恒例三日ナリ愚人此相ヲ見テ渴仰シ讃歎歡喜スト云々御白ノコト西國中國邊ノ人ハ時々云出スコトアレド關東ニテハアマリ沙汰セヌコトヽ也秀覺（上野高崎善念寺僧）知己ニ深川某寺ノ上人モト一向宗也兒ノ時御白ノ事ヲ聞知リ御白ト白犬ノ灰也ト云テ母ニ叱ラレシト語キ此上人モ中國

産也云々鵜木村光明寺ノ靈祐法師ハ雲州人也其師故鄕ニ至テ考妣ヲ追福ス其寺一向徒也即彼寺ニ入茶一碗ヲ服ス香烟不レ常快服畢而歸扨其寺ノ玄關破壞ヲ見テ頻ニ信心オコリ金五十兩ヲ出シテ修復ノ用途ニ宛ツ師ノ性質甚慳悋ナリシカドモ頻ニ寄進ノ心生ジテ彼一向寺ヘ財施スルコヲ厭ハズ五年許ヲ經テ後頓悟シ曩ニ茶一碗ヲ服セシハ例ノ御白ナリケンユエニカヽル臆念モ起ルニコソト懺悔シ七日別時シテ後遂ニ本念ニ復スト云々右ノ說ハ高崎善念寺ノ僧秀覺ガ筆記ヲ上州白井源室寺ニテ僧ノ亮蓮ガ寫セシ也其書名ヲ拔萃撮要ト云一卷アリ（頭書）明ノ錢希言ガ幡園七の卷影響部欽氏子殺狗報の條に蘇州欽氏子不レ載二其名一少漁二于色一（警得二編藥方一其法取二雌雄兩狗突時一用二利刀一斷二其陰一出以治レ藥藥成乍試御レ女中夜得レ病作二狗嗥一立二周旋王所一傳說云々）

（十五）糯米　和名抄十六麴蘗類都に唐韻云糯燒レ稻爲レ米也和名夜木古女云々契沖が釋義に糯米燒レ米云云東雅十二に糯米ヤキゴメ倭名抄に唐韻を引て糯ハヤキゴメ燒レ稻爲レ米也と注す即今ヤキゴメといふもの也民間にして麥をもて糯米のごとくせし物をアヲザシといふ義不レ詳云々空穗國讓中二（七十六丁ウ）に左大殿よりよいみち瓜やいごめなまみるみづぶくきなど

奉れ給へり云々又（七十七丁オ）やいごめは大がみにこそはなむさてもやまとのには見え侍らずなん云々蜻蛉日記下にあをいねからせて馬にかひやいごめせさせなどするわざにおり立てあり云々又かごのわさ田もいまにかりあつめずたまさかなるあま間にはやいごめばかりぞわづかにしたる云々權中納言定賴卿集物名にやいごめ「あなうやいこめてそたゝにやみなましかくつらからんものとしりせは」舊本今昔物語廿二第七語に糯ヲシテ小大根鮑干鳥ナドヲ持參タル也ケリ云々類聚名義抄法下卷米部に糯「ヤイゴメ」「ヒメ」云々字鏡集米部に糯「ヒメ」「ヤイゴメ」云々色葉字類抄也部に糯米ヤキコメ燒レ稻爲レ米也新粳燒春得レ米也燒米同俗用レ之云々撮壤集下食物部に糯米ヤキコメ燒米同云々雜字記四米部に糯「ヤイコメ」「ヒメ」云々節用集也部に糯米ヤキコメ燒米同云々新撰類聚往來上に糕ヤキコメ云々此外落くぼ物語一ノ上（十一丁ウ廿六丁オ）吾妻鏡十八の卷三丁（カ）東海談十二倭漢三才圖會百五の卷倭訓栞也の部などにも見えたれば考べし（頭書）犬筑波雜おく歟なかみてはらをたてけりやきごめにすべきかたきみ打そんじ

松屋筆記卷之四十

東都　源與清文儒稿

（一）行德といふ地名　下總國葛飾郡に本行德（ホンギヤウトク）村ありてそこに德願寺といへる淨土宗の寺有行德といふ名は行德の僧の住ける所なれば俗にしかいひしなるを後には村名となりて行德村とはよぶなるべし本行德といふは行德の本村といふ義と聞ゆ

（二）馬入といふ地名　相摸國に馬入村馬入河などいふ名あり馬入はもと埴生（ハニフ）なりけんを後に馬入の音をかりて書るなるべし淸ていふべきを東語に濁ていひさて馬入とも書けることゝ見ゆ

（三）神應經　明の陳會が神應經一卷針治の書也成化十年十一月二十一日韓繼禧が序に適有二日本釋良心一以二神應經一來獻兼傳〻其本國ノ神醫和介氏丹波氏治二癰疽一八穴法と其八穴難レ未二試用一神應經其傳授遠有レ所レ自而所レ論折量補瀉法皆古賢所レ未レ發者其取レ穴又多有レ起二發古人所一レ未レ盡處一其所レ著穴皆撮二其切要一而得レ効多者文簡而事周令二人披閱一ノ晷（キウ）刻ノ間證

與レ穴瞭然在レ目聖上嘉歎命以二八穴法一付二於神應經之末一鋟レ梓廣布且以永二其傳一焉云々八穴灸法の條に成化九年癸巳孟冬日本國畠山殿所二使副一官人信州隱士良心言我國二百年前有二兩名醫一一爲二和介一一爲二丹波氏一此二醫專治二癰疽疔癤瘰癧等瘡一定二八處灸法一甚有二神効一云々此次に八處灸法の事梓桑君鍼道傳宗圖あり共に神應經の卷首に附す正保二年五月吉日二條鶴屋町四原仁左衞門開板せり

(四)唐竹枯　類聚大補任下建長四年の條に資治ノ比ヨリ唐竹枯始天　建長年中諸國竹皆枯失畢適相殘分九牛一毛云々按に唐竹は今のハチクをいふいはゆるくれ竹也

(五)大黑祭大黑講　半陶稿四ノ三丁ウ同五丁ウ翰林五鳳集五十七　大黑天神祭を今は必甲子の日とおもひたれど宣胤卿記には子の日の夜ごとに大黑天神供としるされて甲子に限ることにあらず　頭書分韶梅溪集。義楚六帖十六ノ卅五丁ウ谷響集四ノ七丁ウ守武千句四十三丁ウ俗說辨三ノ九段壺藥波四ノ十九丁オ大黑祭の式は日蓮書の錄外七ノ卅七丁オ同錄內卅七ノ廿九丁ウ錄外七ノ卅七丁オ同廿一ノ卅九丁ウにくはし大黑講の事東寺文書抄八ノ十九丁オに見ゆ梨窓二筆　半陶稿四ノ三丁ウ翰林五鳳集五十七

(六)白波　山槐記治承三年二月八日の條に東宮使未剋故飯洛近衞使過二奈良坂邊一之時白波着二他方一飯洛仍祭之時不レ候云々按に白波の事古今伊物の歌におきつしら浪たつ田山とよみ海道の記にも白波綠林と書たり後漢書に故事有　頭書寶石類書九

(七)行幸の時諸社修造　同十一日の條に行幸之時諸社修造爲二恒例一云々

(八)太平御覽　同十三日の條に淸盛入道摺本の太平御覽を內裏に献せらるゝよし見ゆ此書未レ被レ渡二本朝一也云々十二月十四日廿日の條にも有

(九)市餅井粉物　同廿二日の條に東宮御百日(モヽガ)によりて市餅を買こと見ゆまた粉物置二御前一ともありまた得レ餅之日は御湯殿なきよしいへり

(十)百塔禮　同廿三日の條に卯刻爲レ禮二百塔一向二廣隆寺方一云々　四十九の重尼に依て諸處の塔を巡禮せしよしくはしく見ゆ治承四年三月廿一日の條にも有

(十一)茶染　同書治承三年三月三日の條に茶染一斤染立烏帽子とあり今の茶染も同事にや

(十二)靑仁井郎等郎從　同日の條に隨身靑仁看督長白張白衣火長如レ恒小舍人童白張白衣調度懸靑仁舍人靑仁郎等五人相具又郎從十人相從云々按に靑仁は靑丹の借字也日陰蘘に解あり郎等は近侍の差郎從は外様の隨身なるよしこゝの文にて知べし　頭書鈴木忠侯語八十八段(三の卷四丁ウ)に老蘗若蘗といふ名目は往昔(紀淸兩蘗のたぐひ也)の者の中に然るべきものを老蘗といひ其次を若蘗といふは此餘風成べし云々

(十三)蛭喰　同書治承三年十月廿九日の條に典藥頭定成來喰蛭云々同十一月廿二日の條に典藥頭定成朝臣來喰蛭餘勢猶不□之故也按に拾芥抄に蛭喰の事あり籠中抄にはひるかひと書けり蛭に膿物の血を吸はしむるわざ也

(十四)小佛師　同日の小佛師ノ人々とあり大佛師にむかへたる名也

(十五)後家　同書治承三年十一月四日の條に故前左衞門督公光卿後家高倉三條群盜入云々按に愚管抄にも賴朝が後家と見ゆ其外古書所見おほし　頭書大筑波雜自練抄五ノ卅五丁ウ貞永式目九丁オ

(十六)小持佛堂　同月廿六日の條に小持佛堂とあり持佛堂は所見おほかり　頭書持佛堂ノ事ハ釋書廿一ノ十五丁ウ五丁ウ太平記十六ノ三丁オ此外多し

(十七)風爐　同月廿八日の條に於二出居一風爐被レ燒云々

(十八)藤氏長者の朱器臺盤　同月の條に藤氏長者の朱器臺盤目錄等の事くはしく見ゆ

(十九)棄髮(カミステ)　同書治承三年十二月の條に九日今日東宮二歲令レ棄二御髮一給云々　正月棄レ髮有レ憚仍今月所レ被レ行也

(廿)魚味　同十一日の條に東宮御著袴御魚味の事あり魚味は魚の喰初也十四日の條にも見ゆ

(廿一)散米　同書治承四年二月一日の條に撫物の人形及散米の事あり　頭書大殿祭祝詞注二以レ米散二屋中一之願也云云紫日記產屋に米を散事今昔物語廿七ノ卅打マキ米ノコト見ユ

(廿二)辛綿隨身　同日の條に辛綿隨身二人折半臂下重面白裏靑此事有二兩說一歟常儀無面靑練張也云々

(廿三)五十日の餅百日の餅　同十一日の條に五十日の餅百日の餅事見ゆ

(廿四)門を立る禁忌日の事　同十五日の條に禁忌日被レ立レ門例を擧たり

(廿五)耳金井栗形　同十八日の條に殿上幕懸料耳金不足百五十懸殿上鈴綱料栗形三ッ可レ令二作設一之由仰レ廳云々

(廿六)立沙井盛沙　いにしへ立沙(タテヾナ)といへるは今の盛沙の事也宣胤卿記に立沙の名見え伊勢家諸禮式にた

てすな二ッの間をばむさと通らぬもの也兩方のわきよりとほるべしとも見ゆ

（廿七）諸輪差（モロワサシ）に結井（ムスブ）錢をあしと云　山槐記治承四年二月十八日の條に裳布施之脚以二細紙一天諸輪差一結レ之云々按に雅亮裝束抄に片かぎもろかぎなどの結樣あり錢を脚と書たりまた用脚など書たるも古書に所見おほし

（廿八）口は禍の門　實語教に口是禍之門とあり家語に多言多敗多事多患と見え言行錄富弼傳に晁氏客語劉器之云富鄭公年八十書二坐屏一云守レ口如レ瓶防レ意如レ城とも有路史後紀五頭書家語觀周に口是何傷禍之門也強梁者不レ得二其死一好勝者必遇二其敵一盜憎主人民怨二其上一辯意長者子所問經に人心是毒根口是禍之門心念而口言身受二其罪殃一云々

（廿九）打　歐陽永叔が歸田錄二に今世俗言語之訛而舉レ世君子小人皆同二其繆一者惟打字爾打丁雅反其義本謂二考擊一故人相毆以レ物相擊皆謂二之打一而工造二金銀器一亦謂二之打一可矣蓋有二槌檛一作擊レ之義一也至下於造二舟車一者上曰二打レ船打下車網レ魚曰二打魚一汲レ水曰二打水一役夫餉レ飯曰二打飯一共士給二衣糧一曰二打衣糧一作二打衣打囊一從者執レ傘曰二打傘一以糊黏レ紙曰二打黏一以丈尺量レ地曰二打量一擧レ手試レ眼之昏明一曰二打試一至二於名儒碩學一語皆如レ此觸レ事皆謂二之打一而徧撿二字書一了無二此字一丁雅反者其義主二考擊一之打自音譌疑當レ作耿以二字學一言レ之打字從レ手從レ丁丁又擊レ物之聲故音譌耿爲レ是不レ知因レ何轉爲二丁雅一也云々此文山崎敬義が文會筆錄十八の卷に引たり鍛冶刀を打工人舟を打車を打漁者網を打などはこゝにもいふ詞也又馬のくつを打菓子の落雁などを打馬の鞍を打などもいへり

（卅）交代　大小名の交代といふ交代の字は漢書蓋寬饒が傳に出たり困學紀聞十九に見ゆ

（卅一）多謝　多謝の字は漢書趙廣漢が傳に出たるよしこれも困學紀聞十九にいへり

（卅二）丁寧什物布施比按　丁寧の字は詩采薇篇の鄭箋什物は後漢書宣秉傳布施は周語比按齊語に出たる詞也

（卅三）當日地主料理消息　當日は晉語困學紀聞十九史記孝武本紀地主は左傳國語越語止觀科解一ノ一ノ十三丁ウ料理は晉書王徽之が傳消息は魏少帝紀に見ゆ

（卅四）功夫普譜手下　功夫は魏王肅傳普請は吳呂蒙傳手下は大史慈傳呂範傳

（卅五）本色古老商量不宣備　本色は唐劉仁恭傳古老

碩學一語皆如レ此觸レ事皆謂二之打一而徧撿二字書一了無二此字一丁雅反者其義主二考擊一之打自音譌疑當レ作耿以二字學一言レ之打字從レ手從レ丁丁又擊レ物之聲故音譌耿爲レ是不レ知因レ何轉爲二丁雅一也云々此文山崎敬義が文會筆錄十八の卷に引たり鍛冶刀を打工人舟を打車を打漁者網を打などはこゝにもいふ詞也又馬のくつを打菓子の落雁などを打馬の鞍を打などもいへり

（卅）交代　大小名の交代といふ交代の字は漢書蓋寬饒が傳に出たり困學紀聞十九に見ゆ

（卅一）多謝　多謝の字は漢書趙廣漢が傳に出たるよしこれも困學紀聞十九にいへり

（卅二）丁寧什物布施比按　丁寧の字は詩采薇篇の鄭箋什物は後漢書宣秉傳布施は周語比按齊語に出たる詞也

（卅三）當日地主料理消息　當日は晉語困學紀聞十九史記孝武本紀地主は左傳國語越語止觀科解一ノ一ノ十三丁ウ料理は晉書王徽之が傳消息は魏少帝紀に見ゆ

（卅四）功夫普譜手下　功夫は魏王肅傳普請は吳呂蒙傳手下は大史慈傳呂範傳

（卅五）本色古老商量不宣備　本色は唐劉仁恭傳古老は書經無逸注商量は易商兌注不レ能二宣備一は楊德祖答臨溜侯書

（卅六）私名不審爾來見在　私名は列子國語周語不審は史記李斯傳卷四韓詩外傳爾來は孔明出師表見在は桑人注

（卅七）老境先輩如今居士道人　老境は曲禮正義先輩は詩采薇箋如今は詩杕杜ノ箋居士は玉藻道人は漢京傳頭書韓非子外儲說に齊有二居士一田仲者一宋人風毅見レ之

（卅八）某甲道士主人公我輩人　某甲は周禮職內注道士は新序主人公は史記范雎傳我輩人は晉石苞傳

（卅九）十八九若干物色本師祖師　漢書丙吉傳に至レ今十八九矣云々若干は禮記曲禮投壺物色は淮南子本師は史記樂毅傳祖師は漢外戚丁姬傳

（四十）發遣本貫十字街見錢　發遣は後漢陳寔傳本貫は晉江統傳十字街は北史李庶傳見錢は漢書王嘉傳に見ゆ見錢は今の現金におなじ已上はみな文會筆錄に困學紀聞を所レ引也

（四十一）福祿壽　壽星の事文會筆錄廿の卷六十三丁ウに諸書を引てくはしくいひたり老人星といふもおなじ頭書橘窗茶話云琉球僧云我國每代必生二一異人一身首相半稱曰二福祿壽一以爲二國瑞一產二於民間一取而養二于宮中一雖レ在二紛華之中一少不レ動レ心晉卜百家書無レ不レ通今所レ稱二福祿壽一者名曰二壽水正一百餘歲矣有二童顏一云々釋支曇籥仙集稿下卷福祿壽星讀云天降二南極星一巨宋現二其形一渠道一浪叟事一松樓千歲巻大宋國陳摶傳此老出自二邠方一奏レ之帝召上レ床賜以レ酒累二十觴一未レ到レ醉何得レ狂詔繪像幅而張貢焉百執尤長福與祿全無量其壽算誰敢當幾回見海變二桑田一太空冥々福祿壽星下降巨宋國土安寧云々又云大檀越乙巳本命元辰當年福祿壽星云北條五代記九ノ十四丁オ

（四十二）德政幷土倉　皇年代略記後花園院條首書に嘉吉元九月土民蜂起號二德政一破二却洛中土倉等一云々享德三ノ九ノ八京中土民又號二德政一蜂起云々長祿元十一土民又蜂起號二德政一云々後土御門院條首書に文明十二ノ九中旬土民蜂起破二京中土倉一奪二返質物一併如二先年三箇度一云々同十七ノ八中旬土民蜂起號二德政一奪二返質物一同十八年九ノ十三東寺燒亡土民又號二德政一所爲也云々延德元三月廿二日北野社炎上惡黨號二德政一閉籠所爲也云々按に重編應仁記三ノ四室町殿日記などにも見ゆ頭書宣胤卿記文明十二ノ九ノ十五ノ條云一條前黃門來談入レ夜上邊土一撰物忩無二極一條高倉邊放火酒屋土藏懸二兵粮一伏見殿右府許等懸二取酒肴折一云々希代事也云々十一日ノ條二モ先日爲二德政一土一揆出張之間追却之處今朝又蜂起云々建武式目追加廿五丁オ卅九丁オ四十丁オ四十二丁ウ四十五丁オウ○眞永式目（額從本三丁オ）東寺文書抄十の卷十二丁ウに延慶二年沽二却私領地一文に土倉壹宇土門云々無住雜談三ノ十六丁オ強盜寺二入テ土藏打破テ云々元德二年日吉山行幸記（五十六丁オウ）に宋高僧傳廿二（十五丁ウ小）土屋アリ土屋ハヌリヤニヤ

（四十三）八丈富士　同書後陽成院條の首書に慶長十年十月十五南海八丈島邊一夜大山湧出在レ今云々

（四十四）およる　貴人の寢たまふをおよるといふは

晝のさまを改て夜のさまにならせ給ふよし也中務内侍日記四丁に御よるの後もとみにねられず云々又四丁御よるののち春の宮御方土御門の少將ばかり御ともにて院の御方さまにしのびて御らんせらるゝ云々又九丁いまだ御所は御よるのほどにすべりて云々又廿七丁三月八日はちもくなれば曉ちかく御よるなれとそうしよをもちあぐるまでねず云々これらのつかひさまにてその語意をしるべし

(四十五)田むき　田むきは京邊の名所にてもと田に打むかひたる所なれば名となれりいづこにても田の面打見やらるゝ所は田向といふべし中務内侍日記十六丁に田むきの月御らんせらるゝに云々山城名勝志七の栗野上の次に出せり

(四十六)朝所　朝所をアイタン所とよむを故實とのみおもふべからず中務内侍日記にあした所と書たり

(四十七)稻實公井標山　貞觀規式西宮記北山抄江次第などものに大嘗會の時に稻實公あり中務内侍日記に大じやうゑのいなのみのおきないんこや女とかやいろ〳〵のものゝしやうぞくの衣云々又いなのみのおきなとてびん白く髮は帶のもとまで長くて年も百とせにもやと見ゆるにそくたいせさすこれを見て心の中に「いなのみのおきなさひたるひんしろし君か千年もかねてしられて」と見ゆ又標山もヒヲノヤマとよむべし同日記にひをの山ひくひしめくしやうぞくどもしてわたしつれば云々とあり

(四十八)廻立殿　中務内侍日記に廻立殿をくわいりふ殿と書たりメグリ立殿とはいはぬなるべし

(四十九)樣　樣といふは方の義にて公方樣といふも公方の方といふよし也中務内侍日記五十八丁に内裏さまへもまゐらずとありされど後世に樣といふはもと同語ながら少しけぢめ有よく〳〵心得て用べし

(五十)入道　はまり道にもいふ　法體せし人を入道といふは常なれどまはり道より道などの事をも入道といへり中務内侍日記五十九丁にことはてぬればなし原へかへりぬついでにちとにふだうなどして京へまゐりつきぬと有

松屋筆記卷之四十九

三緣山倭學士源與清稿

(一)祝髮　唐書二百廿二南蠻傳下十丁の下卷　婆賄伽盧國の條に民七歲祝髮止レ寺至ニ二十一有レ不レ達ニ其法一復爲レ民云々祝髮の字本朝の古書におほく見ゆ

(二)左衽　また廿一丁ウ　昆明蠻の條に人辮首左衽與ニ突厥一同云々とあり倭漢も太古は左衽也右衽にせしは漢土の聖人の私也西洋阿蘭人など今も左衽にて天地自然の性也佛の律衣また左衽也頭書續日本紀八の卷七丁ウ元正天皇養老三年二月壬戌初令ニ天下百姓右レ襟職事主典已上把レ笏其五位已上牙笏散位亦聽レ把レ笏六位已下木笏政事要略六十七の卷男女衣服の條にも續日本紀及論語を引ていへり釋狂人廿七丁に土偶人石人ナド古キハ皆左衽ナルヲ續日本紀ノ文ト合セ思フニ是ヨリ前ハ庶人ハ皆左衽ナリシコトト疑ナシソモ〳〵衣服令ハ推古天皇ノ御世ニ百姓ノ服制モ有シニ今此御世マデ左衽ヲ改玉ハザリシハ故アルベシ左衽ハ皇祖大神ノ定オキ玉ヘル制ニテ可レ然故アルベシ云々撮壁裝束抄九丁オ政事要略六十七ノ三丁ウ

(三)蔗葉の達磨　蔗葉の達磨とて達磨蔗葉に乘りて漢土に渡來しよしをつたへ書にもさる□□を書くはうけがたし唐書二百廿四の下　叛臣傳一丁オ　李忠臣が條に至德二載節度使王玄志使レ秦率ニ兵三千一自ニ雍奴一捋レ葦絕レ海擊ニ賊將石帝廷烏承洽一云々とありこの葦は今琉球葦とて花生などに用るものゝ類なるべし達磨もさる大葦の大竹の如きを捋に用る國を經て來しより葦の葉に乘れるよしを傳會して奇妙□□示せし也秦とは李忠臣がもとの名を董秦といひたれば也

(四)耳の大小　唐書二百廿四下卷　叛臣傳三丁ウ　李忠臣傳に忠臣聽直不レ通レ書帝嘗謂卿耳大眞貴兆對曰臣聞驢耳大龍耳小帝喜ニ其野而誠一云々と見ゆ

(五)察子　幷俊坊同朋　唐書二百廿四丁卷　叛臣傳高駢が條十丁ウに用之既自任ニ淫刑一重レ賦人々思レ亂乃擢ニ廢吏百餘一號ニ察子一厚ニ稟食一令レ居ニ衢閭間一凡民私閱隱語莫レ不レ知道路箝レ口誅ニ所レ惡者數百族一云々按に用之は高駢が臣にてもと商僧呂用之といへるもの也晩唐に高駢國柄を采て呂用之を用ひ亂に及びし也用之が察子は六波羅の禿室町の俊坊の類也また俊坊と同朋とひとつことゝするは誤也同朋は禪家の力者の名也頭書獵尻四十四に同朋は義滿將軍時衆の僧を以て召仕はれ大紋の直垂に白袴を着け云々與清曰今京都丸山は時衆の僧にて肉食妻帶し料理茶屋を家業とすこれ同朋によしある歟

(六)字音を用の詞にとりなせし例　字音の詞をやがて用にとりなせるは裝束を「さうぞき」猿樂を「さるがひ」などいふ類おほかり又動かぬ體語を活かし聖

を「ひじる」「たふさぎ」を「たふさぎて」などおほし

(七)「は」と「わ」とかよふいひかけの歌　蜻蛉日記にはらからのみちのくにの守にて下るを長雨しける比その下る日はれたりければかのくにゝかはくといふ神あり「わかくにの神のまもりやそへりけんかわくけあかり天津空かな」返し「今そしるかはくときけは君かため天てる神の名にこそありけれ」此外「はしる」「わしる」「はつか」「わつか」など通ひしいとおほかり此歌も通音をいひかけし也

(八)川竹のうき身　倡妓などをたとへてうき川竹の身といふ出處たしかならず春雨抄三下に川竹うき草也夫木「うきふしに沈もやらて川竹の世に□□□なき名をや流さん」と有此歌夫木抄にはなし可レ考

(九)蛇の蝦蟇を食ふ因緣　法苑珠林九三丁　阿修羅部衣食の條に正法念經を引て龍王雖レ食二百味一末後一口要當變作二蝦蟇一云々と見ゆこれ蛇の蝦蟇を好て食ふ因緣也

(十)姓氏望族　明の吳興の凌迪知字稚哲が古今萬姓統譜の凡例に姓有レ望有レ音有レ氏曰レ望者如二河間渤海等郡名一是也曰レ音者宮商角徵羽是也曰レ氏者如二以レ國以レ邑以レ宮爲レ氏等類一是也云々　○又云姓之有レ氏如二水之有一源歷代世譜云五帝之相承三王之繼禪無レ非レ出二於黃帝之後一故有レ姓必有レ氏今常姓亦有二無レ氏者一云々○又云姓之有レ望以二其著一名於郡一故曰レ望本源則同而支派各異如二劉則二十五望王則二十一望餘或五望四望二三望者一然惟取二其顯者一書レ之間亦有二無レ望者一悉從二舊籍一不二敢妄加一增損一云々萬姓統譜百五十卷歷代帝王姓系統譜六卷氏族博考十四卷共に凌迪知が撰也皇朝にて翻刻せり望族姓氏の事氏族博考にくはしく見ゆ　雜書　池北偶談廿二の卷族望の條に唐人好稱二族望一如二王則太原鄭則滎陽李則隴西贊皇杜則京兆梁則安定張則河東清河崔則博陵之類一雖二傳誌之文一亦然迄レ今考レ之竟不レ知レ爲二何郡縣人一殊可レ恨宋人罷レ官者多居二近畿一不レ歸二其鄉一死即葬焉子孫亦遂占籍如二鉅野晁氏東萊呂氏華陽范氏梓州蘇氏一(易簡)代居二京師一又如二歐陽居潁一而葬二新鄭一蘇公居二許而葬一郟後世過二廬陵眉州一者豈復可レ尋二其彷彿一耶此二者至明乃無レ之云々

(十一)番椒　廣群芳譜卷十三蔬譜一に草花譜番椒叢生白花子儼似二禿筆頭一味辣色紅甚可レ觀二子種一云々また食物本草の注に見ゆ一品堂藥選卷懷食鏡を考べし

(十二)八月韭ニハ佛モ開レ口　井韮變レ莧　廣群芳譜卷十三蔬譜一韭の條十四丁ウに張來詩注俗言八月韭ニハ佛モ開レ口爾雅異物久必變故老韭爲レ莧云々按に江南の橘江北に移せば枳と變著預の鰻鱺と變類にて老韭も莧に變なるべし

(十三)麝香草　馬兜鈴苗を俗に麝香草といへり村家方に前胡を射香草といへり廣群芳譜卷十三蔬譜一蒜の條に清異錄蒜五代宮中呼二麝香草一とも見ゆ

(十四)嘉禾　今玆文政九年諸國大豐熟にて信濃國に一莖二穗の稻を出し陸奥國に一穗千粒の稻を出せりといへり廣群芳譜卷九穀譜三嘉禾の條に按詩注黍稷稻粱皆名爲レ禾麻與二菽麥一則無レ禾云々瑞應圖嘉禾五穀之長盛德之精也云々多くその例を擧たれば閱て知べし延喜式をも考べし

(十五)尊容鈔　尊容鈔十卷あり亦圖像鈔とも十卷鈔ともいふ勝定房惠什の作とも平等房永嚴ともいふ章疏錄には惠什の下に載す證談鈔云勝定房十卷鈔一向二圖像一也但此圖像作者平等房永嚴也其故可レ書二進諸尊圖像一之由自二白河院一有二勅命一爰平等房誂二甥勝定房惠什阿闍梨一撰出レ功了而爲二平等房作一及二進覽一故知二實義一者惠什作也□□上進云二平等房作一歟云々と見ゆ平等房諱永嚴澤方六流中保壽院元祖也成就院寬助大僧正付法也此尊容鈔原本は御室の寶庫にあり第一の卷は諸佛上卷也金剛界五佛胎藏界五佛の圖像と傳とを記す第二の卷は諸佛下也一字金輪大佛頂佛眼尊勝佛頂藥師如來善名稱吉祥如來定光佛釋迦如來阿閦佛阿彌陀光明眞言の圖像傳記を載す第三の卷は諸經法也仁王法花壽命六字孔雀請雨寶樓閣菩提場の八法の圖也第四の卷は菩薩上也五大虛空藏五秘密普賢延命八字文殊愛染王金剛王大勝金剛大隨求轉法輪の九尊也第五の卷は菩薩下也彌勒菩薩普賢菩薩五字文殊一髻文殊一字文殊六字文殊持世菩薩延命虛空藏般若菩薩藥王菩薩地藏菩薩龍樹菩薩馬鳴菩薩の十三尊の像也第六の卷は觀音上也正觀音千手馬頭十一面准胝如意輪不空羂索の七尊也第七の卷は觀音下也葉衣白衣多羅千臂大勢至香王青頸阿麼臘の八尊也第八の卷は諸忿怒也不動降三世軍荼利大威德金剛夜叉无能勝大輪步擲烏芻澁摩金剛童子大元明の十一尊也第九の卷は諸天上也歡喜自在天金色聖天雙身聖天多聞天吉祥天大自在天伎藝天女那羅延天鳩魔羅天四天十二天の十一天也第十の卷は諸天下也辨才天摩利支天十五童子訶利帝母氷羯羅天水天妙見北斗炎魔天蠶蜜梨寶藏天女深沙大將正了知大將金翅鳥王大黑天神の

十五尊也いづれもその利益を記し眞言を載彩色の尊像を畫たり無類の珍書といふべし○二の巻大佛頂の圖に輪寶あり如意寶珠あり升龍あり獨鈷あり寶珠は三つあつめたる圖にて火珠あり◎圖略○同巻に尊勝佛頂の條に天蓋上に火珠ありまた輪寶獨鈷火殊の臺などあり○又善名稱吉祥天如來三の寶珠を持たまへり以下略

(十六)檜扇　海人藻芥上十二丁オ　に法服裘袋鈍色ノ時者持ニ檜扇一衣ノ時者不レ持也云々同下五丁ウ　袍并狩襖ノ時ハ兒モ持ニ檜扇一廿三橋也六位ノ扇十五歳以前ノ人ハアヤ杉ノ扇ヲ持也綾杉トハ黒キ椙ノ木ニテ作也云々裝束圖式下十八丁オ　に檜扇ハ二十五枚若年ノ時ハ白糸ニテトヂテ糸ノアマリヲ藤花ヲハヽシテ用ル事也云々又云同丁カ　藤花ヲ糸ニテ兩方ノ面ニ押ス宿德ノ大臣ナド被レ用大方ハ攝家所用也云々唯心院殿裝束抄ニ扇之事白骨ハ常也赤骨ハ官位ニ寄テ用ル也黒骨ハ凶事ノ時持ナリ云云當用裝束抄に當用白竹黒竹ハ凶事赤骨ハ官位ニヨリ用口傳云々束帶ハ笏重ヲ衣冠ハ檜扇衣冠ハ中啓可レ仍ニ時宜一云々中啓ハ末宣胤卿記に檜扇依ニ官數一事上廂廣ノ下也三十枚殿上人二十五枚黒　同内々御一献之時モ可レ持候歟　否事夏冬共用ニ蝙蝠扇一候無ニ子細一候賢問内々儀用ニ檜扇一候束帶之時夏冬用ニ檜扇一候衣冠時用ニ檜扇一候事又勿論云々尺八笛に檜扇之事寸法無レ之されば大小有レ之大抵は一尺計有レ之候かやうの物定法は無レ之候と見え候木檜にて候ゆゑ檜扇と申候女房の祖扇も定寸とては所見なし定無レ之故大小板數多少有レ之其製精粗有レ之上臈上位は精製のうるはしきを用事此一物のみにも不レ限事也祖扇赤き杉板にて候云々明月記嘉祿元年十月十五日天晴巳時陰午後雨間降夕陽晴敷雅少將以ニ使者一尋ニ別當一五節女房扇二枚可ニ調進一由消息何樣物哉或答云扇近代檜扇細面塗ニ雲母一シタニカキカラヒスル書レ繪遠山野之体野筋に五六分計人形金銅蚊目以ニ村緒一若葉勾絲一貫レ之絲末緒垂物也云々類聚名物考裝束部二に今の世には模様のなき素木を檜扇といひて貫緒にもなしこゝに見ゆるさまなるは今は祖扇といふ箔を押し彩色繪を書きつま紅などにしろくとぢ糸のさきを長さ四五尺ばかりいろ〳〵の糸にてすがりのやうにしてたれたるこれをばかざすこと也なにゝよりてあこめ扇といへるにや未レ考明月記に細面とあるもじ明面の誤にてそれをあかめとも訓べき也外にしるしとすべき事未レ見

云々服色圖解に檜扇四位已下廿三橋或ハ廿二橋トヂ糸ノ餘ニテ唐草ヲ置物ニス其長短年齡ニ隨フ關東ニテハ多ク家ノ文ヲ置ルヽナリ十五六歳マデハ杉横目ヲ持ベシ面彩色畫裏蝶鳥五色ノ糸ニテ綴クヽリ花ヲ付ルナリ云々飾抄上に扇公卿宿老之人束帶之時不レ論ニ夏冬一持ニ檜扇一直衣之時猶持レ之年少之公卿或炎天持ニ蝙蝠一冬年少之人横目扇散蓮繪持レ之云々尚委倭漢三才圖會廿六服玩具部に檜扇比阿布岐編ニ檜片ヒアフギ二十五枚一作レ之官家毎用レ之如ニ弱冠一則以ニ白絲一縅レ之其絲餘詰爲ニ藤花形一如ニ束帶時一雖ニ夏月一令レ持レ之云々

(十七)大家名家の差別　唐宋詩醇凡例に唐宋人以レ詩鳴者指不レ勝レ屈其卓然名家者猶不レ減ニ數十人一玆獨取ニ六家一者謂ニ惟此足レ稱ニ大家一也大家與ニ名家一猶ニ大將與ニ名將一其體段正自不レ同云々御選唐宋詩醇四十七巻あり清の乾隆帝の選にて首に乾隆二十五年三月二十二日の江蘇巡撫使陳弘謀が奏狀あり巻端に乾隆十六年五月二十六日奉レ旨開列校刻諸臣職名あり唐の李白一ヨリ八迄　杜甫九ヨリ十八迄　白居易十九ヨリ二十六迄　韓愈廿ヨリ三十一迄　宋の蘇軾廿二ヨリ四十一迄　陸游四十二ヨリ四十七迄　以上六大家の詩を選集して評を加へし書也小本にて合冊卅二冊四帙

とす中に序目二冊あり

(十八)酒名　同書卅九眉山蘇軾詩八　に次ヲ韻王定國得ニ晉卿酒一相留夜飲ニ詩に「短山壓手氣横秋更著仙人紫綺裘使ニ我有ヲ名全是酒從ニ他作一病且忘レ憂詩無ニ定律一君應將醉有ニ眞鄉一我可レ候且倒ニ餘樽一盡ニ今夕一睡蛇已死不レ須レ鉤」と見ゆ使我有名全是酒の句酒家の口實とすべし詩將酒候の字も亦おもしろし頓書酒候論○酒ヲ大乘茶般若湯玄水忘憂三寸ナド云ヿ無住雜談三ノ五丁オウ日工集三ノ廿九丁ウ

(十九)燈花　同巻蘇軾が夜直ニ玉堂一携ニ李之儀端叔詩百餘首一讀至ニ夜半一書ニ其後一詩の句に「愁侵ニ硯滴一初含レ凍喜入燈花欲ニ圖妍一」とあり燈花の瑞の事は居家必用居家必備萬寶全書などにくはしく見ゆ

(廿)「だに」「さへ」　「だに」といふ詞は儒書の訓點に「だも」といひ今俗に「でも」といへりされば「だに」は「でも」の心にて「これでも」「あれでも」などの「でも」にかはることなし又「さへ」と通はし用たるも有

(廿一)九輪釜　九輪釜といふは高師泰が九輪の寶形を鑄直したる釜のよし二條尹房公これを用て茶に呼まねらせし人をきらはれし事本朝語園二の巻に見ゆ本朝語園は十巻あり寶永三年二月刊行して孤山とい

ふものゝ序あり作者未詳此九輪釜は天文雜說といふものを引ていへる說也 頭書橘泰が筆のすさび上十三丁ウに直突の字は漢書に出づ又九輪の塔といふ「く」も曲輪也九は老陽の數なれば墓碑塔婆の類に九の數を用べき道理なし云々

（廿二）唐風を慕て國體を損ず　水府の儒醫森尙謙が儼塾集一の卷に二十四論を載すそは唐不可學八と唐可學八と日本勝唐八とを合せて二十四篇の論文あり後に和唐合論一篇を附す二十四論序に世之學者必本二于唐一所二以求一彼聖人之道一誰敢間然雖レ然偏從二唐風一則損二吾邦體一亦可レ畏矣至レ若レ言二唐法必可レ據多書可レ渓郡縣可レ行食饌可レ效粗見不レ精遂化二外域之俗一自忘二本朝之宜一可二嘆息一焉云々と見ゆすべて二十四論中稱すべき事多かり儼塾集十卷あり二十四論序に元祿十一年戊寅三月戊戌日常陽水戶儼塾森尙謙自叙と見ゆ卷首に寶永三年丙戌六月七十三翁木下元高平之甫書二乎御園之好靑館一といふ序あり奧書に尙謙が俗文にて自板にゐり形見に弟子中におくるよしあり 頭書百練抄七卷十三丁オ久壽元年九月近日所々立二社壇一家々行二漢禮一停止之由宣下云々

（廿三）多書を嫌　二十四論の唐不可學八の第一多書の篇に夫書何爲而作也爲二傳レ道垂レ敎治レ世安レ民也十三經歷史典故及先哲徽言要辭數百部備能事畢矣書多則事煩事煩則支離雜亂失レ宗孔子刪二詩書一正二禮樂一且曰述而不レ作其後レ繁篇レ要可レ觀焉周時簡編不レ夥而聖人取レ約可レ知焉其後變レ簡爲レ繰制レ紙代レ繰後唐明宗之時印板行レ世至レ宋累二數十萬卷一書目猶不レ可二究盡一誰不二爲レ之太息一哉許魯齋貴二朱子之學一猶不レ喜二其語錄多卷一雖レ言二道學一頗厭二煩擾一吁嗟紛々雜書稗官小說非二徒費一楮墨一抑正道之稂莠也其文盛質衰之弊不レ可レ學焉已上全篇と有り按に多書を嫌るは道學者の見識也下の唐可レ學八の第四廣見の篇には博識を稱賛したり

（廿四）長爪の害　同唐不可學八の二長爪篇に唐俗皆長二鬚爪一不レ剪蓋本レ於聖經不二敢毀傷一爲二孝之始一之義ト云々今夫爪者爪者害二于講レ武故陸子靜斷レ爪便二于挽レ弓爲レ邦用レ武可レ謂匪躬之謀矣石晉事二契丹一稱レ臣趙宋尊二女眞一爲レ君千載瀆二靑史一何也以二武不レ足也唐之長二鬚爪一迂二于武術一不レ可レ學焉と見ゆ按に長爪は實に無用にして講武に害あり長鬚は甲冑を帶せん人大に益あり一概にいふべからず

（廿五）郡縣封建の利害　同唐不可學の四郡縣の篇に夫封二建諸侯一唐虞三代之法也罷二封建一爲二郡縣一暴秦之制也云々雨漢繼レ秦罷レ侯置レ守以降古封建之政廢矣致堂胡氏曰夫封二建天下一共二其利一天道之公也郡縣以二天下一奉二一人一人欲之私也至哉言也李唐柳宗元著レ論而非二封建一柳子封建勢也一句後儒以爲二格言一何鹵莽之甚也如二秦漢一論勢可也唐虞三代德化普施傳祚之久爲二後世善治良政之祖一不レ可二以レ勢論一也朱子綱目詳レ載胡氏貴二封建一之說ト可レ觀朱子不レ採二柳之論一且夫封建即維持多レ力若上失レ政一方有レ亂而一方保持如二春秋之時一也郡縣則城都不レ強若上失レ政一方有レ亂則土崩瓦解如二秦二世之時一也我日本今封建久行自然合二于聖政一宜乎致二昇平一也唐郡縣之弊不レ可レ學云々按に本朝も古は國造其地を領して封建の政也孝德の比より漸唐風を學びて奈良朝に至ては全く郡縣の政行はれたりき 頭書郡縣の始事殘餘叢考十六ノ八丁ウ

（廿六）小人の差別　同唐不可學の五小人の篇に夫忠信篤恭謂二之君子一姦佞猾賊謂二之小人一所謂小人有二輕重深淺一其輕淺者易レ見深重者難レ知如二宋王安石蔡京蔡確章惇丁謂王欽若等一皆博學登レ科中レ選秉レ權而誤二天下政道一是曹之所レ致也呂氏曰漢唐之小人易レ知宋朝之小人難レ見然漢唐小人亦有二其始難レ見者一載在二方策一孔子所謂無レ爲二小人儒一是也夫大姦似レ忠大詐似レ信苟非レ試レ之其實難レ知虞書曰試可二乃已一唯擧レ才無レ試殆哉歐陽子誤褒二安石一胡康侯謬稱二秦檜一觀二其外一而不レ察二其內一也孔子曰惡二似而非者一夫少正卯魯聞人也聖人所二以誅一レ之者以二是故一也彼小人而似二君子一者可レ恐可レ戒已上全文　按に僞君子を恐るべきよしを論じたり大纛冠鎌足大江廣元などは賢人がほせし僞君子也

（廿七）靑牛とは道書をいふ　同唐不可學の七道家の篇に宋景濂が日東曲の靑牛不レ渡二大洋海一莫レ惟無二人識一道書一と作りたる靑牛は老子之書也と見ゆ

（廿八）唐は文過武劣の國　同唐不可學の八募卒の篇に凡唐の病在二文太過武不レ及耳且若二朝鮮一本桀驁之邦也楊隋李唐不レ能レ戢レ之以二地接一唐山一文學漸薰尊二南方溫柔之化一卑二北鄙強者之風一故爲二我前朝關白秀吉一所二長驅一近來之龜鑑也云々按に平家公家を學て亡び室町公家を學て徵なるも同義也都會繁華の人物は武に用るには劣也と知べし

（廿九）宋儒の文佛語を用　同唐可學八の四廣見の篇

に按禮記孔子曰吾聞之老聃云々不以其異端捨其言也程子解中庸鳶飛魚躍章曰此是喫緊爲人處活潑々地朱子亦引此語是本俗語而禪家所用也朱子小學間採顔氏家訓語夫顔子推好佛者也其家訓歸心篇恰如讀佛書然不厭之柳子厚蘇子瞻亦好佛者也朱子收其文章於楚辭後語中且蘇子與程子相軋其學甚異而朱子註論語間採蘇子之語王安石博恰而大姦也言行錄載其傳尹彦明拜佛看經而在程門爲高弟范文正公爲救饑民造塔施貲以充賑給是皆拘儒所忌非廣見不能也且如咒術醫家之所卑也閱方書中瘧疾勞瘵及小兒夜啼骨硬等間從祝由科本草載巴中毒蜂螫人立死非方藥可療唯禁術可制是亦採其有驗不敢拘忌雀去病所謂願方略如何耳即此意也唯在乎主利出坤卦辭或曰子所學廣見如何曰陸象山曰宇宙事即己分內事宇宙便是吾心吾心便是宇宙此言至矣盡矣可謂開發道體無餘者矣孟子所謂万物皆備於我張子以天地與我爲一體皆與此同今無拘於朱子無捨陸子之言是所望也已上全文按に宋儒の文這些等の字を用たるも佛書に据たる也

(卅)日本勝レ唐八　同日本勝レ唐八の篇に一皇祚百王(ないふなり)　敬神二義勇三帶劒(唐國にては武官の外帶劒せず)四襲封(世繼封建也)五無二外患一(海國なればなり)六無二宦者一七食饌多肉(るないふなり)八武藝附造劒の八也

(卅一)和唐合論　儼塾集卷之一(廿三丁カ)に和唐合論一篇あり垂仁之久御レ世同二黄帝之治年一仁德之辭遜似二舜禹之避讓一桓武之遷都如二盤庚之易一居後三條之恭儉若二文王之卑一服其在二宰相一者武内之元老儁二呂望之輔佐一聖德之攝政擬二周公之制禮一大纖冠之仕レ朝合二阿衡之立志一昭宣公之行レ事爲二霍光之廢立一其在二武將一者源賴義義家之遠征侔二衛霍之功勞一義經之踰レ險類二鄧艾之入一蜀義貞之攻二鎌倉一猶項羽之破レ秦楠正成之忠勳齊二諸葛之貞烈一凡事之比類不レ可二枚擧一好惡之相同不レ可二勝數一云々と見ゆ

(卅二)貧にして後榮え富にして後衰ふ　井燒(ヤケ)ぼこり　儼塾集卷二損益論に河東柳子聞二人遭一失火一致レ書賀レ之崔玄暐毋以二兒孫富貴一爲二惡消息一此喜二人之所一レ惡憂二人之所一レ貴欲二渠全一其德一也故句踐窮而後興夫差盛而後亡朱買臣初貧而遂榮石季倫太富而忽傾云々按に佶に燒ぼこりといふも柳子厚が語に出たる也け

り

(卅三)窮して道顯る　同文に夫孤臣孽子成二困一レ心衡レ志之德一疢疾之人存二德慧術智之美一所謂文王囚二羑里一演二周易一仲尼厄二陳蔡一作二春秋一左丘失レ明有二國語一屈原放逐著二離騷一此皆有二鬱結一其道亨通也古之君子遠レ利執レ仁正言直行不二枉レ道阿一俗是知レ命不二妄動一者也云々

(卅四)朝臣と書事　姓(カバネ)に朝臣と書くは上下に通(ワタリ)たること古書に見えて論なきを有識問答二の卷廿丁(カド)に姓(カバネ)に付て尸(カバネ)を書事昔は六位七位迄も許也然處後鳥羽院の時代以來禁制也其比は五位にも堅被レ制レ之四位は書レ之云々また官位抄といふものにも後鳥羽院禁制せられしよしありと倭訓栞に見ゆされど新古今竟宴歌に從六位下某朝臣と書たる三人あり後鳥羽院の御時の事なるに新古今竟宴の懷紙にのみ許し給ふべきにあらず官位抄有識問答共に御鳥羽院禁制のよしいへるは誤なり無位のものにても朝臣書んに何のくるしき事かあらん

(卅五)本朝の物語から國の小說　七修類稿廿二(の卷)辨證類小說の條に小說起二宋仁宗一蓋時太平盛久國家閑暇日欲レ進二一奇侹之事一以娛レ之故小說得レ勝頭廻之後即云話說道宋某年間閻淘眞之本起亦曰太祖太宗眞宗帝四帝仁宗有二道君一國初瞿存齋過レ汴之詩有レ陌頭盲女無二愁恨一能撥二琵琶一說趙家皆指レ宋也若夫近時蘇刻幾十家小說者乃文章家一體詩話傳記之流也又非二如レ此之小說一と見えてから國には宋の仁宗の時もはら行はれしよりし也されどそれより前にも小說の書まれにはきこえたり本朝の物語には村上天皇の御代などに竹取うつぼなどは出來けん源氏は一條院の御代也宋の仁宗は後一條後朱雀後冷泉の御代にあたればやゝ後也さて紫式部源氏を書て地獄に墮し事實物集に見えに元施耐菴水滸傳を書て盲目と成し事因樹屋書影に見えて和漢同日の談也

(卅六)外國の橫文字　西洋の橫文字の沙汰は漢書西域傳安息國の條に書革旁行爲二書記一師古注今西方胡國及南方林邑之徒書皆橫行不二直下一也革謂二皮之不レ柔者一と見ゆ

(卅七)樣(サマ)　公方樣(クボウサマ)殿樣(トノサマ)などの樣(サマ)といふ稱を唐國にて書たるは徐兵が見聞錄の日本國の事をいひたる條に國雖レ有レ王專レ政者爲二將軍三儁(サマ音一馬)とあり見聞錄は

說鈴の中に收たり

（卅八）蒙古新字　蒙古新字を製（ツク）れるは元の帝師八思巴（パス）なり元史釋老傳にくはし

松屋筆記卷之五十

三緣山倭學士源與清稿

（一）諸道の祭酒　池北偶談一の卷祭酒題名の條に國初設二祭酒一滿洲一員蒙古一員漢人一員順治十七年裁二去蒙古祭酒一とありて滿洲祭酒漢祭酒の人々の名を擧たり按に本朝漢祭酒は儒家也本朝祭酒は未そ の等比なし神道方倭學講談所などをそのたぐひとすべくや池北偶談廿六卷清の濟南王士禛字阮亭が著述の隨筆也康熙辛未秋の自序あり王士禛號を漁洋山人といへり

（二）康熙帝廢陵に守冢を置　同書一の卷廢陵の條に康熙二十二年陝西平凉府盜發二韓康王定王二冢一法司按レ律擬レ罪上以發二掘前代帝王陵墓一特令二加等一因論歷代帝王陵應レ加二守冢人戶一下二九卿一雜議幷禁稱二故明廢レ陵等語一聖諭云凡云レ廢者必如二高煦等一有レ罪廢爲二庶人一然後可彼生爲二藩王一誰廢レ之耶上之仁明如レ此云々歷代帝王の陵に守冢人戶を加ふること實に仁明の主といふべし

（三）臣下私諱　同三の卷臣下私諱の條に晉咸和三年拜二王舒一爲二撫軍將軍會稽內史一舒疏二父名會一乞レ換二他郡一朝廷乃改レ會作レ鄶宜城有二夷水一以二桓溫父名一彝二改二蠻水一後唐同光三年以二郭崇韜父名弘一改二弘文館一爲二崇文館一長興四年以二馬贇父名不レ欲レ斥二其家諱一改二同平章事一爲二同中書門下三品一南唐元宗以二董思安一爲二漳州刺史一思安辭以二父名章一特命改二名南州一又後主嗣レ位以二鍾皇后父名太章一尊レ后爲二聖尊后一於レ禮君所無私諱爲二臣下一諱失二禮意一矣と見ゆ諱の事は陔餘叢考にくはしく見え已に余もいひたりき

（四）駕山籃輿籃　蓋古褰帷之意今惟江寧開封督撫司道府廳縣官皆用二煖轎一蓋沿二宋明都城之制一至レ今未レ改耳（◎本文蓋古上原本缺之）と見ゆ三才圖會にその圖ありて轎輿肩行之車也といへり五雜俎にも肩輿の事あり倭漢三才圖會に籃輿をもて駕の事とす籃輿は今の山駕（ヤマカゴ）といふもの也いにしへ「アヲダ」といへり今「アングダ」といふはその轉也

（五）のこぎり山　安房上總の境にノコギリ山あり馬齒山と書べし池北偶談三の卷林舍人使二琉球一詩に三十六峯瀛海環怒潮日夜響潺湲樓西一抹青林裏露出煙蘿馬齒山射二獵山頭一望二海雲一割レ鮮桐レ酒醉斜暉紙錢挂レ道松楸老知是歡斯部落墳と見ゆ馬齒山は琉球の山にてノコギリ（タニチガ）山の形なるべし馬齒封とは「アリ」の事をいひて喰違ひて列れるをいふ也

（六）足下黑子　池北偶談卷の十足下黑子の條に畫墁錄云郭忠武使二渾忠武城洗一足見二汾陽足下有二黑子一捧玩久之汾陽問二其故一渾答云城也足亦有レ之汾陽令二跣而視一之笑曰不レ及レ我明皇雜錄安祿山初事二張韓公仁愿一韓公嘗令レ跣レ足韓公足下有二黑子一祿山竊窺視韓公問レ之祿山曰某賤人也不幸兩足皆有二黑子一比二公色一黑而加レ大韓公觀而異焉因加レ寵薦二兩令公一功名相埒若二祿山叛逆一亦與二韓公一相似相豈足貴一哉又北夢瑣言載西門軍容與二吳行魯一事亦同豈一事而傳二聞異詞一耶とあり予左足の「カヽト」內黑節の下に黑子あり未殊なる幸不幸を知らず或人云女子隱門の邊に黑子あるもの必後家の相也といへりさることにや

頭書（立雜組五ノ四丁オ 能改齋漫錄六）

（七）詩帳　同書十一の卷詩帳の條に施愚山分守湖西製二苧帳一題二詩其上一寄二林翁茂之一一時名士多屬和名

曰ニ詩帳一或一絕句云斗帳殷勤白苧裁使ニ君親自寫一レ詩來ニ孤山處士朝眠穩朝日烘門懶未一レ開と見ゆ

（八）瓦硯　同書十一の卷飛廉館瓦の條に元王文定惲秋澗集有ニ飛廉館瓦硯歌一略劉郎杳々秋風客神烏冥飛憶初格豹章爵首尾蟠蛇建章千門風冽々云々此亦在ニ銅雀之前一知漢瓦無レ不レ可レ爲レ硯也按に空華集瓦硯の記あり日本の古瓦硯に用るに足もの少からず

（九）地震定數　同書廿の卷地震定數の條に宋小說載崔公誼爲ニ莫州任丘簿一熙寧初河北地震而公誼秩滿挈レ家南歸一日宿ニ孫村馬舖中一風電陰黑夜半有ニ急叩レ門者一云傳ニ語崔主簿君一合レ係ニ地震壓殺一人數輒敢擅逃過レ河今已收ニ魂岱嶽一到レ家速來崔自度必死乃兼レ程送ニ妻孥一至ニ壽陽一次日遂卒康熙戊申山東地大震莒州尤甚莒與ニ日照縣一鄰地震之夜凡日照人客レ莒者皆從崩壓中得レ不レ死莒人客ニ日照一者皆死信有ニ定數一己未七月京師地震通州尤甚死者凡數百人云々按に地震のこと本朝には記紀の歌佛足石歌などによめるをはじめてにていとおほかり

（十）義虎　同書廿の卷義虎の條に汾州孝義縣狐岐山多レ虎明嘉靖中一樵人朝行失レ足墮ニ虎穴一見ニ兩虎子臥ニ穴內一深數丈不レ得レ出傍徨待レ死日將レ脯虎來銜ニ一生麋一飼ニ其子一既復以レ餕予レ樵々懼甚自度必不レ免迨ニ昧爽一虎躍去暮歸飼レ子復以レ餕與レ樵如レ是月餘漸與レ虎狎一日虎負レ子出樵夫號曰大王救レ我須臾虎復入俛首就レ樵樵遂騎而騰上置ニ叢篁中一樵復跪告曰蒙ニ大王活一我今相失懼レ不レ免ニ他患一幸導ニ我通衢一死不レ忘レ報虎又引レ之前至ニ大道旁一樵泣拜曰蒙ニ大王厚恩一無ニ以報一歸當レ畜ニ一豚縣西郭郵亭下一以候大王上某曰日中當至無レ忘也虎頷レ之至レ日虎先レ期至不レ見レ樵遂入ニ郭居一民噪逐生ニ致之一告レ縣樵聞レ之奔詣ニ縣廳一抱レ虎痛哭曰大王以赴レ約來耶虎點頭樵曰我爲ニ大王一請レ命不レ得レ願以レ死從ニ大王一語罷虎淚下如レ雨觀者數千人莫レ不ニ歎息一知縣萊陽人某也急趣釋レ之驅至ニ亭下一投以ニ豚大嚼顧レ樵再三而去因名ニ其亭一曰ニ義虎亭一宋荔裳琬作ニ義虎行一王子一[獻]作ニ義虎傳一紀ニ其事一云々按に日本紀に秦大津父が狼の談も似たる事也

（十一）風聞　同書廿二の卷風聞の條に陳衍云風聞二字出ニ漢書尉陀傳一風聞老夫父母墓已壞削又晉書顧和對ニ王導一曰明公寧使ニ網漏吞レ舟何忍レ採ニ風聞一以察

レ今爲レ政云々風聞の字ホノカニキクと訓ず

（十二）魚石　并叫蛇　同書同卷魚石の條に前即墨令周呫公斯盛說沂陽縣有ニ魚石一如ニ饅頭狀一破レ之即成ニ兩石一各有ニ一魚形一鱗鬣宛然以レ手摩ニ指之一作ニ魚腥一云此山一溪中所レ產石子盡然溪有ニ魚石娘子廟一求レ石者必禱レ之不レ禱則石皆無レ魚也前郊令陸雲士次雲又說新昌縣有ニ水簾洞一々口出レ石亦如ニ饅頭狀一人戲云欲レ得レ糖者或肉或菜者破レ之一々逼肖造物狡獪如レ此云々按に本朝の奇石は雲根志に載たり予が櫻石記にも又いへり池北偶談廿二の卷叫蛇の條に□西有ニ叫蛇一能呼ニ人姓名一應レ之即死然性畏ニ蜈蚣一逆旅主人每以レ篋貯ニ蜈蚣一客至輒授レ之令レ置ニ枕旁一云夜半舍外有レ呼ニ姓名一者慎勿レ應但開レ篋縱ニ蜈蚣一々々即徑去食ニ蛇腦一已仍還ニ篋中一云々

（十三）カマイタチ　閑田次筆一并カクレ座頭　續伽婢子十一の卷十三丁ウに關八州の間にかまいたちとてあやしき事侍りつじかぜおこりて道行人の身に物あらくあたれば股のあたりたてざまにさけてかみそりにて切たるごとく口ひらけしかもいたみはなはだしくもなし又血は少も出ず女蘂草をもみてつけぬれば一夜のうちになほると云なにものゝわざともしらがたしだ旋風のあらく吹てあたるとおぼえて此うれへ有それも正しき侍にはあたらずたゞ俗姓いやしきものたとへ富貴なるも是にあてらるゝといへり尾張駿遠參州の間に提馬風とてこれ有馬をたふすつじ風也云々これから國の風鬼也池北偶談廿二の卷洞溪物產の條に風鬼出ニ黔中一無レ形無レ影能以旋風攝レ人云々とある風鬼はカマイタチの漢名也また下總の國に穴中の怪をカクレ座頭といふ同書同條に夜叉產ニ蜀之黎州一穴生長七尺亦名穫路見ニ婦人一盜レ之入レ穴生レ子以レ揚爲レ姓云々此類といふべし

（十四）饗豆　池北偶談卷廿二饗豆の條に同年（上條に明崇禎中とあり）李侍郎奉倩［適］言樂安縣有ニ孫公者一年九十強健如ニ四五十歲人一自言生平惟服ニ饗豆一每歲槐子爲レ熟時輒令ニ人守レ之不レ令ニ鳥雀啄落一既成レ實即收作ニ二枕一夜聽ニ其有レ聲者一即饗豆也因棄ニ其餘一如レ是數易而得饗豆所レ在每樹不レ過ニ一枚一每歲服不レ過ニ一粒一如レ是者數十年矣無ニ他術一也と見ゆ槐子はエンズノ實なり

（十五）寇讐及ニ子孫一　諺に守屋氏の人信濃善光寺ニ詣れば必災に逢佐野氏の人神田明神祭日に逢ば又

災を蒙るといへり守屋氏は物部連の孫にて善光寺如來を難波堀江に捨たる仇あり佐野氏は俵秀鄕の孫にて平將門を討たる仇あり神田明神は將門の靈也といへりから國にも宋秦檜岳飛を讒殺すその子孫岳忠武の廟に詣ることあたはず一人強てこれを祭て災に逢しよし池北偶談廿三の卷秦羅子孫の條に見ゆ

(十六)墜石　文政十四年十一月廿二日余次男幸次郎(後に爲次郎清年と改す)と共に武藏國足立郡大間木新田の八町會館にあり天氣よく晴たるに午打さがる比富士山宮根山の方にあたりて雷のごとき響あり庭に出て望見るに西南の空かきくもりて何のゆゑといふことをしらず里老に問にかゝるためし見すきかすといらふ廿八日赤澤藏之助來語云廿二日震動の時武藏八王子邊の子安村大和田川原日野の原の三處に三尺計の石虛空より落て地中三尺計におちいりたるに大和田川原のみ石地に落たれば碎たりその石のでけを見しに燒たる石の貌也といへり同十二月九日武藏國多摩郡落合村の絹商人平兵衞來語云十一月廿二日の震動をかしこにて聞しは初は大筒など放たらんやうに三度いかめしき音せしゆゑ驚て空中を仰見るに煙のごとき薄雲

たなびきて中にあまたの石をまろばすおとおどろおどろしく半時ばかりにてやみぬ後に人の語を聞に落合村に五六寸より一尺計の燒せる石五處に墜たりそのさまやけくろみて質やはらかなる石也近邊の堀内村に墜たるは長二尺計の薄き石にて僞の字を鐫たる也寺澤村の八左衞門が庭に墜たるは重さ十三貫目あり八王子の子安村大和田村の川原日野宿の原などにも落たり風聞に富士の麓にて大筒のためし打せりとも又は伊豆の山より螺貝ぬけ出たりともいへど熱海湯治より歸りし人にとふにかしこにたえてさることなしといへり又相摸大山邊の人の見しには箱根の方より雲起りて空中を鳴もてこしが大山に突當るやうにて再もとのかたへ飛かへりぬといへりとなんかくとりぐ〳〵にいひ傳へて未その實正をしらずといへり同十七日或人來語云十一月廿五日震動して燒石の墜たりしは白河侯の預知給ふ上總國御鐵砲臺の焰硝藏に失火うつりて其勢甚しく藏の築石あまた飛出て三四十里のよそに墜たる也といへり按に池北偶談廿三の卷墜石の條に順治十三年二月初十日午時寧陵縣忽有二響聲一自二東北一來黑氣如レ斗光芒甚異墜二落城中民家一其形如レ石重二斤十四兩見二總督李尚書(隆祖報疏一と見えたるは和漢同日の談といふべし

(十七)念佛鳥　池北偶談廿三の卷念佛鳥の條に唐韋蟾岳麓道林詩靜聽林飛念佛鳥細看壁畫駄經馬按王得臣麈史安陸有二念佛鳥一小二於鸜鵒一色青黑常言二一切諸佛一宋元憲詩鳥解佛經言張齊賢守レ郡日爲作二古詩一篇云々按に空海の性靈集に佛法僧鳥の詩あり[　　]が集にも佛法僧の歌あり高野山松尾山などに此鳥すめりといへり下野日光山に慈悲心鳥ありジヒシン〳〵と鳴く余かしこに正しく聞たることあり

(十八)鏡石　常陸風土記に久慈郡に鏡石あり池北偶談廿五の卷石鏡の條に湖南祁陽縣語溪有二鏡石一高尺五寸闊二尺五寸石色黝黑如レ漆光可二以鑑一隔レ江竹木田牖歷々皆見曾有レ人竊去即昏昧無レ所レ視還レ之如レ初喬侍讀石林燕言如レ此とも見ゆ(頭書 明人王世貞が博物異苑の土石部に仙人鏡日林園西南有二怪石一方數百里光明澄澈可レ鑒二人五臟六腑一謂二之仙人鏡一國人有レ疾者皆就而照レ之其形可レ知(出二白孔六帖一)云云とも見ゆ)

(十九)墓樹片方になびく　万葉集兎原處女をよめる歌に「塚の上の木の枝なひけりきくかことちぬをと

ここにしよりにけらしも」と見ゆ池北偶談卷廿五墓樹の條に張君又云韓城有二蘇屬國司馬子長二墓一蘇墓樹枝皆南向司馬墓樹皆北向驗レ之良然(司馬北向理不レ可レ曉)云々とあるも似たること也張君は張顧行がこと也(頭書 墓ノ木柏チウヘルト史記晉世家十四丁ウ孔明墓令二松柏楊悲風吹一)

(廿)女俠(ランナダテ)　男だてを俠客(ケフカク)といふは人みな知れること也女だてをば女俠と書べし池北偶談廿六の卷女俠の條ありて濟南の俠女俠尼の事を記したり

(廿一)慶雲(答二於本間游清一)　慶雲の事は續記に見えて年號にも用られ延喜式にも注せられたり武備志百六十一の卷占度載の占雲氣の篇の氣之災瑞の條に瑞氣三一曰慶雲若レ烟非レ烟若レ雲非レ雲郁々紛々蕭索輪囷是謂二慶雲一亦曰二景氣一此喜氣也太平之應云々千五百番歌合土御門內大臣「もろ人のあふくのみかは君か代は空によろこふ雲も有けり」此歌夫木抄雜一にも載たり

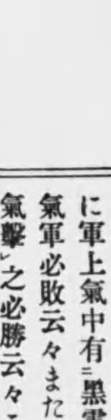
(廿二)あのこ雲(同上)　夫木抄雜一源仲正家集あのこ雲の歌に「雲拂ふ月の光におひにけりはしりちりぬるあのこ雲かな」此あのこ雲は武備志百六十一の卷占雲氣一氣之戰陣の條に軍行有二白雲一知レ猪來臨者大驚宜レ備云々同書百六十二の卷占雲氣二氣之軍敗の條

に軍上氣中有二黑雲一如二羊形一或如二猪形一者此瓦解之氣軍必敗云々また軍上氣如二羣羊羣猪一在二氣中一此衰氣擊レ之必勝云々これらの猪雲をいふべし 頭書萬用正宗一の卷天文門に凡占天河内有二黑雲一如二猪蛇之形一衝渡斷而復續者固時而有レ雨也

(廿三)みづまさ雲同上 慈鎭和尙の拾玉集四に百首歌「行ゑはれぬ水まさ雲にもる月をむなしく雨の夜半やおもはん」此歌夫木抄雜一にも水まさ雲と題して收たり寫本には水まき雲ともあれど藻汐草にもみづまさ雲とあれば多本に從べしこは水增雲の義なるべし武備志百六十一の卷占雲氣一氣之戰陣の條に凡安レ營有二黑雲一如二鳴雞狀一與二營門一相對宜レ移二營高阜一天必大雨河水泛漲防レ有二沈溺之患一とある黑雲を水增雲といふべし明六安黃鼎王が管窺輯要卷卅六壁宿の條の雲氣干犯占に黑氣入レ壁有二破國亡一一曰有二大水一云々萬用正宗一の卷天文門にも黑雲必雨よしなども見ゆ 頭書爲尹千首に夕立早過「夕立の水まさ雲のはやすきてすゞしくうかふ三日の月かげ」一本に水ます雲のはやすみてとも有

(廿四)刀筆 方氏墨譜三の卷博古の部三の卷に刀筆の圖あり

若作二之篇一爾爲二之削一善用二其利一斯文無雪陳玄主人翁藏墨



墨譜は明人方于魯が撰にて八卷あり國寶部國華部博古部博物部太莫部太玄部とわかてり全六卷首卷二卷を加て八卷也こと〳〵く墨の製形をしるしたる書也 頭書三才圖會器用二卷卅九丁ウ圖アリ說アリ

(廿五)鵲の鏡答二於本間游清一 夫木抄夏三夏月の條に文永十年毎月一首中民部卿爲家「かさゝぎの鏡の山の夏の月さし出るよりかけもくもらす」同書秋四月の條に家集月歌中爲家卿「天の原光さしそふ鵲の鏡と見るは秋のよの月」同書雜二山の條に御集慈鎭和尙「かさゝぎの鏡の山の夏の月さし出るよりかけもくもらす」天の原光さしそふ云々の歌は新拾遺秋下にも家十五首歌に月前大納言爲家とて載たり鵲鏡は月の異名也唐李嶠が月詩に桂生三五夕萱開二八時分輝度二鵲鏡一流彩入二蛾眉一皎潔臨二疎牖一朦朧鑒二薄帷一願陪二北堂宴一長賦二西園詩一王勃上二皇甫常伯一啓鑣就レ路驚駿相懸鵲鏡臨レ春研媛自遠王維清如玉壺氷詩曉凌飛鵲鏡宵映聚螢書李白詩明々金鵲鏡丁々玉臺前なども見え

鳥鵲鏡といへることも王子年が拾遺記に有しやうにおぼゆ他日考注すべし

(廿六)天皇 尤侗が外國竹枝詞に諸域の風を詞に作りたる中第一に朝鮮の詞を載せ次に日本次に琉球次に安南など次第して載たり日本詞に云日出天皇號二至尊一五畿七道附庸臣空傳歷代吾妻鏡大閤終歸木下人〇自注に隋時致レ書自稱二日出處天子一國中稱二天子一以レ尊爲レ號有二五畿七道三島附庸國百餘一吾妻鏡紀二本國君臣事蹟一吾妻島名也木下人爲二平秀吉一萬歷中纂二奪倭國一自號二大閤王一〇吹螺揮扇舞刀都聖鬘羅華知二有無一乞二得中原音韻一去也來弄レ筆咏二西湖一〇自注に天子七歲講二聖鑒經天雨曼陀羅華一使臣答里麻有レ咏二西湖一詩上云一株楊柳一枝花原是唐朝賣酒家惟有二吾邦風土異一春深無レ處レ不二桑麻一頗寓二嘲笑之意一按に大閤の閣は閤の誤萬歷の歷は曆の誤也外國竹枝詞一卷南滙吳省蘭字泉之が藝海珠塵史部地理外紀類の部に收む作者の尤侗字同人又字展成號悔菴又號艮齋一江南長洲人拔レ貢任二永平府推官一康熙己未召試博學鴻儒授二檢討一加二侍講一銜有二西堂集一と卷首にしるしたり此詩中天皇の字あり天皇の字は東大寺佛像の銘藥師寺擦銘上宮帝王法說などに見ゆ日本紀に見えたるは推古紀をはじめとすべし神武天皇など細注せるは後人の加筆也

(廿七)古文孝經 知不足齋叢書第一集の卷頭に大宰純が校正せし古文孝經を收たりはじめに乾隆四十一年七月東里盧文弨序同年暮春海昌吳騫が序同年中春慈谿鄭辰が序ありて次に孔安國が序太宰純が序を載す終に宋本の古文孝經の本文を附して扨乾隆丙申花朝歙人鮑廷博が跋あり鮑廷博が號を不知足齋といひし也盧文弨が序に云孝經有二古今文一鄭康注者今文也孔安國傳者古文也五代之際二家竝亡宋雍熙中嘗得二今文一鄭氏注一於日本一矣今又不レ傳新安鮑君以文篤學好古意彼國之尙有二是書一也屬下以二市易一往者上訪二求之一顧鄭氏不レ可レ得而所レ得者乃古文孔氏傳遂攜以入二中國一此書亡逸殆及二千年一而一旦復得レ之此豈非下天下學士所二同聲稱一快者上哉云々吳騫が序に古文孝經孔安國傳世久失二其傳一武林汪君翼蒼隨二估舶一至二日本一訪求以歸吾友鮑君以文得レ之甚喜遂刻入二知不足齋叢書一云々五季喪亂孔鄭二家並亡宋雍熙初日本僧育然以二鄭注孝經一來獻中土始有二其書一而孔傳卒不

レ可レ得按宋二朝藝文志云周顯德末新羅獻二列序孝經一
即鄭注也然歐公五代史記謂新羅自レ晉以後不二復至一
中國一而裔然事則見二宋史日本傳一斯爲レ可レ信第不レ解
裔然當日何不レ以二孔傳一俱來一豈此書在二彼國中一亦所
レ秘邪日本傳又累言其國太宰府遣レ人貢二方物一或收二
得其牒一今序剡二是書一之太宰純未レ詳レ爲二何如人一日
本多世職太宰純豈猶其苗裔或以レ官爲レ氏者乎云々鮑
以文が跋に古文孔經孔傳一冊吾友汪君翼滄市二易日
本一得レ之攜歸舉以相贈云々與清按に古事記應神の段
に百濟より論語千字文を貢進し事有そはかしこの西
晉の代也古文孝經もそのころにやわたりけん唐玄宗
御注も今文なれば古文は唐の代にたえたるとしるし

(廿八)士の三不鬪　明の徐禎稷が恥言一の卷に餘齋
曰士有二三不鬪一毋レ與二君子一鬪也名毋レ與二小人一鬪也利
毋レ與二天地一鬪也巧云々恥言二卷あり藝海珠塵子部儒
家類に收む徐禎稷字叔開號二餘齋一江南華亭人明萬曆
辛丑科進士刑部主事歷二四川按察司副使一

(廿九)龍骨　明人姜南が墨畬錢鏄の龍骨の條に龍壽
萬年不レ死今之龍骨或以爲レ蛻也見二本草一按造化權與
云龍易レ骨蛇易レ皮麋鹿易レ角蟹易レ螯由レ此言レ之信乎
龍之骨蛻骨也云々按に蛇骨の說は余已にいひたりき
可二考合一墨畬錢鏄一卷藝海珠塵子部小說類に收む

(卅)琵琶法師　明の姜南が洗硯新錄の演小說の條に
世之瞽者或男或女有レ學レ彈二琵琶一演二說古今小說一以
覓二衣食一北方最多京師特盛南京杭州亦有レ之甘讀レ罌
存齋過二汴梁一一律云歌舞樓臺事可レ誇昔年曾此擅二
豪華一尙餘艮嶽排二蒼昊一那得神霄隔二紫霞一廢苑草荒
塘レ牧レ馬長溝柳老不レ藏レ鴉陌頭盲女無二愁恨一能撥二
琵琶一說二趙家一觀レ此則自レ昔蓋有レ之矣云々與清按に
本朝の琵琶法師平家物語を演說もまたこの流也洗硯
新錄一卷藝海珠塵子部小說類の中に收む

(卅一)老學　姜南が蓉塘記聞の老而學の條に晉平公
問二師曠一曰吾年七十欲レ學恐二已暮一矣師曠曰何不二炳
燭一乎臣聞少而好レ學如二日出之陽一壯而好レ學如二日中
之光一老而好レ學如二炳燭之明一朗與二昧行一孰公曰善哉
見二說苑一旨哉言乎孔子曰發憤忘レ食樂以忘レ憂不レ知レ
老之將レ至云爾其自得之妙乎然則學者斃而後已云々
與清曰吾友太田覃老後珍書を搜求て抄錄倦ことなし
屋代弘賢また老て書を佔の癖あり學者死せざるほど
は心に好書のいとまなきもの也老たれば學ばずとい

はずといふはもと庸人のいひわけ詞也蓉塘記聞一卷
藝海珠塵子部小說類に收む

(卅二)諸子之貴　蓉塘記聞諸子之貴の條に呂氏春秋
云老聃貴レ柔孔子貴二仁墨翟貴一レ廉關尹貴レ清子列子貴
レ虛陳駢貴レ齊陽朱貴レ己孫臏貴レ勢玉廖貴レ先兒良貴
レ後尸子廣澤篇曰墨子貴レ廉孔子貴レ公皇子貴レ衷田子
貴レ均列子貴レ虛料子貴レ別二論相似一云々與清曰近來
の古學者には契冲貴二歌學一眞淵貴二萬葉一宣長貴二神
道一千蔭貴二詠歌一春海貴二說話一久老貴二奇說一儒者に
は物茂卿貴二唐明一伊藤長胤貴二經濟一太宰純貴二經義一
服元喬貴二詩文一山本信有貴二豪言一龜田興貴二酒食一太
田元貞貴二爭論一葛西質貴二戲言一大窪行貴二圍碁一菊池
桐孫貴二金銀一その學旨趣を別にするもをかしきわざ
にこそ

(卅三)祿盜人　俗に不忠の臣を祿盜人(ロクヌスビト)といへり蓉塘
記聞の爵祿畜盜賊の條に宋諫議大夫曾公致堯當二眞
宗時一上疏有レ云陛下始即位以二爵祿一待二君子一近年以
來以二爵祿一畜二盜賊一此言雖レ過亦必有レ激而然歟云々
と見ゆ

松屋筆記卷之五十一

東都　源與清文儒稿

(一)聖教序摸本　明人姜南が蓉塘記聞の三藏聖教序
の條に書苑云唐文皇製二聖教序一命二弘福寺僧懷仁一集二
晉王右軍行書一勒レ石累レ年方就逸少筆蹟咸萃二其中一今
觀二碑中字一與二右軍遺帖所レ有者一纖徹克肖近世翰林
侍書輩多學二此碑一目二其書一爲二院體一由吳通微昆弟已
有二斯目一後之士夫玩レ此者學弗レ至自俗耳碑中字未二
嘗俗一非レ深二於書一不レ足二以語一此云々按聖教序摸本
舶來いとおほかり弘法大師請來目錄眞跡は聖教序の
體を學びしもの也院體とは俗體といふにおなじ心也

(二)河豚魚　宋人孔平仲が孔氏談苑一の卷河豚魚の
條に河豚臑目切齒其狀可レ惡人食レ之治不レ中レ度多死
棄二其腸與レ子飛鳥不レ食誤食必死登州瀕海人取二其白
肉一爲レ脯先以二海水一淨洗換二海水一浸レ之暴二於日中一
以二重物一壓二其上一須候二四日一乃去二所レ壓之物一傅レ之
以レ鹽再暴乃成如不レ及二四日一則肉猶レ活也太守李大
夫嘗以二三日一去二所レ壓之物一俄頃肉自二盆中一躍出乃

知淪レ之不レ熟眞能殺レ人云々與清曰本朝乾河豚(ホシフグ)毒あることなしこれを乾すに有毒のものは乾くことなし無毒の物はよく乾くといへり生河豚(ナマフグ)は毒の有無辨がたし故に有毒のものを食へば必死す君子愼勿レ食レ之

孔平仲字毅父一作義甫清江人宋治平二年進士元祐中提點京西刑獄坐レ黨安置英州崇寧初召爲金部郎中提舉永興路刑獄帥鄭延環慶黨論再起奉レ詞以卒孔氏談苑五卷蠡海珠塵子部雜家類中に收む

(三)批杷は接木を佳とす　孔氏談苑一の卷批杷の條に批杷須レ接乃爲佳果一接核小如丁荔香枝一再接遂無レ核也とあり接木の歌は夫木抄に見えたり

(四)虱北に向竹西北に滋る　同卷虱不レ南行一條に虱不レ肯レ傃レ南而行一陰類也其性畏レ火置レ之物上一隨レ其所一向以指レ南方一俄即避レ之若レ有レ知也種竹就レ西北一其根無レ不レ向レ東南一行レ者是亦物之性也云々與清曰虱北行の事は酉陽雜俎にも見ゆ

(五)則神　同書二の卷則神の條に紫姑者則神也金陵有レ能致レ其神一者レ沈遘嘗就問レ之即畫粉爲レ字曰文通萬福遘問二三姑姓一答云姓竺南史竺法明乃吾祖也亦有レ詩贈レ遘近黃州郭殿直家有レ此神一頗黠捷每歲率以二正月一日一來二月二日去蘇軾與レ之甚狎常問レ軾乞レ詩軾曰軾不二善作一詩姑畫灰云猶裏猶裏軾云非二不善一但不レ欲レ作爾姑云但不レ要レ及レ他新法便得也云々則の神の事は已にいひたれば考合すべし

(六)輪廻再生　同書三の卷輪廻再生の條に知虔州朝議李大夫自云凡二十五子今所レ有一子也其母以二屢失一子於二病風作時一嚙レ臂志レ之比二再生一子齒痕隱然在二其臂一乃知輪廻再生之說爲レ不レ誣爾(大夫名眞輔南京人)云々與清曰余が聞見に武州國多摩郡程久保村の民の子同郡中野村の民の子に生れし事ありその傳は友人平田篤胤が記せる書あり死人の手に物書て葬れば生處にて手にその字あり葬れる墓の土をもて洗ざれば消ずといへり

(七)殿下足下執事几前　同書五の卷閣下足下之稱の條に古者三公開レ閤而郡守比二古諸侯一亦有レ閤故有二閤下之稱一前輩與二大官一書多呼二執事一與二足下一劉子元與二宰相一書曰二足下一韓退之與二張僕射一書曰二執事一即其例也記室本王侯賓佐之稱他人不レ可二通用一惟執事則指二左右之人一尊卑皆可二通稱一又自レ卑達レ尊例云二座前一尤非也閣下降二殿下一一等座前降二几前一一等豈

可二僭用一哉云々按に殿下は上を清下(スヽ)を濁てテンガといふ攝關の稱也足下は今の人常に用る字也執事几前は中比の往來書牘におほく用ゆ吉野拾遺兒島高德が文に隱老几前と書たるとありき頻書異苑卷十に介子推逃綿隱レ跡抱レ樹燒死文公憎未哀嗟伐而製レ屨每レ懷二割股之功一俯視二其履一曰悲乎足下足下之稱爲レ起二於此一〇足下日知錄廿四

(八)燒尾荒鎭　三代實錄十二七丁に勅禁二斷諸司諸院諸家諸所之人燒尾荒鎭幷責レ人求レ飮臨時群飮戒除責二被物一起請儛去天平寶字二年二月二十日勅書儛云云而今綸綍出後年代久遠有司解怠棄而不レ行因レ玆諸司諸院諸家諸所之人新拜二官職一初就二進仕一之時一號二荒鎭一一稱二燒尾一自レ此之外責レ人求レ飮臨時群飮等之類積習爲レ常醉亂無レ度云々同書廿六九丁に謹案二新格一諸司諸院諸家所々之人燒尾荒鎭等惣當二禁斷一云々按に孔氏談苑五の卷燒尾宴の條に士人初登レ第必展二歡宴一謂二之燒尾一說者云虎化爲レ人惟尾不レ化須レ爲二燒去一乃得レ成レ人又說新羊入レ羣諸羊抵觸不二相親附一燒二其尾一乃定又說魚躍二龍門一化レ龍時必須二雷電一爲燒二其尾一乃化云々燒尾とは役替の仲間振舞の事也頻書類聚三代格(郡代解編燒尾曾駿集六ノ廿五丁ウ湯幔小品十四卷七丁ウ兩燒尾條に唐進士宴二曲江一曰二燒尾一而大臣初拜レ官獻二食天子一亦曰二燒尾一云々

(九)花を美女に比す　花を美女にたとへしは志賀の山越の歌に道もさりあへずなどよめる類いとおほかり花をし見れば物おもひもなしとよまれしもおなじ孔子談苑五の卷花比二美女一條に前輩作レ花詩多比二美女一如曰若教二解語能傾レ國任是無情也動レ人黃魯直醉醽詩曰露濕何郎試二湯餅一日烘二荀令一炷爐香乃比二美丈夫一淵材作二海棠一詩曰雨過溫泉浴二妃子一露濃湯餅試二何郎一意尤工也と見ゆ

(十)汗衫明衣　汗衫は和名抄にも見えて所謂カザミ也孔氏談苑卷五汗衫所起の條に古者朝宴衣服中有二白紗中單一百官郊享服中有二明衣一皆汗逐之狀漢高祖與二項羽一戰爭之際汗透二中單一改名二汗衫一と見ゆ明衣も神祇式に見えたり事林廣記戊集六の卷にも見ゆ

(十一)魚袋　魚袋は金魚袋銀魚袋ありてみな唐樣を傳へし也孔氏談苑五の卷魚袋所起の條に三代以レ韋爲二算袋一盛二算子及小刀磨石等一魏易爲二龜袋一唐永徽中四品官並給二隨身魚一天后改レ魚爲レ龜唐初卿大夫沒追取二魚袋一永徽中勅生平在レ官用爲二褒飾一沒則收レ之情不レ忍五品以上亮魚更不二追取一と見ゆ

(十二)腰帶　腰帶も唐の制によりて玉帶有文巡方な

どさま〴〵の制あり孔氏談苑五の卷腰帶所起の條に古有二革帶一反插垂レ頭奏二世始名二腰帶一唐高祖詔令二向レ下插垂一頭取二順下之義一と有

(十三)笏　孔氏談苑五の卷執笏の條に梁職儀八座尚書以二紫紗一裹二手版一垂二白絲於首一如レ筆通志曰僕射尚書手版以二紫衣一裹レ之名曰レ笏梁中世以來惟八座執レ笏者白筆綴頭以レ紫囊レ之其餘公卿但執二手版一陳希烈不レ便二稅笏騎馬一以レ帛裹令二左右執一之李右坐云便爲二將來故事一云々按に笏の事和名抄桃華藥葉裝束抄の歌所見擧盡しがたし三才圖會事物紀原などをも考べし

(十四)白樂天詩　孔氏談苑五の卷唐末詩の條に白樂天每レ作レ詩令二一老嫗解一レ之問曰解否曰解則解錄之二不レ解則又易一レ之故唐末之詩近二於鄙俚一云々按に此說冷齋夜話にも見ゆ

(十五)竹馬　竹馬の戲は後漢書郭伋傳晉書殷浩傳などに見え尊容抄に古圖あり孔子談苑卷五鳩車竹馬の條に王元長曰小兒五歲曰二鳩車之戲一七歲曰二竹馬之遊一云々此說博物志に出たり杜牧が杜秋娘詩に漸抛竹馬戲稍出舞雞奇東坡が詩に竹馬迎二細侯一大錢與二劉寵一などもも作れり骨董集にこれかれ引出ていひたりき頭書下學集下卅二丁ォ和漢三才圖會十七ノ十二丁ォ珍珠船三ノ十三丁ウに王元張曰小兒五歲曰二鳩車之戲一七歲曰二竹馬之遊一

(十六)算經　并算盤　學令義解に凡算經孫子五曹九章海島六章綴術三開重差周髀九司各爲二一經一學生分レ經習業云々集解に孫子釋云一卷即人名也古記云一卷即人名也今選三卷五曹釋云一卷即人名也古記云一卷即人名也今選五卷九章釋云九卷徐氏祖仲種々計筭也古記无レ別海島釋云一卷徐氏祖仲海島計筭也古記无レ別六章釋云六卷高氏古記无レ別綴術釋云五卷相氏也古說无レ別三開重差釋云三卷高氏也古記无レ別周髀釋云一卷古記云一卷今選二卷天地商計也九司釋云一卷九司古記云一卷九司事雜計也云々類聚符宣抄九の卷筭道部に讀書九章一部海島二卷周髀一部五曹一部九司一部孫子一部三開一部云々日本國見在書目錄曆數家部に九章九卷劉徽注、、、祖中注、、、、徐氏撰云々九章圖一云々六章六卷高氏撰六章圖一六章私記四九司五卷九司算術一三開三卷三開圖一海島二、、一徐氏注、、二祖仲注、、圖一綴術六云々孫子算經三五曹算經五甄鸞撰云々同書天文家部に周髀二

道讀注とあり與清曰武英殿聚珍板に孫子算經三卷海島算經一卷を收む乾隆四十一年二月陸錫熊紀昀戴震等が孫子算經の提要云臣等謹案隋經籍志有二孫子算經二卷一不レ著二其名一亦不レ著二其時代一唐藝文志稱二李淳風注甄鸞孫子算經三卷一于二孫子上一冠以二甄鸞一蓋如二淳風之注一周髀算經一因二鸞所一レ注更加二辨論一也隋書論審度引二孫子算術一闕所レ生吐レ絲爲レ忽十忽爲レ秒十秒爲レ毫十毫爲レ氂十氂爲レ分本書乃作二十忽一爲二一絲爲一レ毫十絲一毫又論嘉量引二孫子算術一六粟爲レ圭十圭爲レ抄十抄爲レ撮十撮爲レ勺十勺爲レ合本書乃作二十圭一爲二一撮一十撮爲二一抄一一抄爲二一勺一攷レ之夏侯陽算經引二田曹倉曹一亦如二本書一而隋書中所レ引與二史傳一往々多合盖古書傳本不レ一校訂之儒各有二據證一無レ妨二參差互見一也唐之選擧算學凡十書孫子五曹共限二一歲一習肄于二後來諸算術中一特爲レ近レ古第不レ知二孫子何許人一朱彝尊集五曹算經跋云相二傳其法一出二于孫武一然孫子別有二算經一攷古者存二其說一可爾又有二孫子算經跋一云首言二度量所レ起合二乎兵法一地生レ度度生レ量量生二數之文一次言二乘除之法設一爲二之數一十三篇中所レ云廓地分利委積遠輸貴賣兵役分數比二之九章方田粟米差分商功均輸盈不足之目一往々相符而要在レ得二算多一多算勝以レ是知二此編非一僞託一也彝尊之意盖以爲二確出一于孫武一今攷書設問有云長安洛陽相去九百里又云佛書二十九章章六十三字則後漢明帝以後人語孫武春秋末人安有二是語一乎舊本久佚今從二永樂大典所一レ載裒集編次仍爲二三卷一冠以二原序一其甄李二家之注則不レ可二復攷一是則姚廣孝等割裂刋削之過矣と見ゆまた海島算經の提要に海島算經一卷晉劉徽撰唐李淳風等奉詔注とあり卷端に今有下望二海島一立レ表兩表上齊高三丈前後相去千步令下後表與二前表一參相直上從二前表一郤行一百二十三步人目著レ地取望二島峰一與二表末一參合從二後表一郤行一百二十七步人目著レ地取望二島峯一亦與二表末一參合問島高及去レ表各幾何答曰島高四里五十五步去レ表一百二里一百五十步とあるにて海島算經と名づけしよしを知べし與清亦曰清人梅文鼎が古算器考を按に古の算器は籌を用ふ漢書に說ありて竹徑一分長六寸二百七十一而成二六觚一爲二一握一度二長短一者不レ失二毫釐一量二多少一者不レ失二圭撮一權二輕重一者不レ失二黍絫一また世說に王戎持二牙籌一會計すなどあるみな籌を用し證也易の蓍これその權輿也今

の珠盤起(ソロバン)に明初一よしくはしく論じたれば閲(ミ)て知るべし古器算考一卷藝海珠塵子部天文曆算類に收む頭書筆記五十七ノ廿八則

(十七)鯤　明人楊愼が異魚圖贊一の卷に鯤本魚子細如二蠶茸一莊周寓言鯤化爲レ鵬譬彼詩頌鴟育桃蟲于古言詮誰發二其矇一自注に莊子云北溟有レ魚其名爲レ鯤鯤之大不レ知二其幾萬里一此寓言也按內則卵醬卵音鯤國語亦云魚禁鯤鮞皆以レ鯤爲二魚子至小之物一也莊子乃以二至小一爲二至大一便是滑稽之開端後人不レ得二其意一云々與清曰楊竹菴が此說千載の惑を開たりといふべし鯨鯤の事中華古今注にも出たり

(十八)飛魚　異魚圖贊一に飛魚身圓長丈餘登レ雲游レ波形如レ鮒翼如二胡蟬一翔泳俱仙人寄封曾餌レ諸著澡灼爍千載舒衍(王子年七言頌)云々按に本朝に魚の飛ぶものは文鰩(ビヤウ)魚のみ和名抄にトビヲといひ平戸にてアゴといひ石見にてツバメウヲといふ江戸にてトビノウヲといへり頭書博物異苑魚鼈部に滿水出二飛魚一狀如レ鮒食レ之已レ痔(出二山海經一)酈山涙水有レ魚長一尺能飛飛則凌レ雲息歸二潭底一(出二酉陽雜俎一)

(十九)人魚　異魚圖贊三に髮魚帶レ髮形如二婦人一出二于滇池一肥白無レ鱗(魏武帝四時食制)云々按に人魚の類也近江國蒲生河にて人魚を得し事國史に見ゆその外本朝人魚の出し事物におほくしるしたりき

(廿)海鏡　寬保元年松月堂が撰びし鎌倉の地志に海鏡猿田彦九冊あり自序に海鏡は海にある貝の名也其容如二西瓜一飢則破れて明レ口而其中より蟹の如キ物數多這出て喰レ物又元の海鏡に入る此時海鏡の空腹正愈(イユコレ)發他智を吾物にして恣に行レ之たとへ也云々異魚圖贊四の卷に海鏡殼圓中甚瑩膩腹有二小蟹一朝出暮至或生剖レ之蟹子跂々邊巡亦斃といへるものこれ也頭書博物異苑魚鼈部に海鏡廣人呼爲二齊藥盤一盤殼相合以成レ形外圓而甲甚瑩潔有二少肉一如レ蚌胎中有二紅蟹子一如レ豆而螯足皆具海鏡機則蟹子出拾レ食蟹子飽則歸レ腹(出二越絕書一)琅琦似レ蜂有二一小蟹一在二腹中一爲出求レ食淮海人呼爲二蟹奴一(出二松陵集注一)琅琦一名海鏡(出二江賦注一)云々

(廿一)堪輿　清人程際盛が駢字分箋上卷に堪輿堪天道也輿地道也(後漢書王景傳注)云々堪輿家とは墓相家の事也輿地の事五十六の卷にいへり頭書史記日者傳補六丁に堪輿家云々

(廿二)田宅賣買門戸　同書上に田宅宅在レ都田在レ野(詩七月疏)云々又云賣買出曰レ賣入曰レ買(急就篇)云々又云門戸大曰レ門小曰レ戸(急就篇)外曰レ門內曰レ戸(韻會)云々

(廿三)炙炮煎蒸　同書上に燔炙燔者火燒之名炙者遠火之稱(詩楚茨疏)燔炮毛曰レ炮加レ火曰レ燔(詩瓠葉疏)云々又云煎煮

以レ火而乾レ之謂二之煎一有レ汁而乾謂二之煎一方言云々炙二甘草一炮二附子一煎レ茶などの義是にて知るべし

(廿四)醴　又云酒醴清者爲レ酒濁者爲レ醴(四庫雜記)云々醴をコサゲと訓て甘酒の事とすされど甘酒の事に限らざる稱也頭書公事根元六月の條に見ゆ

(廿五)氣味　又云氣味臭レ之曰レ氣在レ口曰レ味(書洪範疏)云云是にて本草の氣味の字解すべし

(廿六)苞苴　又云苞苴裹曰レ苞藉曰レ苴(禮韻釋文)云々苞はアラマキ也今ワラヅトといふ苴はシキワラの類也魚籠の中に藉(シク)青葉などにいふべし

(廿七)束脩　又云束脩束帛也脩脯也(後漢書第五倫傳註)按に人の師束脩を貪るは卑劣の至也されど弟子束脩を行はざるは又不敬の至也頭書示兒編五ノ五丁オ

(廿八)錦繡絲紬　又云錦繡錦織レ綵爲レ文也(急就篇)又云絲紬抽二引精繭一出レ緒者曰レ絲抽二引麤繭緒一紡織レ之曰レ紬(急就篇)云々

(廿九)衾被衣服衣裳　又云衾被今名曰レ被古者曰レ衾(詩小星疏)又云衣服服身之表也衣身之章也(孝經鄭注大夫章疏)又云衣裳上曰レ衣下曰レ裳(詩綠衣傳)云々

(卅)蓑笠簑笠　又云蓑笠蓑所二以備一レ雨笠所二以禦一レ暑(詩無羊傳)又云簑笠大而有二把レ手執以行一謂二之簑一小而無レ把首戴以行謂二之笠一(急就篇)云々

(卅一)簞筒筐筥籧豆　又云簞筒圓曰レ簞方曰レ筒(公羊昭公三十五年傳註)又云筐筥圓曰レ筥(詩采蘋傳)云々又云籧豆竹謂二之籧一木謂二之豆一(後漢書儒林傳注)云々

(卅二)朝聘巡狩乘輿警蹕　又云朝聘諸侯來曰レ朝大夫來曰レ聘(公羊隱公十一年傳)云々又云巡狩巡者循也狩者牧也(白虎通)云々又云乘輿乘猶レ載也輿猶レ車也(獨斷)云々又云警蹕出稱レ警入稱レ蹕(古今注)云々

(卅三)祿位爵祿福祿　又云祿位祿謂二廩食一位謂二爵位一(孝經士章疏)云々又云爵祿爵以居二有德一祿以養二有功一(中論)云々又云福祿爵命爲レ福賞賜爲レ祿(詩贈彼洛矣箋)云々

(卅四)諡號　又云諡號諡者行之迹也號者功之表也(周書丹鉛總錄十一諡始の條に蘇老泉云嬉云々諡自二周景王之穆后一始匹夫有レ諡自二東漢隱者一始宦官有レ諡自二東漢之孫程一始蠻夷有レ諡自二妻々之莎車一始然黔婁之諡即匹夫之諡也不レ始二于東漢一矣云々陔餘叢考十六ノ廿二丁ウ)

(卅五)智慧　同書下卷云智慧大而知レ之之謂レ智小而察レ之謂レ慧(孟子公孫丑上疏)深知二禍福一謂二之智一亟見二窺察一謂二之慧一(新書)云々與清曰余三十歲に及まで唯進取を知て退守を知らず故に破敗尤多三十歲より四十歲に至

て安に進取らず安に退かす四十歳より今茲四十五歳に及て退を知て進を恐る智慧の字を察すること能はずして已に老將レ至矣 頭書智慧字面大載禮易本命篇〇老子大道廢有二仁義一智慧出有二大僞一

（卅六）能　又云知能所二以知之在一レ人者謂二之知一所二以能之在一レ人者謂二之能一荀子正名篇云々按に能は伎藝の所レ長にして猿樂職などもこの義によれる名也素書に材能の字あり詩承民の疏に有レ伎謂二之能一ともあり 頭書野客十ノ八丁オ

（卅七）委曲消息變化從橫本末　又云委曲委萎也委猱就レ之也曲局也相近局也釋名又云消息消削也減削也息塞也塞滿也釋名又云變化自レ有而無謂二之變一自レ無而有謂二之化一易解又云從橫以レ利合爲レ從以二威勢一相脅爲レ橫後漢書竇融傳注〇本末木下曰レ本木上曰レ末許氏說文云々按に委曲は今の消息文に用る詞也消息は日本紀にアルカタチとよみ物語書にせうそこともせうそくともいひ消息往來の書雲州消息の類いとおほし變化は物語にへんぐゑものと見え歌にもばけともまたばけものといふ詞古書におほく見ゆ從橫は天下に從橫すなど常にいふめり本末は神樂に注すべき字也

（卅八）干支　又云枝幹甲乙爲レ幹寅卯爲レ枝廣雅木旁生爲レ枝正出爲レ幹韻會云々按に日本紀に干支をコノカミオトウトよめり干は幹也支は枝也

（卅九）涉獵草昧　又云涉獵涉如レ涉レ水獵如レ獵レ獸後漢書班超傳注云々又云草昧草謂二草創一昧謂二冥昧一易繫辭疏云々草昧の字神武紀に見ゆ

（四十）猶豫　又云猶豫先レ事而慮謂二之豫一後レ事而慮謂二之猶一孟子公孫丑上疏云々

（四十一）斷絕離別　又云斷絕斷段也分爲二異段一也絕截也如二割截一釋名云々又云離別近曰レ離遠曰レ別楚辭離騷經注云々

（四十二）外國竹枝詞并日本雜詩異域竹枝詞　清人尤侗が外國竹枝詞一卷あり朝鮮日本琉球安南緬甸占城眞臘瓜哇暹羅三佛齊百花文郎馬神滿剌加龍牙犀角龍牙門龍誕噢東西竺九洲山賓童龍崑崙山靈山交欄山麻逸凍重迦邏吉里地悶蘇吉丹丁機宜合猫里淳泥南巫里蘇祿彭亨婆羅古里忽魯謨斯阿丹竹步木骨都束佐法兒佛郎機呂宋和蘭美洛居蘇門答剌花面阿魯淡洋錫蘭山翠藍嶼溜山三島柯枝大葛蘭小葛蘭小唄喃淡巴甘巴里小剌哇古麻剌朗西洋瑣里天竺榜葛剌勿斯里木蘭皮歐羅巴哈密赤斤蒙古窄東安定曲先土魯番柳城黑婁于闐

亦力把力撒馬兒寧渴石哈烈麻林魯迷天方佛菻默德那吃力麻兒速麻里兒爲思藏兀良哈蒙古等の事跡を詞に作りて自注せし書也また土謠十首を附す苗人羅々犵狫猺獞人猺人獞人黎人仲家龍家八百媳婦等也八百媳婦の詞云漢宮嘗說三千女會長何居二八百妻一應レ得二房中彭祖術一卜年恰與定婚齊注に世傳土會有二妻八百一各領二一寨一故名元征レ之道路不レ通而返明立二八百大甸司一云々按に八百媳婦は越後新潟の八百八後家に對すべしまた奥に起雲字喜亭が日本雜詩十六首を附す小序云日本爲二海外諸國之勝一舟楫輻二輳其中一山水奇絕景況佳妙不レ能二盡悉一偶占二絕句十六首一聊記二歲序民風之意一云とありまた清人福慶が異域竹枝詞一卷あり共に藝海珠塵史部地理外紀類中に收む

（四十三）陳壽三國志の評　世說に陳壽が三國志を撰ぶ時米を乞て佳傳を立んといひ孔明に父を殺されたるを怨て苟或よりも劣れる傳を作れるよしの私曲をそしりたり明人姜南が學圃餘力に晉史官陳承祚作二三國志一猶尊二曹魏一以二天子之制一而等漢吳如二春秋列國義一例不レ明固不レ待レ言矣然其評雖レ褒二美魏武一不レ過二一權謀之士一雖レ貶二絀照烈一猶謂二其有一帝王之風一而其評二諸葛武侯之美一二國之臣皆所レ無也其謂二應變將略一非二其所レ長者一承祚晉人爲レ司馬懿與二武侯一相持レ而作二遜辭一以溢二美懿一也其隱然與二昭烈一君臣之意往々見二於志中一讀者自當レ見レ之とあり學圃餘力一卷藝海珠塵子部小說類中に收たり

（四十四）假面并猿頬桶　假面は周禮方相氏黃金四目以逐レ鬼を蠻觴にて後にさま〴〵の面製あり陔餘叢考卅三廿丁にくはしくろうじたり政事要略に方相氏の圖を載す軍裝の面頬は鐵面にて額までかくる也目の穴あり金物面頬は目の下の頬當也今の猿頬は半頬也と伊勢貞丈が赤鳥隨筆にいへり鎌倉鶴岡宮に菩薩樂の古き面あり觀世大夫が家の翁の面靈物也といへりオタフクの面ともオカメの面ともいへるもの寛保年中の畫に見たることあり因に云小桶の手あるを猿ボウといへりこれも猿頬におこれる名にや 頭書酒飯論六丁ウにむら〳〵あつみの鼻じろはおもてがたにぞ似たりける云云和名抄毛詩體部に爾雅注云猨喙猿頬内藏レ食處也和名佐留保々云云愚得隨筆附考上巻面ノ條に猿頬の事有

（四十五）潮のさし引する井泉の類　井泉に鹽のさし引するは諸國におほくきこゆ又芝台德院殿御靈屋の前に汐のさし引する石の手水鉢ありかく應潮の物か

ら國にもおほかり清人愈思謙が海潮輯說下卷應潮之泉第十九に水經注熙平縣南有二朝夕塘一水出二東山一一日再增再減盈縮以レ時未二嘗愆一期同二於潮水一潯陽記雞籠山下澗水朝夕輒有二涌水一溢出如二潮水一時刻不レ差朔望尤大號爲二潮泉一黃滔壺公山詩井通鮫吐脈自注云山間有レ井通レ海潮盈縮之候漁隱叢話甫東山下有レ井井水盈縮與二江潮一相應癸辛雜識汴城上方寺琉璃塔下有レ井通二海潮一高僧傳會稽寶林寺有レ井應二大江潮候一云々此外應潮之物第二十に石雞潮雞などの事見ゆ海潮輯說二卷藝海珠塵史部地理山水類の中に收む

（四十六）氷柱　清人李心衡が金川瑣記卷六氷柱の條に慈雲亭落二成於丁未秋杪一至二次年四月一氷柱摧致壓レ檻折復建二石牆一圍二抱亭後一始得レ堅久氷レ柱者滴氷凝自レ冬及レ春日積月累漸如二牆柱一巨者不レ能二合抱一夏日爲二日光一曬爍始有二傾折患一柱形晶瑩明澈如二水精一琢成即徹レ外他處亦不二恒見一云々按に夫木抄に霜柱の歌あり氷のはしらも氷柱の字によりて歌によまんになでふことかあらん

（四十七）ビハポン笛　井口琴　文政七年八年の間江戸の兒童ビハポンといふ口笛を吹こと流行せり鐵をもて口に銜むやうに作りたるもの也清の六十七が番社采風考口琴の條に削レ竹爲レ片如二紙薄一長四五寸以レ鐵系二環其端一銜二于口一吹レ之名曰二口琴一又有二制類レ琴狀一大如二拇指一長可二四寸一窄二其中一二寸許釘以二銅片一另繫二一柄一以レ手按循レ唇探二動之一銅片間有レ聲娓々相爾女麻達于二朗月清夜一吹二行社中一番女悅則和而應レ之潛通二情款一夏侍御有レ詩云不レ須二挑逗一苦勞心竹片沿絲巧作レ琴遠韻低徽傳二齒頰一依稀私語夜來深云々ビハポンは口琴の類といふべし六十七字居魯滿洲旗人官吏科給事中番社采風考一卷藝海珠塵史部外紀類中に收たりき又清の余慶遠（目錄には俞慶遠に作る）が維西見聞紀にも口琴竹片爲レ之長四寸溜三分刳虛レ之而中存二一線之簧一爲レ絃首尾橫處皆存レ絃首聯二於橫尾一視橫齊處長一分刳二下其橫處一而絃寄二於其面一如レ是者三具絃粗細等而下以二左手大指食指一排二持三片之頭一張レ口而置二其正中於口間一以二右手食指中指無名指一搏二上中下片之絃一之尾長處一錯落而彈噓噓氣大小以定二七均之高下一古宗歷些那馬西番皆以二筒佩之彈一以應レ歌曲彈者身舞足蹈而與レ歌合レ節云々とあり余慶

遠字環度湖北安陸縣人也維西見聞紀一卷藝海珠塵史部地理類中に收む清人張洵が滇南新語の口琴の條に剖レ竹成レ簧取二近青一長三寸三分寬五分厚一分中開如二笙之立中簧一約濶二分簧之前筍相錯處狀三尖犬牙刮尖極薄近尖處厚如レ故約後三分漸凹薄至離相連處三四分復厚兩頭各鑿二一孔一前孔穿麻線如レ纏以二左手無名指小指一換レ之大食二指挾二穿處一如二執柄一橫側貼レ腮近レ脣以レ氣鼓二簧牙一其後孔用レ線長七八寸尾作二結穿之線一過結阻以二右手之食中二指一挽レ線徐々牽頓之鼓頓有レ度其簧閃鷓成レ聲民家及夷婦女多習レ之且和以歌レ之又一種寬僅半兩端瘦削中作二一牙簧一無二孔線一三片幷用而音各異以二左手前三指一平執而吹以二右手前三指一參差搔二其末一亦呷喔可レ聽似レ有二宮商一此惟二別選及閩州之夷女盛吹レ之云々滇南新語一卷清人張洵が撰也洵號西潭漢軍鑲藍旗人監生歷官雲南迤西道有二買桐軒集一こは藝海珠塵史部地理類中に收たり

（四十八）占夢　占夢はいにしへ夢解（ユメトキ）といひ近來夢判（ユメハンジ）といへり占夢の事夢經萬寶全書など諸書おほかれど明人陳士元が夢占逸旨八卷藝海珠塵子部五行家類の中に收て大成の書也卷一衆占篇第四に衆占非レ一惟夢爲レ大夢與二兆易一準故三代尚レ焉洛出二丹書一乃設二九疇一非法著奚河出二繇圖一乃列二八卦一易法行矣占夢之秘固性命之理而兆易之揆也云々注に漢書藝文志曰雜占者紀二百事之象候善惡之徵一衆占非レ一而夢爲レ大故周有二其官一と見ゆ（頭書）七修類稿廿八古微書卅ノ三丁ガ

（四十九）喉痺狗咽の良方　中陵漫錄一の卷狗咽の條に先年旅僧某の寺に來る忽に氣絕して苦む余按に喉痺の甚きものとして山根を細末して吹入る一晝夜にして始て氣息する事を得たり今此症を按に病原候論曰喉內忽有二氣結塞不レ通世謂二之狗咽一此由二風熱所一レ作與二喉痺之狀一相似是果して此症なりと見ゆ中陵漫錄十四卷江戸藤成裕が撰にて文政九年季夏門人中島嘉春が漢文の序あり寫本也成裕は醫師也

（五十）一番煎じ二番煎じ　藥に一番せんじ二番煎じといふ事中陵漫錄一番字の義解の條に藥を煎るに一番煎二番煎と云此番の字何に因て義を取る事を知ものなし按に香祖筆記曰書冊爲二水潦一所レ浸可レ于二大甑中一蒸而曝之至二二番一乃以レ物鎭二平處一逮レ乾色雖二微漬一而無二損壞一是此番の字を以て見るべし云々

與清曰鷄に一番鳥二番鳥といひ砂石集にも□番鳥といふ事見ゆ

（五十一）金山寺味噌 幷納豆　中陵漫錄四の卷金山寺鹽豉の條に江戸に製す金山寺味噌は他國になし是は乃金山寺豉と云て能く當れり又十二月に至れば何宗によらず豉を作りて旦家に謝す是を納豆といひしは何の說に出ることをしらず金山寺味噌は乃東坡金山贈二寶覺長老一詩誰能斗酒博西涼但愛齋厨法豉香又寄園寄所寄云天下第一者金山寺鹽豉と云これ乃金山寺味噌にして此味に次ぐものなし此說に隨て諸方の寺院に製すれども此味に及ぶ事なし又按に今の味噌は此鹽豉より出たるなるべし云々與清按金山寺味噌は紀伊國和歌山の製を上品とし江戸にても紀州金山寺とよぶ紀伊國にさる寺の名あるにや可レ尋納豆は吉田にて製るは生姜を加たる干納豆也遠江濱松にて濱名納豆とて製るは山椒の辛皮を加たる干納豆也江戸にて汁に調じで食は糸引納豆とてよく〳〵烹たる豆を窒中に納て黏て糸を引をいふ味噌は古今著聞集に飛鳥味噌あり和名抄に未醬あり曾水をミソウヅといふも味噌水の心にや

（五十二）松を植る傳　松を植る時節は寒國暖國の不同ありと雖ども正月彼岸より二月中植れば百に一失なし大木の一尺より五尺に及ぶは掘て鋸にて根を挽切りたゞ命根二三本を殘して切たる廻りによき土を入ておく俗に是を鉢といふ又根をまはしておくともいふかくして明年の二月移し植べし楢は鋸にて切べし楢を切らざれば活ことなし松は沙地によし又黑土眞土もよし濕地は相應せざるよし藤成裕が中陵漫錄四の卷に見ゆまた橘春暉が北窓瑣談に松の木その根さしたるやうに枝もさすもの也枝ぶりを見てその根を知べし外の樹木も大かた如レ此といへり與清曰松は常陸鹿嶋郡に生るもの奇妙也小松を刈取し跡に孫枝を生じて榮ゆるは他所に未きかず戲に引ぬきてなげ捨置にやがて生付といへり余が見聞の松おほかる中に坂東にて見たりしは相摸國藤澤宿と南鄉村の間には松が原あり今も好松四本生立り同國曾我山の六本松早川尻の四本松本所小名木澤の三本松下總國印幡沼邊の大松武藏多摩郡小山田村神明宮の大松同郡下矢部村八幡宮の大松鹿島大神宮の神木など擧盡しがたし高砂住吉武隈辛崎の類の名木は別に古書を

抄出して記すべし

（五十三）炬燵　中陵漫錄五の卷火籠の條に世俗コタツと云字をしらず按に陰鑒が詩に火籠恒煖レ脚又高啓が梅雨の詩に窻寒頓使レ拋二紈扇一衣濕頻催レ換二火籠一これ乃コタツなるべし又七輪と云本字をしらず按に徽瘡秘錄に八卦爐とあるは八角の七輪なるべし云々火燵の事骨董集上編中に見ゆ頭書 犬筑波冬「なまたつの火はつよし又「あつ火をはけに子にかゝるこたつかな」下學集增補下二ノ廿八丁ウ嫩迎記十一丁オに小袖のだいにはこたつのやうなる物にて候くろくぬり候てかな物などあるものにて候云々

（五十四）養生腎藥　白茂一味そのまゝ細末にし蜜にて煉朝夕用れば婦人無病になりて房事を強くし多く子を產しむ男子も腎をまし瘠瘵の症に尤も宜し中陵漫錄五の卷阿蘭秘藥の條にいへり與清曰白茂は異名を連及草本草綱目　甘根同上白給同上雪如來輟耕錄　竹栗膠鄉藥本艸　なごいひ花を箸蘭本草彙言　朱蘭花鏡　なごいへり本朝にてシランシケイシュランランなごいふよし本草啓蒙八に見ゆ又人家ニ多ク栽テ花ヲ賞ス葉ハ箸葉ニ似テ縱に皺多し又菜蕙葉ニ似タリ夏月莖ヲ出シ三四葉互生シ上ニ數花ヲ開ク形蘭花ニ似テ紅紫色香氣ナシ一種白花ナル者アリ葉長大ナリ花家ニ誤テ「ケイ」ト呼ブ故ニ尋常ノ者ヲシケイト名ク又淡紅色ナル者アリ「ウスケイ」ト名ク市中ニ販ク者舶來ハ根瘠小ナリ和產ハ肥大ナリ宜ク和ヲ用ベシといへり本草綱目に癰腫惡瘡敗疽傷陰死肌胃中邪氣敗風鬼擊痱緩不レ收除二白癬疥蟲一結熱不レ消陰下痿面上皯皰令二人肌滑一止驚邪一血邪血痺痾痿風瘴赤眼癥結溫熱瘧疾發背瘰癧腸風痔瘻撲損刀箭瘡湯火瘡生レ肌止レ痛止二肺血一また鼻衄不レ止心氣疼痛重舌鵝口婦陰脫疔瘡腫毒打跌骨折刀斧傷損湯火傷灼などに妙なるよしあり頭書 清人陳士鐸本草新編（全五卷）卷四云白茂味苦辛氣平微寒陽中之陰入二肺經一功專二收斂一亦能止レ血敗疽潰瘍死肌腐肉皆能去レ之數二山根一止二衄血一塗二疥癬一殺レ虫此物近人皆用レ之外治一殊不レ知二其內治更神一用レ之以止レ血者非二外治一也爲二白茂研末一調入于人參歸芪黃芪之內一同吞服其止二血實神夫吐血未レ有二不レ傷一胃者一也胃傷則血不レ藏而上吐突然而胃中原無レ血也血在二胃之外一傷二胃則胃不レ能レ障一血而血入二于胃中一胃不レ藏而上吐白茂善能取餌同二參芪歸芎一直入二胃中一爲二胃中之藪欵塞一致閉則血從レ何來此血之所二以能止一也況白茂又不レ止二治胃中之血一凡有二空隙皆補塞一烏可二徒借一外治一而不一並用以內治一乎或問白茂能填二補肺中之損一固昔年有レ號犯受傷レ胃服二白茂一得レ愈後號被レ殺開二其胸膛一見二白茂填一塞于所レ傷之處一果有レ之乎此前人已驗之方也何必再疑白茂實能是肺填二塞于所レ傷之處一但所レ言止用二一味一服之此則失傳之誤也予見二野史一載二此段一又不レ如二此史言一受刑時自云我服二白茂散一五年得二以再生一不レ意又死二于此一人問二其方一賊云我遇二雲遊道士一自稱二越人一傳二我一方一白茂一觔人參一兩參冬半觔敎二我研末每日服二三錢一吐血症全愈然曾誡我云我敎二汝命一汝宜レ改レ過否則必死二于刑一不レ意今死二于此一悔レ不レ聽二道士之言一也我傳二方乎世一庶不レ沒二道士之恩一也野史所レ載如二此分一用二參冬一爲レ佐以養レ肺用二人參一爲レ使二以益レ

氣則白茂壇ニ補歸中之傷一白易レ奏レ功立レ方甚妙惜道士失レ載ニ其姓名一所謂謎人者意者即羅鵬公之化身耶云々

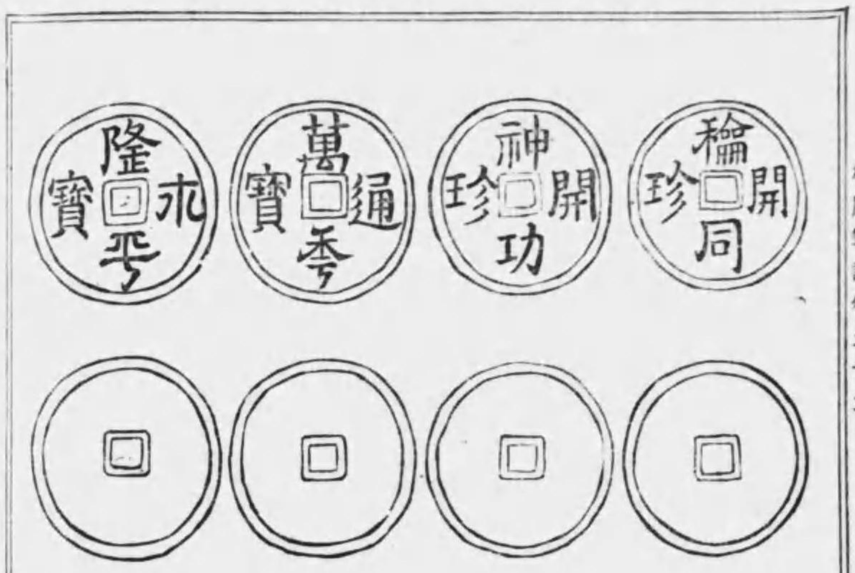
（五十五）杉のさし木の傳　中陵漫錄四の卷插杉條に杉は插木にしたるは皮目の處少白く其内は皆赤身也薩州にては毎年四月の比杉の枝を二尺許に切取り六本を二把として山中の泉に浸し置事四五日取上て赤土の泥中に塗て山野の空地に杖を立て穴を爲し深さ七八寸に至る尤地の堅き處は穿つ事なし此穴中に插む風吹時は廻轉す雨露の潤を歷て自ラ堅定する也大抵百本の内七八十本活是より手を附るに及ばず土地の宜き所は尤長じ易し先春に至てその木の素情を見立葉の先新葉を出さんとするを俗にあう採て插時は百に一失なし苗を仕立て植るに勝れり云々與清曰擫（サシキ）は今年延（ノビ）の枝を插には葉莖かたまりてさす長さ二三寸或は四五寸にし葉おほければ切捨てその本をよく切て赤土の中に黄色なるを採て煉て丸くしてそれに插てさて植る也これを玉擫（タマヅク）といふ良法也何の木にても此定也時刻は雨氣の日巳の刻以前がよし未明より巳刻までを限とすべしさて後に度々水を灑（ソヽグ）がよし物理小識九に杉黏不レ宜水壞種レ之亦發然挺茂不レ久焦枯也と見ゆ

松屋筆記卷之五十二

東都　源與清文儒稿

（一）紙帳　明人屠隆が考槃餘事四の卷帳の條に冬月紙帳或白厚布或厚絹爲レ之夏月吳中橅紗爲レ妙以ニ粗布一爲レ帳底如レ綴頂式紐ニ其三面一前餘半幅下垂上寫ニ梅花一副以ニ布衾荷枕蒲褥一左設ニ几鼎一燃ニ紫藤香一酒相稱通人還了鴛鴦債紙帳梅花醉夢間之意また紙帳の條に用ニ藤皮繭紙一纏ニ於木上一以レ索纏緊勤作ニ顆紋一不レ用レ糊以レ線折縫々レ之頂不レ用レ紙以ニ稀布一爲レ頂取ニ其透氣一或畫以ニ梅花一或畫以ニ胡蝶一自是分外清致云々按に本朝の紙帳これに比ればいと疎也帳は催馬樂に少し儀式帳にさま〴〵の帳の名あり蚊屋は日本紀に蚊屋媛あり考槃餘事は龍威秘書戊集中に收む頒書遵生八牋八卷十三丁ヶ起居安樂牋下恰養勤用事具部に紙帳用ニ藤皮繭紙一纏ニ於木上一以レ索纏緊勤作ニ皺文一不レ用レ糊以レ線折縫々レ之頂不レ用レ紙以ニ稀布一爲ニ頂取一其透氣一或畫以ニ蝴蝶一自是分外清致唐宋千家聯珠詩格十の卷用ニ讀易字一格に謝叠山が紙帳の詩あり一牀玉雪堂無レ暇纏有ニ生香一鼎有レ茶夜半起來讀ニ周易一好看ニ到明月透ニ梅花一增注に此言紙帳之潔如ニ玉雪之無一暇云々又十の卷用不倒字ノ詩に人間蟻垤王侯夢不レ到梅花紙帳邊驚耕錄十二ノ七丁ヶ同廿八ノ山眠の九丁ヶ餘林五鳳集廿五文天祥全集四卷六丁ヶ紙帳の詩あり紙帳白如レ雪上有ニ坐客影一白不ニ自由一黑光蕩無レ定人德影已散依然雪花堂須臾兼レ燭眠相忘心自靜

（二）日本國詩并餞　清人陸次雲が譯史紀餘二の卷外國詩編の部に朝鮮國詩に金訴が對馬島舟中夜作獨泛ニ孤蓬一臥未レ安西風一夕晚潮寒海天秋色尋無レ處却向ニ潘郎鬢上一看云々日本國詩に釋全俊（全俊姓神氏秀崖日本國高井縣人詩見ニ宋學士集中一）一回錯買離レ鄉舶抹過鯨波萬里間震旦扶桑無異異士參方飽看浙西山○無名氏（嘉靖七年過ニ風颶一至ニ通州守禦所一訊レ之乃朝鮮主試官出ニ湧幢小品一）無題白浪滔々上接レ空布帆十幅不レ禁レ風此身若葬ニ江魚腹一萬里孤臣一夢中能作ニ此詩一可ニ以主一試朝鮮一矣○貢使失名咏柳湧金門外柳如レ金二日不レ來成ニ綠陰一折ニ取一枝一城裏去數ニ人知一道是春深○普福使臣在レ途有レ感未遊上國看ニ中原一細嚼ニ青松一咽ニ冷泉一慈母在レ堂年八十孤兒爲レ客路三千心懷ニ北闕一浮雲外身在ニ西山返照邊一處々朱門花柳巷不レ知何日是歸年○釋天祥（以下三人見ニ泳景顯治海遺珠集一）寄ニ南一珍上人居處僻心與ニ石泉一清道在從違俗身間不レ用ニ名空階松子落雨逕蘚花生怪得稀相見年來懶到城僧詩無ニ釋子氣一又有ニ本色故佳一○贈ニ李生一異域無ニ親友一孤懷苦ニ別離一雨中春盡日朔外客歸時花落青山路鶯啼綠樹枝從レ今分手後兩地可ニ相思一○送レ僧歸ニ重慶一東西千萬里來去一身輕碧鳳山前別黃梅雨裏行江長巴子國地入夜郎城昔我經過處因レ君動ニ遠情一○哭ニ宋士熙一乘山搖落日那忍哭ニ先生一老眼非レ無レ淚深交最有レ情人猶惜ニ才調一天可レ厭ニ聰明一書法幷詩律空留後世名○夢裏湖山爲ニ孫懷王一作杭城一別已多年夢裏湖山尚宛然三笠樓臺晴似レ畫六橋楊柳晚如レ烟青雲鶴下梅邊幕白髮僧談石上緣殘睡驚來倍惆悵可レ堪身世老ニ南溟一○釋機先挽逸光古先生昨日來過レ我今朝去哭ニ君那堪談笑際便作ニ死生分一曠達陶徵士蕭條鄭廣文猶憐埋骨處西北有ニ孤雲一○釋大用挽逸古光氣宇自豪邁孤超傲世時冥鴻冲レ漠志野鶴出レ塵姿筆勢雲烟起詩名草木知論交三十載死別抱ニ長悲一○嘻哩嘛哈（使臣答ニ大明高皇帝問一日本風俗一洪武二十年）國比中原國人同上古人衣冠唐制度禮樂漢君臣銀甕勾新酒金刀膾錦鱗年年二三月桃李一般春不レ愧ニ使臣一○答里麻（使臣或云即嘻哩嘛哈）西湖一株楊柳一株花原是唐朝賣酒家惟有吾邦風土異春深無ニ處不ニ桑麻一此詩有レ謂貶ニ中國一之心非ニ使臣所一宜出一錄レ之以存ニ其事一○釋左省口號呈ニ沈潤卿一醉中不レ覺庵簷滴吟作燈前細雨聲云々また三の卷外國錢文の條に日本國錢舊譜曰日本國錢四品並徑寸重五銖其文隸書一曰和同開珍二曰神功開珍三曰萬年通寶四曰隆平永寶其國延歷中鑄また乾文錢宋會要云太平



與國九年日本僧寂然等浮ㇾ海而至云其國用ㇾ錢文曰ニ乾文寶一とあり日本錢の事三才圖會にも見ゆ倭漢名數を考合すべし譯史記餘四卷龍威秘書第九集に收む

頭書 錢ノコト松の落葉四ノ卅三丁オ

(三)西方聖人匪ㇾ佛　寄園寄所奇八の卷豕渡寄篇の稱謂誤の條に列子述孔子曰西方有ニ聖人一俟ㇾ佛者以爲ニ指ニ釋氏一而言皆妄也國語姜氏曰西方之書有ㇾ之曰懷與ㇾ安實疾大事注云周詩誰將ニ西歸一西方之人皆謂ㇾ周也予謂孔子果有ニ是言一謂ニ昔文王一也於ㇾ佛何與至ニ天通直指ㇾ佛爲ニ西方聖人一其學可ㇾ知矣 坦齋通編 云々按に列子西方聖人の說坦齋通編よく〳〵その惑を開たりといふべし

(四)筆の松管　唐馮贄が雲仙散錄に幽人筆司空圖隱ニ於中條山一斐ニ松枝一爲ニ筆管一人問ㇾ之曰幽人筆正當如ㇾ是汗漫 從容錄 云々按に陸奥松島天の橋立などの松枝を

もて筆管に作りしもの今も世にもてはやして伊勢の濱荻野田川玉川の萩などともに賣品おほかり

(五)興米　興米は和名抄舊本今昔物語などその外古書の所見擧盡しがたし桂川地藏記には道德興米(ダウトクオコシノ)ともあり雲仙散錄吳興米炊ニ之甑一香白馬豆食之齒醉號國夫人厨吏鄧連以ニ此米一擣爲ニ透花鎚一以ㇾ豆洗ㇾ皮作ニ靈沙糰一以供ニ翠鸞堂一品物類聚記 云々吳の國は粳米の佳品を出せば興米には用るなるべし

(六)門の關栗木を用れば盜を除　雲仙散錄栗木爲ㇾ關條に凡門以ニ栗木一爲ㇾ關者夜可ニ以遠ニ盜 從容錄 云云

(七)猿啼處生ㇾ厥　又啼猿生ㇾ厥の條に猿啼之地厥乃多有每ニ一聲一遽生ニ萬蕊一 郭璞幽記 云々

(八)買春錢　又買春錢の條に進士不第者親知ㇾ供ニ酒肉一費ㇾ號ニ買春錢一 豕平舊纂 云々按に買山事山谷が集に見ゆ

(九)苦吟(ニヨブ)筆記十ノ二　又苦吟の條に孟郊然眉毫盡落裴祐袖ㇾ手衣ㇾ袖至ㇾ穿王維至走入ニ醋甕一皆苦吟者也 詩源指訣 云々按に苦吟はにようぶといふべしによぶの事已にいへり

(十)左ねぢり　俗に左ねぢりといふは左繩によれる語也雲仙散錄左撚巾拭ㇾ面條に陽華用ニ左撚巾一拭ㇾ面倍有ニ光彩一 白慶傳 云々といふ事も見ゆ雲仙散錄一卷蠻海珠塵子部小說類中に收む唐馮贄が撰とも又は宋王銍が僞託ともいふ

(十一)酒に不ㇾ醉方　飲酒家酒に醉ざる方あり雲仙散錄嚼ニ雞舌香一條に飲ㇾ酒者嚼ニ雞舌香一則量廣浸ニ半天回一則不ㇾ醉 酒中玄 云々と見ゆ

(十二)茗戰　并品茶本非茶　太平記に本非茶あり栂尾を本とし他を非とすこれを戰はしむる事と見ゆ近來品茶の會あり雲仙散錄茗戰の條に建人謂ㇾ鬪ㇾ茶爲ニ茗戰一といふ事あり 頭書 延喜式に茶椀茶籠ナドノ名見ユ

(十三)遠鏡　并耳學問　西洋人湯如望が遠鏡說に夫遠鏡何妨乎妨ニ於大西洋天文士一也其用之利可ニ勝言一哉蓋凡人視ニ近與ニ大易視ニ遠與ニ小難遠鏡則無ニ遠近無ニ大小一者也約略言ㇾ之天象地形不ㇾ出ニ其照而至ㇾ若ニ山海之間一尤爲ニ備ㇾ盜之先資一補ニ益人世一亦大矣奈何忽爲ニ悅ㇾ目快ㇾ心具一也云々又云夫遠鏡者二鏡合ㇾ之以成ㇾ器者也其利用既如ㇾ斯矣乃分ㇾ之而製造如ㇾ法則又各利ニ於用一焉即中國所謂眼鏡也云々と見えてその圖

を載たり自序に人身五司耳目爲レ貴無レ疑也耳與レ目又孰爲レ貴乎昔亞利斯多稱耳司爲二百學之母一謂凡授受以レ耳學問所二以彌精彌廣一也若二目司一則巴拉多稱爲二理學之師一何者蓋當二其徒與レ物遇見一其然一即索二其所一以然一由レ蠡入レ細由二有形一入二無形一理學始終總目爲レ牖矣而不二寧惟是一明光色光較形聲臭味獨居レ上分不二既屬一於目一乎觀夫亞尼瑪以レ目爲二居止一孟子謂存二乎人一者莫レ良二於眸子一則凡情開意動之微必達二於目一善惡莫二掩有一如レ執二左契一然者且耳之於レ聲也有レ待目之於レ形也無レ待聞每後見每先聞每似見每眞聞僅有二輕重清濁一見豈特元黃采素而已哉物體有二大小方圓邪正動靜一數有二多寡一位有二遠近一疇非二於目一辨者乎誠若レ是則目之貴二於耳一也明矣雖レ然耳目皆不レ可レ廢者也則佐耳佐目之法亦皆不レ可レ廢者也第佐耳者用力省以レ管則遠以レ螺則清利物出二於天成一其巧妙自無レ可二得而言一佐目者用力煩管以爲レ眶鏡以爲レ晴利物出二於人力一其巧妙誠有レ可二得而言一者上無レ可二得而言一者上秘レ之則欺此遠鏡說之所二由述一天啓六年歲次丙寅仲秋月大西洋湯如望題とあり此文中に耳學問の事あり湯如望は明の天啓

中に西洋より來れる人也遠鏡說一卷藝海珠塵子部天文奇器類中に收む頭書帝景景物略上卷西城內部天主堂條に堂在二宣武門內東城隅一大西洋奉二耶蘇教一者利瑪竇自二歐羅巴國一航海九万里入二中國一云々其國俗工二奇器一云々遠鏡狀如二尺許竹句一抽而出出五尺許節々玻璃眼光過レ此則視二小大一遠近一云々耳學通鑑綱目宋文帝書言故事三ノ九丁ナリに口耳之學といふ事有小人之學也入二乎耳一出二乎口一云々注に記誦而已未レ得二於心一云

（十四）程氏の學東坡司馬君實共にうけず　程氏の學を土木偶盜名の學とて東坡が譏罵せしことまた程頤哲宗を諫て哲宗の色不平なるを聞て司馬溫公かゝる儒生をば人主に親近せさすべからずとて歎息せし事沈作哲が寓簡五の卷に見ゆ寓簡は知不足齋叢書第一集に收む

（十五）古代めきたるものすきは君子の所レ恥　寓簡五の卷に司馬君實依二禮記一作二深衣冠簪幅巾搢帶一去二朝服一則衣レ之謂二邵堯夫一曰先生可レ衣レ此乎堯夫曰雍爲二今人一當レ服二今時衣一耳君實歎二其言有レ理而合二于通變之義一也近時士大夫好爲二怪服一號曰二唐妝一予謂稽古不レ至二秦漢以上一固已淺矣而況於レ唐乎云々與清按に近來のなま古學者が古風を好て總髮になり某麻呂と呼びなま儒者が唐風を學などみな無用のものわらへ也

（十六）和漢樂人の長壽　續日本後紀十五に尾張連濱主百十三歲にて長壽樂を舞和歌を奉りし事見ゆ寓簡五の卷に漢孝文時得二魏文侯樂人竇公一亦年一百八十餘歲獻二其樂書一自言能鼓瑟導二引吾意一とあるは和漢同日の談といふべし

（十七）小惠婦人の仁　沉作喆が寓簡卷六に近世居二長吏之任一者往々好レ行二小惠一而愛レ人以二姑息一長レ惡容レ姦以媚二愚民一而買二虛譽一布衣與二冠帶一競則布衣勝不レ問二理之所在事之曲直一也其弊至二於閭巷小民凌二犯士類一善良受レ弊不レ得二自伸一此賊民之最甚者書曰罔レ違レ道以干二百姓之譽一罔レ咈二百姓一以從二己之欲一然則非レ道干レ譽與二害レ民從一欲者一其惡均耳故聖人深戒レ之諸葛武侯曰治世以レ德不レ以レ惠至論也云々與清曰此論今の世の御代官郡奉行などの職に居人に熟讀せしむべき事也婦人の仁にして大義を知らざるもの世におほかるはもと文學の國ならざれば也

（十八）齊レ家治レ國の術　寓簡卷六に家多二偏愛一者衰國多二嬖倖一者危人主自聰明而多能者其臣益欺朝混亂而多レ制者其政益紕官聚斂而多レ費者其積益虧兵民窮瘁而懷レ怨者其心必離賢士失レ職而不レ容者其志必睽

政令苛虐而好レ殺上下剝急而無二仁恩一者其禍祚必移自レ古以レ此亂亡蓋徹而莫二之知一也忽レ焉其可レ悲云々與清曰淵清して魚不レ息人潔して衆不レ和齊家治國の術豈可レ易哉

（十九）弄臣　漢孝文帝鄧通を愛す丞相申屠嘉通が不敬を責む文帝謝二丞相一曰此吾弄臣君釋レ之云々豊大閤の曾呂利など又弄臣といふべし

（廿）永樂大典　姜紹書が韻石齋筆談上に成祖勅二儒臣一纂二脩永樂大典一部一係二胡廣王洪等編輯一徵召二四方文墨之士一累二十餘年一而就計二万二千一十一卷一万一千九十五冊目錄六十卷因二卷帙浩繁一未レ遑二刻板一止レ寫原本至二宏治間一藏二之金匱一嘉靖卅六年大內回祿世宗亟命レ那救レ書幸未レ焚勅二閣臣徐文貞階一復令二儒臣照式一摹二鈔一部一當時供二謄寫一者一百八名每レ人日鈔三葉自二嘉靖四十一年一起至二隆慶元年一始克告レ竣云々按に天下大部の書永樂大典に過たるはなし本朝にては禮儀類典五百十五卷余が群書搜索目千五百卷此外大部の書をきかず

（廿一）兵主神　宋人吳仁傑が兩漢刊誤補遺一の卷祭蚩尤條に封禪書祠二八神一曰天主地主陰主陽主日主月

主四時主面兵主居ニ其一一焉兵主所レ祠則蚩尤之星也云々此說神名帳に注すべし兩漢刋誤補遺十卷知不足齋叢書第一集に收む頭書兵主神史記タマツシ

(廿二)玉づさ　玉づさは玉豆之にて慧苡なるよし已に殘月抄にいへり廣群芳譜藥譜七に慧苡一名解蠶一名苞實一名薏米一名慧珠子一名西番蜀秣一名回回米一名草珠兒云々史記夏本紀注に禹母修已見ニ流星貫レ昴又吞ニ神珠慧苡一胸坼而生レ禹云々後漢書馬援傳に初援在ニ交趾一常餌ニ薏苡實一用能輕レ身省レ慾以勝ニ瘴氣一南方薏苡實大援欲ニ以爲レ種運還一載ニ之一車一時人以爲ニ南方珍怪一權貴皆望レ之云々此外救荒本草など引出て注すべし頭書類聚名義抄七卷子部に薏苡子ツシタマ云々同八卷艸部に鶏ツシタマ薏苡ツシタマ云々

(廿三)龍鬚席　雅亮裝束抄の類古書に龍鬚の名おほく見ゆ廣群芳譜卉譜六に龍鬚草本草石龍芻一名龍鬚一名龍修一名龍華一名龍珠一名懸莞一名草續斷一名縉雲草一名方資一名西王母簪簇生狀如ニ粽心草及鳧茈苗一直上夏月莖端生ニ小穗花一結ニ細實一並無ニ枝葉一今吳人多栽蒔織レ席他處自生者不レ多云々山海經賈超之山多ニ龍修一註龍鬚也似レ莞而細生ニ山石穴中一莖倒垂可レ爲レ席云々崔豹古今注龍鬚草一名縉雲草江東亦織以爲レ席號曰ニ西王母席一云々李白詩に莫レ捲龍鬚席從レ他生ニ綱絲一云々

(廿四)八丈草　八丈島に八丈草あり廣群芳譜卉譜六に南史扶桑傳扶桑東千餘里有ニ女國一食ニ鹹草一如ニ禽獸一鹹草葉如ニ邪蒿一而氣味鹹とあるものこれ也頭書アシタグサト云

(廿五)雪夢澤　非犬戎　世人雲夢澤を一澤の名とおもへるは誤也清人陳士元が江漢叢談二の卷三楚の條に禹貢雲土夢作レ乂分ニ雲夢一爲レ二といひ司馬貞索隱左傳桓四年定四年などを引て雲と夢と二澤なるよしいへり同卷槃瓠の條に羅長源路史云黃帝元妃西陵氏生ニ三子一曰昌意曰玄囂曰龍苗龍苗生ニ吾融一吾融生ニ卞明一卞明封ニ於棄一棄生ニ其國一居ニ南裔一生ニ白犬一是爲ニ蠻人之祖一夫卞明乃黃帝曾孫而白犬爲ニ卞明之子一如ニ後世名レ子爲ニ於菟犬子豹奴虎犹之類一非ニ眞犬一也西陵氏宗國在レ楚即今夷陵地卞明乃西陵氏之胤則徙居ニ南土一理或有レ之豈得レ以ニ其子一爲ニ眞犬一哉既曰ニ白犬一又安得レ謂ニ槃瓠毛有ニ五采一也又郭景純玄中記云高帝時犬戎爲レ亂帝曰討レ之者以ニ美女一封ニ三百戶一帝之狗名ニ瓠槃一去ニ三月而殺ニ犬戎一以ニ其首一來帝以レ女妻レ之不過而橋動欲レ傾魯班在レ下以ニ兩手一托定而堅如レ初至レ今橋上有ニ張神乘驢痕一橋下有ニ魯班兩手托迹一出ニ夷堅續一云云と見ゆ葛城の久米のいははしに引注すべき事也

(卅)青鮒　長明發心集五の卷四丁に錢を青鮒といふよしをくはしくいへりそは博物異苑蟲魚部に青鮒似レ蟬而差大其味辛可レ食每レ生レ子必於ニ草葉一大如ニ蠶子一人將レ子歸則母亦飛來即以ニ母血一塗ニ錢八十一文一以ニ子血一復塗ニ餘錢一每レ市レ物或先用レ子者即母歸用レ母即子歸如レ此輪還不レ已出ニ搜神記一云々と見えたるが出處也頭書珍珠船三ノ十丁ウに青鬼一名錢續取毋レ殺血塗ニ錢繩一入ニ龍腦香少許一置ニ櫃中一焚ニ一爐一薰レ之其錢並歸ニ繩上一

(卅一)火鼠　竹取物語に火ねずみのかはぎぬあり抄に齋東野語と華夷珍賦考を引たり按に博物異苑蟲魚部に火山中有ニ火鼠一重百斤毛長二尺餘細如レ絲可ニ以作一布神異經炎洲火林山有ニ火光獸一大如レ鼠毛長三四寸或赤或白晦夜即見取ニ其毛一可レ爲レ布出ニ海內十州記一云々此說を引もらしゝはいかにぞや頭書史記大宛傳安息國の條の注に火浣布火鼠皮の事見ゆ

(卅二)烏賊　烏賊の字は烏の賊といふ心也博物異苑魚鼈部に烏賊魚嘗自浮ニ於水上一烏見以爲レ死便往啄レ之乃卷ニ取烏一故謂ニ之烏賊一腹中血及膽正黑出ニ南越記一云々と見ゆ和名抄に校合すべし

レ可ニ教訓一浮ニ之會稽東海中一得レ地三百里封レ之生レ男爲レ狗女爲ニ美女一是爲ニ大封氏一此又非ニ蠻之祖一也云云按に犬戎の說太平記に引注すべし頭書能改齋漫錄八夢溪筆談四ノ六十丁ウ　客齋四筆一ノ二丁ウ

(廿六)天目山　甲斐國に天目山あり武田勝頼敗亡してこもりたる地也明人王世貞が博物彙苑山洞部に天目山在ニ越州一高二千九百丈周廻八百里出ニ圖經一山上俯視ニ雷雨每ニ大雷電一但聞ニ雲中如ニ嬰兒聲一殊不レ聞ニ雷震出ニ眞境錄一山有ニ兩湖一如ニ左右目一故名出ニ太平寰宇記一云々と見ゆかしこの名にまねびたる也けり

(廿七)陰陽石　鎌倉鶴岡の社地に陰陽石あり博物異苑土石部に宣都郡有ニ陰陽二大石一陰石常潤陽石常燥旱則鞭ニ陰石一必雨雨則鞭ニ陽石一即止出ニ初學記一云々と見ゆ

(廿八)牡丹石　相摸國筑井縣青野原村に牡丹石あり博物異苑土石部に牡丹石慈利武口寨石上有レ花如ニ堆心牡丹枝葉一繚繞雖レ精ニ於畫一者ょ莫ニ能及一或以レ物擊ニ碎其花一拂ニ拭之一其花復見重疊不レ一出ニ大明一統志一云々その體少違たれど名は相おなじ

(廿九)岩橋　博物異苑宮室部に趙州石橋乃魯班所レ造極爲ニ堅固一意謂今古無ニ第二手一矣有ニ張神一乘レ驢過レ之乃卷ニ取烏一故謂ニ之烏賊一腹中血及膽正黑出ニ南越記一云々と見ゆ和名抄に校合すべし

(卅三)龜の鳴　新撰六帖爲家卿歌に「川こしのをちの田中の夕やみになにそときけは龜のなくなる」龜のなくこと人口にいへどたま〳〵の事なれば聞くことあたはずスッポンもスポン〳〵となくよりよびし名也博物異苑魚鼈部に能言龜漢元封二年過國獻ニ能言龜一一如ニ人言一出ニ洞冥記一云々とも見ゆ

(卅四)大人米　大人米の事さきにもいひたり駿河國米宮の神體は大人米なるべし博物異苑穀菓部に西域摩偈陀夷有ニ異稻一巨粒號ニ供大人米一出ニ孔子六帖一と見ゆ

頭書　楚天國草子廿二丁オに廿四五ばかりの天女瑠璃のごきになが珍珠船一ノ十九丁オに鄧都稻名ニ重さ一尺あるよれのしろくうつくしきはんなそなへて來り云々思ニ其米如ニ石榴子一亦以上ニ獻仙宮一

(卅五)捧心方　捧心方上下二卷あり序云自レ有ニ生民一以來未レ嘗一日無ニ醫藥一也其濟生之利大矣故神農氏嘗レ草軒轅氏出レ經素女岐伯倉公越人之徒相時而間出ニ厥說一也竢ニ仲景思邈一而釣ニ其玄一厥脉之獲希范叔和而探ニ其頤一暨ニ乎官局公選世醫家藏良方確論累代之書一則奚翅充レ棟汗レ牛而已矣諒非ニ斯方一惡得レ以扞ニ內風寒暑濕之攻一乎外一五勞六極之傷レ乎內一乎哉中ニ蠱毒一而再生遭ニ折傷一而不レ枯而致ニ夭於老一則孰爲レ之歟故曰庖犧氏之前巢穴以與ニ蟲蛇禽獸一同レ處者不レ足ニ敢言一焉自レ有ニ室居烟食之人一以來未ニ嘗一日無ニ醫藥一也大矣濟生之利也矣我搏桑國孤ニ立乎黑洋之東一而與ニ中華一津絕矣雖レ然文才人物仁義所レ宅諸子百家之所レ業上山川鍾秀海河醖與ニ根異苗金石銅鐵之類一惟天之所レ賦恐弗ニ多讓ニ中華一焉而況越レ漢跨レ瀛傳ニ中華之道一而棚藏而皈者不レ知ニ幾千萬人一焉是以惟業盡東矣於レ是乎惟醫爲ニ濟生之尤一乎哉而我邦以ニ濟生業一厥世者唯和丹兩家已矣近世旁支橫泝爭レ道而出和氣久少レ聞其傳ニ丹家一一服亦落如ニ曉星一矣爰有ニ梶原淨觀公一師ニ承丹家一而居ニ其右一其我邦秦越人乎有ニ萬安頓醫兩方一萬安秘而弗レ傳頓醫今行ニ于世一矣厥後曰ニ通全一亦莫ニ特士一也猶嫌ニ我邦之鮮ヲ書附レ舶南遊其業益大其觀改焉自今四傳而人曰ニ長淳一浮屠氏也韜晦以婆娑於世一然而才德所レ薰莫ニ以加ニ其臭一焉雖ニ醫術集ニ成于茲一而倫於ニ之才憙一則蓋其緒餘士苴焉耳我友中川公以ニ俊逸穎悟之質一依レ淳而學ニ自ニ方論脉訣藥性鍼灸吹咀劑和之書一未有聞而不求而觀不者箕裘不遂咄々迫焉公念近代醫家者流覺術腐ニ于內一聲聞過ニ于外一韓氏肥瘠病否之說不レ知而濟生无ニ澤潤一然選ニ方兩卷一目曰ニ捧心一一病之下必有ニ病證一有ニ脉證一載方必取レ自得ニ其効一者ヨ語必述ニ古方一私ふりよくをごる事都の町々みなかくのごとし天文つちのえさるのとし五條京極に萩原新之丞といふもの有ちかきころ妻におくれて云々按に七月灯籠の事明月記寛喜二年七月庚寅十四日近年民家今夜立ニ長竿一其末梢附ニ加灯樓一物張レ紙擧レ燈遠近有レ之逐レ年其數多似ニ流星人魂一云々親長卿記文明八ノ七ノ十四條に御燈爐進上宮御方二宮御方同進レ之云々同文明九ノ七ノ十四條に今日燈爐三進上云々同文明十三ノ七ノ十四條に燈爐三進ニ上御所一如ニ例年一云々同文明十九ノ七ノ十四條に灯爐二進上如レ例(一親王御方進上也)十五日晴同ニ道孫子一(阿賀丸、敦長四歳)參內見ニ物御灯爐一於ニ常御所一被レ下ニ天盃一祝著之云々同延德三ノ七ノ十五條に御灯爐可ニ拜見一云々同長亨三ノ七ノ十六條に頭書甲陽軍鑑八卷十七自ニ內裏一御燈爐可ニ見物一之由有レ仰下婆參內云々品九丁左に永祿七年甲子七月十四日の夜太郎義信公長坂源五郎御供にて燈籠御見物にことよせて御城を御出あり忍びて飯富兵部所へ御座なされ候云々同十下卷卅三品卅八丁右に永祿七子年七月十五日の夜燈籠御見物とありて太郎義信公長坂源五郎御乳母曾彌周防たゞ兩人御供申飯富兵部少輔所へ御座候て八ツ時分にいかにも隱密の體にて御歸り被レ成候云々

(卅七)八丈嶋　八丈嶋の事は北條五代記五の卷續伽婢子一の卷に板部岡江雪齋が渡りて聞きしよし見ゆ伊豆志南方海嶋志七嶋日記の類八丈嶋の由來を記したる書少からず余が國鎭記にも八丈の富士の事をいへり伊豆の嶋の事平治物語に見え大嶋の事は三代實錄に神造のよしあり

(卅八)青砥左衞門が名乘　太平記卅五北條九代記などに青砥左衞門が善政の事見えたれど名乘を欠たり

續伽婢子二の卷六丁に青砥左衞門藤孝とあり

（卅九）燒飯 并屯食 續伽婢子二の卷八丁にやきめし二つ持て行かと見えしと有越後の鎌信が事をしるしたる條也にぎりめしともムスビともいふものは古は屯食といへり此燒飯はにぎり飯を燒たる也 頭書新撰狂歌集上廿二丁オ羇旅部に道のほとりにてかれいひくふとて「もろともにあはれとおもへ燒めしよ涙の外に汁菜もなし」

（四十）石垣 石垣といふ名古くはきこえず甃といへるが古名也築石ともいひけん筑前續風土記に筑紫はもと唐の敵を拒んために石垣を築たる故築石の義也といへり續伽婢子三の卷一丁に門の前についぢたかく石垣はけづり立たるごとしと見ゆ 頭書石垣四域記八ノ十九丁オ新撰狂歌集六丁オ

（四十一）矢立硯 矢立硯の名目伊勢貞丈が雜說問答に見ゆ續伽婢子三の卷十丁に永谷兵部少輔といふもの聞書のために持たるやたてとり出し歌二首を雜紙に書つけ云々と見えたり 頭書小敦盛草子にこしより矢立とり出し若君の左の袖に一首の歌なあそばして云々盛長記太平記長門平家愚得隨筆附考下名物考調度部十一

（四十二）女の稱に某子といふ事 女の稱に某子といふ事古く某子と貴女におほくいへりされど下賤の女にもいひし例 おほかり續伽婢子三の卷十丁に神祇官のわたりに富有の家ありむすめ一人持たり牧子と名づく年十七八ばかり云々同六の卷四丁に江州坂本に正木のなにがしがむすめ龍子いとけなくして才智あり云々などゝ見ゆ 頭書某女と云るが古多し續尻十二ノ上長谷寺縁起文五丁オに愛大和國高市郡八木里小井門子云女人云々後太平記十一ノ十九丁オ櫻花無盡藏に花子續紀に八重古今に「まち」後撰に「そで」大和に「そつ」

（四十三）アノ山見サイ 此山見サイ あの山見さいこの山見さいといふ諺は似我蜂物語上十一丁ウにあの山見さい此山見さいといたゞきつれおはら木を此舞は誰此うたふものはたそ急にまなこをつけよ〳〵と有此物語は寛永の比のものと見ゆ板本上中下三卷あり

（四十四）茶の湯茶人歌舞妓茶器 老の寢覺に去程に四海浪しづかにて國をさまりしかば武士の弓をはるわざゆるやかになり茶の湯を專にすきて森上林の茶を吟味し宇治醒井の水を輕重を試み百姓をせたけとりて金銀をたくはへ無益の道具を買求遊女歌舞妓にたはふれて小唄をどりのよしあしをえらびよしなき者に施して忠ある士に恩賞なければ家來のものども恨てよき兵は退也云々又云むかし足利の家に高越後守とて權をとり威を振しが一年河内國へ下り石川河原と云所に陣をはり勢猛なるまゝに其あたりの寺社

の塔の九輪をおろして茶釜を鑄させけるに上に似る下の者にて我も〳〵と九輪をとりければ和泉河内にありし塔をば皆とりつくしけり塔をこぼち寺を破る罪は無量也と佛も說おきける間此越後守惡行のむくいにやいく程なき內に上杉畠山の人々にうたれけり是を聞傳へし後の人もうしとはおもはずして又ふるき塔の九輪をとり九輪釜とてもてあつかひけるこそははかなけれこゝに近來數寄の師ありいにしへの茶湯の樣をもぢきて新き茶の具を用ひ今燒の茶椀茶入にあら釜する梅竹をきりて花いけふたおきとし唐物よりも價高しかくては古の數寄道具の寶物はみなすたりてなんとて大やけより終にかのすきの師を亡し給ひけりされども數寄の道猶たえずして茶好の男再此道をおこし當流とぞいひけるみな人此男の眞似をすることに成ぬある時彼數寄男色好の者なればひそかに遊女を數寄屋の內へ呼入けるにあるじの女聞付てさうなきねたましき者なれば長太刀を振廻し茶壺をけわり走出る遊女たまりあへずしていにけり彼女やすからず思ひけん長太刀にあたるまゝに露地の木の枝はら〳〵とおとして入にけり其後二三日程へて茶の會ありしに客これを見て木のさまかはれりめづらしとて數寄好の人聞傳へ〳〵木の枝をもぎ明たり彼けわりたる茶壺をつぎおけるを見る人は無病なるより壺はつぎめの有こそ見所もおほけれとてわれぬ壺をも漆にてつくろひけり或士壇を高くつきあげて數寄やをつくり遠山をながめんとて窓を明たり是よりみな人地を高くつきて數寄やを作り改め窓を明たりその家に有まじきかたなれども窓なくば叶ふまじとて內々の住居の見ぐるしき方の見えわたるもいとはず窓を明るは耻かき窓にてぞ有ける或露地の狹きは水の引かたなきまゝに池をほり其上に橋をかけ通ひけるを見て我も〳〵と露地に池をほりたり其水のあさく流るぞ涼しくも見ゆるに深き井の水なればくろみわたりてすさまし或うなゐ子のもてあそびに鳩梟を飼おきしが會席のをりふし木しげき奧の方より啼聲きこえしかばさながら山里の樣におぼえたりといふほどこそあれ我も〳〵と鳩梟かひもとめしにぞ價鷹よりも高し當流の數寄を好める人は虎を猫とおもひ頗狗に似たりいにしへの茶好と聞しはいさぎよき心を宗としきよらかにしてかざらず信を盡し禮を

先とし先德の高き墨跡をかけては文字をよみ義理を改め數寄の道の心をきよめ今の人の墨跡をかけて見る人は紙の中の長短古き新しきをいひ文字をよみ得ねばたゞその價いかほどせんなどゝさだしよき道具かひもとめたるも我寶とせんにはあらで□さき買てもがなとねがひ新しき物をば手ぐろめし人目をぬきあたひをとらんと云巧けり「いさきよき茶の湯の水を汲けるに流のするはにこりこそすれ」云々老のねざめ一卷寫本也與書に于 時寛永の初やよひの下の弦德峰老人洛陽のほとりの草菴にしてしるしおきぬと有又寛永二年三月烏丸大納言光廣卿の跋あり 頭書 茶人は古くは茶飲といへり太平記卅ノ廿四丁ォ持明院殿吉野遷幸の條に茶飲連歌仕ヲ集テ朝夕遊ビ興セサセ給シカバ云々

（四十五）つぼ〳〵 茶人利休居士が好の形とてツボツボといふ形ありかゝるさまにて障子壁などの摸樣または透などにして茶席の物數寄といへりこれもとは京都稻荷山にて小兒の翫物に田寶とて賣土器也そは土を丸き壺の貌にして乾かためたる物也そを買たる者もてかへりて家の荒神に手向る也文政六年の夏京都境町御門の東六角殿の地内にて柳馬場の突當りの土中より古き田寶の布目ありて丸きさしわたし一寸餘の古物廿許掘出たる事あり按に田寶はもと稻荷山の土を得て歸りて田にちらし其年の豐熟を祈るわざせしを田寶納ん料などゝて壺にしそめしにやさてその壺を得て歸りて田に祭れば豐作なるよしいひ傳へしに起れるなるべしそをツボ〳〵といふは壺をいくらも物の摸樣にせるゆゑ壺々といへることゝうつなし

（四十六）茶屋茶店 鵜飼信興が和漢雜笈或問に水茶屋は日本近來ノ樣ニ思ヘドモ更ニ近來ノコトノミニモ非ズ後鳥羽院城南離宮ノ御幸ニ桂ノ里ノカタヘニアヤシクカリニシツラヒタル軒端アリ朝ケノ烟ニ羹ナドシタテケル有樣見ユレバ後鳥羽院等ノ御覽有テ御隨身ナル者ニ尋玉ヘバ秦氏雅常ト云者答奉テアレ大君ノシラセ玉フモノニハ非ズ下部ノ往來ノ旅人イサヽカ立酒ナン呑侍リケルカリ店トナン申侍リケルモノ也ト申上ケルコト後鳥羽院和歌集ノ中ニ見エタリト云々與清按に後鳥羽院御集に此事見えずこゝに引たる文もいと拙くて御集などに有べき體ならず此作者が僞作なること疑なし茶屋といふ名は關藤川記五丁ォ宗長手記上ノ卅四丁ウ東國紀行卅九丁ウ五ォなどに見ゆ此和漢雜笈或問一名は水戸史館珍書考と號して元祿昭陽孟春把ニ觚於武陵小石巷ニ鵜飼信興自序とあり始終僞作名の書を引て蒙說を立世を欺き人をおどさんと巧し書にて一事も取事なきもの也桂秋齋が著書の上に立ん事かたき僞說家のしわざ也 頭書 旅宿問答三丁ォに茶屋ノアリケルニ腰ヲ

ヤスメテ居ル云々ニ水記享祿五年二月六日ノ條に渡ニ御于万里小路第一於ニ茶屋一盃酌及ニ數巡一云々同三月廿日の條に渡暮於ニ万里第茶屋一一飲云々參天台記二ノ十二丁ウ茶湯錢ノ事見ユ鶴林玉露三ノ十八丁前輩志節條ニ足不レ涉ニ茶坊酒肆一云々茶坊ハ水茶屋也酒肆ハ居酒屋也犬筑波冬茶屋の家根もるやあられの籤子かな同雜笠をもたれば茶やへこそよれ海東諸國記國俗ノ條茶店トアリ茶店梅花無盡藏三上廿一丁ォ日下舊聞卅八補遺六丁ウ風俗ノ部に都中遺老逃二万曆間四山戒壇一四月游女之盛餌車不レ絕茶棚酒肆相ニ接于路一至レ有二挾レ妓入レ寺者一

（四十七）武藏國見沼の歌 對山君遺事 一名南龍言行錄寫本にて乾坤二卷あり序に貞享二乙丑年秋のはじめ朋友飯尾菜が亭に過りしに渠が父よりに家に藏置し和漢の書籍夥しく書院にひろげ風を入蟲をはらふ其中にひとつの書あり取て見れば當家の初祖對山公の善行嘉言をしるせり申傳ふる宇山田弄齋が書るものとかやさだかにはしれずそも〳〵此君は東照宮の第十子にてわたらせ給ふ御童名なば長福丸殿と申御諱を賴將と稱し其後故ありて賴宣卿と改させ給へり云々其書疑はしく誤れる所を正しもて乾坤の二卷とす云々左川長行謹書とありまた天和二年壬戌春正月十日江西齋儒烏有先生拜題といふ漢文の序最初にあり北村德言が漢文の跋もあり

（四十八）河原者 同書乾の卷に賴宣君頓智神速の方へ御越箕沼の池に富士のかげうつりけるを見給ひて「たれも見よ箕沼の池にかけうつるふしの高根の雪のあけほの」與清按此箕沼池は武藏足立郡にて笠島荒廢が崎なども此湖にありし也今は見沼新田とて二万石許の新田になれり享保十三年吾六代の祖高田茂右衞門友清此新墾の御用に登用せられ井澤彌惣兵衞ぬしの部下にて弟鈴木文平とともに功を立てこゝの新川に舟通はする事を請ゆるされて同十五年吉野川の舟のさまなる舟四十艘つくりてはじめて通用せしをり友清「よし野舟こゝにうかへて見沼川つなでたえせぬ世々に引まし」

世に稀にして心の及ばざる事のみ也船手の竹本丹後守方へ御入終日御遊興の砌能を竹本が大夫に被ニ仰付一是は小春大夫が子にて天王寺聖德太子の役人名は小太夫といふ是に東北を被ニ仰付一候へども此小太夫は河原者也囃子は御免被レ成候へとて囃子せず御慰の違亂に成けるを御聞被成いな事を役者どもは申候東北の囃子を致候へば小太夫には東北を舞候へ兩方面々いたし除にせよ被ニ仰付一事濟候し也云々河原者の事は四條河原に芝居を立てそこにて技藝をてらふものゝ名なるよしものにおほく見ゆ 頭書 年中定例記五大帳子上五丁ウ小太夫ノ名年中定例記十六丁ォ

（四十九）風呂浴室　又云比叡山には俗室を御建立風呂の薪料御寄進被ㇾ成置ㇾ云々 頭書 三議一統下五丁ォヲ出 法師落書二丁カに風呂たく翁にとへばあれは上原左京亮とこたふ云々

（五十）柔術　又云伊丹三郎右衞門直に談ぜしは光貞君御若年の時關口柔心がヤハラを御學び被ㇾ成朝夕三郎右衞門其外若き侍ども御相手に被ㇾ成候云々

（五十一）新田開發漫にすべからず　又云或時新田開發の場所を見立る事あり和歌の浦近邊其外方々七八ケ所繪圖にいたし奉行其外役人賴宣君の御前へ持參致しけるを御覽被ㇾ成被ㇾ仰けるは我勝手の便に宜しとて名ある地を埋名ある山堀崩し田畠にいたす間敷候殊に二十一代集の歌に入名前に書載たる名所舊跡をば堅く綺べからず末代にいたりて紀伊大納言は新田を開き利欲の爲に歌の集に入詩文に載たる名所舊跡を田畑にいたしたり扨も愚蒙の人にて有けるとて末代に我を嘲り恥を末世に殘し萬人の笑にならん事掌を指がごとし必々名木を切名地を埋名所舊跡を新田にいたすことゆめ〳〵不ㇾ可ㇾ致と急度被ㇾ仰付ㇾ候先年布引の松枯る時殊の外御惜み被ㇾ成樣々の藥を被ㇾ仰付ㇾ何卒枯れぬ樣にと種々被ㇾ仰付ㇾ候也去により度々役人を被ㇾ遣御領國中の名所共御穿鑿有て其跡のたえぬ樣に被ㇾ成けり云々 頭書 長門平家六十六丁ォ十七丁ォ住江を淺間にして御告に逢候事見ゆ吳志三の四十五丁ォ孫皓傳注に陸公以四瀆天地之所ㇾ以節ㇾ宣其氣ㇾ固無ㇾ可ㇾ過之理ㇾ云々佐渡奇談中卷加茂村の武右衞門が事條に今よりは百餘年以前加茂村の農民武右衞門といふ者あり云云近鄕境を連れし湖あり是を埋て新田を開かんと官に訴て事既に調ひければ山々谷々より雪消の水をせきいれ土砂を穿かけ湖へ流しいれ三町許に二重のしがらみを掛おき大雨の折にかくのごとくしければ三年を經て人夫五万人を費しおほくの新田成就しけり武右衞門常に申けるは我命長かれかし此湖水を殘らず眞田にひらき人々の目をおどろかさんとぞかたりける然に或年同村のもの二人歌代村のもの三人武右衞門共六人相川よりかへる道に長江川といふ所の近邊より二八計の女道づれとなり語らふさまいやしからず彼六人の中にも武右衞門には親しく物語して我は釜屋村の片ほとりに住もの也今少し行先にて別れまゐらせんと武右衞門に向ひ名殘なしげに見えければいざ送らんとて武右衞門先にたち側なる細道を傳ひ湖水の方へ行過ぬ殘五人の中に歌代村の名主は老人にて分別あるものなれば人々に向ていふやう今の女は此邊に見馴ず物いひも釜屋の村人にあらじ又武右衞門がうかれしさまも心得ず皆々心をしづめて見えがくれに伺はんと行事一町ばかり雲間の月影に透し見るに武右衞門は水の面一町ばかりなへだて彼女に手を引れ平地を行に異ならず五人のものおどろき逃かへりて云々翌日舟あまたして尋ぬるに武右衞門が死骸水底より揚りたりこれ新田をひらかんとて湖水を埋し祟也といへり云々

（五十二）世人周〻譽るは惡人　同書坤の卷に遠山の某は筋目と申才智と申何役に被ㇾ仰付ㇾ候而も器量ある人品也と蘆川十休執成被ㇾ申上ㇾ候賴宣君御取合なし三度目に及び被ㇾ仰候は我前へ出て物いふほどの輩に遠山をほめぬものなし皆々よき奉公人と譽る十

休よく心得候へ世の人にあまねくほめらるゝ人と普くにくまるゝ人は一くせある大惡人なり釋迦孔子さへ世の人に或はほめられ或はにくまれし也世間の人に一遍に譽らるゝ遠山は輕薄へつらひの大邪智者也忠義の人にあらず或はそしられ又は譽らるゝによきもの有孔子衆惡ㇾ之必察ㇾ焉衆好ㇾ之必察ㇾ焉或は其衆阿黨比周して好する事あり或は其人獨立て不祥にして惡るゝ事あり毀譽共に不ㇾ可ㇾ不ㇾ察と候へば人に誑されて能人とおもひ惡人と思ふべからず大將の心を可ㇾ付處也云々按に明君享保錄四の卷吉宗公御名語の事の條にも惣じて人は世間にて半は譽半は譏るものによきものは有べし一面にほむるものは大形は不ㇾ宜者也諸人の能と云は或は心克人に從ひ事を人に任ずる者か左なき時はけいはく者か間に合をいふ者歟此二色のうちにして大形はよきにあらず唯半分はほめ半分はそしる內そのそしる品をよく開分道理を極てよし云々

（五十三）違棚　又云御名代三浦長門守爲時迎に罷出御數寄屋へ入給ひ賴宣君にも御數寄屋へ御出被ㇾ成候而 ◎按此下有誤脫 落宗が違棚に有を賴宣君御驚被ㇾ成云々

頭書 筆記六十一ノ卷卅一段違棚あり可ㇾ考合ㇾ

（五十四）股引　又云大雪の降りける時庵原多野村にて鷹鴨多よし鳥見の者注進申上俄に御出被ㇾ成候久野三郎右衞門御供に被ㇾ召連ㇾ木綿の番取股引にて出候云々

松屋筆記卷之五十三

東都　源與清文儒稿

(一)矢矧の橋　岩淵夜話別集上に或時岡崎ノ御城下矢矧ノ橋洪水ニ流ケレバ早速掛渡スベキ旨家康公仰付ラル就レ夫各家老中申上ラレケルハ兼々何モ存寄罷有候ヘドモ箇樣ノ折節ヲ以テ可ニ申上一ト存罷有候此橋ノ義ハ世間ニ稀ナル大橋ニテ候ヘバ夥キ御物入ニ御座候其上當時戰國ノ義ニモ候ヘバ御城下ニ箇樣ナル大河有レ之候ハ第一御要害ニテモ候ヘバ旁以今度流レ捨リ候ヲ幸ト遊サレ向後ノ義ハ舟渡シニ被ニ仰付一可レ然奉レ存候ト一同ニ申上ラル家康公被レ仰ケルハ抑此矢矧ノ橋ノ事ハ代々ノ記錄ニモシルシ其外舞ニモ平家ニモ語リ傳ヘテ日本國中ニ誰シラヌ者モナケレバ定而異國ニモ聞エヌ事ハ有マジ然ルニ物入多ケレバトテ今更大橋ヲ停止ニシテ舟渡シニ申付往還旅人ニ難義ヲ掛ンコハ國持ノ本意ニ非ズ縱何程ノ入用タリモ少モ不レ苦早々掛渡候樣ニ申付ラルベシ扨又要害ニ賴ムト云ハ人ニモヨリ時ニモヨルベキ物也當時家康ガ心入ノ程ハ一向左樣ノ趣ニ非ズ其段ハ何レモノ心入ニ可レ有物也然バ要害ヲ求ムルニハ不レ及義也只片時モ早ク橋ヲ掛渡シ往還ノ煩ナキ樣ニ可レ被ニ申付一之旨被ニ仰出一也云々

(二)根太(ネブト)　又云天正十三年三月濱松ノ御城ニテ家康公御背ニ根太ノ樣ナル御腫物出來ケルヲ佐原作十郎前嶋長七郎河野甚太郎ト申三人ノ兒小姓衆ヘ此根太ヲ押出セト被ニ仰付一云々按ニ新續犬筑波集夏ニ「うつき來てねふとになくや郭公」といふ發句も見ゆ頭書守武千句四十七丁ウ「秋風にきんやの里や晴ぬらんわが身ひとつはもとのねふとそ」月やあらぬ春やむかしの針ならぬ」

(三)トチヘンナシ井ヘンナシ袋　又云其節の取沙汰ニ佛高力鬼作左トチヘンナシノ天野三兵ト申ケルト也云々按に室町殿日記一の卷太田道灌辭世に「昨日までマクマウザウをいれおきしヘンナシ袋いま破るなり」と見ゆ頭書甲陽軍鑑十四卷四十下品十五丁左に佛がうりき鬼作左とちへんなしの天野三兵と濱松にて落書に立る云々

(四)女の乘掛馬　岩淵夜話別集下卷に本多上野介申上けるは唯今まで御狩場へ召連られ候女中を乘掛馬にて御供被ニ仰付一候へどもも當時天下御一統の儀に候へば向後は乘物にて被レ召れ可レ然と奉レ存候と申上

る云々女馬に騎ル事は已にいへり

(五)菖蒲切合　同下卷に以前駿河に御坐竹千代君と申奉る五月菖蒲切合御見物に安西町へ小者の肩車に御乘り御出雙方東西に分り未打合不レ始一方は人百計も有レ之一方は人數三十計にて出張有レ之肩に乘せ申小者大人數の方へ趣候を竹千代君被レ仰はあの小人數の方必勝べき間小人數の方へゆけと被レ仰小者申は何を御存知可レ有レ之大人數の方こそ可レ勝ものをと大人數の方へ行其以後打合小人數の方かくし勢有レ之大人數の方散々打負たるを御覽被レ成小者の頭を御打いはぬ事かと仰られ御笑ひ被レ成たるよし申ける也云々

(六)六尺添肩替肩(ソヘガタカヘガタ)　又云乘物に乘て行に力も勢恰好も揃たる六尺が跡先二人してかつぎ其外に添肩とて跡先手を添力を付其上にも替肩とて貳人も前後に立添てこそ切所難所長旅も心易乘たる物なれ云々

(七)大耳(おほみみ)にきく　又云常々口くせのやうに云事なれども夫を大耳にきく心ゆゑ唯今のやうなるわけもなき返答をする云々按に大耳は疎耳(おほみみ)の義なるべし古言におほに見るおほにきくなどいふみなおぼろげの義也今俗には「オロソカ」といへり

(八)仇を報ずるに恩を以てす　又云大坂御陣以後駿府御城にて或夜御咄之衆へ被レ仰けるは云々我等が覺たるは仇を報ずるに恩を以てすといふ句を若年より聞覺えて常に一心に不レ忘大事にも小事にも用に立事おほしされば秘藏の要文なれども今日各へ相傳するぞと被レ仰御笑被レ遊ける也云々

(九)神君四十八戰　亦云家康公大坂後の御陣まで御一生の間大小の御合戰に御逢候事四十八箇度とかや傳承り奉る云々按に漢の高祖七十餘戰して天下を有ち神君四十八戰にて宇內を御給(タマヘ)ふ漢朝四百餘年御當代萬々歲萬民鼓腹して樂を受ることめでたからずや

(十)蛤は貞女の節に比す　明君享保錄有德院殿の事跡をしるしたる書にて寫本五卷あり二の卷竹姫君樣御再緣被ニ仰出一候事の條に御代初に御儉約の被ニ仰出一にも凡嫁娶の規式も蛤の吸物酒三獻を過べからずと御書付出たり人々これはと笑ふ者ありけれども吸物蛤と婚禮の法を立給ふは御學文勝れ給ふ故也と或學者是を稱し奉りき子細は蛤貝は三千世界を尋ても外蛤貝と合ぬ者也とかや外の

貝に合ざるは外の夫に心をかよはさぬ貞女両夫には見えざる戒と此事を辨へさせ給ふに因て蛤の吸物と被二仰出一けるこそ難レ有事也と心あるものは稱し奉りけり 世に貝合と云て女のもてあそびとするはこれとおなじ理にして外の夫に逢はぬといふ禁めなり云々

（十一）文昭君の御代武家の風公家に變ず　同三の卷御鷹野先種々之事の條に東照宮台徳公大猷公御代とは違ひ御旗本衆嗜も忘れ風義あしく成て大丈夫の士も紅粉を以て面を彩色(イロド)り身に結搆なる衣服をかざりひとへに野郎芝居役者にことならず明君紀州より入せ給ひてより御供に被レ參たる人々身持上たる氣色もなくゆき短かに髮頭の風までも玄やんとして尤武術の嗜勝れて弓馬劒術鎗長刀等に至て名人多く其上に水練まで得ざる仁は一人もなし云々按に紅粉をよそほへるは文昭君の御代新井白石が左道の政を執て京都風に變せしをりの事也

（十二）有徳君御名言　同四の卷吉宗公御名語之事の條に人は珍しき噺を申ともうそがましき實をば語るべからずと被二仰出一候寔に人に交るもの如レ斯心得べき事也と云々

（十三）心中相對死并過料錢　同書五の卷吉宗公松平乘邑(左近將監)大岡忠相(越前守)へ政事御閑談之事の條に大岡越前守忠相に被レ命て享保御代初の御仕置に御先代まで男女色欲にて命を落すものを上方江戸在ともに心中と申ならはす以ての外不屆の詞也心中と云ては忠とよませて論語にも忠は有たけを顯す事也又まめと訓する處也何ぞかく愚痴文盲にして此世にては不レ添未來で添ふといふ樣なるいたづらものゝ此死を心中とやいはん勿論無二勿體一事也以來は相對死と申唱へし是は人間の智惠にて男女相對して死する事は有べからず皆禽獸の心に成ていたす事也かつて心中にはあらず人にあらざる所行なれば禽獸又は人非人と云べし畜生同斷の者なれば死そこなひ存生せし奴原は非人へ下さるべし死切候ものは野外へ捨べし尤下帶を脫ぎ丸裸にて捨る是畜生の仕置也と御定被レ遊けるこそいみじき御事也また過料錢の事御先代までは無レ之候へども昔周の文王の政にも有しとて被二仰出一けり何とやらん罪科を公儀へ金錢を出してその罪を補ふ事如何と笑ふ人も多くありけれども明君の御賢慮を玄らず己が短にくらべての事也云々按に文化年中までは相對死の死そこなひを非人に被レ下しをやがて左右方の親類より非人に金錢を出して足をあらふと稱しもとの良民になりし事あるを制せられて今は必是を洗ふ事叶はず生涯非人にて終る事と成ぬこれも一時の明斷といふべし 頭書 古事記下廿四丁オ允恭の段に輕太子輕大郎女共自死ト見エタルガ本朝女棚ノ始也

（十四）屯田屯倉　大明會典卷十八戶部五　屯田の條に屯田國初兵荒之後民無二定居一耕稼盡廢糧餉匱乏初命二諸將一分二屯於龍江等處一後設二各衙所一創二屯田一以二都司一統攝每軍種田五十畝爲二一分一又或百畝或七十畝或三十畝二十畝不レ等軍士三分守レ城七分屯種又有二二八四六一九中半等例一皆以二田土肥瘠地方衝緩一爲レ差又令二少壯者一守レ城老弱者屯種餘丁多者亦許其徵收則例或增減殊數本折互收皆因レ時因レ地而異云按に屯田の古法は武備志百卅五の卷に太白陰經を引ていひ新法も右の大明會典の文を引ていひたり書洪範八政より秦商鞅が墾草之令などを原とす周禮冬官有二屯部一今曰二屯田司一漢書趙充國傳に分二屯要害一兵耕曰二屯田一正韻に屯音豚聚也勒レ兵而守曰レ屯などあるにて其義知べしまた本朝の古代屯倉あり仲哀紀二年二月にはじめて見え孝德紀に屯倉一百八十一所などあり屯倉「ミヤケ」と訓す「ヤケ」は家宅也公の御屋敷といふ義也米粮を貯て非常の備とする也今の粮倉の類なるべし 屯倉ノ丁已ニ卅二ニイヘリ新撰姓氏錄書入ニ委シ

（十五）萬歲を唱　大明會典卷四十三禮部　正旦冬至百官朝賀儀の條に搢レ笏鞠レ躬三舞蹈贊跪唱二山呼一百官拱レ手加レ額曰萬歲唱山呼曰萬歲唱再山呼曰萬々歲凡呼二萬歲一樂工軍校齊應レ之贊と見ゆ本朝萬歲を唱事御即位の時其外朝賀に有西宮北山江次第代始和抄の類所見多し

（十六）つくり鬚并搗栗(カチグリ)及紙子(カミコ)　諸家全太平記一の卷（正德六年正月の序あり印本十四卷目錄一卷共十五册とす）秀吉公關東御發向の條に秀吉公は黑齒(クロハ)ぐろに例のつくり鬚をなされこがねづくりの御太刀美麗をつくしあたりもかゞやくばかりに出立せ給へば云々又云宇津の山にかゝらせ給ふ玄かる所に鄕民ども參上しかち栗ならびに馬のくつを奉り吉非を賀し奉る秀吉公御らんじて此たびのかつせんにかちぐりといふ事歟能もいはひてさし上たり目出たし〳〵とのたまひて大に御感なされ御めしありし胴服の紙子に紅梅うらつけたるに黃金を相そへ百姓共に下されしかばありがたし忝しと百拜してぞかへ

りける云々 頭書揚栗下學集下十一丁ォつくりひげひげを剃條に見ゆ

(十七)武士と下人と女との差別 同書同段に湯淺七右衛門が夏目含人之助定吉がとりし首を奪し事をいひて藤田と甘糟と同道し大將景勝卿の陣所にゆき右の次第をのべしかば景勝きゝ給ひ武士にして其道をしらざるはこれ下人に同じき也武士は何ごともその理の本をたゞして心の臟より思案工夫するものゆゑ惡事あれば則腹をきらする也下人は又つたなくしておちつきたる才智なく首もとにて思案せりさるによりてとがある時は首をはねぬる女は又うはきにてはなのさきの分別ゆる鼻をそぐ事古法也湯淺は士也といへども下人にもおとれりとて陣中を引わたさせそののちくびをはね札を立て諸人にぞしめされける云云

(十八)まざ〳〵と云詞 諸家前太平記五の卷香橋原(カウバシガハラ)に新城を築く條に直江山城守兼續云々ことばをたくみにしてまざ〳〵といつはりしかば云々

(十九)陰辨慶 同七の卷寺西多左衛門ぬけがけ高名の條に丹羽加賀守長重の家人に南部無右衛門といふものあり武勇すぐれし大膽ものにて諸國をめぐり武者修行したりしを稻葉彦六貞通の吹擧にて長重近年めしかゝへ二千石の知行をあたへおかれけり云々こゝに又長原實寶院松雲といへる法師ありこれも武略軍術に達し武者修行して諸國をまはりけるが一とせ北陸道を通りけるを長重云々知行千石をあたへ朝暮の同朋とぞせられける云々南部つね〳〵松雲をねだみそねみ云々陰辨慶といふ大いたづらものはあの法師が事よとつね〳〵に惡口せり云々

(廿)のさ〳〵と云詞 同八の卷山口右京木崎長左衛門にわがくびをあたふる條に丹羽加賀守長重は敵をのさ〳〵と引とらせやすからずおもはれしかば云々 頭書林源抄九廿四丁オに大方面シタル舞ナレバトテ面ノシタノ顏ヅカヒヂ打ステツレバ其氣外へ出テノサ〳〵ト見エテヲルキ也云云

(廿一)むさくさといふ詞井茶瓶(チヤビン) 同九の卷江口三郎右衛門旗ざしをこひうくる條に出口又次郎といふもの有云々生つきむさくさものにてありしかばとりたてらるゝ事もなかりしを云々又出口が女房もかひがひしきものなりしがなかば白髮たるかみをたかくかからわにゆひあげそめかたびらにうは帶し左の手にはさゝえをもち右の手には茶瓶をさげ江口が陣ごりし小山のかたを心ざし云々

(廿二)せゝる井わせると云詞 同十の卷江口三郎右衛門蓮臺寺村に出張の條に小松の城をせゝりなば味方せいを引入るべし云々又長重大にあせりおきりに軍使をはせてはやく引とるべしと下知せらるゝ云々 頭書今昔廿七ノ四十一語に此度ハ强ク縛テ引セヽガムと云詞筆記百十二ノ五十六則ヘタリケレバ暫コソ人ニテ有ケレ痛ク責メケレバ遂ニ狐ニ成テ有ケル十纏松ノ火チ以テ毛モ无クセヽルセヽル燒テ弓矢チ以テ度々射テ已ヨ今ヨリ此ル態ナセソト云テ不ゾ殺シテ放タリケレバ云々芭蕉泊船集に□□の香にせゝられてれぬ夜かな今昔廿九ノ廿七語に母カ幼キ子チセヽラカス樣ニ我ガ子我ガ子ト云テ云々宗五大艸子下廿四丁オ馬をせゝりをどらする事放人のいましめたる事也

(廿三)いざり松の蒔繪 同卷同段になし地にいざり松を蒔繪にしたる鞍おかせ云々

(廿四)蠅武者并二重込の鐵炮 同十一の卷別所下野守高名はたらきの條に松平主殿頭家忠まなこをいからし追ばにげ引ばたかる蠅武者どもの〳〵しやと切て出云々佐野肥後守は二重ごみの鐵炮をはなち敵をふせがれけるが云々 頭書神武紀に五月蠅(サバヘ)なすとあり簑輪軍記にけづりまはしのはひがしらとも有

(廿五)一鐵者 同書十二の卷木食上人與山和睦あつかひの條に稻葉伊與守貞通入道して三位法印一鐵と號せらる今の世にも勇猛にして氣みじかなる人を一鐵なりといふ事は此人よりぞはじまれる云々 頭書武家盛衰記十七卷

(廿六)井田名田均田など古今沿革 蓬窓日錄卷之四世務二井牧の條に長山先生胡翰曰天地養二万物一聖人養二万民一故天下之利聖人不レ私二諸己一亦不二以私一於人一井田之制是也井田者仁政之首也井田不レ復仁政不レ行天下之民始敝々矣其後二百十有二年而漢始有二名田之議一猶古之遺意也又其後六百有三年而元魏始有二均田之法一猶古之遺制也先王之遺制遺意由レ秦以來僅一二見又皆行レ之不レ遠天下之民益敝々矣爲レ政者南面以子二万姓一一夫之饑猶己饑レ之一夫之寒猶己寒レ之孰無二是心一也而訖莫二之極一焉方二漢承二秦苛虐之後一民新脫去湯火未レ遑二蘇息一高帝因而撫レ之逮二及文景之世一國家晏安無事宗戚大臣憑二藉貴高之勢一爭取二義田宅一以爲二子孫利益一郡邑富商大賈周二流天下一皆累二鉅万一治二生產畜牧一膏壤十倍上擬二封君一編戶之氓無二立レ錐之地一則卑下之爲レ役爲レ僕不レ暇レ顧二其身一貧富不レ均勢所二驅致一也故董仲舒言二於孝武一以二古井田法一雖レ難二卒行一宜少近レ古限二民名田一以抑二兼幷一名田者占田也占田有レ限是富者不レ得レ過レ制也其後師丹

孔光之徒因レ之令下民名田無レ過二三十頃一期盡二三年一而犯者沒入之上議者以三十頃之田周三十夫之地也一夫占レ之過矣晋石苞令民男女二人占田百畝丁男女有レ差有二國食祿一者有レ差或十頃或五十頃兼以二品蔭一其親屬自啓二訐端一矣民無二恒產一不レ能レ制レ之專二事要束之間一不二勞レ民駭一衆坐獲二井田之利一此吾所レ未レ喻也殆不レ過レ爲二兼幷之閑一耳非レ有レ資二於畎畝細民一能無二不足之患一也故名田雖レ有二古之遺意一不レ若二均田之善一李安世在二魏太和中一其得レ君非二華夏之主一也其得レ民非二歸馬放牛之時一也以二魏國之大一獨能均二其土地一審二其經術一差二露田一別二世業一魏人賴レ之力業相稱北齊後周因而不レ變隋又因レ之唐有二天下一遂定爲二口分永業之制一而取二其祖庸調之法一口分即露田也露田夫四十畝婦人二十畝而率倍レ之口分八十畝而不レ倍帷、歲易之田倍レ之永業即世業也夫家受而不レ還皆二十畝所二以課蒔桑麻一也民有二多寡一鄉有二寬狹一田有二盈縮一狹鄉之民受レ田半レ之爲二工商一者不レ給而在二寬鄉一者給レ之亦半也老疾寡妻妾給二之三十畝四十畝一雖レ不レ耕不レ無レ養也當戶者益二之二十畝一雖二已有一田不レ可レ不レ優也以レ此均二天下之田一貧不レ得レ濶富不レ得レ兼猶懼レ不レ能レ守二吾法一而乃聽下民濶二永業一以葬濶二口分一以遷上是以小不足而大亂法也何捄二於敝一賑二窮困一貧民獲二保息一周典也何惜而不レ爲レ之濶而加レ罰永徽之禁抑レ末耳議者如二宋劉敞一又以魏齊周隋享國日淺兵革不レ息土曠人稀其田足二以給一其衆一民獲二其實一唐承平日久丁口滋多官無二閑田一給受一民不レ獲二其實一徒爲二具文一不レ知二隋唐之盛丁口相若一耳開皇十二年發レ使均二天下之田一狹鄉一夫僅二十畝隋之給受何加二於唐一也唐雖二承平日久一貞觀開元之盛其人戶猶不レ及レ隋何至二其田一具文無レ實也敞言過矣但狹鄉之民多而田不レ盈永業之田濶而民不レ固如陸贄所謂時弊者勢馴致也時敞賦法亦敞故均田雖レ有二古之遺制一不レ若二井田之善一周制九夫爲レ井井有レ溝四井爲レ邑四邑爲レ丘四丘爲レ甸甸有レ洫四甸爲レ縣四縣爲レ都都有レ澮地方百里是爲二一同治一都鄙者以レ之夫間有レ遂遂有レ徑十夫有レ溝溝有レ畛百夫有レ洫洫有レ除千夫有レ澮澮有レ道万夫有レ川川有レ路万夫之地三十二里治二鄉遂一者以レ之孟軻氏請レ野九一而助二國中什一使二自賦一蓋二法並行遂人匠人多寡異レ數而內外相經緯焉王畿之內五十里爲二近郊一百里爲二遠郊一六鄉六遂居レ之六遂之餘地爲二甸地一距二國中一二百里即公邑之田天子使吏治レ之者也甸地之外爲二稍地一距二國中一三百里大夫所レ食之采地也稍地之外爲二縣地一即小都之田距二國中一四百里卿及王子弟之疏者所レ食之采地也縣地之外爲二甿地一即大都之田距二國中一五百里公及王子弟之親者所レ食之采地也此王畿之制井田常居二十之六一其不レ爲レ井者四郊甸地耳其曰レ夫夫三爲レ屋屋三爲レ井則出二地貢一者亦三々相任如二井田之法一八家樹藝一夫稅入二于公一孟軻氏所謂皆什一者是也鄉遂之地采五十畝或百畝二百畝而都鄙之田或不易或一易再易是亦名異而實同也有二肥磽一爲二之井一者必有レ牧以濟レ之所謂采與レ易者則皆牧也故小司徒曰二井牧一其田野井者其正也牧者其變也井地均不二必牧一也井地不レ均必牧以均レ之也由レ是達二于天下一雖レ有二山林川澤一不レ可二以開一方制者以二井牧一授レ之以二貢助一取レ之諸侯之國可二按而定一也楚人東南之要服也蔦掩爲二司馬一度二山林鳩澤藪一辨二京陵一表二淳鹵一數二原隰一規二偃瀦一町二牧防一牧隰皐井衍沃一量二九土之入一脩二千乘之賦一況中國之地無二山林澤藪之阻一無二淳鹵原隰之患一原隰衍沃舉目千里夏后氏用レ之以爲レ貢商人用レ之以爲レ助而周人無レ用レ之以制二畿甸一經二邦國一其法可レ考者往々存二於周官之書一其不レ合者以二孟軻氏一爲二之權衡一豈不二較然一也哉故嘗以爲井田之法行有二十便一民有二恒產一不レ事二末作一知レ重レ本一也同レ井並耕勞逸巧拙不二相負一齊二民力一二也養レ生送レ死有無相贍通二貨財一三也貨財不レ匱富者無二以取一贏絕二兼幷一四也取以二十一天下之中正吏無二橫斂一五也比二其丘甸一革車長轂於レ是乎出有レ事以足二軍實一六也一同之間万溝百洫又有二川澮一戎馬不レ得二馳突一無二邊患一七也畎澮之水澇則疏レ之旱乾則引以溉注少二凶荒一八也少壯皆土著好僞不レ容善レ心易レ生以二其暇日一習二詩書一爼豆養レ老息レ物成二禮俗一九也遠近共貫各安二其居一樂二其業一尊レ君親レ上長子孫其中不レ煩二刑罰一而成二政教一十也一舉而十者具矣何憚而不レ爲乎其謂レ不レ可レ爲者蓋亦有レ二焉丘甸縣都其間万井爲二溝洫一者又万計包二原隰一而寫レ之窮二天下之力一傾二天下之財一非二數十年之久一不二克責一于成一也非二大有レ爲之君一不レ能レ致二其決一也此不可者一也中古以降淳原之俗薄澆僞之風熾恭儉之化衰功利之習勝經レ久之慮少僥倖之敝多以限レ田抑二富強一獨有二撓レ之者一況使二盡棄一其私家之產一乎以二均田一授二農民一猶

有ニ不レ能レ周之者一又況生齒滋衆之時乎怨歸ニ於上一好興ニ於下一此不レ可レ爲者二也以レ余論レ之二者何足レ泥ニ吾事一乎古者步百爲レ畝漢人益以ニ二百四十一爲レ畝北齊又益レ之以ニ三百六十一爲レ畝今所レ用者漢畝步也今之五十畝古之百畝漢提封田万々頃惟邑居道路山林川澤不レ可レ墾餘三千二百十九方頃皆可レ墾元始初遣ニ司農一勸課定墾田八百二十七万五百三十頃是時天下之民一千二百二十三万三千戸以レ田均レ之計レ戸得レ田六十七畝古之百四十畝也家獲ニ百四十畝一耕レ之未レ爲レ不レ給也加レ之簡稽則工商祿食之可レ損者又不レ知ニ其幾一也雖ニ唐盛時一永徽民戸不レ過ニ三百八十万一至ニ開元一七百八十六万亦不ニ漢過一也以ニ天下之田一給ニ天下之民一徵ニ之漢唐一則後世寧有ニ不足之患一乎田無ニ不足之患一則取ニ諸民一以與レ民天下皆知ニ吾君之不レ私也天下有レ如ニ卜式一者上且將先ニ吾民一而爲レ之孰不ニ響應ニ於下一也秦長城之役袤延万里塹レ山堙レ谷暴レ兵二十万而阿房之作督用ニ徒刑一者又七十餘万郡邑之民發レ謫徙レ邊者又歲不ニ休息一不德甚矣天下怨誹未レ聞レ有ニ一人違者一況下レ令如ニ流水之源一固民心之所レ欲也王政之所レ本也今先取ニ一鄉之田一井レ之其制定其事便其民悅然後行ニ之一郡一取ニ一郡之田一井レ之其制定其事便其民悅然後行ニ之天下一天下之制定事便而民悅也亦何異ニ於鄉郡一乎是天下之田可レ井也事不レ勞者不ニ永逸一欲ニ長治久安一而不レ於レ此圖レ之亦苟矣唐太宗嘗讀ニ周官之書一至ニ體國經野設官分職一以爲ニ民極一慨然歎曰不ニ井田一不ニ封建一不レ足ニ以法ニ三代之治一人君負ニ有爲之才一操ニ可レ致之勢一其時又非レ難也封建議而不レ行井田知而不レ復君子蓋深爲レ唐惜レ之吾聞春氣至則草木生秋氣至則草木落生與レ落必有ニ使レ之者一矣物莫レ知レ之也故使レ之者至物無レ不レ生使レ之者不レ至物無レ可爲レ上之人審ニ其所一以使一故物莫レ不レ爲レ用管商之法孰與ニ先王之制一天下皆知ニ其非一民利一也而齊秦舉レ國聽レ之其故又可レ知也以ニ先王之制一使若ニ管商一者爲レ之以紀ニ人事一經ニ地利一吾知天下之田可レ限也可レ均也亦可レ井也此無レ他善使而已矣忠信之道賞罰之柄上之所ニ以使一也

論ニ名田一不レ若ニ均田一均田不レ若ニ井田一井田之行有ニ十便一雖レ有ニ二敝一不レ足ニ泥ニ吾事一況田數民數正相當但在レ上之人審所レ使而行レ之矣

中郎區博諫レ莽曰井田雖ニ聖王法一其廢久矣周道既衰

而民不レ從秦知ニ順民之心一可ニ以獲ニ大利一也故滅ニ廬井一而置ニ阡陌一遂王ニ諸夏一迄レ今海內未レ厭ニ其敝一今欲下違ニ民心一追復中千載絕迹上雖ニ堯舜復起一而無ニ百年之漸一弗レ能レ行也區博之言特告ニ王莽一非ニ其人一矣其實至論也後世儒者必欲レ行ニ井田一何哉

柳子厚言ニ封建之非一而胡寅仲以爲封建不レ可レ非區博言井田難レ行而張子厚以爲必可レ行其說孰是曰孔子論ニ繼代一曰損益可レ知孟子論ニ爲國一曰潤澤在レ子使ニ孔孟生ニ於三代之後一其損益潤澤可レ知已言レ治而必曰ニ井田封建一是謂生レ今反レ古也亦宜

唐初授ニ民田一有レ田有レ租迄レ後法弊民得ニ轉易而有一レ田矣多少不レ等貧富不レ齊田主逃亡靡レ所ニ考稽安得一猶以ニ國初授レ田之法一稅レ之故楊炎變爲ニ兩稅一所謂戶無ニ主客一以見居爲籍人無ニ丁中一以ニ貧富一爲レ差是也田不レ過レ割則主客難レ別不レ論ニ貧富一則丁中不レ分安得レ不レ變後世有レ謂唐租庸調變而取レ民之制壞者蓋不レ究ニ其始末事體一而漫言者也

凡立レ州之意有下重ニ其銜一以鎭ニ治上有下接ニ其權一以系上レ遠有下專ニ其任一以固ニ幾有分一其勢一以防ニ邊今或因襲以失ニ其眞一或擅更以謬ニ其舉一顧ニ名正義一循レ實而

鼎ニ新之一耳

已上の說にて井田名田均田などの義知べし制度通に考合すべきためにこゝに抄出す蓬窓日錄は元人陳全之粹仲が編輯也頭書井田の事晉書地理志十九丁ウ

（廿七）万里長城　秦蒙恬をして万里長城を築しよしものに多く見ゆこは周文王に始まれる事にて宣王の世にも城ニ彼朔方一ともいへりさて燕趙これを築て北狄を拒ぎ襲て秦始皇大に役を起せし也いと後に北齊隋などの世にまた築し事あり蓬窓日錄二の卷長城の條にくはし本朝の築石の石垣もまた長城の類といふべし

（廿八）黃河の源　元の世祖至元十七年黃河の源を究め漢唐の世に悉すこと能はざりしを知れるよし蓬窓日錄二の卷黃河源の條にくはし又黃河九曲の事も見ゆ

（廿九）海內奇觀　海內奇觀十卷明人揚爾曾が撰也はじめに明の華夷一統圖賦を載せ五嶽及諸名山川八景等の圖說を載たり後に十大洞天名考三十六洞天名考七十二福地名考海上仙山名考海上十諸名考を附す卷端に新鐫海內奇觀錢唐臥遊道人揚爾曾輯とあり

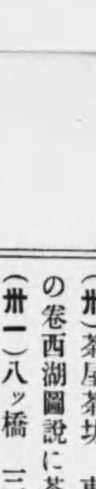
(卅)茶屋茶坊　東國紀行に茶屋の名あり海内奇觀三の卷西湖圖說に茶坊嶺采時有二茶坊在一焉と見ゆ

(卅一)八ッ橋　三川の國八ッ橋の說は已に十六夜日記の注にいへり海内奇觀四の卷吳山圖說に六橋烟柳あり圖に湖中出洲ありてその絕間につぎ〳〵六ッの橋あり洲には柳生たりこの六橋のさま余が考の八ッ橋に近しすべて橋八處あれば八橋六あれば六橋といふべきことわり也

(卅二)天狗の圖　海内奇觀四の卷吳山圖說の條の龍池祈雨の圖に三僧龍池に雨を祈り雲上に大狐を持たる法師狐より水をそゝぎ外に三神ありてみな雨を下すわざをするさま也一神は此國の小天狗のさまにて羽あり手にすき鍬の類のものを持たりされば天狗の畫ももとは唐土にまねびて作りし也龍池祈雨の詩「山頂龍池古井清泉一流深三秋逢二亢旱一頃刻作二甘霖一氣結春雲膩光湧曉樹陰沛然祈禱驗足レ慰二下民心一」

頭書杜工部文集卷一天狗賦には天狗を獸とす

(卅三)娥眉山下齋の木碑　堀近江守殿の陣屋は越後國内(ナイヤ)屋にありそこの海邊に文政九年の秋木碑流れよりぬ



かゝる形にて文字の太さ五六分計大さは七八寸許也碑の丈七尺餘也といへり按に海内奇觀八の卷蛾眉山圖說に雙飛橋七天橋凉風橋などあれど外に橋の名見えず字も娥眉或は峨嵋に作れり娥眉も美人の眉にたとへし稱ならんにはさもあるべし齋は橋の竪樣なり右の三橋の外に無名の小橋などの碑なるべくや娥眉山のさま中にありて左に瓦屋右に西域大雪山眉のごと〳〵見ゆこれによりて名づけたる歟此處に春夏時有レ鳥稱レ佛現食二人掌中一寒即不レ來といへり

(卅四)平戸の古寺及ババンと云詞　肥前國平戸は松浦郡の内にて一の海島也肥前の地と海上或は一里或は三四町を隔つといへり長九里廣さ或一里或二里或八九町十町の島也いにしへ比良ノ島といへるはこれなるべしそこに小川菴とて釋江月の居室ありそは小川宗理といへる豪富の建し寺也また播磨屋宗是といひし豪富も是興寺といふ寺を建て天竺佛の觀音貝多羅樹などありこは宗是が天竺に通商せしころ得たりし也とぞ宗理宗是ともにババンの徒也ババンとは八幡といふ旗を舟に立て異國に通商せしを八幡の字を唐人がババンといへるに起れる稱也といへり慶長六年より寛永十一年までは御朱印舟とて異國の交易を許されたりしを寛永十一年に禁止せられしよし骨董錄に見ゆ頭書文祿二年十一月八日小西攝津守行長が淺野彈正少弼へ贈れる狀に五島平戸之唐人八幡仕候由被レ成二下御朱印一候昨日致二頂戴一候則平戸五島是に在陣仕候間上意之旨申聞當春大唐へ商買に罷出候唐人其外何れも相留改申候不レ殘召れ可レ罷上候事云々

(卅五)年號の訓法(ヨミクセ)　東寺文書抄におうゑい(應永)四年けんちやう(建長)二ねんかうゑい(永)三年けむふ(建武)二年めいとく(明德)三年えんきやう(延享)三ねんくわんをう(觀應)二ねんかてい(嘉禎)二ねんぶんゑい(文永)二年正をうくわんねんけんむ(建武)二年かうゑい(弘應)四年元かう三年ふんゑい(文永)四ねんけんこう(元弘)三ねんなど假名ありあれは必吳音のみにもあらず時宜によりてとなへつと見ゆればその心して訓べし

(卅六)丸　人の名に丸といふは卑下の詞也枕草子二の卷に主上の御前にてまろがなどいはんは心なし今の世に「オレ」「拙者」などいふ類にきこゆれば也されど夫丸(フマロ)猿丸などいふも夫男(フウトコ)をいやしめ猿をいやしめたる詞也されば丸を重き字とおもふべからず

(卅七)御座(ゴザ)むしろ(ムシロ)　今の世「ゴザ」とも「ウスベリ」ともいふは御狹莚(ゴザムシロ)の莚を省て「ゴザ」とのみいへる也薄緣も緣の厚疊よりもいと薄ければいへる名也東寺文書抄二の卷寶德二年文書に御ざむしろ四まいと有御座莚の義也頭書宗五大艸子廿九丁ウ嵌入記卷(類從四百十四ノ三十九丁ウ)にうはむしろを御座といふ事なき事也たゝみなどは人によりて御座とも可レ申也

(卅八)がら〳〵井川村瑞軒　武林隱見錄十六の卷川村瑞軒成立の條に酉年の大火の時木曾山をさして行間屋の門にいたり見たりしに間屋の子供表へ出て遊び居けるにふところより小判三兩とり出し小刀にて穴を明ヶ紙捻を通しもてあそびのがら〳〵にして件の子供にあたへ扱案内を乞て内に入材木調べに來し由を云云々瑞軒は車力十右衞門といふものにて後に大分限となり剃髮して川村瑞軒といひしなり後に御旗本に召出され子孫を川村彌兵衞といへりとなん武林隱見錄廿卷寫本也

(卅九)柔術關口流　武林隱見錄十九の卷關口彌左衞門藝術之事の條に關口彌左衞門(後改二柔術請身一住心)の名人

其外劒術鑓等も無ニ殘所一覺えの士也樫原流の鍵の元祖樫原五左衞門とも出合右流義のかぎも相談の上付候と也彌左衞門或時つくねんとして庭を詠め居たりしに向の屋根に猫一匹快くねぶりて居たりしがあまりねぶりてころ〳〵と落たりしが中にて「ヒラリ」とはねかへり四足を立て地に落付たり彌左衞門つくづく見て夫より請身を工夫し屋根へ上りて下へ落る事を稽古す先始はこもわらを澤山にしき其上に蒲團抔を厚くしてひらき庇より落習ひ身を打ざる樣に心がけたり初は身を打れども其下和ヵなればさのみ怪我もなく次第に落樣功者になりて後は高き屋根より逆に落れども中にて返りて下へ落ざりけり如ニ此鍛錬して柔術流の元祖と成たり云々頭書三才圖會人事七卷九丁ヨリ十六丁ニ及テ拳法ノ圖アリ十七丁オに拳經チ引テ其始チイヘリ石川丈山覆醬集上卷ニ示ニ大明人陳元贇所ニ訪詩あり「吾廬岩瀑清移ニ牖砌一陳生窓望白雲雪(白雲曰ニ愛宕山一)盤差碧間美夫能ニ盡ニ西話一酣恨告ニ東行一若莫レ歸ニ鄉國一只須レ止ニ帝京一」此詩によれば陳元贇東行せしよし也

(四十)算術關流井弓の天下和佐大八　同書同卷關新助算術に妙有事の條に關新助は甲府御家人にて有しが文昭院殿御養君の後は御旗本の諸士たり若き比曾て八算をさへしらざりしに家來共塵劫記といふ書を見て居たりしに新助夫はいかなる書ぞと尋られしに是は算用の書物にて御座候と申す新助被レ聞少しの內借し見すべしとて是を疾と讀て算盤をとりよせあてゝ見られける一二返にて是を覺え夫より面白き事也と思はれて色々の算書をあつめて見られけれども何れも不レ解といふ事なし夫よりして算學啓蒙を熟讀し天元の一の道理を明らめ其上自分の發明を以樣樣の術を工夫し云々我朝算術古今無類の名人也と見ゆまた和佐大八弓の天下に成りしは星野勘左衞門工夫のよし此卷に見ゆ

(四十一)善光寺如來　慶長見聞書三卷あり上卷慶長三年の條に八月十六日善光寺の如來俄に下向町傳に信州へ下向路次にて腰佛は散々の體也此佛上りたまひ無レ程大閤御煩不吉兆也武田信玄信濃を討取此如來を甲州へ移し無レ程相煩死去亡了其後秀吉公も如レ此御煩有云々按に越後にも善光寺とて一向宗あり謙信信濃を取りて移しまゐらせし像也といへりされど信州水內郡結緣の地なれば他處にては不相應の事と見ゆ頭書落穗集六ノ廿三丁ウ同卅四丁オ同十二ノ卅三丁ウ

(四十二)蛇の尻にいりたるを治ル方　蛇の尻にいるはおほくは烏蛇(カラスヘビ)とて小くて黑色也好て人の尻穴に入るにその人さらにおぼえずとぞ此蛇穴に少許首をさし入たらんにはいかに引出んとすれども出ることなし寸々(ズタ〳〵)に引切ても首は尙殘りて腹にいり遂に人を殺すこれを引出すに「サルノシカケ」といふ木の葉にてまき引出せば僅に尾計さし出たるにてもたやすく引出ぬといへり「サルノシカケ」は赤色の小實なり熟れば黑色になる味酸く甘し葉はカン木の類也小木にて大樹はなし武相の間にて「ヨソゾメ」とよぶ「サルノシカケ」といふ名は越後にてよべり

(四十三)平文狂文陰文陽文款文識文有文無文　平文(ヘウモン)は黑漆平文の尉子(コシヅノ)平文の車平文の高机平文の鞍平文の野劒(ノダチ)平文の鉾など古書の所見おほかり平は「タヒラナル」義にて金具(カナガヒ)の類を平(タヒラ)に文樣(モンヤウ)にし塗たるをいふ玉金具に限らず漆の地と同樣に平なる也また狂文(キヤウモン)あり平文と同物なれどその文樣を狂はせて塗込たる也今はいづれをも「トギダシ」といへりまた陰文陽文といふは印章の字鐘鼎の銘などにほりくぼめたる字を陰文といひ置上(スキアゲ)の字を陽文といふ朱印に朱字は陽文白字は陰文也此陰文を款文(クワンモン)ともいひ陽文を識文(シモン)ともいへり玉(ゴク)の帶に有文玉無文玉(ウモンゴクムモンゴク)とて二種あり有文玉のほりくぼめたる畫あるをば陰文帶(インモンノオビ)といふ古書に隱文帶とも書るは誤也無文玉は文樣なき玉ノ帶也また衣に平文あり狂文ともあり宗五大艸紙などに見ゆ安齋ノ火打袋に染(カタ)くるはしたる紋也といへり

(四十四)樣　人を貴て樣といふ字を書たるは飛鳥井雅世卿の富士御覽記に公方樣と書れしなどやはじめならん是は後花園院の永享四年九月也

(四十五)永樂錢京錢井たばこの始　永樂錢は天文の末に用始慶長十五年九月十日止られしよし奧州會津年譜を引て安齋隨筆小車錦漫錄などにいへり俗說辨にも見ゆまた歷代の古錢をば京錢といふよしも有たばこは文祿四年に始と云々武家盛衰記廿卷永樂錢盛衰物語の條に永樂錢鐚錢(ビタ)京錢幷永樂錢一文を鐚錢四文に當るよし委く見ゆ頭書煙草の始落穗集六

松屋筆記卷之五十四

東都　源與清文儒稿

(一)山鹿義㠯井山鹿流軍學兵法神武雄備集　杏陰散人正意が兵法神武雄備集の序に于レ弦尾畑景憲者甲陽武田氏家臣而後執レ贄奉レ謁二大權現一相續奉レ拜二台德院殿及大樹一景憲嘗傳二兵家者流一其武名覆二當世一其門葉姓藤氏山鹿名義㠯字子敬其先出二於秀遠一秀遠領二肥之後州一築二城於山鹿邑一嘗招二平氏一且奉レ安二置天皇於城郭一其遺行斑二々于家系舊記一矣平家沈淪之後秀遠避二難勢州一其曾胤落二魄于民間一義㠯曾祖貞實十有六而復二父之讎一天正永祿之間與二瀧川政一一爲二刎頸之交一受二身於戰街一發二名於伊陽一伊曲至二于今一卷二歌之一義㠯又流二先曾之芳一六歲而應二父命一誦二四書六經一八歲而遊二羅浮之門一矣羅浮者藤斂夫之學徒也惺々子者本邦眞儒之中興也義㠯慕二其芳跡一常揭二斂夫之手澤於纒隅一令二門人一指二示之一十歲而詩文併熟牙籤向二于五車一十有二而志二于兵法一究二於技藝術數一當時從二北條氏長一氏長亦一世之雄才也氏長問二兵於景憲一以レ古考レ今潤色之切世譽而稱レ之已義㠯叩二兵法蘊奧一考二漢志一探二倭訓一徵妙玄通矣夫傳受相承之術到二其妙所一則不レ可レ授不レ可レ受在二自證自悟一而已義㠯之學及レ兵不レ怠者及レ古乎矣義㠯十有一歲堀尾山城大守以二家臣揖斐氏一招焉父固辭而不レ應レ之已滿二弱冠一而源亞相賴直卿以二秩祿一招レ之嘗羽林光高主以二町野氏一招レ之欲レ行而不レ果殆有二遯レ世而不レ慍之風一矣嗚呼德洋々于上一漸二々于下一此是之謂乎此載某月袖二若干卷一示レ予愚雖レ不レ措二志於玆術一寡君義直卿續二東照大神之遺武一奉二台德院殿之遺文一通二文章一達二武備一矣每レ談レ兵必召レ臣講二習討一論之一耳熟目濡其漸久故於二其大道一可二得而聞一今歷二視此書一愈深愈遠惟厚惟正一卷愈二于千卷一義㠯就請二書號一仍題曰二兵法神武雄備集一云々と見ゆるまた慶安辛卯某月涉二筆曳尾堂一といへる漢文の自序もあり城制十三篇武備廿篇戰律十七篇奧義五篇合五十五篇別に序目一卷あり

(二)大將の八不レ可レ賴及士卒の十病　兵法神雄備集武備第一卷に大將八の不可賴事一天不レ可レ賴二地不レ可レ賴三人不レ可レ賴四大軍不レ可レ賴五安樂不レ可レ賴六官位不レ可レ賴七理不レ可レ賴八兵法不レ可レ賴　私云心に賴ム所ある時は其法怠て不レ正縱ヒ己が能ク道理也と云共是を賴になすは大なる誤也縱ば漢の王昭君は我美人なることを賴にして畫工に賄せずして胡國に趣しごとし萬事の理必と賴事有べからず殊更兵法は怠を以敵に被レ討不レ怠時は實にして虛あらざるゆへ討るべき不意なし爰を以大將八の不可賴事と云へり

○士卒十病の事　一疑二恐懼三瘦四恨五臆心六二心七飢餓八混亂九迷十不知法　私云是を士卒の十病といへり大將是を知て此病を去時は士卒衆議一味して其事不レ成と云事あらず云々與清曰徒然草に孔子時に不レ逢顏回早死を舉て不可賴事をいへり此大將八不可賴と士卒の十病は常人も心にとゞめて修身齊家の用とすべし

(三)南天の葉穢を除　同書武備九卷に南天の葉けがれを除くといふ本文あり觸穢の時是を以手水をつかふべしと有さては厠邊などにこゑて(以下缺文)

(四)舟に乘時の用意　同卷に舟に乘には舟梁に繩或は三尺手拭などつけてそれをとらへて乘べし舟覆てもそれを放ざれば水入ることなしといへり又云舟に醉たる時は十八小角豆の霜(タロヤキ)を湯にて用ふべしと云云

(五)密書を認る用意　密書をかくには「豆のこ」とて大豆を水に漬(ヒタシ)置てすりつぶしそれにて書べし白紙に白く書たれば落ちりても人白紙とおもへりそれを水上にうかべて讀ば文字鮮明に顯るゝ也似我蜂物語中十四丁オに見ゆ

(六)富術三道　富に有レ三焉曰本富(ホンフ)曰末富(マツフ)曰姦富(カンフ)今洛中ニ屋潤者末富ニ非ルハナシ而姦富モ亦不レ少是其貧ヲ得易ナル以ト閑際筆記上卷(カ)六丁にいへり與清曰後漢書に逆取順守の說あり一世の豪富順取事かたし名將賢士の天下を治るも亦此道理也江戶日本橋通一町目の白木屋に家の掟書あり夫に商買を自己の利の爲にすることなかれ天下融通の爲にせよといふ詞ありといへり

(七)たんき星長刀星　大日本王代記百九太上皇帝元和五年己未の條にたんきほし出るなぎなたぼしといふ又ほうきぼし出るくわゑんのごとし云々大日本王代記一卷あり延寶四年辰六月吉日日比谷橫町又右衞門板と奧書にあり

（八）卅三所觀音　同書百十二新院万治二年己亥の條にらくやうに卅三所のくわんおんはじまる云々按に西國卅三所觀音は拾芥抄に見え坂東卅三所は坂東觀音靈場記に見ゆ桂川地藏記にも卅三所の名目ありしやうにおぼゆ後に閲て書付べし新院は後西院也頭書

竹居清事

（九）ベラ坊　同書百十三今上皇帝寛文十二年壬子の條にべらぼうと云うまれそこなひ京江戸大坂のしばゐにて見せると云々今上皇帝靈元天皇也後世愚人をベラバウといふはこれにおこれりと見ゆ頭書嚴縁二屈棒トイヘルハマガレ棒ノ義ニテ約ニ立ヌヤクザ棒ヲ云ベラ坊ハ俗ニヘヨロ〳〵ナドモ云テ力ノナキ由ヘロ〳〵矢ナド云詞モアリテタヨワク約ニ立ヌモノニ云也風棒モヘロヘロ棒一向イタミモセヌ義トシテ聞ユ

（十）京都町地間數改　同書延寶二年三月の條に京都家數軒のあらため表口うら行何間尺寸法のあらためありと云々

（十一）小兒の力持并大女大男　同書延寶二年の條に江戸さかひ町に四つに成子ちからもち石臼に錢貳貫文のせ持上ル十一月あふみの國よりたけ七尺三寸ある大女名をおよめと云見せ物ニ出ス云々按に文政十年の夏熊本侯の領地肥後國上益城郡矢部の在鄉田所村より出たりとて江戸に來り熊本侯の白金の第に居る身丈七尺五寸手ノ平壹尺貳寸足壹尺三寸五分名を大空武左衞門といへりとなん

（十二）道中駄賃增　同書に延寶三年二月一日に上道中だちん三わりまし其ほか何方へも道中二わりまし御禮出る云々

（十三）古作新刀の差別并解紛記　解紛記上卷に第一古作と云は堅を造り初めし大寶ノ比より五百年以後後鳥羽院の御宇までの作をいふこれらは皆さかりもすぐる其上時代の形儀にて何れも弥ようちに造るによつてありても用にたつは稀也只當代取扱は右の御代よりこのかたの作共也され共目察をする時の爲に自然世にも殘るべき古作までを勝て書記す者也云々解紛記上中下三卷あり奥に慶長十二丁末七月日黒菴とあり活字板なり刀を堅と書たり片假名の合字也弥挿弖敢などやうのさま〴〵の合字あり

（十四）劒相　伺候公程閑暇雜書一名立花家記寫本一册有奥書に此書は淺川傳右衞門柳川にて承傳候儀書留覺書を寫置もの也寶永丙戌六月十八日と見ゆ淺川覺書ともいふべし江戸にて道伯樣肥後より御登被ル成候時宗茂樣御對面之上道伯樣の御刀拵〔見苦候間被ル進由候にて御刀一腰被ル進候

道伯樣御刀は宗茂樣へ被ル進ル之候を宗茂樣御取被ル成此刀も作はあしからぬ作に候仁王にて可ル有ル之候紹運樣より被ル進たるかと御たづね被ル成候へばいかにも其通と被ニ仰上一候時立齋樣にも紹運樣御事被ニ思召出一候哉御涙を御ながし被ル成候扨打こみ御ぬかせ御覽被ル成候に仁王三郎清と銘御座候清字の下字わかり見え不ル申候由に候道伯樣被ル仰候は目利此以前より御好被ル成候程御座候由御挨拶被ニ仰上一候處に戸次（ヘツギ）治部御機嫌伺に被ル參候則御前へ被ニ召出一治部事は刀脇指の運の善惡よく見申候此御刀運の吉凶見候樣にと被ニ仰付一候治部則右之御刀を取ぬき候て見申候何のやくにも立申道具にて無ル之由申候てなげ申候道伯樣ことの外無ル興被ル成候立齋樣被ル成ニ御意一候は扨こそ主膳此刀さゝれ候てよき仕合ある事無ル之候道具の運の吉凶は慥にしるしある事也と被ル仰御道具あまた御出し被ル成御見せ被ル成候それ〴〵に善惡申上候あしきよし申上候は御指料には不ル成候道伯樣治部へ被ル仰候は刀の運勢きをさしては指主のため惡敷候と御意被ル成候治部申上候は不ル及ル申事に候運の惡きと刀ばかりにて不ル有ル之候

る久敷指主の身にそひ不ル申必人の手にかゝり申候いかやうの疵物にても三代傳りたるをば重寶の刀に仕候其故は指主を守りて男冥利にかなふがゆゑ子孫に相續候而傳り候處を尊み申候由申上候立齋樣にも最の由御意被ル成たると也云々按に劒相の事武備志に見ゆ可ル考

（十五）前髪向ツ髪　今の若衆の前髪をいにしへ向髪といへりと見ゆ淺川覺書に鷹野參河が嫡子吉右衞門まだ向髪有ル之候が御旗本方へ乘入候處に生れては無ニ是非一と申一番に塀に付申候云々旁注に吉右衞門此時鷹野彌十郎と申候と有頭書東鏡ニ垂髪ト多ク書タリ

（十六）にぎり飯并屯食（トンジキ）　同書に鑑俊御打果被ル成候御合戰夜打に被ル成候時立花切岸の儀被ニ仰出一云々道雪樣奉ル始無ル滯喰申たるものは僅に八人に而有たる由に候其外には下々迄喉に通り不ル申候由に候此樣子御覽被ル遊御立被ル成數千人の味方或は手負或は打死わづかに打揃候は上下によらず一人當千のものども也人が死ぬるより大き成事なし男たるものは死ぬとも食せぬは何を力にして死ぬべきぞ是見候へと被ル仰ル大なるにぎりめし四五ツさら〳〵と被ニ召上一

御見せ被レ成候是を見奉り一度に獨も不レ殘食を給申候と也云々按に朝鮮軍記にもニギリメシと有しやうに覺ゆ古への屯食といへるは是也屯食の事六十六の卅二段を考合すべし

(十七)片名字片名下名　同書に立齋樣御法名御わかく被レ成御座候時御心易被レ得二御意一候御方何も立花左近將監樣と福島左衞門大夫樣事「片名字」「片名」に立左福左と被レ仰候後には御自筆の御狀等にも立左と多分被レ遊候間福左樣と立左樣と何も讀能御座候に付諸人唱申候御心易御方も被レ仰御若き時分「した名」に左樣に申候間「りうさ」の下に「い」の字御付被レ成べきよしにて立齋樣と申奉ると也云々

(十八)タンボ井デンドウ中　田ノ邊を俗に「たんぼ」といひ淺草たんぼ吉原たんぼなど江戸にてもいへりこは「たのべ」といふを「たの」を音便に「たん」といひ「べ」を「ぼ」と通はしていへる也「ホトリ」といふも「ヘワタリ」の「ワ」を省き「タ」を「ト」に通はしいふにや「ヘタ」といふ邊力の略なるべしさて「タノベ」を「タナベ」とも通はしいふ丹後の田邊これ也津國渡邊は「ワタリノベ」の義也淺川聞書に田頭中に御領内の庄屋百姓百四五十人相ひかへ居申候云々又久末村の前ノ黒衣と申ひろみの田頭に黒田如水鍋島加賀守本より清正御集會被レ成云々などある「デンドウ」も又「タンボ」を「田頭」と書き夫より音に「デンドウ」とは呼たる也幾内の人「デンド沙汰」又は「デンドニ出テ晴ガマシ」などいふも田頭は田邊の廣場をいふより移りて廣く公なる事にいふ詞とは成れる也　頭書東鑑一ノ十二丁ウニ田頭ノ字アリ田ノホトリノ事ニテヒロキ義也甲陽軍鑑十上卅一品五十五丁ウに各居館へこもり田頭へいでゝたてなつき申事はいたさず候云々同廿卷五十五品廿四丁ウに田頭へをし出し勝賴につゝべきことは思はるまじきと仰らるゝ云々　室町殿日記廿ノ十三丁ウ變化者事條にかゝるうさきでんどうにはだかひとりまよひ給ふらん云々　桂川地藏記上十一丁ウに田頭之農夫爲二風流一忘二工夫一云云

(十九)藁履酒　淺川聞書に鍋島殿上へ被二仰上一御入部の御禮儀に柳川へ被レ參候終日の御酒盛にて御打送候わらぢ酒迄御座候云々按にわらぢ酒は相別の時藁履をはきたる時に呑酒をいふ也今俗に袖引酒といふ事ありそは吉原の娼女が客の歸るをり袖を引て吸付煙草を吸しむるを袖引煙草といひしより移りし詞也わらぢ酒も心はおなじく臨別の酒盛也「ワラヂ」は「ワラクヅ」の「ク」を省き「ッ」を「チ」に通はしたる也「ワラウヅ」といふは「ク」を「ウ」に通はし「ワランヂ」といふは「ク」を「ム」「ッ」を「チ」に通はせし詞にて皆おなじ

(廿)出狂房士遊　俗に人形の事を「デクノバウ」といへり恩地左近太郎聞書に正成鈔談の詞に曰云々最假借ノ遊ニモ竹馬ニ策ヲ打木葉ヲ集テ鷄トシ出狂房士アソビナドニ日ヲ暮ハ十歳ノ童タルベシ云々と有デクルヒ房の略語也是は人形のあやつりにて出て狂ふより名づけし也恩地左近太郎聞書板本一冊あり　頭書假我蜂物語下八丁オに一休和尚歌に「世の中の人はでくるぼあやつりてまはしまはせばのちはがつくり」予が過去の緣と云物有てかりに生をうけて人界に生れでくるぼのごとく我もなきもの也云々大聞記十六ノ二十二丁ウ醍醐花見の條にでくる坊の上手あやつりの名人ろ風流をつくべしとの玉ひ云々

(廿一)田樂猿樂互に譽る　同書に田樂猿樂ドモノ互ニ我ハ人ヲ譽人ニハ我カ藝ヲ讃サセテ見物ノ貴賤ヲ狂スニ似タリ云々按に今俗の山賣商人ガ「ハナツハリ」と名づけて己が仲間を買手の中に立まじらせ上品の安賣とふけらかして眞の買手を欺がごとし　頭書猿樂古事談一ノ廿三丁ウ同四ノ十二丁ウ登心集八ノ十六丁ウ梅花無盡藏別本三上卅九丁ウ

(廿二)はづす　「はづす」といふ詞は物語におほく見えてとりはづしてなどいへり按に「はなつ」の「な」を省きて「はつ」といひそれを體語にして「はづす」「はづし」などいふなるべし恩地左近太郎聞書に實ノ軍ヲバセズ勝ベキ圖ヲ外也と有て外の字をよめり

(廿三)バサラ　太平記廿一ノ二丁オ廿四ノ三丁ウ廿九ノ七丁オ廿五ノ廿一丁オ　にバサラ繪あり已に前にもこれかれ說をしるしたりき恩地左近太郎聞書に勇ノ似モノト云事アリ巧ニ勇ノ三相ヲ眞似シ勇ノ譽ヲ僞テ語リ其心ノ奥ニハ上部ノ勇ダニモナシ今ノ世ニバサラヲ好人ノ中ニ多キモノナルゾ行跡語ト相違シテ如何ニモ知リ安キモノゾ云々と見ゆ　頭書建武式目二丁オ緩怠抄九ノ廿五丁ウ續教訓抄十一上卅六丁オ落葉八の卷にもいへり和名抄僧坊具部に跋折羅八千手經曰若爲レ降伏一切大覺神一者當レ於二跋折羅手一谷響集五ノ五丁ウ六丁オ太閤記十五ノ十七丁ウ神道集五ノ一丁ウ　附錄中古日本治亂記一卷細川賴之本レ傳ニ立於義滿將軍二次第事條に當世ノ拔抄羅ナバ露モ申ス「ナカレ云々同條賴之內法掟に無レ位シテ威貴ク殿レ身拔抄羅チ好ミ是又過奢ト驕ト也云々同二卷鎌倉氏滿任官の條に此數年諸國ニ拔抄羅モ少ハ止ミ在京ノ大名ドモノ花ノ會月ノ宴過奢ナル「自然ニ止云々又愚ニシテ修リテ高ク拔抄羅チ好ム人々ハ賴之ノ政道ハ樂モナキ仕置也ト誹ル云々

(廿四)聖德太子馬惱未來記　同書に上宮太子馬惱未來記等ニモ無智ノ人ニ禪ノ法ヲ大ニ誡給云々とあり太平記に見えたる天王寺なる未來記の事にや瑪瑙盤などに刻しものにや可レ考

(廿五)白拍子　白拍子といふはひとつの遊の名にて舞女などの名にはあらず長門本平家物語に白拍子をかぞへと有は拍子とりてうたふさまをいへりと見ゆ

恩地左近太郎聞書に田樂猿樂白拍子ハ入ザル遊也とも有庭訓往來にも出たり調(シラベ)拍子の義歟又外に合せものなくて素拍子の義歟職人歌合にその圖を載たり

(廿六)池田氏　池田氏ハ其先祖不レ詳攝津國池田庄より出たる事は疑なし恩地左近太郎聞書に正成ニハ及バザリケメドモ正行程智ト仁ト勇トノ三ツヲ兼タル良將ハ末代ニハ有ガタキ事ゾカシ然ヲ吉野ノ公卿達ノ智淺クシテ天下ヲ朝セシメ給間敷所ヲ兼テ覺シ我身ノ病ヲ分別シテ討死ヲ急給ケルコソ最愛(イトホシ)ケレ正行二三歳ノ幼童アリ多門丸ト號ス內室又一子ヲ孕(ハラメ)リ是ハ攝津野瀨ノ庄ノ住人內藤右兵衞滿幸ガ娘也滿幸其比勇ト仁トノ譽アリシカバ故判官ノ仰トシテ角成テンケリ正行討レテ後父ノ滿幸二心有テ師直ニ屬シケレバ不仁不義ノ者ノ娘置テハ何ノ用ニカアラントテ正儀ガ計トシテ滿幸ガ方ニ歸シ遣ス程經テ產平安ニシテ一人ノ男子ヲ生リ其後同國ノ住人池田九郎敎依此娘美人タルヲ聞テ內藤ニ所望シテ夫婦ノ契ヲナセリ件ノ子ハ大剛ノ者ノ子ナレバ某養子ニセンズルニコソトテ一家ヲ相續シ七歳ニシテ元服セサセテ池田十郎敎正ト名乘セケリ後ニ細川武州入道ノ手ニシヨクシテ數度ノ戰ニ武功ヲ顯シ世ニ武ノ譽アリシ池田兵庫助是也武州入道モ所以アル者ノ末也トテ大事ノ人ニ思給テケリ今ノ池田ノ六郎ハ敎正ニハ孫佐正ガ子也トニヤ多門丸ハ四歳ニシテ病死仕タリトニヤ云々按にこれによれば池田氏ハ楠正行が血統也清和源氏のよしなるは池田九郎敎依が本姓にや可レ尋和州諸將軍傳五の卷十七丁ウに池田庄三信輝は攝州池田庄ノ出生ニシテ源滿仲ノ苗統也信輝ガ母故アッテ尾州ニ下リ信長公ノ乳母ト成リ是ニ依テ信ノ一字ヲ免メ信輝ト名ノリ先祖池田九郎敎依建武ノ比攝州野瀨ニ住ス彼養子ニシテ兵庫助敎正ト云ヘリ敎正實ハ楠帶刀左衞門佐正行ガ子也正行攝津四條繩手合戰ノ前其室懷妊ス又三歳ノ幼童アリ多門丸(タカ)ト云妻子共ニ正行ノ男攝州ノ住士內藤右兵衞尉滿幸ガ方ヘ送リ預ケリ正平四年己丑春正月五日正行廿六歳ニシテ討死アリ其後右兵衞尉滿幸心ヲ變ジ高師直ガ手ニ屬ス故ニ正行ガ弟次郎左衞門尉正儀ト滿幸ト不和ニナリ其後正行ノ後室男子ヲ產ス此節多聞丸病死セリ池田九郎彼後室ノ美ヲキヽ迎テ妻トナシ同赤子ヲモ養フ十七歳ニシテ元服シ池田太郎敎正ト號ス所謂ル兩父ノ諱ノ一字ヲ取レリ後ニ兵庫助ニ改ム勇智アリテ細川武藏守源賴之入道常久ニ仕テ屢軍功アリ源橘ノ二姓ヲ兼タリ敎正ガ長子ヲ池田修理亮佐正(スケマサ)ト云是池田庄三郎入道勝入ゝ祖也云々と有にて源橘二姓の由來明也

(廿七)もとのもくあみ　細字平假名の小本に太閤記とて中は七卷なるを一冊に合せし本あり畫入にて古代のくさ草子也大尾に右七卷者板行軍書拔書也寛正月日うろこ形や板と有始には太閤記第一天正軍記足利よしてる公さいごの事初段と書たりこれ一の卷の最初也もとのもくあみ珍名の事の條に何事によらずもとへかへることを世人のぞくせつにもとのもくあみといふ事有そのゆゑは南部筒井しゆんせう病なうに付すでにまつごに成しかば山田道安福ずみ兵衞いひ田ではの守松倉右近森しまの守をめしよせ仰けるはわれすでに身まかると覺えたり然らば松永筒井の家をせめん事うたがひなし我しせし事をかくすべしその手立はつのふり町にもくあみといふまうじんあり常にめしませことをひかせ我つれ〳〵をなぐさみしが年の比おんせい我にかはることなしこれをめしよせしん所のおくにいれおき我となづけておの〳〵かしづきとざまのせいたうぐんりよをなし我しすることをふかくかくすべしと老臣共に申付つひにをはられけり是によつてかのもくあみをしん所に入置しゆんせうのごとくかしづきちやくし藤かつを守立ける扱三ヶ年過ければ御吊有もくあみはおほくの金銀を下されつのふり町へかへされけりこれよりしてゆきてもあとへかへる事を世上にてもとのもくあみといひならはせり云々と見ゆ是は眞書太閤記にも出たる說也こゝには天正軍記を引て書り 頭書 諸國物語集下四十四丁オ元

隣が句に「わかみ一つはもとのもくあみ」俗說辨附編卅二卷十七丁オ

(廿八)愛宕山にてかはらけを投る　同書三信長記武田かつよりさ初段と有次に明智日向守光秀ほんぎやくのいごの事おこり幷連歌の事の條あり畫にあたごさんかはらけなげる所あり

(廿九)撿按座頭幷まいす　同三信長記けんぎやうざとうの事付まいすの事の條に津國兵庫の町人盲目の撿按の仲間にいりて利を得し事盲人これを信長に訴へ信長撿按の罪をたゞし撿按等金二千兩出して罪を贖(アガナヒ)しをその金にて宇治橋をかけさせられし事見えま

たむへんといへる賣僧が信長にから竹わりにせられし事見ゆこれも眞書信長記の說也

(卅)權(カリ)の輕重潮の滿干による　司馬峻が和蘭天說十八丁オに古人の曰毎日ニ權ノ輕重不レ等潮升(ル)トキハ輕シ潮降(ル)トキハ重シ海水河水井水皆同物トイヘドモ河水ハ山獄ノ溪水聚テ河トナル大海ノ水大陽ノ氣水中ニ入照爍潮トナル海水不レ氷夜國ハ氷海トナル天氣不レ徹火氣海ニ入テ淺ノ不レ爲レ鹹故氷海トナル云云

(卅一)地中に泉を求る方　又十九丁オ地中泉ヲ求ムル術アリ求メント欲ル所ノ地ニ深サ三尺廣サト長サハ意ニ任ス銅或錫ノ盤一具ヲ用ヒ清油ヲ徹(トホ)ク之ニ遍ク擦テ底ニ木ヲ用ヒ高サ二三寸ヲ楷(サカエ)盤ヲ以テ偃(ノベフシ)テ之ヲ置其盤上ニ乾草ヲ之ニ蓋(フタ)トス草ノ上ニ土之ニ蓋トス一日ヲ越テ開キ視ルニ盤ノ底ニ水アリテ滴(シヅク)ナラント欲ス其地下則泉アリ又法アリ地ヲ掘ルニ如レ前篝火(カガリビ)ヲ其底ニ入レバ煙氣上升シ蜿蜒(マガリクネリ)曲折スル者是地中ノ水氣ニメ滯ル所ナル必泉アリ云々

(卅二)雲氣烟氣　又廿一丁オ云雲氣ヲ見ルノ術アリ兵亂ノトキ此術ヲ用ル者アリ人大ニ群屯(ムラガリタムロ)スルニ必人氣ヲ見ル天ニ物ノ狀ヲ顯スト云ハ眞理ニアラズ妄說ナリ冬月火災多シ寒氣ハ地氣上升セザレバ水氣薄ク天氣多シ天氣ハ即火氣也冬月最モ寒甚シキハ萬物皆火ナリ竈炊爨スル時烟ヲ發スルニ是ヲ平遠ヨリ望見ルニ亭々トメ直上スルニ迅ナレバ旱ノ徵ナリ蜿蜒(マガリクネリ)テ起リ上升セント欲シテ不レ得モノ雨ノ徵也何故ゾヤ曰水土ノ氣上騰メ雲トナル雲凝テ上ニアリ未レ成爲レ雨空中ノ氣能行ハレ悉ク皆燥乾スル也(夏月天氣サカンニシテニ山撒雲ヲ起シ雨ルニ多シ亦夏月旱アリ此理ノゴトシ地氣空中ニ燥乾スルユエナリ)故ニ火煙ヲメ直上シ礙(トンコホル)ニナシ雲將ニ雨ヲ成ントス空中ノ氣行ハレテ皆濕性ヲナス故ニ煙ハ濕ノ爲ニ礙テ上升スルニヲ不レ得是宛曲セシムル也云々

(卅三)天杯を賜　さかやく花ノ上ノぎやうかう天はいのぎぶがくの段に主上御はいをきこしめしてさらに酒を入て右大將に給右大將いそぎしやくをさしてはんはいを給はりてはんざにかへりてをのこどもをめす頭中將かはらけを持參す右大將ひざまづきてさか月なる酒をかはらけにうつし入て御酒盃をば頭中將に返し給頭中將これをとりて退きいづ次大將酒をのみてかはらけを座下(ザカ)におきて揖(ウラガリ)して南殿をくだりて

はしのまの西のほとりにたちてぶたうせらる　頭書筆記六十二ノ四十二段官位俗訓二の卷思のまゝの日記四十一丁オ

(卅四)摠の字を誤て總の字に作る　續日本紀に笠志總領あり太宰帥をいへる也總の字摠に作るべし宋人王明清が揮麈後錄二の卷に摠管之摠字但(タヾ)從レ手不レ從レ絲といふ條に治平初詔改ニ諸路馬步軍部署一爲ニ總管一避ニ厚陵名一也考ニ之前史一總字皆從レ手合レ作ニ摠字一非レ從レ絲無レ疑出ニ於一時稽考不レ審泯襲至レ今不レ可レ更矣と有

(卅五)千秋節天長節并誕生日　續日本紀に千秋節天長節あり揮麈前錄一の卷に唐明皇實錄云開元十七年秋八月上降誕之日大置酒合樂燕ニ百僚於華萼樓下一尙書左丞相源乾曜右亟相張說率ニ百官一上表願以ニ八月五日一爲ニ千秋節一著ニ之甲一令布於天下一咸使ニ燕樂一休假三日詔從レ之誕日建レ節蓋肇ニ于此一天寶七載八月己亥詔改爲ニ天長節一云々とあり誕生日を祝の始也　頭書示兒編十ノ廿丁ウ實ニ生日一條アリ

(卅六)肅愼靺鞨ハ今滿洲といふ　邊要分界圖考二に滿洲ハ今ノ唐土淸朝ノ本國ニシテ山丹ハ其部屬ナルトキハ「カラプト」ノ奥地ヨリノ道里最先ヅ知ベキ所也蓋シ蝦夷人山丹人ノ語ニ云「カラプト」ヨリ山丹ノ「モチプ」へ渡リソレヨリ「マンゴノ大河」ニ沿テ「ギチ」ニ至ル「ギチ」ヨリ「滿州イチヨボツト」ニ至ル「イチヨボツト」ヨリ「ヌンクタイ」「ギリウラ」ヲ歷テ「ボチヨ」ニ至ルト今按ニ「ヌンクタイ」ハ寧古塔「ギリウラ」ハ吉林烏喇「ボチヨ」ハ船廠ナリ松前漂民經過ノ道里ト粗〻合ス圖ヲ見テ知ベシ云々又云滿州ハ即肅愼靺鞨ノ故地ニシテ我「カラプト」ノ奥地ト接界ナリ淸一統志ヲ按ニ盛京ノ統部東ハ海濱ニ至リ西ハ山海關ニ至リ南ハ朝鮮界土門江ニ至リ北ハ黑龍江外ヨリ魯西亞界ニ至ル其初淸ノ遠祖三姓(地名)ノ亂ヲ定メテ始テ寧古塔ノ地ニ居リ國ヲ滿洲ト號スソレヨリ興祖景祖ニ至ルマデ黑圖阿喇ニ居ル云々按興祖ハ慶王也直皇帝と號す景祖ハ祖昌王也翼皇帝と號す肅愼ハ日本紀に「ミシハゼ」とよめり靺鞨は續紀及多賀城碑に見ゆ邊要分界圖考八卷近藤守重撰寫本也肅愼唐虞の代息愼氏といひ商周秦には肅愼漢以來扶餘挹婁の地と成後魏に勿吉隋唐に靺鞨と號す靺鞨に七種あり中黑水粟末の二部あり粟末は後渤海と改む五代の時契丹と〳〵く渤海の地を取りて黑水靺鞨その南に

あるものを熟女眞と云 その北に在〻ものを生女眞といふ後に遼の興宗の諱を避て女眞と改む遼の 大祖渤海の 大謨讌を征して其忽汗城を拔き渤海國を改め東丹とす金の始祖此地より興り熟女眞なり阿骨打に 至て始て忽汗水の故を以て國號を建て金と云忽汗水は今の寧古塔の虎爾哈河なり歷 史に渤海とあるも靺鞨とあるもみな高麗の事也と知べし○日本紀欽明五年十二月に肅愼齊明紀四年に肅愼同六年に肅愼續紀元正養老四年に靺鞨聖武神龜四年に渤海郡者舊高麗國也云々 天平十一年に渤海人鐵利人鐵利人ノ北ニアリ鐵利ハ渤海同十八年 渤海人鐵利人 天平寶字三年 高麗國コノ時ヨリ渤海ヲ改テ高麗ト云又渤海トモ云 寶龜二年六月に渤海國同四年六月渤海○弘仁六年正月○延長八年渤海幷東丹國本朝文粹東丹國入朝宇治拾遺に宗任が父賴任が談の條○多賀城碑靺鞨云々○尙書ニ肅愼家語同後漢書晉書唐書金史五代史通典その外肅愼渤海靺鞨の名におほく見ゆ

(卅七)酒泉 漢土に酒泉郡あり美濃に養老泉あり天地自然に湧出の酒泉あること造物者の無盡藏也最上德内常矩が蝦夷草紙三卷ありその一の卷にウルツブ嶋の北方にチリポイといふ嶋あり此嶋の岩の間より湧き出る泉あり味酒のごとく匂ひ好き梨子のごとし此嶋に行たる蝦夷土人此水の濃味なる事を甘じて其處を去り兼て數日滯留し是を飲み滿服して飽かずといへりひたと呑めども無毒にして又醉事もなし土人是を名づけて「カモイワッカ」といふ神水といふ事なり又赤人賞翫して甚貴むといへり遥く天下萬邦にもかゝる好泉も復と數あるまじといへり則赤人是を尊信して「キスロヲ」と名づく日本の養老水といふの義歟もしれず余此地にいたらざれば委敷しらず其水の味と匂とを尋るに蝦夷地に樺といふ樹あり此樹を生木のまゝ皮へ横に切疵を附れば即漆のごとく腦水出るを取て是を飲む是土人のなす所也其樹の腦水は彼島の水の匂に似たりといへり依て吾樺木の腦水を土人に命じて取て試るに能き梨子の香ありて甘し又東都の酒に似たりと思はる因て彼島の水の味を思ひやりて推量せし也云々與清按に赤人は山丹人也山丹滿洲とて蝦夷辛太の東北につゞきて「オロシャ」の屬國也樺は樺櫻(カバサクラ)とて万葉にカニバもてつくれる舟などよめる木也信濃などにおほかり頭書 瑯琊代醉編二ノ廿四丁ヲ矢酒甘露也云々

(卅八)蝦夷の言語 蝦夷草紙上卷言語之事の條に日本紀神代紀に「ノミ」の二字は祈禱と訓じたり蝦夷言葉もやはり祈禱を「ノミ」といふ也又蝦夷人柳にて削り掛けを掛へ幣の如に作りたるものを神前に捧て是を名づけて「ヌサ」といふ是又神代の遺語なるべしある神道の書を見るに木匠の庶人家宅の造立の時捧物の祝儀とて棟木の上に達たる物にかんな屑を垂たるは青幣白麻を垂たるは白幣なる故に麻の字を「ヌサ」とよむ也と云々又蝦夷人は神を「カムイ」といふ神居の轉言なるべし神居宮居鳥居皆居の字は助語にて神居といふもやはり神の事也三味線を片鄙に「シャムセン」といふがごとし「カミヰ」を「カムイ」といふも同じ又麻を「ヌシヤ」ともいふ「サ」と「シャ」と轉じたる也譬ば物を捨る事を打去(ウッサ)る事を「ウッチャル」といふがごとし皆連聲に依りて轉じたるべし其外崎(ミサキ)泊(トマリ)拜(オガム)髮(モトドリ)女(メノコ)等の蝦夷詞はやはり日本の古語なるべし有增の物の名は諸書に見えたれば是を不レ載予が集る所は日用の蝦夷詞を語りてこゝに錄す是に志す人にそなふのみ

天氣が能いシクシピリカ 空が悪いニショロカエン 能い日和ピリカトカカプ 雨が降るルアンヘアン 雪が降るレバシコ 風ンが強いレイチュプケ

此外おほかれど略す「ピリカ」ハ能也「ウエン」は悪き也

(卅九)エトロプ島の名義 同卷エトロプ嶋事の條に「モシリノシケ」と云所に「エトロフワタラ(ツイ)」と云岩ありあげまきの形に似たり此岩に因て當島をエトロプと名づく昔「ヲキクルマシャマイグル」と二人の神ともいひつべき人蝦夷地に渡りたるが其人の太刀の鎺に提し緒の形に似たるとて「エトロプ」と云といへり「エトロ」ハ鼻「プ」は緒「ワタラ(ツイ)」は岩と云義也此二人は義經と弁慶の兩人也といふ説あれどもいまだ詳なる事をしらずと見ゆ

(四十)食土 同條にエトロプ北方海邊に蝦夷人食物とする土あり色白く和らかなる事餅のごとし食用に達せんと思ふ時はみづに施し水舞(カキマワ)して砂を去て煮るにシャウフ糊のごとし味平淡にして毒なし土人殊に賞美する也云々 頭書 信濃奇區一覽二水内郡飯綱山の條に善光寺よりとりて荒安村に里祠あり是より峰迄二里半峠より戸隱まで一里也此道筋峰より北へ十四五丁下りて方十歩ばかりの間湯地あり此所湧て粟飯のごとく大麥の割飯にも似たり俗に餓鬼の飯といふ手に掬して喫するに味麥飯にかはることなし云々蕉氏筆乘に白石を煮

(四十一)カムサスガ國までの島々 同書上卷カムサスガの事の條にクナジリ島よりカムサスガ國に到り

大小島都て廿一島みな蝦夷地にて日本國に相續して屬島也松前所在島の東浦ノツケ村より海上僅三里にして最初クナシリ島北極出地四十二三度周廻凡一百五十餘里也此島より海上僅五六里にしてエトロプ島北極出地四十三四度周廻凡三百餘里也此嶋より海上凡一十九里周廻凡一百五十餘里也此外大嶋にはシモシリ嶋ホロモシリ嶋ヲン子フタン嶋の三嶋はエトロプ嶋に勝れる大嶋也といへり然れば日本に比すれば四國と九州ほどの嶋々おほし何れも嶋といへば小に聞え國といへば大に聞ゆ大なるに依て國となる廿一嶋合ては日本に比すれば數倍に過たりクナシリ嶋北極出地四十二三度也カムサスガ國は五十四度也クナシリとカムサスガ南北と相距る事僅四十三度なれども東西に相距る事經二十餘度なるべしクナシリ丑寅に當りてカムサスガ國なるべき也坤より艮の方位に靡きたる島續きなれば日本に數倍せり其證據には日本長崎三十二度南部四十度相差り八度は是南北緯度也東西經度は十三度に過ず緯八度を横とし經十二度を縦とし此縦横の內へ斜めに日本國を帶たり地幅は日本國中皆一二度を過ず所在は申より寅に靡きたる

國也クナシリ嶋よりカムサスガ國は緯十二度を横とし二十餘度を縦とし此縦横の內へ斜めに彼廿一嶋を帶たり地幅は諸嶋共に一二度に過べからず艮日本の地幅の如し所在は未申より丑寅に靡きて大に廣く長し是を知て歟左のごとし

赤人國の年號一千七百一十三年日本の正德年に當りて赤人初てカムサスガ國に到りて此國を從へたり其安永年間よりカムサスガ國に城郭を築き群縣の夫代ありて開業をなす事壯なり依て廿一嶋都て嶋の名を改め撫育敎道し租稅を采りて帝都「ムスクハ」に送る也其島々の土人も今は既に赤人の風俗に化したり嘆くべきにあらずや云々

(四十二)蝦夷濫觴　同中卷蝦夷地濫觴之事の條に蝦夷地の最初を糺に往古此海邊に老人夫婦令二住居一食物無レ之に付艱難仕候所夢中に佛神の告有レ之一つの船の械を授給ひて是を以大海を探し食物迄得べしとて夢は覺たり其時敎へに任せて彼械を以て搔き探見るにしろき水のしたより沫立て海底より蝦魚浮出たりしを取て食物として夫婦の翁一期菜しとなん此夫婦の住居の所今の江刺に有レ之を彼老翁をば エビス

宮と崇め姥をば姥神といはひて今兩社有レ之此兩神の子孫增長して年を歷るに從ひ繁榮成りし事也中古武田次郎信廣初て此嶋に渡りて蝦夷地半國從ひ上の國勝山に住居有是より信廣領分のもの自然と日本の風俗を聞傳へ四季年月日時の數を定め村里の差別相定候也相殘る半國も信廣家の下知に隨ひ然所風俗も別て賤敷誠に禽獸も異事なく親子兄弟を相嫁また耕作の業無レ之故雜穀の食用に良成事更に不レ知鳥獸海草魚類等食用となし皆海邊にのみ住居云々

(四十三)山丹國の一里　同下卷に工藤庄右衞門申達候覺云々赤人の國名を「ヲロシイスコイ」と申候由國主は女帝にて都を「ヘチエルホル」と唱候由此度赤人等乘船仕候「ヲホヲツカ」と申所より都迄陸路通行仕凡道規五六千里御座候由尤此方にて五百間を壹里と仕候由承知仕候云々

(四十四)山丹人言語　同下卷山丹人言語の條に酒ァラキ　算盤シヨハハン　男クセ　女チクテ　童チヽコ云々などゑゆ其外略レ之今阿蘭陀酒に「アラキ」といふ有

(四十五)端午　洪邁が容齋隨筆卷一八月端午の條に唐玄宗以二八月五日一生以二其日一爲二千秋節一張說上

大衍歷一序云謹以開元十六年八月端午赤光黑室之夜獻レ之唐類表有宋璟請下以二八月五日一爲中千秋節上表云月惟仲秋日在二端午一然則凡月之五日皆可レ稱二端午一也と見ゆ本朝月令の事を記せる書どもの端午の條に引注すべし

(四十六)くさめ　くさめの事ははなひるとうたにもおほくよめり容齋隨筆卷四噴の條に今人噴嚏(クサメ)不レ止者必嘆睡祝云有レ人說レ我婦人最甚予按二終風詩一寤言不レ寐願言則嚏鄭氏箋云我其憂悼而不レ能レ寐女男レ我心如レ是我則嚏也今俗人嚏云人道レ我此古之遺語也乃知此風自レ古以來有レ之とあり噴嚏の時の祝語拾芥抄に見ゆ

(四十七)文選五臣注の誤　與清文選を讀むに六臣注いと〳〵誤おほし僕國のさばかりの學者が注しけんものにかう誤あるはいかにぞやといぶかしくおもひをりしに容齋隨筆卷一に五臣注文選を評せし條あり曰東坡詆二五臣注人選一以爲二荒陋一予觀下選中謝元暉和二王融一詩上云陷レ危賴二宗衮一徽レ管寄二明牧一正謂謝安謝元安石於二元暉一爲二遠祖一以二其爲一相故曰二宗衮一而李周翰注云宗衮謂二王導一導與レ融同宗言晉國臨レ危

賴ニ王導一而破ニ符堅一牧謂ニ謝元一亦同破レ堅者夫以ニ宗衮一爲ニ王導一固可レ笑然猶以下和ニ王融一之故上徹爲レ有レ說至下以レ導爲中與ニ謝元一同破ニ符堅一乃是全不レ知レ有ニ史策一而狂妄注レ書所謂小兒强解事也唯李善注得レ之と見ゆ試にいはゞ序に式觀ニ元始一銑曰式用也とあれど詩邶風に式微々々箋式發聲と註したれば「アア」と訓べし用の字に「ア、」と訓意あらんや是誤也又茹レ毛飮レ血の注に濟曰茹蘊也言上古巢居穴處飮ニ食血肉一蘊ニ藉毛羽一時人質樸文章未レ作とありこれも禮記禮運に見えて茹は食也毛は草也注疏を考すべし呂延濟が說誤也かゝる誤說五臣注中舉てかぞふべからず今和板の六臣注は五臣注に李善が注を加へて刋行せしもの也取捨して用べし唐本に李善注のみの本あり最善也文選集成もよし

(四十八)小女子を產　和州諸將軍傳ニの卷十六丁オに永祿七年甲子春三月丹波國ニシテ七歲ノ小女產子(コウム)カ此擧レ世天下の惟異也ト云順慶も密ニ一士ヲ遣リテ其實ヲ見セシム翌年果シテ三好ガ弑害アリ云々按に文化年中にも下總國佐倉近邊にて七八歲の女子產せること有何の變もあらざりしがオロシヤ人蝦夷に來て宮館邊をさわがせし事ありこれらの瑞にや和州諸將軍傳十三卷あり寶永丙戌秋閑雲子が撰也同四年初春刋行す

(四十九)紙錢幷金札銀札　今の世諸侯の國に金札銀札をもて金銀に代て通用せしむる事おほかり中國九州の大名に最多し細々要記一の卷に建武元年二月三日紙錢通用ノ儀仰出サレ諸國ノ地頭御家人ノ所領ニ課役ヲカケラル先例イマダナキノ所ナリ云々と見ゆこれ本朝金銀札の原始なるべし唐土にも紙錢の事見ゆ和漢神祭に紙錢を用る事又おほかり和名抄祭祀具部に紙錢新樂府云神之來兮風飄々紙錢動兮錦繖搖(ヒルガヘス)紙錢俗云ニ加美勢邇一云勢邇加太云々全唐詩第一函五冊樂府送神歌にも紙錢あり陔餘叢考神道名目類聚抄など考べし細々要記七冊興福寺寶嚴僧正所レ記也建武元年正月に起り永和三年十月に終興福寺の什物也

(五十)高汐幷オラレ風　細々要記五の卷に延文六年南方正平十六年六月下旬の比阿波國高ノ湊ト云所高鹽俄ニミチ在家數千軒海ニ沈ミ男女數萬人死スト云々按に關東にて津浪といへり余門人平戸の家老松浦外記語曰彼國にオラレ風といへる烈しき風一條吹來ること時々ありその幅五六間若は七八間に過ずされば獵船四五艘も並たるに一二艘は此オラレ風の難に逢て溺死すれども傍の船は恙なし或人洲崎の高き巖頭に立て釣したるにオラレ風吹來り高浪打ちよせて其人海底のモクヅトとなれり其風必東或東北の方より吹といへり頭書增鏡一の卷卅六丁ウ新島守の卷にあらいそに高鹽などのさしくるやうにて云々扶桑略記卅ノ二十九丁オ堀川天皇寬治六年條に八月三日甲寅大風諸國洪水高潮之間民畑田畠多以成レ海百姓死亡不レ可ニ稱計一云々

(五十一)メシマ瘤　平戸の元老松浦外記が小屋にて職原抄を講せしをり外記語曰平戸領内に和布嶋(メシマ)と云小嶋あり其嶋の桑木に瘤生ずる事ありそは菌の類也これを水煮して用れば中氣(チユウキ)に妙也とて余に一ツ惠たりこは幾度煮じ用ても功驗なし實に神藥也といへり因に云樓櫓の新葉を黑燒にして用るも亦中氣の妙藥也

(五十二)烏帽子子烏帽子親墓目親(ヒキノオヤ)　烏帽子子烏帽子親ハ元服の加冠の人を中比烏帽子親(名付親)と云ひし名也盛衰記十八の卷四丁同廿の卷九丁平家物語九の卷五丁(ウ)平治物語參考本下卷八十八丁(オ)曾我物語五の卷三丁太平記參考本十の卷廿四丁(オ)同廿九の卷五十六丁(ウ)伊勢の卷下卷七丁(ウ)相州兵亂記四の卷十五丁(オ)などに烏帽子子見え烏帽子親ハ平治物語參考本下の卷八十二丁(オ)盛衰記十八の卷四丁(ウ)同卅六の卷廿一丁(ウ)曾我物語一の卷廿丁(オ)同四の卷廿一丁(オ)同八の卷廿八丁(オ)太平記參考本卅六の卷廿一丁(ウ)結城戰場物語類從本一丁(ウ)ニなどに見えたり伊勢の卷には將軍義滿勢州下向太神宮へ社參せられ多藝の御所立寄給ひ顯康卿の嫡男親能朝臣を義滿猶子の契約あり則諱の一字をおくられ滿泰と改名せらる顯俊朝臣の二男俊康をも烏帽子子とし京都へ同道して上り給ひけりと有○常山紀談五之上卷に黑田長政の嫡子滿德丸との四ッの年袴着の祝あり母里但馬は墓目親(ヒキノオヤ)にて常に祖父(チ)となづけられし云々頭書類聚名物考稱謂十四東鑑源平盛衰記三十六ノ二十一丁(ウ)同卅八ノ二十三丁(オ)烏帽子折上九丁(オ)又片親(カタオヤ)トモアリふぼし親元服次第二丁(オ)三丁(ウ)ふぼし子元服次第三丁(ウ)烏帽子折草子上九丁(オ)十丁(ウ)和田酒盛草子四十丁(ウ)十番切草子十二丁(オ)景清草子十一丁(オ)元服曾我草子七丁(オ)八丁(ウ)十一丁(オ)太平記廿九ノ廿七丁(オ)同卅六ノ十六丁(オ)絲源抄十二上六十三丁(ウ)名付親伊曾保物語下十三丁(オ)

松屋筆記卷之五十五

東都　源與清文儒稿

(一)戀せぬ人は無情　世の諺に戀せぬ人は無情也といふは俊成卿の長秋詠草中に「戀せすは人は心もなからましものゝあはれもこれよりそしる」といふ歌を出處とやせん

(二)松永彈正が名言　徒然草貞德の慰草一の卷十六丁七段に松永彈正久秀はかくれなき武勇の名將たりしが若きものどもに敎て申さるゝやうたとへば今天がおつるといはゞ空を見すしてゐるがよき也見てかなしむとておつべき天のおちずしてあるべき事かはといはれしと也と云々與清按にこれ肝魂の落付たる人の語也必おもひ學ぶべし松永久秀の事跡は和州諸將軍傳といふ刋本にくはし

(三)だれタッタと云詞　徒然慰草一の卷五十丁廿二段に今云あの人たちのもの申さるゝことばをきくに或は「たれ」といふことを「た」の字をにごり「たゞ」といふことをば「たつた」とかみの「た」もじをつめて下の「た」もじをすみて申さるゝかやうのかたことといくらといふかすをしらず丸か耳にさへをかしく傳ればこれをいにしへの人たちにきかせ奉らばいかばかりかなしくおぼしめされん云々

(四)消息文に年號書くはへまほしき事　同書一の卷六十五丁廿九段に文のおくの月日ばかり刋の上にかきたるを見れば是はいつのとしにてありつるやらんとおもひ出さまほしく侍れば月のかた書に細字にて年號を書たき物也と常に存ずれども人のめたつべき事なればさすがにえかゝで打過侍りぬげにもとよき人のわぼしめしてあそばしそめよかし又その年號の用に立事も侍べき也云々是は貞德の存意也

(五)疊と女房は新きがよし　同書二の卷五丁卅二段にうつはものは新しきよし人はたゞふりたるのみぞたうとかりけると尙書の文をよめる古歌あり必古き人のものをしるにてはなけれどもよき人の老てとゞまりたるは世のたからとなる也云々今世に疊と女房は新きがよし茶器は古きがよしといふ諺有似かよひたる古歌也

(六)富貴の人必智者ならず　徒然草卅八段に位高くやんごとなきをしもすぐれたる人とやはいふべきおろかに拙き人も家に生れ時にあへば高き位にのぼりおごりをきはむるもありいみじかりし賢人聖人みづからいやしき位に居り時にあはずしてやみぬる又おほし云々此段を見て富貴はうらやむまじき也

(七)齒生て生れたる兒を鬼子也とて殺すは日本の弊風　徒然慰草二の卷十六丁四十段に日本はおろかなる風俗ありて齒のはえたる子をうみては鬼子といひてころしぬ牙齒は腎の臟をつかさどるゆへはやく齒のおふるは精力つよく無病なる子を生るればそのまゝうしなふてこそあたら事にて侍れ此事はおほやけへ訴ておぼし立たきもの也同志なる子もしさやうの子まうけたまはゞ人はともいへかくもいへ殺さずして必そだてあげ給ふべき也云々與清按に日本紀に生ながらにして齒の生し給ひし天皇見え漢國の聖賢にも例おほし前太平記といふものに酒顚童子生ながらに齒生し事見え奇異雜談集二の卷にも齒の生て生れし鬼子の事有因にいふ酒顚童子の畫卷世に流布せるはいとくだれる代のもの也香取の大宮司が家の畫卷二卷ありて古色いとめでたし下總國佐原の里の伊野衞十郎が許に典物にて有しを余まさしく見てそが中田樂の圖をその里の門人永澤啓吉に寫させたりき詞は御伽草紙の中に收て刋行せり

(八)臣子たるものに見すべき連歌　徒然慰草二の卷廿七丁四十七段に櫻井基佐が壽像の贊に「あとにはなさぬ都なりけり」といふ句に「いつくにも君すむ方を枕にて」一期の連歌の出來句と云々君父の方をあとにせまじき義を臣子にしらせまほし

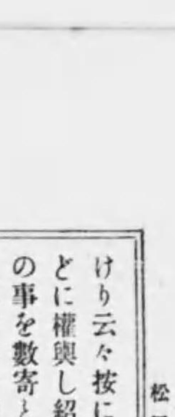
(九)利休宇治の上林が茶湯をほむ　同書同卷廿八丁四十八段にそのかみ宇治の上林がもとへ夜會に利休居士大名衆とゆかれけるにあるじはれがましくや思はれけん手もとともふるふやうにてさゝくの棄よりおつるもなほさずさせんのころびたるをもそのまゝにてひざまづき利休の前へ茶碗を出しければ列座の若き殿たちみなまくはせてゑつぼにいられけるを居士は日本一の手前かなとかんせられけり後にその心を大名衆たづね給ひければ各をはるゝ申入るもたゞ此一ふくをしんせんためばかり也これを湯のさめぬさきに奉らんといふ心一すぢにてけがあやまちに心をかけざりし所こそたてすましたるにて候へと申され

けり云々按に本朝茶湯の道は珠光法師東山義政公などに權輿し紹鷗利休などに成れり利休己がおもひ付の事を數寄と號してさま〴〵道を潤色せり此一條も上林が非を利休が口才に任せてほめなしたる歟

(十)目代(シロノ)井守(モリノ)目　徒然慰草二の卷四十二丁　五十四段にうづみたるものゝあたりにめしろをおかざりしがあやまち也云々めしろは目代にて番人也今昔物語にまもり目と有八代集の内の詞書にも有しやうにおぼゆ

(十一)牛のつのもじ　徒然草六十二段に延政門院いときなくおはしましける時院へまゐる人に御ことづてとて申させ給ひける御歌「小たつもし牛のつのもしすくなもしゆかみもしとそ君はおほゆる」こひしく思ひまゐらせ給ふと也云々慰草に延政門院は後嵯峨院の皇女也ふたつもじは「こ」牛のつのもじは「い」直なもじは「し」がみもじは「く」のよし注有按に此御世は假名遣の格もみだれたれば論なけれど戀の假名には必こひと書てこいと書事はなかりし也されば牛のつのもじは比の假名を「ひ」と書が牛角に似たるゆゑ也徒然草の諸注誤れり

(十二)かへし刀　返し刀といふは此方より一刀大きく切彼方より一刀少くきりてその形



如レ此といふ也徒然草六十段に枝の長さ七尺或は六尺返し刀五分にきる云々慰草三の卷三丁に木竹によらずはすぎりに切て其うらを切そぐを返し刀といふ云云

(十三)長柄の人柱の歌　長柄の人柱といふは仁德紀の武藏强頭が故事に附會せし說なり徒然慰草三の卷廿四丁　七十九段につのくにながらの橋たび〳〵ながれしにある人ひとばしらを立給へと申す奉行せんぎして科なきものをつみなはんもさすが也とかくけ事いひ出したる人をいれんとていれけり後にそのむすめある所へ人かしづきてえんにつくるに三年まで物いはざりしかばかたはものとておこせし人のもとへかへしやるその道にて雉子のなきけるを供のものころし侍りければ興のうちよりかの女「ものいひし父はなからの橋柱なかすはきしもいられさらまし」とよみしにより啞にてはなかりけりとて乘物をかきもどし侍るとなん云々按に神道集七の卷橋姫明神事の條に抑人王三十八代ノ帝ヲバ齋明天王ト申ス皇極天王ノ重祚シ給シ時ノ御名ナリ此時攝州長柄ノ橋ヲ懸ラレシニ人柱ヲ被レ立タリシカバ其河ノ橋姫ト成レリ依レ之河ニテ死ル人ハ皆橋姫ノ眷屬トハ成ル也其故ハ橋ヲ懸ル事度重リケレドモ事行ザリケレバ人柱ヲ立ベキ由ヲ内談有ケル折節淺黄袴ノ膝ノ切レタルヲ白キサイデヲ以テ縫付タルヲ著タル男一人出來レリ其妻ハ二三計リナル少ナキ者ヲ負ケリ斯ル處ニ鷄ノ鳴ケルヲ人々聞ツヽ差遣此男亦材木ノ上ニ息タリケルヲ此橋ノ人柱淺黄ノ袴ノ膝切レタルヲ白キ衣端(サイデ)ニテ縫付タルヲ人柱ニ立程ナラバ相違无事行ベシト徒口(イタヅラグチ)ヲ立ケル程ニ橋ノ奉行聞レ之サテハ汝ヨリ外ニ別人有ベカラズ則取縛リテ橋柱ニ被レ立ケリ其妻女夫ノ別ヲ悲テ一首ノ歌ヲ讀ツヽ硯紙ヲ乞テ書キ橋柱ニ結ニ付歌ニ泣々少キ者ヲバ負ナカラ身ヲ河ヘ沈メケル其歌云「物イヘハ父ハナカラノ橋柱ナカスハキシモトラレサラマシ」ト讀タリ此女ハ則此橋ノ橋姫ト成ケリ人々哀ミテ橋爪ニ社ヲ立橋姫ノ明神ト祝ヒケル也とあるが出處也西遊行嚢抄にも此說あり人柱の事は築島草子にも見ゆ頭書年山紀聞五ノ三丁

(十四)行粧調度などにて人の心しらるゝ事　人は行粧或は調度などによりて心もおしはからるゝもの也近來の人に正木千幹一柳千古などいふ歌よみは髮を總髮にし衣類をかざり大貧人なれども物もたり顏にもてつけて打ふるまひ調度なども芝居の道具めきたる人おどしのきら〳〵しきをおきならべ俗人をはからんとかまへたるいとかたはらいたし狂歌堂眞顏もまた此癖あり余あまたゝび此人たちの客に對(シラ)ふさまを見しに外に人ある席にては寬大無禮にふるまひておのれ大人がり外に人もなくさしむかひたらんをりはいとうや〳〵しく客をうやまひ最負せられん事をもとむ千幹は外客あれば褥上にて余に對し外客なければ余をおくりて余が履を直したりきかくきたなく腹黑きふるまひして世に用られんとはかるはあはれなる衆生ならずや徒然草八十一段に大かたもてる調度にても心おとりせらるゝことはありぬべしさのみよき物を持べしとにもあらず損せざらんためとて品なく見にくきさまにしなしめづらしからんとて用なき事どもしそへわづらはしくこのみなせるをいふ也

ふるめかしきやうにてこと〴〵しからすつひえもなくて物がらのよきがよき也といへるはよき教訓也榻鴨曉筆にも此よし見ゆ

(十五)物は一具に調はずとも用に足らばさてあるべし　調度などすべて一具に對せずとも俗にいふ後家入にても用にたらばさて有べし書も美本を好はやくなし文字鮮明に紙質よく蠹或は穢なくば一冊は大形一冊は中形一冊は寫本一冊は刋本とりまじりても表紙各々違ても苦しからじ萬のものこれになずらへて知べし徒然草八十二段に弘融僧都が物を必一具に調へんとするは拙きものゝする事也不具なるこそよけれといひしもいみじくおぼえし也とあるはよき說也

(十六)追々と云詞　俗言に追々といふ詞あり追てともいへり消息文におほし源氏松風(潮月抄四丁ウ)におのづからおひ〳〵にうちのことどもはしてんと有

(十七)鼻をすゝる　俗言に鼻をすゝる又はすゝりなきなどいふは源氏松風(潮月抄七丁ウ)にはなすゝりうちしておこなひゐましたりと見ゆ

(十八)日どり　今の俗に日どりの善惡などいふは源氏薄雲(五丁ウ)に日などとらせ給ひてしのびやかにさるべきことなどのたまひおきてさせ給ふ云々とあり

(十九)病者に酸物をくはしむ　病者に梅干をくはしむるはその味かはらざれば也鹹(シホ)は苦味に變じ甘(アマ)は泥み澁(シブ)は下らずなまぐさきは嘔(ホラ)すたゝ酸味のみ熱氣にさはらずよく食を引て降すゆゑに梅干を用ること病家の常也源氏薄雲(十八丁)に此ごろとなりてはかうしなどをだにふれさせ給はずなりたればと有柑子は本草に無レ毒とありて又酸味よく食をみちびいて胃口をひらくがゆゑに病者用ひしなるべし

(廿)やはら　井やはらつゝ　やはらといふ詞は物語文にいとおほし舊本今昔物語に和ラと數所書たれば也保良(ホラ)の假名なることうつなきを人みな「やをら」と書くはあやまり也宇治拾遺には「やはら」とも有也波良(ヤハラ)にて和ラと有もおなじ語意は和かなるより起りて俗にいふ「ソット」又は「しづかに」などゝ通ふめり源氏薄雲(湖月抄廿四丁オ)にはやはらつゝ引いり給ふと見ゆ孟津抄にちとづゝ引入給ふ也といへり

(廿一)ゆゝし　井いみじ　ゆゝしと云詞は忌々(ユヽ)しき心とのみおもへるは古きにかたよれる說也忌々(イヽ)しき心キビノワロキ心に用るは勿論にて殊の外の心に用たるもおほしいみじと云詞も同義にて殊の外の心より善惡にかよはし用ふ「いみ〳〵し」といふを約(ツヾ)めて「ゆゝし」といへりと見ゆ薄雲(湖月抄廿四丁)に柳のえだにさかせたる御ありさまならんゆゝしときこえあへり云々其外おほし徒然草にも此心に用たり

(廿二)梅雨　梅雨は四月梅熟の節をいふ俗に都由といへり「ツハル」を約て「ツユ」といふ梅のツハリて熟せるにいふ詞也杜工部詩集七梅雨の詩に「南京犀浦道四月熟黃梅云々注に趙日周處風土記云夏至前雨名二黃梅雨一云々夏至は五月の中の節なれば五月上旬なるべし頭書(宮重隨筆下九丁オ金葉雜部に「葉がくれにつはるゝと見えし程もなくこはうみ梅に成にけるかな」)

(廿三)四松　杜詩卷十一四松の詩に四松初移時大抵三尺强別來忽三歲離立如二人長一云々日本紀歌にひとつ松とよみ氏に一柳(ヒトツヤナギ)ありされば二ツ松三ツ松四ツ松五ツ松などよみてもくるしからじ仁和寺の六本松武隈の二本松などもむつ松ふたつ松といふことしかるべし

(廿四)狂歌　本居宣長が玉勝間に本朝文粹の狂歌を擧て今の狂歌の名におなじきをめづらしくおもひたりされど詩題にはいとおほし杜詩十二の卷に狂歌行贈二四兄一といふ詩あり白氏文集にもありその外所見あげつくすべからず

(廿五)歌題おほくは詩題を用　歌の題はおほくは詩題を用たり杜詩十三に立春の詩あり陸放翁が集に臘裏立春ありこれは歌題の年內立春也

(廿六)竹の丸樋　歌に竹の丸樋とよめるは引泉筒也杜詩十四に信行遠修二水筒一詩あり雲端水筒坼林表山石碎云々公ノ自注に引レ泉筒也

(廿七)折檻　節用集世部に折檻セツカン云々今俗責詞を「セッカン」といへり杜詩十八に折檻行あり注に夢弼曰漢成帝時朱雲上書乞レ斬二張禹一上怒令二御史將レ雲下一雲攀二殿檻一檻折後當レ治レ檻上曰勿レ易因而輯レ之以旌二直臣一故後世殿檻皆曲以レ雲故也と見ゆ

(廿八)古今傳授の德にて玄旨法印圍を免ル　慶元通鑑上に丹後田邊ノ城ニテ細川兵部大輔藤孝入道玄旨相守ル七月廿七日ヨリ攻レ之寄手小野木縫殿谷出羽守藤懸三河守高田豐後守別所豐後守赤松左兵衛督小出大和守生駒左近太夫等也城中ニテ二男玄蕃頭ト父子能守テ七月ヨリ九月迄寄手多討レテ城中少モ愁タル色ナシ此人古今無雙ノ文武ノ名人也諸藝ノ達人歌

道ニサヘ堪能ニテ主上ヲ始奉リ三公九卿諸門主ニ至ルマデ當時和歌ノ道ノ師範タリ依レ之此人ノ亡ン事ヲ世以テ惜ム處也三條大納言爲ニ勅使一寄手園ヲ可レ解トノ勅定アリ且又五奉行ヘモ其旨ナリケレバ九月十二日ニ諸方ノ責口引拂籠城ノ中年比日比相善リシ人々ヨリ公家武家トナク書通セシ其中ニ世間流布ノ返書アリ爰ニ記ス

去廿七日之御折紙今日相屆令ニ披見一候世上之事餘不慮トモ不レ存候今更申モ事舊候ヘドモ信長御世太閤樣御時似合之致ニ忠節一近年ニ到テ御念比ノ御事奉レ對ニ秀賴樣一何ヲ以可レ致ニ疎略一候哉此段越中守關東出軍內府世間之爲ニ後見一之條是又奉公ト存候處案之外不レ及ニ是非一候一兩日以前從ニ八條殿一御使德善院案內者相添下候則古今相傳之箱證明狀歌一首「イニシヘモ今モカハラヌ世ノ中ニ心ノ種ヲ殘スコトノ葉」此短冊幷源氏抄箱一廿一代集禁裏樣ヘ進上候此外知音衆ヘモ草紙箱一二進候存生之思殘事無レ之滿足候只今之手前之儀ニ候間兎角之事難レ申候連々被レ掛ニ御目一候ニ御殘多候御奉行衆ヘモ此通被レ仰候テ可レ給候此外不レ申候恐々謹言

八月二日　　玄旨

東條紀伊守殿

上田勘右衞門殿

三好助兵衞殿　御報

とあり此に依れば古今傳授の沙汰はなき事也 頭書 東太平記六ノ十八丁ウニ古今ノ傳授ト謂ハ中古濃州士東下野守平常緣ヨリ紀州ノ種玉庵宗祇ニ傳ヘ宗祇ヨリ三條大納言遵逸院實隆卿ニ傳ヘ實隆ヨリ稱名院公保卿ニ傳ヘ公保ヨリ三光院實澄卿ニ傳ヘ其ヨリ圓智院公國卿ニ傳フ公國早世ノ折節其子香雲院實條未七歲ナリシ故細川兵部大輔藤孝入道支旨ニ傳フ云々委クハ原本ヲ閱スヘシ

（廿九）一錢そり　同書上に豐前國中津城主黑田甲斐守長政云々長政多勢ニテ東國ニ下リシ故ニ中津ニハ兵士多カラズ諸浪人ハ云ニ不レ及也下人町人一錢ソリマデ兵士ニナシテ云々一錢ソリ未レ詳

（卅）閹　ミカタ　と云字　同書に味方に閹の字を用たり味方とも身方とも御方とも書は普通也

（卅一）鍬初　慶元通鑑下卷慶長十九年三月廿一日の條に今年諸大名ニ仰テ武城幷越後高田ノ城ヲ築シム惣メ城ヲ取ルニ鍬初ト云事アリ高田ノ城ノ鍬初ハ城和泉守某今一人アリ長袴少サ刀ニテ鍬ヲトリ曳々應ノ聲ヲ掛テ打始ルト也云々按に重編應仁記に鍬初の

事ありしやうにおぼゆ

（卅二）御袋（オフクロ）の歌　人の母を御袋といふ事室町の比より諸書に所見おほし慶元通鑑下卷に十二月十四日阿茶局京都ヨリ歸ル是秀賴ノ母公ノ妹京極若狹守忠高母常光院ヲ以テ扱ノ事ヲ仰ラルベキニ依テ也云々十二月廿二日大坂和睦ノ誓紙ヲ相調玉フ云々頃日京都ニ立ル處ノ落書也トテ狂歌ヲ陣中ニ謠フ「茶うす山引わけにする扱（アツカヒ）は京極殿の袋也けり」按に此時神君茶臼山に御陣を召れたれば也これ冬御陣の時也

（卅三）八王子瀧山の城　八王子瀧山の城の事は小田原記太閤記などの類所見おほし慶元通鑑下卷慶長十八年の條に四月廿五日大久保石見守卒ス武州八王子ノ內瀧山ニ在城佐州金山ノ奉行タリ云々と見ゆ

（卅四）賞榜（タウフダ）　訴人に褒美を賜ふべき由の榜をば賞榜と書べし宋人桂萬榮が棠陰比事の序に重立ニ賞榜一廣布ニ耳目一云々と有は御褒美可レ被下間可ニ訴出一よしの高札也

（卅五）瘖者（オフシ）に物いはしむる方　棠陰比事上卷六丁に沉內翰云世人以ニ竹木牙骨之屬一作ニ叫子一置ニ喉中一頽レ之能作ニ人言一予謂瘖者苦ニ煩寃一無ニ以自明一取ニ叫子一令ニ頽レ之作下聲如ニ傀（音猥切）儡（魯猥切傀儡戲也）子一粗能辨ニ其一二一寃或可レ伸見ニ沉括筆談一云々この叫子を作りて瘖者にものいはせまほしきわざ也

（卅六）板壁　俗に羽目（ハメ）といふものは板壁と書べし棠陰比事上七丁（カ）に其廷（淵圭切行竈也）竈近ニ板壁一久燥而焚云々とあり板壁は今の羽目也

（卅七）失火出火　世人失火を出火と詞にもいひ書にもかくは誤也皇國の古書にもみな失火と書き棠陰比事上八丁（ヤ）に坐以ニ失火一云々ともあり漢籍にもみなしかり出火といふ熟辭は見あたらず

（卅八）羅織（ニセブ）　棠陰比事上廿丁（カ）に唐垂拱年羅織事起湖州佐史江琛取ニ刺史裴光製書一割ニ取其字一輳合成レ文以詐爲レ與ニ徐敬業一反書上告レ之云々取ニ反書一向レ日看レ之乃見ニ書字補葺而成一平看不レ覺向レ日皆見遂集ニ州縣官吏一索ニ水一盆一令ニ琛投ニ書於水中一字々解散琛叩頭服レ罪云々とありこれ字を切あつめてつくりし僞書也

（卅九）嗅（カグ）を聽（キク）といふ事　香を嗅を必香をきくといふはもと漢字によりていへる詞也棠陰比事上廿五丁（ヤ）允濟聽レ葱段に呼令レ前（スヽマ）一々聽（キク）ニ其手一遂獲ニ盜レ葱者一云々

とあり 頭書 今昔廿九ノ廿五語聞香法華科注六ノ六十九丁オ同ウ七十丁オ普灯錄廿三ノ七丁ウ

(四十)店主　今の町人の家の主人をば店主といふべし棠陰比事中九丁ウに唐貞觀中衢州板橋店主張逖妻歸寧ト云々板橋店主は傾城町の家の主人也歸寧はその妻里へ行たるなり

(四十一)合格 并拔萃　官職秘抄職原抄などに合格の吏といふ事こは和漢の書所見いとおほかり棠陰比事下八丁ウに鄭克曰按唐制選人試ニ判三條一辭理愜當決斷明白乃爲ニ合格一謂ニ之拔萃一 音悴 案也 云々と有拔萃の字も純粹を拔義にあらず 頭書 史記酷吏傳注に格正也

(四十二)定額　定額は數を定むる事にて小學注に額數也とあり定額字棠陰比事上十一丁ウ許元棨レ舟條に自レ是立爲ニ定額一 見ニ魏泰東軒筆記一 と見え明會典杜氏通典文獻通考など所見枚擧すべからず皇國にも定額大納言定額女孃定額寺など延喜式徒然草歷史などに所見おほし歌にひたひさだめともよめり 頭書 兵部式ニ定額兵馬云々西宮記臨時ニ定額御佛名導師云々政事要略廿八ノ廿二丁ウ續紀十二ノ二ウ菅家文草九ノ廿四丁オ菅家遺訓下に定額之本院制度通六ノ十八丁オ元亨釋書廿三ノ廿八ノ十一丁オ今昔十一語

(四十三)優戲場　棠陰比事下卷十九丁ウ從事函レ首條に其夫至ニ廬陵一於ニ優戲場一認ニ得其妻一云々と見ゆ優戲場は今の芝居也

(四十四)稅籍丁籍　同卷廿三丁オ王曾驗稅の條の鄭克按に爭レ田之訟稅籍可レ以爲ニ證分一財之訟丁籍可ニ以爲一レ證云々稅籍は今の水帳也丁籍は人別帳也

(四十五)寇江賊　同卷廿五丁ウ趙和贖產條に寇江賊ともに寇江者どもあり日本の海賊也

(四十六)老人狂歌　居行子新話三の卷に老人狂歌六首の話の條に愚曰さればそれにつけ或人六歌仙と云狂歌を見せ侍りしを見しがよくもいひつゞけ侍る聞給へ「皺(シワ)がよる黑子(ホクロ)が出來る脊(カン)が勾む頭は禿る毛は白く成る」手はふるふ足はひょろつく齒はぬける耳はきこえず目はうとくなる」身にあふは頭巾(ブキン)褌卷杖眼鏡湯婆溫石(タンホアンジヤクシビン)渡瓶孫の手」くどうなる氣短になる愚癡になる思ひつくことみなふるくなる」聞たがる死(シニ)とむながるさびしがる出しやばりたがるせわやきたがる」又しても同じ咄に孫はめる達者自慢に人をあなどる」此狂歌のわるくちさりとては老人の情をよくいひしなりこれを見て老人たるものはたしなむべき事也云々按居行新話五卷あり京都西村遠里が撰也天明六年正月刊行す

(四十七)保元物語作者葉室民部少輔時長 并中原師梁參考保元物語凡例に保元物語者世不レ知ニ何人所一レ著と平家の世より已下鎌倉中比已上の人なりこは文政十一年三月十五日平戸侯の隱居靜山君の問に對へし也

(四十八)鳥銃(テツハウ)　鳥銃の始は本朝は種子島に起れるよし南浦文集に見え關東にひろまれる事は北條五代記にあり明國は本朝よりも後に傳りけん武備志に倭寇鳥銃といふものを用るよし珍しきさまに書たり朝鮮國の始は懲毖錄一の卷三丁ウに庚寅 萬曆四十二年也本朝慶長十九年に當る 三月義智 宗義智也對馬守也ニ献ニ孔雀及鳥銃槍刀等物一命放ニ孔雀於南陽海島一下ニ鳥銃於軍器寺一我國之有ニ鳥銃一始レ此云々と見ゆ懲毖錄は朝鮮柳成龍が撰也懲(コリ)て毖(シム)意の書名也 頭書 八幡愚童訓下卅一丁ウ飛鐵炮暗(クナシ)鳴リ高ケレバ云々增鏡抄一ノ十九丁ウゆり若草子三丁オ同十丁ウ

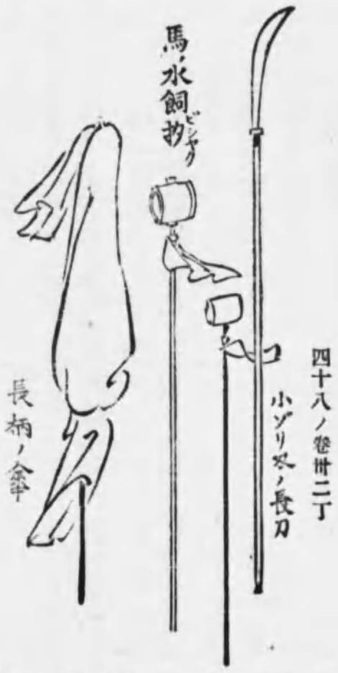
(四十九)倭學　本朝文粹に倭唐の學と見え近來倭學といふ稱これにもとづく懲毖錄一の卷十六丁オに倭學通事景應舜あり朝鮮にて本朝の學者を置て譯語通事の官とせりと見ゆ 頭書 菅家遺戒に倭魂とあるは源氏の詞によりて此書を僞作せしものゝ書たる也據用がたし又國學とも有異稱日本傳下ノ四卷一丁オ經國大典三卷禮典に寫字倭學伊路波息(中略)漢學

(五十)飢を救方　懲毖錄二の卷十三丁ウに請ニ以レ此賑ニ救

飢民に以て前郡守南宮悌に爲て監賑官に取て松葉に爲て屑毎に松屑十分に合に米屑一合に投て水以て飲て之とあり松の皮は水に漬し粉にして團子にて用れば肌を助るの功あり

（五十一）城雉　同書四の卷十五丁ウに古人言に城制に皆曰て雉所謂千雉百雉者是也余平時讀て書鹵莽不て知に雉爲に何物に毎以て梁當て之嘗疑梁但千百則其城至小不て能て容て衆將何以乎及に變後に始得に戚繼光紀効新書に讀て之乃知に雉非て梁即今之所謂曲城甕城者也蓋城無に曲城甕城に則雖て人守に一梁に而梁間立て盾以遮外面矢石と賊之來傳に城下に者不て可に見而禦て之也紀効新書每に五十梁に置に一雉に外出に二三丈に雉間相去五十梁一雉各占て地に二十五梁矢力方盛左右顧眄便に於發て射敵無て緣て來に附城下に矣壬辰秋余久留に安州に念賊方在に平壤に若一朝西下則行在前面無に一遮障處に不て量に其力に欲て修に安州城に而守と之重陽日偶出に晴川江上に顧に視州城に默坐深念者久て之忽思得一策に城外當て從に形勢に別築て凸城と如に雉制に而空に其中に使て容て人前面及左右鑿に出砲穴に可に從て中放て砲上建に敵樓に樓相距千步以上大砲中藏て鐵丸如に鳥卵に者數斗と賊多集に城外に砲丸從に兩處に交發無て論に人馬に雖に金石に無て不に摩碎に若て是則他堞雖て無に守兵に只使て數十人守て砲樓と而敵無に敢近に矣此實守て城妙法其制雖て仿に於雉に而功勝に於雉に萬々矣蓋千步之內敵既不に敢近に則所謂雲梯衝車者皆不て得て用此事余偶思に得之に云々與清按雉は城の出張の處にて橫矢を射んための搆也梁は土手なり

（五十二）小ぞり刃の長刀長柄傘馬杓圖　圓光大師畫詞傳二の卷十九丁に小ぞり及の長刀長柄の傘馬杓の圖あり



（五十三）石垣　同十四の卷八丁石垣の圖あり大原ノ勝林院の門前にある石垣也石垣の上に柴垣あり

（五十四）山門僉議の圖　盛衰記に山門嗷訴の事を記して三塔會合僉議のありさまをくはしくいへり其圖圓光大師畫詞傳卅一の卷廿三丁に見ゆ

（五十五）長刀の鞘　圓光大師畫詞傳三十五の卷六丁に長刀に鞘をかけし圖あり

（五十六）無用の時人の許へ行まじき事并爲人鈔　爲人鈔二の卷朋友尋訪用心辨に昔智アル人ノ謂ルハサシタル事ナクテ人ノモトヘ行ハヨカラヌ事ナリ用アリテ行タリトモ其事果ナバ疾歸ルベシ我身隙アリガホニ人モ角アラント思フハ大ナルアヤマリ也光陰如て矢ナレバヨシナキ事に時ヲ移ス互ノ爲益ナシ歌にモ「友ナラヌ人ノ問來テ長居スハ獨アルヨリ侘シカリケリ」語にモ澹臺滅明行不て由て徑非に公事に未嘗至に於偃之室に トコソ侍レ云々爲人鈔十卷あり万治二年苦甜齋守株床が自跋あり寛文貳曆壬寅仲夏刋行す

（五十七）學者は時を知ルを要とす　同書二の卷學者知て時爲て要辨に昔智アル人ノ云ルハ古ヲ好テ今ヲ非トスル者禍ヲ免ル、事少ナク是故に時ヲ知ヲ學者ノ要トス今ノ世に生レテ古ノ道にカヘルハ災難ヲ不て招にテコソ有ベキニ却テ惡名ヲ唱ラレ其咎ヲ免レザルモノアリ明哲ノ君子コソ古ヲ好テ又今にモ隨フベケレ我モ人モ明闇ノ時世々々ヲ慮テ邦有て道危言危行邦無て道危行言孫トアレバ深ク體認スベシ與に或人ノ曰伯夷叔齊ガ心ヲ底に含テ聖賢ヲ題にシテ讀ル戲トテ二首「世ノ中ハ荊ノ下ノカキ蕨ムツカシケレドヲレバヲラル、」「世ノ中ハ荊ノ下ノカギ蕨ムツカシケレバヲラヌナリケリ」云々與清曰漁父辭に聖人不て凝に滯於物に而能與て世推移といひ沙石集及澁柿に明惠上人の泰時に答られし詞に人はあるべきやうともあり余わかうとを諫て人はオツニヲカシクと說く共に一笑すべし

（五十八）もつけと云俗語　俗語にモッケナ事或はモツケノ重法などいふ「モッケ」は物外と書り爲人鈔三の卷理氣之辨十七丁に物外ニナヤマス事必然タリ云々と見ゆ

（五十九）息合の藥　爲人鈔四の卷入ニ敵國一武者嗜之辨に戰場ニテ水ニ渴シテ息ノ切ルヽ事多シ梅干ノ肉ヲ棗ノ肉トヲ等分ニスリ合セ丸ジ樣口傳アリ是渴ヲ止ル妙藥也此藥ヲ絹ノ袋ニ裹テ緒ヲワタガミニ結付テ持ベシ云々と見ゆ

（六十）くひちがひ土手　同書四の卷若輩軍法物語辨に土手ヲクヒチガヒニ築テ討理モアリ云々按に土手は封彊也古き詞には見あたらず

（六十一）重箱飯ツギ　同書同卷同條十二丁オ に陣中ニテノ飯器ハ銅ニテ高サ一尺八寸廣サ一尺五寸バカリニシテ三重ノ其中ニ重箱飯ツギ椀ヲ入組内ノツムヤウニコシラヘ袋ニハ牛ノ革ヲイタメ革ニシテ塗テヨシ云々按に節用集に飯桶メンツウと見ゆ

（六十二）衾を取 幷鎗衾弓衾鑓床弓床　同條十三丁ウ に一人ノ曰鎗衾弓衾ト云事ハ敵陣ノ前ノ小勢ニテ引退時方圓ノ備ニシテクリ引ニシテ引取也敵蒐ラバ鎗ヲ取テ八方ヲ下知シ小膝ヲ折テ待カクベシ必味方小勢トイヘドモ敵シラムモノ也一騎打ノ道モ此心得肝要ナリ或人ノ曰類々ノ衾ヲ取ト云事鐵炮ヲバ鐵炮ニテ防ギ弓ヲバ弓ニテ防ギ鑓ヲバ鑓ニテ防グ鑓床弓床トモ云居敷テ待ヲ以テ床ト云ヒ衾ト云歟云々

（六十三）夜食　同書八の卷人而無ニ醫術一忠孝之道不レ能ニ行盡一辨に飮食ヲ節ニシ房事ヲ愼ミ夜食晝寢ヲ禁ジッヽ食後ノ行步兵法ヤ馬ヲ自路ニ乘テヨシ云々

（六十四）元日の昆布栗屠蘇酒　同九の卷大江元就公元日祝辨に大江元就公正月朔日ノ早天ニ手水鵜飼シ給ヒテ東方ニ向テシバラク默座アリシ處ニ近習ノ粟屋彌次郎ト云者罷出テ申上ケルハ元三ノ御イハヒヲ召上ラル、樣ニト伺ヒケレドモ兎角ノ仰セ出サレモ更ニナシ云々其時元就公サラバ汝ニ語テ聞スベシ世ノオロカナル者ハ吉方（エハウ）ヲ拜シテ昆布栗ヲ取テ屠蘇ノ酒ヲ酌壽命長穩子孫繁昌ヲ祝シテ深キ慮ナシ云々

（六十五）無心ト云詞 幷茜羽織佐竹紙　同書九の卷栗田刑部之小姓討死辨に家康公遠州高天神ノ城ヲ責給フ時城中ヨリ申ケルハ御陣中ニ幸若彌三大夫ヲ召連ラレタルト承及ヌ無心ノ所望ナリトイヘドモ舞一サシトアリシ時云々按に今俗人に物を乞に無心といふは無心の所望の略也又云茜ノ羽織著タル武者一騎城中ヨリ出テ其比關東ニ用ヒタル佐竹紙十帖厚板ノ織物ニ差添テ幸若大夫ニ引出物シケルトナリ云々

（六十六）竹流ノ金子　同書十の卷大坂陣後評判之辨に大坂ノ人數ハ諸國ノ寄聚リニテ何ノ證據モナキ者ドモニ金銀莫大ニ賜ルニ因テ集リ來レバ爭カ一戰ノ功ヲモナスベキヤ竹流（タケナガシ）ノ金子ナド大半請取ラバ落行クモノ多カルベキト京童モ申ナリ云々

（六十七）鬼に金棒　同書十の卷諫言之辨に幼君ノ御伽ニ出サン者ハ無欲ニシテ愛和アリ漢和古今ノ物語ヲ能覺エタル學者ハ鬼ニ鐵杖ナルベシ云々 頭書 武具要說 下ノ一丁ウ東明寺百首に「一心をたえすたしなめそのうへに万能あらは鬼に金棒」

（六十八）内股膏藥と云詞　同書十の卷王元之待漏院記之辨に毀リモナク譽レモナク進ミ退ク事モ人ニ付テ内股膏藥ナル臣モ亦何ヲ竊テ祿ヲ犯シ員ニ備テ身ヲ全スルモノアリ云々

（六十九）能組の事　同十の卷能與次第之辨に或能大夫ニ式三番能與ノ次第ヲ尋侍レバ答テ曰翁ノ神ハ春日大明神尉ハ白髮大明神三番神樂ハ宇佐大明神延命冠者ハ住吉大明神也今ノ神樂ト云モ猿田彦命ヨリ始ルナリ云々

松屋筆記卷之五十六

東都　源與清文儒稿

（一）蝦藥師蛸藥師　臥雲日件錄四に昔平氏小松相公病レ癒就ニ大秦（ウヅマノ）藥師一祈ニ安全一藥師夢告曰此病非ニ予力所一及三條河原有ニ一老僧一能治ニ此病一行當レ尋レ之小松殿奇而驗レ之果 河邊有ニ一小堂一藥師 如來爲ニ之主一而老僧在焉就レ僧求ニ醫治一而病果愈矣此佛元是自ニ江文一乘ニ河水一而流出矣今相國寺妙莊嚴域西邊衣服寺藥師是也俗謂ニ蝦藥師一云々予曰蓋江文或衣服訛者乎云云按蝦藥師は蛸藥師に相對したる名といふべし蛸藥師の事は京童一の卷竹齋物語上卷五丁ウ 抔に見ゆ目黑の蛸藥師も京都永福寺の蛸藥師を移して安置せし也その因緣法華驗記上卷十五丁ウ 吉野海部峰寺廣恩法師が八隻ノ鮮鰡の談に隣し江文寺の故事山城名勝志十二の卷四十丁ウ に後拾遺往生記毘沙門堂記抔引て記たりき

（二）節分豆打福内鬼外　節分豆打圖考余曩に注せしを刋本とす臥雲日件錄五の卷に十二月廿二日明日立春故及昏景當ニ每室散ニ煎豆（イリマメ）一因唱ニ鬼ハ外福ノ内四字一蓋

此方ノ驅儺之樣也宣胤卿記文龜元年十二月十八日條云今夜節分讀ニ心經一打ニ大豆一事等如レ例云々同永正十一年正月一日條爲ニ除夜一之間云々職事伊長朝臣秀房六位等也公兄朝臣鹿々合火ッヽグシ云々守武千句ニ丁ウと見えたるを脫たれば補べし頭書今川大艸子上三十六丁ウせつぶんの大豆

(三)漢籍施行の例 幷孟子 臥雲日件錄五ノ卷文安五年五月五日大外記來訪予曰昔時二條攝政與ニ義堂和尙一和漢和亦用レ韻時洪武韻府初來將レ用レ此也外記曰某見ニ其和漢本一因曰吾朝用ニ漢土書一必有ニ朝廷施行之命一如ニ孟子一則未施行之書也攝政公用ニ洪武韻府一擬ニ施行一也云々頭書佐世目錄ニ已ニ孟子ノ註二種アリ四書鷰頭卷一に新註傳來應永十年南渡歸船載ニ四書集註與ニ詩經集傳一來同年八月達ニ之洛陽一於レ是東福寺不二岐陽和尙始講ニ此書一云々倭板書籍考說同康富記嘉吉二年二十三條同三六ユ日件錄寶德元八七條ナドニ四書ノ事見ユ日件錄寶德元閏十一ノ三條ニモ見ユ

(四)山の帶 江談抄五に白雲似レ帶圍ニ山腰一青苔如レ衣負ニ巖背一詩在中「こけ衣きたるいはほはまひろけんきぬノヽ山のおひするはなそ」異本に下句おび遠須加奈とあり諸曲には白樂天の詩に住吉明神の答へ給ひし歌とす山帶は明人楊愼が丹鉛總錄卷一山帶の條に張野ガ廬山記ニ天將レ雨則有ニ白雲一或冠ニ峯巖一或亘ニ中嶺一俗謂ニ之山帶一不レ出ニ二日一必雨唐詩風吹ニ山帶一遙知レ雨云々と見ゆ

(五)龍燈 世に龍燈とて江湖川海より陰火のもえ出る處おほかりしらぬ火の筑紫といふも歌によみ景行紀に其由緣見えて亦陰火也丹鉛總錄二の卷陰火の條に易澤中有レ火素問云澤中有ニ陽燄一注陽燄如ニ火煙一騰足水面者是也蓋澤有ニ陽燄一乃山氣通澤有ニ陰鬰一乃澤氣通レ山文選海賦陰火潛然唐顧況使ニ新羅一詩陰火暝潛燒是也東坡遊金山寺詩云是時江月初生魄二更月落天深黑江心似有炬火明飛簷照山栖鳥驚悵然歸臥心莫識非鬼非仙竟何物注引ニ物類相感志一山林藪澤晦明之夜則野火生焉散布如ニ人秉燭一其色青異ニ乎人火一劉須谿批云龍也非レ是坡公西湖詩又有ニ湖光非レ鬼亦非レ仙之句一此可ニ互證一ㇾまた陰火の條拾遺記西海之西有ニ浮玉山一山下有レ穴穴中有レ水其色如レ火波濤灌湯而火不レ滅名曰ニ陰火一本支虛海賦所云陰火潛然者也然李善及五臣註皆不レ引レ之唐詩陰火雨中然顧況詩颶風晴汨起陰火溟潛燒戴叔倫詩古戍陰傳火寒蕪曉帶霜と見ゆ鹿島紀行にも龍燈の事いひたりき頭書牛陶稿二ノ廿五丁ウ月令廣義廿三ノ十一丁ヲ廿六丁ウ廬山佛燈アリ滑稽雜談十三ノ六十二ノ段竹菴外集奇異雜談集一ノ廿丁ヲ新著聞集五ノ卅五丁ウ崇行篇伊豆即往法師條に鴨が岩屋の入口にて念佛し六七年の後廿日の同向をつとめられしに每夜龍燈三

ツ四ツあがりしかばあまりにことゝ〳〵しき事にて濱人後の恐をおそれへ訴へ傳りし云々ひて守護の小田原の奉行へ訴へ傳りし云々

(六)熱海 伊豆國熱海溫泉の事は熱海志伊豆志熱海紀行抔に見ゆ熱海の字は丹鉛總錄二の卷熱海の條に岑參熱海行云蒸沙爍石然ニ虜雲沸浪炎波煎ニ漢月一此循ニ名相一說之誤參雖レ仕從邊幕一亦未ニ曾親到一熱海一也按玄奘西域記云淩山葱嶺北隅坎雪積淩ニ春夏一不レ解縣レ釜而炊席レ氷而寢七日出レ山有一清池一亦曰ニ熱海一以ニ其對一淩山不レ凍故得ニ此名一其水未ニ必溫一也玄奘蓋躬至目見非ニ參想像之詞一耳と見ゆ伊豆の熱海は實に火燄湧騰して西域の熱海の類にあらす

(七)輿地 日本輿地圖は行基始製して拾芥抄に其縮圖を載たり寬永古板の圖余が藏にあり輿地といふ事は漢土の字にて皇國にも方輿集などいふ書名あり丹鉛總錄二の卷蓋无二輿地の條に世言輿地圖始ニ于漢一光武披輿地圖而不レ知レ前漢淮南王傳已有レ按ニ輿地圖一之語ㇾ地以ニ輿名一取ニ易坤爲之義一猶天如レ張レ蓋也張衡作ニ蓋天圖一義取レ此蓋天輿地正可レ作レ對と見ゆ堪輿の事五十一の卷にいへり頭書史記淮南王傳輿地圖云々周禮十の卷大司徒の條戰國策六上卷十二丁ウ趙惠侯篇蘇秦語に臣竊以天下地圖案レ之諸侯之地五ニ倍於秦一云々

(八)時の鐘 言家後草十五丁ォ時の鐘の事燕石雜誌に見ゆ丹鉛總錄三の卷更點の條に今之更點擊レ鉦唐六典皆擊レ鐘也太史門有ニ典鐘二百八十人一掌ニ鐘漏一唐詩促漏遙鐘動靜聞とあるをも鐘とは別なれど引べし頭書漏刻條可レ考體源抄十の末卷八十四丁ォに委楊子大玄經八玄數ノ條五行大義一論ニ支干數一條陰陽式ニ時誠アリ令ニモ有

(九)傳馬 郵驛傳馬の事令式に見えたり丹鉛總錄六の卷置郵の條に孟子曰速於ニ置郵一而傳レ命注置驛也郵馹也驛與レ馹何別乎按說文驛置騎也從レ馬睪聲馹驛傳也從レ馬日聲合而觀レ之驛主ニ于騎一言レ馬也馹主ニ于傳一言レ車也馹字經傳罕見惟左傳文公十六年有レ楚子乘レ馹會ニ師于臨品一之文ㇾ書云雨霧蒙馹克言龜文直達如ニ驛路一也許白雲曰字書馬ノ遞曰レ置步ノ遞曰レ郵漢謂ニ之乘傳一高祖五年令ニ田橫乘レ傳詣ニ洛陽一如淳曰漢律四馬高足爲ニ置傳一四馬中足爲ニ馳傳一四馬下足爲ニ乘傳一一馬二馬爲ニ軺傳一又謂ニ之遽一說文傳也一曰窘也徐鉉曰傳馹車也周禮行夫掌ニ邦國傳遽之小事一傳車尙速也故又爲ニ窘迫一也莊子仁義先王之遽廬可ニ以一宿一是遽廬即傳舍也風俗通曰漢改レ郵曰レ置此說非孟子已有ニ置郵之說一矣云々驛傳の事は事物紀原三才圖會通典文獻通考など考べし倭名抄にも名目を載たりき頭書兵部式驛傳馬ノ事見ユ主稅式下ノ三丁ォ

(十)扁舟　扁舟は小舟也騙魚舟を省て扁舟といふ也丹鉛總錄扁舟本作騙舟の條に或問レ予詩人多用二扁舟一何處爲レ始予按南史天淵池新製二騙魚舟一形甚狹故小舟稱二扁舟一六朝詩惟王由禮有下扁舟夜向二江頭一泊之句上至二唐人一則多用レ之と見ゆ

(十一)別號　丹鉛總錄十の卷別號の條に戰國策秦惠王時有二寒泉子一注云秦處士之號史記索隱云甘茂按甘茂疾之誤居二渭南陰鄉之槎里一故號曰二槎里子一又范蠡去レ越自稱二鴟夷子一此國後人別號之處レ昉乎と見ゆ

(十二)不肖の子家を破らず　丹鉛總錄十一の卷王安石の條に人君之愚暗柔弱不レ足二以亡一其國一亡レ國者必剛愎明察之君也譬二之人家一不肖之子不レ足二以破一レ家其破レ家必輕俊而無レ撿者也在二人臣一則眞小人不レ足二以亂一レ國其亂レ國者必僞君子也蓋眞小人其名不レ美其肆レ惡有レ限僞君子則既竊二美名一而其流レ惡無レ窮矣是故唐之亡不レ在二僖昭一而在二德宗一宋之亂不レ在二京太一而在二王安石一或曰子何以恕二眞小人一余曰子不レ觀二白樂天詩一乎「狐假女妖害猶淺一朝一夕迷人眼女爲二狐媚一害即深朝々夕々迷二人心一白樂天豈恕レ狐哉と見えたるは國家を治る者必辨知すべき事也けり

(十三)花の雪　ちる花を花の雪とよみふる雪をちる花とよみたるはおほかり丹鉛總錄十八の卷洛陽花雪の條に何遜與二范雲一聯句詩云洛陽城東西却作二經年別一昔去雪如レ花今來花似レ雪李商隱送二王棨書分司一詩云多少分曹掌二秘文一洛陽花雪夢隨レ君云々と見ゆ　歌題に花似レ雪雪似レ花ともあり

(十四)烏のかしら白し　庵主に「山からすかしらもしろく也にけりわかかへるへき時やきぬらん」とよめるは燕丹が故事也丹鉛總錄廿一の卷白頭烏の條に三國典略曰侯景纂レ位令レ飾朱雀門其日白頭烏萬計集二于門樓一童謠曰白頭烏拂二朱雀一還與レ吳杜工部詩長安城頭頭白烏夜飛延秋門上呼蓋用二其事一以二侯景一比二祿山一也千家註不レ知レ引レ此云々これも烏に頭白き說也吉野拾レ遺「くわんこうとなくやよしのゝ山からすかしらもしろしおもしろの夜や」ともよめり

(十五)臣は君によりて忠あり　孟子に君視レ臣如二土木一臣視レ君猶二寇讎一と有又丹鉛總錄廿二の卷環語の篇に作レ器者無二食材一而有二食匠一治レ國者無二能臣一而有二能君一勝者所レ用敗者之墓也與國所用亡國之臣也とも見ゆ

(十六)貴人あれども貴族なし　丹鉛總錄廿二の卷

環語の篇に天下有二貴人一無二貴族一有二賢人一無二賢族一云々貴族にして貴人出るは本朝の名譽也

(十七)氣を養　同書廿二の卷同上怒則氣上喜則氣緩悲則氣消恐則氣下寒則氣收炅則氣泄驚則氣亂勞則氣耗思則氣結善養レ氣則無レ是矣と見ゆ人必氣を調ぶべし

(十八)橋の勾欄　同書廿四の卷環語の篇に段國沙州記吐谷渾於二河上一作レ橋謂二之河厲一長一百五十步勾欄甚嚴飾勾欄之名始見レ此王建宮詞風簾水殿壓二芙蓉一四面勾欄在二水中一李義山詩簾輕幕重金勾欄李長吉詩蟾蜍姑弔月鈎欄下字又作レ鈎宋世以來名教坊曰二勾欄一云云按に勾欄は今のてすりの事也

(十九)同名異物　同名異物は數るに遑なけれど丹鉛總錄八の卷隱囊の條に晉以後士大夫尙二清談一喜二宴佚一始作二麈尾隱囊之製一今不レ可レ見而名後學亦罕レ知顏氏家訓云梁朝全盛之時貴遊子弟駕二長簷車一跟二高齒屐一坐二棊子方褥一馮二斑絲隱囊一王右丞詩不レ學二城東遊俠兒一隱囊紗帽坐二彈棊一云々との隱囊ハ「フグリ」と同名也また同卷寄生の條に齊高帝紀時軍容寡闕乃編二襆皮一爲二馬具一裝拆レ竹爲二寄生一又東昏侯紀馬被裲襠具裝鎧雜羽孔翠寄生寄生不レ知レ爲二何物一也云々此寄生は「ヤドリキ」と同名也

(廿)香の物漬物の名に漬の字を用べし　醃菜ツケナ　閉甕菜アサヅケ　糟瓜ナラヅケ　糟茄ナラヅケノナス　琥珀瓜壺ウリノカヅケ　糟瓜茄ナラヅケ　醃鹽菜ナヅケ　香蘿蔔カウノモノ　など漬物の漢字名物六帖文藻行潦の類書に擧たり按に丹鉛總錄九の卷齊民要術の條に漬音覽鹽漬物也とあれば浸漬澤菴漬鹽押の茄瓜菜類の香物には漬の字を用て「ツケモノ」と訓ずべし頭書空穗吹上ノ上卅二丁ウ醂ひしほ漬物皆おなじことしたり云々同あてみや十二丁ス鉢源抄十二上卅丁ウ雪氏出陣時ノ肴ニアラメ一寸四方カウノ物七又ハ一ツ云々後太平記三五丁オ三議一統下八十丁オ東寺文書抄十ノ廿三丁オ宗五大艸子上五十五丁オ新撰狂歌集下廿二丁オ撫迎記群書類從四百十四卷五十一丁ウ引渡しの脇にかうのもの云々淺漬ミソ漬の香ノ物貞丈雜記六ノ八丁オ

(廿一)歸鴈　鴈は常世國より來りて常世にかへるよしいひ秋の來鴈春の歸鴈倭漢同日の談也紅毛雜話一の卷に赤道近き所には四季共に鴈栖ず眞臘風土記に所レ無鴈黃鶯杜宇燕鴿之屬云々眞臘は八九度より十度までにわたりたる國也赤道近きあたりには鴈の無き事明か也と見ゆ頭書蝦夷の辛太島の邊に鴈鳥あり春はこゝにかへりて秋こゝよりわたりくると也

(廿二)南無阿彌　紅毛雜話一の卷に南無阿彌はナアムアミンにて名二阿彌一の義といへり翻譯名義集の說とはいたく異也可レ考

(廿三)羽子板羽根　同書一の卷に羽子板羽根は黒坊の弄也とてその圖を出せり羽子板を「ラケット」羽根を「ウーラング」といふよし也按羽子板の事小車錦骨董集上編下の本卷などに見え下學集塩嚢抄六の卷は羽子板世諺問答にこぎの子などいへり節用集には羽子板胡鬼板胡鬼子とあり頭書梅花無盡藏五ノ七丁ウ

(廿四)飛龍頭(ヒリウヅ)といへる油揚　紅毛雜話二の卷に此邦にていふ油揚の飛龍頭は「ポルトガル」の食物也其製左の如しひりうづは彼國の語のよし也糠米粉糯米粉各七合右水にて練合せゆであげて油揚にしたる物也云云按に本朝の飛龍頭は豆腐を摺て中に午房麻子など加へて油揚にしたる也形龍頭ともいふべきものなればさいふ也

(廿五)天鵞絨(ビロウド)井海黃絹花布(カイキサツサ)等の名　ビロウド海黃の絹サラサ布抔の事紅毛雜話二の卷に見えて閲て知べし

(廿六)ミイラ　人の干死たるを「ミイラ」といふ紅毛雜話二の卷木乃伊の條にバルバリヤ人チープロス國に砂金とりに行て廣原砂地炎熱の爲に死したるを木乃伊といふこれ「ミイラ」なるよし委いへり「ミイラ」の事赤烏隨筆にも見ゆ考合すべし

(廿七)鳳皇　鳳皇は印帝亞(インデヤ)の鷄なるよしくはしく紅毛雜話二の卷にいへり按に聖人の世ならねど兩漢書晉書などには鳳凰の出し事おほく見えたり印帝亞の鷄を献じて天子をよろこばしめたるものなるべし趙翼が廿二史箚記三の卷に以二衰亂之朝一而鳳凰猶見可レ知郡國所レ奏符瑞皆未二必得一實也とも見ゆ

(廿八)風領(エリマキ)　今の俗「えりまき」とて縮緬の切(キレ)或は綿など襟に纏て風寒を拒ぐはもと西洋の風也法師は古來より用ること也紅毛雜話五の卷に和蘭陀の風領(エリマキ)の圖あり彼地にては「ダス」といふといへり

(廿九)捨子を救　紅毛雜話一の卷幼院の條に歐羅巴國中に「ウキスホイス」といふ府あり明人幼院と譯す是國中の貧究なる者子を生ても養ひ育べき爲方なく又是を殺せば國禁を犯せる罪を蒙る故國王兩全の方便を以て是を建つ下賤なる者のみにあらず身分は貴けれど家貧なる人の爲にも設けたる府也其子を入る窓(ソト)ありて外より其處に音なへば彼人内より應じて戸を開き子を抱入るゝ也最年月日時を記したる牌を子の胸に掛しむ夫より後乞戻して家に養はんと思ふ時

先に府に入るゝ時記したる年月日時を認めて彼窓に投入るれば先の牌と引合せて子を戻す也府の中には諸藝の師匠ありて男女の兒童好む所の藝を教ふ男子は廿歳をかぎり金銀をあたへて府を出し心の儘に渡世をいとなましめ女子は十五歳を限り金銀をあたへて嫁せしむると也故に國中絶て捨子なしとぞ云々與清これによりて按事(オモフ)あり下總常陸陸奥の邊土にては民その子を養育する力なし故に嗣子を除て他子をばまびくものおほし水府西山公これを憂給ひて懇至の命令もありしかど今にその風止ずとなん江戸にも貧者その子を養にたへず或は捨子にし或は妻子を置去にして道路に迷はしむるもの少からずこれが爲に大勸進を起し養幼院を建立して仁慈の道を布行せまほしき事也そは三都其外廣邑の諸豪家に勸化し諸侯に請て其費用を貯へ官に訟て御免敎場とし女は十三歳まで男は十六歳まで奉公稼をさせその給金を得て養育の恩を償(ツクノハ)しめば養幼院も相續しマヒキ子捨子の災なく人物繁茂し廢田墾開國家富足の基なるべし

(卅)セイライとは鷹の上手をいふ　鷹をよく使ふもの(卅一)宿官　宿官といふはしばらく留て置て後住所に遣すをいふ叙留位に進ば相當の官より位重きゆゑ官を辭すべきを尚留て其官に任じ位のみ叙するをいふ宿官も似たる名目なれど別也

(卅二)小手差原の歌　獨笑菴竹村立義といへるものの秩父巡拜圖誌五卷あり文政六年三月十一日記せるよし阪に見ゆ秩父圖通傳に補正してつくれるもの也一の卷に云古手差原の事太平記卷の十義貞謀叛の條卷の卅一武藏野合戰の條などに見えたり後の武藏野合戰の事新安手簡に白石先生此北野天神のあたりなる由を擧て委しく論じ給へりまた青木氏が昆陽漫錄にも論あれど此所に用なければ記さず又小手差原の名古く東鑑に見えたれど小山合戰の所なれば下野國にて同名異所なるべし新葉集に武藏國小手差原といふ所におり居て「君のため身のためなにかをしからんすてゝかひあるいのちなりせば」

(卅三)岩殿觀音の碑　秩父巡拜圖誌一の卷に岩殿の道をとへば云々觀音に詣づ御堂崖づくりにて格子戸

に錠をろせり御堂の後に岩屋あり横竪二間許深さ三間程奥の方は薄くらし火を打て携へし蠟燭にうつし見るに下に圖する如く青石の板のごとくなるを門の様になし左右に同じく石にて位牌のごとく立ならべたり少し奥をも同じ様にて左右の刀はなし中なる石の上の方を丸を象り中に觀音殿と彫たり側に同じ石にて幅一尺に高さ三尺五寸程厚さ一寸餘りの碑有石面に文字有いとあざやかにて六百餘年を經し物とは見えずかゝる洞中に有て雨露にかゝらざるがゆゑかさもなくば文字の磨滅せしを後人の故(モト)のまゝに彫たるや其文は武藏野話にも載たり

當寺者天性岩窟自然寶石因二行基菩薩手引一十一面像自レ安二置此靈地一已來六百五十才始立二此石門一其結緣者數百人具記二名字一納二此寶殿一大悲照覽悉在二此偈一具一切功德慈眼衆生福聚海無量是故應順禮

文和五年申二月十八日　願主比丘元行

又武藏野話に今一枚有て同じ程なる石にて其文は武藏高麗郡我那岩殿山瑞巖祥寺當時大旦那小野高忠と有と記せり此一枚の碑くはしくもとめたれど見えず若左右に立ならべたる石の内なるにやと裏表燭をてらし見たれども文字なし何れへぞ持行しか堂内へ納しにや未レ詳是非なく立出もとの道を忠證菴のもとに下れりと云々

(卅四)秩父武光山　同書二の卷に武藏野話云々秩父當秩父山とも云大和本紀に勇者の怒り立るが如しと日本武尊のほめ給ひし山は即是也いつの頃よりか武甲山といひなせしは武藏第一の山といへる心にて甲の字を書し歟又武尊の武具を埋し說を附會して甲の字を甲冑の心にて用しや按に武甲山は武光山の誤なるべし此山の西南荒川を界とし東北產川を限とし此内を武光の庄といふ慶長の頃濃州長松の城主に武光式部と云いふ有いづれ武光氏の庄田なるべし云云立義按に武甲山は武光山の轉せるならんといへるもさも有べし然るに此武藏野話より已前文晁の著せし名山圖譜に武光山と記したれば兼てもいへる事と見えたり云々

(卅五)荒川　同三の卷に百川朝宗曰荒川三十七間より五百四十間迄水元武州秩父郡古大龍村山中より流出東側は同國葛飾郡小梅村迄川路四十二里十二町餘西南側は同國豊島郡區場町迄川路四十三里十八町相流夫より川下海に入云々

(卅六)薄村藥師堂棟札　同書四の卷云薄村と云名高き藥師有境内廣く前に流有云々通志曰今藥師の御堂有所本の薄村也御堂より六十歩去て薄の次郎長房館有背に正一位勳八等丹生大明神社有丹の黨の在名の地には何所にも氏神に祭る土人のいふ藥師の所も地主は丹生の地也爰に住せし次郎長房の系圖には丹治武信は陽成院の御宇元慶元年に武州押への使に加治に下し給ふ加治一の井秩父に後裔あり武藏七黨の一ッ丹黨也長房此所に住せり嫡子薄小二郎三男は秩父織原に住せし織原三郎と云也御社御堂の紋も丸の内丹の字也其後秩父はすべて北條氏邦の領地也敵甲信兩州より深山を越て爰に至り村里を燒はたらきする時御堂類燒す其時別當寺より走來り漸藥師本尊と子の神將をば取出したりと云殘る神將は兵火にかゝる其後鉢形殿御營作也其時の棟札左の如し

當寺幸元別當成範　大旦那氏邦　小旦那秩父孫次郎　施主　七條大佛工宮岡　十二神主願主藤田六供聖乘坊別當成範　左六神內　天正十三乙酉八月五日中庄九郎施主　右六神內　同年十月二十四日尾城主諏訪部遠江寺同十四年丙戌二月時正八日旦那猪豐後守久繁施主

(卅七)飯田村光源院高札　同卷に云武藏鑑曰飯田村眞土散住す田少く畑多山里也字に上中下あり神社は天神社寺院は万松山光源院洞家甲州山梨落合永昌院末寺領三石清光院洞家甲州山梨落合永昌院末寺領三石朱印高札　光源院

一當年甲乙軍勢於二于彼寺中一亂妨狼藉若背二此旨一者可レ行二罪科一者也仍如レ件　山縣三郎兵衛奉之

永祿十三年庚午二月廿八日

(卅八)野上總持寺法燈國師の贊　同書五の卷に通志曰野上町中に青色の板の如くなる石二基有り岩田の次郎父子の葬地也次郎は野上島田藤谷澗橡原が祖也此所を今も町と號するは鉢形城主北條安房守在城の時は野上の足輕町と號せし故也鉢形より三里の所に足輕町有は氏邦の大しん思ふべし山際に正一位勳八等丹生大明神の社有社の東は岩田野上の三郎の館の跡也宮森の西は總持寺法燈國師の開山地也開山の木像も有繪像も有椅子に坐し拂子を握る僧形也上に讃あり

心即是佛　佛即是心　心佛如如　亘古亘今

永仁六九年月二十日　驚峰開山覺心云々

（卅九）三ツ杯　愚記宣胤卿記也即一の卷文明十二年三月廿二日の條に次有一献ミサカヅキ云々按に三ツサカヅキは今の三組の杯なり

（四十）風呂　同卷文明十二年三廿五條に參二一條殿一入二風呂一武者小路御方外成之間任二申請一先年被レ任二僧正一云々不レ可レ然事也勘例申入歟於二注申例一者皆爲二山門憤申候一弃指例也云々當時法花衆繁昌驚二耳目一者也云々按に長祿寛正記にも法華宗の事有しやうにおぼゆ可二考合一

（四十五）繼連歌　同卷五月五日の條に繼連歌あり續歌に對したる名目也續歌も此記中におほく見ゆ

（四十六）虫拳　俗虫拳とて母指人指小指を配合して母指は蟾蜍人指は蛇小指は蛞蝓として相對して勝負を爭ふ蛞蝓蛇を制し蛇蟾蜍を制し蟾蜍蛞蝓を制す按に本草綱目四十二卷の諸蛇の條に蝮虵甘レ帶出二莊子一蝮虵蜈蚣也帶蛇也陸佃云蜈蚣見二大蛇一能以レ氣禁レ之唉二其腦眼一蟾蜍食二蜈蚣一蝮虵食レ蛇蛇食二蟾蜍一物畏二其天一也黑客揮犀云蜈蚣食レ蛇蛇即張レ口乃入二其腹一食レ之云々とあるは似たる事也また蜈蚣蛇を制するは今昔物語の加賀國諍蛇蜈島行人助レ蛇住レ島の談及東國紀行の江州三上山の蛇が俵藤太を雇ひし談などに引用べき說也

（四十七）蛇の人の隱門穴中などに入たるを治る方　本草綱目四十三の卷諸蛇の條に蛇蟠二人足一淋以二熱尿一或沃以二熱湯一則自解蛇入二人竅一炙以二艾灶一或搽以二椒末一則自出自注に以二艾灶一炙二蛇尾一或割二破蛇尾一塞以二椒末一即出云々

（四十八）ポッといふ息を突　俗にポッといふ息を衝といへり息衝事は万葉にもよめりポッといふは漢書東方朔傳に上令倡監揆二舍人一舍人不レ勝レ痛呼レ暴朔笑レ之曰咄口無レ毛聲謷々尻益高云々注服虔曰謷音暴鄧展曰呼音髐箭之髐謷音瓜袍之袍師古曰鄧音是也痛切而叫呼也與二田蚡傳呼ヲ報音義皆同一曰鄧音近レ之謷自寃痛之聲也舍人榜痛乃呼曰レ謷今人痛甚則稱レ阿に言歩高反是故朔逐レ韻而謝レ之云曰無レ毛聲謷々也云々と見えたる謷も田蚡傳の報も同義也

（四十九）北窓　北窓は書畫のためにいと便よきよしにて畫工英一蝶は北窓翁と號し書家屋代弘賢は北窓に向て平常の居座をトたり晉書陶潛傳に嘗言夏月虛間高二臥北窓之下一清風颯至自謂羲皇上人云々韓愈詩に歲晏偏相憶長謠坐二北窓一云々李商隱詩に誰向二劉伶天幕内一更當二陶令北牕風一云々と見え東壁北窓など對して用たり草根集冬部に初冬朝「冬やたちむかへる窓の北風にけさそなりゆく駒いはゆらし」俊成卿女集詞書にむかしの北むきのあけばのゝことともたゞいまのやうにあはれにてと云々光經集に「山里の窓より北は雪とちてにほひそうすき春の梅かえ」「山里の窓より北の竹のはに朝霜むすふ冬は來にけり」「雪とつる窓より北の梅かえに花をおそしと鶯そなく」拾玉集曰文集句題百首に暑月貧家何不レ有容來唯贈北窓風「夏をとふ人やあはれにきても見んむなしくはらふ窓の北風」夏夙二北窓風一枕席如二凉秋一「小夜深て窓おしあくるうたゝねの枕凉しき庭の春風」など見え此外にもおほかるべし

（五十）打橋　打橋はかりそめに打渡して別處にも移し架らるゝ橋をいふ也移橋の義なるを打橋内階などと書は借字也神代紀下に亦造二打橋一云々万葉二に上瀨石橋渡下瀨打橋渡云々同四に瀨乎廣彌打橋度須云々同十に機織木持往而天河打橋度云々同十七に可美都瀨爾宇知橋和多之余登瀨爾波宇枳橋和多之云云源氏桐壺にうちはしわたどのこゝかしこの道にあやしきわざしつゝ云々同夕貝にうちはしだつものを道にてなんかよひ侍る云々細流抄にきり馬道に板を打わたしてかよふ也内階云々一葉抄峨江入楚新釋亦

同目安に打渡したる橋也云々續源語類字抄に廊下に板を打渡しての橋也云々玉小櫛に移橋をつゞめたる也よのつねの橋はいつも同じ所にかゝりて所をかふることはなきをこれは時々にのぞみていづこへも用ある所へもて行て渡すかりそめの橋にてこゝかしこへうつす橋といふ心也こゝは渡殿などの間に横に下を通はんために切れたる所のあるに時にのぞみて渡せる也內橋打橋など注せるはかなはず万葉などに打橋と書るは例の借字なるをや云々枕草紙春曙抄六にほど〳〵うちはしよりもおちぬべし云々など見えたるにておもふべし已上の北窓打橋の二説は黒石侯津軽甲斐守親足朝臣の問に答まゐらせし也文政十一年八月十一日

(五十一)能燈　龍燈の事万物怪異辨斷七の卷十五丁ウに和漢の書を引て辨論せり此書は長崎人西川如見が作にて刋本也頭書龍火ノ事續高僧傳十ノ廿七丁ウ牛陶稿一ノ五十八ノ八丁オ龍火ノ事アリ丁ウ名物考續十三諸國里人談三の卷日蓮錄內書

〔押紙〕宋人林景熙が霽山集四の卷齊說に柔兆困敦之歲朔騎壓ㇾ境所ㇾ過殺掠數十里無ㇾ人煙ㇾ明年秋予舟夜過ㇾ北塘ㇾ半醒睡一奴坐ㇾ舟尾ㇾ曰何怪也予瞪目視有ㇾ火青々汁々伍々已而散ㇾ漫阡陌ㇾ彌千亘

万直際林麓子曰異哉此燐火也釋文謂人馬之血積而有ㇾ光其信然與ㇾ奴熟視浸ㇾ玩脫ㇾ草屨ㇾ招ㇾ之冉々近ㇾ舟次復麾使去漸遠稀予撫ㇾ舷歎曰陽烏西徂万目如ㇾ漆彼馮託幽昏以ㇾ态弄ㇾ光怪何獨燐也然燐不ㇾ能ㇾ近ㇾ遠人ㇾ而近遠ㇾ之者人也晉溫嶠然ㇾ犀牛渚ㇾ海族不ㇾ能ㇾ遁ㇾ其形ㇾ若有ㇾ呼者ㇾ曰於ㇾ君幽明道遠何意相照世未ㇾ爲ㇾ無ㇾ怪也孔氏不ㇾ語ㇾ怪道ㇾ其常ㇾ而已矣故人失ㇾ人之常ㇾ鬼行其怪中國失ㇾ中國之常ㇾ夷行其怪怪且不ㇾ可ㇾ言而況乎招ㇾ之以自近也哉

(五十二)倉庫鳴ル　歷史に大藏省倉自鳴などおほく見ゆこれも怪異辨斷七の卷十九丁オに論辨したれば閱て知べし

(五十三)佛像汗を流す　佛像汗を流すこと古書所見おほかり高畑不動緣起にも見ゆ怪異辨斷六の卷十二丁オに諸證を引て辨じたり頭書扶桑略記廿五ノ九丁ウ同廿八ノ十七丁ウ

(五十四)たまげるたまぎる　俗言に肝を消す肝をつぶすたまげるたまぎれたなどいふたまげるは魂消る也たまぎれるも魂きゆるの訛也草根集秋上枕邊虫「月いとへよるの螢の玉きえし人も枕もふるき世の秋」とよめる玉きえは魂げるたまぎれの詞におなじ

(五十五)敵將をもて我將とす　廿二史劄記十二の卷に陳武帝多用ㇾ敵將ㇾ の條あり陳武帝起ㇾ自ㇾ寒微ㇾ數年有ㇾ天下ㇾ其將帥自ㇾ侯安都黃法𣰰胡穎徐度杜稜吳明徹諸人ㇾ外其餘功臣皆出ㇾ於仇敵中ㇾ者也云々按豐太閤此におなじく大量をもて天下を取りし事速也神祖聖明大量仁愛にして亦大業を建たまへり

(五十六)反語　同書同卷六朝多以ㇾ反語ㇾ作ㇾ識といへる條に自ㇾ反切之學興ㇾ遂有ㇾ以ㇾ反語ㇾ作ㇾ識者ㇾ三國史諸葛恪未ㇾ被ㇾ害時民間謠曰諸葛恪蘆葦單衣篾鈎落ㇾ于何ㇾ相ㇾ逢成子閣ㇾ成子閣反語石子岡也後恪爲ㇾ孫峻ㇾ所ㇾ殺投ㇾ尸於石子岡ㇾ晉書孝武紀帝爲ㇾ清暑殿ㇾ讖者謂清暑反語爲ㇾ楚聲哀楚之徵ㇾ也齊書益州向無ㇾ諸王作ㇾ鎭宋時有ㇾ邵碩ㇾ曰後有ㇾ王勝憙ㇾ來作ㇾ此州ㇾ及ㇾ齊武帝ㇾ以ㇾ始興王鑑ㇾ爲ㇾ益州刺史勝憙反語爲ㇾ始興ㇾ也碩言果驗又文惠太子啓ㇾ武帝ㇾ乞ㇾ東田ㇾ作ㇾ小苑ㇾ東田反語爲ㇾ顚童ㇾ後其子鬱林王即位果以ㇾ童昏ㇾ見ㇾ廢梁武帝創ㇾ同泰寺ㇾ後又創ㇾ大通門ㇾ以對ㇾ寺之南ㇾ取ㇾ反語ㇾ以協ㇾ同泰ㇾ也遂改ㇾ年號ㇾ爲ㇾ大通ㇾ以符寺及門ㇾ名ㇾ昭明太子ㇾ時有ㇾ謠曰鹿子開ㇾ城門城門開ㇾ鹿子ㇾ鹿子開者反語謂ㇾ來子哭ㇾ時太子之長子歡爲ㇾ南除州刺史ㇾ太子薨乃遣ㇾ人追ㇾ歡來臨ㇾ喪故曰ㇾ來子哭ㇾ也云々按神武紀に諷辭倒語あり齊明紀推古紀その外國史の童謠に反隱語の類あり無惡善ゆがみもじ牛のつのもじの類また反語に似たるものとすべし

(五十七)度牒　同書十九の卷度牒の條に宋時凡賑荒興役動請ㇾ度牒ㇾ數十百道濟用ㇾ其價值ㇾ鈔一二百貫不ㇾ等不ㇾ知緇流何所ㇾ利而買ㇾ之及ㇾ觀ㇾ李德裕傳ㇾ而知唐以來度牒足ㇾ重也徐州之節度使王知興奏准ㇾ在ㇾ淮泗ㇾ置ㇾ境度ㇾ人爲ㇾ僧每人納ㇾ二絹ㇾ即給ㇾ牒令ㇾ回李德裕時爲ㇾ浙西觀察使ㇾ奏言江淮之人聞ㇾ之戶有ㇾ三丁ㇾ者必令ㇾ一丁往落髮ㇾ意在ㇾ規ㇾ避徭役ㇾ影ㇾ庇貲產ㇾ今蒜山渡ㇾ日過ㇾ百餘人ㇾ若不ㇾ禁止ㇾ一年之內即當失ㇾ却六十萬丁ㇾ矣據ㇾ此則一得ㇾ度牒ㇾ即可ㇾ免ㇾ丁錢ㇾ庇家產因而影射包攬可ㇾ知此民所ㇾ以趨ㇾ之苦ㇾ驚也然國家售ㇾ賣度牒ㇾ雖ㇾ可ㇾ得ㇾ錢而實暗虧ㇾ丁田之賦ㇾ則亦何所ㇾ利哉云々本朝度牒の事に引注すべき條なれば抄出せり

(五十八)文字の忌諱　同書廿六の卷秦檜文字之禍の條に文字之獄(カツタツ)起て善類傾陷せるよしを記したり儒者

ともすれば忌諱の文を製て酷吏のために陷らるゝことおほしおそるべし〳〵

（五十九）元の世祖日本を犯す　同書卅の卷元の世祖嗜レ利黷レ武條に自二高麗臣服一即招二諭日本一日本不レ通先平二躭羅一繼而有レ事二於南宋一攻二襄樊一攻二沿諭一以至下下二江淮一降二宋主一追二二王於閩廣一先後凡十餘甫訖レ事又議征二日本一命二阿塔海范文虎忻都洪茶邱等一率二兵十萬一出レ海颶風破レ舟文虎等擇二舟之堅好者一先歸盡棄二其兵於山島一日本兵來凡蒙古高麗人盡殺謂新附軍爲二唐人一不レ殺而奴レ之其得二脫歸一僅于閻等三人帝大怒欲二再征一日本一遣下王積翁先往招諭上爲二舟人一殺二於途一始終不レ得二要領一乃止云々按に此事太平記に引注すべしまた同書卅四の卷に嘉靖中倭寇之亂の條あり異稱日本傳日本外史等を補べき說也

（六十）利瑪竇（井天下四大教　意太理亞（イタリア）の利瑪竇（リメトウ）が事蹟陔餘叢考に載すまた廿二史劄記卅四の卷天主教の條に意太理亞國在二大西洋中一萬曆中其國人利瑪竇至二京師一爲二萬國全圖一言天下有二大洲五一第一曰二亞細亞洲一凡百餘國而中居二其一一第二曰二歐羅巴洲一凡七十餘國而伊太理亞居二其一一第三曰二利未亞洲一亦百餘國第四曰二亞米利加洲一第五曰二墨瓦蠟泥洲一而城中大地盡矣大抵歐羅巴諸國悉奉二天主教一天主耶蘇生二於女德亞一即古大秦國也其國在二亞細亞洲之中一西行教二于歐羅巴一其始生在二漢哀帝元壽二年庚申一閱二一千五百八十一年一至二萬曆九年一利瑪竇始泛レ海九萬里抵二廣州之香山澳一其教漸行二十九年入二京師一以二方物一獻幷貢二天主及天主母圖一禮部以二會典不下載一大西洋名目一駁レ之帝嘉二其遠來一假二館授レ餐公卿以下重二其人一咸與交接利瑪竇安レ之遂留居不レ去三十八年卒其年以二曆官推算日食多謬一五宮正一周子愚言大西洋人龐廸我態三拔等深二明曆法一其書有二中國所レ不レ及者一當レ令二採擇一遂令二廸我等一同測驗自二利瑪竇來一後其徒來者益衆有二王豐肅陽瑪諸等一居二南京一以二其教一倡行官民多從レ之禮部郎中徐如珂惡レ之奏諸遂回四十六年廸我等奏臣與二利瑪竇等一泛レ海九萬里覲二光上國一臣等焚修行道尊二奉天主一豈有二邪謀一敢隨二惡業一乞賜二寬假一帝亦不レ報而居二中國一如レ故崇禎時曆法益舛禮部尚書徐光啓請令二其徒羅雅谷湯若望等一以二其國新法一相參較書成即以二崇禎元年戊辰曆一爲二曆元一其法視二大統曆一爲レ審焉其國人東來者大都聰明特達之士意專二行教一不レ求二祿利一所レ著書多二華人所下未レ道故一時好レ異者咸尚レ之其徒又有二龍華民畢方濟艾如略鄧玉函諸人一皆歐羅巴國之人也統而論レ之天下大教四孔教佛教回々教天主教也皆生二于亞細亞洲一而佛教最廣亞細亞洲內如二前後藏準噶爾喀爾喀蒙古等部一悉奉二佛教一中國亦佛教盛行亞細亞洲外如二西洋之古里國錫蘭國榜葛剌國沼納朴兒國南洋之白葛達國占城國賓童龍國暹羅國眞臘國東洋之日本國琉球國一皆奉二佛教一（俱見二明史外國傳一）又增迦剌國馬八兒國俱有二佛鉢舍利一（見二元史亦黑迷失傳一其餘海外諸蕃則皆奉二天主教一矣回々教亞細亞洲內惟烏什葉羌喀什噶爾和闐郭酣巴達克山控噶爾克食米爾退木爾沙等國奉レ之（見二椿園氏異域瑣談一）外洋則祖法兒國阿丹國忽魯謨斯諸國奉レ之（亦見二明史外國傳一）孔教僅中國之地南至二交趾一東至二琉球日本朝鮮一而已是佛教所レ及最廣天主教次レ之孔教回々教又次レ之孔子集大成立二人極一凡三綱五常之道無レ不二該備一乃其教反不レ如二佛教天主教所レ及之廣一蓋精者惟中州清淑之區始能行習粗者則殊俗異性皆得而範二圍之一故教之所レ被允遠也試觀二古帝王所レ制禮樂刑政一亦只就二倫常大端一導レ之禁レ之至二于儒者一所レ言身心性命之學原不レ以二概責之庸衆一然則天道之包舉無レ遺固在二人々一共見レ之粗迹而不二必深求一也哉

と云々陔餘叢考にも此事あり清人張潮が昭代叢書廿七に泰西和類思安文思南懷仁が西方要記を收てその卷首の小引にいへらく（張潮云也）夫泰西之說誠勝二于諸教一惜乎以二天主一爲レ言則其辭不二雅馴一流二于荒誕一搢紳先生難レ言之苟能置而不レ談則去二吾儒一不レ遠矣とも見ゆ

頭書利瑪竇が事明史三百廿六外國傳二見ユ破邪集王豐肅犯案ニモ宗禎曆書奏疏に万曆間西洋歸化陪臣利瑪竇等尤精二其術一云々聖朝破邪集六卷に闢邪管見錄（徐章大司馬讎維楨德輿甫著）云海外極西之國有二夷人利瑪竇一號二西泰者一萬曆初年偕徒四五人流二入中國一云云廣輿記卷一順天府部に天主堂在二宣武門內一西洋利瑪竇航海九万里入二中國一神宗命給廩賜二第堂一建二第左一所レ製有二簡平儀一本名二渾天圖一爲二測レ驗根本一沙漏用以候レ時候鐘應レ時自擊龍尾車下水可二用以上一千里錢可二親レ小爲レ大親レ遠若レ近皆極工巧云々回々教ノ事七修類稿ナド困學紀聞廿云唐回鶻傳元和初始以摩尼至其法日晏食飯水菓葷屠酤可汗常與共國（何云蓋至二于今一不レ絕也）云々此回々教也

〔押紙〕崇禎曆書卷二

**奏疏其二用二西法一條に高皇帝嘗得二回回曆法一稱爲二乾方先聖之書一令二詞臣吳伯宗等一與二馬沙亦黑同事一翻譯一至今傳用惜亦年遠漸差萬曆間西洋歸化陪臣利瑪竇等尤精二其術一四十等年曾經部覆推舉今其同伴龍華民鄧玉函二臣見居二賜寺一必得二其書其法一方可二以較一正訛謬一增二補闕略一蓋其術業既精積驗復久若以二大統舊法一與レ之會通歸レ一則事半而功倍矣云々又卷二徐光啓等題疏に臣

等昔年曾遇二西洋利瑪竇一與レ之講二論天地原始七政運行一併及二其形體之大小遠近一與二夫度數之順逆遲疾一々從二其所一以然一處指示確然不易之理較二我中國一往籍多レ所レ未レ聞臣等自後每レ聞二交食一即以二其法一驗レ之與二該監所一推算一不レ無二異同一而大率與レ天相合云々

（六十一）彌勒佛下生といひて衆を惑す賊　廿二史劄記卅の卷彌勒佛謠言の條に順帝至正十一年韓山童倡言天下大亂彌勒佛下生江淮愚民多信レ之果寇賊蠭起遂至二國亡一然此謠不レ自二至正中一起也順帝帝至元三年汝寧獻二所レ獲捧胡一有二彌勒佛小旗一紫金印量天尺而泰定帝時又先有二息州民趙丑斯郭菩薩等一倡二好言一謂彌勒佛當レ有二天下一有司以聞命二河南行省一鞫治之一是彌勒佛之謠已久播二民間一矣蓋亂之初起不レ拔二其根株一遂至二蔓延一而不レ可レ救皆法令玩弛之所レ致也とあり元史の條也彌勒下生と號して衆を惑はせし例東國通鑑にもあり本朝にも彌勒の名をかりて衆を惑はせし事歷史に見ゆ 頭書 輟耕錄廿九ノ一丁耕

松屋筆記卷之五十七

東都　小山田將曹平輿清稿

（一）神と君の名義　非天狗　輿清按に神は上の義也上たるものとして人々の尊敬ゆゑの名也虎狼虫蛇の類にいふもその物のおそろしさに上たるものと崇稱て心をとるよし也伯頭尹正首守などの長官を加美といふも省寮の上座に就て事執人を下官より尊敬て上たる官人といふ義也君も神の通音にて臣下の人の上として奉仕るゆゑの稱也公侯の字を支美と訓も義おなじ然て轉ては己より上とある人を神とも君とも又下等なる人をも稱譽て君とはいへり遠津神明津神また皇は神にし坐ばなど歌によめるは貴人を神といへる也大君父君母君などは貴人を君といへる也吾蠶あがきみなどは下等の人にもあれ親て君といへる也歌に下等の人を君とよみたるは稟盡がたし台記久壽二年八月廿七日の條に親隆朝臣來語曰所レ以法皇惡二禪閤及殿下余一者先帝崩後人寄二帝巫口一曰先年人爲レ詛レ朕打二釘於愛宕護山天公像目一故朕目不レ明遂以早世

法皇聞二召其事一使二人見二件像一既有二其釘一即召二愛宕護山住僧一問レ之僧申云五六年之前有二夜中 此間欠七字 美福門院及關白疑二入道及左大臣所一爲法皇惡レ之雖レ難レ取レ信天下道俗所レ申如レ此先日成隆朝臣略語二此事一今聞二兩人說一怖畏不レ少但禪閤及余唯知二愛宕護山天公飛行一未レ知二愛宕護山有二天公像一何況祈請乎蒼天在レ上白日照□怖々とある　天公は山城名勝志九の卷に緣起云有二大杉一彌レ天蟠レ地天竺大夫日良唐土大夫善界日本太郎坊太郎坊一名 樂衛太郎 各將二其眷屬一現二于大杉之上一有二九億四万餘天狗一神頭鬼面被毛戴角と見えし天狗におなじ天公は天の君と訓べく天の君は天の神と通へば神通ありて天を飛行するおそろしきものゆゑ天の君と稱さて字に天公と書き通はして天狗とも書るより漢土にいふ天狗の事に引合せて牽強の說おこれる也荻生茂卿が天狗說服部元喬が高雄山移文小崎節が假寐友三の卷村瀨之熙が藝苑日涉十二の卷などに諸說を擧て論じたるも共にひがごと也秋葉山の三尺坊大山の大小天狗最上寺の道了權現の類みな天を飛行する神にて其像は神代紀の猿田彦神のさまをまねび小天狗はすこしさまをかへて金翅鳥王などの形におもひよりて作り設たるもの也さて天の狗所見は天狗の姿保元物語下卷に三所有天狗の顏盛衰記八の卷天狗の形參考太平記廿一の卷天狗の樣なる者盛衰記十八の卷　天狗山伏參考太平記十の卷天狗付十の卷平家物語長門本平家物語八の卷盛衰記廿四の卷天狗道盛衰記八の卷參考太平記廿五の卷二處廿七の卷天狗の法長門本平家物語四の卷盛衰記十八の卷　天狗根性盛衰記十八の卷參考太平記廿七の卷　天狗倒參考太平記廿七の卷天狗の笥笑盛衰記廿四の卷　天狗の乘物參考太平記廿七の卷天狗の落文應仁記上天狗の栖平家物語二の卷平治物語下盛衰記十盛衰記九の卷天狗ばけもの平治物語下盛衰記十七の卷參考太平記廿三の　小天狗保元物語上卷室町殿日記女の卷天狗の變化伯耆の卷室町殿日記十九の卷天狗の所爲平家物語六の卷盛衰記一の卷十一の卷廿六の卷參考太平記二の卷參考太平記廿七の卷天狗の兵法參考太平記廿九の卷などおほかり天狗流星とあるは應仁記上卷　天狗星にて別也天狗とのみ見えたるは保元物語上平治物語下平家物語四同五長門本平家物語八に二處同十一盛衰記三に二所同四同八に二處同十同十三同廿六に三處同廿八參考太平記二同七應仁略記下吉野拾遺二鎌倉大草紙下文正記に二處に天狗は山臥のごとしといひ天狗をよめる歌は吉野拾遺に見ゆまた天狗波旬といへるは誤にて天魔波旬也波旬は惡者惡意惡法の義と飜譯名義集二の卷十六丁法華經科注二の上卷五丁などに注あり又天狗を狽賓といふこと續太平記廿三の卷天狗燒事の條に見え今俗もさいへりこは狗品の義にて人品に對したる名なるを通音に俱賓とは書たるなるべし 頭書 品字箋新聲第七論語神字注に人之出二乎類一者

亦得ニ以神稱一國語禹會ニ羣神于會稽之山一註羣神各國之君也君ニ主山川一亦得ニ以レ神稱一之云々これ神と君とをしこにても通ふ例也同書劍璽第三十代諳上字注に高也尊也貴也下之對也云々又佛レ君者不ニ敢直言一其君一而稱レ上又太上尊之極也又同レ尙云々また尙字注に上也崇也貴也云々なども見ゆ大祓に高津神乃災トアルハ天狗也晋書五行志中百姓註に天公誅ニ謫汝一と有も天神の類也筆澤塵一ノ卷に禮祭法山林川谷丘陵能出レ雲爲ニ風雨一見ニ怪物一皆曰レ神此方ノ人指シテ天狗ト云徂徠天狗說の類に同じ

(二)服色の制　本朝服色の制は唐制に据たる也唐の劉餗が隋唐嘉話に舊官人所レ服唯黃紫二色而已貞觀中始令三品以上服レ紫五品以上朱六品七品綠八品九品以レ青焉と見ゆ衣服令に引注すべき說なれば抄出せり

(三)村氣(ヤボモノ)　井田舍漢(ヰナカテトコ)　隋唐嘉話に薛萬徹尙ニ丹陽公主一太宗嘗謂レ人曰薛駙馬村氣主差レ之不ニ與同レ席數月云々按に村氣は田舍風の事にて俗にヤボモノといふにおなじヤボは藪にて藪澤の人の義也古今にやぶわかねばとよめるやぶ也また隋唐嘉話に李昭德爲ニ內史一婁師德爲ニ納言一相隨入レ朝婁體肥行緩李顧待不ニ即至一乃發レ怒曰叵レ耐レ殺レ人田舍漢婁聞レ之反徐笑曰師德不ニ是田舍漢一更阿誰是云々田舍漢は物語書に「おなかうど」と書たり 頭書 曝耕錄十七ノ五丁ウ方頭モヤボモノト譯スベシ

(四)面に唾せらるゝとも不レ可レ拭　隋唐嘉話に婁師德弟拜ニ代州刺史一將レ行謂レ之曰吾以ニ不才一位居ニ宰相一汝今又得ニ州牧一叨據ニ過分一人所レ嫉也將何以全ニ先人髮膚一弟長跪曰自レ今雖レ有レ唾ニ某面一者ニ亦不ニ敢言一但拭レ之而已以レ此自勉庶レ免ニ兄憂一師德曰此道所謂爲ニ我憂一也夫前人唾者發ニ于怒一也汝今拭レ之是惡ニ其唾一而拭レ之是逆ニ前人怒一也唾不レ拭將ニ自乾一何若笑而受レ之武后之年竟保ニ其寵祿一率ニ是道一也と見ゆ遺敎經に忍之爲レ德慈戒苦行不レ可レ及ともあり君子可レ愼焉 頭書 能改齋漫錄一ノ卷唐書本傳

(五)魚袋　金魚袋は三位以上用レ之銀魚袋は四品五品用レ之六位以下は無レ用レ之江次第抄に魚夜不レ寐故事レ君夙夜匪レ懈之義金銀以ニ其飾高卑一也と見ゆ今世の印籠は魚袋の變製也延喜彈正式公式令三代實錄貞觀元年四月の條江次第西宮記飾抄次將裝束抄名目抄年中行事秘抄故實拾要裝束圖式など考べし隋唐嘉話に朝儀魚袋之飾唯金銀二等至ニ武后一乃改ニ五品一以レ銅中宗反レ正從レ舊とへり

(六)禿居士(カブロ)　無位の聖財集中卷卅一丁に剃レ頭云へドモ心不淨ニ破戒ナレバ經ニ是ヲ禿居士ト云ヘリ決定ノ大賊也云々と見ゆ今の世は禿居士に乏からず

(七)木子息木娘木(ムスコムスメ)　まじめ木やぼなどいふ木の字并土(ツチ)某と云土の字　俗に木子息木娘木眞締木(マジメキ)藪(ヤボ)などいふ木は徒然草枕草子などに僧を木のはしのやうといへるにおなじ又聖財集下卷卅六丁ウ(キリツソウフチシンゴンシアラゼン)に木律僧土眞言師荒禪とて三宗を誹たる詞あり此木律僧は木のごとく他をしらざる律僧の事にて木娘木子息の木におなじ土眞言師も土百性土一揆などの土におなじ 頭書 無位雜談三ノ二丁オ木律僧同八ノ五丁オ砂石集八ノ十九丁オ

(八)酒壺にならんといへる人　万葉三の卷大伴旅人卿歌に「中々に人とあらすは酒壺になりてしかも酒に染なん」と見えたるに吳志孫權傳注に吳書曰鄭泉字文淵陳郡人博學有ニ奇志一而性嗜レ酒其閑居每日願得ニ美酒一滿ニ五百斛船一以ニ四時甘脆一置ニ兩頭一反ニ覆沒飮之一德即任而啖ニ肴膳一酒有ニ斗升減一隨即益レ之不ニ亦快一乎云々臨レ卒謂ニ同類一曰必葬ニ我陶家之側一庶百歲之後化而成レ土幸見レ取爲ニ酒壺一實獲ニ我心一矣とあるは同日の談也水鳥記に地黃坊樽次池上底深が酒戰の事見え兩國廻向院には陶形(トウケイナリ)の石塔有て「かねてよりかくあるへしと思ひしにつひにわか身は德利となる」とゑりたり

(九)沈惟敬(シンイケイ)　沈惟敬が事蹟は懲秘錄にくはし胡應麟(胡元瑞)が筆叢續集の甲乙剩言に沈惟敬以ニ落魄一僑ニ萬燕中一寓傍有ニ閒屋一使ニ賣水擔子沈嘉旺居レ之嘉旺本樂清趙常吉家蒼頭幼爲ニ倭奴一所レ掠載還ニ日本一凡十八載泛レ海而還還復走レ燕依レ超無レ所レ用レ之故以レ賣レ水自給惟敬暇則時々從ニ嘉旺一談ニ夷中情俗一雖ニ器什卿語一無レ不ニ了悉一會ニ石大司馬經一略東事一而石寵姬之父袁某恒從ニ惟敬一游惟敬日與レ袁言ニ夷中事一若ニ身至レ之者一袁以告レ石石遂召與相見與語大悅遂奏ニ受ニ游擊將軍一奉ニ使日本一而有ニ封貢之說一矣惟敬妻姓陳名澹如本故倡也惟敬既遠使石每レ到レ門慰藉至レ以ニ沈夫人一呼レ之眞可レ謂ニ能下ニ賤矣第下非ニ其所ニ當レ下爲レ可レ惜耳と見ゆ

(十)厠籌(カハヤベラ)　胡元瑞が筆叢續集甲乙剩言に厠籌の條あり云有レ客謂レ余曰嘗客ニ安平一其俗如レ厠男女皆用ニ瓦礫一代レ紙殊爲ニ嘔穢一余笑曰安平晉唐間爲ニ博陵縣一鶯鶯縣人也爲ニ奈何一客曰彼大家閨秀當ニ必與レ俗自異一余復笑曰請爲レ君盡ニ厠中二事一北齊文宣帝如レ厠令ニ楊情執ニ厠籌一是皇帝之尊用ニ厠籌一而不レ用レ紙也三藏律部宣律師上レ厠法又用ニ厠籌一是比丘之淨用厠籌而

不レ用レ紙觀レ此厠籌瓦礫均也不下能不ㇾ爲二鶯々要處一掩ㇾ鼻耳客爲噴レ飯滿レ案云々與清按に鶯々は會眞記（五部稿ハ八十七オ）に見え李紳蘇軾などが詩に作りたる美人也鶯々傳ありて其事跡を記せり今皇國山家の百姓或は厠籌（ヤツチンベラ）を用ひ或は藁屑木草の葉を用て糞を拭ひ甚きにいたりては厠傍に繩を張たるを跨て尻穴を摺拭もありとなん婦女の立小便は田舍に限らず京大阪にもおほかり胡元瑞鶯々が尻の糞臭をおもひ出其談北齊主文宣帝南山道宣律師に及ぶ蔡倫紙を製らざる以前は何をもて拭けん布帛などをや用けん娥皇女英妹喜妲己大姜褒姒毛嬙西施鄰姬虞氏薄姬が後門もおぼつかなし衣通姫のおゐどもいかなる臭氣しけんとぞ思ひやらるゝ

續書（緩耕錄十二ノ五丁ォ法苑珠林百十三ノ便利部）

（十一）春晝　春晝は俗に枕草子といへりそは淸少納言犬枕といへるものによりて呼けるにや本朝には古今著聞集に師の房の後家の事を春晝に書し事有にはくなぶり袋法師晝卷など亦古し明人胡應麟が筆叢續集藝林學山四卷春宵秘戲圖の條に徐陵與二周公讓一書歸來天日得レ肆二間居一差有二弄玉之俱一（ヅレイ）僊非レ無二孟先之同一隱優遊俯仰極二素女之經文一升降盈虛盡二軒皇之圖勢一雖二復考槃在一阿不レ爲二獨宿一全用二張語一至二于俯仰升降一則逼二眞中之術一矣豈曰二列圖已一哉云々

（十二）鍾馗　胡元瑞筆叢續集藝林學山四の卷に鍾馗（楊子巵言）考工記曰大圭首終葵注終葵椎也齊人名レ椎曰二終葵一蓋言二大圭之首似一レ椎爾雅金石錄晉宋人名以二終葵一爲レ名其後訛爲二鍾馗一俗畫二一神像一帖於門首一執レ椎

之圖勢一則宋人畫苑春宵秘戲圖有二自來一矣張平子樂府素女爲二我師一天老敎二軒皇一抑又古矣○按漢書藝文志有二黃帝養陽方二十六卷堯舜陰道二十三卷湯盤庚陰道二十卷天老雜子陰道二十五卷天一陰道二十四卷三家內房有子方十七卷一張衡同聲歌天老敎二軒皇一蓋出二于後世房中淫邪之說一其來遠矣郎仁寶云漢成晝二紂踞一妲己于屏一此春晝所二自始一也（凡房中稱二帝王一皆假託若然足レ見二其來之遠一秦漢已然矣）云々明人徐煬が徐氏筆精二の卷詩原部に春晝之設其來久矣張衡詩云解巾粉御列圖陳二枕張一素女爲二我師一儀態盈二萬方一衆夫所二希見一天老敎二軒皇一儼然閨房秘戲之像徐陵與二周弘讓一書云歸來天日得レ肆二間居一差有二弄玉之俱一僊非レ無二孟光之同一隱優游俯仰極二素女之經文一升降盈虛盡二軒皇之圖勢一雖二復考槃在一阿不レ爲二獨宿一全用二張語一至二于俯仰升降一則逼二眞中之術一矣豈曰二列圖已一哉云々

（十二）鍾馗　胡元瑞筆叢續集藝林學山四の卷に鍾馗（楊子巵言）考工記曰大圭首終葵注終葵椎也齊人名レ椎曰二終葵一蓋言二大圭之首似一レ椎爾雅金石錄晉宋人名以二終葵一爲レ名其後訛爲二鍾馗一俗畫二一神像一帖於門首一執レ椎

以擊レ鬼好レ怪者使傳會說二鍾馗能啖一レ鬼畫士又作二鍾馗一元夕出遊圖一又作二鍾馗嫁一レ妹圖一訛レ之又訛矣文人又戲作二鍾馗傳一言鍾馗開元進士明皇夢見命レ工畫レ之尤爲二無稽一按孫逖張說文集有下謝レ賜二鍾馗畫一表上先二於開元一久矣亦如二石敢當一本急就章中虛擬二人名一本無二其人一也俗立二石於門一書二泰山石敢當一文人亦作二石敢當傳一虛辭戲說也昧者相傳久レ之便謂二眞有一其人一矣○又蘇易簡作二文房四譜一云虢州歲貢二鍾馗一二十枚未レ知二鐘馗得一レ號之由一也愼按硯以二鐘馗一名即考工記終葵大圭之義蓋硯形如二大圭一爾蘇公豈不レ讀二考工記一者蓋亦未二之審思精考一乎陳心叔曰鍾馗武德中應レ舉不レ第觸レ堦死后見二夢明皇一曰臣終南進士鍾馗願除二天下虛耗之孽一事見二逸史一唐書不レ載或云北史堯暄字辟邪本名鍾葵馗葵音同見二續博物志一又按周禮考工記云大圭首終葵注云終葵椎也正韻云葵亦作レ揆楊子扈言即以二鍾馗之訛一本二於此一似レ無二確據一若以二字音相同一則左傳殷人七族有二終葵氏一爾雅釋草篇有二蔣葵中馗二草名一豈可二曲引爲下證或云鍾馗當レ作二終夔一謂六書本義終有二窮極畢死之義一古文夔一作レ馗集韻馗夔逵暩通二用夔一山谷孔毅子所レ謂士石之惟夔罔兩是也窮二治邪鬼一故稱二終夔一耳此亦意撰也若然則作二鍾馗一亦可鍾有二牧聚之義一何必改レ鍾爲レ終俗繪鍾馗執レ鬼以衛レ宅韻府云鍾馗鬼名非也又按孫逖張說文集有下謝レ賜二鍾馗畫一表上則鍾馗之名不レ始二於開元時一矣麟按鍾馗之名當起二于六朝一蓋習俗相二傳鬼神名號一固有二不レ可レ致レ詰者一必求二其人出處一以實レ之非二穿鑿一則附會耳楊謂鍾馗傳爲二文人戲作一最爲二卓識一其謂二大圭之首一爲二終葵一者本以起二下文晉宋間人名終葵一後因二人名一而訛爲二鍾馗一非即以二大圭之首一爲二鍾馗所下本也名疑謂レ無二確據一而引二左傳爾雅一以駁レ之似未二深會一楊意一然楊亦本二金石錄堯暄字辟邪之說一而堯暄乃北朝元魏人非二晉宋人一也又暄本名鍾葵而以二辟邪一爲レ字辟邪固啖鬼之訛所二自出一求二之鍾葵義一了不二相關一又安知下堯暄本名非レ出二于左傳爾雅一而出中于考工上耶凡此類俱荒忽誕憑起レ自二閭閻匪一若下本二諸史傳記志一者雖二瑣屑隱徹一有中考必得上也用修心叔俱以鍾馗不レ始二開元時一第據二孫逖張說表一言余考二鍾馗傳一明皇因レ得レ夢而召二吳道子一圖二其形一正與二孫張二子一同レ時蓋文士因二謝表有下之而戲二作此傳一以爲二明皇時一也傳中本稱二武德進士一楊以爲開元亦誤宣和畫譜楊棐傳下稱六

朝古碣有二鍾馗字一則不レ但不レ始二開元一亦不レ始二武德一矣余意鍾馗之說必漢以來有レ之如二神荼鬱壘之屬一載記偶亡無二從考訂一後人但見二孫張謝表一而戲作此傳一世遂以爲二開元人一不二必深致一レ辨也畫家鍾馗嫁レ妹圖亦有レ因沈氏筆談云歲首畫二鍾馗于門一不レ知レ起レ自二何時一皇祐中金陵發二一冢一有二石誌一乃宋宗慤母鄭夫人宗慤有レ妹名二鍾馗一則知鍾馗之設亦遠矣按沈說最似レ可レ笑豈有レ婦人名二鍾馗一即以爲二談レ鬼之鍾馗一耶第六朝人好用二佛家語及鬼神名一以爲二小字一或當時已有二此畫一因以名二其女子一亦未レ可レ知（如二柳逢摩鬼一或因二摩詞之圖一）女子陋然婦人貌陋而以二鍾馗一名レ之亦未レ可レ知（今俗嘲二女子陋一者尙有二斯稱一）則存中所レ引石誌意蓋以二鍾馗之名一其傳在二六朝之前一非レ以二婦人一名二鍾馗一即以爲世所レ畫鍾馗張本也存中負レ能考訂而此竟欽焉豈亦以無二確證一耶乃畫家所レ傳鍾馗嫁レ妹必因レ此而譌矣（童逸畫跋亦以二鍾馗一爲二唐人一俱誤續考二北史及魏書暄堯傳一暄字辟邪上黨長子人本名鍾葵後賜二名暄一聰了美二容貌一以二武功一至二大司農一云々然則暄名正作レ鍾非レ終也暄以二美容貌一宗氏以二婦人一而並得二鍾馗之稱一可レ謂二枉濫無辜一考暄在二魏文時一而宗慤當二梁世一其時相去頗不レ遠因宜レ爲二兄妹一耳聞者噴レ飯大噱按暄本名鍾葵而以二辟邪一爲レ字辟邪干暄字義既絕不二相蒙一干葵義又了不二相涉一則所レ謂辟邪何指也金石錄徒、見二名鍾葵而有二辟邪之字一便以爲談レ鬼之說所二自起一後人求レ之弗レ得惟此說僅似レ可レ信故厭然從レ之即不二以暄爲一鍾馗一鮮レ不レ以二鍾馗之譌一本也此亡レ疑余始亦大以爲レ然及レ閱二事物紀原引二沈存中說一又取二沈說一反二覆之一而意宗妹之名本二于鍾馗一而得又取二魏書一反二覆之一而疑二堯暄之字若二于鍾馗有一連者一因豁然大悟曰鍾馗之說蓋自二六朝之前一固已有レ之流傳執レ鬼非二一日一矣堯暄之本名鍾葵宗氏之妹名鍾馗皆即以二鬼神一爲レ名故暄名鍾葵而字辟邪者即取レ鍾馗能驅二邪辟一耗レ之意也後人既不レ得二鍾馗出處一見二暄名鍾葵又有二辟邪之字一反以二世傳鍾馗一爲レ出二于此一豈不二甚乖舛一哉余久畜二茲疑一未レ能二解脫一一旦參二會群籍一不レ覺洞然信古今事方冊第存亡弗レ可レ究也研名鐘馗或如二今研上所レ刻魁斗之形一楊以二研形如レ圭當レ之亦大附會胡不レ云レ如二椎邪附笑續讀二龍舒淨土文一有二唐人張鍾馗一蓋亦借二鬼神一爲レ名若二堯暄及宗慤妹一彼此互證蓋信余所レ見不レ誣不レ爾則鍾馗已見二武德開元際一豈復襲二此人名一耶堯暄舊名馗作レ葵當是音同致レ訛

不二必深辨一云々與清按二胡元瑞一說是鍾馗執レ鬼之說六朝以前にありて其圖も又古し魏の堯暄が本名鍾葵宋の宗慤が妹名鍾馗唐の張鍾馗などこれによりて名づけ研上に鍾馗を刻たるをやがて鍾馗といひ草名に蓉葵中馗の二種あるは音の通たるのみなるよし也郎瑛が七修類稿廿三の卷に鍾馗起二於明皇之夢一唐逸史所レ載也予嘗讀二此史一有二堯暄本名鍾葵字辟邪一意葵字傳レ訛而捉レ鬼事起二於字一也昨見二宣和畫譜一釋道門云六朝古碣得二於墟墓間一者上有二鍾馗字一似レ非二開元時一也按此正合二其時一葵字之訛恐如二薛仁貴碑一實名禮而傳寫之謬又如二十八學士之類一歟存レ疑以俟二博古一云云趙翼が陔餘叢考卅五の卷にもくはし（頭書薩天錫詩集下卷終南進士行和二李五峰題一馬麟畫鍾馗圖一詩に老日無レ光霹靂死玉殿咻々時二陰鬼一赤脚行天踏二龍尾一倫得紅蓮出二秋水一終南進士髮指レ冠綠袍束帶烏靴竜赤口淋漓呑二鬼肝一銅聲剝々秋風酸大鬼跳梁小鬼哭豬龍肌嚼黃金屋至レ今怒氣猶未レ消髯戟參差努二瞳目一女名以二佛說一觀音佛御前などの類多し）

（十三）目に角を立る　俗言に目に角を立て見るといふは佛祖統紀二の卷廿丁穆王四年の條に諸魔衆各〻盡二威力一角レ目切レ齒橫飛亂擲とある角目の字にかなへり（頭書史記酷吏傳に側レ目而視云々）

（十四）人頭鹿鹿頭人人面獸身　佛祖統紀三の上卷三丁に王說レ偈曰我實人頭鹿汝是鹿頭人以レ理而爲レ人不レ以レ形爲レ人云々史記周本紀五丁に山海經曰有レ人人面獸身名曰二犬戎一云々秦始皇本紀四十四丁に人頭畜鳴云々俗に人面獸心といへる字の出處人頭鹿又これに近し（朱書）同二舟閣截記一（頭書晉書劉曜載紀贊に彼戎狄者人面獸心見レ利則棄二君親一臨レ財則忘二仁義一者也砂石集五ノ九丁ウ六ノ六丁ウ）

（十五）風鈴　佛祖統紀五の卷廿五丁ウ十七祖僧法邪舍尊者の傳に父母聞二子語一即舍出家它時聞二風吹一殿鈴一師問鈴鳴邪風鳴邪舍曰非レ風非レ鈴我心鳴耳云々これ風鈴なり義楚六帖にも風鈴の事有

（十六）佛像流汗　佛像流汗の事私案抄に高幡不動の靈驗を記し其外所見おほかり佛祖統紀六の卷廿丁四祖天台智者智顗傳に荊州玉泉弟子法儼於二江都一造二智者像一還至二江津一像身流レ汗拭已更出識者謂師色身不レ異二於此一也と見ゆ萬物怪異辨談六の卷十二諸說を擧たるを考合すべし

（十七）最靈　俗に「ヒイキヲスル」といふはもと引を延たるにて人を引よしの詞也引立るなどの引におなじ「ひき〳〵」といふを「ヒイキ　ビイキ」ともいへりさ

るを最負の字を宛ること心得ず品字箋地聲第二地諧最字の注に正韻箋云最屬亦九種之一好負レ重今石碑下之龜趺也一曰最屬作レ力貌と見えたれば力を入るよしにて牽合せしにや下學集下卅三丁ウ

（十八）歌詞哥の字　古今榮雅抄序末卷三丁ウに歌とは和國の風なれば和歌といふ也歌の字哥詞の二字こゝろおなじ正字は歌也定家卿自筆の懷紙に詞の字をかかれたる也云々品字箋和聲第四哿諧哥字注に古歌字說文哥聲也藝文志哥永言劉禹錫云屈原作二九哥一皆此哥字今竟作二哥弟之哥字一矣哥猶レ兄也云々同歌字の注に說文歌詠也徐曰長二其聲一以詠レ之也虞書詩言レ志歌永レ言聲依レ永註心之所レ之謂二之志一心有レ所レ之必形二于言一故曰レ詩言レ志既形二于言一則必有二長短之節一故曰レ歌永レ言既有二長短一則必有二高下清濁之殊一故曰聲依レ永又毛傳曰曲合二于樂一曰レ歌云々詞同レ上云々（ソノジンカノジン）（十九）仁に人を某仁といふ義　人を某仁彼仁などいふは古きことにて職原抄などにも見ゆ品字箋新聲第七綸諧人字の注に仁也仁也者人之心也以レ仁爲レ心云々又仁字注に孟子曰仁人心也知レ仁爲二人心一云々などは見ゆ

（廿）蹂躪并躙入　律法書至要抄貞永式目などの類に蹂躙入の字あり品字箋論聲第十論諧躙字の注に踐踏謂二之蹂躙一云々又堪聲第十一談諧躙字の注に妄入二宮掖一曰レ躙徐曰律所謂闌入也通作レ闌漢成紀闌二入尚方掖門一應劭曰無二符傳一妄入レ宮曰レ闌西域傳闌出不レ禁史記注無二符傳一出入者皆謂二之闌一云々同闌字注に又與レ躙同史記無二符傳一出入謂二之闌一漢成帝紀闌二入尚方掖門一西域傳闌出不レ禁云々などは見ゆ

（廿一）椹　万葉に椹の字を「シモト」とよめるは若木の合字也品字箋齻聲第十五齻諧に椹石榴又謂二之椹榴一と見えて義別也

（廿二）布袋は彌勒の俗號　布袋の事七福神考にいへり品字箋鼻聲第十六鼻諧勒字注に彌勒將來持レ世佛名俗傳謂二之布袋和尚一と有を引べし

（廿三）昭穆　昭穆の事は公事根源國忌の條に昭祧穆祧とありて禮記王制大全の朱子の說を引て集釋に注したりされど品字箋の說をくはしとすべし品字箋敵聲第十八敵諧昭字の注に昭穆廟制本然之序次也孝經註云昭明穆敬也故昭南面穆北面也又決疑要錄云父南面曰レ昭昭明也子北面曰レ穆穆順也夫以二南北一言二昭穆一

者第就二大治對饗之昭穆一言初未レ及二惟南不レ北廟制一定之昭穆言一也善乎明卿陳氏之考二昭穆一云昭陽穆陰也陽左而陰右故左昭右穆也有二廟制竝列之昭穆一焉有二大治對饗之昭穆一焉外レ此而又有二世序分明之昭穆葬位昭然之昭穆祠廟秩然之昭穆錫爵無偏之昭穆與二族食不紊之昭穆一焉吳氏徵（悉）曰古者天子七廟周有二天下一增二文武世室一共九廟焉七廟者受命之主爲二太祖一謂二之太廟一居二六廟之中一左三而東屬レ陽爲レ昭右三而西屬レ陰爲レ穆其中之禰祖曾高爲二四親廟一高祖之父與二高祖之祖稍疎遠矣謂二之祧廟一祧超也親盡則超而遷レ之之謂也惟其中之功德非レ常者於二親盡當レ毀時一則別立二一廟一於二昭穆北廊之北一百世不レ毀與二太祖一同至二於廟制一皆南向各有二門堂寢室一而牆宇四周故七廟同二於都宮一則昭常在レ左穆常在レ右外自不レ失二其序一一世自爲二一廟一則昭不レ見レ穆穆不レ見レ昭內復各全二其尊一然門堂雖レ南而寢室復東故神主在二室中一又皆東向此七廟竝列之昭穆也至二歲終一大治將二各廟已未レ祧之諸神主一悉延二太廟寢室中一惟太祖東向自如爲二最尊之位一羣昭之入二乎此一者皆列二於北牖下一而南向羣穆之入二乎此一者皆列二於南牖下一而北向南向者取二其向一明故謂二之昭一北向者取二其深遠一故謂二之穆一蓋羣廟之列則左爲レ昭而右爲レ穆洽祭之位則北爲レ昭而南爲レ穆也此大洽共饗之昭穆也漢舊儀曰子爲レ昭孫爲レ穆昭西面穆東面而春秋傳復繼レ之曰太王之昭王季之穆文王之昭武王之穆此世序分明之昭穆也周官塚人掌二公墓之地一先王之葬居レ中繼レ世以二昭穆一爲二左右一此葬位昭然之昭穆也儀禮曰卒レ哭之明日以二其班祔一而或問レ之曰二世之主既祧則三世昭而四世穆五世昭而六世穆乎曰不レ然也昭者常昭而穆者常穆也蓋二世祧則四世遷二昭之北廟一六世祔二昭之南廟一矣三世祧則五世遷二穆之北廟一七世祔二穆之南廟一矣昭者祔則穆者不レ遷穆者祔則昭者不レ動此所二以祔必以レ班而子孫之列亦以レ爲序此祔位秩然之昭穆也禮又曰司士凡祭祀賜レ爵呼二昭穆一而進レ之又祭統凡賜レ爵昭爲レ一穆爲レ一昭與レ昭齒而穆不レ得レ入二其行一穆與レ穆齒而昭不レ得レ與二其列一此賜爵無偏之昭穆也大傳曰合族以食序以二昭穆一而坐位不レ紊此合族不紊之昭穆也生而賜レ爵合食死而爲レ葬爲レ祔皆以二世序一而不レ可レ易則廟中之昭穆可レ知矣云々按に此文中昭明穆敬也云々父南面曰レ昭昭明也子北面曰レ穆穆順也云々昭陽也穆陰也陽左而陰右故左昭右穆也云々東屬レ陽爲レ昭西屬レ陰爲レ穆云々南向昭北向穆云々など

ありて昭は貴穆これに次り昭は南面東面穆は北面西面也と知べし

(廿四)大の字に點を加て太に作る　太上天皇太皇大后太政大臣などの太の字に點あるは至極の義也品字箋太聲第二十太諧太字注に至極也大而無レ可二復加一レ之謂レ太如二太極太一太初太和之類古無二太字一今大字即古太字也中古於二大内一加二一點一作レ太後去レ一存レ一耳また大字注に古太字今作二大小大字一矣と見ゆ

頭書 玉篇廿一ノ二丁オ　字典正字通小補韻會十九ノ四十丁　龍龍手鑑六ノ十一丁ウ　大内裏考證三ノ上太極殿

(廿五)俵　俵の字延喜式をはじめ古書に多く見えて「タワラ」と訓り「タワラ」は束藁の略語にて藁を束て物を裹納るゆゑの名也されど「タワラ」は古語ともおもはれねば古くは俵の字を「ツト」「ニヘ」などゝや訓たりけん可レ考又俵の字は掾の誤なるべし品字箋貌聲第二十四貌諧俵字の注に俵悲廟切俵散也以二應レ得之物一而照レ人分散爲レ俵云々とあり苞苴類の義なし又掾同上又纏縛不レ開也俗言掾住不レ放云々とあれば掾俵同音相似の字にて掾に纏縛不レ開也といへるは今の俵の貌なり

頭書 延喜四時祭式廿二丁ウ棚一俵云々同雜式五丁オ凡公私運米五斗爲レ俵仍用二三

(廿六)瓠の音　神樂歌竈殿遊に「トヨヘツヒ御アソヒスラシ久方ノ天ノ河原ユヒサノコエスルヒサノコエスル」又「大原ヤセカキノ清水ヒサコモテ鶏ハ鳴トモアソヒテ行カン」此等ノヒサノコエハ瓠ヲ打鳴シテ歌舞スルコ也品字箋敲聲第十八韶諧瓠字注に瓠乃八音之一笙十三簧竽三十六簧皆列二管瓠内一施二簧管端一或作レ匏云々と見ゆ瓠の事體源抄杜氏通典文獻通考經籍纂詁など考合すべし

(廿七)碑　本朝立碑の事靈異記に少子部蜾蠃が碑文柱あり伊豫風土記に伊佐庭の碑あり令に立碑の說あり今現存のもの〻多胡建郡碑那須國造碑多賀城碑佛足石碑の類おほかり袖中抄に壺碑の事を載す品字箋推聲第十九推諧碑字注に初學記碑悲也勒二文其上一爲二往事一悲也說文碑竪立也徐曰碑木石之柱古宗廟立レ之以繫レ牲者因以二祖德一紀二述其上一遂開二後世作文勒石之端一耳小補云在昔封禪七十二家亦俱勒レ石俱未レ名レ碑即穆天子傳僅云紀二跡刻茲石上一亦未レ言レ碑惟禮祭義曰麗二于碑一君牽レ牲入是君之廟有レ碑也士昏義聘入レ門當レ碑揖是士大夫之廟有レ碑也又識二日晷一者

以レ碑爲レ架空二棺槨一者以レ碑繫レ繩則碑亦不二單指一石碣一故石柱木柱皆可レ稱レ碑而喪大記註云天子用二大木一爲レ碑謂二之豐碑一諸侯豎二兩木一謂二之相檀一是初學記之以レ悲訓レ碑但據二後世之勒文紀事一言而未レ原二古初之繫二牲宗廟一耳至レ近代之以二旌レ德志レ喜總謂二碑文一則於二悲也之訓一又大相剌謬矣云々豐碑の事陔餘叢考にも見ゆ其外所見擧盡すべからず

(廿八)算法の歸除　并算盤　算法に歸除の法あり品字箋推聲第十九推諧歸字注に歸除算法也云々同尤聲第四十三尤諧籌字注に算也古無二算子一止二十籌一焉故用レ祘爲二算字一祘从レ示每レ示縱横五籌以計算也又壽算亦云二壽籌一故增算謂二之添籌一又計更者爲二更籌一計酒者爲二酒籌一云々直指算法統宗二の卷に歸除凡二至レ九位數多者用レ此置レ物爲レ實以レ價或分者爲レ法先將二法首一對二實首一呼二九歸歌一或進或陪後將二法次位一對二所レ歸數一呼二九々數一除レ之用二乘法一還原歌曰惟有二歸除一法更奇將レ身歸了次除レ之有レ歸若是無二除數一起レ一還將二原數一施或遇レ本歸々不レ得撞歸之法莫レ敎レ遲若人識二得中間意一算學雖レ深可二盡知一云々按撞歸法とは見一無除作九一などいふ類也還將二原數一とは起一陪一などいふ類也古算器考にも歸除歌括の事見ゆ因云古は算器皆籌を用明の初に珠盤起りしよし古算器考にいへり丹鉛錄八の卷に算法の說あり

(廿九)倭　品字箋和聲第四呵諧倭字注に海東日本之人也俗呼二海外之諸蠻一皆曰レ倭本音猥詩倭々遲々云云同書推聲第十九推諧倭字注に倭遲回遠之貌小雅周道倭遲又謹貌又順貌又魯宣公名又音窩東海日本倭國唐東彝傳倭去二京師一萬四千里其俗多レ女少レ男小島五十餘皆自名レ國而臣二附之一云々按に舊唐書に倭奴國云云後漢書に倭面上國王師升云々魏志に倭人國云々などあれば倭は人を指ていへる名也日本紀纂疏三の卷に舊說吾邦之人初入レ漢漢人問謂汝國名如何吾答曰謂二吾國一耶漢人即取二吾字之初訓一命レ之曰レ倭云々といへる說はうけがたしまた倭順之貌故曰二倭面國一よし同書にあるもいかにぞやこは倭々音猥ともいふは笑に「アワヽ」又「ワイ〳〵」又「ワット笑ふ」などいひ「ワラフ」といふ語もと「ワ」といふに「ラヒ」「ラフ」の活語を添たるものと見ゆれば漢土の人いやしめて「ワ」と唉よしの稱にやそは匈奴も匈々として喧擾奴の義南蠻も

南方の蠻々（ニヨビサヘヨヘヘヲリゴエノヒト）缺舌の義なるをもおもひ合すべしさる音聲をもて名づくるは倭漢おなじくて「アヽ〳〵」と啼鳥を鵐々（アヽ）ときゝ「カリ〳〵」と啼鳥を雁といふ類おほかり

（卅）鋪（アヽ）井屋鋪風呂敷　宅地を屋敷（ヤシキ）といふ事平治物語吾妻鏡などより後の書には所見おほし又屋舗と書たるもあり品字箋素聲二十一素諧に舗小舍也市井有二店舗一郊野有二邸舗一云々また舗古舗字今作二平聲一舗陳也設也云々と見えて舗と敷と同義なればシキと訓べし舗の字を用るはあたれりといふべからずまた掛字掛書の類に一舗二舗などいふも「一シキ」「二シキ」の義也風呂敷（フロシキ）は振敷（フリシキ）の通音にて振は打（ウチ）とおなじければ打敷（ウチシキ）なるべし風をこめて火を熾す爐を風爐（フロ）といへばそれに出たる名ともおもはるれどさにはあらじ

頭書　盛衰記十ノ十七ウヤシキ　東寺文書抄五ノ十三丁オ十四丁オ　吾妻鏡には町屋舗とも有　東寺文書抄六ノ四十九丁ウには屋數譲與の文書あり　新撰犬筑波集春に「立かすむ里はふるやの屋しきにて」砂石集六ノ廿一丁オ屋數一所云々　同ウ同廿一丁ウ家地又屋地　東鏡一ノ廿七丁オ數地同廿八丁ウ數地同廿六ノ五丁オ屋數田畠云々又六丁オ甲斐國市河屋數等云々　砂石集七ノ卅二丁ウ家數タビテ云々　伊達日記中廿七丁ウ平屋數持云々　後院下廿八丁ウ　著聞廿ノ四丁オ

（卅一）部曲部類　井カキと云詞　日本紀に部曲などの字を「カキ」とよめり歌垣（ウタガキ）などの「カキ」も同語と見ゆ又「べ」ともメともよめり久米部（クメノベ）などの部也「メ」の通音にて「メ」は「ムレ」の約也群類（ムレタルタグヒ）をいふ語也品字箋素聲第二十一附諧部字注に分也屬也界也又總也統也廣韻署也近代名二六曹一爲二六部一者以二其各有一卿貳一（カミスケ）統二署諸曹之幾務一也又軍伍謂二之部曲一者其爲レ伍爲レ什若レ佰若レ仟曲折而上以聽二元戎之總提一也又卷帙謂二一部一者言二必有一總挈之宏綱一鼓吹（去聲）亦謂二之一部一者以二其有一整齊之法則一也と見ゆ

（卅二）井　磁器に井あり蓋あるを蓋物（フタモノ）といひ蓋なきを「ドンブリ」といへり「ドンブリ」は水中に物を投入るゝ音より名づけしにて字もさるよしにてかり用ひたる也品字箋罕聲第三十二罕諧に井音旦（タン）投二物井中一聲と見ゆ

（卅三）撤（テツス）　西宮記北山抄江家次第の類家記實錄に物を取除（ノクル）ことを撤（テツス）とあり品字箋頡聲第三十四頡諧撤字注に除去也經典倶作レ撤といへり

（卅四）亡命　井不命命者亡酒　品字箋聖聲第三十五令諧命字注に古命名同音左傳令名之大以從二盈數一史記作レ命漢張耳傳亡命遊二外黃一師古曰命者名也脫二名籍一逃匿也と見えたるにて亡命の義知べしまた命者亡命者不命者の三品史記淮南王傳に見ゆ漢書高五王傳に醉亡酒注師古曰避レ酒而逃亡云々こは酒席を逃る也

（卅五）道六神　俗に道六神といふは魍魎の類也品字箋講聲第卅八講諧魍字注に魍魎淮南子云狀如二三歲小兒一赤黑色赤目長耳美髮左傳註疏魍魎川澤之神也又國語孔子云山之怪曰二夔魍魎一水之怪曰二龍罔象一土之怪曰二羵羊一又世俗相傳其兎身長數丈坐二人樓簷一而雙足著レ地名二魍魎鬼一與二淮南子小兒之說一大不二相同一姑引二入之一以俟二博雅一亦作二蜩蛹一又作二罔蛹一又作二方良一と見えたるをおもふべし

（卅六）个枚　延喜式に一人二人を一枚と二枚とあり又古書に一个二个など書たるおほかり品字箋佐聲第四十一佐諧个字注に枚也一人曰二一个一左傳昭元年齊公孫竈卒晏子曰又弱二一个一焉又物數考工記匠人廟門容二大扃七个一註每个長三尺云々又箇字注に同上箇猶レ枚也木一株謂二之枚一竹一竿謂二之一箇一今物不レ曰二一枚一即曰二一箇一本レ此と有にて知べし

（卅七）錢の暮（ナヽ）　品字箋佐諧第四十一慚諧暮字注に又音漫錢背也今俗擲レ錢爲二博戲一以二其陰一爲レ暮安息國以レ銀爲レ錢錢如二其王面一錢之暮爲二夫人面一漢西域傳罽賓國錢文爲二騎馬一暮爲二人面一師古曰暮即幔也と見えたる錢暮は今俗錢の「ナメ」といふこれ也「ナメ」は波（ナヽ）の通音錢背波文あればなり錢暮の事漢書西域傳に二處見ゆ　頭書　史記大宛傳

（卅八）謳歌　吾妻鏡に評判風聞の事を謳歌と書たる處たほかり品字箋尤聲第四十三憂諧謳字注に謳歌皆吟聲但謳短而歌長耳孟子王豹處二於淇一而河西善謳綿駒處二於高唐一而齊右善歌又謳歌與二人吟頌聲一孟子謳歌者不レ謳二歌堯之子一而謳二歌舜一云々と見ゆ

（卅九）窻字の差別　品字箋皇聲第二十九綱諧窻字注に牕也釋名在レ牆曰レ牕在レ屋曰レ窻在レ屋天窻也また牕同レ上亦作二牕牕一俗作レ窓また囪同レ上又音葱竈突也また囪同レ囪虛以通レ明也總謂二之牕一又音葱竈突也與二囪字一不レ同囪同レ淵音寃云々天窻は今の引窻（ヒキマド）也竈突は「ヘッヒ」なり

（四十）帳　簿牒を帳といへること晉書などに見え政事要略におほく名目を載たり今世俗に大福帳金銀出入帳などもいへり品字箋創聲第三十創諧帳字注に登記之簿亦曰レ帳と見ゆ

(四十一)尙は上配の義尙ニ公主ニの類　公主を娶を尙といふは上配の義也品字箋創聲第三十仗諸尙字注に尊也娶ニ公主ニ謂ニ之尙ニ言帝王之女尊而尙レ之不ニ敢言レ娶也漢王吉傳註娶ニ天子之女ニ曰レ尙ニ公主ニ娶ニ諸侯之女ニ曰レ承ニ翁主ニ尙承皆卑下之名司馬相如傳卓王孫自以レ女尙ニ司馬長卿ニ晩帥古曰尙上配也義與レ尙ニ公主ニ同易泰二爻得レ尙ニ于中行ニ王弼以爲レ配と見ゆ今諸侯に姫君御入輿あれば尙して騎馬これを尊敬す養君にし奉る家はさもあらぬ事也

(四十二)明暗雙々集　明暗雙々集八卷ありて金石糸竹匏土革木と序せり革の卷華林宗珍公安骨碑に惟嵗寛永五祀歳次戊辰三月廿六日前大德澤庵叟書ニ于當山曹溪堵下ニと有金の卷は叶韵辨とて韵學の事を片假名に書著したり石の卷以下は詩文集也寛永の比の事跡を考るに便ある書也

(四十三)岩船撿挍山川撿挍　明暗雙々集石の卷に岩船撿挍城泉就レ予聊明ニ心事ニ雖レ瞎ニ却肉眼ニ心眼開一日求レ授レ號號曰ニ石田ニ短偶失ニ其義ニ云云々同書竹の卷に山川撿挍追悼(弟子岩船撿挍設ニ小齋ニ)云々これにて二撿挍の時代知べし三絃考に引合すべき說也

(四十四)久能山　同書土の卷に新久能良辨師之舊基也「久能轉レ舊作レ新時窮則變通今古來橫谷閑雲不レ傳底閣梨平素一伽梨」また舊久能「招提跡廢古家今庭畔荒蔓草日深暗記閣梨行道處風吹ニ森樹ニ誦ニ經音ニ

(四十五)牛籠天神　并梅若塚　同卷に武州牛籠之天神遷宮神體箱之銘「處々勸請處々同九重北闕八州東彎之一月映ニ衆水ニ信則神明無レ不レ通」また到ニ木母寺梅若丸墓ニ「木母花飛不レ止レ枝隅田川白野風悲栽猶有レ思塚頭樹楊柳條垂恨若レ絲」按に梅若塚は梅花無盡藏廻國雜記謠曲角田川などに見ゆ因に云牛天神は牛籠天神の略語にや私案抄に世田谷若材石天神あり石と牛と近ければ誤れる歟可レ考

(四十六)喜多見氏　同書革卷の華林宗珍公安骨碑に本朝四姓系其一者平勝忠即秩父次郎重忠裔也世ニ家ニ于武州江戸ニ故以ニ江戸ニ爲レ氏後遷ニ本州之喜多見郷ニ改以ニ喜多見ニ爲レ氏矣歸ニ依三寶ニ而請ニ戒名法號ニ乃曰ニ華林宗珍ニ爲ニ其人ニ也交而有レ信周而不レ比任レ運當レ義雖レ不レ學レ文而勝ニ學者ニ雖レ不レ識レ字而勝ニ識人ニ所謂彼雖レ曰レ未レ學吾必謂ニ之學ニ矣者乎難哉生ニ今天下時ニ而頗被レ信ニ今天下人ニ矣丁ニ此明時ニ下能通

レ上上能臨レ下是以爲ニ當家所ニ知已台命此下元和年中閲ニ河泉攝之郡事ニ兼ニ南北堺之庄務ニ爾來十ニ霜于茲ニ(戸版)矣獄無ニ訟者ニ街無ニ奸人ニ矧又家々豐年之笑乎仝々上世之民也僉曰惡聲不レ入レ耳芳名在ニ人言ニ寛永丙寅有レ詔補ニ任五位延令ニ刺ニ史若州ニ寔規ニ摸于子孫ニ者乎未レ幾而丁卯冬罹ニ痰水之患ニ而不レ起夫天下無ニ逆流水ニ人身無ニ逆上痰ニ雖レ然搏レ之激レ之者氣也過レ顙在レ山之水不レ治終以ニ臘月廿六日ニ盡ニ六旬又一命ニ云々(下略)惟嵗寛永五祀歳次戊辰三月廿六日前大德澤庵叟書ニ于當山曹溪堵下ニと見ゆ古今武家盛衰記卅の卷に喜多見若狹守勝重小田原落城の後御家人と成元和四年堺の政所幷攝河泉三ヶ國の奉行職に補せられ武州多摩郡喜多見村本知行五百石の上千石御加增あり寛文十二年正月十四日隱居して宗幽と號し嫡子五郎左衛門尉重政に家を譲る重政立身し二万石に增封せられ牧野備州と兩輪の如く出頭し時に逢たりしが親族坪内惣兵衛が所緣にて御勘氣を蒙り桑名城主松平越州のもとへ御預に成て家斷絶のよしくはしく記したり

(四十七)大猷院殿の御畫　明暗雙々集木の卷に家光公鷲繪の賛あり「石頭擧レ羽似レ求レ雌一隻鷲鷲如レ有レ思染不レ成レ乾墨池上筆端妙處自然委」云々

(四十八)老生小生先生諸生老先生　品字箋聲聲第四十八聲諸生字注に猶レ人也俗稱ニ先生ニ小生ニ猶ニ之老人小人ニ也又先生師也言其道德問學皆先レ我而生者也又先生父兄也論語有ニ酒食ニ先生饌又諸生猶レ言ニ衆學生ニ今呼ニ秀才ニ謂ニ之諸生ニ云々按に先生老先生の稱義野客叢書(二十六丁ウ)に見ゆ燕石雜誌に大人先生の差別を論じたり史記儒林傳注に云レ生者自レ漢已來儒者皆號レ生亦先生者省レ字呼レ之耳云々

(四十九)謄寫摸寫　品字箋聲聲第四十八靈諸謄字注に轉抄也依レ前別寫謂ニ之謄錄ニ云々謄寫は轉寫也見うつし也摸寫はしきうつし也臨寫もおなじ

(五十)撿子草稿　同書轉聲第四十九轉諸撿字注に今俗謂ニ文書藁ニ爲ニ撿子ニ云々按に名物六帖にも引たりき

(五十一)寔の字　俗最上の最字を寔に作り古書にもおほく見ゆされど最の古文は歎なるよし字典に載す品字箋註聲第五十序諸寔字注に積也亦與レ聚通と有て別也

(五十二)鹵簿　品字箋譜聲第五十五譜諸鹵字注に天

子之法從謂ニ之鹵簿一者鹵盾簿簿籍也大駕出則羽林軍士以ニ甲盾一居レ外爲ニ前導一其間之一應兵仗數目皆記ニ此中一故名ニ鹵簿一皇后太子皆有レ之云々按に三代實錄に鹵簿を「ミユキ」と訓たり頭書晉書夏統傳六丁ウ

（**五十三**）花の隱逸花の富貴花の君子　品字箋譜聲第五十五譜諧牡字の注に周茂叔愛蓮說末云菊花之隱逸者也牡丹花之富貴者也蓮花之君子者也と見ゆ

（**五十四**）士進士處士博士居士　品字箋字聲第五十六字諧士字注に儒者之嘉稱也正義士之爲レ言事也謂ニ其能精ニ道義一希ニ聖賢一守レ先待レ後以修レ己化レ民爲レ事也故其爲レ字从レ十从レ一一數之始十數之終以若人者聞レ一以知レ十原始以要終身雖レ寄ニ于農工商賈之先一而德已次ニ于公卿大夫之後一今時之泥蟠蠖屈他日之爲レ雨爲レ霖有ニ二十一乎云々士乃官之總名故詩云濟濟多士也云々大樂正論造士之秀者升ニ之司馬一曰ニ進士一云々又有ニ道德一而不レ仕者爲ニ處士一超ニ出流品一而不ニ多見一者爲ニ高士一又博士庶吉士學士大學士皆官名又黃冠謂ニ之道士羽士一又緇衣謂ニ之開士一又在レ家而誠心精進者謂ニ之居士一云々按に士の字處士の字の義學士のために快說といふべし頭書居士佛祖統紀四十六ノ廿三丁オ

（**五十五**）臣僕の字義　君臣の君はすべて主君に稱す臣は公に仕る人の稱也家臣陪臣をたゞ臣とはいふまじき也僕といふべし品字箋字聲第五十六字諧仕字注に禮運仕ニ于公一曰レ臣仕レ家曰レ僕とあるを思ふべし臣は「オミ」とも「ヤツコ」とも訓僕は和名抄に「ツブチ」と訓たりまた古書の訓に「ヤツコ」とよめるもおほし

（**五十六**）權勢權柄權執　品字箋字聲第五十六勢諧勢字注に說文盛力權也正義力有レ所レ乘謂ニ之勢一孟子齊人有レ言曰雖レ有ニ智慧一不レ如レ乘レ勢云々莊子天運篇に親權者不レ能レ與ニ人柄一云々字典に攝官曰レ權鼠璞權字唐始用レ之韓愈權ニ知國子博士一三歲爲レ眞云々又柄權也左傳襄二十三年既有ニ利權一又執ニ民柄一云々權勢權柄執權などの字義これらにて知べし權謀の字は左傳宣十二年の杜注を考べし

（**五十七**）世　世といふは人間一生涯にいひ竹の一節の間葦の一節の間などにもいへり又夫婦中の事を伊勢物語に世といひ好色心の付を「よづきてとも」「よ心あるおうな」などもいへりよとは間の義也寄除呼具などの與もおなじく寄は間あるものゝ附也除は

間をはなれて除る也呼は間を隔たるを呼也具は二ツあるものをとり合せて具也品字箋字聲第五十六勢諧世字注に一世三十年也論語必世後仁注三十年爲ニ一世一又閱ニ歷一生一謂ニ之一世一又父子相代亦謂レ世周紀ト世三十ト年八百又子張問十世注王者易レ姓受レ命爲ニ一世一又人生斯所謂ニ之人世一人世即莊子之所謂人間世也人在ニ世間一而無レ所レ逃願下處ニ乎人世一之間者何如ゝ耳と見ゆ史記孝文本紀の論贊に太史公曰孔子言必世然後仁注に孔安國曰三十年曰レ世如有ニ受レ命王者一三十年仁政乃成云々按此文は論語を引たる也

（**五十八**）法螺の貝　法螺の貝は和語めきたる名なれど字音也文獻通考百卅九樂考八音之外條に梵貝　玉螺貝之爲レ物其大可レ容ニ數升一蠡之大者也南蠻之國取而吹レ之所ニ以節一レ樂也今之梵樂用レ之以和ニ銅鈸一釋氏所謂法螺赤土國吹レ螺以迎ニ隋使一是也梁武之樂有ニ童子伎倚歌梵貝一と見ゆ頭書愚得隨筆附考下に軍中ニホラヲ用ルハ盛衰記ニ平家物語ナドヨリ古クハ見エズ

（**五十九**）組（クミ）　戲（タハブレ）　今世輕業に繩渡の戲あり文獻通考百四十七の卷樂考散樂百戲の條に組戲漢世以ニ大絲繩一繫ニ兩柱頭間一相去數丈兩倡對舞行ニ於繩上一對面道逢肩相切而不レ傾張衡所謂跳レ丸劒レ之揮霍走ニ索上一而相逢是也梁三朝伎謂ニ之高組一或曰ニ戲繩一今謂ニ之踏索一焉云々賢愚因緣經十三卷十五婆世蹟緣品に是時國王集ニ諸那羅一上レ幢投レ窻空中索走如レ是種々衆多戲事時長者子亦往ニ王邊一次應レ現レ技上レ索而走索走既竟云々

松屋筆記卷之五十八

東都　小山田將曹平與清稿

(一)青首の鳧　俗に鳧(カモ)の雄を青首(ランドリ アラクビ)といへり史記楚世家に三王以戈(イル)道德一五霸以戈二戰國一故秦魏燕趙者皺脇也齊魯韓衞者青首也鄒費郯邳者羅鷖也云々注に索隱曰小鳧有二青首者一云々此青首は今の俗語の出處也万葉十二十九丁ウに青頭鷄ヲ「カモ」とよめり頭書戰國策五楚語五十一丁(朱)に齊魯韓衞者青首也云々武家調味故實に鴨の男鳥をば惣名に青くびといふ但女鳥をばたゞかもの鳥といふ也云々

(二)共主　史記楚世家に夫弒二共主一臣二世君一大國不レ親云々索隱曰共主世君俱是周自謂也共主言(ニ)周爲(ニ)天下共所二宗主一也世君言周室代々君二於天下一云々按に共主は足利將軍の如く戰國は武田上杉織田北條毛利尼子などの類にたとふべし

(三)家督　史記越世家に陶朱公長男曰レ家有二長子一曰二家督一云々今の世家督といふはこれを出處とす頭書下學集下卷二丁左態藝門に家督一家之惣領也陶朱公長子曰二家督一也部督率也云々

(四)丈と稱す　今俗人を稱呼して某丈といふは丈人の略也女子などにいふは誤也史記孔子世家注に包氏曰丈人老人と見ゆ論語の注を引べし刺客傳注を按に丈人は嫗の稱也男には丈夫といふ女にいふもさること也

(五)家老　史記魯周公世家に季平子怒囚二臧氏老一注に服虔曰老臧氏家之大臣云々衞康叔世家に孔氏之老欒甯問之注に服虔曰家臣稱レ老問二其姓名一云々今世諸家の家老といへる名目の出處也頭書晏子三ノ上八丁ウ同十六丁オニ家老ノ字面見ユ說苑五ノ四丁ウ貴德篇に晏子飮二景公酒一令二器必新一家老曰財不レ足請斂二於民一云々家語九ノ廿二丁ウ

(六)女坂　史記封禪書に從二陰道一禪二於梁父一云々陰道は今の神山佛峰の女坂におなじ

(七)趙武靈王胡服を用んとす　史記趙世家に武靈王胡服して周の禮を捨んとせし事あり秦始皇書を焚儒を坑にして聖人の道を絶んとすいづれも左袒の天地自然の道より別に己が道を立んとおもへるもの也聖人の道は聖人の私道也天地の大なるより見れば一小道耳天下の四大教は天主教佛教儒教回々教也

(八)雷の大鼓　雷の圖に大鼓を畫くは王充論衡を據とすれど史記樂書に鼓レ之以二雷霆一と見え佛名に天鼓雷音如來あれば論衡に限べからず

(九)丸墨　井圖炭(スミ)鉢源抄十末　唐書百十一の卷王方翼傳に燎レ松丸レ墨爲二富家一云々丸墨は墨を製る事也今の「タドン」にはあらず湧幢小品にこれを松烟墨の始といへり頭書延喜式に炭和炭の二品あり今の堅炭と鍛冶炭のごとし鍛冶炭は松の炭にて消炭の類也晉書羊琇傳に屑レ炭作二獸形一トアリ同孫登傳に作レ炭人トアルハ炭燒ノ丁也

(十)氷柱雪車　同百七十六の卷劉昈傳に作二氷柱雪車一詩に出二盧仝孟郊右一云々氷柱は氷て柱のごときにいへり雪車は雪の飛廻る貌をいひたる也

(十一)男子不レ死二於婦人手一　武家の候家臨終の時は必婦人の手を離れて奥より出て近習の士看病す唐書九十九李大亮傳に吾聞男子不レ死二於婦人手一命屛二左右一言終卒と見ゆこれ穀梁傳三の卷廿五丁を出處とす(リウビンムシロ)

(十二)龍賓薤　雅亮裝束抄その外古書に龍賓薤あり唐書卅七地理志に龍鬚席ありこれ同物なるべし龍鬚は莞(ヰ)の類也格知鏡原六十八の卷に委し頭書中華古今注下ノ七丁ウ

(十三)祝髮　祝髮は薙髮也唐書七十六則天傳に使二祝髮爲一浮屠一(ウタヒ)とあり皇國の書には所見いとおほかり

(十四)婚禮に謠曲をうたふは非レ禮　晉書禮志下に升平八年臺符問迎二皇后一大駕應レ作二鼓吹一不博士胡訥議二臨レ軒儀一注闕無レ施二安鼓吹一處所ヒ又無二擧レ麾鳴レ鐘之條一太常王彪之以爲婚禮不レ樂鼓吹亦樂之惣名云々と見ゆ婚姻の席にて謠をうたふも樂の類なればかしこの禮には叶はず

(十五)長人鹿野武左衞門井蘭學　文政十一年の夏肥後國隈本より長人鹿野武左衞門といふもの江戸に來る身長七尺五寸ありといへり又近年蘭學西洋學流行して彼土の器物をもてはやす輩おほかり今年秋九州中國大風波にて人民家船の損失擧盡すべからず多に成て越後國大地震し五千餘人死亡すといへり蘭學者高橋某不軌を計て禁獄せらる晉書五行志上を按に長人の出るも胡物を玩ぶもよからぬ事のよしかしこには云りされど皇國は神明守護の國なれば憂にたらず

(十六)兩口の銚子片口銚子　兩口の銚子の事は運歩色葉集に大江山酒顚對治の故事を記せり晉書元帝紀に遂爲二一檐一共二一口一以貯レ酒焉帝先飮二佳者一而以二毒酒一鴆二其將牛金一と見えたる同日の談也頭書片口銚子年中定例記三丁ウ宗五大紳子上廿四丁オウ

(十七)四文錢小錢　今の四文錢及小錢の名目ははやく晉書廿六の卷食貨志に元帝過レ江用二孫氏舊錢一輕重雜行大者謂二之比輪一中者謂二之四文一吳興沈充又鑄二小錢一謂二之沈郎錢一と見ゆ頭書古今泉貨鑑十五の卷寛永四文錢明和五戊子年

五月三日武州豊井戸村ニ於テ鑄同六月十一日ヨリ通用ス一ヲ以テ寛永小錢ノ四ニ換ル云々宋洪邁ガ泉志十三ノ卷ニ水波紋錢順短曰太平四文錢背有ニ水波紋一者三種並徑一寸重六銖文曰ニ太平百錢一大銖類ニ前條太平四文錢一但製作微爲ニ環狀一而背有ニ水波文一耳今世往々有レ併ニ天下一若ニ炊婦掃ニ除竈上之不淨一不レ足レ爲レ難也云々と見ゆ炊は「カシク」と訓む雅言には「カシキメ」といふべし「カシク」は俗に「フカス」といふこれ也甑より氣を吹出さしむる心蒸に對たる語也蒸は氣を吹せざる也

（十八）さばの飯　俗に飯のはつほをとるをさばのめしといふは佛家より出し事にて禁秘抄にも御さばをとること有鎌倉年中行事に鬼飲とあるは毒味をするにいへり史記田單傳に令ニ城中人食必祭ニ其先祖於庭一飛鳥悉翔ニ舞城中一下食といへるは今法師のさばの飯を鳥にあたふるがごとし

（十九）紹介　井肝煮　及取次者　今せわをやくといふ語やゝ古くはきもいるといへり貞德文集に肝煮と見ゆ史記魯仲連傳に平原君曰勝請爲ニ紹介一而見ニ之於先生一注に郭璞曰紹介相佑助者索隱曰紹介猶ニ媒介一也且禮賓至必因レ介以傳レ辭紹繼也介不ニ一人一故禮云紹介而傳レ命云々郭璞が注によれば紹介の字「キモイリ」とも「セワヤキ」とも訓べし索隱に據れば「トリツギ」と訓べし

（廿）炊婦　世に飯燒女といふは炊婦と書べし史記李斯傳に夫以ニ秦之彊大王之賢一由ニ竈上ヲ騷除一足ヲ以滅ニ諸侯一成ニ帝業一爲ニ天下一統一注に索隱曰言秦欲の義なれど其物を運ぶは人馬の力を用ることおなじきゆゑに書る也さて保食神は五穀の神なれば稻を登する神の義にて稻登といひ荷擔の物を仁とも延ては乃利ともいふより稻荷の字をば用し也弘法大師東寺の門前にて稻を荷たる翁に逢しより稻荷大明神と勸請せるよしの說は稻荷の字に就て附會せる也けり又万葉の荷前を荷先にて始て奉る荷物といふも誤也惣テ中ニ揚テ行ヶ物を荷ともノリともいふ馬にノル舟にノルかごニノルなども中に居て行ヶ事也

（廿四）民井蟹の語意　民は多美と訓む田部の義にて田を造る群生也美は女の通音女は部に通ふ海人を阿末と訓も阿は宇那の略末は女と通ひて部也されば海部とも書たる也さて「べ」とも「メ」ともいふは「へ」の通音「メ」を美に通はしいふ詞也「べ」も「ミ」も「メ」も共に群衆の義にて群の約女也故に民は田部海人は海部なり委は余が姓氏錄の三宅首の條の注にいひたるを見べし

（廿五）コミアグル井滂五味など云詞　俗に洪水の逆流して水門水口に入を「コミアゲ」と云又人身の嘔逆などにもいへり「コミ」は「コメ」也今まではさもな

き所に隱入る義也仁德紀十一年十月の條に將レ防ニ北河之滂一以築ニ茨田堤一と見ゆ應神紀二年に滂田皇女云云安閑紀元年七月に此田者天皇難レ潤水潦易レ浸費レ功極多收獲甚少云々旱魃に乾水し小雨になど浸滂の字を訓るにてもしるべし和訓栞古のに部耗米を「こみ」といふこみ米ともいへり類聚國史に今或所司斛斗之外更加ニ耗分一糯則一俵二升已上穀亦斛別五升已上と見ゆといへるコミ米は耗分に餘計を込納る事にて籠の義なれば亦同じ俗に塵芥粉雜の物を五味といひ五味取五味溜五味拂などいふ名ありこれは同語異義にて万葉集七の卷十一に「氏人之譬乃足白君在者今齒與良増木積不成友」同十一の卷十九の卷廿の卷などにも寄子積と訓て塵芥細屑の物の水汀に寄をいへり粉集の義にて細粉小屑の寄集也木積と書るは借字廿の卷なるは假名に許都美と書たり許都美の許を久に通はし美を省て久都といふ屑の字を用るはこれ也都を省て許美ともいふを今俗言に上を濁て五味といへり又庭の植込あり重編應仁記七廿二丁ウ廿五丁オに雙ノ岡ヲ木密トシテと有增補下學集木密見ゆ

（廿六）東常胤が東と稱號せるよし井下總國東の庄

千葉常胤が稱號を東と稱し下總國東庄を領せるよしは鎌倉大草紙に見ゆこは印東庄にて印幡郡の東を印東西を印西といふ印東郡の内の庄也佐倉風土記に藥師寺在ニ船形一安ニ行基所一レ刻藥師像一不レ詳ニ開基年時一有レ鐘銘曰下總州印東庄八代鄉船形藥師寺應長元辛亥年十一月願僧良圓敬白大工沙彌善性とあり此寺の側に成就院といふ寺ありと傳へいへり東鑑に下總國印東庄成就寺領と云々回國雜記の稻穗別當は此藥師寺にや此寺村の文書に別當とのみしるしたり頭書東鏡に印東氏アリ又東氏モアリ千葉ノ一族ニテ印東郡ニ住タレバ印東次郎常義ナドイヒ又同族ニテ東トノミイヘルモワカチテ知ラシメンタメノ稱號ナルベシ

（廿七）喜笠（キアク）元年　元親記上卷一宮建立之事の條に抑此一宮ト申ハ喜笠元年三月卯日御影向正一位一宮高賀茂大明神ト被レ現一國一社ノ最上タリ一年中ニ七十五祭有リ其內七月三日ヲ本祭禮トス云々是は土佐國の一宮也一宮記に高賀茂大明神咮耜託彥根也云々神名帳頭注に土佐風土記曰土佐郡郡家西去四里有ニ土佐高賀茂社一其神名爲ニ一言主尊一云々神階記に貞觀元年正月廿三日從五位上云々神社啓蒙四の卷にも見ゆこれ郡佐神社也元親記上中下三卷あり寬永八年五月十九日長曾我部元親卅三回忌の節高嶋孫右衛門尉正重撰也

（廿八）相撲人小嶋源藏　元親記上卷相撲之事の條に元親卿相撲ノ數奇ニテ毎年國分十七夜ノ會ナドニ近郡ノ取手共ヲヨセトラセテ見物シ給其比泉州小嶋ニ源藏トテ天下一ノ相撲取有リ修行ニ諸國ヲ廻トイヘドモ彼者ノ手ニクル者無レ之トイヘリ云々長六尺二三寸モ可レ有云々元親の家人久万（クマ）兵庫ッマ取ヲシテコレニ勝タルよし見ゆ

（廿九）吸物并日本三八幡　同卷夢合之事の條に八幡宮ノ神主左近ニ夢ヲ合サセ云々元親卿尤ト喜悅シ玉ヒテ是併左近口ヨリ出ルトハ覺エズ只八幡大菩薩ノ御託宣ト存ル也先祝申サントテ吸物ヲ出シ左近盃ヲ初メ候ヘト宣フ云々神主左近申云々八幡ト云ハ本地彌陀如來衆生濟度ノ御方便深クシテ人民ノ誓ヲ不ニ捨給一依レ之現ニ軍神一猶武勇ノ士ヲ守給フ殊ニ當社ハ影向ノ神日本三八幡ノ一社タリ如レ斯故ニ別當八幡ト棟札ニモ顯シ申云々

（卅）手習講并碁馬術兵法　同書中卷元親卿息達其外家中侍ノ子共ニ藝能被ニ仕付一事の條に先城廻ノ子共ヲ聚メ岡豐ニテ手習講ヲサセ文學ナドサセラルヽ師匠ハ吸江之眞藏主忍藏主ト云僧云々碁ハ大平捨牛ト云者在京シテ先々碁ニ成テ下ル馬ハ產方休少ト云師ヲスル上手有又信親兵法之事鎗長刀ハ大平市郎右衛門トテ眞道流ノ師ナリ太刀ハ須藤流又伊藤武右衛門トテ精參流相傳之將云々按に信親は元親の男也兵法とは劒術をいへる也頭書劒術ヲ兵法ト云ヿ平治物語源平盛衰記太平記義經記ナド所見おほし甲陽軍鑑二ノ廿六丁オ同六ノ十一丁オ後太平記十九ノ十丁オ兵法つかひ武具要說下一丁オウ二丁オ宗五大神子下十四丁ウ

（卅一）眞虫　蝎ヲ「マムシ」といふ和語妙法寺記錄に見ゆ元親記中卷一條殿被レ流條に懷中ノ眞虫（マムシ）トハ是也とあり今俗言に蜘（ヒル）を懷にいれたるやうといふこれ也

（卅二）辨當　いにしへの破子（ワリゴ）を後に辨當（ベンタウ）といへり元親記中卷仙石權兵衛と合戰の條に虎丸城ノ麓ニ父子辨當ヲ遣テ居給フとあり赤鳥隨筆に續武家閑談云水村彌十郎高敦述信長ノ時迄辨當ト云物ナカリシニ安土ニ於テ始テ出來ス芋頭ホドノ內ニ諸道具納ルトハ僻事ナラントテ信ゼヌ者多カリキ云々按に宗二か節用集に辨當あれば室町の代の製にて信長よりも以前の物也常山紀談二に信長の時今の辨當といふ物安土より始れり其始には小芋ほどの中にいかでいろ〳〵の物入られんとて人信ぜざりきといへり云々頭書面桶辨當同物也メンツノコト筆記三ノ八ニ見エ四庵厨家什門に食具ベントウハ面桶也面桶は飯桶也名物六帖器財箋云また仮桶イヒビツ又メシツギ鄉談云々

（卅三）ぬたをこく　俗言に「ノタコク者」「ノタ〳〵スル」「ノタレフス」などいふは物の埒明ぬ事也蛇の「ノタル」又「ノサ〳〵」「ノソ〳〵ノソウラク者」などもいふめり元親記下卷大佛殿御材木事の條に內藏助ハ黑茶ノ筒服ヲ著トノ口ノ笠ヲキテ仗ヲツキ川中ノ木ノ上ニ居テ人數ヲ遣付テ居タリ左京進ハ頭巾一ッニテイカニモ輕ゲニ出立弓ヲ持テ川洲ニ被レ居タリ扨左京進今日何者ニテモアレヌタヲコクモノアラバ一矢モッテ參候ズルト河原ヲ走廻ル云々按に此ヌタコクも同語也堀川百首の歌に「しゝのぬたうつ」とよめるに引注べしのたあへぬたあへ料理書に見ゆ頭書ヌタメノ事軍器考鮫怒濤（日本紀）節用集運歩色葉淳田之門（紀）ノタアヘヌタアヘトモ甲陽軍鑑七ノ十九丁オ猪にはぬたと云云々高忠聞書上十六丁ウに鹿の角にてつくりて三方にぬたを殘す云云ぬたあへ三議一統下五十丁オ今川大神子上十一丁オ

（卅四）槍楚　槍楚は倭名抄造作具部に漢語抄云槍楚比曾（ヒソ）俗用ニ槍曾（ヒソ）二字一今按楚字是也と見ゆ延喜式其外

古書におほく見えて檜木の小割也楚ハ楚割ノ楚におなじく割の心也麻を曾といふも又割たるよし也「眞木裂檜のつまで」など万葉などの古歌によめり元親記下卷鯨進上被レ申事の條に檜ソヲ簾ニアミ卷包テ漕登スルとありて此比までもその名存せりこは檜角の事と聞ゆ頭書木曾路名所圖會三ノ四十二丁ウ三浦山の條に葉細にして青白く直立して竹の如し號て裏白樅といふ俗これを白比曾と名づく云々下學集下卷廿四丁右草木門に檜楚ヒソ日本俗呼二細木一曰二檜楚一楚作レ曾非也東寺文書抄九ノ九丁ガ

(卅五)テンヤ物　今俗賣屋にて買たる物を「テンヤモノ」といへり元親記下卷聚樂ニテ書院申之事の條に數寄屋ノ搆御用意ハ宗益馳走致ス御相伴ハ富田將監稻葉兵庫頭藥院也此小路地ニ御茶屋ヲ立テ女二人店屋ノ者ニ出立セ置タリ扨ソコヲ御カケ通被レ成候所ヲ此女出合テチト茶屋へ御腰ヲ懸ラレ候へ殿樣ト申イヤ急候ト宣テ御通被レ成候所ヲ是非ト申シイダキ入申餅オコシ召レ候へト上ル三人ノ衆モ同前ニ餅一ツ宛デンガク一串ヅヽ參リ御茶オコシ召ス餅ノ錢ヲ被レ下候ト申ケレバ御腰ノ邊ヨリ金錢一文被レ下タリ今一人ノ女デンガクノ主ハ此役ニテ御座候是非被レ下候ヘトニ人シテ一文ヅヽコヒトリタリ三人ノ衆ハ此主錢過分ノ代也トテ錢ヲ出サズ通ントセラルヽ

處ヲムリニ取付錢トラデハ通シ申間敷ト申其時三人惡錢一文ヅヽ被レ出タリ是ハ都ニテ見馴ヌ錢也扨々田舍人カ比興モノ也此錢替テクレヨトムシリ付三人ソコヲニグル太閤樣ハ見歸リ玉ヒテヤレニガスナニガスナト宣テ大笑シテ數寄屋へ御入被レ成シ也云々今いふテンヤ物は店屋物也茶屋は宗牧東國紀行に見ゆデンガクは犬筑波集に出たり

(卅六)あたけ丸の船　元親記下卷高麗陣の條に毛利殿ノ日本丸九鬼大隅守ノ大アタケ元親ノ大黑丸此三艘ハ山ノ如シと云々あたけ丸の事江戸砂子江戸志などにいひたるを考合すべし武家盛衰記廿九安宅丸アタケとは大船の名也甲陽軍鑑八卷十七品四丁甲州海賊衆の事をいへる條に小濱ゝあたけ一艘小舟十五艘と有頭書北條五代記七ノ十丁オ後太平記四十一ノ廿三丁オ東海道名所記一ノ八丁オ

(卅七)「だに」「さへ」の通ふ例　万葉二の卷廿三丁ウ「明日香川明日谷一云將見等念八方」云々此谷一に左倍とあるにて通ふ例知べし「だに」「だも」「でも」と轉りし語也左倍は副にて物のそふ心に用る詞なれど又輕く「だに」の心に用たるも有りと知べし

(卅八)までと云詞　「まで」は俗言に「ほど」又は「ばかり」など云心也万葉二の卷廿四丁ウ「雷之聲登聞麻低」云云此外おほし佛足石歌にもおなじ心に用て「ばかり」「ほど」などいふ義也同丁ウにも見ゆ可レ考

(卅九)坂迎井送坂迎　坂迎の事は余已に擁書漫筆にいへり元親記中卷讃州香川殿降參緣邊取組之事の條に國分ノ表ニ茶屋ヲ立送坂迎有リ云々同下卷初而上洛之事の條に八幡ニテ御旦那上ノ坊御坂迎アリ又山崎ニテ與右衞門殿御坂迎又掛迄今井宗久父子御迎ニ被レ參東寺ノ南門ニテ京衆御坂迎致スト云々按に送坂迎といふ事もありし也頭書俗說辨遺編

(四十)ばけ井ほき道　「ほきぢ」「ばけ」などいふ事相馬日記にいひたりき元親記上卷阿州大西覺用降參の條に阿波境ニ上名ノ橋トテ大木一本ニ割ヲ付打渡タル橋アリ其ヲ過テ西宇ノホケトテ三里ノ大難所有リ云々同中卷一條殿ヲ被レ流條に豫州ホケ津ト云所へ船ニテ送リ捨ラレシ也云々

(四十一)留守をつかふ　俗に客に僞て他行のよしを陳を留守を仕といへり史記淮南王傳に召レ相相至內史以レ出爲レ解云々此以レ出爲レ解ハ俗ニ出マシテ留守デゴザルと云に同じ

(四十二)六道錢　俗死人に錢六文を送りて六道錢といふ古は六文に限る事ならず史記酷吏傳に會下人有上レ盜二發孝文園瘞錢一注に如淳曰瘞二埋錢於園陵一以送レ死とあり地獄餓鬼畜生修羅人間天道に引あてゝ六文には佛者の定たるものと見ゆ又は六道能化の六地藏の賽錢の爲の心にても有べし頭書名物六帖器財箋三喪葬祭祀部に庾錢ロクドウセン元耐得翁就日錢唐王朝傳曰漢已來鄉省皆有二庾錢一是喪葬之楮紙錢起二於漢世之庾錢一也家禮儀節晁氏曰漢以來里俗稱以レ紙寓二衣錢一云々楮錢ロクドウセン古今原始周世宗發引之日金銀錢寶楮寓以レ彩而楮錢大如二盞口一其印文黃曰二泉臺上寶一白曰二冥遊亞寶一據レ此則金銀楮錢亦始二于五代一也云々

(四十三)榮名　人は榮名をもて本意とす史記游俠傳に太史公曰諺曰人貌二榮名一豈有レ既乎注に徐廣曰人以二顏狀一爲レ貌者則貌有二衰落一矣唯用二榮名一爲二飾表一則稱譽無レ極也と見ゆ同書同傳に竊レ鉤者誅竊レ國者侯侯之門仁義存非二虛言一也今抱レ學或抱二咫尺之義一久孤二於世一豈若二卑レ論儕レ俗與レ世沈浮而取二榮名一哉ともいへり聖人不レ凝二滯於物一而能與レ世推移宜哉逆取順守不レ無レ謂也

(四十四)磬折井揖　格式の書及西宮北山江次第其外家記などの公事を記せる所に磬折の字おほく見ゆ史記滑稽傳補に西門豹簪レ筆磬折嚮レ河立待良久云々注

に正義曰簪ㇾ筆謂ㇾ以ㇾ毛裝ニ簪頭一長五寸插在ニ冠前一爲ㇾ華言插ㇾ筆備ㇾ禮也磬折謂ㇾ曲ㇾ體揖ㇾ之若ニ石磬之形一曲折ㇾ也磬一片黑石凡十二片樹在ニ虛上一擊ㇾ之其形皆中曲垂ニ兩頭一言ニ人腰側傾一也とあるにて其義知べし釋氏要覽中三丁 に揖書云揖如ニ磬折一云々 筆記頭書

六十一卷十一段卅五
卷ノ廿三段作法故實

(四十五)屏語 人を物のかげに引て私語(サヽヤク)をば屏語といふべし史記日者傳補に宋忠見ニ賈誼於殿門外一乃相引屏語とあり

(四十六)人は性に据て學べき事幷好(スキ)こそ物の上手なれ 史記日者傳補に非ニ其地一樹ㇾ之不ㇾ生非ニ其意一敎ㇾ之不ㇾ成夫家之敎ニ子孫一當ㇾ視ニ其所ニ以好一好舍苟生活之道因而成之云々と見ゆ「好(スキ)こそ物の上手なれ」といふ俗語の出處ともいふべし

松屋筆記卷之五十九

東都平與清稿

(一)賀茂の御阿禮(ミアレ) 慶籙中より反古とり出たるに誰が說なりけん賀茂の御阿禮(ミアレ)の說あるを左に書つく賀茂みあれの事愚考有ㇾ之候哉と清太夫へ御尋に付清太夫あらまし御答申上候處猶御不審被ニ仰聞一御尤に存候先ッこれを「ミアラ」とよむべくにやと存候は禮の字は「レ」の假名とのみ世人心得居候へどもラの假名に用し例万葉中に所々に見え候是は漢音「レイ」なれば「レ」の假名はもとよりにて又吳音は「ライ」なれば「ラ」の假名にも用べき也さるは阿ら禮松原つぶ禮石さゞ禮石さゞ禮荻の類の禮はみな「ラ」とよむべき也その訓證万葉四卷考別記に悉く擧おけりさるを禮を「レ」とのみ訓來しより「レ」と「ラ」の訓混じたる事數多有て和名抄にも混じたる事見えたりしからば是は「みあら」といふべきを中古唱誤りしものなるべしさて荒妙和妙を細麁の心とのみ思ふはまだしき也公事に荒和祓といふは貞觀儀式に荒世和世の役

あり荒世和世の世は長(タケ)いふ言也日本紀歌に「いくみだけよだけ」とあるよも竹節の間の長(タケ)いふなり然るは天皇の服御もて大御身の長を量りて祓やらふ事とおぼゆる也この荒和は親疎の心にて和は大御身に親しき服御をいひ「あら」は疎の心にて上のきぬをいふなるべし疎を「あら」といふ證は万葉に「つくし舟いまだも來ねはかねてより あらふる君を見るかかなしさ」とあるは我を疎(ウト)ぶるをいふ也また祝詞に荒振神等とあるも天皇に疎奉る神等をいふ也和は和魂の和にて親き心なることは神功紀に見えたる荒魂和魂の心にて知べししからば祝詞に見ゆる荒妙和妙も細麁の心にはあらで神の服御の上下(ウヘシタ)をいふなるべし是等の事は祝詞追考にいへるを見給へかし延喜式賀茂祭の條に下社上社 松尾社別ニ阿禮 料五色帛各一六匹下社二匹盛ニ阿禮一料宮八合下社三合上社五上社四匹盛ニ阿禮一料宮八合合并方一尺六寸盛ニ阿禮一料明櫃四合已上官物 又園韓神三座祭料荒宮八合又鎭魂祭龍宮一合又御禊條ニ龍御服二具料布二段五色薄絁云々はじめ「みあれ」の「あら」は荒妙和妙の「あら」にて神の服御の上著(ウハギ)を奉ることならんと思ひしはあらざりけり右に所ㇾ引の龍宮龍御服また三代實錄宣命に賀茂齋院を奉らるゝ事を阿禮鳥(アレトリ)等咩止(メト)奉給といふことあり是等を合せ按に「あら」は明白清淨の言にて明(アキラ)の略語也しからば是は吾ガ神宮にて明衣といふものにて朝廷にては齋服といひ賀茂にては「みあら」といふなるべし齋院を「アラヲトメ」といふをもて「あら」は齋にあたれるを知り齋服を伊勢にて明衣といへば「あら」は明(アキラ)の略語なる事をしれりさて此祭は神祇令云一月齋爲ニ大祀一三日齋爲ニ中祀一一日齋爲ニ小祀一とありて賀茂祭は中祀にて午未申の三日也そのはじめ午の日みあれ成べしその日明衣を下上社松尾社に奉り神人氏人まで齋服を著ればそれを分配するを「みあれひく」とはいふなるべし「ひく」とは今の世抔をひくといふ「ひく」也今猶京にては朝家の官服をはじめ下々までこの祭より夏の服にかふるはこれがゆゑなるべし右に引所の龍宮の「あら」は明櫃(アラヒツ)の明にて明白清淨の心又その明櫃の明は韓櫃(カラヒツ)の韓と同義「あら」と「から」のひとつ證なる言は古事記に蛇(ヲロチ)の韓鋤(カラサビ)とあるを日本紀には蛇の荒正(アラマサ)とあり是はもと「アカラマサビ」といふ言なるを古事記には「ア」と「マ」を省き日本紀には「カ」と「ヒ」を省るよし也「アカラ」は明白清淨の心なるを一轉してよろしき物をいふ褒稱

となれり韓櫬唐衣(カラビツカラゴロモ)の「カラ」是也此「カラ」といふ言に三種あり「から衣」「から玉」などの「カラ」は明白清淨の心「アカラ」の略語「からある」「から桃」などの「から」は漢土より渡來し物の稱「から臼」「から梶」「から笠」「からさを」の「カラ」は「からくり」の「カラ」にて機發あるものをいふ也此事は日本紀歌解に證例を擧て委く論おけり云々與清按にこは荒木田久老などが說なりけん後に可レ尋年中行事秘抄賀茂祭條に舊記云中略飾二走馬一取二奥山賢木一立二阿禮一悉種々綵色云云上方十二の卷の四十九段にもいへり可レ考

(二)水向(ミヅムケ)　佛に水向するは閼伽といひて佛書に出たなれど史記禮書八丁(ず)に尊之上二玄尊一也注に正義曰皇侃云玄酒水也上古未レ有レ酒而始之祭但酌レ水用レ之至二晚世一雖レ有レ酒存二古禮一尙用レ水代レ酒也と見えて漢土にも似たることありし也

(三)上方下方左方右方　史記滑稽傳褚先生補(ず)五丁に附二益上方大史公之三章一云々これは上文を上方といひたり同書龜策傳補三丁に編二于下方一云々これは下文の義に用たり又五丁(カ)謹連二其事於左方一云々これは下文を左方といへり右方の字も所見あらば引出べし

佩文韻府陽韻中方字の部に左方に書傳史記龜策傳漢書霍公病傳唐書禮樂志を引たり唐書禮樂志には左曰二左方一右曰二右方一と見ゆ下方に史記龜策傳孝經援神契拾遺記名山記張九齡白羽扇賦など引たり上方に張華鷓鴣賦など引たり漢書評林凡例一丁(カ)に竊二之上方一云々

(四)屛語(ヘイゴ)　屛風障子などの陰にて私語(サヽヤ)をば屛語といへり史記日者傳五丁(ず)に乃相引屛語とあり物かげに引廻して私語こと也

(五)くぼさくぶさ　井かゞかげ　神代紀に利を「クボサ」とよめりその外にも所見あり「カゞ」とも訓て下野の地名に足利(アシカヾ)あり「カゞ」は「カゲ」也俗に「おかげを蒙る」などいふにおなじ「君が御かげ」の「かげ」も通音也「カゞ」は耀(カヾヤキ)にて其人の威光を蒙るが則恩を受る也史記龜策傳補八丁(カ)に商賈不レ彊不レ得二其贏一とある贏も「クボサ」の通音也「クボサ」は窪(クボ)キ所に物の溜る義にて「サ」は幸(サチ)也「サチ」は「サツ」とも活きて「サ」の一言が物を得ル事の本語なり

(六)强氣なければ物を成すことあたはず　事に逢て勇氣なき時は勝利成就あることなし余が相識に下野屋十兵衞といへる請負人あり口能談二利害一明能察二未然一而決二勝千里之才一と見えたれど懶惰の性質にて物の圖を外(ハヅ)すこと常也故に貧困にして生涯を送り死して葬具の設もなかりき史記龜策傳補八丁に宋人衞平が元王に對辭を載て曰聖人別二其生一使レ無二相獲一禽獸有二牝牡一置二之山原一鳥有二雌雄一布二之林澤一有レ介之蟲置二之谿谷一故牧二人民一爲二之城郭一內經圖術一外爲二阡陌一夫妻男女賦二之田宅一列二其室屋一爲二之圖籍一別二其名族一立レ官置レ吏勸以二爵祿一衣以二桑麻一養以二五穀一耕レ之耨レ之鉏レ之耨レ之口得レ所レ嗜目得レ所レ美身受二其利一以レ是觀レ之非レ彊不レ至故曰田者不レ彊困倉不レ盈商賈不レ彊不レ得二其贏一婦女不レ彊布帛不レ精官御不レ彊其勢不レ成大將不レ彊卒不二使令一侯王不レ彊沒レ世無レ名故云彊者事之始也分之理也物之紀也所レ求二於彊一無レ不レ有也とある彊の字を思ふべし彊は「ツヨシ」とも「ツトム」とも訓べく堪忍身保などの義にも心得べし

(七)禍福有レ因　史記龜策傳補九丁(ず)宋の元王の語に禍不二妄至一福不二徒來一天地合レ氣以生二百財一陰陽有レ分不レ離二四時一十有二月日至爲レ期聖人徹焉身乃無レ災明王用レ之人莫二敢欺一故云福之至也人自生レ之禍之至也人自成レ之禍與レ福同刑與レ德雙云々按に積善の家餘慶あり積不善の家餘殃あり臣弑二其君一子殺二其父一一朝一夕の事にあらず愼べし恐べし

(八)日かげ月かげ　井物の陰(カゲ)かげの馬　「日かげ」「月かげ」などの「かげ」は光(ヒカリ)の事にて耀(カヾ)の通音也上第五段の「くぼさの條」を考合すべし又物の蔭蠹を「カゲ」といふは「カギ」の通音にて限(カギ)る義也「木かげ」「山かげ」などの「かげ」也されば「かげ」と云詞に光と陰とのニッあればおもひわいだむべし又馬毛にかげ(カ)あり鹿毛(グ)の義也

(九)全器は天災に逢(フ)　史記龜策傳補十二丁に物安可レ全乎天尙不レ全故世爲レ屋不レ成二三瓦一而陳レ之以應二之天一天下有レ階物不レ全乃生也注に徐廣曰一云爲レ屋成欠二三瓦一而棟レ之也正義曰言爲レ屋不レ成欠二三瓦一以應レ天猶陳列而居レ之云々按に滿則缺之謂也周鼎水を滿しめず君子心をとゞむべし今玆文政十二年三月廿一日巳中刻外神田佐久間町一丁目材木屋尾張屋平兵衞が河岸地より火起て佐久間町一丁目の河岸なる材木悉く燒失し其火川を隔たる內神田に移り柳橋濱

町靈巖島築地佃島八丁堀新橋にいたり本町石町日本橋鍛冶橋數寄屋橋邊まで縱卅二町橫十町の間燒亡せり町名千五町なり但一町の內小名ありて其代地などといふあれば二三名合せて一町の所も有べし其中海賊橋なる牧野家の屋敷にて平日目塗などして用心したる土藏二十七棟燒失ぬ大傳馬町二丁目小津といへる太物店の 土藏三千兩の 費にて 造りしも 燒たり 三十間堀手の字屋といふ材木屋にて四千兩の費にて成れる土藏も燒失ぬ其外土藏の燒たる數二千六百餘船は大小六十餘艘燒死人凡二千餘人といへりさるに鼠穴或は地震割などある土藏は無恙がおほかりされば全美の器物は天の惡を受る道理なれば心すべきわざになん美服患ニ人指ニ高名逼ニ神ニ惡一といへるも尤哉

（十）町人の陰惡武家の貧乏　豪富の町人金銀の力をもて諸侯を苦しめ官吏を指揮こと可レ憎の甚き也されど面に顯れざるわざなれば知人なし大坂の町人諸侯の用達をして其仲間相談し締貸をすること一也そは用達町人に一人借金を返さゃる諸侯あれば例の仲間相談して外人は絕て用達せざれば金方の役人又々せんかたなく舊の用達に託入賄物を費し古借を割振し機嫌をとり笑顏をつくる心中さこそ無念ならめしかれども主君のためなれば武士道も捨て町人の大皷持をすることゝはなれり又金貸として商人も大陰惡心ありそは町を治る役人より取入て高官の許にも通じ何の株くれの株と徹少の運上冥加を納め大造なる金設を巧み武家にも御出入といふを極め御出入仲間相談して高賣し「カギ」などゝいふ事をしてたとへば五人にて材木を納るには實は百兩の物を一人は二百兩一人は二百五十兩一人は三百兩一人は二百五兩一人は二百三十兩などゝ相談の入札をし安札の二百兩に命ぜられても未百兩の益ありそれを本人が三十兩利をとり外の四人は七十兩を分取て武家を欺く也近來或大諸侯の普請に檜五百本餘も入用ありし折御出入の材木屋三人右の カギ 法を行ひ利を分んとし一人は二千兩一人は千八百兩一人は千六百兩位の入札をし掛りの役人にも十分に賄して得たり顏に思ひをりしを重役人の中にて御分家の役人に高直のよし物語せしを御分家の役人さらば余が屋敷の出入の木田屋某に積らせ見んとて木田屋に命じたりしに七百兩許にて請負べきよしいひたればさては大なる益也とて御分家より御本家へ進上の顏にて木田屋に納させられしに木田屋本代は百五十兩にて買出し五百五十兩の得分をして地面を買たりかく本代は百五十兩の物を千六百兩より二千兩に及ぶカギ札入たるは極重惡人なれどかゝりの役人などがよくとり持てしくじりもせずなほ陰惡をたくむめりすべて御出入といふもの小役人となれ合主君の爲には甚惡敷もの也 小事は ともかくも 米薪材木衣服は 日用の大事なればこれらは問屋仲買御出入は武家のため大に損也かゝる類をば禁じて 勝手次第賣買せば各〻下直の物をうらんと出精し役人は下直の物を買揚んとはげみて主君のため大利益也三年をまたずして湯錢髮結錢をはじめ賣物大に安くなりて武家大利運いかなる御手傳御用にても差支なくなるべきをと平日嘆息せしに今年大火の後五月晦日までの間は問屋仲買に拘らず田舍より 直賣を許し給ひしかば大に便利にて〳〵賣〳〵買〳〵出人の弊風忽に變じて聖賢の御代と歡喜せざるものは一人もなし四月十八日高賣をして禁獄せられし材木屋四軒あり佐久間町一丁目足立屋某丸太屋彥兵衛鈴木屋與市通船屋敷山本屋次兵衛後家さだ召仕二人也これら欲心に迷ひて人の難を己が幸とし御制禁を蔑如せる惡人也

（十一）著述は千歲の尊榮盛大　漢書總評三丁 に方孝孺曰漢數百年間王侯將相多矣司馬遷班固刑餘卑賤之人當世之所ニ戲慢而侮詘一者今彼之尊榮盛大咸不レ能ニ自存一而遷固之言與ニ經訓一並傳語云誠不レ以レ富亦祇以レ異其斯之謂歟云々與清曰立レ身行レ道揚ニ名於後世一孝の終とすれども此大名著述ならでは成すことなし司馬遷班固が業實に稱譽すべし

（十二）發明者　今俗才がしごきものを發明ものといへり漢書申屠嘉傳六丁 に無ニ所ニ能發明功名著一於世一者ゝと見ゆまた利發などゝも梅川忠兵衛の淨瑠璃の詞にあり利根發明の義なるべし

（十三）木石　人非ニ木石一といふ語は白氏文集を出處とす司馬長卿が語にも有しやうにおぼえたれば後に可ニ考注一漢書傳十二六丁 贊に周昌木强人也注に師古曰言其强質如ニ木石一然とも見ゆ 遊仙窟抄本五卷廿四丁ウ に心非ニ木石一豈忘ニ深恩一云々 頭書盛衰記十五ノ廿五丁ウ 撰集抄七ノ廿丁ウ 山谷詩集一ノ廿八丁ウ 源氏蜻蛉十八丁ウ 諺草一ノ四十四丁ウ 晉書夏統傳に此兒是木人石心也 圓覺經疏三ノ廿九丁ウ 文選四十一司馬子長報ニ任少卿一書 身

非ニ木石一獨與ニ法吏一爲ル伍又飽昭が行路難ニモ心非ニ木石一豈無ニ感

（十四）六戒　漢書匡衡傳五丁に聰明疏通者戒ニ於大察一寡聞少見者戒ニ於雍蔽一勇猛剛彊者戒ニ於大暴一仁愛溫良者戒ニ於無斷一潔靜安舒者戒ニ於後時一廣心浩大者戒ニ於遺忘一必審ニ亡之所一レ當レ戒而齊レ之以レ義然後中和之化應而巧僞之徒不レ敢ニ比周而望進一云々與其先一也と見ゆ本朝にていはゞ重忠次郎義盛小太郎時政四郎など書例也家系など書ん人据用べし頭書字治拾遺二ノ廿三丁ウあざなはかまだれとなんいはれ候東寺文書抄三ノ四十丁オ延文元年丙申十一月廿八日名主職賣券狀にふぢはらの氏女あざなふくら云々

（十五）女房は半身上　俗言に女房は半身上といへりされど女房は圓身上也女房よければ家榮え女房惡ければ家衰ふ諸子關雎を始とし孝經に閨門を重とし禮に婚義を本とせり漢書匡衡傳五丁に福之與莫レ不レ本ニ乎室家一道之衰莫レ不レ始ニ乎梱內一とも見ゆ源氏物語雨夜の品定の條にも天下の政にもまさるは家政にて妻によることのよしいへりされば家あるじといふも妻の稱也必妻を撰ざれば其家守がたし

（十六）永々　俗の書札文章などに永々の字おほく用ること也漢書匡衡傳七丁に永々不易之道也と見ゆ

（十七）字を先書て下に諱を書續たる書法　漢書孔光傳十二丁に孔子生ニ伯魚鯉一鯉生ニ子思伋一伋生ニ子上帛一帛生ニ子家求一求生ニ子眞箕一箕生ニ子高穿一云々注に師古曰名鯉字伯魚先言ニ其字一者孔氏自爲ニ譜諜一示レ尊ニ其先一也と見ゆ本朝にていはゞ重忠次郎義盛小太郎時政四郎など書例也家系など書ん人据用べし頭書字治拾遺二ノ廿三丁オあざなはかまだれとなんいはれ候東寺文書抄三ノ四十丁オ延文元年丙申十一月廿八日名主職賣券狀にふぢはらの氏女あざなふくら云々

（十八）正月元日に豐凶を占并松飾用レ炭　史記天官書廿一丁ウに初歲正月旦王者歲首立春日四時之卒始也四始者候之日正義曰以ニ四時之日一候ニ歲吉凶一也而漢魏鮮集臘明正月旦決ニ八風一風從ニ南方一來大旱西南小旱西方有レ兵西北戎菽爲小雨趣レ兵案隱曰謂風從ニ西北一來則戎菽成而又有ニ小雨一則其國趣レ兵起也北方爲ニ中歲一東北爲ニ上歲一東方大水東南民有ニ疾疫一歲惡故八風各與ニ其衝一對課多者爲レ勝多勝レ少久勝レ丞疾勝レ徐旦至レ食爲レ麥食至ニ日昳一爲レ穬昳至レ餔爲レ黍餔至ニ下餔一爲レ菽下餔至ニ日入一爲レ麻欲ニ終日有一雨有レ雲有レ風有ニ日正義曰正月日欲レ其終一日有レ風有レ日則一歲之中五穀豐熟無ニ災害一也日當ニ其時一者深而多レ實無レ雲有ニ風日一當ニ其時一淺而多レ實有ニ雲氣一無レ日當ニ其時一深而少レ實有レ日無レ雲不レ風當ニ其時一者稼有レ敗如食頃小敗熟ニ五斗米一頃大敗則風復起有レ雲其稼復起各以ニ其時一用ニ雲色一占種ニ其所一レ宜其雨レ雪若寒歲惡是日光明聽ニ都邑人民之聲一聲宮則歲善吉商則有レ兵徵旱羽水角歲惡或從ニ正月旦一比ニ數雨一素隱曰謂以ニ此數日一以候ニ幸日食一升至ニ七升一而極孟康曰月一歲之雨一以知ニ豐穰一一日雨民有ニ一升之食一二日雨民有ニ二升之食一如レ此至ニ七日一過レ之不レ占レ致至ニ十二日一日直ニ其月一占ニ水旱一孟康曰月一日雨正月水爲ニ其環城千里內占一則其爲ニ天下候一覺ニ正月一孟康曰月三十日周レ天歷ニ二十八宿一然後可レ占ニ天下一正義曰按月列宿日風雲有レ變占ニ其國并太歲所レ在則知ニ其歲豐稔水旱饑饉一也

月所レ離列宿素隱曰章昭云離歷也日風雲占ニ其國一然必察ニ太歲所一レ在在レ金穰水毀木饑火旱此其大經也正月上申風從ニ東方一宜レ蠶風從ニ西方一若旦黃雲惡冬至短極縣ニ土炭一孟康曰先ニ冬至一二日縣ニ土炭於衡一兩端輕重適均冬至日陽氣至則炭重夏至日陰氣至則土重晉灼曰蔡邕律曆記候ニ鍾律一權ニ土炭一冬至陽氣應黃鍾通土炭輕而衡仰夏至陰氣應蕤賓通土炭重而衡低進退先後五日中之炭動鹿解レ角蘭根出泉出躍略以知ニ日至一要決ニ曇景一歲星所レ在五穀逢レ昌其對爲レ衝歲乃有レ殃正義曰言景星行不レ失ニ次則無ニ災異一五穀逢ニ其昌應一若景星行而失レ次含有レ所レ衝則歲乃有ニ殃禍災變一也云々此文を考て年の豐凶を占べしまた正月松飾に炭を用ることは冬至土炭を縣る說に近しといふべし

（十九）左遷左官　左遷の字は史記漢書の周昌が傳を出處とす漢書諸侯王表注に服虔曰仕ニ於諸侯一爲ニ左官一絕不レ得レ使レ仕ニ於王侯一也應劭曰人道上レ右今舍ニ天子一而仕ニ諸侯一故謂ニ之左官一也師古曰左官猶レ言ニ左道一也皆僻レ左不レ正應說是也漢時依ニ上古法一朝廷之列以レ右爲レ尊故謂レ降レ秩爲ニ左遷一仕ニ諸侯一爲ニ左官一也云々また高五王傳にも左官附益阿黨之法設と見ゆ

（廿）喪に會して食を貪　余が見しりたる人に奸佞邪見の禿居士あり貧窮にして飢餓に及ぶことあまたたび也人の葬禮の時數人の中に紛れいり知音の人のまねして寺の葬所に列座し强飯酒餅菓子などを腹に餘るばかりのみくらひ餘殘あれば懷にし歸ることを常とす漢書陳平傳に邑中有ニ大喪一平家貧侍レ喪以先往後罷爲レ助とあるに似たれど其人物は天地懸隔也

（廿一）後白河法皇幸ニ于蒔繪師家一　玉海壽永三年六月十七日の條に入レ夜光長來去夜謁ニ賴盛卿一傳聞法皇去比以ニ手輿一臨ニ幸蒔繪師家一戸眞入ニ戸內一懸ニ尻於少板上背一御ニ覽菱繩調備之樣一被レ仰ニ引出物可レ進之

由(ニ)也戯言然而蒔繪之凡家貧忽難レ得ニ其物一然之間還御其後存ニ眞實勅定之由一捧ニ美麗蒔繪手筥於目上一參入稱ニ御引出物之由一而使ニ北面之周防入道能盛竊誘退出一了云々昔從ニ乎陽成花山之狂一未レ聞ニ如レ此之事一法皇又輕々狂亂雖レ不レ可ニ勝計一未レ有ニ此程之事一實運之盡給也不レ可レ敢云々與清曰後白河法皇かゝる輕輕しき御振舞おほかりしゆゑ清盛入道に蔑如せられたやすく院宣を下して表裏猫目の變るがごとくおはしゝかば臣下なつくことなく遂に天下を武家の手におとしいれ給ひぬ加之後鳥羽院御短慮におはしまして朝威振はざるはなげかはしき事ならずや

(廿二)フシャウ〳〵 俗語にフシャウ〳〵といふは不請の字也玉海元暦元年八月廿一日の條に或說云文覺頗有ニ不請之氣一云々然而取下在ニ獄中一之義朝首上可レ來之由仰付云々と見ゆ

(廿三)五節舞の裝束及祿物調度食物 玉海元暦元年十一月廿二日の條に五節事畢舞姫妃已下今夜退出大將五節裝束已下饗祿等注文

舞姫裝束 丑日

赤色繻物唐衣 濃打袍 裏濃蘇芳袍一領 已上 堀川大納言入繻物櫃

寅日

裏濃蘇芳袍一領 青單衣 濃打袍 濃張袴 青色扇

己上中御門大納言入ニ假裏一

青色唐衣 裾襴比禮 蘇芳末濃裳 已上借ニ花山大納言一

午日例年長日也大嘗會事以ニ午日一稱ニ豊明一也

青摺唐衣 濃打袍 裏濃蘇芳袍一領 青單衣 濃袴

同染裳 裾襴比禮 青摺裳 已上源中納言入ニ假裏一

日蔭糸羅 古々呂葉 赤紐 已上於ニ此殿一新調 七尺儀理髮用意之

童女裝束 丑日二具 八條院名置ニ衣筥蓋一(件筥後日返ニ上之一)裏ニ赤色繻物裏一

織物白菊衽衫 濃打衣 裏濃蘇芳袍三領 青單衣

白表袴織物 濃袴 扇雅賢朝臣

卯日二具院名裏ニ赤色繻物裏一不レ置ニ衣筥蓋一

黄菊衽衫面織物 紅打袍 紫白袍四領 青單衣謂之龍膽一

白菊表袴 紅三重打袴 扇公時朝臣

下仕裝束 丑日余沙汰 雖光頭爲ニ在所一保調進之

梅唐衣立文 裏增紅梅褄三領 青單衣 濃打衣 濃袴

村摺裳 釵子在レ緒 扇定長卯日攝政生絹假裏不レ置ニ衣筥蓋一

萌黄唐衣 黄褄四領色皆同 濃蘇芳打袴 紅單衣 紅張袴 村摺裳 釵子在レ緒 扇兼定

打出四具保元八具今度畧定 增ヶ

裏絹紅梅褄五領入ニ錦五百兩一裏高一尺六寸 濃打衣 濃紅梅單衣

梅表著 葡萄染唐衣 不レ出レ袴是故實也

五節雜事依ニ略儀一無ニ定文一長寛例也

一調度 二階 泔坏在レ臺 薫爐在ニ龍七箸一 打亂筥每夜入ニ紅薄様一重一 脇息

行事國行 所司重經

一理髮具 末額 七尺鬟 蒔櫛 彫櫛 上櫛 下櫛

釵子四花鈿子一二在レ緒 本結紫練糸二兩計 日蔭在ニ緒六筋一 心葉二 蘿

行事國行 所司重經

一裝束 屛風五帖四尺一帖泥繪五尺四帖 壁代七帖 几帳八本在レ帷 三尺一本四尺七本 茵二枚唐錦東京錦 御簾十三間母屋四間庇九間 疊十五枚繧繝二枚高麗十一枚紫二枚 領莚五枚 差莚卅枚 鎭子十二 燈樓四在レ綱 燈臺三本在ニ打數一 火櫃二口在ニ鉢箸一 炭取二口

行事以政朝臣 光綱 賴高 兼時 所司政職

侍仲政下家司久行

一盥具 手洗二口 楾二口 行事

一舞姫裝束色目在レ端 行事經泰 所司政職

一童女裝束四具色目在レ端 行事兼親 經泰 所司重經

一下仕裝束四具色目在レ端 行事保行 長俊 所司重經

一打出四具色目在レ端 行事賴高 兼時 所司賴重

一仕丁裝束八具 退紅 襖袴 襖衣 帶 烏帽子

一祿

大師 長絹六疋 綿二連卅兩 凡絹百疋代白布十反 白布七反共女官七人料 長絹一匹執行女官料 亂宮一口在ニ裏料絹四丈一 火櫃一口在ニ鉢箸一 炭取一口 紙立菓子十合 雜菓子二百七十合 饗料

理髮 長絹三匹 綿三連卅兩 褄一領執行女官 凡絹卅匹代白布三反 疊三枚高禮 白布一反執行女官 白布七反共女官七人料 楾手洗一具 亂宮一口在ニ裏料絹四丈一 薫物一裏 白物一帖紙 顏粉一盤 細綿一壺 紙立菓子十合 雜菓子百七十合七十合共女官料 饗料米三石

小師 上絹三匹 綿三連卅兩 褄一重裏濃蘇芳青單衣 濃袴

一腰 凡絹卅匹代白布三反 細美布一匹手巾料 美絹四丈帶料

凡帳一本（在二雜料美絹九丈一）　手宮一合（在二納物一）　屏風一帖（唐紙）　火桶
一口（在二鉢一著一）　炭取一口　疊七枚（高麗二枚紫五枚）　燈臺一本籠三
間圓座一枚　貲布七反（共女官七人料）　饗料米二石四斗　紙立
菓子十合　雜菓子二百五十合　炭一籠
琴師　絹一匹　綿五屯　凡絹二匹
聞司　絹二匹　綿十屯　凡絹五匹
小歌　絹一匹　綿五屯　凡絹二匹
拍子　絹一匹　綿五屯　凡絹二匹
今良三人　各綿三屯　信乃布三反
小舍人二人（今度不レ給レ之故也）　一人（六丈絹一匹）　二人（凡絹各二匹）凡絹三匹
仕人二人　各布一反
行事光綱　經泰　侍貞光（眞脉）
一饗
朝餉　寅日二位中納言　卯日梅小路中納言　午日新宰相中將　各白布五反以レ絹裹レ之
前物　大帥左衞門督　理髮右兵衞督
小歌衝重　右近府（醫頭清景）
屯食十具　六府各一具　北陣一具　藏人所小舍人二具　進物所膳部一具

大破子十一荷　小歌二荷　脇陣二荷　掃部寮一荷
主殿寮一荷　內膳司一荷　主水司一荷　朔平門一荷
和德門一荷　玄輝門一荷
雜菓子　內侍所女官卅合　掃部寮女官廿五合　同
男官十合　御服所女官廿合　洗女官十合　東童卅合
御手水女官十合　御匣殿女官十五合　主殿女官廿合　御藥女官十五合　御膳宿女官十五合　御湯殿刀自十五合　進物所女官廿五合　水司女官十合　御樋殿女官十合　小歌女官四十合　大盤所女官卅合　上御厨子所十合　上刀自廿五合　命婦十五合　藥殿十合　書女官十合　油守十合　主水十合　御門守十合　女史十合　內膳刀自十五合　采女中廿合　同官人中十五合　縫殿女官十合　御井廿合　墨摺十合（闇司十合）　糸所十五合　水取十合　女孺十合　當女十合　上御厨子所廿合　御厠人十合　長女十合　御服所命婦廿合　下御厨子所十合　御髮上女官廿合　主殿十合　女工所十合　孺十合　藏人所五十合　行事所小舍人卅合　仕人中廿合　內豎中五十合　官召使廿合　木工寮十合　和德門十合　朔平門十合　脇陣廿合（左右各十合）　縫殿陣十合　內膳十合　六府各十合

一棚　內十荷　院十二荷　上西門院八荷　八條院十荷　皇后宮八荷　殿下八荷（已上御使御隨身）　三位殿五荷
右大臣殿五荷　權大納言五荷　源中納言三荷
藤中納言三荷　中御門大納言五荷　源中納言三荷（已上內事也）　行事經泰
所司重經
一櫛　內（唐船）　院（和船）　八條院（火爐）　皇后（棚）　殿（鏡臺）
此夜寅午兩夜裹二櫛少々一被レ儲二于五節所一　行事
國行　兼時　所司重經
一雜事　打覆七間　打出長櫃四合　例長櫃四合
疊臺四脚　覆莚卅枚　炭筥籠　油一斗八升　雜饗
用途高足二脚　簾代　筒木（九平）　針糸
一貴所御使祿
院　宮內卿經家朝臣　女裝束一襲
廳官　六丈絹一匹
八條院　右馬權頭基輔朝臣　女裝束一襲
廳官　六丈絹一匹
殿下　兵部權少輔信廣　白襖一領

（廿四）假名狀　玉海元曆二年五月廿日の條に以二假名狀一付二定能卿一奏レ院とあり假名狀は假名文をいへる也

（廿五）小兒垂髮（うなゐすゝ）幷總角（ワカシ）　同書文治元年十月七日の條に誕生之小兒等利剃歟髮事禁忌月陰陽等申狀非レ一仍問二遣在宣之許一（當道數輩之中器量拔群之上又庭訓在レ耳仍余以レ之爲レ證）　申云正三五七九十（已上六ヶ月忌之）二四六八十一十二（已上六ヶ月爲レ吉）仍來月可二垂髮一云々他人（廣基晴光等）　申云十月不レ忌レ之十一月忌レ之（他同在二寅日前一）
但晴光云或說不レ忌二霜月一云々因レ茲問二在宣一之處申旨如レ此仍可レ用二此說一先年姬君誕生之時在憲朝臣所レ申同（ウブゲ）二如歟在宣說一之故也と見ゆ利髮は剃髮の誤なるべし產毛を剃るときこゆ垂髮に前髮を垂たる兒を吾妻鏡に垂髮と書たり今のワカシの事也さては髮置をいへり

（廿六）院分國幷小目代　同書文治元年十一月十四日の條に梶原代官下二向播磨國一追二出小目代男一倉々付レ封了云々件國院分國也と見ゆ院分國は仙洞御領國也

（廿七）軍役兵粮米幷地頭　同十一月廿八日の條に傳聞賴朝代官北條丸今夜可レ謁二經房一云々定示二重事等一歟又聞件北條丸以下郎從等相分賜二鬪歟五畿山陰山陽南海西海諸國一不レ論二庄土一分歟可レ宛二催兵粮（段別二五升非二）雷兵粮之催一惣以可レ知二行田地一云々凡非二言語之所一

及と見ゆ兵粮米段別五升を宛ること吾妻鏡にもあり國國には守護を置庄園には地頭を置てこれを取しむる也地頭の事北條九代記塩嚢抄十六夜日記殘月抄等を考べし頭書 大地頭八幡愚童訓上十四丁オ太平記一ノ一丁ウ同二丁ウ小夜の寢覺七丁オ地頭代砂石七ノ廿二丁オ宗固隨筆に地頭といふものを定しは賴朝公以來事也往古は軍に出其國に居る內は兵粮の爲とて畑一反に付て米五升づゝ武士へ遣したる事也これ地頭のやうなるもの也其後賴朝公惣追補使に被仰付し時より諸國に地頭を付け置たり此地頭わがまゝなるいたしけるゆゑ多くの公家衆迷惑致鎌倉へ訴に出たり右樣のたぐひを糺さんために西明寺殿諸國修業に出給ひし也云々盛衰記四十六ノ廿三丁ウ地頭守護ノ事委シ

（廿八）令旨書樣　同書文治二年六月十九日の條に令旨書樣

正四位下行太皇大后宮亮兼伊豫守源朝臣季長
大藏卿正四位下藤原朝臣宗賴
從四位下行權右中辨平朝臣基親
正五位下守左京權大夫藤原朝臣光綱
民部少輔從五位下兼行和泉守藤原朝臣長房

右被レ仰俯件等人宜レ爲二北政所別當一者

文治二年六月十九日

別當大藏卿正四位下藤原朝臣宗賴奉
正六位上行民部少錄安倍朝臣親行

右可レ爲二知家事一

右辨官吏生從七位上　季俊

右可レ爲二案主一

被レ仰俯件等人宜レ行二北政所事一者

年號月日署所　同所

（廿九）殷富門院并門院號の後は仙院に准ず　玉海文治三年六月廿八日の條に此日有二院號事一停二皇后宮職一法皇第一女有二當今國母之儀一御名亮子爲二殷富門院一申刻著二束帶一參內先レ是公卿等參入云々仍以二定經一仰下可二定申一之由上其詞皇后宮職可レ有二院號事一何樣可二號申一敷可レ令二定申一者云々此間余候二朝餉方一良久定經來申二人々定趣一多是宣陽門云々又殷富門宣秋門東二條院等相加云々其人申二其號一云事職事〔不分明之間憚不二聞及一大略只如レ此也余重仰云宣陽門者內裏之中門也無レ例如何又二條者彼宮御領歟如何歸來云宣陽門事人々多定申且又陽明門院陽文字吉例也云々中門之條定經不レ問歟不レ足レ言二條非二御領一只當時御所頗寄レ東仍隨レ宜所二申出一也大途只宣陽門也云々即以二定經一奏二法皇一御二大炊御門殿一其狀云人々申旨如レ此愚案宣陽門不二甘心一先院號者用二御所號一也待賢門之時始被レ用二無レ故之門號一然而猶是被レ准二上東門陽明門等一之儀也建春門建禮門被レ用二內裏一是偏新儀也建春門院薨二吉例一建

禮門不吉也何況於二中門一者已無レ例仍被レ用二殷富門一何難有哉西面已有二上西門例一其字文無レ難若猶可レ被レ用二內裏門一者宜秋門宜歟秋字頗雖レ非レ吉於二后宮一者得二長秋之號一仍女院之號強不レ可レ憚歟但猶是不二甘心一事也可レ被レ用レ門者宮城門可レ然也二條若又爲二御領一者東二條尤可レ然非二御領一者頗以無レ所レ據歟所存如レ此此上可レ在二勅定一者暫而歸來云如レ此事一切不レ知二案內一只左右」相計可レ被レ仰云々雖レ須二重取一御氣色一已及二夜漏一又猶不レ可二分明之成敗一仍任二愚案一仰云停二皇后宮職一可レ爲二殷富門院一停二進屬一可レ爲二判官代主典代一年爵年官御季御服御封雜物如レ舊奉レ宛於二內膳御飯一者宜レ從二停止一者是每度例狀也定經向レ陣仰二右大臣一余即參二大炊御門亭一法皇新女院同居著二女院御方殿上一面爲二其所一右大將已下公卿等著レ之以二二棟廊南對座余在レ奧云々按に門院號の後は皇后宮職を停め仙洞に准じて進屬等の官人も判官代主典代と改らるゝ也

（卅）散狀　同書文治三年十月三日の條に此日當年不堪荒奏也先有二不堪田文一晚頭大夫史廣房來申二今夕官奏幷官散狀一左大辨親宗右中辨基親等所レ參也云々云々同年十二月廿六日の條に佛嚴聖人來文歟又法印被レ來定經輔ィ申二春日詣殿上人散狀一被レ觸ィ當時卅餘人領狀觸ィ云々仰下可二奏聞一之由上云々同建久二年十二月七日の條に宗賴朝臣來云參レ院奏二聞御後殿上人散狀一可レ責二隆雅一之由有二御定一云々これ不參の狀を散狀といへる也庭訓往來八月七日の狀に執筆書二與問狀奉書於訴人一之時及二兩度一無音者仰二使節一被下二召符一就二違背散狀一者直被レ下二知于訴人一令レ召二進之一云々抄に散狀とは其狀を物なしにしてひやぶりなどするをいふ云々諸抄大成に問狀（トヒ）も召符（メシフ）も投やりちらして違背するをいふと云々同名別義也散狀の圖近代年中行事細記十一丁オ卅六丁ウ

（卅一）興福寺金堂及南圓堂再建貴賤引レ綱井音頭取

興福寺南圓堂建立の事は塩嚢抄に見ゆ玉海文治四年正月廿九日の條に此日興福寺金堂南圓堂棟上也去治承四年十二月化二灰燼一之後八ニケ年于茲一云々中略行事左少辨親雅經二庭中一取レ綱與レ余余已下取レ之次左近將監式親打レ皷即余已下僧俗皆立レ座引レ綱此間工等揚レ音引之立舉打二堅柱根一三度舊例礎邊引二立柱一以二吉日一正立二礎上一也云々按に工等揚レ音は音頭取て發聲する也音頭の事重編應仁記に見えたり文子徵明篇に老子曰今夫挽レ車者前呼二邪軒一後亦應レ之此挽車勸力之歌也雖二鄭衞胡楚之音一不レ若二此之義一也頭書 詠源抄一ノ十三丁ウに音頭の笛吹出て云々又

十六丁ヲ儀潤三才圖會十六ノ十八丁ヲ節用集也部言辭門に遺歟ヤリウタヲ云々同於部言辭門に音頭オンドウ地藏靈驗記十ノ十五丁ヲ永正十五年中堂供養記に音頭持レ鉢自餘持二華筥一云々音頭取太閤記七ノ十四丁ウ魏志十九ノ廿七丁ウ宗五大紳子上卅九丁ウ一音どうを取うたひ候

(卅二)不時に花さくは災　玉海建久二年九月十七日の條に有二櫻樹華一可レ有二臨時奉幣之事一云々不時に華咲は吉事にあらず

(卅三)金銀御幣幷男女神體劔鏡　同書建久二年十二月七日松尾行幸事條に戌剋參內依二神寶御覽一也次向二直廬一著　表衣　衣冠正　參上即出御　御引直衣著二打衣御袴一給也　余候二母屋圓座一先レ是運二置神寶等一次藏人頭宗頼朝臣參上覽二金銀御幣幷御鏡等一　寶殿二所云々而一所ニハ金銀幣二御鏡一也一所ニハ只金銀幣一具無二御鏡一是男鉢之故無二御鏡一云々又女鉢之方ニハ御劔不レ付二平緒一細劔無二平緒一尤無實然而此社例云々男鉢方ニハ如レ例付二平緒一云々　御覽了云々按に兩宮儀式帳に弓劔鏡など神體の宮社おほく見ゆ可二考合一頭書　人車記嘉應元十二ノ四ノ條今朝入道殿參二諸春日社一頭令二奉幣一給成隆朝臣傳獻二金銀幣一云々御幣今昔十四ノ三語本朝世記十九久安五ノ八ノ廿ノ條同廿二の條金銀御幣鏡神鉢本書七ノ十一百練抄十四ノ卅丁ウ金銀幣白妙幣又卅一丁ウ寶石類書五ノ一丁オ宇治殿高野詣記二丁ウ

(卅四)文杖　玉海建久四年正月廿五日の條に文杖事寬治天永用二官文杖一是非二除目當日一兼日有二吉書一除目申文之時用二藏人所文指一也寬仁如レ今度當日覽二吉書一然而文杖事無二所見一今度如何之由豫宗頼朝臣示レ之余任二吉例一於二吉書一者用二官文杖一有二何事一哉而申文之時又用二官文杖一之由無二所見一日內事用二兩方杖一之條理不レ可レ然於二今度一者兼日用意藏人方杖用二兩方一尤可レ然且是元永記忘却不レ造レ杖之由記レ之存レ之者仍用二藏人所杖一也云々按に江次第賭射篇に書杖云々同國忌篇に白木書杖云々年中行事に內辨文杖を持て東階をのぼりて云々又云すべて白き杖は御帳のうしろにおく返すべからざる故也黑き杖はひがしにそへておくやがて返し下すべきが故也云々名目抄雜物篇に文杖有二黑白一依レ文相替一云々など所見おほかり

松屋筆記卷之六十

東都　平與清文儒稿

(一)弓の製　弓の製往古の梶弓(ハジユミ)は梶木(ハジノキ)もて作りけん「マユミ」は白弓(マユミ)にて白木の弓なり白(シロ)を「マ」といふよしは白土(マツチ)などの類也又「マ」を「シラ」ともいへり白樫(シラカシ)白菅(シラスゲ)の類也梓弓槻弓は梓(アヅサ)をもて作り槻(ツキ)をもて作れる也梓は今の木さゝげ(キ)にや槻は「ケヤキ」の事也史記田敬仲完傳八丁(カ)　注に言作レ弓之法以レ膠被二昔幹一而納二諸檠中一是猶以レ勢令二人合一也と見ゆ古來ぬり弓もありける也

(二)三日の禮　今世朔日十五日廿八日を三日の禮と稱して朝賀せり朔望の禮は史漢などに見えてかの國によれる也廿八日の禮は所見なし俗歌に廿八日の禮をよめる「正二四(シヤウニイシボン)盆ト暮(クレ)トニ禮ヲウケ」といへり正月二月四月七月十二月の廿八日ならでは將軍家朝賀をうけ給はず然るを下ざまにて毎月朔望廿八日に賀禮を行ふはたがへるが如し　頭書　鹽尻十の下卷に今朔望の外廿八日　主君官長を賀する事ありこれは大權現岡崎御居城の時御家臣多くは本願寺門徒なりしゆゑ朝道場へ參詣し上下のついでとて御機嫌を伺ひけるよりなにとなく禮式となりけるとなん云々

(三)弘安板本三大部　弘安板本の三大部あり輔行第六末卷の奥書に弘安四年十二月廿一日書寫畢阿闍梨賴慶とあり文句四の卷の奥書に弘安七年六月十七日宋了一敬書とありこれは宋の了一といへる僧歟止觀五の卷奥書に弘安四年六月三日執筆嚴成奥弟子嚴尋終功矣願主權大僧都承詮とあり以上はいづれも板刻の字也別に應永十一年二月十日以二如來藏第三點本朱墨一同寫レ之詮運」正長第二曆己酉林鐘上五天尋寫二右古歟點一而已忠宴」敎行坊日曦」とあり大倭綴にて標紙は紺紙也紙は古製の書籍紙にて例の如く兩面に摺たり綴目の小口は紺のしけ絹をもて袋綴にすこれに限らず聖德太子の勝鬘經の注本の板本も目黑長宗律院に藏したるを見しに七百餘年の古製なりき走湯山緣起に刋本の沙汰もあれば本朝板刻の起りはやゝ古きことなり

(四)「きく」は耳に聞口(キ)に咏鼻(アナバ)に嗅(カグ)にいふ　弘安板正觀輔行傳弘決卷第六末卷に正長二年古點を寫したるに象聞(カイテ)に血氣一狂醉倍レ常とあり此外聞の字をカグとよみたる所まゝあり楞嚴經詩注疏などに香にきくと

いふと見え易牙聞味ともいひ眞名伊勢物語に聞をきくとよめり口語にも目きゝ口きゝ手きゝの類一身に就て其主る用のよきをもいへる也と和訓栞にいへり頭書「キコシメス」「シロシメス」「キコシチス」ナドノ「メス」モ「チス」モ腹心ニ受納ル、コチ云今昔十四ノ四十一同十七ノ卅三同十九ノ八語ニハ聞ノ字ヲ「カケ」トヨメリ同卅ノ一語丁子ノ香早ウ聞エ云々又聞ケハ靨ス馥シキ黒方ノ香ニテ有リ

（五）倭語倭言　倭語といひ「やまとことば」「やまとことのは」などいふは常の事なれど將門記に莞爾者倭言都波惠牟也（按に「ツボエム」の通音也「ホヽエム」もおなじ）云々熙怡者倭言與呂古布（ヨロコフ）など所見おほかり

（六）奉公　漢書張湯傳に趙禹志在二奉公一孤立而湯舞レ智以御レ人云々同李尋傳に君德盛明大臣奉レ公云々などあるを奉公の字の出處とすべし頭書滑稽詩文に吉シ作二股肱一申二奉公一ヲ云々後漢書呂強傳に爲レ人清忠奉公ヲ云々また小黄門廿陵吳佑善爲ニ風角一博達有二奉公稱一云々戰國策八卷廿八丁ウ韓策王篇に冷向謂二韓咎一曰云々聽悉得レ入而德レ公必以二韓楚一奉レ公矣

（七）下名　玉海文治三年十二月八日の條に此日下名也以二定經條々奏一院可レ任レ之者注二折帋一加レ封進二上之一又昨日所レ被二仰合一之衙府督之間事書二副愚札一付二定經一依二秘事一也秉燭歸來任二御定一更注二折紙一下二給定經一於レ前書レ之即定經參陣了除目内覽可レ免之由仰レ之上卿源中納言云々故基輔息少男行輔申二任兵衛佐一了過分之朝恩也但此事不レ可レ爲二非據一之由在レ之由年十四歳頗難二早速一重家任二武衛一經家十二歳任二金吾一云レ職云レ年其例不二外求一祖父賴輔入道無二三品之運一早以遁世親父基輔不レ任二諸衛佐一空以歸泉彼兩人於レ家奉公超二等倫一當二此時一舉任少男施二父祖之面目一勵二傍輩之節一者也抑宗國任二少將一即申二任其闕一之條頗憚二人口一仍明春可レ被レ任二武衛一之由申二法皇一勅報之趣本懷已足今度拜任不レ可レ有二其難一置レ闕待二明春一者自障難二出來一歟云々仍今夜任了云々按下名の事實石類書卅一の卷に北山備忘略記山槐記安元々年七月廿八日の條などを引ていへり

（八）火葬　火葬の事續日本紀に道眼より始よし見ゆ玉海文治四年二月廿八日の條に此日内府葬送也堂與二葬場一其間可レ謂二咫尺一仍每事有二便宜一云々用二火葬一之儀内府平生之時常曰火葬有二功德一土葬不二甘心一云々余父存二此旨一仍用二火儀一也不レ用レ薪用レ藁也是近代之意巧第一之上計云々按葬送式葬法密釋氏要覽火葬土葬の說可二考合一

（九）八幡寶宮　玉海文治元年十二月廿日の條に先日

之經所二來問一之字佐宮黄金事注二折紙一今日送レ之文書等返遣了件折紙狀如レ此

宇佐宮黄金可レ被レ奉二納石清水外寶殿一間事

外記勘申旨先規雖レ不レ詳准據粗有レ例任二件等之趣一可レ被二計行一歟八幡寶御宮事尤雖レ足二准據一彼者新造之器也是者擬二御體一之神寶也尊崇之儀輕重不レ詳歟神祇官供奉幷可レ被レ行二大祓一之條賴業勘奏尤可レ被二據用一歟可レ被二新造一宮幷辛櫃之趣師尚申狀又以不レ可レ及二異儀一歟但黄金本納二香爐宮一云々其體暗難レ知被レ尋二本宮一之條忽不レ可レ叶仍只追二黄金之寸法一先新二造其宮一可レ被レ納二辛櫃一也抑八幡寶御宮破損之時度々有二奉幣一今度之事爲二新儀一奉二納之一奉幣以前先可レ被二告申一歟但彼例依二公卿之議一設二新造之宮一沙汰之趣神慮難レ測破損之條非レ無二其恐一仍旁所レ被二告謝一也於二今度一者被レ行二御卜一了官寮共申最吉之由神告之條已無二疑殆一加之件黄金事達二天聽一之後依二世上之騒亂一有二沙汰之權息一適事定議決者雖二一日一早速可レ被二奉遣一也於二良平之住宅一迄二若干之日月一深以レ有二其恐一之故也而有二再三之奉幣一者定爲二遲緩之因緣一歟仍雖二兼日之使一豫定二其日一殊仰二宮寺一令レ致二祈請一歳内被二忩奉納一自叶二神慮一者歟奉二送本宮一之儀退可レ有二議定一凡彼宮之濫行我朝之重事也先日被二尋問一之時粗言二上旨趣一了勘二諸道一訪二群議一殊可レ有二其沙汰一也云々

（十）坐喰すれば山も盡る　小說精言一の卷二丁ウ「に坐喰（ヰナガラクラヘバ）山も空（ムナ）ゝ立（ツ）ゝ喰（ヘバ）地も陷（ル）咽喉深（ク）似（レ）海日月快（ヨヤヨリモヒ）レ如（レ）梭（カヤグ）云々人々此事をよく〳〵思惟して勤べし勤に貧乏迫付すといふ俗語さるとも也

（十一）をか目八目　俗に棊の譬をヲカメ八目といへり按に外目八目を訛れる也堀川百首の岡見（ヲカミ）の歌など引ていふはひがごと也小說精言四の卷一丁ウに下レ棋的怕（モノ）傍人觀看（アキラカニ）常言傍觀者淸當レ局者迷倘或傍觀的口嘴不レ緊遇二慇着處一溜二出半句話一來贏者反輸輸者反贏云云とも見ゆされば「ヲカメ」は傍觀と書べし八目は聽聽をたとへて八耳皇子ともいふが如く明見を八目といひたる也傍觀八目と書てヲカメハチモクと訓（ヨム）べし壒嚢抄を考合すべし頭書文海披沙三ノ二丁ウ太平記卅九ノ一丁ウ見聞集四ノ十七丁オに長齋と我と碁をうてば我及ばずそば目八目と俗に云しを其時おもひしれたり云々

（十二）酒のかん茶甌下酒　「カン」の「カケン」ノ略也武州ノ方言ニ「ヨキ加減」ト云チ「エ、カンダ」トイヘリ　酒の「かん」の字壒嚢抄屠龍工隨筆下卷など

に論じたり小說精言四の卷廿四丁ウに討了一壺上好釅酒一盞得滾熱云々又云茶甌喫一兩甌一到也爽利朱氏取了茶甌一守着要レ掛陳小官人道慢着待二我自掛一我不レ喜二小菜一有二菓子一討レ些二來下酒云々盞は酒のカンをする事也茶甌はチャワン也下酒は酒肴也頭書筆記五ノ六十二則可レ考晉書羊琇傳二丁ウに屑炭和作二獸形一以温レ酒云云白氏文集林間煖レ酒燒二紅葉一晉書芸秀傳六丁ウに服二寒食散一當レ飲二熱酒一而飲二冷酒一秦始七年冬云々續耕錄七の卷八丁オに〔奚奴温酒の條に宋季奢政相公鉉翁於レ杭將レ求二一容貌才藝兼全之妾一經二旬餘一未レ能レ愜レ意忽有レ以二奚奴者一至、姿色固美間二其藝一則曰能温レ酒左右皆失笑公漫留試レ之及レ執レ事初甚熱次略寒三次徹温公方飲既而每日並如二初之第三次一公喜遂納焉云々〕とあり

（十三）伊豆駿河古は木瀬川を界とす　玉海元暦元年八月廿一日の條に此日定能卿來傳聞賴朝出二鎌倉城一來二著木瀬川伊豆與二駿河一邊一暫逗留進二飛脚一申云已所二上洛仕一也但ひきはりても不レ令二上洛一候也云々伊豆志一の卷の疆域部に西北ハ大溪瀧溪二溪茶畠ヶ村上ヘニテ合流シ以下ヲ界川ト云幸原村ヲ經テ三島ノ千貫樋下ヲ過ギ長伏ヶ村ニシテ狩野川ニ注グマデ駿州駿東郡ト凡テ此川ヲ界別トスサレドモ近世幸原ニメ水盡ク東ニ決レ西南ノ方千貫樋迄水枯竭スレ共仍舊古水通リヲ界トス長伏ヨリハ狩野川界タリ江間村ニ至テハ駿州大平村口野村村トノ間連山岡脊界也海濱ハ重寺村ト駿州口野村ノ間ニ犬潜ト云處ヲ分界トス云々又一の卷郡郷の部云駿州駿東郡廿八村餘モト伊豆ノ地也如レ此ナレバ狩野黄瀬ノ二水北ハ官道ヲ以テ州界トス地形宜ク疆域分明也云々按今は駿豆の二國三島の西千貫樋の川をもて界とすれど古は木瀬川を界とせり伊豆志一の卷郡郷部に鏡作泉水二郷分置ノ時伊豆ニ屬シ延喜ノ後復駿河ニ屬シ北條氏割取シテ伊豆トシ駿河亞相駿城ニ在ス時庖厨料トメ復駿河トナルと見ゆ

（十四）武藏國乘潴驛　續日本紀廿九の卷六丁ウ神護景雲二年三月の條に下總國井上浮島河曲三驛武藏國乘潴豐島二驛承二山海兩路一使命繁多乞准二中路一置二馬十匹一奉レ勅依レ奏其餘道春米諸國糧料亦准二東海道一施行云々按に武藏乘潴はアマスマと訓べし令義解に剩田公田也と見え剩乘相通じて餘の字の義也されば餘潴の義と見ゆ足立郡大宮宿の東に上天沼下天沼村ありこれいにしへの乘潴也見沼につゞて沼邊の地なれど今は新田となれり高鼻村その北鄰也和名抄に足立郡餘戸郷あり餘戸は「アマリベ」と訓は證なければ「アマ」と訓べくや安間などいふ地名も「アマ」にて實は餘戸なるを安間と書るより「アンマ」とは呼なるべしされば乘潴も餘戸の郷にて沼あるより乘潴とはいへりと見ゆ

（十五）ベラ坊　大日本王代記寛文十二年の條にべらぼうと云うまれぞこなひ京江戸大坂の芝居にて見せると有今俗ベラボウといふ詞はこれに出る也

（十六）羅切　今俗語に隱莖を斷を羅切といへり摩羅を切の略語にていかにも拙劣の詞と思ひしに皇帝紀抄承元元年の條に法然房專修念佛を進るゆゑ搦二取上人等一或被レ切レ羅或被レ禁二其身一とあり切レ羅とは摩羅を切事にて今の俗語の出處也

（十七）蓮の一莖二華は災殃の前表　蓮華に一莖二華あるを吉事とおもへるは誤也皇帝紀抄七の卷高倉院治承三年の條に七月之比法勝寺池一莖二華蓮華開敷洛外洛中視者如レ堵天下災殃前表何事如レ之哉被レ召二諸道勘文一之處每事勘二申不快之由一云々とあり日本紀にも一莖三華の蓮あり追て可二考注一頭書東大寺要錄五卷別當章少僧都清壽傳に長和三年六月十三日巳剋大佛殿前庭生二蓮三莖一惟公家召二陰陽寮一占惟兆有二刀兵火事之驚一卫未年人有二病患一還二其所一歟云云

（十八）鷹司殿隅田川の歌　近頃鷹司關白殿下日光山にまうでさせ給ふをり江戸に御逗留ありし廿七日隅田川にて「はる〳〵とここひこし我をまたてちる堤の花の心みしかさ」木母寺にて「古塚のむかしをとへは白川の花にはなれし人の俤」云々花にはなれしは花には馴し歟花に離し歟可レ尋人のいふまゝにこゝにしるしつ

（十九）佛像不レ用レ膠幷御衣木　玉海養和二年（壽永元年也）六月四日の條に此日奉レ始二一尺三寸十一面像一智詮阿闍梨加二持御衣木一此佛如法可レ奉レ造仍佛師授二五戒一以二柏木一可レ奉レ造不レ可レ加レ膠又不レ可二押レ薄幷彩色一是依二近日之夢一所レ奉レ造也殊以レ有二存旨一如法可二造立一即於二智詮壇所一每日受戒滿二兇遍一來十三日可レ奉二造出一也勸二進家中男女一給二其料物一是又爲レ先二化他一也即以二結緣衆名帳一可レ奉レ籠二尊像之中一也云云按に御衣木の事古書所見おほし吾妻鏡百練抄などにも見ゆ頭書下學集下卷十九丁右器財門に御衣木ミソキ造レ佛材木也

（廿）沽價法　玉海治承三年七月廿五日條に頭中將通親朝臣送二書於基輔一云万物沽價法可レ令二定申一者其狀如レ此

近日万物沽價殊以違レ法非二唯市人之背一法殆及二州民之訴訟一云々寛和延久之聖代被レ定二下其法一云々隨去

保延四年且用二中古之制一且任二延久之符一宜二遵行一之由重被二宣下一云々今度猶可レ被レ用二彼法一歟將又驅馳推移時俗難レ隨者新可レ被二定下一哉就レ中錢之直法還背二皇憲一雖レ宜二停止一濱家日域以レ之爲レ祥私鑄錢之外交易之條可レ被二寬宥一歟其法可レ用二寬和沽價之准直一歟又可レ依二諸國當時之濟例一歟將新可レ被二定下一歟此等之趣殊可レ令二計一申給レ者依二天氣一言上如レ件

以二此旨一且可レ令二披露一給レ候通親恐惶謹言

七月廿五日　　右中將通親上

進上　美作守殿

禮紙狀也

退言上

參入言上之間且爲二御不審一內々所二申上一所也於レ今申給之趣者企二參入一可レ承候以二此旨一可レ令二申上一給レ候恐惶謹言

請文案如レ此

萬物沽價法可レ被二定下一事可レ令二計申一之由謹以承候了抑如レ此事以二短慮一輒難二定申一歟去年被レ下二制符一之時此事存レ爲二朝家要須一之由尤可レ被レ定二下其法一之旨令二言上一許也於二其上之子細一者愚意暗難レ及歟先被レ仰二法家及官底使廳等一止令レ注二子細一之後可レ及二議奏一歟且以二此等之趣一可レ被二洩奏一狀如レ件

七月廿五日　　右大臣

此事晴不レ能二注進一價也代々使廳之沙汰也先法家勘二申本條一幷使廳官底止雖レ進二度々制府一且勘二申當時官行事所及藏人所色代撿納之制諸國濟例等一斟酌彼是一且問二有識一且及二評議一可レ被二定下一事也凡我朝衰弊只在二此事一仍去年雖レ令二注申一獻制之中不レ被レ載二此事一不レ叶二時議一歟之由令レ存之間令レ有二此沙汰一尤可レ謂二善政一歟始終之沙汰能可レ被二計行一事也凡此貫首方事糺二篤法一申行云々可レ謂レ賢云々但遇レ法歟

（廿一）「志ゝ」「せし」の差別　「ゑし」と「せし」とい ふ詞常におもひまがふめりこは必差別ある詞にて相通ふものからおなじからずと知べし富士谷成章があゆひ抄五ノ十八丁に「ちらしゝ」「すぐしゝ」など靡なき詞なれば「ちらせし」「すぐせし」などよむべからず「見せじ」「きかせじ」などもおなじやうにおもへる人もあればいふ也云々又云「しゝ」は俗に「シタ」といふ心「させじ」は「サセマイ」といふ心也云々本居宣長が玉

霰四十四丁に「おはしましゝ」などいふべきを「おはしませし」といふはわろしすべて「坐（マシ）し」は皆「ましゝ」座」といふ例にて「ませし」は俗也云々與清曰「あれましゝ（生）」を「生（アレ）ませし」とはいはず「ゑろしめしゝ」を「ゑろしめせし」ともいはず又「せしかども」を「しゝかども」とはいはず「せしまに」を「しゝまに」ともいはず此等の類必別也又「くだしゝを（下）」と「出（嫁）がてにせしを」といふはおなじ語勢なから通はしては用がたし都て上よりつゞく詞には「ゑし」といひつゞかぬ詞に「せし」といふと心待（安見知之）べしつゞく詞に「せし」といふはみな後の誤也「やすみしゝ」「生（アレ座）ましゝ」「ゑろし（知）めしゝ」「食（幸）たゝしゝ」「いでましゝ」「作（ツク）らしゝ」「いましゝ」「下（クダ）しゝ」「散（チラ）しゝ」「くらし（暮）しゝ」「かへし（歸）しゝ」など上よりつゞく詞みな「しゝ」といへり「せしかども（爲御祓）」「せしやうにして（爲行幸）」「せしみそぎ（爲嫁）」「みゆきせし時（爲間）」「せしまに（爲嫁）」「出がてにせし」など上よりつゞかぬ時は皆「せし」といへりかゝれば「おはしましゝ」を「おはしませし」「おはしゝ」を「おはせし」「見そなはしゝ」を「見そなはせし」なども「おはしましゝ」などいふは誤なり令（セ）御坐（スハシマ）爲御坐（スハシマ）令見給（ミソナハシ）爲見給（ミソナハシ）などは文字に譯して御坐令とはいはれど御坐令（セ）爲（シ）とはいはれず御坐（スハシマシ）爲といふを御坐（スハシマシ）爲々といはるるなどおもふべしすべて「セ」は令也仰（オホ）する詞也「し」は爲也爲（ナス）と也と知て活用の味をさとるべしされど「おこせし」といふ詞ありおこす（オコス）は令送來義送是等は後に考へ定むべし

○おこせし云詞　新勅撰雜四能因「よそにのみ思ひおこせしつくはねの峯のゑら雪今日見つるかな」玉葉春上和泉式部「見るほどにちらはちるらん梅の花しつ心なくおもひおこせし」同雜一爲家「ふみわけて今日こそ見つれ都よりおもひおこせし山のゑら雪」

○せしと云詞　万葉三廿八ウ廿丁歌思辭思爲師云々同十四丗丁に安可胡麻我可度乞乎思都々伊底可天爾世之乎見多乞思伊敵能兒良波母伊勢物語（傍注本上卷十八丁ウ）に「花にあかぬなけきはいつもせしかとも今日のこよひにには時はなし」又下六丁ウ「このおうなのせしやうにゑのびてたてりて云々又下八丁ウ「戀せしと見たらし川にせしみそき神はうけすも成にけるかな」又下十六丁オ三條のおほみゆ

きせし時紀の國の千里の濱にありけるいとおもしろき石奉れりき云々古今春下小町「花のいろはうつりにけりな徒にわか身世にふるなかめせし間に」同戀五遍昭「わかやとは道もなきまてあれにけりつれなき人をまつとせし間に」後撰夏よみ人志らず「ゆふたすきかけてもいふなあた人のあふひてふなはみそきにそせし」同秋上枇杷左大臣「をみなへしをりけん枝のふしことに過にし君を思ひ出やせし」

○志ゝと云詞　雄略紀歌に拖磨磨枳能阿娛羅儞陀陀伺施都魔枳能阿吳羅儞陀陀伺云々また倭我飫褒枳瀰能阿蘇麼斯志斯斯能宇陁枳舸斯固瀰云々万葉一十六丁ウに阿禮座師神之盡云々又同天下所知食之乎云々又廿二丁オ御獵立師斯云々同二廿九丁オに御立爲之島乎見時云々又廿九丁ウ御立爲之島云々又廿丁御立之島云々又上幸之宇陀乃大野云々又廿五丁ウ作良志之香來山之宮云々同三槻下廿九丁イ伊座之君我云々同槻下四丁ウ座之物乎云々同十一廿一丁オ辛衣君爾内著欲見戀其晩師之雨零日乎云々又四十四丁ウ白細布之袖反之者云々同十三廿六丁ウ君者聞之々二云々又廿八丁オ所遊我王矣云々又廿九丁オ遣之舍人之子等者云云又廿四丁ウ公之佩具之投箭之所思云々竹取物語抄下卅三丁オにかた時のほどくだしゝを云々源氏帚木潮月抄四十六丁ウに昨日もまちくらしゝを云々同末摘花廿三丁オに故宮おはしましゝ世を云々同須磨廿九丁オにゆゝしうのみおぼしゝに云々古今物名に「花ことにあかすちらしゝ風なれはいくそはくわかうしとかはおもふ」

○「せじ」と濁る詞は「せし」の裏表也　万葉十八廿一丁オに可弊里見波勢自等許等太兵云々伊勢物語下廿丁オに「枕とて草引むすふ事もせし秋の夜とたに賴れなくに」又戀せしとみたらし川の歌は上の「せし」の條に引つ竹取物語抄下八丁オに人にきかせじと云々後撰春中伊衡「竹ちかく夜床ねはせし鶯のなくこゑきけはあさいせられす」又同上「おほそらにおほふはかりの袖もかな春さく花を風にまかせし」

（廿二）新田義重の墓　新田義重の墓處は上野新田郡安養寺村にて不動を勸請すこれを觸不動といふそは義貞義兵を起す時越後國に軍勢催促して觸廻りしゆゑに然はよべりとなん關東御入國の比本多佐渡守成瀧隼人正巡檢せしに大光院の住寺呑龍上人今の大光院の寺中に御墓あるよし申て遂に大光院を御靈屋と定らる呑龍は越後の產高名の僧也と岡部の安部攝津守家中蘭田七左衞門千別物語き

（廿三）神武紀に見えたる井光が子孫　武州岡部の領主安部攝津守家中に吉野六郎左衞門といふものあり本國大和にて井戸神の子孫也といひ傳たり姓は藤原氏也こは神武紀に見えたる井光が子孫にて吉野より出たれば吉野氏にや藤原氏は後にみだりに稱せしならんと蘭田千別いへりさもあるべくや

（廿四）もろこしの佐國　謠曲の二人靜にもろこしの佐國は花に身を捨てと云々古抄に自昔此故事知レザル也ト云々謠曲拾葉抄に大系圖云從五位上掃部頭大江佐國平城天皇後葉式部大輔通直子矣本朝蒙求云佐國は何の許の人と云事不レ知其生甚愛レ花園中に花を植て目を悅て爲レ樂佐國死して蝶と成て園中に來ると其子の夢に告たり文略新撰朗詠云大江佐國詩云六十餘回看未レ飽他生定作二愛レ花人一ト云題ナリ此謠に唐土の佐國と有唐土に佐國と云者ありや未レ考或抄云樂天詩煙霞埋レ跡惜二花暮一佐國弄レ身不レ待レ春矣此義に依てかく作る歟猶尋べし或說に吉野に唐土と云所有此所に佐國住けりといへり此說よろしからず云々

廣益俗說辨殘編四十五の卷補もろこしのさこくは花に身をすて俗間つたへて唐人と思へり今按るにさこくは大江の佐國なり大江系圖を考るに佐國は朝綱が曾孫なり東見記を考るに佐國は播磨國諸越の產なり予聞二諸播磨土人一諸越在二賀西郡一今號二佐國村一洛陽にては葛野郡圓宗寺の向に佐國が宅の跡あり長明發心集に佐國が家の事を記す山城名勝志引二一書一曰證源法師扶二持大江佐國一佐國天性花を愛す其賦する所の詩多くは花を賞せり晩年吟曰六十餘回看不レ足他生定作二愛レ花人一此詩によりて後人附會していはく佐國沒後その子の夢に見えていはくわれ存命のとき花を愛する情にひかれ蝶と成て春ごとに花園にあそぶと告たり其の子もろ〳〵の花に蜜をぬりて蝶に供といひ傳ふこれを花に身を捨たりといふものなるべしおもふに此佐國を音によみ諸越を唐土にとりちがへ異邦人とあやまり來るなり因思癸辛雜識曰楊昊字明之娶二江氏少艾一連歲得レ子明之客死レ之明日有二蝴蝶一大如レ掌徊二翔於江氏傍一竟日乃去及レ聞二訃聚一族而哭其蝶復來繞二江氏飲食起居一不レ去蓋明之未レ能レ割二戀於少妻稚子一故化レ蝶以歸爾　宋高僧傳曰　釋道賢迨レ死

焚ㇾ之火聚中盡化ニ金色胡蝶一而飛去（大著閻集にも女の尸火葬のとき黄蝶となるのすこれらのたぐひ和漢同日の妄談なり俗書に引とこゝろ俗諺にあるところ事實をあやまる事尤多しこゝにはしげきをいとひて二三をしるす餘は終編に載べし云々大江系圖に平城帝――阿保親王――本主（備中守賜ニ大枝姓一）音人（文章博士）玉淵（從四下少納言）朝綱（三木文章博士）澄江（從五下）――通直（大學頭）佐國（從五下掃部頭）云々大日本史二百十七の卷文學傳に澄江孫佐國頗善ニ詩文一長久四年與ニ惟宗孝言源時綱一試ニ於弓馬殿一（百錬抄扶桑略紀令義解）仕ニ後朱雀後冷泉後三條白河朝一爲ニ掃部頭兼越前權介一云々類聚名物考人物部二に大江佐國從五位下新撰朗詠集の作者の中也烏羽院御宇にあたる名高き人なり云々本朝續文粹姓氏の條に江佐國朝綱曾孫叙ニ從五位上一爲ニ掃部頭一云々播磨事始經歷考下卷名所門に神東郡諸越ニ蔭山庄大江佐國ノ領ナリシ由佐國ノ歌ニ「もろこしの小萩か澤に影うつる月やさやけし秋の夜の空」云々播州古跡便覽下卷に神東郡諸越大江佐國の領地なるよし歌にもろこしの小萩が澤に影うつる云々與清按に諸越（モロコシ）といへる地名和名抄に美濃國方縣郡に大唐（モロコシ）の鄉あり相撲國名所に諸越が原ありこは村越の通音にて一村（ヒトムラ）を打越たる所をさはよべりと見ゆ日向郡名諸縣（ムラカタ）を牟良加多（ムラカタ）と訓るにても諸（モロ）は村（ムラ）の義なると知べし武藏久良郡諸岡（毛呂乎加）の鄉常陸國諸蒲郡同國鹿島郡諸尾鄉但馬出石郡諸杉神社能登羽咋郡諸岡比古神社伊勢多氣郡守山神社讃岐寒川郡武例（無禮）の鄉紀伊國牟婁郡牟婁（無呂）の鄉大和葛上郡牟婁鄉同國添下郡尾張栗栖郡美濃各務郡などの村國（ムラクニ）鄉の類いづれも通へる詞にてよしありげにきこゆ或は村（ムラ）或は宝（ムロ）或は杜（モリ）などに據れる語の轉れるなるべし

（廿五）塙（ハナワ）塙の字を「ハナワ」と訓て大坂の勇士に塙團右衛門ありこれは音便に「バン」ともいへり鹿島神宮の大宮司に塙（ハナワ）氏（ホキ）あり塙保己（ヤスミ）一（イチ）撿校など皆同稱にて「ハナワ」といへり類聚名義抄（法中卷）土部に臺壇壜壜垙塙七谷下墨（タカシ）云々字鏡集（四の卷）の土部に塙垙同壜同臺同壜同塚（タカキ）（ツチノナリ）云々倭玉篇（中卷）土部に塙（カウ）（タカシ）云々など見えて「ハナワ」と訓る古證なし重之家集（下卷）雜十首の中に「たけくまのはなはに立る松たにもわかゝとひとりありとやは見る」（一本にき又同卷）たけくまの松一もとかれにけり「たけくまの松も一もと枯にけり風にかたふくこゑのさひしさ」年をへてたれをまつとか武くまのと

きはにのみはいかでたのまん」此次の歌のときはを一本にははなわとあり空穗物語（初秋の卷）に「たけくまのはなわの松はおやも子もならへて秋の風はふかなん」奥義抄（中の中卷）後撰集釋の條に此松はむかしよりあるにはあらず宮内卿藤原元能といひける人の任に館の前にはじめてうゑたる松也みちのくにの館は武隈といふ所にあり此人ふたゝびかの國になりて後のたびよめる歌也武くまのはなわの松ともよめり重之歌云たけくまの云々ありとやはきく武隈のはなわとて山のさしいでたる所のあるなりとぞ近く見たる人はまうしゝ云々袖中抄（十六の卷）武くまの松の條に古歌云「われのみや子もたりといへは武くまのはなわに立る松も子もたり」拾遺集云「われのみやこもたりてへは高砂のをのへに立る松も子もたり」云々（按に「はなわ」と尾上は似たる所ないふなると此二首の歌をかうがへ合せてしるべし）今云宮城野武隈「はなは」館はひとつ所也云々歌林良材（下卷）に武隈松事古歌「われのみや子もたるといへは武隈のはなわにたてる松も子もたり」右奥州たけくまといふ所に二木の松ありこれによりて子もたるともいへり「はなわ」とは山のさしいでたる所のあるをいふなり云々藻鹽草（三の卷）隈部奥羽觀迹聞老志（五の卷）名取郡部等の說亦同和歌名所追考（百六の卷）陸奥名取郡部に武隈塙或は準輪山のさし出たる所を云則塙（ハナワ）と云在所もあり今は植松といふ云々倭訓栞（十四の卷）波の部はなの條に奥儀抄に武隈のはなとて山のさし出たる所也と書せり（ル）今も所の名に「はな」とも「はなわ」ともいふもの多し鼻回（ハナワ）の義也山鼻などいふ名義も同じ云々與清按に「はなわ」の「はな」は源有房集に「かすみたつるしまのはなを見わたせはたみかへしたる心ちこそすれ」神名帳に遠江國濱名郡部に猪鼻（ノハナ）湖神社云々更級日記に遠江のゐのはな坂云々後鳥羽院熊野御幸記に紀伊の猪鼻（ノハナ）云々北國紀行に武藏のちやうのはな云々など皆「はた」の通音にて端也「わ」は回にて浦回（ウラワ）裾回（スワ）などおなじくいり曲たる所をいふされば端回（ハナワ）の義なれば假名も波奈和（ハナワ）と書べし江戸の高繩は高き處の繩手道にて高繩手の義古き合戰の書どもにも高繩と書たるがよろしきを今高輪と書は誤にて端灣（ハナワ）とは別也（頭書旅宿問答一丁カに武藏ノ鮫ノ鼻和ト云地アリ鮫ハ在鮫アリシ處也上鮫ニモアリシニヤ）

（廿六）植木鉢植井布入の植木の始　水野氏が草木錦葉集緒卷鉢植（フイリ）布入の濫觴の條に染井の野夫三之丞

といへる者 江戸にて橛株に梅を接たるは此三之乗なるよし聞傳ふ鉢植盆立の梅を作り初たるは根岸村篠田壽軒なり地錦抄といふ六冊の草子を作り草木の培養に心を用ひしるし置たるは元祿寶永の比の事也其の後同所の野夫伊兵衛其書を増補して正書を加へ植作り方を再工夫したれど皆花壇植の事にてたま〳〵あるは石臺植也其比迄は鉢植はいまだひらけず又近來岩崎常正といふ人著したる草木育種の二巻に養ひかた委しくあれど是も鉢植の事而已にあらず云々又云鉢植の事は享保の末元文の比神木原十太 此仁は永縞の先生也中白柾燒刃青木は此家より出る山角等の仁へ此山角より終ふくりん出る青木ふくりんいで上方へ登す其後江戸に絶又上方よりくだりたる故雞波といふ也 抔へ植夫より鉢植追々開けたり漢土には其以前より鉢植有たり其比も渡り燒の鉢稀にありたるよし永縞又は金王榮傳などの物語也鉢植の初りたるは至て近來の事也花壇へ植る事はいつの比より初りたるかその濫觴をしらず云々又葉染分たるごとく縞に白くなるをいにしへは筋といひ又銀葉ともいふ安永の初比より斑入と唱へ白くなるを白布といひ黄色になるを黄布といふ覆輪又は砂子布ぼた斑と云もあり無地の黄色なるを黄金といふ葉のかはりたるを葉替り又は葉形物と名付たり云々與清曰草木錦葉集は四谷の御番衆の旗本水野某の作也假名に水のげんちうきやうと書き又四谷住御鉢植作留藏といふ隠名を記したり須原屋茂兵衛が書林にて發行す全編は未レ見板行は先七巻なれり抑植木を樂たるは晋書潘岳傳に築レ室種レ樹逍遙自得といひ宋陳和卿清陳淏花隱翁花鏡撰者などに漢土にも其聞人いとおほく衆好は作り木を口をしなどもいひたりき

(廿七)清文鑑 清文鑑は滿洲字を譯したる書にて八套卅二巻あり 御製增訂 清文鑑序稽レ古語 言文字之傳不レ能レ不レ隨レ方隨二時代一爲二變易一將欲レ觀二其會通一惟音義兩端爲二之樞筦一獨是施二之於繙譯一則以二字之不レ得二其音一而舛者亦以二字之強一索 其義一而遯舛譽評二通鑑輯覽一糾二前史譯本失一眞則有レ校二正金元國語解一之命及レ製二西域同文志一序諸作復連類而引伸レ之竝增訂 清文鑑告レ竣並爲レ頒二厥指一以レ詔來者云々每門首著二國語一旁附二漢字一對レ音或一字或二合三合切音俾等量者不レ爽二苗髮一而字之淆於レ不レ得二其音一者斟矣詮釋具以二日用常言一期人共曉二

其俗解一攷二拾陳編章一句及以之手者也爲文者悉汰之而字之汨於レ強二索其義一者ヒ抑又尠矣綜計續入新定國語五千餘句若二古官名冠服上一器用鳥獸花果等一有レ裨二參考一者ヒ別爲二補編一云々乾隆三十六年十二月二十四日とあり

(廿八)杼上の奕の名 并貝掩 姫百合草紙 上下二巻松會板とあり寛文已前の草子 上巻一丁にまづ杼の上の遊にはらんごむさしごいりかねありやなしや十たらずぬす人かくしまゝ子だてとさの入江の舟ちがへひやうごわたしさるがへりさゝだてしまだてめつけ石かすをつくして遊びたまひけると云々按にむさしごは今の十六武藏といふ類なるべしいりかねはかりがねなどの誤にや可レ考又一丁こんどは貝おひなるべしとていとうつくしき貝どもをそろへ給ひけり先難波津より參りたる梅の花貝をはじめて竹のうらばの雀貝杜に聲ある鳥貝浪打あぐるすだれ貝鷹の尾にきく尾形貝なみ白糸の鎧貝蟹の衣のうつせ貝不破の關屋の板屋貝波とや花の櫻貝柳のうらの楊枝貝このみひろふ栢貝波にぬれたる釉貝や日もくれかたのすはう貝かやうの貝どもをそろへてあそび給ひける云々按に貝掩の事は二見浦伊勢真文又は雅游漫錄などに見ゆ

(廿九)林祭酒の諱 今の祭酒林大學頭諱は信衡といへるを省て林衡と書れたるが碑文などにも見ゆこは賤官の稱なるを心づかずしてものせる也晋書張協傳の七命辭に虞人數レ獸林衡計レ鮮と見えて虞人に對したる賤官の稱也

(卅)船中の紙纖并湊入の火 船長日記 尾張國の船頭重吉といふもの名古屋の納屋町小島屋庄右衛門が千二百石積の督乘丸に文化十年十月尾州殿の廻米を積て江戸に來著し歸るさに雜風に逢ひ異國にたゞよひしありましを文政五年十一月池田寛親が聞書 上巻に紙關を以て船長日記上中下三巻にはしたる也して船長日記上中下三巻にはしたる也神宮の神勅を伺て事を計る也此紙くじと云は一升枡に米を八合程いれ紙を一寸四方に切て思事を書付丸めて其上に置扨太神宮を念じて一万度の御秡を其上にかざせば丸めたる紙のうち一ッ飛あがりて御秡へ付也それを見て知ること也此御告はいさゝか違となしされば日本の船頭は太神宮の神託のみにて船を乘侍る也と重吉はいへり云々又云暗夜に湊に近付たる時方角知ざれば是も又湊入の火を見せ給へと太神宮を祈念して目をひらけばその湊の方角に必火三ッづゝ見ゆる也やがて磁石をあてゝ方角を定め終れば忽火は消る也是は常に如レ此也とぞ云々

(卅一)船玉の去といふ事并天后の傳　同書同卷に船玉のさるといふ事はすべて船玉とは船のぬし也帆柱を建る筒の下に納め置事也紙讃一對其船主の妻の髮毛少し雙六の簑二ツサイノ目ノ置方アリ此三品を納置を船玉といふ也難船ある時には必此船玉去也難船したる船を見るに必船玉はなきもの也とぞ難船すべき以前に何ぞに化して逃去事も有と云々與清按に船靈の事余已に船靈記にいへりまた西國にて水天宮と稱し天妃を祭るは漢土の神也そは福建省誌天后本傳などに見えて姓林氏宋太祖建隆元年庚申三月二十三日誕生す父ハ福建都巡官林愿母ハ王氏也天后十六歲窺レ井得レ符遂靈通變化驅レ邪救レ世屢顯二神異一常駕レ雲飛二渡大海一衆號曰二通元靈女一越十二載道成白日飛昇時宋雍熙四年丁亥秋九月重九日也と本傳に見ゆ福建省誌には后林姓世居二莆之湄洲嶼一宋都巡撿林愿第六女也始生時地變レ紫有二祥光異香一長能乘レ席渡レ海乘レ雲遊二嶋嶼間一宋雍熙四年二月十九日昇化とあり常陸水戸の浦邊に處々天妃の宮あるは西山黃門の祭給ひしなるべし今筑後に水天宮とて靈驗の宮あり久留米侯の赤羽の邸にも祭りて毎月五日を緣日とし虎門外の丸龜侯の邸中なる讃岐金毘羅權現の毎月十日の緣日に抗衡して參詣の男女老少幾千人といふ限をしらず天后の詩六十一の卷に載可二考合一頭書小窓雜筆に天妃の事有瑯琊代醉編廿九ノ廿二丁ヨカ天妃

(卅二)雪車橇并蝦夷の犬　雪車は倭訓栞に會津風土記を引て雪車雪舟など書よしいへりそりたる形ゆゑに名とす史記に橇に作り漢書に毳に作る注に以レ板爲レ之其狀摘行二泥土一と見ゆともいへり與清曰雪車橇は別物也閑田耕筆に或人の紀行を載たるに出羽のサウ子坂の條ありてそりかんじきのさま見ゆ橇は足にはくもの雪車は輿駕の類にて乘物なれば共に雪道の具ながらおなじからず夫木集冬三にそりのつな手そりにのるそりのはやをなどよめる歌三首あり船長中卷にカムサツカの事をいひて此國多は雪三丈五六尺計積る云々扨そりに乘て犬に引せてありく也雪舟をサンカと云木を二本竪に並べて其上に巨燵やぐらのやうに組たて中を高くして跨て乘らるゝやうに皮にて作りたるが綱を付其綱を犬五疋か六疋にてひかするによき犬を先に立二側に立て引するなり後に立なる犬はあしくてもよし四辻にいたれば犬何方へかゆかんと差圖を待て居る時カツ〳〵といへば左へ行ホガ〳〵といへば右へ行ヒロ〳〵といへば直に行也ア、〳〵といへば止る也棒の本の方をとがらし頭の方には錫仗のごとき銀の輪を付たるものを持て木などに行當るか又は傍へ寄過などする時はその棒のもとにてこちて直す也犬のすゝまぬ時はそれを振上て鐵輪をガラ〳〵とならせば先に立たる犬進出る也かくしても進兼る時はエッカナイトロバウメなどいふ心也エヒヨーノマツイマ〳〵シイヤツなどいふ事也ソバカ犬と云事也といひて前に立たる犬を彼棒にて打ば先に立たる犬かけ出すなり先に立る犬はよき犬をよく仕込たるならではよろしからず雪の上のみを行なれば其中にも人々踏ならして一筋かたまりたる所を行にもし傍なる和なる所へ半分かかれば雪車橫ざまに倒れて人も橫ざまに落るを犬はかまはずむしやうに引て行を先に立て行人あればとめてくれる事也下り坂になれば彼棒を前へ押がひあひしらはざれば進過る也一軒の家にても是は誰か犬彼はたが犬とて銘々に食をあたへ飼置事也食は「セリジ」(ニシン)の事を五六ハヅ、與る也遠方へ行時は前夜に八ツ九ツ計も食せ置て其朝は先へ行つくまでくはせぬ也はやく行てくはんとていそぐ也云々按に犬に雪車を引すると蝦夷草紙東遊雜記などにも見ゆ

(卅三)曆に黑日多き年は豐稔黑日少き年は凶作　或人の說に曆に黑日多年は必豐稔にて米價卑し黑日少き年は凶作にて必米價貴し黑日は民間耕作によしある日にや御代官を叙せらるゝ日は必黑日也といへりさもあるとにや文政十一子年曆の黑日少して凶作米價甚貴く同十二丑年は黑日多して米穀豐なりき

松屋筆記卷之六十一

東都　平與清文儁稿

(一)淺草下谷の曹洞宗の寺院塔婆の垣を止る事　桃水和尚傳贊六丁に師江戸ニ在留ノ中ニ下谷ノ寺ニ下錫セラレシ時其寺板ノ塔婆ヲ幾百枚トモナク繞シ立テ寺境ノ垣ト爲シ且時々ニ僕ガ菜園ノ糞ヲ塔婆ニ打カケルヲ見テ額ヲシワメ某寺ニテ自分ノ施物ノ有次第日々街ニ出テ板ヲ買來テ取カヘテ垣ニ立テ塔婆ハ角田川ニ持行テ流シテ誦經セラレケル寺主菜園ヲ巡ル次デ板ノ垣ヲ見テ厨下ノ僧ニ問テ咎メランケレバコノ頃ノ下錫僧ノ我錢ニテ板ヲ求メ立テ垣ノ塔婆ハ川ニ流サルト答フ寺主感恐ク意ヤ起リシ今マデアリシ垣ノ塔婆ヲ遣サズ川へ流シテ跡ヲ皆高屏ニセラルコノ事諸方ニ風聞シテソノ比下谷淺草の洞家ノ寺ハミナ塔婆ノ垣ハ無リシトゾ云々與清按桃水和尚傳贊一卷は寛延二年九月十九日に記せるを明和五年戊子仲冬五日肥谷雲龍山清潭禪寺に藏板せる也卷首に洛北鷹峰桃水和尚傳贊師ノ諱ハ雲溪號ハ桃水生國ハ筑後柳川城下ノ商家ノ子也云々七歳ノ時捨テ、肥前圓應寺ノ圍巖和尚ニ送リ剃髪セシムルナリ云々と見ゆ天和三年癸亥九月十九日洛北鷹峰にて寂す年齡未レ詳但辭世に七十餘年快哉屎臭骨頭堪レ作ニ何用一咦眞歸處作麼生鷹峰月白風清とあれば七十歳許なるべし乞食の行をなして悟道せし大德也

(二)馬の沓草鞋幷肩輿舁大津繪　同書廿丁に師大津ニ居テ馬沓草鞋ヲ作テ毎日持出テ賣ラレケルニ後ニハ皆アツラヘ出來ルヲ待樣ニテ大津ノ翁ガ沓ト謂ケル居所ハ商人ノ藏ト藏トノ間ノ六七尺バカリ空タル所ヲカリ藁ヲ葺タヾ夜臥バカリノ爲ニテ炊爨ノ器具ナクコヽニテ沓草鞋製テ餅ノ樣ノ物ヲ買テ二年バカリヲ送ラル或時馬子ヤ肩輿舁共ガヨリ合テ謂フ樣ハ翁ガ處ニハ佛ガ無イ佛ノ無ハ切支丹ト云フナゼニ佛ヲ置ヌゾト云ヘバ翁ガ云樣ハ飯燒ヌ處ハ佛モイヤガルト聞人ミナ大笑シケリ翌日ニ一人ノ馬子大津繪ノ阿彌陀ヲ一幅持來テコレ翁ヘ遣ルゾ持佛ニセヨトテ與ヘケレバ佛ハイラヌト云ニ無理ニ持カケテセマキ所ニトツブヤキナガラ受取テ置レケル隣家ノ者翁ガ他出ノ跡ニ見レバ佛ヲ掛テアリ上ニ文字ラシキモノ書付タリ讀テ見レバ狂歌一首浮炭ニテカヽレタリ

「陰ケレド宿ヲカスゾヤ阿彌陀ドノ後世タノムト思シメスナヨ」云々與清曰馬の沓草鞋など作りて賣肩輿舁などのわざするもの寛永年中にもありけんと知べしワラヂは藁沓の略也大津繪は近世奇跡考二の卷に元祿の比より古くは所見なきよし見ゆされど此桃水和尚は寛永中の人なればそれより以前に有し也

(三)紙子　同書廿九丁に泉州成合寺ノ愚白和尚ハ師ノ同行子ナレバ在所ヲ聞出シ正月末マダ餘寒甚シキニ知順ヲ伴ニテ新シキ紙子ヲ製テ、尋行玉フニ云々與清按に鷹筑波集卷第一十七丁板原三郎兵衛宗朋句に「紙子ばかりをかさねきる海士」「お比丘尼の身も清水にこもりゐて」とも見ゆ鷹筑波集五卷寛永十五年五月廿五日長頭丸の跋ありて板本也貞德俳諧の點あはせられたる中の佳句どもを集られたる也犬筑波に對へて鷹筑波とは名づけしなるべし

(四)桃水の語明惠の語に近し　桃水和尚傳贊廿一丁に角倉某ト云ル京ノ富家黃葉の黃泉和尚ニ歸依セリ師ノ事ヲ聞及テ家ニ請ジ宿セシメ因ニ坐禪ノ用心ハイカヾイタスベキヤト白シケレバ師天井ヲ仰觀テ醬油ハ土用ノ中ニ造テヨシ未醬ハ寒ノ中ニツキテヨシトバカリニテ外ニ言ハナカリケル云々與清按に砂石集遊柿などに鎌倉執權北條泰時捋尾の明惠上人に治國脩身の道をとはれしに人はあるべきやうと答へられたると見ゆ同口の談といふべし此を今の文政年間の俗語にうつさばおつにをかしくといひてあるべし

(五)極樂を通り過てはと云狂歌　同書廿一丁に角倉一家ノ中ニ黑谷ノ某和尚ト云ニ歸依シ所作ヲ繰トテ一日ニ幾万遍ヲ滿ゼヂバト云テ茶話シナガラ念佛唱ス人アリ師ヲ拜シテ念佛多ク唱スコトヲ白シテソノ上ノ御示ヲトテ乞ヒケレバ師傍ニ硯ノアリシニ筆ヲ染テ狂歌ヲ一首書テ與ヘラレケル「念佛ヲ强テ唱スモイラヌモノ若極樂ヲ通リ過テハ」とあり與清按此歌世俗の口に膾炙して一休の歌とするは誤にやまたは一休の古歌を桃水の書れしにや可レ考

(六)招提伽藍道場　集千家註批點杜工部詩集卷之一遊二龍門奉先寺一詩に已從二招提遊一更宿二招提境一云々注に師古曰釋書招提菩薩皆古佛號故寺謂二之招提一或名二伽藍一或名二道場一云々與清曰招提伽藍道場の義釋氏要覽上卷十九丁廿三丁住處部に見ゆ杜詩の集千家註批

點は宋の大德七年癸卯冬盧陵劉將孫尙友が序ありて卷端に須溪先生劉會孟評點とあり全廿卷初に年譜目錄附錄及文集二卷を附す元末初明の板本とおぼし雲衢會文堂戊申孟冬刋とあり戊申何れの戊申にや

（七）酒を聖賢といふ事　同集卷之一對雨書懷走邀許主簿詩に座對賢人酒云々注に魏略魏太祖時酒禁人竊飮之故難言酒以清者爲聖人濁者爲賢人云々與清曰聖賢酒の故事三國志にもあり万葉集三大伴旅人卿の歌に引注すべし

（八）歌に學者の體歌讀の體ある事　寂蓮は歌人顯昭は歌學者にて常に爭論をなし獨鈷かまくびといはれたり實に幽玄平淡の體寂蓮に及べくもあらずされど袖中抄の撰六百番歌合の判など顯昭が力見えて世の爲人の爲其益少からず杜詩集千家註一の卷春日懷李白詩の注に遯齋閑覽云或問王荊公云編四家詩以子美爲第一太白爲第四豈白之才格詞致不逮子美耶公曰白之歌詩豪放飄逸人固莫及然其格止於此而已不知變也至於子美則悲懽窮泰發斂抑揚疾徐縱橫無施不可故其詩有平淡簡易者有綺麗精確者有嚴重威武若三軍之師者有奮迅馳驟若泛駕之馬者有淡泊閑靜若山谷隱士者有風流醞籍若貴介公子者蓋其詩緒密而思深觀者苟不能臻其閫奧未易識其妙處夫豈澄近者所能窺哉此子美之所以光掩前人而後來无繼也元稹以謂兼人所獨專斯言信矣とあり杜詩を見れば其學才李白に優れるとおもひやらる學者は世の歌人の體に抱すして新奇工妙故事意達の作を思ふべし

（九）狂歌　本居宣長が玉勝間に本朝文粹の狂歌といふを引てめづらしけに記し今の狂歌の名に似たるよしいひたれどこは詩に常に用る字也杜詩集千家註一の卷贈李白詩に痛飮狂歌空度日飛揚跋扈爲誰雄とあり韻府にも張九齡が後漢徐徵君碣及杜詩白居易詩を引たり白氏文集には題に狂歌とありこれは酒狂などの時に作るよしの詩也

（十）私鑄錢　杜詩集千家註十九の卷歲晏行に往日用銭捉私鑄一今許鉛錫和青銅云々注に唐制盜鑄者死沒其家屬至天寶間盜主益甚雜以鐵錫无復分銖形號公鑄者爲官爐錢云々按に私鑄錢の事唐書六典通典通考に見ゆ本朝唐法に據て私鑄錢の律を立

給へり

（十一）磬折　儀式の書に磬折の字面おほく見ゆ杜詩集千家註十九の卷遣遇詩に磬折辭主人云々注に洙曰莊子漁父篇曲腰磬折云々腰を曲ること也禮記史記西門豹傳後漢書馬援傳管子などにも出たり頭書筆記五十八ノ卷ノ四十四段

（十二）とほじろく　万葉に川の貌を遠じろくとよめり杜詩集千家註十六の卷悶の詩に卷簾唯白水隱几亦青山とあり白水は水面の白きをさしていへるなれば遠じろくのしろくに叶へり

（十三）氷魚いさゝ　京都に氷魚あり若狹にいさゝありいづれも川魚の白小なる物也杜詩集千家註十六の卷白小の詩に白小群分命天然二寸魚細微害水族風俗當園蔬入肆銀花亂傾箱雪片虛生成猶拾卵盡取義何如とあるは似たる魚なるべし

（十四）一万春　歌に千代の春万代の春などよめるに杜詩集千家註十六の卷承聞河北諸道節度入朝歡喜口號絕句十二首中に聖壽宜過一万春とも作れり

（十五）屠蘇　杜詩集千家註十七の卷槐葉冷淘詩に願隨金騕褭走置錦屠蘇云々注に洙曰金騕褭馬也脩可曰屠蘇字或作廔蘇玉篇云廔蘇庵也通俗文屋平曰廔廣韻云廔蘆草菴又屠蘇酒蓋昔人居廔蘆釀酒因名今詳是詩走置錦屠蘇正謂屋也古樂府揷腰銅匕首障日錦屠蘇云々按に延喜式江家次第公事根元等の屠蘇散に注すべし

（十六）河伯馮夷　河伯の事余已に河伯靈面記にいへり杜詩集千家註十八の卷天池詩に欲問支機石如臨獻寶宮云々注に穆天子傳天子西征至陽紆山河伯馮夷之所居天子沈璧禮焉河伯乃與天子披圖視典以觀天下寶器云々胡應麟が筆叢辛部莊嶽委譚上に馮夷之爲河伯甚說遠矣好奇之士濤張眩惑紀載寖繁即特立自信說君子亦但斥言其妄而未嘗不以河伯爲水神也乃余獨于竹書紀年而得其說焉紀年載帝芬十六年洛伯用與河伯馮夷鬪夫洛與河國名也伯爵也用與馮夷人名也謂河伯河神則洛伯洛神耶夫洛伯能與河伯鬪矣胡用之爲神寥々後世而馮夷獨盛稱耶觀池十六年殷侯以河伯之師伐易則河伯爲諸侯而馮夷非神鬼昭々矣穆天子傳河宗伯天爲穆王乘副車導之極於西土而後返則當時柏天亦造父奔戎之屬證從穆王者籍如後世所謂魚身人首

何以周ニ旋天子之側一哉夫九歌屈氏之寓言而秋水莊生之幻說本末皆謂ニ實有一且絕不レ道ニ馮夷之名一而茂先博物成式酉陽從而爲レ說以實レ之吾不レ可ニ以不一レ辨亦幸而得ニ之竹書一也段氏引ニ河伯姓名口家一井讖ニ于後一以廣ニ異聞一酉陽雜俎云河伯人面乘ニ兩龍一一曰氷夷一曰馮夷又曰人面魚身又金匱言名馮循一作修河圖言姓呂名夷穆天子傳言無夷淮南子言馮遲聖賢記言服ニ八石一得ニ水仙一抱朴子曰八月上庚日溺レ河按首所レ引山海經何圖蓋緯書也云々此二書をも引て再說を立べし

（十七）粔籹（オコシゴメ）　杜詩集千家註十八の卷戲作ニ俳諧體一遣レ悶二首の其二に於菟侵ニ客恨一粔籹作ニ人情一云々注に蒼舒曰宋王招魂粔籹蜜餌有ニ餦餭一注云粔籹以レ蜜和ニ米麵一煎作レ之粔奇舉切籹音汝云々按に和名抄十六の卷麴糵類部に文選注云粔籹（オコシゴメ）巨女二音和名於古之古女以レ蜜和レ米煎作也云云舊本今昔に與米と書き桂川地藏記に道德與米とあり延喜式七の卷十七丁ウにも見ゆおこし米といふは煎て與ふくたむるゆゑの名也頭書猫ノ草子十五丁ウ

（十八）八座　參議を八座といふは員數八人ある故の名にて本朝文粹文德實錄などに見え職原抄參議の篇の諸注にくはし唐の八座は六尙書左右僕射ニ合爲ニ八座一云々通典通考唐書百官志など考合すべし三國志

（十九）緜袍　敎餘于嗚集三の卷贈ニ人緜袍一詩に藭末泜塞屬爲貽新製緜云々同十一の卷緜袍記に余有ニ新製一緜袍ニ近頃得ニ之人一矣此邁ニ塞之具而蓋不レ知レ所ニ其名一爲ニ其形一無レ可ニ比況一者ト惟片々輕樣則便ニ乎起居一其製也背一幅長二尺許割ニ一領一垂ニ之兩肩一以見ニ於前一尺餘有レ襟而無レ袖兩腋不ニ合縫一云々按に緜袍は木棉の上着の義也敎餘于嗚集十四卷元祿九年柔兆困敦葭賓念日白巖山和南が序あり刋本也其師昌山空堂妙有法師の詩文集にて妙有は日蓮宗也日蓮宗には深草元政昌山妙有などを學者と稱すべし頭書見聞集三ノ廿七丁ウ木綿布子同廿八丁ウ木綿の始木綿袴同廿九丁ウ

（廿）蘭アラヽギの辨　同集七の卷蘭詩并序あり序に餘好嗜レ蘭淹矣此比復得ニ數莖一其葉最長其花殊香保重因レ斯甚矣夫蘭瑞艸也能降レ神辟ニ不祥一然其種有ニ九種一其花有ニ數品一出處不レ同利用亦別諸家之說區而未ニ的識一故無ニ定論一春芳者爲ニ春蘭一色深秋芳者爲ニ秋蘭一色淡今所レ得蘭春秋俱花而香然古之香艸亦名ニ千金艸一或名ニ都梁一花葉俱香依レ莖葉澁爲レ佩或浴或焚今之蘭但花香而葉無レ氣此非ニ古人所一レ指明矣或曰本朝所レ玩之蘭此異國之蕙也今考此說非也蕙乃零陵香也葉如レ麻兩々相對以ニ七月中旬一開レ花與ニ今之蘭一大異焉然則所ニ流布一之蘭已非ニ澤蘭一亦非ニ蘭花一此彼山蘭之中一種者歟寇子朱氏之說黃庭堅之辨別並本艸正誤正レ之爲レ非又有ニ陸機之論宋濂之辨一未レ知ニ孰是一凡萬物依レ時因レ處而其號亦改易如レ以ニ難波之蘆葦一勢州爲ニ濱荻一那緊而可レ定焉詩に花如ニ鳥冕一葉菖蒲香徹ニ四維一鼻且豁自レ古楠檀芳譽甚商ニ量優劣一有耶無云々按に大和本草八の卷上本草啓蒙十の卷などに論辨せり蘭草は古歌にフヂバカマとよめる物にて楚辭の秋蘭也澤蘭ハサハアラヽギ延喜式アカマグサ和名抄ヒヨドリ俗言などいへり俗に春蘭といふは一名報春先花鏡獨頭蘭圖譜也秋蘭ハ蘭花也楚辭の秋蘭にあらず猗蘭ハ伊蘭ともいふ茶ランの事也馬蘭ハコンキク也鷄兒腸（ヨメナ）の類也香薷ハイヌアラヽギ延喜式イヌエ和名抄ズミアブラ奥州方言などいへりアラヽギハ顯ハレギ也「ハレ」の略「ラ」也「キ」ハ「クシ」の略にて臭也其香芬顯（アラハレチルカ）著をいふ名也頭書雜阜買裏集氏が蘭言（昭代叢書四十九）の張山來序に蘭蕙之辨言人人殊然而可レ無レ辨也其花同其葉同其香同祇莖之多寡開之遲早有ニ微別一耳云々木にもアラ

ラギ有木曾路名所圖會三ノ四十二丁ウ

（廿一）櫻川石の硯　同集十二の卷に硯銘上州之產也隨レ處名ニ櫻河一維石斑名ニ櫻河一水儻習不レ竭筆也學生レ花云々今世常陸の櫻河に思ひまがふる人あり上野の產なると此自注にしるし

（廿二）日本寺　同集十二の卷に正東山日本寺鐘銘あり大日本國下之總州香取郡中村鄉正東山日本寺者論說妙法之講肆傳持佛燈之靈窟也云々按に日蓮宗の檀林といふこれ也日本寺と稱せるはあまりしき漫號也鐮倉建長寺を天下禪林江戶高縄東禪寺を海上禪林または品川の東海寺などいふ類自負たる名ども也

（廿三）麻姑の手　同集十二の卷如意銘に五指爬レ痒智一葉支レ頤禪前代未レ聞處止觀尺餘全自注に一頭刻ニ手指一爲ニ麻姑手一一頭刻ニ荷葉一爲ニ助老一云々按に笠澤筆塵に麻姑手の事見ゆ頭書佛祖統紀廿六ノ十四丁ウ陔餘叢考能改齋漫錄七ノ金盤玉杯ノ條體源抄十末ノ百丁ウ濟北集六ノ四丁オ猝和子云々

（廿四）のそ〳〵と云詞　俗言にのそ〳〵歩行（アルク）などいふのそ〳〵は盜々（ヌス〳〵）の通音なり

（廿五）雪燒井鶉（ユキヤゲトリ）目の病　高麗陣日記中卷廿丁吉州より飛脚到來の條に人夫雪燒ニアヒテ手足不レ叶或ハ鳥

目ニナリ役ニタヽズと見ゆ今俗に霜焼（シモヤケ）といふも有

（廿六）まはり振舞　同書中巻（卅二丁オ）カクナミ勢來ル事の條に永々ノ辛勞忘レニト各廻振廻アリ云々按に互に饗を設て順番に客を招事也

（廿七）手子（テコ）の者手子仕（テコツガヒ）　井手子棒（テコボウ）　同書下巻（四丁ウ）大地震の條に其夜清正テコヅカヒ三百召ツレテコヲ持セ御城ヘマキリケレバト云々中巻（卅六丁ウ）陳州ノ城日本勢責條にも清正手ヨリテコヅカヒ三人甲州ノ手ヨリモ三人出合押掛石垣ノ角石ヲ引ハ子崩取ルト有テコヅカヒハ手子仕也テコヲ持セハ手子棒ヲ持せたる也手子の者の持棒なれば也今加賀殿の御手子といふは手子の者の略語也

（廿八）城下を根小屋井宿城と云差別　城下を根小屋といふと甲陽軍鑑など古き合戦の書におほし高麗陣日記附錄（卅五丁ウ）に平城の町を宿城といひ山城の町を根小屋といふとあれば差別あると也

（廿九）はり形井あづま形　淫具にはり形あづま形とてあり張形は女淫に比し東形は男淫に比す江戸兩國の四ッ目屋にて賣ひさぐと高名也宗鑑の犬筑波集に「あづまぢのたがむすめとかちぎるらん」「あふ坂山をこゆりはりかた」と見えたるにてはり形はその比よりありけることを知べしあづま形は此東路の云々の句によりていひ出し名なることおもふべし

（卅）つぼ〳〵　つぼ〳〵の事嚢に稻荷山田實の説を記し別に阿波からの殿にも書てまゐらせたりき犬筑波に「わらんべのえんにてくるふ藥師堂」「もてあそびぬる瑠璃のつぼ〳〵」といふ句あり引注すべし

（卅一）猿ちごといふ宗祇の句は誤　神風行嚢抄または東海道名所の書どもに宗祇伊勢行脚の時小童の木にのぼりたれば「さるちごと見るよりやがて木にのぼり」と口ずさみけるに小童「犬のやうなるほうし來たれば」と附たるよし見ゆ此句は犬筑波に出て宗鑑が句也宗祇といふは誤也頭書（犬ト猿不和ノ「日蓮書錄外三」に源平兩家自如ニ狗犬與ニ猴ニ云云又云麗ノ前ノ雄蛇ノ前ノカヘル猫ノ前ノ子ズミ犬ノ前ノ猿ト云々）

（卅二）違棚　犬筑波に「草紙一帖うせはてにけり」「わが部屋にとき〳〵物のちがひ棚」とありてふるき名目也頭書（筆記五十二ノ五十三段可ニ考合ニ三好享翁成記卅三丁ス）

（卅三）せんすりかはつるみ拵の字　俗に拵の字をセンズリと訓はつくりもじにて拵の字に然る義あるに非ずそは擁書漫筆のかせ杖（ツエ）の條にいへりかはつるみ

といふ事又同條に記す「センズリ」といふは無下に近世の詞とおもへるに犬筑波に「ほとけの前でせずりをぞかく」「けんと見てしたくおもふぞ文珠尻」といふ句あればその比よりの俗語也頭書（當拵は滑稽詩文の詞に見ゆかはつるみ字治拾遺一ノ十七丁オ）

（卅四）地獄の沙汰も金次第　俗語に地獄の沙汰も金次第といふは犬筑波に「きけばたゞ地ごくのさたも錢なれや」といふ句ありてその比は錢とひいたる也

（卅五）大唐「タウモロコシ」井こがしの粉　犬筑波に「日本のものゝ口（クチ）のひろさよ」「だいたうをこがしにしてや飲ぬらん」云々此大唐は今の唐もろこし也國によりて南蠻キビ薩摩キビタカキビ高麗キビ唐キビ豆キビ玉キビなどもいへり漢名は玉蜀黍なりこがしは今も麥こがしあり燒こがして粉にすればさいふ也犬筑波に「粟津の原の茶こそ苦けれ」「兼平やこがしを呑てかへるらん」とも有

（卅六）かいきの絹　今の世絹名にガイキとてありカイキの裏カイキの切など常にいへり犬筑波に「神もかいきをするとこそきけ」「山王のあたまのうへはひえの山」とあるかいきは掻（カイ）著の義歟打（ウチ）と掻（カキ）と通ひて打渡す打見るかきかそふなどの類おほかりこれ法師の頭に打著るものをかいきといひそれに用る絹をカイキノキヌといへるにても有べし

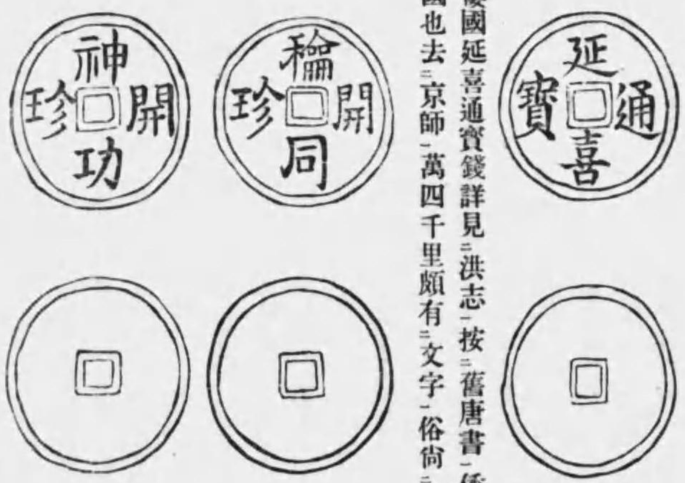
（卅七）鬼瓦　鬼瓦は河伯の形にてそは余が河伯記にくはしくいひたり犬筑波は「十七八は鬼にこそなれ」「さゝぎづる瓦の棟にはひかゝり」云々これ鬼瓦に角（ツノ）豆蔓（ギヅル）の延かゝれるよしの句也火防の爲に屋上に置事也頭書（鹿筑波五ノ廿七丁ウ守武千句第一ノ二丁ウに「せちふんや寺に、物はいはふらん」「瓦の鬼はそとへさびやうち」山姑詼詞に面の色はさにぬりの軒の瓦の鬼のかたちなこよひはじめで見る事をなにいたとへん長門平家十二ノ五十二丁ウ）

（卅八）火吹竹　犬筑波に「しりの穴より煙たつ也」「さしよする火吹の竹の竹こげて」云々是にて今の火吹竹のありさまおなじきことおもふべし

（卅九）治國治家の術　三國志魏書廿の評に伐ニ深根ニ者難レ爲レ功摧ニ枯朽ニ者易レ爲レ力云々按に豐大閤の天下を取たるは深根を伐らすして功遂し也此外古の例擧に遑なし又墝基不レ可ニ倉卒而成ニ威名ニ不レ可ニ一朝而立ニ皆爲レ之有レ漸建レ之有レ素云々威重を施し根本を固すること此辭にて了簡すべき也

（四十）古錢　本朝の古錢三才圖會に載せ異稱日本傳また彼國書の所見を抄出せり倭漢名數倭漢三才圖會

なごにも見ゆ錢錄卷十四外域諸品の條に延喜通寶和同開珍神功開寶萬季通寶隆平永寶乾文大寶の六種を載たり



右倭國延喜通寶錢詳見洪志按舊唐書倭國者古倭奴國也去京師萬四千里頗有文字俗尚周制

右日本國錢四種曰和同開珍曰神功開珍曰萬年通寶曰隆平永寶皆隸書洪志引舊譜並徑寸重五珠按新唐書言倭惡其名更號日本咸亨元年遣使來賀自云近日所出以爲名或云日本乃小國爲倭所幷冒其號則日本即倭耳故宋祁不別倭國傳

右日本國乾文錢宋史雍熙元年日本國僧奝然與其徒五六人泛海而至獻銅器十餘件幷國圖職貢今王年代紀各一卷奝然善隸書云其國交易用銅錢文曰乾文大寶按今所收錢缺大字如洪氏圖亦隸書與前四種同云々與清按に職貢今ハ職員令の誤也十餘件の件は宋史卷四百九十一列傳二百五十外國七日本國傳に事に作る錢錄十六卷清乾隆十五年勅撰也錢の事古錢銘制度通など考合すべし

(四十一)字面 并熟辭　熟辭を字面といふこと胡元瑞が筆叢に所々に見ゆ清の毛先舒が家人子語に忠孝二字字面自高澍云々とあり此書新安張潮字山來清人が昭代叢書九の卷に收て錢塘毛先舒稚黃著とあり

(四十二)西方要紀小引五大洲及路程 清人心齋張潮字山來が西方要紀小引に泰西之言以大地爲圓毬上下四旁皆成世畛云々本文國土の條に西洋總名爲歐邏巴在中國最西故謂之大西以海而名則又謂之大西洋距中國計程九萬里云一普天下萬國總分爲五大洲其一曰亞細亞中國在其東南古來相通者七十餘國如東有朝鮮日本琉球北有東西諸國西有回回小西天竺以至如德亞國南有安南交趾邏羅三佛齊緬國與滿剌加呂宋等地皆在此洲之內故中國圖誌如職方等俱有載之者自此最西一州名歐邏巴亦分多國各自一統其歐邏巴之南亞細亞之西名曰利未亞黑□國在其內其四在中國之東歐邏巴之西名曰亞墨利加其地廣濶大過于前三洲其五在南極地方名曰墨瓦臘尼加此五大洲万國總圖詳列之其中地度風景土產嘗著職方外紀可考鏡也云々また路程の條に從極西到中國多浮海二三年始至過小西天竺國登岸小西離大西六万里大概浮海盡夜行得風順者半載可至又有過大浪山不得到小西者必在黑人國過冬二年始抵小西天竺小西又須半載餘換舟行二三月方抵中國總之住大西內地者今年起程明年始到小西又明年始到中國若居近海諸國者兩年可至也若陸路過回々諸國多曠野又多盜賊語言不通甚爲艱險航海而來雖繞曲而遙然便于裝載且更安妥耳云々按に卷首に泰西利類思安文思南懷仁著とあり利瑪竇が職方外紀に合考べき書也

(四十三)人魚　本朝人魚の出しこと近江蒲生川にて似たる物を捕しよし國史に見ゆ近來は人魚を獲たる

說時々きこゆめり西方要紀ノ海奇の條に有ニ飛魚一騰レ空而飛又有ニ禽鳥一恒浮ニ宿海上一舟人以レ計取レ之與ニ釣魚一不レ異亦有レ魚若ニ牛馬猪犬之類一且有ニ與レ人相似者一云々按に本朝にも飛魚あり平戸にてはアコといふ若ニ牛馬一といふは海馬（アシカ）の類にや與レ人相似者は人魚ともいふべし頭書北條五代記七卷十九丁オ

（四十四）西洋風俗　西方要紀風俗の條に西洋風俗道不レ拾レ遺偶或有レ遺得レ之者則懸ニ垣壁一以便ニ原主一復取或權收レ之貼ニ示于聖堂之門一原主言ニ其所失一記レ號合レ符則付ニ還之一云々此外正直の風俗本朝神代の風ともいひつべし

（四十五）鯉魚龍と變說　安南雜記の張潮が小引に安南在ニ中國之西南一鄰ニ于滇粵一其山則有ニ句漏崑芝之勝一其水則有ニ來蘇龍門之奇一云々考ニ之廣輿記一芝山上有ニ仙芝一仲春開レ花雨後落ニ水面一群魚吞レ之多化爲レ龍又龍門江中魚色青綠嘴曲而紅往々多化レ龍去云云按に龍門の鯉魚龍に化こと人口に膾炙し畫家好てゑがくめりされど此說に據れば鯉魚に限れることならず安南雜記は清の遂寧李仙根子靜著と卷端にあり張山來が昭代叢書卷廿八に收む交趾之地即安南即交州即日南西北自ニ交岡一來故曰ニ交趾一東北界ニ廣西一東界ニ廣東一西界ニ雲南一西南界ニ老撾一即古哀牢南掃ニ入大海中一通ニ占城一秦漢時皆郡縣也云々といへり

（四十六）慟哭記　宋の忠臣謝皐羽年譜張山來が小引に有ニ宋謝皐羽一當ニ文信國既歿之餘一猶時々登ニ西臺一而慟哭云々年譜に丁丑景炎二年時年二十九歲是歲車駕航海文公于ニ正月一自ニ汀州一移ニ漳州龍巖縣一謀レ入レ衢道阻不レ通三月入ニ梅州一五月兵出ニ梅嶺一入ニ贛州會昌縣一六月戰ニ雩都一提號令通ニ江淮一引レ兵至ニ吉州一戰ニ于終步一不レ利戰ニ永豐一又不レ利戰ニ于空坑一大敗攻レ贛軍又敗文公妻妾男女皆被レ執幕僚張汴等死之公僅與ニ長子道生客杜滸一以ニ數騎一免趨ニ永豐一按西臺慟哭記所レ謂別ニ公漳水湄一者即贛郡西南之章江而非ニ閩之漳州一云々按に西臺慟哭記は宋の忠臣文天祥を慟哭して謝皐羽が記せる也謝皐羽が年譜は清人會稽徐沁埜公著よし卷端にしるして昭代叢書卷廿一に收たり

（四十七）神光　幷三光　神光とは眼光の事にて眼を塞て目尻を強く押せば暗中に光を見るこれを神光といふ也武備志に神光經の說を載たり清人唐彪が身易字翼修殿水人昭代叢書廿八に收む に三光者何也靈光也神光也精光也造化之元生成之本也靈光性神光心精光命云々頭書日月星なふ事は魏書文帝紀に見ゆ三光といふ

（四十八）富士山異國より見ゆると云說　幷長白山　高麗陣日記上卷十七丁ウ セルトウスヲ生捕事の條にヲランカイより天快霽ノ時ハ未申ニアタリ日本ノ富士山近ク見ユル也とあり清人遂安方象瑛渭仁が封ニ長白山一記に登ニ一山一升レ樹而望遙見ニ遠峰白光片々一長白山也云々志稱長白山橫亘千里高二百里巔有レ潭周八十里南注ニ鴨綠江一北流ニ混同一云々とあれば此長白山を富士山と見まがへたるにやありけん頭書葉隆禮が遼志に長白山在ニ冷山東南千里一蓋白衣觀音所レ居其山內禽獸皆白人不ニ敢入一恐レ穢ニ其間一以致ニ蛇虺之害一黑水發ニ源于此一舊云ニ栗末河一太宗破レ晉改爲ニ混同江一云々

（四十九）長壽の人　本朝長壽の人おほし武內宿禰尾張濱主など古代の眉壽はかぞへ盡すべからず文化年中神戶侯の高繩の下屋敷にて隨翁老侯尙齒會したまへるをり九十以上の人三人百以上の人四人つどひたりき百七歲を第一とす本所御材木倉の小吏の祖父也清の曲阜孔尙任が人瑞錄昭代叢書三に收む十に康熙二十七年十月二十三日奉ニ恩詔一內一則軍民年七十以上者許ニ一丁一侍養免ニ其雜汎徭役一八十歲以上者給ニ絹一疋綿一勑米一石肉十觔一九十以上者倍レ之云々令ニ天下一計レ之七十者不レ可ニ勝紀一八十者一十六万九千八百三十人九十者九千九百九十六人百歲者二十一人是人也皆勝國之子遺也而能不レ死ニ于癘疫一不レ死ニ于刑法一不レ死ニ于饑塞一不レ死ニ于水火盜賊一留ニ其餘生一以受ニ興朝之雨露一雖レ其得ニ于天一者獨全ニ亦必由ニ善良以接レ物明哲以保ニ身云々これに比れば本朝長壽の人おほし阿蘭陀人は三四十に過ずして殆ど皆肉食のために生を害せりと見ゆ抑本朝は良米を食ひ魚菜に富て唐土西域の鳥獸を平常の食とする類に似ず實に神國の大幸にて長生を樂むと豈人もわれもよろこばしからざらんや

（五十）茶產地及茶壺　清人雉皐胃裹巢民が岕茶彙抄昭代叢書四十一に收む に產レ茶處山之夕陽勝ニ於朝陽一廟後山西向故稱レ佳總不レ如ニ洞山一南向受ニ陽氣特專一足レ稱ニ仙品一茶產ニ平地一受ニ土氣一多故其質濁岑茗產ニ於高山一渾是風露清虛之氣故爲レ可レ尙云々又云茶壺以レ小爲レ貴每ニ一客一壺任ニ獨斟飮一方得ニ茶趣一何也壺小香不ニ渙散一味不ニ耽遲一況茶中香味不レ先不レ後恰有ニ一時一太早未レ足稍緩已過箇中之妙淸心自飮化而裁レ之

存二乎其人一」與清曰本朝茶の名日本後紀類聚國史性靈集經國集などに貢茶及烹茶の事見ゆ江次第に引茶の事あり喫茶養性記喫茶往來などにその德をいへり唐土には三國吳志に茶菽の名あらはれ世說に常伯熊陸鴻漸が茶事あり陸羽が茶經盧同が茶詩など擧るにいとまなし

(五十一)歌を學も詩學に據て心得べし　昭陽李沂艾山が秋星閣詩話に八字訣あり云學レ詩有二八字訣一曰多讀多講多作多改而已蓋作詩先問二是非一後分二工拙一初學須下日課二一首一或間レ日課中一首上勤作則心專徑熟漸開二門路一否則勉強支吾終レ篇爲レ幸未レ可レ云レ是遑レ論二工拙一乎然非二多讀一古人之詩一即多作亦無用譬二無源之水立見二其涸一矣夫貴二多讀一者非レ欲下謏二襲意調一偷中用字句上也惟取レ觸發二我之性靈一耳但古人之詩思理精妙法則嚴密非二淺衷俗學可一レ得而窺一篇有二無窮之格一句有二無窮之調一字有二無窮之義一審問明辨而後旨趣可レ得是故詩欲二多講一苟草々讀過漫同嚼蠟雖レ盈二腹笥一何益宜二其握レ管運レ思如下墮二烟霧一也若作而不レ改尤爲二不可一作詩安能落レ筆便好能改則瑕可レ爲レ瑜瓦礫可レ爲二珠玉一子美云新詩改罷自長吟子美詩聖猶二以改而後工一下レ此可レ知矣昔人謂作レ詩如レ食二胡桃宜栗一剝二三層皮一方有二佳味一作而不レ改是食二有レ刺栗與二青皮胡桃一也又云一首五言律如二四十位賢人一不レ可レ著二一屠沽兒一言二一字之疵足レ爲二通篇之累一而可レ不レ審乎苟依二此訣一不レ患二詩不下進矣云々」また吳門徐層子能が而菴詩話に作詩之道有レ三曰寄趣曰體裁曰脫化今人而欲レ詣二古人之域一舍二此三者一厥路無レ由夫碧海鯨魚自別二于蘭茗翡翠一此古人之體裁也唐人應制之作皆合二于西方聖教一此古人之寄趣也少陵詩人宗匠從下熟二精文選一理中上來此古人之脫化也云々」與清按歌人も此詩話の說によりて學べし古人の歌集を讀て己が性靈を發事必然り古集中にも拾玉集山家集草根集夫木抄を讀ば必利あり他阿上人集曾丹集散木集などこれにつぐ古今後撰など八代十三代の集に泥て腐歌をよみ出るをよきことゝおもへるは東野州宗祇などにばかされたる庸人のしわざ也

(五十二)書法　書法の事は墨池篇佩文齋書畫譜などに諸書を引ていひ內閣字府にもくはし鹽城宋曹射陵が書法約言昭代叢書卅五に收む の總論に學書之法在二乎一心一心能轉レ腕手能縛レ筆大要執レ筆欲レ緊運レ筆欲レ活手不

主レ運而以レ腕運腕雖レ主レ運而以レ心運右軍曰意在二筆先一此法言也古人下レ筆有レ由從不二虛發一今人好レ溺偏固任レ筆爲レ體恣レ意揮運以二少知一而自炫二新奇一以二意足一而不レ顧二顚錯一究二於古人妙境一茫無二體認一又安望二其升一晉魏之堂一乎云々

(五十三)民の風俗皆水土に因　困學紀聞十ノ一に戰國人民の氣性みな水に因よし管子を引ていへり曰水一則人心正水清則民心易云々淮南子にも此說あり人國記に引注すべし

(五十四)追儺　同書十の卷卅五丁ウ に游皃問二雄一黃一曰今逐レ疫出レ魅擊鼓呼噪何也雄黃曰黔首多レ疾黃帝氏立二巫咸一使下黔首沐浴齋戒以通二九竅一鳴鼓振鐸以動二其心一勞レ形趨步以發二陰陽之氣一飮レ酒茹レ葱以通中五藏上夫擊鼓呼噪逐レ疫出二魅鬼一黔首不レ知以爲二魅祟一也云々此追儺または疫神送りなどに注すべき語也

(五十五)鬪雞必勝の法　同書十の卷卅七丁ウ に羊溝之雞三歲爲レ株相者視レ之則非二良雞一也然數以勝レ人者以二狸膏一塗二其頭一注に羊溝鬪レ雞處株魁雞師也雞畏レ狸也云々與清曰禁中の鬪雞は强勝負を求めず相摸入道が時此法を得て傳授したらんにはいかなる富貴の者となるべき爲レ之一笑因云馬性畏レ狼合戰場帶二狼牙一著二狼皮一則足レ得レ利哉

(五十六)人主は二目諸民は萬目　同書十の卷卅三丁ウ に漢書藝文志を引て人主以二二目一視二一國一一國以二万目一視二人主一此名言也云々諸侯大夫士庶人といへどもこれを思て愼べし

(五十七)時を得　同書十の卷卅八丁ウ に淮南詮言訓曰禹決二江河一因レ水也后稷播レ種樹レ穀因レ地也湯武平二暴亂一因レ時也故天下可レ得而不レ可レ取也覇王可レ受而不レ可レ求也張夫人諫二符堅一之言本二於此一云々與清曰君子は其獨を愼時をまつべし計レ之在レ人爲レ之在レ天立身出世成レ富揚レ名こと〳〵く其時にあり强求必敗頑書 時雖易 得而失能改齋漫錄十四

(五十八)水車の詩水碓　元詩選一の 卷袁桷が同二子唯一賦二水車一詩に挈レ瓶之智誠有レ餘抱レ甕之勞亦良苦何人嘗巧扶二天機一河伯逶迤魚鱉舞昂々長身臥二牖岸一卷レ地翻レ濤敵驕暑誰云龍骨化二梅梁一未レ信魚身作二橋柱一縈紆香輪過二流水一突兀雲梯卷二清雨一橫陳二歌板一促二紛綸一倒流二谷簾一聲齟齬東家蓾婦顏色惡步々生レ蓮空媚嫵陽烏流爍汗成レ漿平陸須臾涌二銀乳一推移燥

濕意本同竊奪陰陽ニ天所レ怒人言無ニ踵能自至一跬歩周旋路修阻不レ辭滿眼看ニ黃雲一歲晚論レ功付ニ梁栢一君不レ見田舍翁年々辛苦與レ我同天寒破レ褐厭ニ糖覈一仰視ニ屋壁一知誰窮云々 按に水車の事前にもいひたり五山僧の詩集東大寺 大佛供 養記など國史にも 見えたり可ニ考合一元詩選六卷補遺一卷あり清乾隆十六年錫山の顧奎光字星五が撰也凡例總論名氏爵里を別卷として首に添ふ（旁書）政事要略五十四名物六帖器財箋二ノ廿五丁ウ水碓貞和集八ノ十三丁オ五雜俎九ノ六丁ウ晉書列傳十六劉頌傳に郡界多ニ公主水碓一過ニ塞流水一轉爲ニ浸害一云々水碾磑ノ始尺書廿丁オ北史五ノ廿一丁ウ水碾輪林五鳳集五十三に宇治眞木島の水車あり水磑唐書百四十六ノ二丁オ

（五十九）舟靈天后の詩　元詩選卷之三貢師泰が與化湄州島祠ニ天妃一還詩に夜宿ニ吳江上一朝行莆海東地偏元少レ雪天濶自多レ風不レ見ニ波濤險一寧知ニ造化功一百年神女廟長護海霞紅同卷洪希文題ニ聖墩妃宮湄洲嶼一詩に我昔纜レ舟謁ニ江干一曾覩ニ帝子一瓊ニ華顏一雲濤激射雷電洶殿閣肆兀魚龍間此洲仙島誰所レ搆面勢軒豁規層瀾壺山峙秀倒影入乾坤擺脫呈ニ倪端一粉墻丹桂輝掩レ映華表聳突過飛レ鞚湘君小水幼靈骨虞帝迹遠何由レ攀銀樓玉闕足ニ官府一忠孝許入巫咸斑帝憐遐隕雜ニ鯨鰐一柄授水府司人宴五雲殿逢嚴侍衞仙衣發駕朝ニ天闕一危檣出火海浪破神鬼役使忘ニ險艱一靈旗逢望廣樂振長風万里翔ニ孔鸞一平洲遠嶼天所レ劃古廟不ニ獨跨一黃灣一至人何心戀ニ柔梓一如水在レ地行ニ曲盤一升レ階再拜薦ニ脯蒸一不レ以ニ菲薄一羞ニ儒酸一日談ニ書史一得ニ少暇一石橋潛度凭ニ雕闌一詩成不レ覺肝膽醒松檜蓊蒼鳴玦環騎鯨散髮出長嘯追ニ逐縹渺一乘レ風還云々 天后の傳は已に六十卷にいひたれば可ニ考合一

（六十）聽雪　西三條逍遙院實隆公の號を聽雪といはれしより家集を聽雪集と名づく後人雪玉集と改たり元詩選四の卷張憲が詩に聽雪齋の 五律あり萬籟入ニ沈冥一坐深窗戸明徹於ニ踈竹上一時作ニ碎レ瓊聲一撲レ紙春蟲亂爬レ沙夜蟹行袁安政無レ寐欹レ枕漏ニ三更一云々また同卷に昂吉が聽雪齋分レ韻得ニ度字一五言詩あり雪に聲ありなど詠て歌の手がらとせるもかゝる詩などによれるなるべし

（六十一）告天子（ひばり）　ひばりは告天子といひその詩を五山堂詩話に載たりき元詩選四の卷許恕が告天子の詩に告天子爾何徹麥秀風暄高下飛餘音嫋々入レ雲飛向ニ天閶一如レ有レ訴天閶蕩々虛且高言レ之諄々徒爾勞多少功臣如ニ柱石一緘レ口全レ身保ニ衣食一云々歌題には雲雀と書り雲雀あがる又はおつる雲雀などよめるも此詩にそのさま見ゆ

（六十二）風棚　元詩選五の卷に華幼武が風棚の詩あり百尺虛結搆松風起ニ四簷一遂令ニ秋滿レ屋何用ニ晝垂一レ簾蔽レ日雲常在當レ窗雨不レ霑脩然無レ限意叢竹淨相兼云々これは暑中虛空に棚を搆て涼風をいるゝ也和訓には「スヾミダナ」といふべきものぞ

（六十三）知非齋　與清往年知恩院宮尊超親王に請奉り知非齋の扁額を書て賜はりぬそのゆゑよしは相馬日記にいへり元詩選六の卷に何中が知非堂夜坐の詩ありさてははやく元人も遽伯玉をしたへる號つきたるこそ

（六十四）書燈　并學者の用意　元詩選補遺劉清叟が書燈の詩に玉樓夜費燭熒々祇得ニ眼前歌舞明一照破三千年外事書生元不レ用ニ長檠一云々按に近來讀書燈といへる短檠を製りて世に鬻ぐ者ありこれ寡聞書生の用具にて大家の用を成さず余三十余年學の道にいりて其便利を思得しと少からず先學者は三コンと白石がいへるは不易の語にて實に利根氣魂黃金の三コン調ざれば大家に成とあたはずこれにつぐに又三事あり書齋はひろく市中ならんには土倉がよしさらねば火事の憂によりてたよりあしきとあり書籍は書齋の四方に積めぐらし置べし燈大蠟燭にて燭臺ボンボリ手燭の三ツを具すべしさて左右に一兩人侍者をおきて本の出納及操返し見出し物などを課すべし其上にも晝書手書を扶持して召仕たきもの也因に云べし清の康熙帝天下の學問を綜括して佩文韻府書畫譜分類字錦淵鑑類函協紀辨方書など多の書を撰せられたりそれよりはやく水戸の西山黃門日本史禮儀類典草露貫珠系圖纂の類を撰て倭學を總括したまへりさる天子や大諸侯の勢ならずとも小諸侯にても志を立られたらんには天下の學問を總括すべき余が工夫あれども時に遇ざれば施すべき力なし美人美食美服美宅の費を少く儉約して大著述をし給はんには名を後世に揚る至孝の道はさら也人のため世のため大功大陰德なるべきをやされど大祿の君あまりに物の道理を知り給ひては御家來もつとめにくゝだましごともきかぬゆゑよきやうにへつらひ万事御氣の付ぬやうに御生育まうすがおほしそれゆゑ殿樣藝と稱して師匠もへつらひ家來もへつらひほめ立れば御自分もなるほど

と御自慢十分にて御一生事すむ事ゆゑ外目よりは御氣毒におもへどさてあるべき也師たる人もいらぬひづらを引ていやがられへヨット御出入(スダイリ)でも止られんより物を貰扶持(モラヒ)をとり口腹を養はんために嗾(ケ)を鳴し尾をふりてヘツラヒマハル事道理至極せり抑大家にならんには人の誹謗を厭べからず人已に叛とも己人に叛べからず人のダマスも人のタヲスも知てしらぬふりをすること專要也疎なる人には謙るがよし親き人には親切なるがよし貴人は敬ふべし貧人はめぐむべし貸たものは餘りにはたらぬがよし借たものは急(キ)と返すがよしその人を見て敬して遠くべく又慕て近付もすべし學者の世にあるは孫吳が兵を用るがごとく常山の蛇の首尾相應する如くなるべし儉約をして書を買にさしつかへなきやうにすべしうそはつかぬがよけれども權と方便とをしらざれば父は子のためにかくし子は父のためにかくすとあたはず仁をもて人をめぐみ義をもて人に交り禮をもて無頼をふせぎ智をもて人に誑されずよく身を保ち信をもて心を定むべし道理なる財はいかほども得がよし人のくるゝも貰がよし國有」道時貧さは耻也無理なる金をほしがることなかれ人にものをねだることなかれ貴人でも富(フング)人(ンジヤ)でも人情は皆しはきもの也然れども財持たる者は折にふれ興に乘じて人にくれたき心も起ればとかく貴人福人に近付は得ありて損なし兼好が學者醫者ものくるゝ友といへるもをかしき說也司馬遷が史記貨殖傳を讀てもおもひ分べし續通鑑綱目四の卷宋仁宗の天聖元年正月條の發明に國之所レ貴者財民之所レ寶者利國以レ財爲レ本民以レ財爲レ命而國之所レ取者民之財民之所レ取者物之利是以善治二天下一者必立二至正不易之法一國取二於民一不レ覺二其少一民輸二於國一不レ覺二其多一使下上下通二行財貨一不中竭所謂豐財之源節財之流良以レ此也云々とかくに御治世にて持たきものは金銀米錢也「それにつけても金のほしさよ」とはよくもいひたる句といひつべし

松屋筆記卷之六十二

東都　平興清文儒稿

(一)守レ義之水射レ利之火　續資治通鑑綱目明成化十一二年勅撰の卷宋大祖建隆元年條の廣義に周主既殂嗣君亦幼故其朶頤之勢突然以興彼一杯守レ義之水安能勝二夫興薪射レ利之火一哉云々與清曰趙匡胤周主の重恩を忘て其幼主を廢して國を奪ひ遂に大宋の基を開く孔明闇幼の劉禪を輔導して託孤の義を忘れず出師表を見ても感涙とゝめがたし利を見て心を動さゝるは難矣哉

(二)畫像を壁に懸　同一の卷宋大祖建隆元年の條に夏四月周昭義節度使李筠起レ兵會二北漢一伐レ宋宋遣レ兵擊レ之傳に宋遣レ使加二筠中書令一使者至二潞州一筠欲レ拒レ之賓佐切諫乃延二使者一置酒既而取二周太祖畫像一懸二于壁一涕泣不レ已賓佐惶駭告二使者一曰令公被レ酒失二其常性一幸勿レ訝云々按に後鳥羽院其肖畫を信實に書せ給ひしと增鏡承久物語などに見ゆ貞德文集に掛畫といふ名あり掛字もあり

(三)鐵槌并「チッテイ」白杖　同一の卷建隆元年六月の條注に衞融請レ死宋主怒以二鐵槌一擊二其首一流血被レ面云々按に鐵槌は鐵鞭の類今の「チッテイ」とき物なるべし「チッテイ」は笞挺ならんよし已に錦棒長刀考にいへり槌は集韻韻會共に張瓜切音撾擊也云々また槌は唐韻陟瓜切音撾箠也玉篇策也云々左傳文公十一年杜注に策馬槌云々などあれば撾は槌の誤也鐵槌は「チッテイ」なること疑なし「チッテイ」は笞挺にて孟子趙注に挺杖也云々また漢書諸侯王表に奪二其白挺一とあるは白杖の事也頭書五燈會元十五の卷洞山清凉禪師章に開堂日維那白槌曰法筵龍象衆當レ觀二第一義一云云

(四)火葬　續通鑑綱目一の卷宋太祖建隆三年二月の條に宋禁二民火葬一發明に古之葬者厚衣レ之以レ薪葬二之中野一後世聖人易レ之以二棺槨一此送レ死大事過二於厚一之意焉蓋衣衾棺槨必誠必信者欲二其堅厚久遠一無レ使二土侵一膚則是葬者皆歸二於土一未レ聞レ有二火葬之禮一也苟用二火葬一棺槨何爲以二父母之身一措二烈燄之內一人子之心獨無二惻怛一乎敗レ俗棄レ禮莫二此爲一甚直書曰レ禁乃深予レ之云々與清曰火葬の事荀子楊倞注に義渠國登遐の事をいへり本朝火葬の始は道昭に起るよし續紀に見ゆ四葬の事は釋氏要覽に有頭書火葬焚ニ八關維ト云高僧傳十一ノ十丁ウ

同十五丁オニ見ユ鹽尻十六

(五)人主佛法に惑ふ　續通鑑綱目宋太祖乾德二年の條に唐主募レ人爲レ僧傳に唐主酷信二浮屠法一出二禁中金錢一募レ人爲レ僧時都下僧及二万人一皆仰二給縣官一唐主退レ朝與レ后服二僧衣一誦二佛書一拜跪手足成レ贄僧有レ罪命禮レ佛而釋レ之云々廣義に嗚呼梁之蕭衍酷好二乎佛一而餓二死臺城一唐之李煜酷好二乎僧一而爲二宋所一レ滅是則佛與レ僧者亡國之囮也後世之君有下好二浮屠一者上蕭衍李煜傳不レ可レ不レ讀云々按に本朝好佛の主おほくして國分寺を建大佛を造多天下の財寶民力を費し給へりされど蕭衍李昱が如きにいたらす佛法相應の地といふべくや

(六)十文錢　本朝の十文錢は重修錢譜に寶永通寶東山院寶永五年五月鑄二當十大錢一文曰寶永通寶背肉廓中有二永久世用之四字一同六年正月停廢不レ行と見ゆ續通鑑綱目四の卷宋仁宗康定元年十二月の條に鑄二當十錢一云々とあり

(七)才智德望　續通鑑綱目六の卷宋英宗治平元年條の傳に呂中曰當二國家危疑之日一大臣以能任レ事者一曰德望二曰才智有二才智一而無二德望一以鎭レ之則未レ足二以服一天下之心一有二德望一而無二才智一以充レ之則未レ足二以辨一天下之事一云々與清曰此語人主必心にとどむべき也

(八)祥瑞　延喜式に大中小瑞の物を記し國史に多く瑞物を献れるよし見ゆ續通鑑綱目五の卷宋仁宗皇祐三年の條に夏六月詔二州郡一勿レ献二瑞物一傳に知無爲軍茹孝標献二芝草一帝曰朕以二豐年一爲レ瑞賢臣爲レ寶草木之異焉足レ尙哉免二孝標罪一而戒二州郡一勿二復献一云云與清曰今世祥瑞奉献を賞給はざるは宋の仁宗の金言に叶へりといふべし

(九)廣惠倉　續通鑑綱目五の卷宋仁宗嘉祐二年條に秋八月詔二諸州一置二廣惠倉一云々傳に初天下沒入戶絕田官自粥レ之至レ是韓琦請留勿レ粥募レ人耕而收二其租一別爲レ倉貯レ之以給下州縣之老幼貧疾不レ能二自存一者上謂二之廣惠倉一以二提刑一領二其事一歲終具二出納之數一上二三司一每二千戶一留二田租百石一以レ是爲レ差戶寡而田有レ餘則粥如レ舊云々廣義に普天之下莫レ非二王土一率土之濱莫レ非二王臣一是知二田與レ民皆國之所レ有者一韓魏公請置二廣惠倉于諸州一則是因二其人之田一而給二養其民一所謂惠而不レ費者也云々　與清曰　義倉常平倉は

本朝にも行給へり古の屯倉の變制也廣惠倉も亦似たる法也今の籾倉など鄙し余が新撰姓氏錄上卷の書入に論有

(十)抱朴子并尸子　抱朴子は平津館叢書中に收む和板に比ればいとよろし尸子も亦此叢書に收て共に善本也抱朴子の嘉慶十七年七月甲戌桐城方維甸が序に道家宗旨淸淨沖虛而已其弊或流爲二權謀一或流爲二放誕一無二所謂金丹仙藥黃白元素吐納通引禁咒符籙之術一也秦漢方士絕不レ附二會老子一即依二託黃帝一亦非二道家之說一漢書藝文志以二黃帝諸篇一分二屬道家一神仙蓋本二七略一七略又本二於別錄一劉子政固誦二習鴻寶一篇信二神仙一者而典二校秘書一仍別二方技於諸子之外一不二相殺一也東漢之季桓帝好二神仙一祠二老子一張陵之子衡使二人爲一祭酒一主以二老子五千文一都習神仙之附二會道家一實昉二於此一抱朴子內篇古之神仙家言也云々と見ゆ道家と神仙家と別なるよしを委說せり抱朴子は晉の葛稚川が撰也

(十一)平戶燒の陶器　平戶燒のせともものはもと三河(ミカハ)內燒(チヤキ)といへり高麗國より老媼歸化て肥前國平戶中野村に住居し陶器を造るこれを平戶燒とも中野燒とも呼て其古器の今に存れるは其躰高麗にひとしくいと古色にて茶人殊に賞翫せり老媼後に松浦郡三河內村に移住す男子一人ありて家業を繼其子孫尙三河內村に今村某とて陶製の業怠らず細工巧妙天下にもてはやさゝるものなし老媼死後三河內の山上に葬り小祠を建て陶家の神とす尾張の瀨戶燒はこの三河內の今村が家につかへし奴隸が其法を得て燒始たる也今は瀨戶燒大に行はれて陶器を瀨戶物とさへ呼とゝなりぬ毛利家記六の卷毛利秀元茶湯を設將軍家を招請せられしをりの調度に御茶碗吉野高麗物也と有は中野の誤寫にや可レ考

(十二)鰯の頭も信心がら　俗語に鰯のあたまも信心がらといへり千金寶要六の卷に病有二三患一一患覺レ之晚二患驕狠恣傲三患狐疑不レ決犯レ之多枉二傷性命一故曰法爲二信者一施不レ爲二疑者一設と云々といへるは似たる事也千金寶要六卷淸人孫星衍が平津館叢書中に收む明の秦王守中が序に千金寶要者宋徽猷閣直學士郭思按唐孫眞人先生所レ集千金方中纂要者也と見ゆ頭書 地藏靈驗記六ノ八丁ウ淸水物語下八丁ウに鰯のかしらも佛になる云々

(十三)人身は小天地　魏の華陀が華氏中藏經上卷人

法ニ於天地ニ論第一ニ人者上稟レ天下委レ地陽以輔レ之陰以佐レ之天地順則人氣泰天地逆則人氣否是以天地有ニ四時五行寒暄動靜ニ其變也喜爲レ雨怒爲レ風結爲レ霜張爲レ虹此天地之常也人有ニ四肢五臟呼吸寤寐ニ精氣流散行爲レ榮張爲レ氣發爲レ聲此人之常也云々尙人身は天地にひとしきよしくはしく見ゆ華氏中藏經三卷平津館叢書中に收たり

(十四)傳尸病并必病の候　華氏中藏經上卷傳尸論第二十に傳尸者非ニ一門相染而成ニ也人之血氣衰弱臟腑虛羸中ニ於鬼氣ニ因感ニ其邪ニ遂成レ疾也云々按に守ニ庚申ニ故事に注すべきゆゑに抄出せりまた同書中卷に論レ診ニ雜病必死候ニ第四十八また察ニ聲色形證ニ決レ死法第四十九の二篇あり病人死相を知るに妙也

(十五)琴操并五音　後漢の蔡邕が琴操上卷序首に昔伏羲氏作レ琴所以禦ニ邪僻ニ防ニ心淫ニ以脩レ身理レ性反ニ其天眞ニ也琴長三尺六寸六分象ニ三百六十日ニ也廣六寸象ニ六合ニ也文上曰レ池下曰レ巖池水也言ニ其平ニ下曰レ濱々賓也言ニ其服ニ也前廣後狹象ニ尊卑ニ也上圓下方法ニ天地ニ也五弦宮也象ニ五行ニ也大弦者君也寬和而溫小弦者臣也清廉而不レ亂文王武王加ニ二弦ニ合ニ君臣恩ニ也宮爲レ君商爲レ臣角爲レ民徵爲レ事羽爲レ物古琴曲有ニ歌詩五曲ニ一曰鹿鳴二曰伐檀三曰騶虞四曰鵲巢五曰白駒云々また十二操九引雜詠廿一章の樂章を載たり十二操の中に二曰猗蘭操十一曰水仙操云々九引の中に七曰箜篌引云々平津館叢書中に收む

(十六)烏頭白并鷄の空音　增基が庵主に「山烏かしらも赤ろく成にけりわかかへるへき時や來ぬらん」とよめるは史記刺客傳の故事なれどおなじくは燕丹子を引て注すべし燕丹子卷上に燕太子丹質ニ於秦ニ秦王遇レ之無レ禮不レ得レ意欲レ求レ歸秦王不レ聽謬言令ニ烏白頭馬生ニ角乃可レ許耳丹仰レ天嘆烏即白頭馬生レ角秦王不レ得レ已而遣レ之爲ニ機發之橋ニ欲レ陷レ丹丹過レ之橋爲不レ發夜到レ關關門未レ開丹爲ニ鷄鳴ニ衆鷄皆鳴遂得ニ逃歸ニ云々與清曰初學記藝文類聚太平御覽(皇親部人事部)などにも引たり又清少納言が「夜をこめてとりのそらねははかるともよにあふ坂の關はゆるさし」といふ歌の注に史記孟嘗君が傳の故事を引けど此燕丹子をも合せ引べき也

(十七)居處を愼べし　鬼谷子が遺ニ蘇秦張儀ニ書に若二君豈不レ見ニ河邊之樹ニ乎僕御執ニ其枝ニ波浪盪ニ其根ニ上無ニ徑尺之陰ニ身被ニ數千之痕ニ(太平御覽五百十引無ニ此二句ニ)此木豈與ニ天地ニ有ニ仇怨ニ所レ居然也子不レ見ニ嵩岱之松柏華霍之檀桐ニ乎上枝干ニ於青雲ニ下根通ニ於三泉ニ千秋萬歲不レ受ニ斧斤之患ニ此木豈於ニ天地ニ有ニ骨肉ニ哉蓋所レ居然也(出ニ袁叔眞隱傳ニ案杜光庭錄異記取レ此而增ニ添首尾ニ且有ニ更改ニ殊不レ可レ據今不レ錄)云々清人孫星衍が續古文苑卷第七に載す小序に鬼谷先生不レ知ニ何許人ニ也隱ニ居鬼谷山ニ固以爲レ稱蘇秦張儀師レ之遂立ニ功名ニ先生遺レ書責レ之曰とあり續古文苑廿卷は唐の古文苑に續て撰る也平津館叢書中に收む君子其居處を愼べきは倭漢例おほし大江匡房は女とゝもに下人の家にやどりて危目にあひしと舊本今昔に見え孫叔敖は子のために弊邑を請しと史記にいへり一年井上河內守殿遠州濱松より奧州棚倉に封を徙され給へるをり藩士岩淵某余が許に來て憂歎し事ありしを余賀していへらく濱松は四戰の地にて天下の人眼を附ざるはなし棚倉は瘠土にて万人これを嫌ふされば永世人に窺るゝ憂なし今彼地荒廢して田地多く山野に變じ米價卑く民粟稗を食ものなし其山野を開きその民を敎て治國の法を行はゞ十年を待たずして濱松の沃土に劣まじといひつるにいと心を得て喜たり

(十八)用筆法　用筆法は弘法大師の書法傳來して諸家これにもとづく秦李斯用筆法一篇續古文苑廿の卷に收たり云夫書之徵妙道合ニ自然ニ篆籀以前不レ可ニ得而聞ニ矣自ニ上古ニ作ニ大篆ニ頗行ニ於世ニ但爲ニ古遠ニ人多不レ詳今斯刪ニ略繁者ニ取ニ其合ニ理參ニ爲小篆ニ凡書非ニ但裹結流快ニ終藉ニ筆力輕健ニ蒙將軍恬筆經猶ニ自簡略ニ斯更修改望レ益ニ於用ニ矣用レ筆法先急回後疾下鷹望鵬逝信ニ之自然ニ不レ得ニ重改ニ如ニ游魚得レ水景山興ニ雲或卷或舒乍輕乍重善思レ之此理可レ見矣云々又續古文苑二の卷に晉王羲之が用筆賦あり墨池編佩文齋書譜など考合すべし續古文苑廿の卷に漢趙臺が非草書晉衛夫人の筆陣圖などの文あり

(十九)攝津能勢郡出野村所レ存左少辨藤原經房朝臣遺書の考　文政元寅年攝州能勢郡野間庄出野村百姓勘兵衛家普請之節梁に結付有レ之所之古書寫同國池田大和屋大三郎臨ニ書之ニ本書者能勢御陣屋御土藏入置猶又寫一書者野間庄出野村若宮八幡宮御神前相納置候事(以上表紙に記したる文)在少辨藤原經房朝臣遺書寫(以上外題本文)に云〇ことし律保五年丑ふづき五日に源のすけみみ

まかりたまへり御年は五十まり五とせに南(ナン)ありけりいまだをしかるべき齢にこそおよそ人の世のさだめなきぞはかなし種長は十とせあまり九とせまへに身まかり景家は十とせまり三とせまへにおはりぬ種長のわすれがたみに刑部太郎廿八才景家の子小次郎平三□はたちにあまれり我子左古麿廿六才なるがよく田かへし畝うちしてわなみに世をぞいとなみすぐしぬこれらはとのもとさだかにもしらずわれも今はたいそぢになりぬけふにも身まからばするゑの世子孫に□しるものたへてなからんかし是までは口づからもかたらずいましめぬよにもれたりとて首をうしなふ程にはあらんともしらぬ島々へさすらへむかし檀の浦にくちにし名よりうき名を後の世にとゞめしるされど家の弓矢つきたりとて主上門院同じ道に御幸なし奉らんも空おそろし何國の浦いづくの山の奥にも御幸なし後の世の手だてをもなさせ□□□砂金いくらもとりいださせまたのたまふにはたとへ源氏と□奉るともいかで玉躰を惱ませ奉らんひとつ□□一門のやからはとらはれなば命あるべうもおぼへず扨ぞ異氏のものばかり供奉さするなれど女院へわがつげたまひける云々此已下長文なれど僞作疑なきものなれば全文をば寫さず奥に建保第五丗年九月二日從四位上行左少辨藤原經房とあり又代々書次の書に經實左近行年八十三才文永八年末三月二日經久勘解由行年七十七才延慶元年申十一月十八日經冬勘太五十七才延慶中六九十一才助實介□七十二酉年十月十三日恒助永和四午年六年己卯八經成常七永享九巳成實右衛門四十三才經吉吉右衛門三月廿九日長祿二寅五月永正拾五此已下補筆經彌左衛門七十四才經春勘兵衛六十三才文祿二亥四月十五日「のよし也」經一市郎兵衛經忠下辻忠左衛門六十八才彌左衛門弟永祿元年午十一月三日經久十二才天正十五亥四月十八日□彌一□たてまつりける左少辨藤原經房「かきくもる雪けの空を吹かへて月になりゆくすまの浦風」跋に云この書數百年を經たれば蟲損磨滅等のためによみえがたき所々すくなからず然るをしひてよまずたゞありのまゝにしるすまた假名づかひのみだりなるてにおはのとゝのほらざるをもいささかわたし心をくはへずあるは基道を基通とも書晦日をつもごりとかけるたぐひもみな本書のまゝに記して後考の一助に備ふ見る人疑ふとなかれはた舊趾の地理里老の碑等其大概をさぐりたれどもいまだ全にいたらずそは他日稿を脫して後世にひろむべきなりかし文政元年冬日池田山川正宣誌とあり與清曰此書近世のなま古學者が其里の故事を作り出て人まどはさんとはかれる所爲也此跋を書たる山川正宣は池田の里長のよしにて佛足石碑の歌を注したるもの也本居宣長が社中ときこゆされば固陋にて有識の人ならねば古書の眞僞を見わくるさとりなき也すべて今の世田舍の本居者流淺見寡聞にして意地つよく實に不可說夢の固陋なるぞかたはらいたきや余此文中ひとつふたつを擧て僞作の證を顯すべし○餘りを「まり」と書く十とせまりの類也○丸を麿と書たるは時代叶はず○大夫判官を大輔判官と書き又郡司景家もいかゞなる名目也○行幸を御幸と書たるその比は必まがはざるをなま古學者がミユキと歟イデマシと歟訓べく心得てのわざ也○典侍を典内侍と書たるもスケノナイシといふ俗言より誤れる也○舟をありそにつけといへるも汀と歟磯と歟書べきをなま古學者の詞つき也○おもぶせしてといふもおもてぶせといふ詞によりてつくり出たる也○おと夕と云詞もをとつひの夕をかく作りて書る也○雨皮など取出假の四阿などまふけしは云々雨皮は厚紙に油を引たる物にて車の雨おほひの油單又は山伏の具などにもあれば有合けんもさるとながら落人の用意かり屋ふくばかりなるはいかゞありけんされどこれはなんにはあらず○川の原云々河原を川の原と書るはいかゞ○市女が笠てふものに似たる云々てふといふ詞賀茂眞淵翁の文にならひたる也此外にもてふと書る字おほし○主上を八の宮と申安德天皇也崩御の後若宮八幡とあはせいやまひ祭りければといへるも若宮八幡の緣起に引つけん巧也またあはせいやまひ祭りといふ詞田舍古學者の筆つき也○種長は君の來見(クルミ)の御つくり歌を原にもて來見權現とあがめ奉れり云々はじめに十月廿四日はつ雪ふりて常にめなれし山々のいともめづらしくいつもの峰に御幸ありて「初雪をめてつゝこゝにくる見れば峰はきのふに似すもありけり」此峰を里人は來見山あるはくるみが峰ともいふと有これ也之貴も來見權現の緣起を作り出んとてのしわざ也○從四

卑位上侍従行左少辨云々此位署書有識の學なき田舎古學者のしわざ也従五下従四位上行左少辨侍従と書べきよしは職原抄後附位署式の條を考て知べしさるをかく書るは近世諸侯に四位侍従と申を思ひてひがごとしいでたる也此外てにをは假名違詞用違等は論せず此經房の書はさる緣ありて越前丸岡城主有馬左兵衛佐藤原譽純朝臣へ人のまゐらせたるを近藤河内守の家臣をして余に考てよとありしかば書てまゐらせたる也〔種〕公卿輔任辨官補任など考るに經房は安徳後鳥羽兩朝に仕へて治承四年左中辨正四位下同五年に左大辨正四位下壽永三年に左大辨參木同年九月權中納言後には正二位大納言にも進し人也従四位上侍従行左少辨といふこと無稽の言也可ㇾ笑

（廿）オシアナ風并オトシ風　平戸城主松浦肥前守源熙朝臣の物語に平戸わたりにて東南の風をオシアナといふと云々按に万葉に東風謂ニ之阿由乃加世一とあるによし有又云大風吹しきれる後に「オトシ」とて天より直下に吹風ありその風半時或は一時吹ば必止て融和なる天になりぬと云々按にかく直下に天より吹おとすは大塊の噫氣延あれたるが天の融和の氣に押されて然はあるらんかし雨風雲霧雷電みな地氣の激暢せる物にて九天の陽和の氣自然と暢靜る時は悉く止ことわり也オトシ風も地氣強く激したる時は天氣もその激氣によりて強く壓押する道理と見ゆ

（廿一）高潮地震津波　同朝臣の物語に一昨年西國大風の時小東洋を廻る舟頻に纜て動ざるとあり驚て見るに洲上にあり四方を見やるになべて洲になりて海潮の音きこゆるとなしいかなるゆゑともしらずまごひさわぐほどに二時ばかりありてもとのごく船うかびて盤出たれば見まはすに海上もとのごく潮波たゝへさわげりとなんかゝるめにあへる舟あまた也とぞと云々按に地球は山海一大丸にて九天の中にかゝり増減なき静物なれど地氣激動して或は地震或は風雨雷電さま〴〵のとある也西國大風高潮のよせくるをり彼の増減なき潮水なればそを吹拂たる跡必地心顯るべきとわり也又云越後の大地震の時正しく見たる者の語れるは地震横に動くものにあらず上下にうごく物にてうぐろもちの土をもてあぐるごときさま也五尺も一丈ももてあげてやがておとすゆゑ地われ林おちいり家埋れたる也と云々按に是もさる道理にて地震横にゆらんにはいづれの所も殘るべくもあらぬに或は十里廿里の内にて外に及ばぬもあり又上下する動氣なれば也渡邊藏云海の津波も海中の地震にやさまでの風ならでも大浪打よするは必水動にて海地震ともいふべくやと云々これもことわりにきこゆ

（廿二）稗の飯麥の飯　日蓮書錄外一の卷古寫本也刊本とは順次おなじかす南條殿御返事に佛ノ御弟子阿那律尊者ト申セシ人ハヲサナクシテノ御名ヲバ如意ト申ハ心ノオモヒノ寶ヲフラシヽユヱ也コノヨシヲ佛ニトヒマキラセ玉ヒシカバ昔シウエタル世ニ緣覺ト申聖人ヲヒエノ飯モテ供養シマキラセシユエト答ヘサセ玉フと云々稗は和名抄に見え山野の貧民稗飯稗團子稗粥に造て食と今もしかなり又云麥ノ飯ヲ一盃供養シタリシユヱ云々麥の飯も今の製さま〴〵なり頭書麥飯新撰狂歌集下七丁ウ二首

（廿三）土の餅　谷中笠杜稻荷に土團子を供じて願成就せば米の團子を奉るべきをまうしその驗ありて後報賽必米團子を供ずる也日蓮書錄外一の卷九郎太郎殿御返事に土ノ餅ヲ佛ニ供養セシ人ハ王トナリキと云々

（廿四）一紙袋　俗に一風呂敷一長持などいふ一も雅言におほかり一山一里などいへる一也日蓮書錄外三神國御書の副文に大麥一鴛目兩貫ワカメカチメミナ一俵ヅヽ給リ畢干飯ヤキゴメ各々一カミブクロ給畢云々とあり

（廿五）綿のごとくなる　俗言に疲れたるを綿のやうになるといへり日蓮書錄外三承久合戰事の條に胄ハ雨ニ被レ打如レ綿とありこれらを出處とすべし

（廿六）大黒天の槌袋俵大根　大黒天の祭やう又は大黒の行水大黒に大根鰯など供ずると大黒經大黒に二人あり出世大黒叡山安置の大黒日蓮自作の大黒大黒の槌袋俵大黒は愛染の垂迹などいふと日蓮書錄外廿一卷廿九丁ウ四十丁ウ四にくはし頭書東寺文書抄四ノ五十五十一丁ウ四十二丁オ丁ウ同五丁ウ梅花無盡藏五丁オ湘山星移集廿四丁オ犬筑波廿八丁オ

（廿七）玄米をきごめといふべきと　日蓮書錄外四の卷キ米御書にキゴメノ俵一苫籠一根芋水蕗云々黒米ハ和訓「キゴメ」といふべし

（廿八）ゆゝらしき　同書四の卷西山鈔にユゝラシキ御ヒガ事云々ユゝラシキはゆゝしらしき義歟珍き詞也

（廿九）ほくちほくそはけ竹　火を打に「ホクチ」と

て枯木又は檜皮つばななどやうのものに燧付(キリツク)るこれを「ホクチ」と火口(ホクチ)也日蓮書錄外十三の卷十八丁ォ劒形抄にヌレタルホクチニ火ヲウチカクルガゴトクナルベシとあり古くほくそといへり字鏡に燼保久 和名抄に燼保久 などあり敦忠集に親盛からものゝ使にていくにかねのひうちほくそに沈をしてしのぶをすりたる布の袋にと云々新撰六帖衣笠内府「打出す火打の石のほくそなみなにゝもつかぬわか身也けり」頭書 盛衰記十六ノ六丁ォに付茸(ツクダケ)とあり火口(ホクチ)の事也 酒顚童子草紙九丁ォに火打つけ竹雨紙を笈のうちに付て云々類聚名物考調ば部十一

(卅)山芋鰻鱺(ウナギ)となる　日蓮書七の卷南條七郎殿御返事に凡夫ヲ佛ニ成シ給ヒ蓼鵐(トビ)トナリ山芋ハウナギト成也云々按に山芋の鰻鱺に變(ナル)と已にいひたれば考合すべし

(卅一)ばと燃上りコガ〳〵と燒　同卷盂蘭盆御書にトウシミヲアツメテ火ヲツケタルガゴトクハトモエアガリ母ノ身ノコガ〳〵トヤケ候シと云々今俗にばツともえ上り又コガ〳〵と燒たなどいへりコガ〳〵はコゲ〳〵なるべし

(卅二)間木(マギ)　蜻蛉日記解環抄中ノ十ニ丁ォ　にひごろれいのかうもりするゑて行ひつるも俄になげちらしすゝもまぎにうちあげなどらうがはしきにと云々解環抄にまぎにうちあげてをまきてうちあげてと引直したるは中中に誤也台記康治元年五月十六日の條に可レ取レ在二間木一之物上夢驚探二間木一得二銀龍一云々玉海玉藥(ナグシ)などの戴餠の事をいへる條にも見ゆこは今の俗に長押(ナゲシ)といふこれも古代長押(ナゲシ)といへるは上下の押緣(オシフチ)の事にて今いふ長押にはあらず頭書 續古事談上三丁ォ字治拾遺二ノ八丁ォ二處同二ノ十一丁ォ今昔十六ノ十九丁同廿ノ廿三丁同廿八ノ卅丁に二處

(卅三)ゐもりのしるし「ぬく履(クツ)のかさなるとのかさなればゐもりのしるし今はあらしな」と云歌の注釉中抄六の廿四丁ォに法華玄贊嘉祥法華義疏を引ていへり俊頼口傳童蒙抄奧儀抄などにも說見ゆ歌林良材上廿一丁ォには張華が博物志を引れたりされど陸佃が埤雅十一卷易の條及羅願が爾雅翼を引べし爾雅翼卷三十二釋魚部蠉蜳の條に似二蜥蜴一灰褐色在二人家屋壁間一狀雖レ似レ龍猶二蠉蜳一龍亡而去比二之蠉蜳一言レ不レ足レ畏楊子云執二蠉蜳一嘲二龜龍一蓋陋レ之也一名守宮又名二壁宮一東方朔射覆詞云臣以爲龍又無レ角謂レ之爲レ蛇又有レ足跂々脈

脈善緣レ壁是非二守居一即蜥蜴蓋言レ此也說者以爲飼以二朱砂一以二其血一點二宮人一如二赤誌一終身不レ滅交接便脫漢武帝嘗用レ之故名二守宮一按說文蜥蜴之易象形秘書說日月爲二易象一陰陽也則經二陰陽一一交而變易似レ有二此理一然所謂守宮者亦以其常在二屋壁間一有レ守レ之之象如下鳥有二澤虞者一常在二田中一俗呼爲二護田鳥一之類上不二必塗レ血而後爲一レ守也舊說蛇醫龍子蜥蜴三者並不レ螫レ人蠑螈乃聞二螫レ人必死一然未レ聞レ有二中レ之者一特善捕レ蝎春秋考異郵曰上勝水故守宮食レ蠆宋均曰守宮生二於土一蠆藏物屬二於坎一坎水也俗號二蝎虎一又一種色似レ此而能入レ水按二毛詩正義一名水蜥蜴

(卅四)山鼠　宋人羅願が爾雅翼(卅二の卷)釋魚部巴蛇の條に倭國有レ獸如レ牛名二山鼠一彼有二大蛇一亦呑二此獸一蛇皮堅不レ可レ斫蓋巴類也と云々與清按に此獸蛇共に所レ不二見聞一也蓋琉求國の說などを誤傳たる歟

(卅五)政　政は史記五帝本紀注に齊中也とありて治國平天下の道其齊して中らん事を要とし偏て違ん事を恐る故に政は齊中の義也といへり此をマツリゴトと訓(ヨム)るは祭事(マツリゴト)也凡人君天地山川の神を祭り先王上帝輔相功臣を祭事を先として民を治る也故に史記世家に其國紀レ祭ともいへり國語魯語上八丁(ウ)に夫祀國之大節也節制也而節政之所レ成也言節所二以成一レ政故愼制レ祀以爲二國典一也典法云々又云夫聖王之制レ祀也法施二於民一則祀レ之謂二五帝殷契周文一也以レ死勤レ事則祀レ之殷冥水死周棄山死是也以レ勞定レ國則祀レ之虞幕夏杼殷上甲徵周高圍大王也能禦二大災一則祀レ之夏禹是也能扞二大患一則祀レ之殷湯周武是也非二是族一也不レ在二祀典一族類也云々判官をマツリゴトビトといひ政の字音をとりてジャウといふも其省中の政務を執行ふゆゑの名也

(卅六)神事　祭祀を神事といふと國語魯語下十二丁ォに合二神事於內朝一注に神事祭祀也と見え漢籍に出たる字面也

(卅七)羽柴氏秀吉　豐公逸事錄藤吉郎京都勤番の條に信長公京都へ御越有て自ら御裁判あり云々藤吉郎へ俄に大祿を被レ與在番として殘し置給ふ云々扨其後彌御機嫌に應じ藤吉郎を筑前守に叙爵姓字は望に任すべしとの由なれば願を以羽柴と號せられぬ是は信長公の寵臣柴田丹羽の姓一字宛を錯舉して用られしよしと云々豐公逸事錄は豐太閤生立の比駿河の松下氏尾州織田家などにて同寮たりし稻葉隨菴浪人して後に江戶芝金杉に逸居せしが其物語を築地の醫師

秦道就聞傳へ夫より麻生の處士林主水聞傳へ主水より桂川貞輔に傳へ貞輔が息太仲廣津弘恒に語て筆記せしめたるよし天明甲辰仲春弘恒が自序に見ゆ 頭書 宇田系圖に天正二年平信長公六角義秀ト和談ス後ニ信長ヨリ藤吉事ヲ義秀ヘ被ニ賜申一條藤吉ハ匹夫ナレ𪜈器量アル者也後々ハ此方貴家爾家ノ下ニ名ヲモ可レ發者也貴家ハ宇多帝ヨリ嫡々湖源氏ノ棟梁ニテ累代ノ大國司ナレバ何卒以ニ藤吉元吉一烏帽子子トナシ可レ給也仍テ六角義秀領掌ノ上ニテ信長立合ノ上從ニ六角一藤吉ヘ酒杯ヲ賜ヒ藤吉元吉ヲ改メ秀ノ一字ヲ玉ヒ秀吉ト改ル也云々

（卅八）豐太閤馬を船にて小田原陣へ廻されし時の書同書小田原御陣前御用心馬大廻しに被レ遣條に船手方より申出すは某沖昔より禽獸の類乘せ候へば必破船すと申傳候に付古來より不ニ載來一候御首途之御事に候へば先言上に及候との趣則上聽に達しければ其儀は疾御存知也故に今度は大切なる御守護被レ下候條船危相見え候時海中へ投納候へばいかなる風波も靜り候間これを以乘通るべしと御守護御渡有ければ役人中謹て頂戴退出せり去程に千疋の馬を數艘に乘組御守箱一ヅヽ相渡出帆せり案のごとく某沖にて風波あらくなりし故船のものども誠を取て件の御守を海中へ投納ければ漸々と海上穩に成千疋の馬恙なく著岸し澤津驛にて引立たり其内一艘乘組候ものども難船に周章して御守護のあり所を失けるが著岸の上に

て御守を見出大切なる物を留置るは恐多しとて返上に及べり木下大和守殿取次御前へ被ニ差上一ければ莞爾と御徹笑有て其箱紐をとくべしとの御意故謹て披見れば取手もくゆるばかりの御仕立也内を見候へと仰ける故披て拜見せられしに一通の御書あり其文左のごとし

馬を大廻しに遣し候條海上異儀なく可レ被ニ差通一者也

月　日　　秀吉

龍宮王とのへ

（卅九）北條出家に魚を食はしむ　同書浮屠の類待ひやうの論の條に秀吉公宣く保元以來の風俗佛敎に貪著すると盛にして政事の妨と成故に北條これを憂て是を退んために聞ゆる出家共魚肉を食せたるは還て彼を助益の基と成也人の性愚惑なる者は精を出し修行積るほど其愚惑彌堅固に成物なればいかやうにさとし導ても愚惑の心變るとなし故に上一人より下萬民尼巫の類に至迄其受持たる職分を能勤行へるには褒美を加へ其職分を怠り亂行者は其輕重に隨て罪科に行外なしと仰けり云々評に桂川翁曰北條氏當時の

人々尊信する名僧を召集め嚴命に不レ從者は死刑と定魚肉の料理を與へられしに法然は袈裟を脫して食し親鸞は袈裟衣を著ながら食しけり日蓮は辭退して不レ食再三勸ても不レ肯故に斬罪場へ引出けれども漠然として心を不レ動北條氏素より彼これ示合おかれし事なれば手を廻して助命せられしと也於レ是右宗門の徒それ〴〵に道理を附種々の奇言妙語を附會して人を勸導ると彌增せり公の宣ひしと實に中れる哉云々與清曰此說後の愚耄儒者が附會なるべし時代も不レ合さる事古書にたえて所見なし

（四十）かうがい　豐公逸事錄藤吉郎盜人沙汰を請て堪忍の條に信長公巢俣御本陣にて福富平左衛門所持金龍の面指（スキ）かうがい紛失せり其座に有し人皆藤吉郎を疑ひ云々藤吉郎其夜御伽より罷りて津島町へゆき町役人をめし集め今日御本亭にて失物あり內詮議の事拙者承り參る各格別の働を以相知れ候樣に世話給るべし賣物質物等心を用ひよく吟味有べしといへば各畏入候とて多分出しければ間もなく馬衣或は及物類質にいれんとせしを持來り此內には無レ之哉と差出す其內にまがふべくもなきかうがい有しを藤吉郎取ておしいたゞきさて〳〵身の幸ひ本望至極せりとて金子取出しこれは些少ながら酒代とて渡世町人等われ〳〵何の功有てかゝる御惠みに預るべきやと返しければいやこれは上より賜るにおらず手前役目つとめしに早く出し事の悅しく手前の身祝ひ誠の寸志なるほどに祝てたび候へと云て金をあたへ云々與清按にかうがいの事布衣記（永仁三年の撰定）に衙府太刀平鞘太刀弦袋鞘卷鎌倉下緒同笄云々又太刀刀扇事云々下緒ハ鎌倉サゲ緒也カウガイ同云々上堅抄（上原豐前守堅家記東山義政の時一禪御作）三の卷万を堪忍すべき條に大納言行成卿云々まもり刀よりかうがい抜いてびんつくろひて云々鎌倉志荏柄天神神寶に笄一本後藤祐乘が彫物梅なり長サ九寸五分云々など此外所見おほかるべし後藤六代彫物秘傳に祐乘の笄あり祐乘ハ永享十二年生永正九年五月七日七十三歲にて死す足利普廣院義敎公に仕へ狩野古法眼元信と時を同せし人也 頭書 渡邊幸菴對話記に見ゆ又首に刺す則敎は大鏡六の卷二丁ウに御櫛がうがいと有和名抄冠飾具に櫻鬘敎和名加美賀岐と見ゆ

（四十一）でんがく　今俗に豆腐の田樂或は木芽田樂などいふ田樂の名新撰犬筑波集に見ゆ弓

法四箇書喰物之書にれんがく小串喰様之事串を横に持て左の手をかけくふもの也小串も同前云々傳云俗に田樂と呼奈良の田樂法師の足太をはき杖にて歩く形豆腐を串に刺たるに相似たる故なり又云喰様三口にくふべしと也と云々按に此説によれば今田舎人がれんがくといへるを正とすべし頭書南浦文集下十五丁ウ豆腐田樂ノ詩アリ豈筑波一ノ十九丁オ「ぬりにしかべの土なれやせり」と云付句に「でんがくの味そゝながるゝねろりばた」新撰狂歌集下廿一丁オに貧僧弟子と各錢にて田樂をして弟子にはくはせず我ばかりくひければ云々

（四十二）天盃天酌并御通　天盃天酌と云事宣胤卿記におほく見え二水記などその外室町將軍の代の家記類に所見少からず弓法盃之書に大流は近代出來たる事也是は天盃天酌にはなき事也公方家にても無官の武家への事也官位あるには大流は無レ之と云々傳云天盃とは天子の御盃也天酌とは天子自御酌あるにあらず内侍代て酌をなす也云々別傳云天盃ハ天子ノ御盃也天盃頂戴ノ法ハ別ノ土器ニ取カヘテ滴ヲウツシ御盃ヲ懐中シテ退出スルソレヲ「サシカヘシ」ト云天酌ハ天子臣下へ御酌ニテ酒ヲ賜フ也天酌ハ後花園院ヨリ始レリ親王家ヨリ織位マシマスニヨリ群臣ヲナツケ玉ハントノ也トゾ然ルユヱ將軍高位ノ方モ自身酌シテ家子殿原へ酒下サルヲ御通トイフ云々故實拾要六の巻に天盃是天子ノ御盃ヲ云也尤是土器也云々按に大流小流の事も弓法盃の書にくはし今俗御流頂戴といふこれ也御通の事後水尾院年中行事に見ゆ頭書筆記五十四ノ卅三段見合スベシ山槐記治承二年正月十四日ノ條に天酒といふ事有似たる名目にて別義也思ひまがふべからず花鳥餘情に天盃を賜ふ時は土器を召て御杯の酒を移し入て呑也其土器をさしかへしと云也云々親長卿記文明十九七ノ十五ノ條に於二常御所一被レ下二天盃一祝著之云々

（四十三）柳樽　柳樽の事室町の代の家記に所見おほく別所長治記などにも見ゆ弓法盃之書に酒を柳と申事酒の品々數多候へども先柳と申事口傳傳云柳と云事專女中方の事也柳と云子細は柳のみどりを煎じたる色をかたどり柳といふ説あれども信用しがたし肥前國柳と云所より出たるゆゑ柳樽といへば此説可也又女中方万葉書に屋名喜多留と書委婚禮之書に出レ之云々按に肥前は豐前の誤也豐前小倉に並て今も内裏云處有是平家の假に内裏を營し柳が浦にて名所也長州下の關より見わたし一里許の海向なりといへり頭書琅邪代酔八に柳樽増也書植詩我有二柳樽一云々東寺文書抄二ノ八丁ウ頭書三國遺事答八に柳樽ノ出處ハ代酔云柳樽ハ

樽也ト云是也云々名物考調度ノ十四桂川地藏記上十二丁ヲ酒名下若村云々塔尾之梨花竹葉酒宮腰之桑落菊花酒柳屋之歡伯九夏酒云々

（四十四）典侍陪膳の始　弓法酌之書にしゆびづかさの事をいひて采女ヲ多ク置ル皆是陪膳采女ノ義也陪膳ノ采女ハ天子御膳ノ給仕ヲ勤ルニ依テ親近ノ役也六十三代村上帝應和ノ比ヨリ以來陪膳ノ職典侍ニ移リテ采女ノ職分有名無實ナル由舊記ニ見エタリ云々典侍配膳の事御齒固の時などにもあり配膳ハ天子の御傍に有て御箸を取御盖を取御椀器を取などするもの也手長といふその取次也役送といふは手長に取繼て渡すをいふ又鬼をするといふは毒味スルコト也毒味は毒試を俗に訛れる也鬼といふは生飯は鬼神に祭れば最初に試るゆゑ生飯にたとへその生飯を食は鬼神なればその鬼神にたとへて鬼といふ鬼呑などいふも湯桶の湯を先呑試るゝ也生飯の事弓法喰物之書にくはしく見ゆ管見野水抄二の巻小窓雜筆一の巻塵嚢抄八の巻武藏鐙日中行事など其外所見おほかり

（四十五）甲乙人　『菊亭家書禮上巻制札書樣の條に軍勢甲乙人濫妨狼藉之事云々軍勢トハ十万ノ餘ヲ云也將軍御動座ノ陣ヲ四軍ト云也軍勢ノ事也甲乙人トハ甲ハ軍兵也乙ハ雜人也強弩弱ヲ先懸スル也ト云々甲乙人の事此にて知るべし甲乙人の所見古書におほかり』頭書二水記大永六五三の條に甲乙人頗狼藉無所二于列立一云々多門院日記一文明十五三十條に近日依二當國牢人出張一惡黨等再兩陣足輕於二路次一奪二取甲乙人之衣裳一之間云々又永正三七廿四條ノ制札に軍勢甲乙人等亂入狼藉事云々東寺文書抄二ノ十五丁ウ寛正二年十一月十五日文書に三職地下人等の一ぞくうちよらば甲四五百もあるべし云々此の侍分の者をさして甲といへる也下學集下二丁ウ漢書刑法志二丁ウ甲士アリ卒アリ甲卒ハ甲乙人ノ類東鑑卅四ノ十二丁オ同十三丁オ卅六ノ十五丁ウ寶石類書九吉見政義書札抄下制札事ノ條

（四十六）鼠を薫すは火災の祟　日下舊聞五の巻宮室三元下に至正十一年正月京師清寧殿災焚二寶玩一萬計由二宦宮薫レ鼠故一也草木子云々日下舊聞全四十二巻清の朱竹垞が清都北京の故事を古書より抄錄して間今按をも加へたる書也星土世紀城市郊坰京畿僑治邊障戸坰版風俗物產雜綴石鼓考と部類せり引書千百八十九部條々千三百十五件あり石鼓ハ周宣王の時の器太史籀が大篆の銘あり十鼓あり頭書琅邪代酔十ノ廿一丁オ社鼠不レ憑云々

（四十七）磨の機軸　日下舊聞五の巻宮室三元下に尚食局進御麥麪其磨在二樓上一於二樓下一設二機軸一以旋レ之驢畜之踩踐人役之往來皆不レ能レ及且無二塵土臭穢所一レ侵乃巧工瞿氏造焉輟耕集云々按に文政十一年の比武藏倉岐郡金澤の巧工忠兵衛者ありて水力を不レ借水

車を江戸郊北鳴子に造人一人樓上にありてこれを踐ば八箇の臼自然米を搗一箇の磨自然粉を磨といへり此忠兵衛は代々工に名ありて鎌倉八幡宮の圖をも持（モ）たるをそれに據て文政十一年御再建の作事成れりとなん

（四十八）艾虎并歲除の風俗及艾衣艾糕　五月艾虎の詩五山僧の詩集におほく月令廣義にそのゆゑよしをいへり日下舊聞三十八の卷風俗の部に五月朔穿五毒艾虎補子蟒衣云々また歲除簷楹插二芝麻一楷院中焚二栢木柴一名曰二爆歲一元旦起擲二門檻于地一者三曰二趺千金一以二小榼一盛二驢肉一食レ之曰レ嚼レ鬼云々右いづれも蘇史を引たり蘇史は劉若愚が撰のよし引書目に見ゆ插二芝麻一焚二栢木柴一は本朝の柊燒（ヒヽラギヤキ）からせに似たり歲除鬼を嚼といふも逐二疫鬼一類也また燕北雜記を引て云五月五日午時采レ艾摘レ葉與レ綿相和絮二衣七事一遼主著レ之番漢臣僚各賜二艾衣三事一渤海厨子進二艾糕一云々頭書筆記六十三ニモ艾虎ノ下アリ可二考合一

（四十九）妓女の雙名　日下舊聞卅九の卷雜綴部補遺に李符が花南老屋歲抄を引て云古妓女多以二雙字一名南齋則蘇小々唐有二薛瓊々關盼々張好々李端々王蓮々鄭舉々張往々王蘇々曹保々張紅々一宋有二李師々毛惜々楊愛々唐安々一至二元人一尙二詞曲一青樓得レ名者如二趙眞々于盼々于心々李心々魏道々汪憐々顧山々馮六々孫秀々荊堅々李當々一皆大都妓餘未レ能二悉數一也云々また黃雪蓑が青樓集を引て云孫秀々都下小旦色也名公巨卿多愛二重之一京師諺曰人問二孫秀々一天上鬼婆々云々按に雙名岐女に限るにあらず鶯々などの類美人の佳名也北里誌青樓集共に古今說海中に收む娼女の事を記したり

（五十）娑羅樹　日下舊聞廿三の卷郊坰五臥佛寺の條に娑羅不レ芘二凡草一不レ止二惡禽一（酉陽雜俎）○娑羅花苞大如レ拳葉似二枇杷葉一凡二十餘葉相沓捧レ苞類二桐花一一簇三十餘朶經レ月方謝（茅亭客話）○沙羅者其木葉如二海桐一又似二楊梅花一紅白色春夏間開（吳船錄）○沙羅外國之交讓木也葉似レ栴皮如二玉蘭一色慥白最潔烏不レ捿虫不レ生子能下レ氣通雅○五臺山僧侈言二沙羅樹靈異一至二畫圖鏤版一然如二巴陵淮陰安西伊洛臨安白下峨嵋山一在處有レ之聞廣州南海神廟四本特高今京師臥佛寺二株亦有二干レ霄之勢一顧或著或不レ著草木亦有二幸不幸一也（緣水亭雜識）○朱國祚臥佛寺詩傳聞蘭若春三月花比青彌陀院多惆

帳芳時來獨後但聞風葉響二娑羅一（介石齋集）○陳萬言臥佛寺詩覽眺吾將レ倦津梁子亦疫遠嵐燈煙細側檜雨聲欹僧榻禪栖定蕃齋夜供遲松寮思二禮祓一不レ記二出レ山時一（餅圖集）按に娑羅雙樹の事平家物語源平盛衰記の初に見えたれば引注すべし頭書祖庭事苑三ノ廿七丁ウ

（五十一）上下長袴半上下　德公聖聞書（水戸の始封賴房卿より光圀卿までの事跡を記せる寫本一卷也）に慶長六庚申將軍御成九月八日殿樣宰相御昇進云々翌日御長袴ニ而御登城云々万治三庚子六月五日中山風軒半袴十德ニテ御料理出云々延寶六年十二月十六日御婚禮相濟候ニ付上使大久保加賀守殿半上下兩殿樣長御袴御對顏云々同八年申正月十八日昨日中山市正婚禮相濟候ニ付御下屋敷御禮被二申上一大殿樣駕斗目半上下ニ而出御云々同三月廿八日九ッの御供觸ニテ兩殿樣のしめ半上下ニテ舜水へ被レ爲レ成露院口より入御舜水門外迄罷出頭書室町日記八ノ三丁オ幽遠隨筆下三丁ウ

（五十二）前髮袖留半元服　同書慶長九癸亥六月十四日將軍御上洛殿樣雜兵共ニ壹万餘人也此時家光公御相伴ニテ賴房ニモ御前髮御取被レ成候云々万治元戊戌十二月朔日左馬頭樣御袖留云々寛文四甲辰四月十日若殿樣御袖留云々延寶七年未三月十二日紀州中將樣半元服云々

（五十三）隱元禪師宇治の寺地　同書万治三庚子九月四日隱元禪師寺所宇治脇五ヶ庄ニテ松平伊豆守見立ル云々

（五十四）大名の家中の士證人御免　同書寛文五乙巳七月十三日諸大名家中證人御免是ゟ先御家ニテモ明曆三年丁酉三月廿七日太田主水松平因幡守妹婬證人參勤ノ事有云々按に大名の藩士妻子を江戸屋敷へ證人に出し置たるを免されし也

（五十五）花火　同書寛文五乙巳七月十六日二ノ丸御花火上覽云々同六丙午七月十八日於二二ノ丸一花火上覽云々同八戊申七月十八日二ノ丸ニテ花火上覽云々同九己酉七月十八日二ノ丸ニテ花火上覽云々廿五日二ノ丸ニテ花火上覽云々頭書倭漢三才圖會五十八の卷火部文藻行潦波部器財門に花火ハナビ經國雄略云々鷹筑波集五ノ四十三丁ヲ寛永五年ノ作

（五十六）御番衆乘輿御免　同書寛文五乙巳十二月廿二日公儀御番衆へ向後乘物御免云々

（五十七）猿樂刀御免　同書寛文八戊申四月六日樂猿刀御免云々六月七日御家の役者刀御免事云々御家役

者は水戸御家の猿樂をいふ

（五十八）卅三間堂通矢　同書寛文八戊申五月十二日紀州樣御家來葛西蘭右衛門京都三十三間堂通候事云云按に寛明日記に正保三年戊四月十四日阿部豐後守ガ家來海野仁右衛門ト云者淺草三十三間堂ニテ根矢千射ヲ仕ル通矢貳百五十三本根ノ長九分込ノ長サ貳寸五分矢ノ重サ八匁ヨリ拾貳匁マデ云々と見え安齋の蠏蟻舶艫訓などに說あり通矢の事義堂の日工集に見えたるやうにおぼゆ他日考證すべし三十三間堂は得長壽院中の蓮華王院也鳥羽院の御願平忠盛建立の時の功あるよし平家物語源平盛衰記に有雍州府志四ノ廿二丁山城名勝志十五ノ四十一丁など考合て知べし和佐大八弓の天下と成し事武林隱見錄十九の卷に見ゆ和漢三才圖會廿一ノ十二丁ォ南浦文集上廿八丁ウ貞丈が正三記に永島ト也が說をなじりて塵永の比通シ矢云ト事無之云々

（五十九）奉公人出替の日定　德公聖聞書寛文八戊申十二月廿六日下々奉公人出入三月五日に被ニ仰付一候云々按に出代は大概二月二日也黑川道祐日次紀事に雲嶠類要云秦人得ニ本家婢一生ニ一子一惡レ之乞與ニ隣家一隣家大富貴也本家貧後以ニ二月二日一取歸后復本家富隣乃貧和俗二月二日爲ニ家僕交代之節一元本ニ子此ニ乎後准ニ二月二一日一八月二一日而今三月五日九月十日用レ之と見ゆ武州阿立崎玉邊は十二月大晦日を出代とす俗說弁遺編廿八ノ八丁ウ滑稽雜談歲次草などの二月の條にも說あり可レ考

（六十）增上寺火及大光院常福寺の事　德公聖聞書寛文九年七月廿三日增上寺方丈隱居云々八月三日增上寺後住新田大光院被ニ仰付一候云々延寶四年四月廿八日瓜連村常福寺常紫衣云々同六月廿三日常福寺紫衣に付參內云々同年九月廿二日增上寺火事云々

（六十一）猿樂能放下操上瑠離等上覽　同書延寶八申年四月十日公方樣巳后刻二ノ丸に被レ爲レ成操上覽未后刻還御操酒天童子云々十八日公方樣二ノ丸へ被レ爲レ成猿樂御覽御能過都右近はうか仕候云々廿七日公方樣巳后刻二ノ丸へ被レ爲レ成上瑠離六段節分由來許上覽申刻還御淨るり梵天國大夫永閑云々非書故下甲鑑二ノ卅五丁ォ桂川地藏記上五丁ウ及淨瑠璃ノ一ノ七十丁ウ新猿大筑波集傾漢三才圖會十六ノ十七丁ォ

（六十二）扶桑拾葉集獻上　同書延寶八年四月廿九日扶桑拾葉集三十三冊一代要記十冊公卿補任闕一冊藤井紋太夫を以御獻上五月朔日扶桑拾葉集一代要記新院樣へ御獻上相濟之由京都ゟ申來云々

（六十三）犬を愛す及犬醫師　護國太平記柳澤氏成立を記す三の卷柳澤美濃守甲斐國拜領事の條に何某の院將軍を申進猥に生類の命を取事は誠に其報恐しく此一事急度上意有レ之生類の命救給はゞ御子孫万々代といふとも畜事不レ可レ有レ之目出度御代をいつ迄も治給はん御計らひ何事か是にしかんとりわけ君は正保三丙戌正月八日御誕生なれば生類の內にて犬をば分て御愛憐有べしと詞を巧にして申上さしもの御明君如何成天魔の見入けん尤と御賢慮遊ばし嚴しく申渡すべしとの上意に依て美濃守下知を傳ふ是ゟ江戶町中犬食に飽北條九代高時禪門が所爲に過たり子を生時は其一町の家主下役名主に訴年寄に告げ町奉行に至り犬醫師といふ者有てうや〳〵しく禮を掛て招き犬の脈を伺ふなどとて術を盡して藥に大人參を用ひ命危き迚藥店へ人を走らせ或は布蒲團新に仕立重ね敷又上より布薄團を以覆美食を調へ美肴を調味し二七日の內は晝夜朝夕數十人代り〳〵張番し繁き店中を明て是をいれ三七日にいたり犬醫師の指圖にて氣晴し足ならし迚所の家主下役五人組繩を取て其犬を引き十間廿間も町筋を引廻し其うつけたる有樣前代未聞の事也誤て犬に疵付万一犬死する時は申譯くらきものは其品に依て死罪又は遠島擧て數へがたし北條高時犬を集て戰せしのみ未犬の代りとして重き人倫の命を取し事不レ聞云々按に三國志吳孫皓犬を愛して鬪犬の戲をなし太平記相摸入道また鬪犬の遊戲をなせり犬醫師はをさ〳〵ものに見えねど物理小識に犬病を療治する方あり可レ考非書魏志董卓傳に卓所レ愛胡特レ寵放縱爲ニ司隷校尉趙謙一所レ殺卓大怒曰我愛狗尙不レ欲レ令ニ人呵一之而況人乎及召ニ司隷都官一欲レ殺之云々

（六十四）湖源氏　宇田系圖凡例に湖源氏トハ敦實王天曆四年近江國へ入邦蒲生郡ノ武佐野佐々木庄大佐々貴宮ニ住シ玉フ後末子九男出生源扶義卿也七歲ノ時ニ村上天皇詔アリ父敦實扶義同車ニテ參內奉レ拜ニ龍顏一時ニ七代不易近江國司源氏ヲ賜フ可レ號ニ湖源氏一ノ勅詔ナリ以來近江國ニ住シ扶義ノ子孫號ニ湖源氏一云々

（六十五）蓮の一莖二花　蓮の一莖二花なるを佳瑞として日本紀にも磐余池の一莖二蓮の事を記し近來西窪天德寺の池に一莖二蓮生たりとてめではやし人々勸て歌などよませたりき德公聖聞書延寶四年七月六日大泉水に蓮一本に花二ッ開ク云々これ水戶殿小石

川の邸にての事也按に吳志に一莖二蓮を不祥の瑞とす和漢不同の說也 頭書 百練抄六ノ七丁ウ同十六丁ウ同九ノ五丁ウ本朝世紀十九久安五七九ノ條同廿三ノ條ニ見エテ不吉トス

(六十六)天子　事物紀原一の卷帝王后妃部に天子說文曰古之神聖人母感レ天而生レ子故曰二天子一春秋元命包曰女登生レ子人面龍顏始爲二天子一帝王世紀曰神農氏之母有二蟜氏名女登一則帝王稱二天子一自二炎帝一始也云々魏書明帝紀廿一丁ウ註に魏略曰太子舍人蔣上書諫曰云々陛下天之子也百姓吏民亦陛下之子也云々按に天子の字は書經に天子作二民父母一以爲二天下主一詩經に百辟卿士媚二于天子一など見え後漢書爰延傳に天子尊無レ爲レ上故天以爲レ子位臨二臣庶一威重二四海一云々春秋繁露に天祐而子レ之稱二天子一云々白虎通義に接レ上稱二天子一者明以レ爵事レ天也云々と見えたるにて其義知べし古事記日本紀には天子といへる字見ゆるとなし 頭書 筆記六十四ノ第二

(六十七)老酒　宋の范成大が桂海虞衡志 一卷あり古今說海說選部偏記家二十卷中に收たり 志酒の條に老酒以二麥麴一釀レ酒密封藏レ之可二數年一士人家尤貴重云々此麥酒の年酒也

(六十八)諸葛孔明の銅鼓　同書志器の條に銅鼓古蠻出二千歲嚴柱杖之類一具多更有二疎節竹一一五六尺一節僧道多以爲レ杖又按□最云溪州通竹直上無レ節空心也云々按に蘆の大なるは今も琉球蘆とて花筒に用るあり唐書にも見えて蘆葉の達磨などいふも此蘆の筏などにてわたりけん疎節竹は無節の竹杖也今大磯宿鴫立澤に西行の杖とて無節竹杖あり疎節竹なるべし

(七十二)四月八日佛誕日　葉隆禮が遼志 古今說海說選部偏家記中に收む一卷有 に佛誕日四月八日京府及諸州縣各用レ木雕二悉達太子一尊一城上舁行放僧尼道士庶民行レ城一日爲レ樂云々按に滑稽雜談歲次草などに增注すべし

(七十三)小春　同書に小春十月內五京進二紙造小衣甲幷鎗刀器械各一萬副一十五日一時進二梁國主與一押番巨密一望二木葉山一奠レ酒拜用二番字書狀一紙一同焚燒奏二木葉山神一云寄庫北呼此時爲二戴辨一漢人譯云戴是燒辨是甲云々小春の事滑稽雜談に引べし

(七十四)獨木船梭船幷獨木橋　同書長白山の條に其俗刳レ木爲レ舟長可二八尺一形如二梭子一曰二梭船一上施二一槳一止以捕レ魚至レ渡レ車則方舟或三舟云々按に溪蠻叢笑にも獨木船あり余木曾川にて正しく獨木舟を見たるにそのさま實に梭子にたとふべし 頭書 獨木橋梅花無盡藏祖庭事苑二ノ廿丁ウ

(七十五)屯田　宇文懋昭が金志 一卷古今說海說選部偏家記中に收たり に屯田之制本出二上古一金國行レ之比二上古之制一尤簡廢齊國後盧中州有二懷王三戶之意一始置二屯田軍一非二止女眞契丹一亦有レ之自二本部族一徙居二中土一與二百姓一雜處計二其戶口一給二賜官田一使二自播種一以充二口食一春秋量二給衣服一若遇二出軍之始一月給二錢米一米不レ過二十斗一錢不レ過二數千一老幼在レ家依レ舊耕藪亦無二不足之歎一今屯田去レ處大名府山東河北兩關諸路皆有レ之約一百三十餘千戶每二千戶一止三四百人所二居止一處皆不レ在二州縣一築レ寨處二村落間一千戶百戶雖レ設二官府一亦在二其內一云々按に屯田の事史記漢書におこりて西漢の制也趙充國始レ之通典通考などにくはしく辨じ會典亦詳也日本紀に屯倉ありまた此類也余新撰姓氏錄の注にくはしく論じたり 頭書 陸深が傳疑錄(陳眉公秘笈本)に屯田者屯二於邊一而田者也今世の人の腹中を詳りたる也(ゼンウマツカン)

(七十六)單于可汗　北狄の名號は宋程大昌が北邊備對一卷古今說海說選部偏記家中に收たり に北狄者太王之獯鬻宣王之玁狁幽王之犬戎桓公之山戎也爲二其居一四夷之北故總名北狄也至二戰國一遂有二林胡烏桓之先也後爲二鮮卑一至二漢初一

東胡遂爲冒頓所幷而冒頓國于東胡之西即漢世之匈奴也漢史之叙北狄事自秦以前皆名爲犬戎而史記李牧傳已有匈奴之名則狄人以匈奴爲國號久矣若以時世求之則蒙恬所郤之胡其酋長即頭曼也故漢史曰頭曼不勝秦而北徙頭曼者冒頓之父也頭曼之時已稱單于後又增稱撐犂孤塗單于史著其義曰撐犂者天也單于者廣大之貌也自秦至漢在北最強者雄此一族他虜雖盛莫之與京也後魏之世蠕蠕社崙始改稱單于爲可汗者其擬則皇帝也故唐高宗曰今之可汗古單于也云々按に漢土は聖人の國文物の邦といへども異寇の憂たゆることなく夏に獯鬻あり周に玁狁犬戎山戎あり秦に林胡あり漢に匈奴あり三國に烏丸鮮卑あり晉季に至て遂に中國を呑江北夷人のために陸沈し禮樂征伐夷君より出るがごとし隋唐五季の間突厥契丹回紇勢を振ひ宋の世金遼にせばめられて遂に南渡せり元祖天下を平均して海内夷俗に變ず明朝僅に再興せりといへども又韃靼の有となりぬされば我神國にくらぶればこのもしからぬ戰地聖人君子の教もふようといひつべし頭書（單于ノ義漢書匈奴傳ノ注）

（七十七）忌諱の字 同の字を用說 宋の孔平仲が孔氏雜說（一卷あり古今說海說畧部雜記家の中に收たり）に太史公父名談故史記無談字季布傳改作逭談作趙同范睢父名泰故後漢書無泰字郭泰皆改作太字李翺父名楚金故其所爲文皆以今爲茲韓愈作諱辯持言在不言徵之說故父名仲卿未嘗諱焉晉曹志者植子也奏議武帝云幹植不强不諱植字二國時猶不諱其君呂岱傳張承與岱書云功以權成是斥孫權名也云々按に避諱の說陔餘叢考にくはし文昌雜錄（說海說畧部雜記家に收む）に史記趙同漢書同作談蓋司馬遷以父名故改之今人與父同名者改曰同爲是也とも見ゆ頭書（五雜俎十三ノ卅四丁ウ）

（七十八）非相 荀子に非相の篇ありて相術を誹れり孔氏雜談に南史の庾杲褚蓋唐の柳渾魏の王肅南史の徐陵唐の孔季詡などが事を證して亦相法の賴べからざるよしをろうじたり

（七十九）佛入漢土之始 孔氏雜說に佛出於西胡言語不通華人譯之成文謂之經而晉人諸君子甚好于此今世所謂經說性理者大抵多晉人文章也謝靈運繙經臺今尙存焉唐傳奕謂佛入中國蠻兒丐夫摸象莊老以文飾之姚元崇治令其說亦甚詳霍去病破匈奴獲休屠祭天金人注祭天以金人爲主

休屠祠金人也師古曰今之佛像是也其後休屠王太子歸漢以金人之故賜姓金氏即日磾也據此則前漢時佛像已入中國矣凡今之佛像皆祭天之主也其盛有天助焉爾後漢明帝夢見金人以爲佛於是遣使天竺國圖其形像楚王英始信其術齋戒祭祀陶謙傳笮融大起浮屠寺作黃金塗像浴佛設飯前漢西域傳塞王南君剝賓塞種分散往々爲數國自疏勒以西北休循捐毒之屬皆故塞種（塞先得反）捐毒即身毒天竺也後漢襄楷傳注浮屠即佗聲之轉耳史記大月氏傳身毒國在大夏東南數千里其俗土著與大夏同而卑濕暑熱按後漢西域傳天竺一名身毒今浮屠像多赤足此卑濕暑熱之驗也又云其民乘象以戰今浮屠像亦跨象云々按に佛入中國一說陔餘叢考に見ゆ疑耀に西方聖人の論あり塩囊抄日本紀通證など考合すべし頭書（野客叢書四ノ廿一丁ウ漢書匈奴傳）

（八十）仰の字 同書に今公家文字用仰字北史時已有此語北齊孝昭皇帝紀詔定三格禮儀體式亦仰議之云々按に今の仰聞仰渡仰蒙などの仰の字也

（八十一）工夫功夫 同書に工夫或作功字魏志王粲傳太極已前功夫尙大也云々按に工夫の字を用て功夫の字を用るは稀也弘仁私記序に功夫甫就献於有司とあり釋日本紀開題に引たり

（八十二）課馬雜役馬 關東の俗牝馬を雜役馬といへりそは戰士の乘馬に用べからず雜役に使ふ馬なればなり也唐六典にこれを課馬といふも似たる名目也孔氏雜說に俗呼牝馬爲課馬出唐六典凡牝四游而課羊則當年而課之課謂歲課駒犢云々課は課役也其駒を課に取ゆゑの名也頭書（東海道名所記四ノ七丁ウ池鯉鮒の條に每年四月の内は馬市あり（四方より馬を出してうり買ひする也諸方より傾城多く集まりて市立の如し）人に契る云々圖の馬を賣買すれば利分もあれどそうやくなる賣ものは皆たはるゝ也と心ある人人は手をたゝきて笑ふ云々）

（八十三）甲子を用て年號を不書 碧湖雜記（一卷古今說海說畧部雜記家三十二卷中に收む）に五臣注文選謂陶淵明詩自晉義熙以後皆題甲子後世因仍其說獨治平中虎丘僧思悅編淵明詩辨其不然其說曰淵明之詩題甲子者始庚子迄丙辰凡十七年皆晉安帝時所作恭帝元熙二年庚申歲宋始受禪自庚子至庚申蓋二十年豈有宋未受禪前二十年耻事二姓而題甲子之理曾裘父艇齋詩話亦信其說然以余考之元興二年桓元篡位晉氏不斷如綫得劉裕而始平改元義熙自此天下大權盡歸劉裕淵明賦歸去來辭實義熙元年也

至二十四年一劉公爲二相國一恭帝即位改二元元熙一至二二年庚申一禪二于宋一觀二恭帝之言一曰桓玄之時晉氏已亡二天下一重爲二劉公所一レ延將二二十載一今日之事本所二甘心一詳味二此言一則劉氏自二庚子一得レ政至二庚申革命一凡二十年淵明自二庚子一以後題二甲子一者蓋逆二知末流必至一於此一忠之至義之盡也思悅裘父殆不レ足二以知一之云々

按に近來の文人年號を記せず甲子のみを書を雅事とす原淵明が行爲に習へるものなれど御代の名を忌嫌て天子に臣とならざるに似たり學者心すべきわざぞ

(八十四)勅大人萬歲萬壽殿奏朝諒闇聖君賢君小人

孔氏雜說に父命得レ爲レ敕後漢樊重焚レ券諸子從レ敕是也叔可レ稱二大人一疎受對二疎廣一云從二大人議一是也母亦稱二大人一前漢淮陽献王傳張博云王遇二大人一亦解後漢范滂就レ獄與レ母訣曰大人割二不忍之恩一是也父可レ以稱二聖善一楊修答二曹植一書有二聖善之敎一注謂二武帝一也人臣不レ嫌レ稱二萬歲一馬援傳援醵レ酒享二軍士一皆伏稱二萬歲一是也上二父母壽一可レ稱二萬壽一潘岳閒居賦稱二萬壽一以献レ觴是也屋之高嚴通謂二之殿一前漢霍光傳鴈鳴二殿前樹上一黃霸傳郡國上レ計長史一輩先上レ殿是也白二事丞相一亦可レ謂二奏事一魏相傳帶レ劒奏レ事是也造二謁人一亦可レ謂二之朝一司馬相如傳臨邛令日往朝二相如一是也人臣得レ言二垂拱一薛宣自言垂拱蒙成是也人臣得レ言二端拱一謝孚言端拱笑咏謝鯤言端二拱廟堂一是也人臣得レ言二諒闇一山濤傳武帝詔云山太常雖レ居二諒闇一是也人臣得レ稱二聖君賢君一晉曹攄一縣號曰二聖君一薛宣傳屬縣各得二賢君一是也云々錢氏私誌(一卷あり古今說海說略部雜記家三十二卷中に收たり)に燕北風俗不レ問二士庶一皆自稱二小人一宣和間有二逸國右金吾衞上將軍韓正一歸レ朝授二撿校少保節度使一對二中人以上一說話即稱二小人一中人以下即稱レ我家每日到二漏舍一誦二天童經一數十遍其聲朗々然且云對二天童一豈可レ稱レ我自二皇天一生レ我皆改爲二小人一云皇天生二小人一皇地載二小人一日月照二小人一北斗輔二小人一前後二十餘句凡稱レ我者皆改爲二小人一誦畢贊笑云這天童極靈聖王少師云若無二靈聖一如何持二得許多小人一然小人有レ母皆嘗二小人之食一小人之稱其來古矣施二之於經一是可レ笑也云々按に大人の稱燕石雜誌にいひたりき先生の事は野客叢書に見ゆ

(八十五)看錢　廉宣が清尊錄(一卷あり廉宣字仲布隆務觀と同時の人也古今說海說略部雜記家中に收たり)に輿元民有レ得二闕遺小兒一者レ育以爲レ子數歲美姿首レ民夫婦計曰使レ女也敎二之歌舞一獨不レ售二數十万錢一邪婦曰固可二詐爲一也因納二深屋中一節二其食飲一膚髮腰步皆飾二治之一比二年十二三一嫣然美女子也携至二成都一敎以二新聲一又絕警慧益秘レ之不レ使二人見一人以爲奇貨里巷民求レ爲レ妻不レ可曰此女當レ歸二之貴人一於レ是女僧及貴游好事者踵レ門一覩レ面輒避去猶得レ錢數千謂二之看錢一云々按に看錢は見せものゝ錢也

(八十六)火の玉　唐の張鷟が朝野僉載(殘缺一卷あり古今說海說略部雜記家三十二卷中に收ム)に唐開元二年衡州五月頻有二火災一其時人盡皆見レ物大如レ甕赤如二燈籠一所レ指之處尋而火起百姓咸謂二之火殃一云々按にこれ火の玉といふべき物也

松屋筆記卷之六十三

東都　平與清文儒稿

(一)兒女狗の妻になれる世話　世話に或家の小女兒の乳母いとものぐさしにて小女に糞(ハヽ)せしむるをり家の犬を喚ていかで此糞を食掃(クヒハラ)ひねさらば此兒成人(ヒトヽナリ)てその後爾が妻に得させんといふたび〳〵に犬尾を振てその糞をくひはてぬさて兒平比に成ての後彼犬裾をくはへて深山にゐてゆきめをとなりてすみ犬日ごとに山を下て食を得て女を養ふほどにある日獵師これを見出て密に犬を射殺し女を奪て妻にしたりしがほどへて後醉のまぎれに犬を殺せるよしをかたり遂に妻に殺されたるよしいへりこれ唐の按書節李隱が瀟湘錄の說によりてつくり出たるものがたり也瀟湘錄(一卷あり古今說海說略部雜記三十二卷中に收たり)に杜修己者趙人也善レ醫其妻即趙州富人薛氏女也性淫佚修己家養二一白犬一甚愛レ之每與二珍饌一食後修己出其犬突二入室內一欲レ嚙二己妻薛一仍似レ有二姦私之心一薛氏因恠而問レ之曰爾欲レ私レ我耶若然則勿レ嚙我犬即搖レ尾登二其床一薛氏懼而私

焉其犬略不レ異二於人一爾後每二修己出一必姦淫無レ度忽一日方二在レ內同寢一修己自レ外入見レ之因欲レ殺レ犬犬走出修己怒出二其妻一薛氏後歸二薛贇一半年其犬忽突二入贇家一口銜二薛氏髻一而背負走出家人赶奪レ之不レ得不レ知レ所レ之犬攜二薛氏一直入二恒山一潛之每レ至レ夜即下レ山竊二所レ食之物一晝則守二薛氏一經二一年一薛氏有レ孕生二一男一雖二形貌如一レ人而偏身白毛薛氏只於二山中一撫二養之一又一年其犬忽死薛氏乃抱レ子迤邐出レ山人二冀州一乞レ食有レ知二此事一者上遠詣二薛贇家一以告レ贇遣令二家人取至一家其所レ生子年十七形貌醜陋性復兇惡每私走作二盜賊一或旬餘或數月即復還薛贇患レ之欲レ殺焉薛氏乃私誡二其子一曰爾是一白犬之種也幼時我不レ忍レ殺爾今日在二他薛家一豈合二更不一レ謹若更私出レ外為レ賊薛家人必殺レ爾實恐二爾累及一他改レ之其子大號泣言曰我稟二犬之氣一而生也無二人心一好レ殺為レ賊自然耳何以為レ過薛贇能容レ我即容レ之不レ能レ容レ我即當二與レ我一言一何殺我邪母當二自愛一我其遠去不二復來一矣薛氏堅留レ之不レ得乃謂曰去即可何不二時來一省一レ我也我是爾之母爭忍二永不一レ見也其子又號哭而言曰後三年我復來耳攜レ飯拜レ母而去又三年其子領二群盜千餘人一至レ門自稱曰二將軍一既入拜レ母後令二群盜殺二其薛贇家屬一唯留二其母一焚二其宅一攜レ母而去と見ゆ犬戎も犬の子孫なるよし史記注水經注などに有

(二)紙錢　就日錄說海說略部雜記家中に收む に焚二紙錢一之說唐王璵傳曰漢以來葬者皆有二瘞錢一後世里俗稍以レ紙寓レ錢為二鬼事一至レ是璵乃用為二禳秡一則喪葬之焚二紙錢一起二於漢世之瘞錢一也其禱レ神而用二寓錢一則自二王璵一始矣康節先生春秋祭祀約二古今禮一行レ之亦焚二楮錢一程伊川惟問レ之曰冥器之義也脫有レ益非二孝子順孫之心一乎徽廟朝高峯瘼用中奏乞レ禁レ焚二紙錢一有云嘗恠世俗鑿レ紙為レ錢焚レ之以徼二福於鬼神一者不レ知二何所一據依一非無二荒唐不經之說一要皆下俚之所レ傳耳使二鬼神而有一レ知謂二之慢一レ神欺一鬼可也李珂松牕百記云世既是妄人死而為レ鬼其妄又可レ知無二身心耳目口鼻之實一而六習常不レ斷顛倒沉迷豈復覺悟方其具二酒殽一列二冥器一鑿レ楮象レ錢印二繪車馬一而焚レ之以レ妄塞レ妄也蓋嘗原二其本一初恐二瘧錢為一死者之禍一及二世難一得レ錢易以二紙錢一自後沿襲至レ唐而焚レ之其來久且遠而廖高峯遽欲絕レ之以塞二妄費一且夫子謂死葬レ之以レ禮又曰敬二鬼神一而遠レ之是夫子不レ欲二遽絕一而以二有無之中一言レ之

惟邵康節云脫二有益一非二孝子順孫之心一最為二通議一云云與清按に紙錢の事陔餘叢考にくはし皇朝布を小裁して幣とするも又紙錢などの義に近し

(三)不肖子の三變　就日錄に舊傳不肖子有二三變一其初變為二蝗蟲一謂下齧二田園一而食上次變為二蠹蟲一謂二貨レ書而食一又變為二大蟲一謂二賣レ人而食一此切當二其理一今之不肖子謂二此三蟲一恐未レ足二以盡一其實一初父母未レ亡也憑二籍父祖門蔭一聲勢在レ外無二所不一レ為朝去暮歸盜竊財物恣レ情為非二父兄一以二內有一所レ主及持二父兄家一私事逼二其婢妾一至二於製肘一或恐レ玷レ己遂為二掩蔽一付之無レ可二奈何一及レ託二前世一甚至下在レ外指レ屋起レ錢上高價賒レ物低價出賣謂二之轉肩一人皆指而目レ之爺健大郎父有レ因レ此淹抑成二疾又增利一貨錢一候二父母死一還レ錢謂二之下丁錢一其或母先レ父亡猶且庶幾者若或父亡而母存其為レ害特甚初父亡得二財產入一手豈顧二其母一及二財散一而母存甘旨不レ具展轉孤苦親戚兄弟有二不レ忍者一攜歸奉養則往レ彼爭喧取擾謂母有二挾藏之物一反為二求索一其親厭煩則付レ母還レ之復受二寥寂一或有二兄弟矗給則與レ訟索レ分亦自有二此等人一資給以レ導其為レ訟既訟畢得レ錢浪費無二歲月間一又已空虛連及二妻室姊妹一覓レ人蓄養作二偽親戚一出二入閨門一分レ甘忍レ恥食レ殘衣レ弊而妻輩以二寒饑一所レ困初似二羞澁一終則願レ為二間有一妻輩家以レ力奪去及二妻子輩罵レ身事一人或與二所レ事者一厚愛從レ彼棄レ此不肖子俱無所レ施則思下舊所二交遊一者及父兄朋友上而求索度レ日如レ此又不レ知以二何等蟲一處レ之矣云々與清曰此說為二人之子一者不レ可レ不レ解也

(四)蚯蚓百合に變麥蜾蠃に變　宋鄭景璧が蒙齋筆談一卷 あり古今說海說略部雜記家中に收たり に余居二山間一默觀物變固多矣取二其灼然者一如下蚯蚓為二百合一麥之壞為上蛾則每見レ之物理固不レ可二盡解一業識流轉要須二有レ知然後有一所レ向若蚯蚓為二百合一乃自二有知一為二無知一麥之為レ蛾乃自二無知一為二有知一蚯蚓在二土中一方其欲レ化時蟠結如レ毬已有二百合之狀一麥蛾一夕而變紛然如レ飛レ塵以二佛氏一論レ之當須下自二其一意念眞精之極因緣一而有上即二其近者一雞之伏レ卵固自出二此念一雞伏レ鴨乃如二莊周所一レ謂越雞伏レ鵠者一此何道哉麥之為レ蛾蓋自蛾種而起因以化レ麥非二麥之能為一レ蛾也由レ是而言レ之一念所レ生無レ論善惡自有二必至者一后稷履二人迹一而生啓自レ ヒ 石出二此眞實語金光明經記流水長者盡化二池魚一皆得レ生レ天更復何疑但恐二人信不一及爾云々按に蚯蚓化二百合一麥化レ蛾の

說薯蕷の鰻鱺に變蛇の蛸魚に變同日の談なり

(五)述懷の題　述懷はもと詩題にて晉阮籍述懷詩を祖とす杜詩詳註五の卷に述懷詩あり去年潼關破妻子隔絶久今夏草木長脫ㇾ身得ニ西走一麻鞋見ニ天子一衣袖見ニ兩肘一朝延愍ニ生還一親故傷ニ老醜一涕淚受ニ拾遺一流離主恩厚柴門雖ㇾ得ㇾ去未ㇾ忍ニ即開一口此外みななげきの詩也和歌題の述懷も此意にてよむべし杜詩詳註廿五卷末に附篇上下二卷あり康熙卅二年十一月日翰林院編修臣仇兆鰲が上表同年長至日仇兆鰲が序も有仇兆鰲が詳註したる也

(六)掖門左掖右掖掖庭逢掖　漢書成帝記註に掖門在ニ兩旁一若ニ人之臂掖一云々同百官公卿表に武帝更名ニ永巷一爲ニ掖庭一云々字典に宮旁舍曰ニ掖庭一殿旁垣曰ニ掖垣一宮闕小門曰ニ左右掖門一皆取ニ肘腋之義一云々また說文に臂下也與ㇾ腋同禮儒行篇に衣ニ逢掖之衣一註逢猶ㇾ大也大袂衣也吏記商君傳千羊之皮不ㇾ如ニ一狐之掖一云々杜詩詳註六に宣政殿退朝晚出ニ左掖一云々詩あり又同卷春宿ニ左省一詩に「花隱掖垣暮」の句あり

頭書 三浦黃圖六の卷雜錄の條に掖門在ニ兩傍一如ニ人臂掖一也云々漢書宣帝紀注三丁ウ應劭曰掖庭宮人之官有ニ令丞一官不爲ㇾ之云々成帝紀注三丁オ服虔曰掖門者正門之傍小門也云々

(七)紫宸殿　并朔望入閤　杜詩詳註六に紫宸殿退朝口號注に唐六典紫宸殿即內朝正殿也雍錄含元之北爲ニ宣政一宣政之北爲ニ紫宸一楊愼曰唐之朝制宣政前殿也謂ニ之衙一衙有ㇾ仗杜詩所ㇾ謂春旗簇仗齊是也紫宸便殿也謂ニ之閤一朔望不ㇾ御ニ前殿一而御ニ紫宸一謂ニ之入閤一杜詩所ㇾ謂還ㇾ家初散紫宸朝是也歐陽公去ㇾ唐不ㇾ遠入閤之制已未ㇾ明問ニ劉貴父一而後知ㇾ之然其大略不ㇾ過ㇾ如ㇾ此箋五代史李琪傳唐故事天子自御ニ前殿一見ニ群臣一曰ニ常參一朔望薦ニ食諸陵寢一御ニ便殿一見ニ群臣一曰ニ入閤一宣政前殿也謂ニ之衙一衙有ㇾ仗紫宸便殿也謂ニ之閤一其不ㇾ御ニ前殿一而御ニ紫宸一也乃自ニ正衙一喚ㇾ仗由ニ閤門一而入百官侯ニ朝於衙一者因隨ㇾ之以入見故謂ニ之入閤一云々與清曰大內裡考證紫宸殿の條に引注すべし

(八)霹靂木を以て鳥影を打ば鳥落ッ　博物志三の卷四丁オ異虫の部に以ニ霹靂木一擊ニ鳥影一其鳥應ㇾ時落ㇾ地云々按霹靂木は推古紀廿六年にカントキノ木と訓たり雷の落かゝりたる木也可ㇾ試

(九)笑菌　笑菌といふものを食へば笑死せるよし俗にもいひ物にも見えたるやうにおぼゆ博物志三の卷六丁オ異草木部に或云蛇所ㇾ著之楓樹生者啖ㇾ之令ニ人笑一不ㇾ得ㇾ止治ㇾ之飮ニ土漿一即愈と見ゆ

(十)合歡木忘憂草　博物志四四丁カ藥論部に神農經曰中藥養ㇾ性合歡蠲ㇾ忿萱草忘ㇾ憂云々合歡は歌にねぶともがうかともよめり俗にも「ねむ」といふ椄也萱草は俗にくわんさうといふ住吉のわすれ草と歌によめるはこれ也射干火扇の類にて花赤し其苗食料に最善

(十一)茶をめざましくさといふ　茶をめざましくさといふ事烏丸光廣卿の慰草にくはし博物志四五丁オ食忌部に飮ニ眞茶一令ニ人少ㇾ眠とあり茶の所見わづらはしければ引出す續編五二丁にも茶の事見ゆ 頭書 一覽藤川記五丁オ野上の茶やにて「旅人にめざまし草をすゝめずば野上の里にひろれをやせん」

(十二)ゐもりのしるし　ゐもりのしるしの故事歌膸腦に所見おほかり博物志四六丁カ戲術の部に蜥蜴或螈蜓以ㇾ器養ㇾ之以ニ朱砂一盡赤所ㇾ食滿ニ七斤一治擣万杵點ニ女人支體一終年不ㇾ滅唯房室事則滅故號ニ守宮一傳云東方朔語ニ漢武帝一試ㇾ之有ㇾ驗云々

(十三)胡桃の始　博物志六六丁オ物名考部に張騫使ニ西域一還乃得ニ胡桃種一云々これ胡桃の傳はれる始なり

(十四)蛇を夢法　博物志十二丁カ雜說下に人藉ㇾ帶眠者則夢ㇾ蛇烏啣ニ人之髮一夢ㇾ飛云々夢占の事万寶全書万用正宗夢占逸旨などにくはし

(十五)大醉を醒す方　又同丁カ人中ㇾ酒不ㇾ解治ㇾ之以ㇾ湯自漬即愈湯亦作ニ酒氣味一也云々按に醉人沐浴すれば必醒此方有ㇾ驗又續編五二丁オに酒ニ不ㇾ醉方アリ

(十六)雷公の圖　續博物志一六丁カに王充論衡曰圖畫之工圖ニ雷之狀一如ニ連鼓形一又圖ニ一人一若ニ力士一謂ニ之雷公一使ㇾ左手引ニ連鼓一右手推ㇾ之春秋震ニ夷伯之廟一謂ニ霹靂破ㇾ之是也霹靂俗字也云々按に日本靈異記に少子部栖輕三諸山の雷を捕へし事見ゆ又舊本今昔などにも雷の形を顯はしゝとあり可ニ考合一 頭書 蜀志郤正傳注に越絕書曰云々薛燭曰不可當ㇾ造ニ此劒一之時ㇾ赤堇之山破而出ㇾ錫若邪之谿涸而出ㇾ銅雨師灑ㇾ淸雷公擊ㇾ鼓太一下觀天牖下之歐冶乃因ニ天之精一悉ニ其伎巧一云々漢魏叢書中所ㇾ收之越絕書十一卷外傳記寶劍篇ニハ雷公擊案トアリ令義解序注ニハ雷公擊折ニ作リ一本ニハ折ヲ拆ニ作ルリ

(十七)芋臺　今俗祝事の風流に臺を作りて島臺芋臺蓬萊の臺などいへり古の洲濱の流なり島臺は蓬萊臺にて仙宮にたとへし也芋臺は妹臺歟又は續博物志一八丁オに藕生應ㇾ月閏月益ニ一節一芋以ニ十二子一爲ㇾ衛亦

應二月之數一也とありて多子の物なれば婚禮に用るにや蕗の臺は富貴の臺なるべし

(十八)雷斧　今關東神社の正體に石劒おほしこは太神宮儀式帳などに御正體石坐或劒坐弓坐などある劒(シルク)體を石もて作れる也武藏新坐郡石神井村の神體もこれ也世に雷斧とは續博物志一九丁に人間往々見二細石一形如二小斧一謂二之霹靂斧一或謂云二霹靂楔一按玄中記二云玉門之西有二國山一山上有レ廟國人歲々出レ雹數千名二霹靂雹一給二霹靂用一從レ春至レ秋乃罷禮記有二離金鎭牛骨鎭一鎭與レ雹同音祖含切云々とある霹靂斧よりいひ出し名と見ゆ　頭書春渚紀聞九の卷雷斧研銘條に余輕二雪川一偶得二數雷斧一於耕夫一雖二小大不レ等而体皆如レ玉因擇二其厚者一窪而爲レ研云々月令廣義廿三ノ十一丁ウ類聚名物考調度部十六珍珠船三ノ十二丁オに雷州毎二大雷雨一多於二田野一得二鑿石一謂二之雷公墨一又於二霹靂處一得レ楔如レ斧謂二之霹靂楔一小兒佩レ之辟二惡云々

(十九)龜の鳴　新撰六帖爲家歌に「川こしのをちの田中の夕やみになにそときけは龜そ鳴なる」續博物志一九丁に京房易傳曰竈欲レ雨則鳴云々按に龜の鳴聲ホン〳〵ときこゆ俗に鼈をスッポンといふもその鳴聲によれる名也　頭書三國志吳書七の卷步騭傳注に江表傳曰先是公安有二霹靂一鳴章誦曰白龜龜背平南郡城中可二長生一守レ死不レ去義無レ成及レ恪被レ誅龜果剖二金卵一龜一服レ之而死云々

(廿)朝鳶に笠を脫(スグ)　俗言に朝鳶に笠を脫とて朝に鳶鳴時は天氣よしといへり續博物志二一丁暮鳩鳴即小雨朝鳶鳴即大風とあり風吹バ必天氣よし故にいへる俗語なるべし

(廿一)烏賊墨もて書たる書年を經消盡す(フレバキエウ)　雜劇本に(おそめ久松の淨瑠璃)烏賊の墨をもて書たる書消失るよしいへり續博物志二六丁に南越志曰烏鰂懷レ墨而知レ禮江東人或取二其墨一書契以紿二人物一書迹如二淡墨一逾レ年墨消空紙耳と見ゆ

(廿二)瘧をおとす方　續博物志二七丁(ウ)に蛇蛻塞二兩耳一治二瘧疾一とあり

(廿三)髮を黑くする方　同書二七丁(ウ)に覆盆子是莓子(イチゴ)也笮(シボ)二取汁一合二成膏一塗レ髮不レ白云々覆盆子はイチゴ也莓子(イチゴ)ヲ笮(シボ)リテ汁ヲ取リ煉ツメテ膏トシテ髮ニヌル也

(廿四)不レ飢方　同書五三(オ)丁一勝粱米以二純苦酒一斗一漬レ之三日出百蒸百暴遠行一飡十日不レ飢重飡四百九十日不レ飢又方米一斗赤石脂三斤水漬レ之二三日搗爲レ圓如二季大一可レ辟レ穀とあり可レ試

(廿五)星經　漢魏叢書中に石氏星經上下二卷を收む卷端に漢甘公石申著とあり原缺文一强とありて初の一葉は原より缺たる也史官天官書に並て星辰の事を

いへる古書也

(廿六)鉤陳星　石氏星經上卷鉤陳の條に鉤陳六星在二五帝下一爲二後宮大帝正妃一又主二天子六軍將軍一又主二三公一若星暗人主凶惡之象矣云々天官書管窺拾要考合せて知べし

(廿七)天皇星　石氏星上卷天皇の條に天皇大帝一星在二鉤陳中央一也不レ記レ數皆是一星在二五帝前坐一万神輔錄圖也其神曰二耀魄寶一主二御群靈一也云々天官書管窺拾要など考合すべし

(廿八)尙書星　同書上尙書の條に五尙書在二東南一維主二納言夙夜諮謀事一也

(廿九)北斗　同書上の北斗の條に北斗星謂二之七政一天之諸侯亦爲二帝車一魁四星爲二璇璣一杓三星爲二玉衡一齊二七政一斗爲二人君一號令之主出レ號施レ令布二政天中一臨二制四方一第一名二天樞一爲二土星一主二陽德一亦曰政星也是太子像星晴亦經七日一則大災第二名レ璇主レ金刑陰女主之位主二月及法一若星暗經六日一則月蝕第三名レ璣王二木及禍一亦名金星若天子不レ愛二百姓一則暗也第四名レ權主レ火爲レ伐爲二天理代一也無道天子施レ令不レ依二四時一則暗第五名レ衡主レ水爲レ煞助二四時一旁煞二有罪一天子樂レ淫則暗第六名二開陽一主二木及天下倉庫五穀一第七名二瑤光一主レ金亦爲二應星一訣曰王有レ德至レ天則斗齊明國昌總暗則國有二災起一也右斗中子星少則人多婬亂法令不レ行木星守二貴人一繁天下亂也火星守兵起人主災人不二聊生一棄レ宅走二奔諸邑一守二斗西一大饑人相食守二斗南一五果不レ成五星入レ斗中國易レ政又易レ主大亂也彗孛入二斗中一天下改レ主有二大變一先舉レ兵者咎後舉レ兵者昌其國主大災甚二於彗之禍一右旁守レ之咎重細審之所レ守極入レ張一度去二北辰一十八度也衡去レ極十五度去レ辰十一度

(卅)三公　同書上の三公の條に三公三星在二斗柄東一和二陰陽一齊二七政一以敎二天下人一一星亡天下危二一星亡天下亂三星亡天下不治也　頭書魏志齊王紀注漢魏春秋曰三公于丞相一始レ自二秦政一漢氏因レ之無二復變改一

(卅一)太一　同書上太一の條に太一星在二天一南半度一天帝神主二十六神一知二風雨水旱兵馬饑饉疾病災害一若在二其國一也星明吉暗凶離二本位一而乘レ斗者九十日必兵大起也太一星入レ軫十度去二北辰一十五度半太一星去二北辰一十一度

(卅二)天市　同書上の天市の條に天市垣五十六星

在二房心北一主二權衡一一名天旗大明則米貴市中星衆則歲實五星入二市門一則兵起芒角色赤赤氣入大災火守米貴所レ守坐犯皆當レ之門左星入レ尾一度去二北辰一九十四度也

(卅三)神宮尾宿　同書下の神宮尾宿の條に龍尾九星爲二后宮一第一星后次三夫人次九嬪次嬪妾一名后族水星也二風后三天鷄四天狗五太廟皆欲レ明大小相承則宮多二子孫一傳說曰一星在二第二東一二寸小者是長其星明則輔臣忠政暗則陪臣亂レ邦木星守二立太子一卅日必后族逆レ兵妾賣レ權臣亂レ國火星守兵相向大臣憂火與水合守二箕尾間一名二九江口一必有レ赦若勝踊折絕者天下亂及旱災上星守多二盜賊一旱宮有二廢黜一土入魚鹽貴兵起大將出征土火星金守准レ上合星入守人亂大臣變易失レ政水守入天下水災江河決魚米貴客守賊暴貴客入天下大饑荒亂人相食疾疫死竄二他方一不二耕織一君子貨レ衣小人賣二妻子一日月蝕二於尾一貴臣中相刑反暈虹蜺背向レ尾將二相憂亂一后有レ喪彗索行犯貴臣誅內寵亂レ政幽州定營遼東等之應也

(卅四)織女　同書下の織女の條に織女三星在二天市東端一天女主二蔬果絲帛收藏珍寶及女變一明大天下平和常以二七月一日六七日一見二東方一色赤精明女功善一星主兵起女人爲レ役常向二扶匡一即善不レ向則絲帛倍貴火星守布帛貴兵起十年乃息公主憂客守絲帛等貴入二十七去二北辰一五十二度也

(卅五)牽牛　牽牛六星主二關梁工異主大路中主牛木星一春夏木秋冬火中央火星爲二政始一日月五星行二起於此一皆携星遠レ漢天下牛貴明亦貴暗小賊入漢中井役死直米穀價平曲米貴失二常色一牛多死穀不レ成木星守天下和平久守水災人凍死米貴賣レ子虎害レ人臣謀レ主木逆久守有二水道不一通火星守老臣逆牛貴十倍人相食兵起將軍死大水災津梁不レ通土星守臣謀レ主君有レ失二位臣一金星守地氣泄兵起至レ城天下人多死水守二辰星一常以レ冬朝二牽牛一若不レ朝來年五穀不レ熟大水損害客守二十日兵起彗孛二行牛中一吳越有二自王者一彗出二牛中一七十日有二政更一像虹蜺出レ牛必有二壞城一臨淮月暈圍レ牛損二小兒一災變也八度八月昏中氐中去二北辰一一百十度

(卅六)壁宿ハ文章星　同書下の壁宿の條に東壁二星主二文章圖書一也土星春夏金秋冬土一名天術失レ色大小不レ同天子將二封二鄙土一而失二天下一過日蝕壁中國不レ用二賢士一失二文字一月蝕レ中大臣憂文者死木星守五經仕レ人被レ用朝廷與火星守大臣謀レ君歲旱不レ熱米貴不レ顯二內外一勝政兵起土星守久賢臣國用文章道術與行國君延壽天下豐熟太平火星入二中街一君崩五日則相薨若不レ死則流散土星守逆行入レ壁萬物不レ成守經二九十日己上一大兵起百姓有二立レ王者一金星守天下不レ通王者急二刑罰一有レ兵大臣憂水守水災道不レ通客守多二風雨及水災一臣下賊二王者一政刑事內明通明有二政事一內清月暈壁其久國亂彗孛行犯兵起火守火災太廟門天下有二兼幷者一壁明王道興有二君子在一位星暗王道衰人得レ用レ武蘭涼衛州等分也

(卅七)羽林　羽林軍星四十五星壘壁十二星並在二室南一主レ翊衛二天子之軍一入安飛將星欲二威明一天下安星暗兵盡失西入レ室五度去二北辰一一百二十三度也

(卅八)土公　同書の下土公の條に土公二星在二壁南一主二營造宮室起土之官等類一也

(卅九)王者遣レ將跪推レ轂　職原鈔外武官の條に漢書云馮唐曰王者遣レ將跪而推レ轂曰閫以內寡人制レ之閫以外將軍制レ之軍功爵賞皆決二於外一云々按に漢書馮唐傳に見ゆ左傳にも似たることあり諸葛孔明が心書出師第十二に古者國有二危難一君簡二賢能一而任レ之齋三日入二太廟一南面而立將北面太師進二鉞於君一君持二鉞柄一以授レ將曰從レ此至レ軍將軍其裁レ之復命曰見二其虛一則進見二其實一則退勿二以レ身貴而賤一人勿一以二獨見一而違二衆勿レ特二功能一勿レ失二忠信一士未レ坐勿レ坐士未レ食勿レ食同二寒暑一等二勞逸一齊二甘苦一均二危患一如レ此則士必盡死敵必可レ亡將授レ詞鑿二凶門一引レ軍而出君送レ之跪而推レ轂曰進退惟時軍中事不レ由二君命一皆由レ將出若レ此則無レ天二於上一無レ地二於下一無レ敵二於前一無レ主二於後一是以智者爲二之慮一勇者爲二之鬪一故能戰勝二於外一功成二於內一揚二名於後世一福流二於子孫一矣云々諸葛亮心書一卷漢魏叢書中に收む

(四十)英雄　職原抄に英雄とは清華の事をいへり魏の劉邵が人物志(漢魏叢書中に収む)中卷英雄篇に夫草之精秀者爲レ英獸之特群者爲レ雄故人之文武茂異取二名於此一是故聰明秀出謂二之英一膽力過レ人謂二之雄一此其大體之別名也云々白虎通(三の卷聖に千人曰レ英云々

(四十一)馳道　三輔黃圖(六卷あり漢亡名氏撰漢魏叢書中に收む)一の卷馳道の條に馳道案秦本紀始皇二十七年治二馳道一注曰馳道天子道也蔡邕曰馳道天子所レ行道也今之中道然漢賈山傳曰秦爲二馳道於天下一東窮二燕齊一南極二吳楚一江湖

之上濱海之觀畢至道廣五十步三丈而樹二厚築其外一隱以二金推一樹以二青松一漢令二諸侯一有レ制得レ行二馳道中一者行二旁道一無レ得レ行二中央三丈一也不レ如レ令レ沒二入其車馬一云々按二和名抄道路部一にも漢書注を引たり今の御幸路御成道などこれ也漢書注十一丁ウ

（四十二）宣室　同書三の卷一丁ウ未央宮の條に宣室溫室清涼皆在二未央宮殿北一云々又云宣室未央前殿正室也淮南子曰周武王殺二紂於宣室一漢取二舊名一也漢書孝文帝受二釐宣室一夜半前二席賈生一問二鬼神之事一即此也又王莽地皇四年城中少年朱弟張魚等燒レ宮莽避二火宣室前殿一火輾隨レ之云々按に宣室は漢書刑法志に孝文常幸二宣室一齋居而決レ事注如淳曰宣室布二政教一之室也重用レ刑故齋戒以決レ事云々同書賈誼傳注淮南子氾論訓令義解上表などにも見ゆ

（四十三）清涼殿　清涼殿の事は名和抄拾芥抄大內裡考證山城名勝志などに諸書を引ていひたれどもと漢國に據たる名のよしをいはず三輔黃圖三の卷未央宮の條に清涼殿夏居レ之則清涼也又曰延清室漢書曰清室則中夏含レ霜即此也董偃常臥二延清之室一以二畫石一爲レ牀文如レ錦紫琉璃帳以二紫玉一爲レ盤如二屈龍一皆用二雜寶一飾レ之侍者於レ外扇レ偃偃曰玉石豈須レ扇而後凉邪又以二玉晶一爲レ盤貯二氷於膝前一玉晶與レ氷相潔侍者謂氷無レ盤必融濕レ席乃拂二玉盤一墜氷玉俱碎玉晶千塗國所レ貢也武帝以レ此賜偃云々

（四十四）承明殿　蒼龍白虎朱雀玄武　三輔黃圖三の卷未央宮の條に承明殿未央宮有二承明殿著述之所一也班固西都賦序云內有二承明著作之庭一即此也漢書武帝謂二嚴助一曰君厭二承明之廬一又成帝鴻嘉二年雉飛集二承明殿屋一云々又云蒼龍白虎朱雀玄武之四靈以正二四方一王者制二宮闕殿閣一取レ法焉云々按本朝承明門蒼龍樓白虎樓朱雀門などに引注すべし

（四十五）弄田　同書三の卷未央宮の條に弄田在二未央宮一弄田者燕遊之田天子所二戲弄一耳漢書昭帝紀曰始元元年上耕二于鈎盾弄田一應劭注曰帝時年九歲未レ能二親耕一帝籍二鈎盾宮官宦者近署故往試レ耕爲二戲弄一成帝建始三年小女陳持レ弓年九歲闌二入尚方掖門一至二未央殿鈎盾禁中一云々按に吾妻鏡に鎌倉營中にて田をうゑ田植歌をうたひし事見ゆこれ弄田の類也

（四十六）養德　同三の卷廿泉宮の條に養德宮趙王如意年幼未レ能レ就二外傅一戚姬養レ之趙王內傳趙媼傳レ之

號二其室一曰二養德宮一云々按に孝謙の朝大倭國を改て大養德國とす續日本紀に委し養德の字面に引注べければ抄出せり

（四十七）明堂　同五の卷明堂の條に周明堂明堂所▼以正二四時一出レ教化上天子布レ政之宮也黃帝曰二合宮一堯曰二衢室一舜曰二總章一夏后曰二世室一殷人曰二陽館一周人曰二明堂一先儒舊說其制不レ同或曰明堂在二國之陽一太戴禮云明堂九室一室有二四戶八牖一凡三十六戶七十二牖以レ茅蓋レ屋上圓下方援神契曰明堂上圓下方八窓四牖考工記云明堂五室稱二九室一者取二象陽數一也八牖者陰數也取二象八風一三十六戶牖取二六甲之文六六三十六一也上圓象レ天下方法レ地八窓即八牖也四闥者象二四時四方一也五室者象二五行一也皆無二明文一先儒以レ意釋レ之耳禮記明堂位曰朝二諸侯于明堂之位一天子負二斧扆一南鄉而立明堂也者明二諸侯之尊卑一也制レ禮作レ樂頒二度量一而天下服知明堂是布レ政之宮也又孝經曰宗二祀文王於明堂一以配二上帝一則周有二明堂一也明矣漢明堂在二長安西南七里一漢書曰武帝初即位嚮二儒術一以二文學一爲レ本議立二明堂於城南一以朝二諸侯一應劭注云漢武帝造二明堂一王莽修飾令レ大云々按に明堂の名義二あり一は在二國之陽一にて日月明光の南方なる堂の義一は明二諸侯之尊卑一上下分明なる堂の義にて共に三輔黃圖の說なり尸子上卷白虎通二の卷淮南子主術訓本經訓大戴禮孝經註疏漢書平帝紀注周禮考工記晉書天文志上十七丁ウ同廿五丁ウ同廿六丁ウ同中四丁ウなどに明堂天子布レ政之宮のよし見ゆ禮記明堂位文中子文選東京賦注事物紀原隋書薛道衡傳通典通考三才圖會宮室一などその外所見擧に遑なし令義解上表の合宮の注に引べき事也頻書古微書中載春秋漢含孳云房心爲二明堂一天王布レ政之宮云々孝經援神契（古微書廿八載レ之）云明堂者天子布レ政之宮八窓四闥上圓下方在二國之陽一諦者諦也象レ上可レ承二五精之神一五精之神實在二大微一于辰爲レ巳明堂文王之廟夏后氏世室殷人重屋周人明堂東四九筵筵九尺南北七筵堂崇一筵五室凡室二筵蓋レ之以レ茅周公所二以事一文王一于明堂一以昭レ事二上帝一明堂之制東西九筵二丈九尺也明堂東西八十一尺南北六十三尺故謂二之大室一又周之明堂在二國之陽一三里之外七里之內在レ辰巳者也得二陽氣一明顯謂二之明堂一云々孫毓按蔡邕明堂章句曰明堂者天子大廟所二以宗祀一周謂二之明堂一東曰二青陽一南曰二明堂一西曰二總章一北曰二玄堂一中曰二大室一人君南面故主以二明堂一爲レ名在二其五室之中央一皆曰大廟饗射養老教學選士皆于二其中一故言二其正室之貌一則曰二大廟一取二其尊崇一則曰二大室一取二其四時之學一則曰二大學一取二其周水圍如レ璧則曰二辟雍一雖二各異一レ名其實一也云々文選一ノ四十二丁ウ東都賦注又五十丁ウ明堂詩注

（四十八）禁中　省中　同六の卷雜錄の條に漢宮中謂二之禁中一謂宮中門閣有レ禁非二侍衛通籍之臣一不レ得二妄入一行道豹尾中亦視二禁中一至二孝元皇后父名禁一避レ之改曰二省中一省察也言出二入禁中一皆當省察不レ可レ妄

也云々按に漢書昭帝紀に帝姉長公主共養ニ省中一注に禁邑云本爲ニ禁中一避ニ元后父名一改曰ニ省中一師古曰省察也言入ニ此中一者當察視不レ可レ妄也云々禁邑獨斷にも見えたり

（四十九）鹵簿　同六の卷雜錄の條に鹵簿天子出ニ車駕一次第謂ニ之鹵簿一有ニ大駕一有ニ法駕一有ニ小駕一大駕則公卿奉引大將軍參乘太僕御屬車八十一乘作ニ三行一尚書御史乘レ之備ニ千乘万騎一出ニ長安一出祠ニ天於甘泉一備レ之百官有ニ其儀注一名曰ニ甘泉鹵簿一法駕京兆尹奉引侍中參乘奉車郎御屬車三十六乘北郊明堂則省ニ副車一小車祠ニ宗廟一用レ之云々按に鹵簿は三代實錄などに「ミユキ」とよめり宮衛令義解に謂鹵簿者鹵楯也簿文籍也言簿列ニ楯鹵一以爲ニ部隊一也とあり唐六典十四の卷廿六丁ウにくはし可ニ考合一頭書封氏聞見記五卷に鹵簿與駕行幸羽儀導從謂ニ之鹵簿一自ニ秦漢一以來始有ニ其名一察邕獨斷載ニ鹵簿一有ニ小駕大駕法駕之異一而不レ詳ニ鹵簿之儀一案字書鹵大楯也字亦作レ櫓又作レ艣音義皆同鹵以レ甲爲レ之所ニ以扞一敵實誼過秦論云伏尸百万流血漂レ鹵是也甲楯有ニ先後部伍之次一皆著ニ之簿籍一天子出入則案レ次導從故謂ニ之鹵簿一耳儀衛具五兵今不レ言ニ他兵一但以ニ甲楯一爲レ名者行道之時甲楯居ニ外餘兵在レ內但言ニ鹵簿一是擧レ凡也南朝御史中丞建康令俱有ニ鹵簿一人臣儀衛亦得レ同ニ于君上一則鹵簿之名不ニ各別有ニ他義一也百官從駕謂ニ之扈從一蓋臣下侍ニ從至尊一各供ニ所職一貌ニ僕御扈養一以從レ上故謂ニ之扈從一耳上林賦云扈從橫行顏監釋云謂跋扈縱恣而行也據ニ顏此解一乃讀レ從爲ニ放縱一不ニ敢取一行從之義一所レ未レ詳也

（五十）離宮　同六の卷雜錄の條に離宮天子出遊之宮也云々按に万葉集及歷史文粹などに離宮の名多く見ゆ

（五十一）塾　同條に塾門舍也臣來朝レ君至ニ門外一當レ就レ舍更熟詳所ニ應對一之事ニ塾之言熟云々釋名爾雅など其外字書を考合すべし

（五十二）杜鵑　蜀志一卷晉常璩著漢魏叢書中に收十六國春秋蜀錄李勢傳に常璩字道將蜀成都人少好レ學著ニ華陽國志十篇一序ニ開闢以來一迄ニ于李勢一皆有ニ條理一云　に蜀之爲レ國肇ニ於人皇一與レ巴同レ囿至ニ黃帝一爲ニ其子昌意一娶ニ蜀山氏之女一生ニ子高陽一是爲ニ帝嚳一封ニ其支庶於蜀一世爲ニ侯伯一歷ニ夏商一周武王伐レ紂蜀與焉其地東接ニ于巴一南接ニ于越一北與レ秦分西奄峨蟠地稱ニ天府一原曰ニ華陽一故其精靈則井絡垂レ耀江漢遵レ流河圖括地象曰岷山之下爲ニ井絡一帝以會昌神以建レ福夏書曰岷山導レ江東別爲ニ沱泉一源深盛爲ニ四瀆之首一而分爲ニ九江一其寶則有ニ璧玉金銀珠碧銅鐵鉛錫赭堊錦繡罽氂犀象琁琲丹黃空青桑漆麻紵之饒一滇獠賓爨僮僕六百之富其卦值レ坤故多ニ斑綵文章一其辰值レ未故尚ニ滋味一德在ニ少昊一故好ニ辛香一星應ニ輿鬼一故君子精敏小人鬼黠與ニ秦同レ分故多ニ悍勇一在レ詩文王之化被ニ乎江漢之域一秦豳同詠故有ニ夏聲一也其山林澤漁園圃果瓜四時代熟靡レ不レ有焉有ニ周之世一限以ニ秦巴一雖レ奉ニ王職一不レ得レ與ニ春秋一盟會一君長莫レ同ニ書軌一周失ニ綱紀一蜀先稱レ王有ニ蜀侯蠶叢一其目縱始稱レ王死作ニ石棺石槨一國人從レ之故俗以ニ石棺槨一爲ニ縱目人冢一次王曰ニ柏濩一次王曰ニ魚鳧一魚鳧王田ニ於瀕山一忽得ニ仙道一蜀人思レ之爲立レ祠後有レ王曰ニ杜宇一教レ民務レ農一號ニ杜主一時朱提有梁氏女利遊ニ江源一宇悅レ之納以爲レ妃移治ニ郫邑一或治ニ瞿上一七國稱レ王杜宇稱レ帝號曰ニ望帝一更名ニ蒲卑一自以ニ功德高ニ諸王一乃褒斜爲ニ前門一熊耳靈關爲ニ後戶一玉壘峨眉爲ニ城郭一江潛綿洛爲ニ池澤一以ニ汶山一爲ニ畜牧一南中爲ニ園苑一會有ニ水災一其相開明決ニ玉壘山一以除ニ水害一帝遂委以ニ政事一法ニ堯舜禪授之義一遂禪ニ位于開明一帝升ニ西山一隱焉時適ニ二月子鵑鳥鳴故蜀人悲ニ子鵑鳥鳴一也云々輿清按に李膺蜀志の說に望帝稱ニ王於蜀一時荊州有ニ一人一化從ニ井中一出名曰ニ鼈靈一於レ楚身死屍反沂レ流上至ニ汶山之陽一忽復生乃見ニ望帝一立以爲レ相鼈靈乃鑿ニ巫山一開ニ三峽一降レ丘宅レ土民得ニ陸居一望帝以ニ其功高一禪ニ位於鼈靈一號曰ニ開明氏一望帝修レ道處ニ西山一而隱化爲ニ杜鵑鳥一或云化爲ニ杜宇鳥一亦曰子規鳥至レ春則啼聞者悽惻といへり寰宇記蜀王本紀の說亦おなじその外所見おほし

（五十三）五嶺　常璩が蜀志見ニ于上一に周顯王二十二年蜀侯使レ朝レ秦秦惠王數以ニ美女一進レ蜀王感レ之故朝焉惠王知ニ蜀王好レ色許ニ嫁五女於蜀一蜀遣ニ五丁一迎之還到ニ梓潼一見ニ一大蛇入ニ穴中一一人竇ニ其尾一掣レ之不レ禁至ニ五人相助大呼拽レ蛇山崩時壓ニ殺五人及秦五女幷將從一而山分爲ニ五嶺一直頂上有ニ平石一蜀王痛傷乃登レ之因命曰ニ五婦冢山一川平石上爲ニ望婦堠一作ニ思妻臺一今其山或名ニ五丁冢一云々此は朗詠梅の詩に「五嶺蒼々雲往來」といへる五嶺の名によしあれば抄出せり朗詠の五嶺は別にて其中を大庾嶺といふ梅おほしといへり明一統志を考合すべし頭書逸異記下卷十七丁オ云秦惠王獻ニ五美女於蜀王一王遣ニ五丁一迎ニ女乃見ニ大蛇入ニ山穴中一五丁曳レ蛇山崩五女上レ山皆化爲ニ石云々晉書地理志下に交州按ニ禹貢揚州之域是爲ニ南越之土一秦始皇既略ニ定揚越一以ニ謫戍卒五十万人一守ニ五嶺一自レ北徂レ南入レ越之道必由ニ嶺嶠一時有ニ五處一故曰ニ五嶺一云々

（五十四）蜀錦　同書蜀郡の條に漢の文翁立ニ文學精舍講堂一作ニ石室一在ニ城南一永初後堂遇レ火太守陳留高朕更修立又增ニ造二石室一州奪ニ郡文學一爲ニ州學一郡更於ニ夷里橋南岸道東邊一起ニ文學一有ニ女壻一其道西城故錦官也錦江織レ錦濯ニ其中一則鮮明濯ニ他江一

則不レ好故命曰二錦里一也云々按に錦の事倭名抄十二錦綺類部に見え又地名の部に諸國錦織(ニシゴリ)の里あり歌にもよめりこは倭錦を織れる所也今東錦(アヅマ)といふ記紀の歌にサヽラ形錦とよみ太神宮儀式延喜式などに錦の名おほく見ゆ三國志魏書東夷傳に倭王復遣二使大夫伊聲耆掖邪狗等八人一上二献生口倭錦絳青縑緜衣帛布丹木附短弓矢一とある倭錦これ也錦織冠者も河内の地名によれる氏也陸奥に錦戸あり織錦戸也又紅葉をにしきといへり錦の島など紅葉の名になると山家集に見ゆ

(五十五)河伯　尚書中候(古徽書卷四収レ之)に伯禹曰臣觀レ河河伯面長人首魚身出曰吾河精也(觀河製二于卷一)云々史記西門豹傳注にもくはし神名帳陸奥部に河伯神社あり博雅九の卷(漢魏叢書収レ之)七耀行道の條に河伯謂二之馮夷一云々龍魚河圖(古徽書卷卅四載レ之)云河伯姓公名子夫人姓馮名夷又曰二河海神一名竝可レ請レ之呼レ之卻二鬼氣一云々

(五十六)帝　中候雜篇(古徽書卷五收レ之)に德合二五帝坐星一者稱レ帝云々春秋元命苞(古徽書卷六收レ之)に帝者諦也云々孫穀(明人古微書著錄之人也)按後漢白馬令朱雲所レ說帝者諦也以レ此觸非云々

頭書　易坤雲圖(古徽卷十五收レ之)に德配二天地一在レ正不レ在レ私稱レ之曰レ帝帝者天號也德配二天地一不レ私公位稱レ之曰レ帝云々尚書帝

命驗(古徽書卷三收レ之)に帝者天號也王者人稱也云々春秋說題辭(古徽書十一)に孔子曰德明該合レ天者稱レ帝云々

(五十七)三合　井三公三台　易通卦驗(古徽書卷十五收レ之)に六元正紀大論曰云々三合の歲のことくはし閲て知べし文長ければ省つ春秋元命苞(上卷)に周爵五等は法二五精一春秋三等象二三光一公者爲レ言平也公平正直侯者候也候二王順逆一伯者伯之爲レ言白也明二白于德一也子者孳也孳二孳于德一也男者任レ功立レ業王者封レ國上應二列宿之位一(者角レ亢爲レ鄭房心爲レ宋之比一)其餘小國不レ中二星辰一者以爲二附庸一公之言公公正無レ私侯之言候候二順逆一兼伺二候王命一矣伯之言白明二白于德一子者孳恩宣德男者任レ功立レ業皆上奉二王者之政敎禮法一統二理一國一脩身絜行矣云々又(下卷)立二三台一以爲二三公一北斗九星爲二九卿一云々春秋漢含孳に二三公在レ天爲二三台一九卿爲二北斗一故三公象二五獄一九卿法二河海一云々

(五十八)牡荊　南方草木狀(三卷晉嵇含著收二于前漢魏叢書中一)中卷木類部に荊寧浦有二三種一金荊可レ作レ枕紫荊堪レ作レ牀白荊堪レ作レ履與二他處牡荊蔓荊一全異又彼境有二杜荊一指病自愈節不二相當一者月暈時刻レ之與二病人一身齊等畧二牀下一雖二危困一亦愈云々按に牡荊の事本草にくはし啓蒙にその形狀をいへり俗人參木とよぶ余が隨時園中

にも植レ之水戸之門人鳥羽茂太郎之所レ贈也

(五十九)竹　晉の戴凱之が竹譜に植類之中有レ物曰レ竹不レ剛不レ柔非レ草非レ木　山海經爾雅皆言以レ竹爲レ草事經聖賢未レ有二改易一然則稱レ草食有レ難安竹形類既自乖殊且經中文說又自皆訛經云其草多族復云其多節又云雲山有二桂竹一若謂二竹是草一不レ應レ稱レ竹今既稱レ竹則非レ草可レ謂レ知矣竹是一族之總名一形之偏稱也植物之中有二草木竹一猶二動品之中有一魚鳥獸一也年月久遠傳寫謬誤今日之疑或非二古賢之過一也而比之學者謂事經前賢辨正何異レ匈奴惡二到都之名一而畏二木偶之質一耶

小異空實大同節目　夫竹之大體多空中而時有レ實十或一耳故曰二小異一雖レ然有二空實之異一而未レ有二竹之無レ節者一故曰二大同一云々按に木にもあらず草にもあらず「竹のよのはしたにわれはなりぬへら也」といふ歌に注すべし竹の事埤雅爾雅釋名本草事物紀原など考合て知べし本朝には伊弉諾尊の御楠笋となれるとあり

(六十)火井　常璩が蜀志臨邛縣の條に有二布濮水一從二布濮一來合二火井江一火井夜時光映上昭民欲二其火光一以二家火一投レ之頃許如二雷聲一火熖出通燿數十里以二竹筒一盛二其光一藏レ之可二拽行一終日不レ滅也井有二二水一取二井火一煮レ之一斛水得二五升鹽一家火煮レ之得無レ幾也云々按に越後の火井これに似たりそは笈埃隨筆諸國里人談などに見ゆ(頭書五雜俎二ノ卅八丁ウ)

(六十一)蘇生語二幽冥事一　十六國春秋(魏崔鴻撰收二于前漢魏叢書中一)趙錄劉聰永嘉元年十二月大將軍東平王約卒一指猶煖遂不二殮斂一至二甲戌一乃蘇言見二淵於不周山一云々按に淵は劉淵元海なり此談日藏蘇生して延喜帝菅家の事を語れるに相似たり日藏が事は元亨釋書その外所見おほかり各本書に就て考合すべし

(六十二)中濟　十六國春秋後趙錄石虎の條に十年虎起二河橋於靈昌津一採レ石爲二中濟一石無二大小一輒隨流用レ工五百餘万不レ成云々按に中濟は橋の中間に石を築て中嶼にし橋梁の助とする也周防錦帶橋などその製あり

(六十三)死棺無レ尸　後趙錄石虎條に十四年十二月戊子佛圖澄卒大寧元年二月有二沙門一從二雍州一來見二佛圖澄西入一關虎掘レ之無レ尸唯有二一石一虎惡レ之曰石者朕也墓レ我而去吾將レ死矣云々按に片岡飢人の說に

相似たり

（六十四）馬の蹄齧　前燕錄慕容皝傳に欲レ乘レ之馬悲鳴蹄齧人莫ニ能近一云々按にアガリ馬のハヂテ人をナヤマスルを蹄齧の字面にて知らせたる也

（六十五）瞎兒一淚　前秦錄符生が傳に符生字長生云云無ニ一目一七歲洪戲レ之問ニ侍者一曰吾聞瞎兒一淚信乎侍者曰然生怒引ニ佩刀一自刺レ血曰此亦一淚耶云々瞎兒は目カチの少兒の事也與清曰古人瞎目の人おほくきこゆ山本勘介も瞎也されど余が所ニ見聞一之瞎男女悉佞心不幸也余弗レ取也

（六十六）王攸十略　同錄符堅傳に永興五年八月京兆尹王攸上書獻ニ十略一一曰君道宜レ明二曰臣尚ニ忠敬一三曰子貴ニ孝養一四曰民生在レ勤五曰敎無ニ偏黨一六曰養レ民在レ惠七曰延ニ聘耆賢一八曰懲レ惡顯レ善九曰伐レ叛討レ逆十曰易簡弘大堅納レ之以レ攸爲ニ諫議大夫一云々

（六十七）孔子の婦老子の父四皓の冢　前凉錄張重華傳に五年重華讌ニ群寮于閑豫庭一論ニ講經義一顧問ニ索綏一曰孔子婦誰家女老聃父字爲レ何四皓既安ニ太子一住乎還レ山乎綏曰孔子婦姓幵官氏老聃父名乾字元果胎刖無レ耳一目不レ明孤單七十二無レ妻與ニ隣人益壽氏老女一野合懷胎八十年乃生ニ老子一四皓還否臣尚未レ悉重華曰卿不レ知乎四皓死ニ于長安一有ニ四皓冢一爲レ不レ還レ山也云々按に李贄が疑耀一の卷に孔子無ニ鬚眉一說は誤のよしいへりいづれも孔子の上に就たる奇說なり頭書往生要集下末卷十丁オに阿彌陀ノ父母ト于ノ名アリ婦ハ无シテ子アルモ奇也鼓音聲經ヲ出處トス

（六十八）幄屋　古書に幄屋とあるは帳を垂てかりそめに造たる屋也小爾雅廉服六に覆帳謂ニ之幄一幄幕也と有

（六十九）一心可ニ以事ニ百君一百心不レ可ニ以事ニ一君一　漢の孔鮒が詰墨に晏子曰一心可ニ以事ニ百君一百心不レ可ニ以事ニ一君一故三君之心非レ一也而嬰之心非レ三也孔子聞レ之曰小子記レ之晏子以ニ一心一事ニ三君一君子也云々頭書說苑十六ノ三丁ウ說叢篇に一心可ニ以事ニ二君一云々同廿ノ二丁ウ反質篇に一心可ニ以事ニ百君一百心不レ可ニ以事ニ一君一

（七十）夫歸喧嘩　夫婦喧嘩とてやゝもすれば夫婦爭鬩して隣家をさわがすに至るはもと夫その妻に輕蔑せらるゝゆゑ也孔叢子答問篇に梁人有ニ陽由者一其力扛レ鼎伎巧過レ人骨騰肉飛手搏ニ蹂獸一國人懼レ之然無ニ治レ室之訓一禮敎不レ立妻不ニ畏憚一相泄瀆方ニ乃積怒一妻坐ニ於牀一答焉左手建レ杖右手制ニ其頭一妻亦奮恚因

授以レ背使ニ杖擊ニ之而自撮ニ其陰一由乃仆レ地氣絕而不レ能レ與ニ鄰人聞一ニ其凶々一也窺而見レ之趨而救レ之妻愈慙忿莫ニ肯舍一旃或發レ裳然後乃放レ夫以無レ敵レ之伎力而劣ニ於女子之手一者何也輕レ之無レ備故也云々按後漢の梁冀が剛强奸惡なるも妻の孫氏に制せられたれば勇猛の士といへども怯ニ於妻女一は和漢いとおほかり

（七十一）內學外學內集外集　揚升菴が文集を內集といひ考說を外集といふ漢孔臧が連叢子下に孔大夫謂ニ季彥一曰今朝廷以下四海之內皆爲ニ章句內學一云々注に西漢士論以ニ經術一爲ニ內學一諸子雜說爲ニ外學一季彥之時方尚ニ辭文一乃以ニ章句一爲ニ內學一經術爲ニ外學一とあれば章句を內學としたる也

（七十二）雲雨風雷彗星　河圖帝通紀古微書卅三河圖雜讖篇ニ載ス雲者天地之本也雨者天地之施也風者天地之使雷者天地之鼓彗星者天之旂云々雷の事論衡にいへれどはやく雷鼓といふ名古書に所見あり論衡にはじまるにあらず

（七十三）十干の釋義　詩推度災古微書卷廿四収レ之云庚者更也子者滋也聖人制レ法天下治平王者布ニ德于子一治ニ成于丑一云々按に干支の說白虎通二の卷五行篇及五行通義など考合すべし史記天官書にも此事見ゆ頭書後漢書外戚傳下四丁ウ外巴猶レ戊也亥復レ水也

（七十四）革政革命　詩汎歷樞汎一作レ氾一卷古微書二十四載レ之云建ニ四始五際一而八節通卯酉之際爲ニ革政一午亥之際爲ニ革命一神在ニ天門一出入候聽云々大明在レ亥水始也四牡在レ寅木始也嘉魚在レ巳火始也鴻雁在レ申金始也云々卯天保也酉祈父也午采芑也亥大明也然則亥爲ニ革命一一際也亥又爲ニ天門出入候聽一二際也卯爲ニ陰陽交際一三際也午爲ニ陽謝陰興一四際也酉爲ニ陰盛陽微一五際也云々頭書制度通一

（七十五）紫微宮　樂叶圖徵古微書卷廿収レ之云天宮紫微宮也北極天一大一宋均注云天一大一北極神之別名鉤陳後宮也大當正妃也大當句陳末大星也云々此は余が紫微三台考に追加すべければ抄出せり頭書文選二ノ七丁ウ四京賦注又十三丁オ

（七十六）皇帝朕陛下制詔上乘輿行在所禁中蹕幸御策書制書詔書戒書　禁邕獨斷オ一丁云漢天子正號曰ニ皇帝一自稱曰レ朕臣民稱レ之曰ニ陛下一其言曰ニ制詔一史官記レ事曰ニ上車馬衣服器械百物曰ニ乘輿一所レ在曰ニ行在所一所レ居曰ニ禁中一後曰ニ省中一印曰レ璽所レ至曰レ幸所レ進曰レ御其命令一曰ニ策書一二曰ニ制書一三曰ニ詔書一四

曰ニ戒書一皇帝皇王后帝皆君也上古天子庖犧氏神農氏稱レ皇堯舜稱レ帝夏殷周稱レ王秦承ニ周末一爲レ漢驅除自以德兼ニ三皇一功包ニ五帝一故幷以爲レ號漢高祖受レ命功德宜レ之因而不レ改也云々小爾雅廣義篇非レ分而得謂ニ之幸一云々白虎通一の卷八丁ウ號の條に稱レ朕何亦王者之謙也云々與清曰史記秦始皇本紀漢書高帝紀唐六典など考合せて合に引注すべし

（七十七）王者四號王天王天子天象大君　獨斷一丁ウ云王者至尊四號別名王畿內之所レ稱王有ニ天下一故稱レ王天王諸夏之所レ稱天之所ニ歸往一故稱ニ天王一天子夷狄之所レ稱父レ天母レ地故稱ニ天子一天家百官小吏之所レ稱天子無レ外以ニ天下一爲レ家故稱ニ天家一云々春秋元命苞古微書中に收む上に王者往也神之所ニ輸向一人所ニ樂歸一也云々易坤靈圖古微書中に收む天子者繼レ天治レ物改正一統各得ニ其宜一父レ天母レ地以養ニ生人一至尊之號也大君者君人之盛也云々樂稽耀嘉古微書中に有云德象ニ天地一爲レ帝仁義所レ生爲レ王云々孝經援神契古微書廿七收む之云天覆地載謂ニ之天子一上法ニ斗極一云々白虎通一の卷一丁ウ爵の條に天子者爵稱也皇者煌々也云々春秋說題辭（古微書十二）に孔子曰德合レ元者稱レ皇云々示兒編一ノ四丁ウ后皇羔辟君主の條に后繼也謂繼レ治之君也皇大也謂屬レ大之君也羔衆也謂御レ衆之君也辟法也謂立レ法之君也臨也謂臨ニ涖天下一之君也主宰也謂宰ニ制天下一之君也　同一ノ四丁ウ皇帝王通稱の條に皇可ニ以謂一之帝一月令云其帝大皞是也亦可ニ以謂一之王一禮運云昔者先王未レ有ニ宮室一是也帝可ニ以謂一之皇一呂刑云皇帝清ニ問下民一是也亦可ニ以謂一之王一大禹謨云四夷來王是也王可ニ以謂一之皇一文王有聲云皇王烝哉是也亦可ニ以謂一之帝一歸妹云帝乙歸妹是也同一ノ八丁ウ字訓辨の條に皇者大也天曰ニ皇天一父曰ニ皇考一母曰ニ皇妣一王者大也大父曰ニ王父一大母曰ニ王母一

（七十八）皇皇帝天皇　獨斷二丁ウ云皇帝至尊之稱皇者煌也盛德煌々無レ所レ不レ照帝者諦也能行ニ大道一事レ天審諦故稱ニ皇帝一云々春秋元命苞古微書に載す上卷に皇者煌煌也道爛然顯明云々春秋運斗樞古微書に載す に皇者天天不レ言四時行焉百物生焉云々又云舜臨ニ觀于河一黃龍五采負レ圖出置ニ舜前一遣入レ水而前去黃玉爲レ柙長三尺廣八寸有レ戶白玉爲レ檢黃金爲レ繩紫芝爲レ泥封ニ兩端一章曰天皇帝符璽鳥文云々春秋命歷序古微書に收む に天地初立ニ天皇氏一十二頭濛泊無レ所ニ施爲一而俗自化木德王歲起ニ攝提一云々按に皇は白虎通一の一丁ウ三國志魏書同八丁ウ華歆傳に見え帝も白虎通一の八丁ウ同十四丁ウ三國志魏書華歆傳

に二處見えたり天皇の字天皇氏を除ては春秋運斗樞及唐書に高宗を天皇といへるを漢籍の所見をさをさきこえず孝經鉤命訣古微書に載すに道機合者稱レ皇云々

頭書　尚書帝命驗（古微書卷三收レ之）に天子爵稱也皇者煌々也云々春秋說題辭（古微書十二）に孔子曰德合レ元者稱レ皇云々示兒編一ノ四丁ウ后皇羔辟君主の條に后繼也謂繼レ治之君也皇大也謂屬レ大之君也羔衆也謂御レ衆之君也辟法也謂立レ法之君也臨也謂臨ニ涖天下一之君也主宰也謂宰ニ制天下一之君也　同一ノ四丁ウ皇帝王通稱の條に皇可ニ以謂一之帝一月令云其帝大皞是也亦可ニ以謂一之王一禮運云昔者先王未レ有ニ宮室一是也帝可ニ以謂一之皇一呂刑云皇帝清ニ問下民一是也亦可ニ以謂一之王一大禹謨云四夷來王是也王可ニ以謂一之皇一文王有聲云皇王烝哉是也亦可ニ以謂一之帝一歸妹云帝乙歸妹是也同一ノ八丁ウ字訓辨の條に皇者大也天曰ニ皇天一父曰ニ皇考一母曰ニ皇妣一王者大也大父曰ニ王父一大母曰ニ王母一

（七十九）朕　并一人　獨斷二丁ウ云朕我也古者尊卑共レ之貴賤不レ嫌則可レ同レ號之義也堯曰朕在位七十載阜陶與ニ帝舜一言曰朕言惠可ニ底行一屈原曰朕皇考此其義也至ニ秦天子獨以爲レ稱漢因而不レ改也云々白虎通一の卷八丁ウ號の條に稱レ朕何亦王者之謙也朕我也或稱レ予者亦我也不ニ以レ尊稱一自但自レ我皆謙云々又一人といふ事も同條に王者自謂ニ一人一者謙也欲レ言ニ己材能當一人一耳故論語曰百姓有レ過在ニ予一人一臣謂ニ之一人一何亦所ニ以尊一王者一也以ニ天下之大四海之內一所ニ共尊一者一人耳故尚書曰不レ施ニ予一人一云々

（八十）陛下殿下閣下執事　獨斷二丁ウ云陛下者陛階也所ニ由升一レ堂也天子必有ニ近臣一執レ兵陳ニ于陛側一以戒ニ不虞一謂ニ之陛下一者群臣與ニ天子一言不ニ敢指一斥天子一故呼ニ在ニ陛下一者一而告ニ之因レ卑達レ尊之意也上書亦如レ之及群臣士庶相與言曰ニ殿下閣下執事一之屬皆此類也云々三輔黃圖六の卷雜錄の條に陛下陛所ニ由陛一レ堂也天子必有ニ近臣一執ニ兵階陛一以戒ニ不虞一臣下與ニ天子一言不ニ敢指一斥天子一故呼ニ在ニ殿陛下一者ト以告レ之故稱ニ陛下一因レ卑達レ尊之意也上書亦如レ之如ニ群臣士庶相與語曰ニ閣下足下一之屬云々按に儀制令に引注すべき事也　頭書　文選四十一ノ六丁ウ李少卿答ニ蘇武一書に而執事者云々ノ云々執事官ノコト制度通四ノ五丁ウ奇說雜編六ノ卅七丁ウ

（八十一）上　獨斷二丁ウ上者尊位所レ在也太史令司馬遷記レ事當レ言レ帝則依違但言レ上不ニ敢渫瀆言一尊號尊王之義也云々按に本朝にても上樣（うへさま）といひ御上（おかみ）といふ皆尊稱也主上聖上君上などの省語歟妙法寺記錄には御上意樣と書たる所あり　頭書　漢書宣帝紀十丁ウ注師古曰上者天子自謂也　盛衰記十七ノ四丁ウ上トアルハ清盛ヲ指ス

（八十二）乘輿車駕　又二丁ウ云乘輿出ニ於律一律曰敢盜ニ乘輿服御物一謂天子所ニ服食一者也天子至尊不ニ敢渫瀆言一之故托ニ之于乘輿一乘猶レ載也輿猶レ車也天子以ニ

天下ニ爲レ家不レ以ニ京師宮室ニ爲ヤ常處ト則當テ乘ニ車輿ニ以行ヤ天下ト故群臣託ニ乘輿ニ以言レ之或謂ニ之車馬ニ云云按に令に注意すべき事也

（八十三）朝廷行在所大家天家　獨斷三丁云天子自謂曰ニ行在所ニ猶レ言テ今雖レ在ニ京師ニ行所ヲ至耳巡ニ狩天下ニ所レ奏レ事處皆爲レ宮在ニ京師ニ曰レ奏ニ長安宮宮在ニ泰山ニ則曰レ奏ニ奉高宮ニ唯當時所レ在或曰ニ朝廷ニ亦依ニ違尊者所テ都連ニ擧朝廷ニ以言レ之也親近侍從官稱曰ニ大家ニ百官小吏稱曰ニ天家ニ云々三輔黃圖六の卷雜錄の條に行在所天子以ニ四海ニ爲レ家不テ以ニ京師宮室居處ニ爲ヲ常則當テ乘ニ車輿ニ以行ヤ天下ト車輿所レ至奏レ事皆曰ニ行在ニ云々白虎通一の卷十五丁ウ諡の條に朝廷本所ニ以治テ政之處云々爾雅釋言注臣見レ君曰レ朝周禮春官大宗伯注朝猶レ早也欲ニ其來之早ニ禹貢江漢朝ニ宗于海ニ孔安國注ニ水經ニ荊州ニ而入レ海有レ似ニ於朝ニ品字箋敲聲十八韶諧朝見レ君之總名朝之言朝也朝而入見故曰レ朝也又正殿謂ニ之朝廷ニ者言御ニ此廷ニ以便ニ萬國之朝見ニ云云又聲聲四十八靈諧廷字注朝廷朝至尊視レ朝之所廷群下拜處之地云々說文廷朝中也論語注疏朝廷布レ政之所釋文廷停也人所レ集之處釋名廷停也朝臣至レ此稍

爲ニ停佇ニ以候ニ序分鴻鸞ニ同觀ニ袞龍ニ處也云々

（八十四）禁中省中　又三丁云禁中者門戶有レ禁非ニ侍御者ニ不レ得レ入故曰ニ禁中ニ孝元皇后父大司馬陽平侯名禁當時避レ之故曰ニ省中ニ今宜レ改後遂無ニ復言之者ニ云々漢書昭帝紀ニ三輔黃圖六の卷にも見ゆ 頭書漢書外戚傳十四丁ウ

（八十五）璽印　又三丁云璽者印也印者信也天子璽以ニ玉螭虎紐ニ古者尊卑共レ之月令曰固封レ璽春秋左氏傳曰魯襄公在レ楚季武子使ニ公冶問ニ璽書追而與テ之此諸侯大夫印稱レ璽者也衞宏曰秦以前民皆以ニ金玉ニ爲レ印龍虎紐唯其所レ好然則秦以來天子獨以レ印稱レ璽又獨以レ玉群臣莫ニ敢用ニ也云々

（八十六）幸行幸御幸御女御　又三丁云幸者宜幸也世俗謂レ幸爲ニ僥倖ニ車駕所レ至臣民被ニ其德澤ニ以僥倖故曰レ幸也先帝故事所レ至見ニ長吏三老官屬ニ親臨レ軒作レ樂賜ニ食帛ニ帛越巾刀佩帶ニ民爵有ニ級數ニ或賜ニ田租之半ニ是故謂ニ之幸ニ皆非ニ其所テ當テ得而得ル之王仲任曰君子無レ幸而有ニ不幸ニ小人有レ幸而無ニ不幸ニ春秋傳曰民之多幸國之不幸也言民之得レ所レ不レ當レ得故謂ニ之幸ニ然則人主必慎レ所レ幸也御者進也凡衣服加ニ于身ニ飲食入ニ于口ニ妃妾接ニ于寢ニ皆曰レ御親愛者皆曰レ幸云々按

に御幸行幸の事は西宮記の比より後のものに見ゆ本朝文粹に貴女曰レ御などあるみな此說によりて注すべし女御なども接ニ于寢ニゆゑの名也 頭書御幸行幸ノ「堪叢抄二ノ五段塵添四ノ十四丁オ

（八十七）策　又四丁ウ策書策者簡也禮曰不レ滿ニ百丈ニ不レ書ニ于策ニ其制長二尺短者半レ之其次一長一短兩編下附ニ篆書ニ起ニ年月日ニ稱ニ皇帝ニ曰以命ニ諸侯王三公ニ其諸侯王三公之薨ニ于位ニ者亦以ニ策書ニ誄ニ諡其行ニ而賜レ之如ニ諸侯之策ニ三公以レ罪免亦賜レ策文體如ニ上策ニ而隸書以ニ尺一木ニ兩行唯此爲レ異者也云々按に考課令義解三十七ウに謂策者簡也所ニ以書ニ文詞ニ者也言於ニ秀才進士ニ付ニ此簡策ニ令ニ其書對ニ也と見ゆ策ニ試貢人ニ事職員令式部省の條にあり

（八十八）詔書　又四丁ウ云詔書者詔語也有ニ三品ニ其文曰告ニ某官ニ如レ故事是爲ニ詔書ニ群臣有レ所ニ奏請ニ尚書令奏レ之下ニ有御ニ曰天子答レ之曰レ可若テ下ニ某官ニ云云亦曰詔書群臣有レ所ニ奏請ニ無ニ尚書令奏制之字ニ則答曰已奏如レ書本官下所當至亦曰レ詔云々按に詔書の式公式令に見えたれば引注すべし職員令大外記の條に詔奏大內記の條に詔勅中務卿の條に詔勅宮衞令に詔勅未ニ宣行ニ者などもみゆ

（八十九）奏　又五丁云凡群臣上ニ書于天子ニ者有ニ四名ニ一曰レ章二曰レ奏三曰レ表四曰ニ駁議ニ云々又云五丁奏者亦需頭其京師官但言ニ稽首ニ下言ニ稽首以聞ニ其中者所請若罪法劾案公府送ニ御史臺ニ公卿校尉送ニ謁者臺ニ也云々按職員令義解一の四十四丁大外記の條に掌勘詔奏云々解に謂勘ニ正詔書ニ及勘ニ造奏文ニ也云々又一の五十一丁ウの八十四丁ウ奏請云々解に謂奏而請ニ其報ニ云々公式令七の六丁に奏事式云々又七の七丁便奏式云々又同丁便奏云々又九丁奏彈式云々又廿三丁ウ當レ理奏聞云々唐六典八の卷五丁ウに凡下之通ニ于上ニ其制有レ六一曰ニ奏抄ニ云々二曰ニ奏彈ニ謂御史糺勅云々などそれ其外所見おほかり

（九十）表上表　又五丁ウ表者不ニ需頭ニ上言ニ臣某言ニ下言ニ臣某誠惶誠恐頓首々々死罪々々ニ左方下附曰ニ某官臣某甲上ニ文多用ニ編兩行ニ文少以ニ五行ニ詣ニ尚書ニ通者也公卿校尉諸將不レ言レ姓大夫以下有ニ同姓ニ官別者言レ姓章曰ニ報聞ニ公卿使ニ謁者ニ將大夫以下至ニ吏民ニ尚書左丞奏聞報可表文報曰奏如レ書凡章表皆啓レ封其言ニ密事ニ得ニ帛囊ニ盛其有ニ疑事ニ公卿百官會議若

臺閣有ニ所レ正處一而獨執ニ異志一者曰ニ駁議一駁議曰ニ某官某甲議以爲如レ是下言ニ臣愚戇議異一其非ニ駁義一不レ言ニ議異一其合ニ于上意一者文報曰ニ某官某甲議可一云々按ニ令義解職員中務省の條一の四十六丁オに受納上表一云々解に謂凡上表者不レ由ニ太政官一直向ニ中務省一省受取奏ニ進至尊一也云々僧尼令二の九丁オに輒上ニ表啓一云々選敘令四の七丁ウに五位以上上表云々儀制令六の一丁ウに於ニ天皇太上天皇一上表同稱ニ臣妾一云々など見ゆ

（九十一）朝臣　又六丁ウ云漢承ニ秦法一群臣上書皆言ニ昧死言一王莽盜レ位慕ニ古法一去ニ昧死一曰ニ稽首一光武因而不レ改朝臣曰ニ稽首頓首一非ニ朝臣一曰ニ稽首再拜一公卿侍中尚書衣レ帛而朝曰ニ朝臣一諸營校尉將大夫以下亦爲ニ朝臣一云々朝臣の字アソムに引注すべし

（九十二）百姓　又六丁オ云王者臨撫之別名天子曰ニ兆民一諸侯曰ニ萬民一（今之令長古之諸侯）百乘之家曰ニ百姓一（百姓之家子男之國也）云々按に細注の百姓は百乘之家の誤也百姓の字尚書に見ゆ

（九十三）京師　又六丁ウ云天子所レ都曰ニ京師一京水也地下之衆者莫レ過ニ于水一地上之衆者莫レ過ニ于人一京大師衆也故曰ニ京師一也京師天子之畿内千里象ニ日月一日月纏ニ次千里一云々按に白虎通一の四十四丁オ卷卅京師の條に京師者何謂也千里之邑號也京大也師衆也天子所レ居故大衆言レ之明ニ諸侯法一日月之經ニ千里一春秋傳曰京曰ニ天子之居一也とあり

（九十四）命令政　又六丁ウ云天子命令之別名一曰レ命（出レ君下レ臣名曰レ命）二曰レ令（奉而行レ之竹名曰レ令）三曰政（著ニ之竹帛一名曰レ政）云々按に官位令義解一の廿に令謂敎令也敎以ニ法制一令ニ其不一相違越一故曰レ令と見ゆ史記五帝本紀注に尚書大傳云政齊中也謂春秋冬夏天文地理人道所ニ以爲一レ政也云々論語爲政篇の注疏經籍纂詁など考合すべし

（九十五）天子更老叟　同書一丁ウに天子夷狄之所レ稱父レ天母レ地故稱ニ天子一云々又六丁ウ云天子父ニ事天一母ニ事地一兄ニ事日一姊ニ事月一常以ニ春分一朝ニ日于東門之外一示レ有レ所レ尊訓ニ人民事一君之道一也秋夕夕ニ月于西門之外一別ニ陰陽一之義也云々又七丁オ云天子父ニ事三老一者適ニ成于天地人一也兄ニ事五更一者訓ニ于五品一也更者長也更相代至レ五也能以ニ善道一改ニ更己一也又三老老謂レ久也舊也壽也皆取ニ首妻男女完具者一古者天子親袒割レ牲執レ醬而饋ニ三公一設レ几九卿正レ履使者安車輭輪迓迎而至ニ其家一天子獨拜ニ于屏一其明日三老詣レ闕謝以ニ其禮過厚一故也又五更或爲レ叟叟老稱與ニ三老一同義也云々按に白虎通一の卷一丁オ爵の條に天子者爵稱也爵所ニ以稱一天子一者何王者父レ天母レ地爲ニ天之子一也故援神契曰天覆地載謂ニ之天子一上法ニ斗極一鈞命訣曰天子爵稱也帝王之德有ニ優劣一所ニ以俱稱ニ天子一者何以下其俱命ニ於天一而主ニ治五千里内一也尚書曰天子作ニ民父母一以爲ニ天下王一何以知帝亦稱ニ天子一也以法ニ天下一也中候曰天子臣放勳書無逸篇曰厥兆天子爵何以言レ皇亦稱ニ天子一也以ニ其言一天覆地載俱王ニ天下一也云々儀制令（令義解六の一丁オ）に天子祭祀所レ稱云々義解に謂告ニ于神祇一稱爲ニ天子一凡自ニ天子一至ニ車駕一皆是書記所レ用至ニ風俗所一レ稱則不レ依ニ文字一假如皇御孫命及須明樂美御德之類也云々公式令義解七の廿三丁オに凡人君者父レ天母レ地故曰ニ天子一云々事物紀原一の卷十五丁オ六典四の卷十一丁オなど考合て知べし 頭書 孝經鉤命訣古微書卷之三十載レ之云天子爵稱也云々又云或稱ニ帝王一接レ上稱ニ天子一明レ以ニ爵事一天接レ下爵稱ニ帝王一明レ以ニ號令一臣レ下云々尚書帝命驗古微書卷三取レ之に天子煌々也云々

（九十六）年歲閏月　又七丁ウ云三代年歲之別名唐虞曰レ載載歲也言一歲莫レ不ニ覆載一故曰レ載夏曰レ歲一曰レ稔也商曰レ祀周曰レ年閏月者所レ以補ニ小月之減日一以正ニ歲數一故三年一閏五年再閏云々按ニ史記律曆書瑯琊代酈編二の卷四丁ウ事物紀原一の卷など考合すべし

（九十七）后妃夫人婦人妻妾嬪公主　又七丁ウ云天子諸侯后妃夫人之別名天子之妃曰レ后后之言後也諸侯之妃曰ニ夫人一夫之言扶也大夫曰ニ孺人一孺之言屬也士曰ニ婦人一婦之言服也庶人曰レ妻妻之言齊也公侯有ニ夫人一有ニ世婦一有レ妻有レ妾云々又八丁オ云天子一取ニ十二女一象ニ十二月一三夫人九嬪諸侯一取ニ九女一象ニ九州一一妻八妾卿大夫一妻二妾士一妻一妾云々又四八丁オ云王者子女封邑之差帝之女曰ニ公主一儀比ニ諸侯一帝之姊妹曰ニ長公主一儀比ニ諸侯王一異姓婦女以ニ恩澤一封者曰レ君比ニ長公主一云々按に事物紀原帝王后妃部六典漢儀など考合すべし令に注すべき事也 頭書 漢書成帝紀二天子女曰ニ公主一

（九十八）源榮覺書　增上寺觀智國師の弟子の曉譽源榮上人の筆記一卷あり源榮覺書といふ慶長の比の事を記されたり廓山和尚の慶長供奉記とひとしきもの也

（九十九）金銀御料理　同書に慶長十一年三月十二日當月始より御城經營御祝禱の奉爲として御地鎭の御

跡に假御床を造らせられ四方に幔幕を張らせ左右に遠侍にひとしく弓鐵炮の警護を置せられ能化五人（連聲寺大嚴寺弘經寺新知恩寺）所化七十五人に仰付られ法問の儀あり云云相すみて金銀の御料理を能化五人に賜はる此御料理は東山殿五山の長老數十人の中輪施導師の時第一座にのみ給へりしと云本は公家攝家門跡の外はなかりしかど足利室町殿しひてこはれ武家にうつされけれど近來武運の末に及しや其さましれるものなかりしを太田和泉守にとはせられ又曾我伊勢蛯川小笠原の人々參會し家々の傳へ習置のまゝを申上今度初て行はせらるゝと承る所化數十人には足打木具とて是又公家方にて公卿殿上人の召上らるゝを用らる珍敷事なり是も定而此度より給ひしならんか佛法の利益難レ有事限なし我等邊土遠國に生れ武將の崇敬を蒙ると淨土門再興の時運に生れ來りける果報也ける所化末々の輩には通途の御膳部にて賜れり御料理の加減鹽梅御料理方天野、長谷川、黑川の人々骨折れしと承る云々又慶長十八年八月十七日觀智國師駿府登城の條に此時御料理三汁十菜金銀なり御膳部を撤せらるゝ時御茶御菓子出中奧の御小性方各これをつとめ云々

（百）觀智國師の十哲　同書慶長十一年三月十二日の條に此頃丁的廓山存虎呑龍を四哲と稱し慶岩聞諦了學大超源榮傳察を六老と呼合て十大弟子と云此十人常に營中へ出仕の時も隨從列行ありければ國師の十傑と名づく法席にも列りて若一人他行又は任務ありし後は又一僧を加へらる此比はいまだ此十人寺院任務せられけれど兼帶にひとしく其寺々へは看護を遣し置常に在府隨從ありて眞俗を衞弼すと云々

（百一）耕地　田畠の打つゞきて見ゆる所をカウチといふはいつばかりの俗語なりけん河內など心得たるはひがごとにて源榮覺書に慶長十二年二月廿八日大御所樣明曉駿府御發駕の旨にて俄に國師を召せられしばらくの程面謁あるべからず時々使僧鴈札のみなれば聞度事どもあり先第一自分平生放鷹を好みて冬分はわけて民家の耕地に至鶴をとり菱喰鴈鴨等を捉しむこれはこれ佛道にて殺生と嫌ひ五戒十戒の初一なればいかにも惡かるべけれど武將の所作にして先第一天子へ進獻のためなればいかほど貴坊がとゞめらるゝとも此事はやめがたし

松屋筆記卷之六十四

東都　平與清文儒稿

（一）祿　孝經援神契（古微書卷廿八收之）云祿者錄也取レ上所二以收一錄于下一下所二以謹一錄一事上一母之于レ子也云々禮記王制に位定然後祿レ之云々周禮天官大宰に以二八柄詔一王馭二群臣一二曰祿疏に以レ功詔レ祿祿所二以富一臣下一故云禮曲禮に士曰二不祿一疏に祿以代レ耕不祿不レ給二其祿一也云々按に以上皆居官給廩の俸也

（二）官職の始　論語摘輔象（明人孫瑴が著錄の古微書卷二十六に收たり）に燧人出レ天四位出レ洛（宋均注云出レ天天所レ生出レ洛地所レ生也）明由曉二升級一（級等差也）致所二先後一必育受二稅役一（所レ宜二施爲一也）成博受二古諸一（古諸侯職等也）隕邱（一作レ立）受二延嬉一（延長嬉興也主レ受二此錄一也）按二古史燧人氏之時雒出二四佐一以代レ天理レ物乃大臣職命明緜政二乎升級一畢旒辨二乎方色一成博受二乎古諸一隕蒇錄二乎延嬉一四后職而天道平人事理　右燧人四佐

伏羲六佐出レ世（密獻不レ及二縫人一故增二佐出レ世人所レ生也）金提（一作レ隄）主二化俗一（爲レ民敦二風化一也）烏明主二建福一（福利二民一也）視獸主二災惡一（爲レ民除二災害一也）紀通爲二中職一（爲二田主一主二平地一兼二內職一也）仲起爲二海陸一（主二平地一兼統レ海也）陽侯爲二江海一（江海一本作二江湖一）按二伏羲舉二六佐一以自策命二金提一嬉俗指二苦蓋一謹審滅視民之未レ居者借レ力成レ之以靖二敷民一命二鳥明一達レ方附二察木絕港道一以濟二不通一奠二八方一旌二九位一而分二九土一命二視獸一爲レ貶志二災害一察二虛實一居二百賜一以平レ民命二紀通一中職定二于中邦一仲起司レ陸陽侯司レ海六佐職而天地位陰陽得　右伏羲六佐

黃帝七輔州選舉翼二佐帝德一風后受二金法一（宋均注云金法言二能決一理是非一天老受二天籙一（籙天教也一命也）五聖受二道級一（級次序也斜正也）知命受二糾俗一窺紀受二變復一（有二翻變一能糾復一也）地典受二州絡一（絡維也）力墨愛二準斥一（準斥凡事也力墨或作二力牧一）按二黃帝紀知命糾俗天老籙敎力牧準斥鶡冶決法五聖道級闓紀補闕地典州絡七輔得而天地治神明至又世紀云黃帝以二風后一爲二上台一與二天老五聖一爲二三台一其餘知命窺紀地典力牧常先封胡孔甲等或爲レ師或爲レ將非二一人一也按に此次に孫瑴が按に路史を引て黃帝七輔の事をいへり燧人四佐伏羲六佐黃帝七輔をもて官職の濫觴といふべし論語讖考（吉徵書卷廿五載レ之）にも黃帝受二地形一象二天文一以制レ官爰有二九州之牧一（一作レ軒轅知二地利一九牧倡レ教）伏羲已前雖レ有二官名一未二必具一立官位一至二黃帝一名位乃具云々孫瑴按に路史神農之法一君二臣三佐四使黃帝立二四輔三公六卿三少二十有四官一凡百

二十官有レ秩以レ之共理而視二四民一顓帝立二九寺九卿一帝堯乃立二三公六卿百揆暨百執事一舜設二三公四輔師保疑丞官一不二必備一惟其人也禹立二三公九卿百二十官一二歲而考績五歲而定レ政杜佑通典官數唐六十員夏百二十員殷二百四十員周內外官六万三千六百七十五員任昉物原云凡諸官稱レ師自二伏羲龍師一始諸官稱レ史亦自二伏羲置一史官一始諸官稱レ監自二軒轅置一左右大監一始諸官稱レ正自二顓頊置一南北正一始諸官稱レ司亦自二軒轅置一司徒一始諸官稱二大夫一自二堯設一司徒屬大夫一始諸官稱レ典自二舜命一夔典樂一始諸官稱レ太稱レ少自二商湯設一太傅少傅一始與清曰官職原始の事通典通考百官志などその記せるものおほく余が紫徵三台考三公九卿考などにも其例をいへり可二考合一

(三)龜書靈龜　河圖挺佐輔（古徵書卷廿三載レ之）云黃帝修レ德立レ義天下大治乃召二天老一而問焉云々天老曰河出二龍圖一雒出二龜書一云々又云堯時與二群臣賢智一到二翠嫣之川一大龜負レ圖來投レ堯堯敕二臣下一寫取告二瑞應一寫畢歸二還水中一云々河圖玉版（古徵書廿四）云倉頡爲レ帝南巡狩登二陽墟之山一臨二玄扈洛汭之水一靈龜負レ書丹甲青文以授二之帝一止二十八字景二刻于陽墟之石室一李期止

識二八字一曰上天垂レ命皇辟迭レ王今已不レ可レ尋矣按に此等の說万葉一の卷長歌にフミオヘルアヤシキ龜とよめるに注すべし又禮斗威儀（古徵書十九）に君乘レ土而王則龜被レ文而見云々洛書緯（古徵書廿五）に洛水地理陰精之官帝王明聖龜書出レ文天以與レ命地以授レ瑞云々雒書靈准聽（古徵書廿五）に有二黑龜一並赤文成レ字言夏桀無道湯當レ伐レ之云々又靈龜者玄文五色神靈之精也上隆法天下平象地能見二存亡一明二于吉凶一王者不二偏黨一尊二耆老一則出云々按に爾雅に龜の名を多く擧史記龜卜傳褚先生續に神龜の事見ゆ

(四)追儺并豆打　禮斗威儀（古徵書十九收レ之）に顓頊有二三子一生而亡去爲二疫鬼一一居二江水一是爲二瘧鬼一一居二若水一爲二魍魎一一居二人宮室區隅一善驚二人小兒一爲二小鬼一于レ是常以二正歲十二月冷一禮官方相氏掌二熊皮黃金四目玄衣纁裳執レ戈揚レ盾帥二百隸及童子一而時儺以索レ室而驅二疫鬼一以二桃弧棘矢土鼓一且射レ之以二赤丸五穀一灑埽以除二疾殃一云々按に追儺の事政事要略にくはし其外所見擧盡すべからず龍魚河圖（古徵書廿四）に歲暮夕四更中取二二七豆子二七麻子一家人頭髮少許合二麻豆一著二井中一咒二敕井一使下其家竟年不レ遭二傷寒一辟中五方

疫鬼上云々此等は節分の豆打にもよし有余が節分豆打考に追加すべし

(五)肥土の人奢侈　樂動聲儀（古徵書廿一）に土肥厚陸饒溢斯生二奢侈之俗一也云々禹貢淮南子人國記など考合すべき說也

(六)陰神陽神并魂氣　詩推度災（古徵書二十四）に陽本爲レ雄陰本爲レ雌宋均注云本即原也變二陰陽一爲二雌雄一魂也亦言レ未レ有レ形也皆無二朕兆一故謂二之氣一云々按二神代紀の陰神陽神に引注すべし

(七)樂　詩汎歷樞（古徵書二十四）に樂者非レ謂二金石之聲管絃之鳴一謂二陰陽和順一也云々孫穀が按に路史樂論を引ていへり此實に樂の本意なるべし

(八)素王素臣素封　論語摘輔象（古徵書廿六）に仲尼爲二素王一顏淵爲二司徒一子貢爲二司空一又左邱明爲二素臣一云云孝經鉤命訣（古徵書三十）に子曰吾作二孝經一以二素王一無二爵祿之賞斧鉞之誅一故稱二明王之道一云々按に史記貨殖傳に富人を素封といへり素王素臣素封相對せる名也

(九)情　情はナサケと訓べし神代紀上に情（コロ）と讀るもナサケと訓（コマ）ざればきこえず人に心意志思慮念量情魂魄等の別あり心は胸下にありてコヽロ也疑（コリ）かたまれる者なれば「コヽロ」といふ心太（コヽロブト）などもさるものなれば同義也此心の動んとしてきざせるを志といふコヽロザシと訓るは心指（コヽロサシ）の義也心指より進出るをコヽロバセといふは心馳（コヽロハセ）の義にて意の字を訓り心の奥に情ありナサケと訓て心裏の名也女隱を情實などいふも心の奥の情（ナサケ）を通する實といふ義也されば情（ナサケ）ある情なきなどいふは眞實の情の有無にいへり思慮念量は心志意情の用にて經と緯の差別ありこれらの事は別に考記すべし孝經援神契（古徵書廿七）に情者魂之使性者魄之主情生二于陰一以計念性生二于陽一以理契魄白也魂芸也白明白也芸芸動也形有二骸質一取二明白一爲レ名氣惟噓吸取二芸動一爲レ義云々孫穀按に白虎通魂魄者何謂魂猶二伝伝一也行不レ休二于外一也主二于情一魄者迫然著レ人主二于性一也魂者芸也情以除レ穢魄者白也性以治レ內又徵靈書云人有二三魂一一曰爽靈二曰胎先三曰幽精常呼二念其名一則魂安又身也生レ魂者玄父變一成レ神生レ魄者玄母化二生レ身と見ゆ（頭書 禪門寶訓上に大覺曰及二情實日聖一五帝之教詳而文夏也莊子應帝王篇に南海儵と北海忽と中央の渾沌が七竅なきを見て爲に日に一竅を鑿に七日にして渾沌死ぜることの故事也さては情實を七竅の事にいへり）

(十)文字の始　孝經援神契古徴書卷二十八載ノ之云倉頡文字者總而爲レ言包レ意以名レ事也分而爲レ義則文者祖文字者子孫得レ之自然備二其文理象形之屬一則謂二之文一因而滋蔓子母相生形聲會意之屬則謂二之字一字者言二孳乳浸多一也題二之竹帛一謂二之書一書者如也舒也著也記也云云孫毅按倉頡沮誦共造二文字一今但知レ有二倉頡一不レ知二沮誦一又三墳伏羲氏始畫二八卦一命二臣飛龍氏一造二六書一則不レ始二于倉頡一矣淮南子乃云倉頡作レ字而天雨レ粟鬼夜哭伯益作レ井而龍登レ雲神棲二崑崙一何說之誕乎皇覽曰史皇沒葬二利鄉亭一學レ書者皆往投レ刺祀レ之不レ絕若レ是乎明德之遠也又按二許愼說文倉頡之初作レ書蓋依レ類象レ形謂二之文一其後形聲相益謂二之字一文者物象之本字者孳乳而生通志略曰小學之義第一當レ識二子母之相生一第二當レ識二文字之有間象形指事文一也會意諧聲轉注字也假借文字俱也六書也者象形爲レ本形不レ可レ象則屬二諸事一事不レ可レ指則屬二諸意一意不レ可レ會則屬二諸聲一聲不レ可レ諧矣五者不レ足而後假借生焉假借窮而後轉注附焉及レ閱二法苑珠林一造レ書凡有二三人一長名曰レ梵其書右行次曰二佉盧一其書左行少者倉頡其書下行又陶隱居眞誥曰今請陳爲レ書之本始也造レ文文既肇矣乃是五色初萌文章畫定之時秀二人民之交一別二陰陽之分一則有二三元八會群方飛天之書一又有二八龍雲篆明光之章一也其後逮二三皇之世一演二八會之文一爲二龍鳳之章一拘二省雲篆之跡一以爲二順行一梵書分二彼二道一壞レ眞從レ易配二別本支一乃爲二六十四種之書一也遂播二之于三十六天一十方上下也貴居子曰此各爭二一蒼頡之名一耳然後知二文字一道一古今爲レ忌非二獨人忌一之鬼亦忘レ之仙子亦忌レ之其究也天帝亦忌レ之無二已掃一空文字一歸二于面壁一云々與清按二文字の事は說文序晉書□傳事物紀原酉陽雜俎など其外所見おほかり翻譯名義集義楚六帖などに梵字の事あり本朝は上古文字なき事古語拾遺に見ゆ

(十一)白雉白鹿九尾狐芝草連理木　孝經援神契古徴書廿八載ノ之に德至二鳥獸一則鳳皇翔鸞鳥舞麒麟臻白虎見白鹿來狐九尾白烏下雉白首云々又德至二草木一則朱草生木連理芝草繁云々又云周成王時越裳獻二白雉一去二京師一三万里王者祭祀不二相踰一晏食衣服有レ節則至一云白雉岱宗之精云々按に延喜玄蕃式に引注すべし九尾狐は瑞物なるを近來妖怪のやうに心得たるは誤也

頭書 古徴書三尚書帝命驗六丁ヶ白狐九尾云々同九春秋運斗樞に璣星得則狐九尾云々同十九ノ十丁才古徴書十春秋感精符に王者德澤勞流二四表一則白雉見云々

(十二)九九八十一　孝經援神契古徴書廿九載ノ之に春秋三世已九九八十一爲レ限云々注に鄭玄曰九者陽數之極九九八十一是人命終矣云々按に大戴禮に二七十四二八十六七七四十九八八六十四など見ゆ九々の數の所見擧盡すべからず

頭書 客窗謾筆七の卷俗語算數の條に古書を擧ていへり可二考合一祖庭事苑三ノ十九オ

(十三)祓齋(ハラヘモノイミ)　河圖挺佐輔古徴書卅三載ノ之に天老曰云々古之圖紀天其授二帝圖一乎試齋以往視レ之黃帝乃祓齋七日云々これ祓除の注に引べし

(十四)髮神耳神目神鼻神齒神舌神心神牙神肝神腎神脾神膽神腦神骸神　龍魚河圖古徴書卅四に髮神名壽長耳神名嬌女目神名朱映鼻神名勇廬齒神名丹朱夜臥呼レ之有レ患呼レ之九通惡鬼自郤云々孫毅按二黃庭經一曰髮神蒼華字太元腦神精根字泥丸眼神明上字英玄鼻神玉壟字靈堅耳神空間字幽田舌神通金字正倫齒神鍔峯字羅千一面之神宗二泥丸一又心神丹元字守靈牙神皓華字虛成肝神龍烟字含明腎神玄冥字育嬰脾神嘗在字魂停膽神龍曜字威明皆在二心內一運天經晝夜存レ之自長生酉陽雜俎身神及諸神名異者腦神曰覺元髮神曰玄華目神曰虛監鼻神曰沖龍玉舌神曰始梁讀二百骸神名一可二以思養生主一矣云々按に人躰の神名備はれりといふべし俱生神の說のみにあらず人身の說は俱舍論神相全篇などにくはしく石坂宗哲法眼の人身總名に悉くその名目を擧られたり近來本所阿竹に齒神の叢詞を勸請せるに齒病の願に利生ありとて參詣の人たえず本所番場に痔神あり表六番町小林氏の屋敷に痲疹神(ハシカ)あり

(十五)劒神矛神弓神斧神盾神　龍魚河圖古徴書三十四に劒神名飛揚矛神名天矢陰弓神名曲張斧神名狂章盾神名自障云々按に本朝にも兵主神胡籙神など武器の神名おほかり

(十六)艾虎　本朝艾虎を懸し事五山僧の詩集に見ゆ龍魚河圖に懸二艾虎鼻門上一宜二官子孫帶一印綬一懸二虎鼻門中一周一年取燒作レ屑與二婦人一飮レ之二月中便有レ娠生二貴子一勿レ令二人知一レ之泄則不レ驗也亦勿レ令二婦見一レ之云々

頭書 古徴書卅四ノ八丁ウ

(十七)七月七日咒方　龍魚河圖云七月七日取二赤小豆一男呑二一七一女呑二二七一令二人畢歲無一レ病又七月七日晒二曝革裘一無一レ蟲又七月七日取二烏雞血一和二三月三

日桃花末ニ塗ニ面及遍身ニ三二日肌白如レ玉云々按に今俗七月七日鏡を水に漬て洗へば鮮明也といふ

(十八)富術　龍魚河圖に埋ニ蠶沙于宅亥地一大富得ニ蠶絲ニ吉利以ニ一斛二斗一甲子日鎭宅大吉致レ財千万云云蠶沙は本草倭名及醫心方に加比古乃久曾(カヒコノクソ)と有

(十九)夫婦の衣を合洗すれば不利　又云婦人無レ以ニ夫衣一合集浣之使ニ之不レ利云々

(廿)馬を賣て婦を娶事不吉　又云無レ以ニ賣レ馬錢一娶ニ婦賣レ馬錢娶レ婦令レ多ニ惡病一夫妻離別云々

(廿一)瓜兩鼻(カリノハナオフタツ)あるは人を殺す　龍魚河圖に瓜有ニ兩鼻一者殺レ人云々兩鼻とは花の落たる跡二ツあるをいふ也頭書宜禁本草上卷熟瓜の條に双蒂者殺レ人云々

(廿二)一の宮　一の宮二の宮なごいふと余已に棟梁集にいひたれど又いふべきとあり神道集五の卷第廿六御神樂事の條に人王第十代崇神天王御時日本諸國一宮立云云此說うけがたし抑一の宮二の宮などはもと國分寺鎭守の總社に其國中の靈驗の神を總合して祭れるをりの定にて其最一なるを一宮としさて二宮三宮など順次せるを其總社のみに限らず本社にもいひ及ぼしたるなるべし奈良の朝の比佛法崇敬いみじくて國造神官等勢を失ひ國分寺の僧侶時を得てもはら神事にあづかりけんよしは東大寺戒壇院神名帳を見ても知るべし總社を國分寺に祭れるも古書所見多し八幡大菩薩勸請も僧道の所爲にてかた〴〵神道は釋家の手におちいりたれば一宮二宮などの稱は國分寺總社の順次によれると疑べからず總社は必國分寺の鎭守なるよしは注進三箇條に證を擧て論じたれば閱て知べし

(廿三)蜃氣樓一名ニ海市一　蜃氣樓又海市ともいへり史記天官書に海旁蜃氣象ニ樓臺一廣野氣成ニ宮闕一云々晉書天文志中雜氣の條に凡海旁蜃氣爲ニ樓臺一廣野氣成ニ宮闕一云々陸佃埤雅二の卷釋魚部蚌の條に蚌一名蜃墨子曰周之靈珪出ニ於土石一楚之明月生ニ於蚌蜃一由レ是觀レ之士之賢不肖豈有レ種哉云々又云海物異名記曰蜃布泥有ニ疆界一其蒸氣也爲レ樓云々同蜃の條に雜兵書曰東海出氣如レ甑渭水出氣如レ蜃蜃形似レ蛇而大腰以下鱗盡逆一曰狀似ニ蟾龍一有レ耳有レ角背鬣作ニ紅色一噓レ氣成ニ樓臺一望レ之丹碧隱然如レ在ニ煙霧一高鳥倦飛就レ之以息喜且至レ氣輒吸レ之而下今俗謂ニ之蜃樓一將レ雨即見史記曰海旁蜃氣成ニ樓臺一野氣成ニ宮闕一

即此是也世云雉與レ蛇交而生レ蜃蓋得ニ其脂一和レ臘爲レ燭香聞ニ百步一煙出ニ其上一皆成ニ樓閣之狀一矣又曰蛇之求ニ於龜一則爲レ龜求ニ於雉一則爲レ蜃故三物常異而同感也又曰鹿食レ龜麏食レ蛇蜃食ニ燕子一蛟食ニ犀角一蛇食ニ茱萸一筆談云登州海中時有ニ雲氣一如ニ宮室臺觀城堞人物車馬冠蓋之狀一謂ニ之海市一或云蛟唇之氣云々三才圖會鳥獸五卷に雜兵書曰東海出氣如レ甑渭水出氣如レ蜃蜃形如レ蛇而大腰以下鱗盡逆一曰狀似ニ蟾龍一有レ耳背鬣作ニ紅色一噓レ氣成ニ樓臺一將レ雨即見得ニ其脂一和レ臘爲レ燭香聞ニ百步一煙出ニ其上一皆成ニ樓閣之形一又大蛤亦名レ蜃冬月雉入レ海所レ化其肉可ニ以薦一穀可レ飾レ器灰可ニ塗一壙飾ニ墻壁一又有レ珠可レ取則蚌之屬也云々本草綱目四十六の卷介部蚌の條に弘景曰雀入ニ大水一爲レ蜃蜃即蚌也云々時珍曰其肉可レ食其殼可レ爲レ粉湖汚人皆印成レ錠市レ之謂ニ之蚌粉一亦曰ニ蛤粉一古人謂ニ之蜃灰一以飾ニ墻壁一闥ニ墓壙一如今用ニ石灰一也云々萩原隨筆五の卷に袋中作琉球神道ニ琉球王宮ニ額アリ龍宮城ト書ル由載タリ琉球ハ龍宮ノ轉語歟蜃ハ形蛟龍ニ類シテ紅鬣アリ角アリ腰ヨリ下鱗逆ニ生ズ潛確類書曰蜃ハ形蟠龍ニ似テ角アリ耳アリ雨降ントスル時ハ氣ヲ吐テ樓臺ノ形ヲナス俗コレヲ蜃樓トス沈括ガ筆談ニ海市ト云又蜃樓ノ類歟蜃ニ二種アリ樓臺ノ形ヲアラハス蜃ハ之及反音震也去聲也時軫反音腎上聲ニヨムハ車螯ノ類也和名ホタテ貝ト云七十二候ニ雖レ入大水蜃ト成爾雅翼ニ雀海ニ入テ蛤トナルト云皆車螯也周禮春官蜃器左傳成公二年宋ノ文公ノ葬蜃灰ヲ用ルト皆車螯也今樓臺ヲアラハスモノヲ蛤ノ息トスルハ合璧事類ニ大蛤一名蜄能氣ヲ吐テ樓臺ヲナスト云ヘルヲ見テ誤レルニヤ本邦寛永五年安房國龜崎ト云濱ノ海邊夜光アリ海士四五人海底ニ入テ見ルニ長七八間許ノ蚫アリトイヘリ云々頭書五雜俎三ノ卅四丁ウ景德傳灯錄廿八ノ廿二丁ウ乾隆瓊城同廿九ノ廿一丁オ祖庭事苑三ノ十八丁ウ三才圖會地理五卷四十三丁宋人林景熙が霽山集四の卷廿四丁オ蜃說に嘗讀ニ漢天文志ニ載ニ海旁蜃氣樓臺ニ初未ニ之信一庚寅季春予遊ニ冠海濱一一日飯午家僮走報ニ怪事一曰海中忽湧ニ數山一皆昔未ニ嘗有一父老觀以爲ニ何異予駭而出會ニ潁川主人走使レ邀ニ予既至相携登ニ聚遠樓一東望第見滄溟浩渺中矗如ニ奇峰一聯如ニ鼇巘一列如ニ碎岫一隱見不レ常移レ時城郭臺榭驟變獻起如ニ衆大之區一數十万家魚鱗相比中有ニ浮圖老子之宮一三門嵯峨鐘鼓樓翼其左右簷牙歷々極公輸巧不レ能レ過又移レ時或立如レ人或散如レ獸或列者ニ旌旗之飾戮盆之器詭異万千日近レ晡冉々漫滅向レ之有者安在而海自若也筆談紀ニ登州海市事一往々類此予因ニ是始信噫嘻秦之阿房、楚之草莽、魏之銅雀陳之臨春結綺突兀凌レ雲者何限遽去代遷蕩爲ニ焦土一化爲ニ浮埃一是亦一蜃也何暇ニ蜃之異一哉云々日知錄四十一海市五雜俎九ノ卅四丁ウ同三ノ卅四丁ウ同四ノ四十八丁ウ大和本草十四ノ六丁ウ七丁オ雜々拾遺五の卷十五丁オ月令廣義廿三ノ十一丁ウ乾隆瓊城傳灯錄抄四ノ廿四丁オ蜃氣樓杜律四ノ九丁オ癸辛

雜識續集上卷短蓬の條に寄圖寄所寄五卷海市條に福寧州筆架山在二大金海中一嘉靖四年四月二十三日南海浮二來五山一自二筆架山外一而至峰巒突兀上有二草木人馬一往來貿易一圍城築觀自レ午踰レ申乃沒蓋海市也每市現二於登萊海中一而偶見二於福寧州海中一者如レ此圖書云々笈埃隨筆八ノ十丁ォ海市翰林五鳳集五十四

(廿四)野干　狐の事を野干といひ曾我物語など其外所見おほしされど狐よりも小きものゝよし法華經疏に見ゆ字も野幹と書べきを省て野干と書る也義楚六帖廿四の卷野幹の條に諸經論を引て其故事を載たり

頭書 大和本草十六ノ十九丁ウ射干條に國俗狐ヲ野干トス本草ニ狐之別名無二此稱一然レバ野干ト狐トハ異也云々法苑珠林百二ノ四丁

(廿五)魚虎鳥　文德實錄に魚虎鳥見ゆこは翡翠(カハセミ)にて鵠(ソヒ)也鵠ハ神代紀にも出たり本草類の書に一名魚虎鳥とあり又本草綱目四十四鱗之四に魚虎あり一名土奴魚云々魚也變爲レ虎或爲二豪猪一或爲二鮫魚一よし說あり

(廿六)碁子麵(キシノメン)　庭訓往來扶翼下卷廿八丁ォに碁子麵貞丈碁子ハゴイシ也小麥粉ヲ水ニテ固クヲリテ板ノ上ニテ薄ク伸(ノ)シ平(ヒラ)メテ細キ竹ノ筒ノ切口ノ內ノ肉ヲ削リ去リ皮ノ方ヲウスクナルヤウニ及ノ如クシテ其筒ニテ右ノ伸シタル麵ヲ押シ切レバ碁石ノ如クニ切ルト也ソレヲ煮テ煎豆ノ粉ヲ衣ニ掛ル也今モ薩州ナドニハ其製アリ是歟云々信濃奇區一覽一の卷木曾踊の條に西野末川邊正月の年禮に先村長の家に至り御免なれといへば主わたれといふ是は正月のみの詞也錢九文ヅヽわざとと云て出す碁子麵とて蕎麥を二三寸に角に切汁に煮て口祝(クチイハヒ)なりとて膳を出す雜煮の意なるべしと云々與清按に此製諸國に殘れるなるべしかいもちひも信濃にては蕎麥かきの事にいへり今人かいもちひを壯丹餅の事とおもふはいかゞあらん粥餅(カユモチヒ)といはんよりは搔餅(カイモチヒ)の方とわりにかなへり今昔物語宇治拾遺などに頓に作り出たるさまあれば必蕎麥搔なるべくぞおぼゆる

(廿七)楊枝隱(ヤウジガクレ)　俗に楊枝隱とて楊枝を持て咒文を誦する隱形の法ありといへり相摸國藤澤の宿にて或人愚者を欺て僞て其法を授け此彼いひ合せて能隱(ヨクカク)れたるよしにもてなしこゝにやをるかしこにや居るとて打はり又はあらぬ所を打たゝきなどするを愚者は實と思ひいよ〳〵咒を唱てしんじゐたりとなん晉書顧愷之傳に桓玄嘗以二一柳葉一紿レ之曰此蟬所レ翳葉也取自蔽人不レ見レ己愷之喜引レ葉自蔽玄就溺焉愷之信

其不レ見レ己也甚以珍レ之とあるは同日の談といふべし

(廿八)和炭(ニコヅミ)井炭の諸品　延喜式に和炭(ニコヅミ)あり炭(アラヅミ)と別に出せり炭は今の堅炭也和炭は鍛冶炭(カヂズミ)也鍛冶炭は松の炭にて其性消炭(ケシズミ)のごとくいと和(ヤハラカ)也唐書王方翼傳に燎レ松丸レ墨爲二富家一とあるは松炭を掃墨(ハイズミ)にしそれを墨に丸め製れるにや又はタドンの類歟晉書羊琇傳に屑レ炭和作二獸形一以溫レ酒といへるはまたくたどんの類也同書孫登傳に嘗住二宣陽山一有二作レ炭人一見レ之知二非常人一與語登亦不レ應云々此作レ炭人は小野の山賤(ヤマガツ)が徒にて炭燒也江戸にては八王子の炭燒といふと人の言ぐさ也今江戸にて所レ用の炭は伊豆の天城炭を上品とすこれ堅炭にて石竈を築て燒炭也八王子筑井青梅などより出すは中品也上總川越より出すは下品也また佐倉炭とて性和にて疾火(ハヤクヒ)與る物あり茶人の爐風爐に用るこれ也これも八王子筑井より出るは下品也枝炭とて枝のまゝ燒たるあり茶人爐中の風流に用ふ京都より下るを上品とす關東にてはおほく製らずその製品たま〳〵あれども下品なり又鍛冶炭とて鍛冶の用る炭あり松の炭にて性いと和に消炭の貌し

(廿九)弱飯(ヒノイヒ)井二飯　諸食禁好集に弱飯あり此倭名抄の糇糒の事にや和名比女(ヒメ)或說云非米非レ粥之義也といへり一本には煮レ米多レ水者也と有今の燒干(タキホシ)の飯の事にて吾妻鏡に堉飯といへりそは籠に盛らすして堉に盛飯なればなり曆にひめはじめといふは堉飯始の義也禁好集は足利の僧三歸廻翁の撰也三歸は弘治の比の人也同書に二飯あり二飯は二度炊(カシキ)たる飯にや和名抄に餐饌半熟飯也漢語抄云加太加之木乃以比とあるは片炊の飲なればこれに對て再炊の飯を二飯といへりと見ゆモロカシキノイヒともいふべき物也

頭書 今昔廿八ノ十八語に糒(ヒノ)ヲシテ此ノ和太利ノ煎物ヲ溫メテ汁物ニテ食セタレバ云々小世繼卅九丁ォにひめをしてこおほねあはび千鳥うるかなどしてまゐらせたる也云々

(卅)艤(イクサブネ)艤井鐵炮火器　全浙兵制下卷寧紹區圖說の條に福船沙船號船の名目あり又曾艤挑艤殼艤圳船蒼船等あり皆大小の戰船也中卷造修福船略說の條

に大小の福船鳥船船修造工料を記したり又下卷寧紹區圖說の條に至レ如ニ銃炮之類一惟發貢鳥銃佛狠機百子銃四項火器之類惟一窩蜂釘逢箭噴筒火礮四項皆切實用者云々

（卅一）宗設宋素卿　全浙兵制下卷 本區倭亂紀嘉靖二年の條に日本使者宗設宋素卿兩自作ニ敵于寧波之嘉賓館一通入ニ海洋一備倭都指揮劉錦追戰死レ之云云按に國朝獻徵錄一百廿の卷四夷條日本志に右京兆大夫高貢使宋素卿貢亡（ナク）レ何（ホド）左京兆大夫內藝興遣ニ宗設一貢咸强請ニ勘合一後先至ニ寧波一爭レ長不ニ相下一宗設衆盛ニ於宋素卿一遂攻ニ敗之一追レ北至ニ紹興一蹦ニ諸郡縣一剽掠以レ千計都指揮劉錦及千戶百等官遇レ之皆死後以レ詔指諭且下ニ宋素卿獄一始肯聽徐々解自レ是有レ輕ニ中國一心ト矣云々と同事也圖書編卷五十日本國考には大內藝興遣ニ僧宗設一細川高遣ニ僧瑞佐及素卿一先後至ニ寧波一とあり大內藝興は義興の誤也細川高は高國也宋素卿始姓は朱縞鄰人也夷稱日本傳中之一卷五丁に論じたり頭書 青木敦書が冬夜雜錄に皇明通紀ニ嘉靖四年日本宗設肆掠後入ニ海島一無レ可ニ踪跡一トノカス宗設ハ防州ノ人ニテ明ノ杭州ニ在テ中田猫談ト云書ヲ著シタル人ニテ誠ニ大智ノ人ナリ云々

（卅二）大唐唐人舊唐人漢地　全浙兵制下卷 附錄陳ニ日本國之詳一の條に呼ニ我大明一曰ニ大唐一呼ニ我國之人一爲ニ唐人一久住ニ倭地一者曰ニ舊唐人一蓋以下唐之威令素行ニ于夷狄一故ト也云々按に舊唐人はフルタウジンといへるを字に書しなるべし又ケタウジンといふも舊唐人（クタウジン）の訛にや又は怪唐人（ケタウジン）歟本朝の人漢地を指て唐土大唐漢土大宋海表などいへり時文摘紕松屋叢話にその例を擧ぐ延喜式の始に附たる歷運記に漢地とあり此稱可レ用

（卅三）酒爲レ膽　同書附錄陳ニ禦レ寇之策一條に夫日本之兵全以レ酒爲レ膽臨レ陣之時一醉而陪レ氣忘レ生此法宜レ用レ之といへり一杯氣元にて勇を陪すとさるとも也

（卅四）天保の年號非ニ吉祥一　井年號の字　宋洪邁が容齋續筆十三の卷紀年兆祥の條に自ニ漢武建元一以來千餘年間改元數百其附會離合爲ニ之辭一者不レ可ニ勝書一固亦有ニ曉然而易レ見者一如ニ晉元帝永昌一郭璞以爲有ニ二日之象一果至レ冬而亡旦靈寶大亨讖者以爲一人二月了果以ニ仲春一敗蕭棟武陵王紀同歲竊レ位皆爲ニ天正一以爲二人一年而止其後皆然齊文宣天保爲ニ一大人只十一果十年而終然梁明帝蕭歸亦用レ此而盡ニ二十三年一或又云歸蔑爾一邦故非ニ禨祥所一係齊後主隆化爲ニ降死一

安德王延　宗德昌爲レ得ニ二日一　周武帝宣政爲ニ宇文亡日一　宣帝大象爲ニ天子冢一　蕭琮晉出帝廣運爲ニ軍走一　隋煬帝大業爲ニ大苦末一　唐憲宗廣明爲ニ唐去ニ丑口一而著ニ黃家一日月以兆ニ巢賊之禍一ト　欽宗靖康爲ニ立十二月康一果在位滿歲而高宗由ニ康邸一建ニ中興之業一　熙寧之末將ニ改元一近臣撰ニ三名一以進曰ニ平成一曰ニ美成一曰ニ豐亨一神宗曰成字負レ戈美成者犬羊負レ戈亨字爲レ子不レ成不レ若去レ亨而加レ元遂爲ニ元豐一若ニ隆興一則取ニ建隆紹興各一字一與ニ唐正元取ニ正觀開元一之義ト同已而嫌下與ニ顏亮正隆一相近ト故ニ二年即改ニ乾道一及ニ甲午一改ニ純熙一既已布ニ告天下一予時守レ贛賀表云天永命而開ニ中興一方茂十年之統時純熙而用ニ大介一載ニ新紀號之文一迨ニ詔至一乃爲ニ淳熙一蓋以ニ出處有ニ告成大武之語一故不レ欲レ用云々本朝天正の年號十九年兵革の中にありて御極あからす正親町後陽成兩帝にわたれりされど二人一年止の兆なし今の天保も此類ならんにはうしろやすしされど別に佳瑞の字を撰用んにはしかす文宣の天保改元の事は北齊書四の卷文宣紀に改ニ武定八年一爲ニ天保一とありまた元秘抄四の卷和漢年號字難事の條に天保天治三年難言敦基朝臣先年撰進之時有ニ難言一上々下々可レ憚又北齊年號僞朝也保安五年爲隆云秦始皇刻ニ石表一文中之字也又報レ上受祿之文難ニ採用一周公旦申成王之申旦不レ寐憂ニ天保之未定一此句可レ憚右兵衞督難云天保者漢土寺名也とも見ゆ按元秘四卷倭漢年號の事を注せる寫本也作者未レ詳

（卅五）波江フユフヤカス生などいふ詞　本草倭名卷十一草部下に鹿藿陶景注云葛根之苗又名鹿藿和名久須加都良乃波衣云々醫心方一の卷にも見ゆ新撰字鏡禾部に堧更生比古波江云々倭名抄木具部に蘗纂要云斬而復生曰レ蘗和名比古波衣云々按にこれらの波江は草木の生するをいふ淺芽生豆田粟田などの布も波田の約言にて同義也恩賴の布田も亦通ずそは歌詞考にいへるを考合すべし水に漬て物をほとびさするをふやかすといふも多くなる貌にいへり今まで小き物の大きくなれるも生出がごとけれぱ俗言にフエル」といへり草木の枝葉のはえしげるといふも榮滋るにて榮も布江の通音也榮ある榮なきといふも枝葉のはえしげるは光彩の添ゆゑにそれにたとへていふ詞也

(卅六)ふすべ　物語書にふすべといふ詞おほかり新撰字鏡火部に焔烟氣也布須毛留云々本草倭名十一卷草部下に馬勃和名於爾布須倍云々醫心方一にも於爾布須倍見ゆもと煙氣をいひてそれより煙し責るをふすべといふ也けり

(卅七)柏カシハ比乃木、かへ敷　倭名抄木部に兼名苑云柏一名槲和名加閇とあれど今加閇といふもの考によしなし漢籍には松柏と並稱して側柏を柏といひ柏實も側柏の實をいへり本草綱目卅四木之一柏の條に柏又槲とも側柏とも名づく李時珍按魏子才大書精緻云万木皆向レ陽而柏獨西指蓋陰木而有二貞德一者故字從レ白白者西方也陸佃埤雅云柏之指レ西猶二鍼之指一南也柏有二數種一入レ藥惟取二葉扁而側生者一故曰二側柏一云々万葉集に「なら山の兒手柏の兩面とにもかくにもねちけ人かも」とよみて檜木に似て葉兩面也枝西に指すがおほかり本草倭名十二木上に柏實子人一名堅剛一名槲和名比乃美一名加倍乃美云々醫心方一に柏實和名比乃美云々和名抄木部に爾雅云檜柏葉松身和名非云々などみえて柏檜の類都て比乃木とも加倍乃木ともいへりと見ゆ枕草子にあすならうあり今もアスナラウともサハラとも呼て檜よりも劣の木也されば比乃木といふ中兒手柏を柏とすべし側柏も槲も異名也柏の字を「カシハ」と訓も兒手加之波によれる也比は總名にて兒手柏も加閇もアスナラウもサハラも大同小異なる也新撰字鏡木部に杞比乃木樸比乃木枸比乃木などあれど杞樸枸三字ともに比乃木にあらずさて比乃木といふは淮南子に相摩而燃といへるごとく火出る木なればなり兒手柏とは其葉兒の手の形に似たれば也加閇は香火にて香ある火の木の義にや又は香葉を通はして加閇といへるにてもあるべしカシハは炊レ葉也新撰字鏡火部に爨炊二五穀一也可志久又宇牟須云々爨炊飯之具己志支和良云々同書金部に鎩熬也熟レ飯也加志久云々火部に燀炊也伊比加志久云々神代紀に爲飯イヒカシテ云々など見え甑を牟須己志支といへるも己志支は加志支の通音也さて炊たる者をおほひもし下にもしき又は炊く時に上下におほひしく葉をば何の葉にてもかしはといへる也柏も食物の上にもおほひ下にも敷けんかへしきといふも柏敷にて檜葉を食物の下に敷たる也かへしきの事は西公談抄桐火桶などに見えしや

うにおぼゆたづぬべし厚朴猪苓革麻石葦御綱柏(ワナカシハ)などみなさる心よりよべる名也

(卅八)茶　茶の和名は目さまし草といひて日重上人聞書に目さまし〳〵さといふは茶の事也俊頼朝臣「生ひしけるねふりの杜の下にこそ目さまし草はうゝへかりけれ」松風をもいふといへり云々烏丸光廣卿の目さまし草といふ草子もあり按に茶は音左也「チヤ」にはあらず醫心方一の卷諸藥和名部木中に茗苦荼茗和名茶也と見ゆ本草倭名には和名を脫せりされば「チヤ」を倭名と心得て歌にもよむべき也菊蘭の類にて論なし

(卅九)山椒の魚并はじかみ魚　箱根山に川椒の魚あり蠑螈の形に似て頭圓く頸細し長身細尾四足あり山川の底に栖といへども冬は陸に出て石間落葉の下などに隱る好て川椒の木に上るゆゑに川椒の魚とよぶ小兒の疳を治といふ又畿内にもサンセウ魚あり石見にて「ハンザケ」美作にて「ハンザキ」丹波にて「ハダカス」又「アンゴウ」など呼よし本草啓蒙四十の卷四十九丁左に見ゆ又奥州岩城ニテハ山鮀鰌又山カジカといへりこれ本草綱目の鯢魚也鯨鯢の鯢と同名異物也本草倭名卷十六虫魚類部に鰻鱺魚鮧鯢魚音語雖反有二四足一和名波之加美以乎云々醫心方諸藥和名部魚類の條に鰻鱺魚和名波之加美以乎云々和名抄龍魚類部に鰻鱺魚本草云鰻鱺和名波之加美伊乎云々など見えて波之加美は川椒の倭名也本草倭名木中に秦椒和名加波々之加美云々山茱萸和名以多知波之加美云々醫心方和名部に吳茱萸和名加良波之加三秦椒和名加波々之加三又古布之波之加三云々新撰字鏡木部に檄久万波自加彌云々和名抄薑蒜部に蜀椒和名奈留波之加美一云不佐波之加美辛夷和名古不之波之加美同書木部に蔓椒和名以多知波之加美吳朱萸和名加波々之加美云々などありこの秦椒蜀椒山椒みな大同少異にて加波々之加美以多知波之加三加良波之加三古布之波之加三久万波之加三の中に今の山椒犬山椒朝倉山椒辛皮なども有なるべしかく山椒に波之加美の名あれば山椒の魚を波之加美以乎といへる也因に云堀川右大臣頼宗集に道命阿闍梨はじかみの花をおこすとて「花のみなちりての後にからくして殘れるものははしかみの花」返し「君はさはからき花をそこのみける世のすきものとおもひけるかな」此歌は山椒の

花は三月末四月にかゝりて咲ものなればかくよめる也又行宗集に女院の中納言殿のはじかみのめはかど〳〵しきけのしたると有しかばかど〳〵しきものまゐらすとてつかはしたりしかば中納言殿「はしかみのめにもつきたる心かなかと〳〵しくて是をおこすな」返しせよと有しかば「からくしてめにつくなれは今よりは此はしかみをあたに思はし」是は山椒の芽なるべし

(四十)もやし　今世小豆のもやしを料理家にて用ふ又豆のもやしあり大麥のもやしは麥芽とて藥品に用ひ又飴を造るに用ふ其外獨活、防風、山椒芽などのもやし皆土室を構て非時の珍物を造るとおほかり本草倭名十九米穀部に大豆黃卷陶景注曰以二大豆一爲レ蘗牙生便乾レ之名也和名末女乃毛也之云々又蘗米萌レ牙者通爲レ蘗和名毛也之云々醫心方一の卷諸藥和名部米穀の條に大豆黃卷和名末女乃毛也之云々また蘗米和名毛也之云々和名抄麴蘗類部に說文云蘖牙米也本草云蘖米味苦無レ毒又有二麥蘖一和名與彌乃毛良之云々などと見えてもやしは令レ萌の義也芽を女といふも毛江の約なり關東の俗語に草木の芽を保江といふ漆保江、地膚保江、皂莢保江などみな毛江の通音也そは草木の芽は火の燃る如くやゝ著れ出るがゆゑの名也「メグム」といふも萌含也「ツノグム」は角のごとくに芽を含たる也神代記上にキザシヲフクメリとあるは氣指を含るにてそれより萌出るよし也蘗牙の貌にたとへて神の始生をいへる也

(四十一)むかつく　俗に嘔氣をムカツクともムカヒケともいへり醫心方一の卷乾歐を「ムカツク」とよめり歐は嘔の誤字也

(四十二)そらめき　醫心方一の卷に病人直二視瞳子一云々と有直視をソラメキと訓るは空向の義なるべし

(四十三)文理　醫心方一の卷に文理の字を「アヤシワ」とよめり文をアヤとよめるは常也理をシワと訓るはめづらし

(四十四)滑物并大法　同書同卷に滑物をナメリタルモノ又滑をナメレルモノなどよめりトロヽ汁などの類也又大法の字をオホムキとよめり

(四十五)字の訓くさ〴〵　同書同卷に都カツテ密タシカニ仍スナハチ擘ツンザキ洮汰ソヽリユル漉シタム和アハセ秤カケハカリ絹カドリ要ナカラズ敵アタル淹ホトヽ頭ハシ爾ジカリ理アヤ滑ナメリ揉モム向ナンヽトス心ナカゴ准ナズラフ如干ソコバクなどよめり

(四十六)きそげ保元上廿八オ　こそげ、きさげ、こそぐる、こそはやいくすぐる　俗語に物を「きそげおとす」「こそげおとす」などいへり鍋釜の尻をコソゲル午房の皮をコソゲルなどおほくいへり醫心方一の卷に犀角、零羊角皆刮截作レ屑とあり刮の字をキサゲとよめりキザムなどに近き詞也此「キサゲ」は「コソゲ」「キサゲ」など通へり六四ノ四六ニ見ユコソグルコソハヤイクスグルなど皆同語也頭書字治拾遺三廿三丁ウ明くれば米くはせ鍋藥にこそげてくはせなどすれば云々又廿六丁ウこしなれたる雀三ツ斗桶にとり入て銅こそげてくはせなどして云々江家次第二ノ廿三丁オ叙位條に若有レ誤者可レ磨レ之云々磨をコソケとよめり　桂川地藏記上廿一丁ウに有レ磨二人之頂一有レ顱ノウモコソグルレ有二撫レ人者一有二擯レ人者一云々此に撫字をコソグルとよめり

(四十七)襄荷蛇を除　宜禁本草上卷襄荷の條に人家種二白襄荷一碎レ蛇其性好レ陰在二木下一生者尤美とあり本草倭名第十八卷菜部に白襄荷一名覆葅赤也和名女加云々醫心方一の卷和名部にも見ゆ倭名抄園菜類部に馬琬食經云襄荷赤色者爲レ佳矣和名米加云々延喜式にも出たり

(四十八)蓬　本草倭名本草外藥部に蒿廬是蒿蓼間白毛廬也和名與毛岐乃和多云々醫心方一の卷亦同こは蓬の絮として莖に絮のとき瘤生ずる也宜禁本草上卷に艾葉主二婦人漏血一利二陰氣一使二人有レ子云々また實溫無レ毒壯レ陽助二水藏腰膝一暖二子宮一丹溪曰炙艾下行服艾上行多服致レ毒云々など見ゆ艾實は人に益あれば可レ服

(四十九)田實登滿の法　宜禁本草上卷廿九丁ウに春牛角上土收二置戶上一宜レ田云々これ田實を得の法也

(五十)蠶得レ利之法　同條に二月上壬日取レ土泥二屋四角一太宜レ蠶也云々此蠶の利を得る方也

(五十一)紙のキシヤウ繼　道三の切紙劑藥調進法則にキシヤウツギニナラヌヤウニト云心なり云々今も紙のきしやうつぎいふ詞也

(五十二)名詮自性の語あり道三切紙劑藥調進法則に右手へ逆に取て直に渡レ之トリナホスト云名詮也云々また大裏の紙を取出にはウヘヨリ取り候ウス紙ヲヘグヤウニト云名詮也云々など見ゆ頭書甲陽軍鑑七ノ十六丁ウ　鶴林玉露十八ノ十一丁オ用兵吉兆靜草子十七丁オに世にあるほどはいつまでも久しかるべきためしにはかれては松なうゐおきすみよしとこそいはふなれみやうせん自性なかゝうつろひやすきよの中にいはへばかなふ事

なるに
云々
(五十三)秩　容齋隨筆一の卷十年爲二一秩一條に白公詩云已開第七秩飽食仍二安眠一又云年開第七秩屈レ指幾多人是時年六十二元日詩也又一篇云行開第八秩可レ謂書二天年一注曰時俗謂二七十以上一爲レ開二第八秩一蓋以二十年一爲二一秩一云司馬溫公作慶二文潞公八十一會致語云歲歷行開九帙新亦用レ此也云々按江次第除目の條秩滿の注に增韻云秩職也官也云々性靈集に秩滿の字見ゆ發揮の說を考べし 類書品字箋以二十年一爲二一秩一

(五十四)牡丹を廿日草といふ說并牡丹の始　牡丹をはつか草といふは容齋隨筆二の卷唐重二牡丹一條に樂府有二牡丹芳一一篇三百四十七字絶道二花之妖艷一至レ有下遂使二王公與一卿士一游レ花冠蓋日相望花開花落二十日一城之人皆若レ狂之語上云々又牡丹の始は歐陽公牡丹釋名云牡丹初不レ載二文字一唐人如二沈宋元白之流一皆善詠レ花といへり西陽雜俎に牡丹の說あり可レ考歌にはふかみ草ともよめり 類書牡丹ノ始ノ「牛陶藥類稿四十三同四十六同三十一五雜俎十ノ廿二丁ウ下學集十九丁ウ野客叢書二ノ十丁ウ 七修二ノ廿九丁ウ

(五十五)噴嚔くさめ　新撰字鏡連字部に噴嚔波奈比留云々倭名抄鼻口類部に玉篇云嚔、丁計反噴レ鼻也和名波奈比流云々袖中抄廿の卷となりにはなひる條に「いてゝいかん人をとゝめんよしなきに隣の方に鼻もひぬかな」奧清曰古今俳諧歌也顯昭云はなひるは何事にもよからぬ事也年始にもはなひつればいはひ事をいひて祝ふ也されば人のものへいかんするはじめに隣の人のはなひんを聞てもくすしからん人は立かへるべき也毛詩には嚔云人曹レ我又願言則嚔四分律云時世尊咄諸比丘咒願言二長壽一時有二居士一咄乃禮二拜比丘一佛令下比丘咒願言中長壽上今按今俗正月元日若早旦嚔即稱曰二千秋萬歲急々如律令一是緣也何只在二元日一哉尋常に嚔レ之又万葉云奧清曰十一の卷に見ゆ「うちなげき鼻をそひつる劍太刀身にそふ妹か思ひけらしも」此歌は思ふ人こんとてはなひると見えたり又云同十一の卷に見ゆ「まゆねかきはなひ ひもとけまつらんやいつしか見んと思ふわか君」これも同心也奧義抄云はらへするにはなひるもいむ事也或物云人の事を思ひくはだつるにはなひつれば叶はずといへり云々古今集俳諧部宗祇注に鼻をひるは凶事侍れば行まじき呪に隣に鼻をひよかしと也云々榮雅抄に人をとゞめんよしなけんばいかにせん隣に鼻ひよかしと思へどそれさへひ

ぬと也常にもはなひる短命の相と云て世俗にはなひるに千万歲やなどいはふも凶事と知ての事也云々家傳にはなをひるを出行に嫌と世話にいへり云々拾芥抄上本卷諸頌部に嚔時頌クサメノトキノ事休息万命急々如律令クサメト云ハ是也云々徒然草四十七段に或人淸水へ參りけるに老たる尼の行つれたりけるが道すがらくさめ〳〵といひもてゆきければ尼御前なに事をかくはのたまふぞととひけれどもいらへもせず猶いひやまざりけるを度々とはれて打はらひ立てやゝはなひたる時かくまじなはねば死ぬる也と申せば養ひ君のひえの山にちごにておはしますがたゞ今もやはなひたまはんとおもへばかく申ぞかしといひけりありがたき心ざしなりけんかし云々貞德の戀草二の卷廿五丁に毛詩の注瑣碎錄漢書藝文志雜占李濟翁資暇集容齋隨筆など引て注せり簾中抄略頌部にはなひたるをりの誦休息万命急々如律令くさめなどいふは是にや云々按に「クサメ」とは鼻を颺(ヒル)時「クサメ」といふゆゑ也今俗「ハアクッショウ」といふは「ハアクサメ」の訛也「ハア」も發音也容齋隨筆四の卷に今人嘖嚔不レ止者必唾祝云有レ人說レ我婦人尤甚予按終風詩寤言不レ寐願言則嚔鄭氏箋云我其憂悼而不レ能レ寐女思レ我心如レ是我則嚔也今俗人嚔云人道レ我此古之遺語也乃知此風自レ古以來有レ之云々

(五十六)省字離字合字借字　容齋隨筆五の卷字省文の條に今人作字省文以レ禮爲レ礼以レ處爲レ処以レ與爲レ与凡章奏及程文書冊之類不二敢用一然其實皆說文本字也許叔重釋二礼字一云古文処字云止也得レ几而止或從處与字云賜予也与與同然則當下以二省文者一爲上レ正云々按に古事記に蜈蚣を吳公に作る多胡郡碑に養を羊に作る類本朝にも例おほかり室生を宀一醍醐を酉酉菩薩を艹菩提を艹など作るは釋氏の所爲也荷を何伎を支賓を宝なども書けり又釋を尺圖を孔子延喜を延木參議を三木など書は借字也米を八木松を十八公梅を木母など書は離字也神木を榊麻呂を麿山木を杣など書は合字也かゝる字古書におほき中字鏡、字鏡集などとにおほく載たり又解紛記大河內物語などに片假名を合字に作りて刀を卒ノタレを糹など書たり 類書省字報耕錄十五ノ二丁ウ

(五十七)無難の時畏べし　容齋隨筆六の卷畏二無難一條に聖人不レ畏二多難一而畏二無難一故曰惟有道之主能

持レ勝使ニ秦不ヲ幷ニ六國ニ二世未ニ亡隋不ヲ十ニ天下ニ服ヰ四夷ヒ煬帝不レ亡符堅不ニ平レ涼取レ蜀滅レ燕翟ヲ代則無ニ肥水之役ニ唐莊宗不ニ滅レ梁下ヲ蜀則無ニ嗣源之禍ニ李景不ニ取レ閩幷ヲ楚則無ニ淮南之失ニ云々按に勝て兜の緒をしめよといへる俗諺實に信すべし本朝にも北畠顯家新田義興今川義元などの類猛勢忽に敗亡せるは擧て數べからず士民孤獨の輩の處レ世もまたかくの如く一旦利德を得富を成すといへども心おこたり家業振はざれば破廢貧亡目前也愼レ旃々々

(五十八)勅旨田　延喜主税式上ニ丁(カ)に勅旨田云々爲ニ不輸租田ニ云々また(カ)ニ丁勅旨庄御稅勅旨繫ニ飼御馬ニ秣料勅旨御馬秣料などあり簾中抄位階の條に太上天皇諸司允一人爵一近代加階諸國掾一人目一人一分三人封二千戸勅旨千町奉らるゝこともありと云々

頭書 東寺文書抄十卷三丁ォ勅旨施入田トアリ別勅ニテ施入セラレ又ハ立カカル、田地ノ名也

(五十九)公　公ハ三公の稱にて卿以下の人にはいふまじき事なれど又尊稱に用る例あり容齋隨筆十五の卷呼レ君爲ニ爾汝ニ條に東坡云凡人相與號呼者貴レ之則曰レ公賤レ之則曰レ君云々と見ゆされど漢文に用る例にて本朝文粹續文粹性靈集などその外古書に某公と書るみな尊稱にて三公の公にあらず書紀にも老公(オキナ)など書たり

(六十)名歌に劣のかへしせず　名歌に劣のかへしせずといふももと詩話におこれるわざ也容齋隨筆十四の卷絶唱不レ可レ和の條あり可レ考

(六十一)義の字をもて物に名づく并入髪入歯　容齋隨筆八の卷人物以レ義爲レ名條に義戰義師義帝義倉義社義田義學義役義井義士義俠義姑義夫義婦義父義兒義兄弟義服義髻義禰義傾義子義漿義黑義酒義犬義烏義鷹義鷂等の名を擧て論へり此內義髻今のイレガミ也さては入齒を義齒といふべし入眼を義眼といはんは捧腹の一稱

(六十二)帖子　唐書選擧志八丁(カ)に明經者但記ニ帖括ニ又投レ牒自擧云々又九丁(カ)今試學者以ニ帖字ニ爲ニ精通ニ不レ窮ニ旨義ニ豈能知ニ遷怒貳過之道ニ乎云々按に帖括帖字ハ字の上を掩て前後の文に照らして暗知せしむる也學令に其試レ讀者每ニ千言ニ內試ニ一帖三言ニ云々義解に謂三言者三字也言唯千言之內帖ニ覆一處之三字ニ令ニ其闇讀ニ若其不レ滿ニ千言ニ者不ニ復在ニ試限ニ云々考課令義解に謂帖者安也言於ニ字上ニ安レ物暗讀令レ過

也云々など見ゆ六典通典通考にも出たれば他日引證すべし

頭書 容齋續筆十三の卷六丁ォ金花帖子の條可ニ考合ニ

(六十三)程限　唐六典一の卷尚書省左右司郎中の條に凡內外百司所レ受之事皆印ニ其發日ニ爲ニ之程限ニ一日受二日報其事速及送ニ囚徒ニ隨レ至即付」小事五日謂不レ須ニ檢覆ニ者」中事十日謂須檢ニ覆前案ニ及有レ所ニ勘問ニ者」大事二十日謂計ニ算大簿帳ニ及須ニ諮詢ニ者」獄案三十日謂徒已上辨定須ニ斷結ニ者」其急務者不レ與焉小事判每レ經ニ三人已下ニ者給ニ一日ニ四人已上給ニ二日ニ中事每レ經ニ一人ニ給ニ二日ニ大事各加ニ一日ニ內外諸司咸率レ此若有ニ事速及限內可レ了者ニ不レ在ニ此例ニ其文書受付日及訊ニ囚徒ニ並不レ在ニ程限ニ」凡尚書省施ニ行制敕ニ案成則給レ程以鈔之通ニ計符移關牒ニ二百紙已下限ニ二日ニ過レ此以往每ニ二百紙已上ニ加ニ二日ニ所レ加レ多者不レ過ニ五日ニ」若軍務急速者不レ出ニ其日ニ若諸州計奏達ニ京師ニ量ニ事之大小與ニ多少ニ以爲ニ之節ニ二十條以上二日陪レ之三日又陪レ之四日又陪レ之五日雖レ多不ニ是過ニ焉凡制敕施行京師諸司有ニ符移關牒ニ下ニ諸州ニ者必由ニ於都省ニ以遣レ之云々」唐書百官志一四丁(カ)省書省尚書令の條に凡授ニ內外百司之事ニ皆印ニ其發日ニ爲レ程一日受二日報諸州計奏達ニ東師ニ以ニ事大小多少ニ爲ニ之節ニ云々按に延喜主計式上十二丁(カ)已下倭名抄國郡部に上二日下一日など程限を記したり可ニ考合ニ

(六十四)朝散大夫　今諸侯に朝散大夫あり無役の從五位下の稱也唐書百官志一六丁(カ)に從五品上曰ニ朝請大夫ニ從五品下曰ニ朝散大夫ニとあり從五位下の唐名朝散大夫といふより取て無役の從五下の稱に用ひし也そは從四位下侍從の次に四品あり是も從四位の唐名なるを侍從を兼ざる人の稱に用るが如し四品ハ「シヒン」と唱べきを「シホン」といふは誤にて親王の位にまぎらはし

(六十五)封戸眞戸　封戸の事は令抄に注ありされど神封戸などに八幡大井は實封にやとおぼゆれど以外の神位はさもと聞えずこは封戸眞戸の別ありと見ゆ唐書百官志一八丁(カ)に凡封戸三丁以上爲レ率歲租三之一入ニ于朝廷ニ食ニ實封ニ者得ニ眞戸ニ分ニ食諸州ニ皇后諸王公主食邑皆課戸とあり可レ考

頭書 陔餘叢考十六ノ廿六丁ォ六典三戸ノ部ノ條

(六十六)番頭　番頭の字唐書百官志一九丁(カ)に凡勳官

九百人無二職任一者番二上於兵部一眡二遠近一爲二十二番一以二彊幹者一爲二番頭一とあり按に御旗本衆ニハバンガシラと唱へ見付番寺司などにはバントウと唱ふ商賈が奴を番頭(バントウ)といふは僭稱也

(六十七)功程長功中功短功　營繕令に凡計二功程一者四月五月六月七月爲二長功一布一常得二四功一二月三月八月九月爲二中功一一常得二五功一十月十一月十二月正月爲二短功一一常得二六功一云々義解に謂一常者一丈三尺得二五功一者其雖二功有一長短一而皆依レ中爲二定法一故律云乎二功庸一者計二一人一日一爲二布二尺六寸一凡餘條稱レ常皆准レ此但賦役令云正役之外須二留役一者滿二三十日一租調俱免彼唯依二日數一立レ法不レ依二長短之制一也云々按に中功一日に布二尺六寸にて五功に一丈三尺也これを一常といふ此一常を四五六七月は日永ければ長功とて四功にて取る也十一十二正月は日短ければ短功とて六功にて取る也二三八九月は中分なれば中功とて五功なる也長功は一日三尺二寸五分短功は一日二尺一寸六分六厘也夫役を勤る者正丁とて男廿一より六十までの間は一年に十日也其勤日の代りに布を出すを庸布といふ一日二尺六寸宛にて一年二丈六尺也こは賦役令にくはし延喜式には所々に見えたり唐書四十六百官志一廿右丁工部尚書の條に四月至二七月一爲二長功一二月三月八月九月爲二中功一十月至二正月一爲二短功一雇者日爲二絹三尺一云々同四十八百官志三丁廿九オ將作監丞の條に功有二長短一役有二輕重一自二四月一距二七月一爲二長功一二月三月八月九月爲二中功一自二十月一距二正月一爲二短功一云々唐六典七の卷工部の條に凡計二功程一者夏三月與二秋七月一爲二長功一冬三月與二春正月一爲二短功一春之二月三月秋之八月九月爲二中功一其役則依二戸部式一云々同廿三の卷將作監の條にも見ゆ

(六十八)書院　書院の名秋夜長物語に見ゆ唐書四十七百官志二八丁オ に光順門外亦置二書院一云々また麗正書院集賢殿書院などの名有今世は請客の間を書院といふ御書院番といへる職名もあり頭書宋人林景熙が霽山集四の卷六丁オに陶山翁竹書院記あり太閤記十六ノ十三丁ウに千宗易に書院の指圖など相談せられ云々太平記卅七ノ四丁ウ後太平記四十八丁オ同五ノ一丁ウ類聚名物考宮室部一之下卷

(六十九)馬のきつりやう　馬のきつりやうきつにのをかなかくぼれいりくれんとうの事徒然草に出て閑田耕筆三の卷卅一丁オ赤烏隨筆八十五段などに考あり唐書四十

七百官志二十三丁オ に尚乘局奉御二人直長十人掌二內外閑廐之馬一左右六閑一曰二飛黃一二曰二吉良一云々とあり此吉良はよしありてきこゆ

(七十)賦(フ)(テラ)　啄木鳥　賦の字を新撰字鏡などに天良不又は天良波須などよめりこは取の義にて止留天良(トルテラ)通音也賦稅の賦も上より民に取物なれば此賦字讀て天良(テラ)不とはよめる也啄木鳥(クヒバシ)を「テラツヽキ」といふも虫を取んとて啄もて木をツヽキヤブル物なればいへる名と見ゆ神名帳伊豆國賀茂郡氐良(テラノ)命神社ありよしある名にや

(七十一)神封戸　延喜四時祭式上廿六丁ウに其封物者割二下總常陸兩國香取鹿島二神封調布五百端香取神封二百端鹿島神封三百庸布三百段商布六百段麻六百斤已上鹿島神封紙六百張香取神封送二神祇官一云々又廿七丁オ仕丁二人常陸鹿島神封仕丁云々又其衣服云々並用二神封物一云々此外神位神封の事古書所見おほし續日本紀に八幡大菩薩の神位封戸の事あり按に其授位に隨て實に封戸位田を賜れるもあるべし又有名無實もあるべし歷史に見えたる神位にとゝ〳〵く位田を給らんには日本國を盡すとも不足なるべければ必其法ありて位田封戸を減省せられしなるべし

(七十二)神社を古曾(コソ)と云并古佐(コサ)　こさふく杜(モリ)　神社を古曾といふは延木四時祭式下十七丁ウに攝津國八箇社の中下照比賣社一處或號二比賣許曾社一云々又廿丁オ紀伊國四箇社の中伊太祁曾(イタキソ)社一座云々神名式上廿丁ウ河內國澁川郡波牟許曾神社云々又廿一丁オ河內國丹比郡阿麻(アマ)美許曾神社云々又廿四丁ウ攝津國東生郡比賣許曾神社云々又廿五丁オ伊勢三重郡小許曾(コソ)神社云々神名式下三丁ウ近江淺井郡上許曾神社云々又四十八丁ウ出雲秋鹿郡許曾志神社云々出雲風土記廿六丁オに秋鹿郡許曾志社云々以上十一所並在二神祇官一云々天武紀上十三丁オ社戸臣大口云々新撰姓氏錄上八丁オ攝津國皇別に許曾倍臣云云圓光大師九卷傳一に美作國稻岡ノ北ノ莊栃社云云など許曾とも祁曾(キソ)ともいふ詞あり巨勢(コセ)といへる地名もかよひて聞ゆ比賣許曾は下照姬の社にて姬社(ヒメコソ)の義也伊太祁曾は和名抄に紀伊國名草郡伊太杵曾神戸(イタキソノカンベ)あり旦來(イタコ)鄕日前神戸須佐(スサ)神戸などに並たり旦來(イタコ)を「イタコ」と訓ハ「アシタコ」の「アシ」の約「イ」なればも常陸鹿島に潮宮(イタノミヤ)といへる小祠あり又行方郡板來(イタコ)鄕を今ハ潮來(イタコ)と書けりこは朝來の誤ならんと門人北條時鄰が鹿島志にいへり續日本紀四の卷

十三丁ウ）に紀伊國名草郡旦來（イタコノ）郷と有さて伊太祁曾の伊太は地名にて伊都（イト）などいへるもおなじ心にや近江伊香郡意太（オホ）神社もよしある名也祁曾は社也汝牟許曾（ムコソ）は蛇社（コソ）にや近江伊香郡波彌神社丹後丹波郡波彌神社などみな通音にて蛇（ハヽ）の義ときこゆ波美（ハヽ）ハ閇美（ヘヽ）とも通ひて物を取食（トリクラ）虫なればいへり反鼻（アマヽ）の音ぞとおもふべからす阿麻美許曾はアマヒ社にや古事記上に天神御子之御壽者木花之阿摩比能微坐（ハナノアマヒノミマシナン）云々神代紀下に如ニ木華之移落（アマヒノ）一云々一云如ニ木華之俄遷轉（アマヒノ）一云々などある阿摩比に通へり小許曾は小社也上許曾は上社なり許曾志ハ社下（コソシモ）にや下を志（シ）とのみいふは高倉下（タカクラシ）なご例あり社戸（コソベ）は社邊也然て東國の方言に田地の日光（ヒカゲ）をさしおほふ樹木を古佐（コサ）といひそれを刈拂（カリハラフ）を古佐刈（コサガリ）といへり夫木抄秋部四十四丁オに「ささふかはくもりもそするみちのくのえそには見せし秋の夜の月」とよめるも蝦夷人が口より雾の如き物を吹出して空を暗くすといへり是幻術又海に入て後浮あがりて潮をふくをいふともいへり東國にて樹陰をささといふ又ささは胡笳也ともいへり蒙求の鄭公霧市も近しと倭訓栞九の卷十七丁右に見ゆ藻鹽草七の卷夷部にささとは古座と書けり是ハえそがかたきをもまよはし日をもくもらさんと思ふ時つのぶえのやうなる物をふけば霧のやうなる物おこりて空くらく成也それによりてかくよめると云々呉竹集七の卷古部にささとは笳と書吹物也えそがふく物也蝦夷が敵をまよはし日をくもらかさんと思ふ時つのぶえのやうなる物をふけば霧に似たる物降て空くらくなると也一說海に入て浮あがり汐をふけばそのいき霧のごとくにして曇と也「ささ吹はくもりもそする云々」輿清曰此歌夫木秋四を出處にて藻汐草七の夷部にも引たり爲家の歌也最上德内蝦夷が吹ささ笛の「秋の夜やえそかささふく空の月」紹巴云々などの胡沙ふくも籠氣の義にて古は古女也佐は志の通音氣の事也氣を志といふは時雨も氣暗也嵐も荒氣也虹も丹氣也咳も息放也されば曇氣を籠氣（クモルキ）といふより陰翳（カゲ）の名にもいひ轉せる也社地は杜（モリ）にて樹陰（コカゲ）の處なれば古曾（コソ）といへるは籠氣の通音也「モリ」と云は室（モロ）の通音にや古事記雄略の段御歌に美母呂（モロ）能伊都加斯賀母登（シガモト）とある美母呂は神社にて伊都賀斯（イツカシ）ハ齋津（イツカシ）白檮也神社の木なれバ忌憚（ハヾカ）るよしにて齋津といへり

（七十三）鑽火　今世供神の物に必火を鑽かくるは鑽ㇾ燧改ㇾ火理なればさもあるべしされど烹煎炙炊の火熟の食物に限るべきを菜菓鮮魚の生物にはよしなしこは必淨水に洗て供すべし

松屋筆記卷之六十五

東都　平輿清文儒稿

（一）六門衞士駕輿丁御車添　京都に六門といへる職名あり禁裏の門守也下立賣中立賣上立賣の三門寺町の三門合せて六門の門守なればさいふ也古の衞門の類なれど名目も勤仕もいたくたがへる也衞士は京都の町人ども其株を買て事とある時其職を勤仕する也駕輿丁も町人賣買の株になれり御車添の株は高玄米五十石にて凡金八百兩許也といへり 頭書 今ノ京ノ六門名給御門（一向以上六門也當時年中行事後附ニ見ユ）今出川中立賣下立賣堺町南一丁ス同十三丁ス

（二）物の變形　江南の橘江北に移せば枳となるといふはさるとにて京都下賀茂の末社に柊大明神あり大願成就の報賽に柊を殖奉る也柊なければ枹木をもて柊と號してうゝるに月日經て後必柊に變ず江戸淺草觀音に鶏を納るに日をふれば雌必雄に變ずこれらは土性によらず神佛の奇特にて變形せる也 頭書 列子天瑞篇上卷十（三）百日咳嗽の妙藥　小兒「クツメキ」といふ病にあ

へば必百日許痰咳をくるしむ如何なる醫藥祈禱も驗なきもの也これに南天竺の實に砂糖を加て煎服せしむれば速に效あり南天實冬を經たる物尤よし

(四)痰咳の妙藥　痰嗽強して療禱術盡たるに梫南天葉紫蘇葉の陰干(カゲボシ)を當分に合せ煎じ湯茶のごとく頻に用れば必驗あり或は天瓜(カラスウリ)の實を多く煎じつめてねり藥のやうになりたるを頻に用るもよしされど初一年は奇効あり次の年はさまでにあらず三年目にはいと效うすし四年目に至ては更に能なしヘチマの水を煎じつめて用るも亦右のごとく自然に効薄くなりて詮なし唯梫南天紫蘇の三種の葉の蔭干の煎湯に及ものなし

(五)小兒痰咳の藥　小兒痰咳の藥に高麗人參胡桃を煎湯にし用れば妙也高麗人參は朝鮮人參也今は日光人參に代てよし

(六)痰咳の藥　痰咳強き人生姜三片胡桃三箇白湯三口許を夜寢んとする時調て先生姜一片胡桃一箇を食湯一口呑了て又生姜一片胡桃一箇を食湯一口呑了て又如ㇾ前三度に盡すこれ奇方也胡桃は澁皮をさらず燒て丸拔にしたる儘を用る也東醫寶鑑嗽の條に似たる方あり

(七)瘰疬の妙藥　瘰疬とて指痛たへがたきに指を熱湯にさし入て熱を覺ゆる時引出しさて火焦の瘡治するを捷治とす

(八)喘息の妙藥　喘息の妙藥は阿蘭陀藥の万具(マグヂシ)薬(ヤ)也に砂糖を加て用ふるが妙也此「マグヂシヤ」深川海邊大工町長谷川某が家にて賣れり

(九)癰瘇の妙藥　癰瘇の妙藥は菊の葉の絞汁葉なき時は根を掘て絞汁を取り頻に用れば瀉下して毒解し平癒する也又方蛭飼とて蛭を取り瘇處に少し疵を附て蛭を其處に置き吸はしむれば毒血悉く盡て平愈す但疵付ざれば蛭吸付ずこれ古の蛭飼の方也又方犬山椒(ワラ)七年味噌古雪踏の皮三味黒燒にし酢にてときて傳れば膿汁頻に出て愈る也

(十)噎膈の病療方　噎膈病に食を與るに陳糜米を粥にして少宛用ひ漸々益て用れば遂には治る也初より多く用れば必噎すゆゑせんなし陳糜米は七年半以上を佳とす

(十一)腫氣通藥　脚氣腫氣ありて小便不ㇾ通には「狐ザヽラ」と云草を煎湯にし頻に用ふれば奇効あり此草戸田の河原などにおほし藥舖にてもその干たるを賣る也

(十二)小女毛與(モヨ)　余が小女毛與は文政八年乙酉九月念七日に出生せり同十二年の秋より琴を母良久(ラク)女に習ひてその意に通ず十一月廿五日瀧田座頭に學び翌年寅六月初許を受く實に年六歲也又手習をよくせり其利根大人も及はざる事おほし頃日琅琊代酔編を讀に十六の卷に前身後身の說を載す後漢蔡邕は張衡が後身にて才貌甚相類し晉羊祜は鄒女李氏が後身にて金環の在處を知れり毛與兒が容貌次郎清年に相肖て其音聲擧動但清年が再生せるかと疑はる清年は文政七年甲申閏八月廿七日に年十八歲にて病死せり毛與が母胎にやどれる時を推(オシ)かぞふるに同年十一月廿七日なるべし閏八月廿七日より八十七日にあたれる夜母懷妊し翌年酉九月は前年の閏八月の周回にて十箇月にて出生せる也又清年は卯年正月の誕生にて酉を七ッ目とす毛與兒は酉年の誕生にて卯を七ッ目とす余も又天明三癸卯年三月十七日の出生也かたゝよしありて毛與女は必次郎清年が後身なることをしれり顧況晉叔が子再生して子となれるよし谷響續集四の卷に酉陽雜俎雞肋編などに引ていへるを見ても感涙とどめがたしされど文海披抄六の卷のにろうじたるを見れば謝肇淛に恥事なきにしもあらず 頭書 檜園八の卷報緣部にも前身後身の說おほし傳灯錄高耐傳にはいとおほし法苑珠林十訓抄二ノ十一丁ヲ有國は伴善男が後身

(十三)明堂　尙書帝命驗古微書卷三中 に 帝者承ㇾ天立ㇾ五府ㇾ以尊ㇾ天重象也五府五帝之廟 蒼曰ニ靈府一赤曰ニ文祖一黄曰ニ神斗一白曰ニ顯紀一黑曰ニ玄矩一唐虞謂ニ之五府一夏謂ニ之世室一殷謂ニ之重屋一周謂ニ之明堂一皆祀ニ五帝一之所也云々注に委く見えたり春秋元命苞古微書卷七 敷ㇾ之 に 心三星五度有ニ天子明堂布政之宮一云々春秋文曜鉤古微書卷九 叙ㇾ之に房心天帝之明堂布政之所ㇾ出也云々禮含文嘉古微書卷十七 敷ㇾ之に明堂者八窗四闥通ニ八卦之氣一布ㇾ政之宮在ニ國之陽一面三十西面十二ニ法ニ十二月一也云々尙委く見ゆ圖 明堂の事已に抄出せり令序に注すべければわづらはしく引出たる也 頭書 蓬窓日錄五の卷事紀一に明堂所ㇾ以祀ニ上帝一鑾輿所ㇾ以觀ニ天文一云々 魏志鍾繇傳 三才圖會宮室一ノ八丁ヲ 淮南本經訓十二丁ウ

(十四)赤雀含書　懷風藻大津皇子聯句 に 赤雀含ㇾ書時不ㇾ至潛龍勿ㇾ用未ニ安寢一云々尙書帝命驗古微書三 敷ㇾ之に季秋之月甲子赤爵銜ニ丹書一入ㇾ鄴止ニ昌戸一云々尙書中候古微書四 叙ㇾ之に 周文王爲ニ西伯一季秋之月甲子赤爵銜ニ丹

書ニ入ニ鄧部ニ止ニ于昌戶ニ乃拜稽首受レ最最要言也曰姬昌蒼帝子亡レ殷者紂也云々頭書赤雀銜丹書ニ革曆勘文ニ多ク引用セリ

(十五)九九八十一　春秋元命苞古徵書卷六收之に命者天之令也所レ受ニ于帝ニ行正不レ過レ得ニ壽命ニ正命也起ニ九九八十一ニ帝天帝也八十一陽氣相乘之極云々又同上陽成ニ于三ニ列ニ于七ニ三七二十一故每州二百一十國也云々又古徵書七收之周天九九八十一萬里云々按に九九の事六十四の卷第十二段にいへり可ニ考合ニ頭書以呂波字類抄左ノ部雜物門算ノ條野客叢書七ノ十五丁ウ十六丁オ九九の事は折計と云べし

(十六)太平　尚書中候古徵書四收之　孫瑴が按に兎園策註堯時三年耕餘ニ一年之食ニ謂ニ之升平ニ九年耕餘ニ三年食ニ謂ニ之登平ニ二十年耕餘ニ七年食ニ謂ニ之太平ニ云々升平太平等の字を用るに心すべし

(十七)元年　春秋元命苞古徵書六收之に黃帝受レ圖立ニ五始ニ元者氣之始春者四時之始王者受命之始正月者政敎之始公即位者一國之始元年者何元宜レ爲レ一謂ニ之元ニ何曰君之始年也杜預傳注云凡人君即位欲ニ其體レ元以居レ正　○元者端也氣泉注云元之始ニ如ニ水之有レ泉泉流之原無レ形以起有レ形以分寫レ之不レ見蘊之不レ聞　○春秋以ニ元之深ニ正ニ天之端ニ以ニ天之端ニ正ニ王者之政ニ○王不レ上奉ニ天文ニ以立ニ號則道術無レ原故先陳レ春後言レ王天不レ深ニ正其元ニ則不レ能レ成ニ其化ニ故先起レ元然後陳レ春矣云々孫瑴按に元大也命者理之隱深也苞言ニ乎其羅絡ニ也万象千名靡レ不レ括也然主以ニ春秋立元之意ニ爲ニ之履端ニ云云春秋繁露說惟聖人能屬ニ萬物于一ニ而繫ニ之元ニ也是以春秋變レ一謂ニ之元ニ元猶レ原也其義以隨ニ天地終始ニ也故元者爲ニ萬物之本ニ而人之元在レ焉安在之乃存ニ乎天地ニ之故人雖レ生ニ天氣ニ及奉ニ天氣ニ者上不レ得レ與ニ天元本天元命ニ而違ニ其所ニ爲也故春正月者承ニ天地之所爲ニ也繼ニ天之所レ違而終也云々

(十八)歲　春秋元命苞に歲之爲レ言遂也三年一閏以起レ紀也遂出也出行ニ事于所レ值レ辰也冬至百八十日春夏成夏至百八十日秋冬成合三百六十日歲數舉舉猶レ備也陽氣數極ニ于三ニ故時別ニ三月ニ陽數極ニ于九ニ故三月一時九十日云々

(十九)白狐非ニ瑞物ニ　今俗白狐を瑞物とし九尾狐を妖物とするは誤也九尾狐の吉瑞なることは延喜式にも見え漢籍の所見おほかるは已に六十四の卷にいへるがごとし古徵書十一春秋潛潭巴に白狐至國名利不レ至下驕恣云々とありて白狐は靈瑞の物にあらず頭書九尾狐山海經九ノ二丁文選六ノ卅七丁ウ

(廿)粟神麥神黍神荳神井諸星神　古徵書十二春秋佐助期に粟神名許給姓庸夫麥神名福習黍神名份倭蘭郝荳神名靈殖姓藥云々又星神の名おほく引注せり諸神記に引注べき說也

(廿一)古學の神道　世の神道者流さま〴〵なる中ト部兼倶は弘法傳敎の兩部習合によりて潤色せる也忌部正道はたおなじ一條禪閤北畠准后も儒佛の域を免るゝとあたはず唯一と稱して佛を憎がほなるも實は同臭を避ざる也山崎垂加が流は儒に據て佛を排し本居宣長は裏に老莊をおもはべ表には國書の中己が助と成べき說を扳出て一家を立儒佛及兩部唯一の神道を排せし也古來神道の名ありて古語拾遺儀式帳神祇式などは神の御事をむねと記したれど唯祭敬の禮のみにて儒佛のごとき風化風敎の道にあらず今の古學神道者宣長を尊信し偏屈強情大に風俗を妨るあり又万葉風の歌を詠出るは詩經の詩を作り出る類にて一笑に堪たり古徵書十二の卷春秋握誠圖に漢賊臣名孫登大形小口長七尺九寸巧用レ法多ニ技方ニ詩書不レ用賢人杜レ口とあり孫登が傳晉書に見えたりかゝる風の神道者まのあたり聞えたれば世人必欺るゝとなかれ頭書參天臺記五ノ四十九オ神道

(廿二)福德の年號　青木敦書が冬夜雜錄に相州鎌倉鶴岡八幡ニコレアル鶴岡座不冷所(サヽサヾドコロ)鎌倉志云座不冷所(サヽサヾ)ハ回廊ノ東ノ方ニアリ天下安全ノ御祈願所ニテ十二坊輪番ニ一晝夜ツヽ佛經チ讀誦スルユヘ座不冷(サヽサヾ)ノ行法ト名ヅク或ハ云ク十二坊一時ツヽ勤ルナリ座不冷(サヽサヾ)所(ザフレイ)トモ云の著到ノ軸ニ福德二年正月一日ト彫テアリ其文左ノゴトシ同所光明寺ニモ祈禱ノ額ノ裏ニ福德ノ年號アリテ後土御門院ノ勅筆ト云

聖觀音供
不動供
福德二年正月一日

我國福德ノ年號ナケレモ後土御門院ノ勅筆ト云ハ福德ノ年號暫ク用ヒラレ改年アリタレモ應仁兵亂ノ時ユヘ史官失シテ書セザルニヤサテ着到ハ南都興福寺ニコレアル往來ト(往來ハ對客夜話ニ載)同ジコト、見ユ云々

(廿三)物價　同書我國天福コノカタ錢鑄ラレズ建武元年乾坤通寶錢ヲ鑄レシカモ兵亂アリシユヘ鑄ラルルコト少ク天下ニ通行セズトミヘタリ乾坤通寶ノコトハ見陽漫錄ニノス

コレヨリ天下錢少キニヨリテ西土歷代ノ錢ヲ用イラル室町殿ノ比ヨリ西土歷代ノ錢ヲ精錢ト云惡錢アルニヨリテ精錢ト云關東ニテハコレヲ京錢京錢ハ草廬雜談ニノス下云關東ハ應永十年ヨリ永樂錢イヨイヨ多シ京室町頭ニ藏ムル織田殿ノ書物ニ委ハ草廬雜談ニノス此書物ノ寫先年精錢トアリ官ヘアゲルナリ天正二十年豐臣秀次ノ次船ノ朱印ニモ一文遣ノ精錢トアリ此朱印ハ奉使小錄ニノス咸寶錄ニ云ク咸寶錄ノ文ハ委ク經濟錄要ニ載ス日本用ニ中古錢一千文價銀四兩ト咸寶錄ハ明ノ書ナレバ室町殿ノ末ヨリ惡錢甚ダ多ク精錢ノ價ヒ甚ダ貴キヲ聞テ千文ノ價四兩ト書シト見ヘタリ我國西土ノ錢ヲ使シコト明ナリ東鑑ニ弘長三年用ニ切錢ニ事可ニ停止ニ之事アレバ建長ノ比モ惡錢アリテ九曆ニヨレバ天德中ニ鉛錢鑄ラレシトミヘタリ九曆ノ文ハ一夕話ニノス官錢ハ甚ダ貴キコト知ベシ憶ニ正銀一匁ニ官錢百文ニ過ザルベシ續日本紀ニ云ク和銅四年以ニ穀六升一當ニ錢一文一令ム百姓交關各得ム其利ト室町殿日記ニ切米兵庫ノ賣買一石ニ付六匁三分ノ由トアリ室町殿日記ノ文ハコレニテ觀レハ和銅ヨリ後段々ニ米貴シトミユ和銅ノ穀ハ籾米ナルベケレバ五合摺ニシテ六升ハ三升ナリ和銅四年ヨリ建長五年マデ五百八十四年建長五年ヨリ室町殿マデ大抵百三十年ニ中ルナレバ室町殿日記年號ナコレニテ推量ルニ建長ノ比大抵米一石今ノ弁一正銀五匁ニ過ベカラズ慶長ノ前ハ正銀ノ通用ナリ正銀一匁錢百文ニ當リ錢百文米二斗ニアタレリ此價ヲ以テ考ルコト左ノ如シ續文獻通考ニ云ク洪武十八年令ニ兩浙及京畿官田凡折ニ收稅糧ニ鈔每ニ五貫ニ准ニ米一石ニ絹每ニ匹ニ准ニ米一石二斗ニ金每ニ兩准ニ米十石ニ銀每□准ニ米二石ニ棉布每ニ匹ニ准ニ米一石ニ苧布每ニ匹准ニ米七斗ト明ノ升國々同ジカラザレトモ大抵明ノ一升今ノ升五合ニシテ明ノ一石ハ今ノ升五斗ニアタル建長五年ハ洪武十八年ヨリ百三十二年前ナレトモ我國ハ米貴ケレバ正銀五匁米一石ニ當テ大違アルマジ頭書錢九十六文百ノ事名物六帖器財箋二ノ卅四丁ヲ經濟錄要前集ノ五錢ノ口指地錢同本錢東寺文書抄四ノ卅九丁ウ

（廿四）京目　同書ニ由木左衞門ノ書ニテ見レバ古ヘハ秤ニ京目田舍目アルコトイヨ〳〵明カ也其文左ノ如シ

天正六年戊寅三月十七日　北條陸奥守平氏照內　由木左衞門尉景盛

拜遣高野山龍光院之內宗忍房

二親爲ニ成佛ニ高野山ニ月牌奉ニ納之ニ但黃金貳兩京目

國宗刀　長サ　二尺三寸

サテ天正十六年大佛大判鑄ル、ナレバコノ比ハ小判モナキニヤ有ベケレトモ東國マデハ行ハレザルニヤ、、、

(廿七)中城　同書ニ客問テ云ク天正ノ比ニハ江戸ニ(云傳フ)城三所ニアリトイフ信ナルニヤ答テ云ク先年武州多摩郡ヨリ出セル天正四年三月晦日ノ書ニテミレバ左モアルベシ其文左ノ如シ

江戸中城塀之事

四間　阿佐ヶ谷

右江戸中城四間當ヅヽ、請取ヒ自今以後定置者也依レ之掟條々

一大風吹散時者島津圭水小野兵庫太田四郎兵衛三人觸次第修覆可レ致之事(全文長キ故ニ略ス)

サテ今モ西久保ノ土トリ場ヲ城山ト云ヘバ三所ニモアルナルベシ

(廿八)賜ニ一字一　同書ニ客問テ云ク臣ヘ一字ヲ賜トキ如何カキテ與ルニヤ答テ云ク先年甲州ヨリ出セル書ニ一字ヲ賜トキノ書トミエルアリ(アリ)其文左ノ如シ

實名君好

天正四年丙子

七月六日　信君判

コレハ武田信君ト云ヘリ(頭書)(甲陽軍鑑九上一丁ウ　體源抄十一末六十八丁ウ　三ノ下卷ニモ式見ユ)

(廿九)銀劍　同書に客問テ云ク銀劍ト云ハイカナル劍ニヤ答テ云ク和州多武峯ニアル白鞘ノ九寸五分ニ銀劍ト書テアレバ銀劔ハ此事ナリト或人云リ

(卅)三白酒　同書ニ客問テ云ク諸白ハ如何書テ西土ヘ通ズベヤキ答テ云ク四部稿ニ三白酒アリテ米白麴白水白ニヨリテ名ヅク我國ノ諸白モ三白ナレドモ水ヲ云ハズシテ諸白ト云ハ三白酒ト書テ宜シ

(卅一)沒日滅日　青木敦書が秋夜談に客問テ云ク沒日滅日ハイカナル日ニヤ答テ云ク四書物鑑引ニ曆例ニ曰沒日者天與レ日會而日不レ及ニ於天一餘分是曰ニ氣盈一又曰レ沒也滅日者日與レ月會而月不レ及ニ於日一餘分是名ニ朔虛一又曰レ滅也皆以レ非ニ正日一故聖人不レ用レ之云々

(卅二)櫻　同書に客問テ云ク西土ニハ櫻ナク朝鮮ニハ櫻アリト云信ナルニヤ答テ云ク西土ノ書ニハ櫻ミヘズ去ル戊辰ノ年朝鮮人ニ尋シニ櫻アリテホンナモド云ト云ヘリ(頭書)(櫻ノ始ハ御鎭座傳記に見ユ　櫻チ花ト云丁梅花無盡藏六ノ十五丁ウ)

(卅三)蟋蟀草　客問テ云クスモウトリ草唐畫ニアレドモ漢名何ト云ニヤ答テ云漢名詳カナラザルニ因テ通詞ヲ以テ清人ニ尋シニ雅名コレナク俗ニ蟋蟀草ト云ト云ヘリ

(卅四)ん　同書ニ客問テ云ク伊呂波ノんノ字ハ何ノ略ナルニヤ答テ云ク西土ニハ伊呂波ノんノ字ノ如ク一字ヲ以テ何ノ字ノアトヘツギテモウントハヂテ讀コト絶テナシ按ズルニ阿蘭陀文字二十五字ノ内ノロ(エンヂ)(エン十八字ノ名ナリ)ノ字ナニノ字ノアトヘツキテモウトハヂテ讀(ヨン)バ伊呂波ノんノ字ハロノ字ノ略ナルコト決セリサテ弘法大師入唐ノ時歐羅巴ノ文字ヲ習歸リテ伊呂波ヲ作リシトミヘタリ伊呂波ノ文字ツギ樣モ歐羅巴ノ法ニ依レルナリ呂連山ノ云々(テ堅ニツギタルナリサテ伊呂波ノ)

字ノhノ字ナリト左モアルベシ

(卅五)泥金畫漆　客問テ云ク我國ノ蒔繪ヨロシクシテ西土ヘ傳ト云ハ信ナルニヤ答テ云ク東西洋考引ニ兩山墨談ニ曰泥金畫漆之法古亦無レ有宣德時遣ニ漆工一至ニ倭國一傳ニ其法一ト我國ノ蒔繪スグレタルコト知ベシ

(卅六)德政　同書客問テ云ク我國德政ノ始ハ何比ナルニヤ答テ云クサテ西土ノ德政五代ノ晋ヨリ始ルト見ヘタリ我國德政ノコトアリ其文左ノ如シ

德政相論之事

近年の德政は先例に替て兵具をこしらへかいを吹鐘をつき勢をそつして倉を責る事只山賊海賊にひとし君の御傍に王御一代に一度づゝ御年忌に六十六ケ國の德政をやらせ給ひし當時は內裏の宣旨にて三年の內の借物をことごとく成べからす取べからずといふ御綸旨にて德政をやり給けるは今時の德はすくめ往生にてとくにて只盜人にも似たり堅く御成敗を可レ被レ加

コレニテミレバ我國ノ正史ニ載ザレドモ德政ノ始ハ久シキコトヽミヘタリサテ小松內大臣敎訓狀熟讀スルニ敎訓ノ體ニアラズ小松內大臣ヨリ後ノ事ヲモ載タレバ小松內大臣ノ作ニアラズ後人ソノ名ヲ借タルコト明ナリシカレドモ古雅ニシテ近世ノ書ニアラズソノ書ニ京鎌倉ノ海道ト云且平氏ヘ諂ヘバ北條氏ノ時ノ書ト見ユレドモ刑法ヲ說モノ貞永式目ト合ザレバ貞永式目サダマラザル前ノ書ニシテ寡婦ニ甚諂タルコトアレバ賴經將軍ノ代ニ位禪尼政子政ヲ聽レシ時ノ書ナランカ(頭書)(室町日記一ノ十丁ウ十一丁ウ同三ノ十五丁ウ　吾妻鏡五ノ二丁オ)

(卅七)蔓椒　同書ニ客問テ云ク日本紀ニ蔓椒此云ニ保曾紀一トアリテ今ナニト云木ニヤ答テ云ク信州濃州ニ木ニシテ蔓ノ如ク葉山椒ノ葉ニ似テ秋ニ至テ五

味子ノ大サノ赤實ヲ結ビ小兒實ヲ食フ土人實ヲ取テ油トナシ保曾紀ト云アリコレ古ノ蔓椒ナルコト疑ナキガ如シトイヘドモ常世蟲アルコトヲ詳ニセザレバ

(卅八)煙架　同書ニ客問テ云ク煙架ハ何ノ事ニヤ答テ云ク中山傳信錄ニ煙架圖アリテ今ノ煙草盆ナリ

(卅九)夷錢　奉使小錄ニ今アル夷錢ハ通用ノモノニアラザル樣ナレドモ武州秩父郡ヨリイダセル古書ニテミレバ夷錢モ通行ノ錢トミヘタリ其文左ノ如シ

四立之
以上

右代物如二前々一ゑびす錢村鄕中大小人へ借候□算用事は一ケ月ニ五文子十ケ月定五わり以算用二可一レ申上一公方錢鄕□如何樣子細□つれ候事有間敷候懸落者有レ之者鄕中出合弁ニ本利共ニ可レ申者也仍如レ件

甲戌
八月十七日　朱印見ヘガタシ北條氏ノ印ナルベシ

上吉田村代官百姓中

(四十)倍臣受領　同書に同郡ヨリ出セル古書ニテミレバ天正ノ比ノ倍臣頭書倍臣ノ字面左傳史記齊太公世家漢書禮樂志ハ下ス受領ハソノ主ヨリ受領セシトミヘタリ其文左ノ如シ

受領
右被レ任二山城守一者也仍如レ件
天正十六戊子年　朱印見ヘガタシ
正月三日
齋藤山城守殿

(四十一)水有二輕重一　青木敦書が經濟纂要前集六の卷に世傳水之好者比二它水一升斗同而銖兩多故宜州漏水有レ秤爲レ此也演繁頭書水味ヲ別ツ一能改齋漫錄十四

(四十二)虛封實封　宋治平二月四日傷寒論施行勅符に食邑一千三百戶賜紫金魚袋臣范鎭食邑三千戶食實封八百戶臣趙槩食邑二千八百戶食實封八百戶臣歐陽脩食邑七千一百戶食實封三千八百戶臣韓琦食邑三百戶賜紫金魚袋臣胡宗愈食邑一千八百戶實封二百戶賜紫金魚袋王存食邑一千一百戶食實封二百戶賜紫金魚袋臣劉摯食邑四千戶食實封九百戶臣孫固食邑一千六百戶食實

封五百戶臣范純仁食邑二千九百戶食實封六百戶臣呂大防ナド見ユ食實封ヲイハザルハ虛封ナキモノナルベシ頭書封戶ノ下關內侯ハ虛封也魏ノ黃初ノ間ニ始ル事物紀原四ノ十五丁ウ實戶トモ通ハシ云ヘリ唐書百十卷十四丁ウ十六丁オウ十七丁オウ又唐書百九二丁オには實封戶二百と書たり　制度通五卷俸祿事條に唐宋ノ時ニハ食實封ト云フアリ或ハ租調ヲアタヘ又ハ虛名ニテ實ナシ明ハソノ制ヲ改テ食封ノ名ナクタダ位ノ高下ニヨリテ祿米ヲ與ヘラル也云々　封戶ノ下制度通五ノ廿六丁オ又卅六丁オ同ウ又卅九丁ウ事物紀原四ノ十五丁オ實封轜耕錄十九ノ八丁オ隋書列傳七李德林傳十五丁ウ續日本紀六ノ八丁オに食封田租全給二封主一自レ此始矣　參天祭記六ノ四十一丁ウ四十四丁オ　鶴林玉露二ノ十九丁六虛封也實ノ食封也

同書七の卷に凡加二食邑一宰相千戶實封四百戶餘降麻官食邑七百戶實封三百戶直學士以上食邑五百戶實封二百戶舍人待制散尙書至二少卿監一以上食邑三百戶實封一百戶凡食邑三百戶封二縣開國男一五百戶封レ子七百戶封レ伯千戶封二郡侯一二千戶封レ公千五百以上始如二實封一右退朝錄

(四十三)夕字　同後集四の卷に文人奇士多用二古字一官府文移通二用今字一市井下流則用二省訛俗書一如二錢作レ戔孳作レ孜盡作レ尽是也續文獻通考鈔頭書示兒編廿一中州金石記卷四淮源廟鐵鐘識曰慶曆三年二月立正書在二綱柏一云々捨手人名云々曰(舉阮也)錢字作レ戔已見二于此一或云泉字草書云々

(四十四)除目　同書に御筆除二付外一行者謂二之除目一經二宰相奏擬一而行者謂二之除目一胡三省通鑑注

(四十五)眉止自女　續教訓抄十一の卷舞壹越雙調黃鐘の條に堀川左大臣入道殿ノ說云酒淸司幷遍鼻胡德樂ノ破ハ本ヨリ師說ナケレドモ吹レ之眉戶自女酒ヲ飮ベテトイフ催馬樂ニ音振タガフコトナシ彼歌ヲ吹ナリトゾ仰セラレケル六條入道運道モ催馬樂ニ眉戶自女ト云歌ヲ吹ニツユタガハズトイヘリ「イニシヘノマユトシメニモアラヂトモキミハミマクサトリテカフトカ」催馬樂ニ「ミマクサトリカヘマユトシメ」トイフコトノアルヲヨメルナリマユトジメハムマカヒヲイフナリ云々夜鶴庭訓抄下に酒淸子ハ眉刀自女(マユトジメ)といふ催馬樂を吹也云々催馬樂小說にみまくさは御秣也眉は姓歟又蠶養して眉つくる刀自をいふにや刀自は女の稱也和名抄今按ニ俗人謂二老女一爲レ召字從レ目也今訛以レ貝爲レ自歟和名度之といへるはいかゞ也日本紀に壓乞刀自(テトジ)といへるあり皇后のいまだいと若くましゝ時にいへるにて必老女の稱にあらず万葉四十九丁に吾兒乃刀自(コノトジ)同十六十八丁櫛造刀自(クシゲトジ)同廿丁目豆兒乃刀自(マヅコノトジ)同廿一丁己麻勢波々刀自(イマセハハトジ)同廿九丁阿兒乃負(アゴノトジ)は和名抄に據て誤れる成べし身女(ミノメ)

の名也と有興清按に眉戸自女は眉ある女の事なるべし刀自は戸主(トヌシ)にて戸内(ツカサド)を主るは妻女なるを老少に通じて尊美(ミクサ)の稱とすこは美馬草(ミクサ)を取飼べき者ならねど戯れて女にいひたる也催馬樂にはかゝる戯言をうたへるがおほかり

(四十六)内宴　續敎訓抄十一下(四ノ四十二オ)十八丁オ同十九丁ウに内宴ハ前一條院御時行ハレテ後久ク絶タリケルヲ後一條院ノ御時長元七年正月廿二日行ハレケルニサキノ度ノ内宴ニアヒタル人ハ年老タル上達部二三人バカリ也其外ノ人ハアハヌ事ナレバ關白殿通日記ヲ尋テ行ハシメ給テ前々ヨリモ微妙(イミジ)サヲ增シ万ノ事露(アラハ)オロカナル事ナク行ハシメ給ケリ云々與清按に内宴の事延喜二年正月廿日御記新儀式百練抄保元三年正月の條公事根源正月の條北山抄三ノ拾遺雜抄ノ上西宮記臨時八年中行事秘抄上廿二名目抄(公事篇)濫觴抄上八丁(ウ)など所見おほかり 頭書體源抄三末卷十六丁オ本朝文粹九ノ一丁オ同三丁オ抄一ノ廿八丁ウ 續世繼同十一ノ廿一丁オ又廿二丁オ 内宴始嵯峨朝也愚管

(四十七)南池院　續敎訓抄十一に南池院ト申ハ四條ナハテノ北西宮殿ノ森ノ西四町バカリナハテヨリ北一町余ノホドニ島アリメグリハ池ナリ但當時ハ東ノ方ニハ田ヲツクレリ西ノ方ハ猶池ニテ侍リ池ノ南ニモ殿ノアト、オボシキトコロアリウルハキ御所ハ定テ池ノ北ニ南向ニコソハ侍リツラメユ、シクヒロキ中島今ニ見エ侍ルメリ此文體源抄二の本卷にも見ゆ江中納言記云 全吏部王年々記 九日宴奏二蘇合央宮樂万歲樂催馬樂玉樹等一或加二海山樂一者於二神泉苑一繞レ島一迺之間所作也云々南池の事山城名勝志七の卷十五の卷大内裏考證廿九の卷などに古書の所見を引ていひたれば閲て知べし

(四十八)偈頌の音振　續敎訓抄十一に件修正ノ次ニ偈頌ト云コトアリ觀音經ノ世尊偈ヲ頌スル音振ヲ樂ニ作リ合テ吹也云々按に雲雷鼓擊電降雹澍大雨念彼觀音力應時得消散の廿字に墨譜(ハカセ)を附て音振を示したれば閲て知べし體源抄二の本卷にも見えて修正は八幡宮にての事也

(四十九)拾翠樂伊勢海　又云 拾翠樂中略此破ハ催馬樂伊勢海ト號ス弘仁天皇ノ御時此曲ハ武樂院ノウチ武德殿ノ前ニテミドリノ布ヲシキ種々ノ木ヲウエ船ニヲウノ童ヲニク海人ノモヒロヒタルスガタヲシテ奏レ之ト云々又云抑此曲ハ承和聖主ノ御作 又云 催馬樂

號ニ竹河ニ云々按に拾翠樂の事體源抄二の本卷に見ゆ

(五十)入綾　續敎訓抄殘缺本卷數未詳に古老傳云入綾ニハ肩指手ヲ舞ベキ也云々又云凡入綾ノ舞口傳ニハ賀殿ハ更居突ノ切ヲ舞フ更居突ナキ時ハ此切ノ中ノ手ヲ抽出テ舞フ然レドモ居手ヲバ舞ベカラズ又訛テ廻ル手モ舞ハザルモノナリ甘州ハ五帖ヲ舞フ初ハ拍子ヲバ舞臺ノ上ノ手トシ後六拍子ハ庭ノ手ニ舞ナリ其外ハ入綾ノ式ノ手ノ舞加ルナリ云々源氏紅葉賀五丁にけふは又なき手をつくしたる入あやのほどそゝろ寒く此世の事ともおぼえず云々 同若菜上六十五丁に衛門督おりていりあやをほのかにまひて紅葉のかげに入ぬる云云河海抄に舞有レ取ニ綾手一故云ニ入綾一云々花鳥餘情に更に取てかへしておもしろく舞ふこと也云々

(五十一)引出物　續敎訓抄殘缺卷數未詳舞案譜の條に或人云引出物ヲスルニ牛馬ハ多春ハ衣ヲキセタリトイフトモ引出ストキハヌギテイダスベシ太刀笛琴躰ハ必ズ袋ニイル手本ハウスヤウダンシトウニツ、ムベシ物ノ枝ニ付ルトキ錦等ヲモチコレヲツ、ム但貴人ニアラザル時ハ枝ニ付ル儀ナシ云々按に源氏幻卷尾に御引出物しなゝのろくどもなど云々 同初音十丁若菜上行幸廿六丁ウなどにも見ゆ 安齋隨筆後院の卷に引出物取扱の事有

(五十二)舞姫　續敎訓抄殘缺本卷數未詳に舞姫ハ大嘗會ト五節ト別供トノ時ニ必ズ舞ナリ餘事餘所ニテハマハザル也舞姫の裝束ヲ一片トハイフナリ舞ニハ折柳落梅ト云樂ヲ舞ナリ云々 五節舞妓の事 意見十二事に見ゆ

(五十三)上棟立柱　續敎訓抄二の下卷に或人云舞人タラン輩ハ上棟立柱等ノ鼓役尤存知スベキモノ也此事ハ諸ノ御願寺堂塔門等ニアル事ナリ彼鼓役ハ左ノ一ノ者代々勤來ルトコロ也又造内裏等ハ右ノ一ノ者勤レ之往古ハ樂所ノ一臈古老ニ付テ勤メケルヲ中古ヨリ右ノ一ノ者多氏スルニヨリテ勤レ之古ハ則北京ノモ左一者勤仕シタル例アリ然テ近頃ハ其儀ナシ云々左ノ一ノ者ハ左舞の第一の者右一者ハ右舞の第一の者をいへり立柱棟上の事吾妻鏡におほく見ゆ

(五十四)大峰宿次　續敎訓抄十一の上卷吹物部に笙古屋丸ハ高野御室ノ御時仁和寺ニ大先達アリ仁仙房トイフ大峰古屋ノ宿ニテコノ竹ヲ切テ御室ニマキラス此竹ニテツクルユヱニ爲レ名事シカリ大峰宿次第

熊野宿大悲宿ト云　河崎宿雜波山留ト云　西方宿雜波ト云　備宿水天ト云　栗谷宿　清淨宿　備別所入宿　六反宿　八重宿佛宿云々　吹越宿　相西宿　山西宿　黑坂宿　平枝宿尾崎　鳥摩馬宿　垂子宿　猪尾坂山崎小尾宿云　香集山宿四隱土ト云　金剛多輪宿六道宿云々　般若宿　安日宿長尾宿　波栗宿普現現廿云　上空地宿　水飲宿手等所云々　湯田井宿四坂宿　南科宿　玉來宿寶冠峰云々　宇河宿仙在　道氣宿　櫻屋宿古屋　恩智宿林宿入　白生宿　霧宿在石屋云々　金宿　高屋宿　日沒宿　東屋宿　八波宿（朱書）鈴掛衣ニ彌山八葉山天ノ川ノ奥ノ院也安二弁才天トアリ　苔苅瑞宿　金地宿　仙洞宿仙在　雨影宿　雨木宿スタトト云　瑠璃宿又井越云　覺輪宿　奇宿適入　五帖宿　改闇宿峯佛御入仙在　堵卵宿入　智惠宿二泥地峯云　早奇宿古幡峯　年越宿峯　平地宿　多寶宿仙ノ宮在　箱宿　朴宿自ノ此下瀧　多女來宿仙宮在　佐篠宿　守井宿洞宿云　池蛇宿　小池穴小池宿云　深谷宿　深多輪宿　仙行者辻峯（朱書）鈴掛衣ニ石南花ノ馬場左ノ方ニ見ニ日本鍬トアリ　塔崎宿依峰云　戒清宿石南峯　姫尾宿孔雀明王云　五殿宿仙宮在　空鉢宿　劔嶽宿　十德山宿仙宮　經敎經仙宮在　玉尾宿　楊枝宿　安井小宿仙位　禪師宿仙在楊枝在　車跡

赤原云鳥嶽云　敎法宿長峯　吉野屋宿　吉野熊宿　波走多輪宿　小池宿　横尾宿　河那宿　成上宿　千種宿　小行者仙宮在宿在　劍御山仙宮在　柏宿　苔宿　七池崎宿（朱書）鈴掛衣ニ七ツ池雜所ナリト云々　小宿土宿　大分修宿　兒宿仙在（朱書）鈴掛衣ニ兒泊リ自ニ普賢ニ一里景地也ト云々　龍下宿　脇宿妙德仙云　（朱書）鈴掛衣ニ脇宿堂ニ行者藏王觀光童子アル由見ユ　小篠宿仙宮在宿在　（朱書）鈴懸衣ニ小篠役行者理源大師アル由見ユ小篠ヨリ彌山迄九里八丁トアリ　神瑞仙宿　久津宿　湧出峯藏王堂　寺祇薗　老仙宿　今祇薗宿　觀音宿七高也　犬久坐尾宿　法禪山宿　青篠宿　金剛童子椿　當就仙宿　其外六所　戒經仙宿　野際宿　劔光童子宿　玉熟仙宿　舟治坂本（朱書）鈴掛衣ニ舟見ハ茶屋アリト見ユ　已上ノ宿々ヲ見ルニ小屋泊トイフ事見エズ若異名ナドノ事ニヤオボツカナク侍リ大峰トホリタラン人ニタヅヲテフシンヲヒラクベキナリ云々與清按に大峯宿次寫誤不審多し鈴掛衣に奥駈の記あれど大異にて對照によしなし山臥の秘所なればたやすく知べくもあらず神仙は鈴掛衣には深山とあり敎訓抄には見えず

（五十五）備中松山城主水谷斷絶　備中國松山の城主

水谷出羽守は領地七万石也亂心に依て法を犯し稻葉伯耆守に御預に成り家斷絶せり家老杉山軍太夫檜方但馬を始義士五百卅人必死の志を極め籠城せしを城請取の上使姫路城主本多中務大輔赤穗城主淺野内匠頭病中故名代家老大石内藏助向て已に合戰に及べき時節大石が智略にて杉山に說さとし元祿五年十月十一日城士悉退散せり此事三原記といへるものに見ゆ

（五十六）ものから　万葉四五十六丁　藤原郎女歌に「路遠不來常波知有物可良爾然曾將待君之目乎保利」万十九十一に「心爾波念毛能可良」云々古今夏よみ人しらず「時鳥なかなく里のあまたあれはなほうとまれぬ思ふものから」伊勢物語四十三段にも出古今秋在原元方「まつ人にあらぬものからはつ雁のけさなくこゑのめつらしきかな」六帖六にも出戀四深養父「心をそわりなきものと思ひぬる見るものからや戀しかるへき」同よみ人しらず「いつわりと思ふ物から今更にたかまとをかわれは賴まん」同伊勢「古郷にあらぬものから我ために人の心のあれて見ゆらん」後撰秋上よみ人しらず「天川わたらん空もおもほえすたえぬ別れとおもふものから」又「玉かつらたえぬものからあら玉のとしのわたりはたゝ一夜のみ」又おもふ事侍てよみ人しらず「秋風のふけはさすかにわひしきは世のとわりと思ふから」同戀一よみ人しらず「思ふとはいふものからにともすれはわするゝ草の面にやはあらぬ」同戀三右近「から衣かけて賴まぬ時そなき人の妻とは思ふものから」同戀四よみ人しらず「音にのみこゑをきくかな足引の山下水にあらぬものから」六帖五にも出たり同戀六「うきよとは思ふ物から天の戸のあくるはつらきものにそありける」同雜三士左「身にさむく思ふものからわひしきは人の心のあらし也けり」同離別詞書に旅のてうどなどとらするものからたゝん紙に書てとらする云々拾遺秋よみ人しらず「秋風をそむくものから花すゝき行方をなとまねくなるらん」同哀傷大中臣能宣「櫻花にほふものからつゆけきはこのめもものをもふ成へし」伊勢物語十九段「あまくものよそにも人の成行かさすかに目には見ゆるものから」古今戀五にも見ゆ有常が女玉霰十五丁に「物から」ハ「ものながら」の心のよしいへり又今の世の人はいかに心得たるにか「思ふから」といふべき所を「思ふも

のから」といひ「あらぬ故に」といふべき所を「あらぬものから」といふたぐひいとおほきはたゞ「から」といふと同じ心と思ひあやまれるなめりたゞ「から」と「物から」とは大かたうらうへのたがひあるをやともいへり仁徳紀に諺曰有二海人一耶因二己物一以泣其是之緣也云々與清曰以上の歌も詞もみな「ものから」は「物ながら」の心に用たり又古今六帖一てる日の歌十九丁よみ人しらず「ともにこそ花をも見んと待人のこぬものからにをしき春かな」といふを後撰春下藤原雅正「ともにこそ花をも見めと待人のこぬものゆゑにをしき春かな」とあるはものからとものゆゑをかよはし用たるがごとし万葉考三の巻別記十四丁詞の玉緒二の巻六丁雅言集覽毛部などに見えたれば可レ考

（五十七）たかのみこ　次郎百首俊頼猿の歌に「たかのみこいともあやしと見ましけり猿まろをしも引たてゝとや」與清按にたかのみこは神名式下卷美作國苫東郡高野神社云々三代實錄廿七の卷に貞觀十七年三月廿九日壬子授二美作國從五位上高野神正五位下一云云類聚國史十六にも見ゆ今昔物語廿六の卷美作國神依二獵師謀一止二生贄一語に今昔美作國二中參高野一ト申ス神在マス其神體ハ中參ハ猿高野ハ蛇ニテゾ在マシケル毎年一度其ヲ祭ケルニ生贄ヲ備ヘケリ其贄ニハ國人ニ娘ノ未ダ不レ嫁ヲゾ立ケル是ハ昔ヨリ近ク成マデ不レ怠シテ久ク成ケリ然ル間其國ニ何人ナラヂドモ十六七許ナル娘ノ形チ清氣ナル持タル人有ケリ父母是ヲ愛シテ身ニ替テ悲シク思ケルニ此娘メ彼生贄ニ被レ差ニケリ是ハ今年祭ノ日被レ差タレバ其日ニリ一年ノ間養ヒ肥シテ次ノ年ノ祭ニハ立ケリ此ノ娘被レ差テ後父母無レ限歎キ悲ビケレ共可レ遁樣無キ事ナレバ月日ノ過ニ隨テ命促マルヲ祖子ノ相見ム事ノ殘少ク成行ケバ計ヘテ互ニ泣悲ムヨリ外ノ事無シ然ル間東ノ方ヨリ事ノ緣有テ其國ニ來レル人有ケリ此人犬山ト云事ヲシテ數ノ犬ヲ飼テ山ニ入テ猪鹿ヲ犬ニ令レ噉殺一テ取事ヲ業トシケル人也亦心極テ猛キ者ノ物恐ヲ不レ爲ニテゾ有ケル其人其國ニ暫ク有ケル間自然ラ此事ヲ聞テケリ然ルニ可レ云事有テ此ノ生贄ノ祖ノ家ニ行テ云入ル程ニ延有ニ突居テ蔀ノ迫ヨリ臨ケレバ此生贄ノ女糸清氣ニテ色モ白ク形モ愛敬付テ髮長クテ田舍人ノ娘トモ不レ見品々ジクテ寄臥タリ物思タル氣色ニテ髮ヲ振懸テ泣臥タルヲ見テ此東人哀ニ思ヒ糸惜ク思フ事無レ限既ニ祖ニ會ヌレバ物語ナド爲程ニ云ク只一人侍ル娘ノ然々ノ事ニ被レ差テ歎キ暮シ思ヒ明シテ月日ノ過ルニ隨テ別レ畢ナムズル事ノ近ク侍ヲ悲ビ侍ル也此ル國モ侍ケリ前世ニ何ナル罪ヲ造テ此ル所ニ生レテ此ク奇異キ目ヲ見侍ラン東ノ人是ヲ聞テ云ク世ニ有人命ニ增物無亦人ノ財ニ爲物ニ子ニ增ル物無シ其ニ只一人持給ヘラム娘ヲ目ノ前ニテ膾ニ造セテ見給ハンモ糸心疎シ只死給ヒネ敵有ル者行列レテ徒死爲者ヤハ有ル佛神モ命ノ爲ニコソ怖シケレ子ノ爲ニコソ身モ惜ケレ亦其君モ今ハ失人也同死バ其君我ニ得サセ給ヒテヨ我其替ニ死ナム其ハ亡ビ給フトモ苦シトナ思給ヒソト祖是ヲ聞テ然テ其ハ何ニシ給ハント爲ゾト問ヘバ東ノ人只可レ爲樣ノ有也此殿ニ有トテ人ニ不レ宣シテ只精進ストテ注連ヲ引テ置給ベシト云ヘバ祖ノ云ク娘ダニ不レ死バ我ハ亡ムニ不レ苦ト云テ此東ノ人ニ忍テ娘ヲ合ヌ東人此ヲ妻トシテ過ル程ニ難レ去思ヒケレバ年來飼付タル犬山ノ犬ヲ二ツ撰リ勝リテ汝ヨ我ニ代レト云ヒ聞セテ懃ニ飼ケルニ山ヨリ密ニ猿ヲ乍レ生捕ヘ持來テ人モ無所ニテ役ト犬ニ教ヘテ噉セ習ハス本ヨリ犬ト猿トハ中不レ吉者ヲ然カ教ヘ習スレバ猿ダニ見レバ數懸テハ噉殺ス此樣ニ習ハシ立テ我ハ刀ヲ徹妙ク磨テ持タリ東ノ人妻ニ云ク我ハ其御代ニ死侍リナムトス死ハ然ル事ニテ別申シナムズルガ悲キ也ト女不二心得一ドモ哀ニ思フ事無レ限既ニ其日ニ成ヌレバ宮司ヨリ始テ多ノ人來テ此ヲ迎ヘテ新キ長櫃ヲ持來テ是ニ入レト云テ長櫃ヲ寢屋ニ指入タレバ男狩衣袴許ヲ着テ刀ヲ身ニ引付テ長櫃ニ入ヌ此犬二ツニハ左右ノ扈ニ入レ臥セバ祖共女ヲ入タル樣ニ思ハセテ取出タレバ鉾榊鈴鏡ヲ持ル者雲ノ如クシテ前ヲ追喤テ行ヌ妻ハ何ナル事カ出來ムズラントト怖シキニ男ノ我ニ替ヌルヲ哀ニ思テ祖後亡ムモ不レ苦同ク無ク成ランヲ此タビ止ナント思ヒ詫タリ生贄御社ニ將參テ祝申テ瑞籬ノ戸ヲ開テ此長櫃結タル緒ヲ切テ指入テ去ヌ瑞籬ノ戸閇テ宮司等外ニ著並テ居タリ男長櫃ヲ塵許鐏開テ見レバ長七八尺許ナル猿橫座ニ有リ齒ハ白クシテ顏ト尻ハ赤シ次々ノ左右ニ猿百許居並テ面ヲ赤ク成テ音ヲ上テ叫ビ喤シル前ニ俎ノ大ナルヲ置タリ酢酒鹽ナド皆居タリ人ノ鹿ナドヲ下シテ食スル樣也暫許有テ橫座ノ大猿立テ長櫃ヲ開ク他ノ猿共皆

立テ此ヲ開ル程ニ男俄ニ出テ犬噉ヘオレ〳〵ト云ヘバ二ツノ犬走リ出テ大ナル猿ヲ噉テ打臥ツ男凍ノ如ナル刀ヲ拔テ一ノ猿ヲ捕ヘテ俎ノ上ニ引臥テ頭ニ刀ヲ差宛テ汝ガ人ヲ殺シテ肉村ヲ食ハ此ク爲ルニヤ頭切テ犬ニ飼テント云ヘバ猿顏ヲ赤メテ目ヲシバ叩テ齒ヲ白ク食出シテ涙ヲ垂テ手ヲ摺レドモ耳ニモ不聞入ニシテ汝ガ多年來多ノ人ノ子ヲ噉タル替今日只今ニコソ有ナン神ナラバ我ヲ殺セト云テ頭ニ刀ヲ宛タレバ此二ノ犬多ノ猿ヲ噉殺シツ適ニ生ヌルハ木ニ登リ山ニ隱レテ多ノ猿ヲ呼集メテ山響ク許呼バヒ叫ビ合タレドモ更ニ無ク益然間一人ノ宮司ニ神託テ宣ハク我レ今日ヨリ後永ク此生贄ヲ不レ得物ノ命ヲ不レ殺亦男我ヲ此ク凌ジツトテ其男ヲ錯犯ス事無カレや中山の神は一宮にて歷史神名帳など始所見不レ可ニ毛擧一そを仲山と書るにて「ナカ山」と訓事しるべく中參と書るにて後には音にいへりし事もしるべし

（五十八）戸倶（シグ）　大和河内の民戸に戸倶といへる者あり良民これをおとしめて緣を結ばず屠兒（ヱタ）の類にもあらず平民に雜處して賦役の公務更に別あることなし土人傳云上世殉死の者密に逃亡して民間に隱れたる

レ限亦其家ニ露恐ル、事無りけり云々など見え美作國郡繪圖を考ふるに中山神は東一宮村にあり高野神社は今の上高倉下高倉の地なるべければ同郡中にていとほど近しされば高野神を指てたかのみことはいへりと見ゆ猿丸をしも引立てとやとあるは引立るをやの誤にて中山の神社の猿を東人が引立るを高野の神はあやしと見ましけんと成るべし「けり」も「けん」の誤にて「高の神いともあやしと見ましけん猿丸をしも引立るをや」といふ歌なるべし今昔物語（廿六の卷）飛彈國猿神止ニ生贄一條には生贄ノ男此猿ヲ四ツ縛テ前ニ追立ヲ裸ナル者ノ鬘放タルガ葛ヲ帶ニメ刀ヲ指テ杖（ツエ）ニ突テ郷ニ來テ家々ノ門ヲ臨ツ、見ルハなど猿を引立たる說もあればこれかれによりてよみ出たるにや

（五十九）久具都（クグツ）譜代百姓水呑百姓伯樂　關東にて筬を造る者を久具都と呼て平民おとしめおもへりこれ古の傀儡の類にて住處不定の者筬を賣ありきたるなるべし其子孫民間に雜處せればいやしめて平民緣なご結ばざる也又譜代といふもの一種の賤民也これ良民の奴婢が主の田畠を耕してありふる者也子孫に及自己の田地を持て主家に隷せざれども譜代の名目をいひ傳へていやしむる也又水呑百姓といへる一種の賤民もあり自己の屋敷も田地もなくて借地に住し賃租（クリ）して世をわたるもの也馬醫をも伯樂と稱し賤民としてて平民はおとしめおもへり　頭書下學集下三丁ウ懺悔門に傀儡クヾツ日本俗呼二遊女一曰二傀儡一云々　陸奥岩城邊にては筬かき女と稱し橋邊空閑の地などに家ゐし筬をうりありきてその料に米穀などを乞也米袋など持ありくゆゑ乞食の類に似たりとなん　傀儡類聚名物考稱謂部十一梅花無盡藏三上二丁ウに二日透二過綾師之桶一登二三國之嶽一途作二二詩一云々といふ詩あり　抄十四ノ十丁ウ　綾は杼（ヒ）と同く和名比也乎佐は筬也倭に和名鈔機具部に見ゆ

（六十）オトラシヤ　カツタキ　ヤドウカ　大和國にて

が子孫終に賤民となりて村里に雜處せる也といへり

戸倶の字蓋戸具にて戸に具したるよし歟戸倶などの字にても聞ゆ今は戸倶の字を用たり　頭書宿と書て志久と呼べりさては守戸をシユコといひ轉じてシユクといひ誤てシコといへるにても有べし陵墓の守戸なれば人いみきらへるにや

（五十九）久具都（クグツ）譜代百姓水呑百姓伯樂　關東にて筬を造る者を久具都と呼て平民おとしめおもへりこれ古の傀儡の類にて住處不定の者筬を賣ありきたるなるべし其子孫民間に雜處せればいやしめて平民緣なご結ばざる也又譜代といふもの一種の賤民也これ良民の奴婢が主の田畠を耕してありふる者也子孫に及自己の田地を持て主家に隷せざれども譜代の名目をいひ傳へていやしむる也又水呑百姓といへる一種の賤民もあり自己の屋敷も田地もなくて借地に住し賃租（クリ）して世をわたるもの也馬醫をも伯樂と稱し賤民としてて平民はおとしめおもへり　頭書下學集下三丁ウ懺悔門に傀儡クヾツ日本俗呼二遊女一曰二傀儡一云々　陸奥岩城邊にては筬かき女と稱し橋邊空閑の地などに家ゐし筬をうりありきてその料に米穀などを乞也米袋など持ありくゆゑ乞食の類に似たりとなん　傀儡類聚名物考稱謂部十一梅花無盡藏三上二丁ウに二日透二過綾師之桶一登二三國之嶽一途作二二詩一云々といふ詩あり　抄十四ノ十丁ウ　綾は杼（ヒ）と同く和名比也乎佐は筬也倭に和名鈔機具部に見ゆ

（六十）オトラシヤ　カツタキ　ヤドウカ　大和國にて

は癩病の者をオトラシヤトいへり名義不レ詳蓋御通（オトホリ）有（アラ）セラレヨといふを約ていふ歟奈良坂に住る癩人多く奈良の町及在郷に物乞ありくを施與せざる時オトラシヤといひけんより名におへるにや關東にても乞食に物與ざる時は通（トホ）ラッシャイといへりホロ〳〵には虛無僧（コムソウ）也御無用（ムヨウ）といふこと又通例也關東にて癩人をカツタキといふはば乞兒をカタキといふより癩人が物乞ありくに依て名づけし也されば「オトラシヤ」も「カツタキ」と乞與の詞に出たる名也高野聖が宿（ヤド）を借らんといふこゑのこと〳〵しければ「ヤドウカ」と呼がごとし　頭書接待謙詞に佐藤がたちが憚にて候程に御とほりあれかしと存候と有も接待に逢はずして通るべきよし也

（六十一）悔過（ケクワ）大別當小別當　吉祥悔過などの悔過をクワイクワと訓は誤也今南都の寺々にては「ケクワ」と清ていへり又小別當といふものあり「コベッタウ」とよぶ古文書などに大別當小別當とあるは「オホベッタウ」「コベッタウ」と訓べし院廳の大別當は「オ

新猿犬筑波秋部に「高野聖のやどをかるこゑ」「大きなる笠きて月もふくるまで」高野聖の呼と奇異雜談集に見ゆ太閤記十五ノ廿二丁ウ秀吉公異形の御出立にて御遊興の條に加賀大納言利家は高野聖の笈を屑にかけやど〳〵と聲を長く引ていかにもやどりわびたるこゑさもありげにおぼえて云々

ホイベタウ」と訓例也 又「オホベタウ」とも假名書のものに見ゆ

(六十二)溫酒井酒のかん 溫酒及酒のかんの事已に六十の卷十二則にいへり亦補べき說あり駱賓王詩冬日宴詩に促レ席鸞觴滿當レ爐獸炭燃云々白居易詩に已向二微陽前一煖レ酒開二詩帙一云々また春雪朝傾煖二寒酒一云々また夜宿二五侯門一殘茶冷酒愁二殺人一云々また溫鑪卯後暖レ寒時云々許渾詩に煖酒雪初下讀書山欲レ明云々謝觀清明恩賜百官新火賦に銷二冷酒之餘毒一却二羅衣之曉寒一云々世說十七の卷任誕下に桓南郡被レ召作二太子洗馬一船泊二荻渚一王大服散後已小醉往看レ桓桓爲設レ酒不レ能二冷飮一頻語二左右一令二溫レ酒來一桓乃流涕嗚咽王便欲レ去桓以二手巾一掩レ淚因謂レ王曰犯二我家諱一何預二卿事一王歎曰靈寶故自達云々（王は王子猷が事也）歲時雜記に十月朔有司進二煖爐炭一民間皆置酒作二煖爐會一云々空穗物語藏開の下卷廿二丁ウにまん所より炭おほく出して所々におこさせて車副などすべて餅からものなどとりいで酒そんにいれてまがりしてわかしつゝのますごせんともにくだものからものなどしてさけのます云々宇治拾遺三の卷大太郎ぬす人の條

三丁ウにかはらけまゐらせんとてさけわかして黑きかはらけの大きなるを杯にして云々源平盛衰記廿五の卷紅葉の山の條六丁ウに田舍ヨリ仕丁ノ二三人上タリケルガ寒ヲ禦ン爲ニ酒ヲ尋出シアタヽメテ飮ントシケルニ燒物ナカリケレバ御所ノ內ヲ走廻テ尋ル程ニ坪ノ內ノ乾泉水ノ紅葉ヲ尋得テ散々ニ折燒テ酒ヲアタヽメテ飮テケリ云々未木抄雜十四酒の條三丁ウに後京極攝政「木のもとに積るおちばをかきつめて露あたゝむる秋の杯」慶添埃嚢抄室町日記にも酒のかんの事見ゆ 頭書曉月酒百首十三丁ウ 今昔廿五ノ五酒を涌シテ梅白氏文集十五ノ十八丁オ新耐煖開レ顏 本朝無題詩二ノ廿二丁ウ同五十八丁オ又廿丁オ同六ノ八丁ウ 室町日記享ノ廿七丁ウ 大平記廿三ノ十六丁ウ 體源抄十本卷五十三丁オ 菅家文草一ノ二十五丁オ 園大暦二ノ四丁オ 守武千句廿五丁ウ 翰林五鳳集廿五 西宮記臨時四ノ二丁ウ

(六十三)拳を打 酒席の戲に拳を打事はいつばかりよりはじまりけん虫拳狐拳虎拳などの類おほかり

事文類聚續集十五の卷宴飮部罰飮の條に東皐雜錄を引て孔常甫言唐人詩有レ云城頭推鼓傳二花板一席上搏拳握二松子一乃知酒席藏レ鬮爲レ戲其來久とあるは今の搏拳の類なり花板は宴席にて打ものにや城頭の時の鼓より傳りて花板の音を立るよしと聞ゆ五代史三十ノ五丁ウ弘肇傳に酒酣爲二手勢令一といへるも負人罰酒を呑事にて相似たる酒戲といふべし 頭書橘泰が筆のすさび上卷四丁オに拳をうつ事を漢土にては搏陣と云又にぎりこぶしにてするけんれちなんこといふ戲を猜拳と云猜はうたがふ事也故にはんじものを書し燈籠を猜燈といふ明皇雜記に見ゆ云々

(六十四)土といふいやしめ詞 落窪物語一の下卷廿丁オに六位といへど藏人方にあらずつちの帶刀の年は廿ばかりたけは一寸ばかりなると云々與清曰帶刀は東宮侍衛の武士にて 禁裏の瀧口院の北面におなじ 職原抄下卷春宮坊の篇に帶刀者撰二重代侍一補レ之自二公家一被レ補レ之也昔者源平重代武士多補レ之とありて武勇の士を撰補せらるゝ中藏人方といへるは譜第の侍にて所謂諸家格勤を指しそれに對へて諸國大番の非重代の侍を土の帶刀といやしめたる也源氏蜻蛉廿九丁オに御まへなる人はまことに土などの心ちぞするを云々細流抄に長恨歌傳に粉色如レ土とある貴妃の前にてはその外の宮女は皆土のごとく見ゆるといへる也孟津抄に女一の御形におされて御前にある人はつちくれなどのごとくと也云々狹衣活字本一の下九丁オに日ごろ見つる殿上人などはたゞつち也けりとさゞめきあへる云々下紐一の卷廿五丁オに此間の殿上人は狹衣に見合するに土などの色と也楊貴妃のたとへにある詞也源氏宇治の卷にあり云々宇治拾遺六の卷廿一丁オにそこばくの女御后を御らんじくらぶるにみなつちくれのごとしこれは玉のごとし云々空穗物語國讓の下卷五十六ウにはづかしげなる物をおなじ所にて見くらべ給はゞ土と玉とのごとくそあらめ云々此等の類皆土塊にたとへていやしむる詞也應仁の比土一揆といへるも土民一揆の事にて武家よりいやしめたる名也土著の民を土民といへること文正記に見ゆさて漢土にて土をいやしめたる詞に用ひしも杜詩に君不レ見管鮑貧時交此道今人棄如レ土蘇軾詩に紫蟹鱸魚賤如レ土陳鴻長恨歌傳に顧二左右前後一粉色如レ土などおほかり 頭書五代史四十一の卷二丁ウ雜傳廿九雷萌傳に唐廣明中湖南濮盜賊起滿與二同里人陳景思周岳等二聚二諸蠻數千一號二于大澤中一乃擊レ鮮醵レ酒擇二坐中豪者一補二五長一號二土酋軍一諸蠻從レ之云

(六十五)櫻狩紅葉狩葺狩紫狩藥狩若菜狩　和歌童蒙

抄七の卷木部に「サクラカリアメハフリキヌオナシクハヌルトモハナノカケニカクレン」拾遺第一ニアリサクラガリト云「アラソヒカタ〳〵アリスコシクラガリト云又花ノモトニ雨フリ來ルト云サレド歌ノコトバ万葉集ナドニコソイタハラズヨミタレ拾遺ハサガリタルニイカデサルコトハヨマンタヾモノヲコカシコニミアリクカナト云コトバナレバサクラガリト云ゾコトバモコヽロヨキ「ユクホトニタヾマユラチラスモノナラハヤマノサクラヲマテカリテミン」中務宮ノタマユラトハナニゴトゾト四條大納言ニトハセ玉ヒケル歌也タマユラトハワクラバト云同事也云々奥儀抄中卷十五丁ウ拾遺抄の條に「さくらかり雨は降きぬ」云々此櫻がりを或人先達の申しはさといふはあと云詞也あくらがりて雨はふりきぬとよめる也とまうせどいかゞときこゆさくらがりとは櫻をたづねもとむる也何をも求るをばかると云也しゝがり鷹狩などいふめり又古今にも素性が歌の詞にたけがりに北山にまかれりけるにとあるは松茸もとめにこそ侍るめれ中比の人の歌にも「春霞花その山をあさたてはさくらかりとや人の見るらん」とよめりこれあといふ詞の義にあらず云々袖中抄十九の卷廿二丁ウに顯昭云さくらがりとはくらがるといふ事也さは詞の助也さわたるなど云がごとし万葉長歌云「たなぐもりくもはおちきぬ左雲理あめはおちきぬ」云々此さくもり雨はおちきぬと云詞さくらがり雨はふりきぬと云と同詞也やがて此万葉の左雲理をさくらがりとよめる本あり雨は落來をもふりきぬとよむべしそれをあしく心えて花園山をあさたてばとはよめるにや又ふるくよりさま〴〵の義あり或はさとくらがるといふ詞なりといひ或はさは狹の義也ちひさくすくなき心にてたゞすこしくらがる心歟或は櫻のがりと云心歟さくらのもとへふりくといふ也和泉式部歌云「さきぬらんさくらかりとてきつれとも此木のもとのあるしたになし」道命阿闍梨歌云「をりしもあれ花のさかりにいきたらはさくらかりとや人はおもはん」此兩歌の心はさくらのもとへ許ともいひつべし花見御幸に實隆卿歌「此みゆき櫻かりとや思ふらんあなうれしけの花のけしきや」是も同心歟又櫻を狩と云心にもよせたるにや奥義抄云已に引出た云々私云かるると云義は此花園山の歌を良遅打聞にいひたればにやあまた人申めり但朝立て行旅人をさくらのもとへきたるとや見るらんともいひつべし又あづまに紫狩といふも紫をとる也紫の花のさきたるをりに馬に乘て野に出て花を見て弓のはずにて敎てほりとらするると申す云々色葉和難集八の卷左の部色葉集下の二卷十九丁ウ八雲御抄三の下卷木部三丁ウ歌林良材上卷廿二丁ウ百二段藻鹽草九の卷櫻部十丁ウ同十六の卷狩部五十五丁ウ吳竹集八の卷廿七丁オ左の部歌林撲撩廿一の卷左部などに說あれど皆小暗がり櫻許などをばうけぬよしにて櫻狩を定說とすげに櫻狩紫狩紅葉狩茸狩藥狩若菜狩など同語意と聞ゆれば尋求るを狩といひたること疑なし續拾遺春藤原仲敏「かへるさは遠里小野の櫻狩花にや今宵やとりからまし」新古今春下俊成「又やこんかたのゝみのゝ櫻狩花の雪ちる春の曙」續古今春下後鳥羽院「はし鷹をするのゝ原の櫻狩しらふに花の色をまかへて」壬二集上家隆「櫻狩しはしかけ見んはし鷹の野守の鏡花もうつりぬ」新續古今春下一品法親王法守「櫻狩かへる山ちはくれはてゝさらにや花を月に見るらん」飛鳥井雅親卿亞槐集二に櫻「ものゝふもいとま有時の櫻かり花より御代のさかりをそしる」又雨中待ㇾ花「さきなはと又あらましの櫻狩ぬれぬそつらき春雨の空」又尋ㇾ花「はし鷹の外山かたかけ長き日のくるゝをしらぬ櫻かりかな」又野花留ㇾ人「あまの川花をやとかす人にしてあすも片野の櫻狩せん」和泉式部集一の卷に寺にいりて見ればこの花はさかざりければしりたりし僧のありしをとはするもなければ「さきぬらん櫻狩とて來つれともこの木のもとのあるしたになし」爲忠家後度百首に野徑櫻「きゝすなく片野の花を見るとてや櫻狩とはいひはしめけん」他阿上人集七丁オ「春はかり家路わすれて吉野山花の幾木も櫻かりせん」又廿四丁ウ「吹ぬれは櫻かりして散までは花のさかりの雨風もなし」又廿六丁オ「櫻かり家路忘れて日はくれぬ月見の床は花の下ふし」又卅丁オ「いつまてか跡をしたはん櫻狩春はかへらす花はとまらす」又八十八丁オ「吉野山嵐の下の櫻狩花にわかるゝ木の下そなき」又同丁ウ「櫻かりくれはとまらんちる花を木の下ふしの衣にはきて」慈鎭和尙拾玉集一一丁ウ「春來れは櫻かりすとあくかれてもとの山へに日をくらすかな」同四七丁オ「花さけは春風いとふ木のもとに雲さへなひく櫻かりかな」又廿一丁ウ「櫻

狩雨はふりこて雪そちる花見る空は霞也けり」又（廿七丁オ）「春の駒の月毛のをかみ白妙に花ちる野へに櫻かりせん」同六（廿五丁ウ）「むらしはにきゝす立也櫻かり花ちる野への春のあけほの」爲尹千首花鏡「歸るさやはやくれぬらん櫻狩野もりのかゝみ月そうつれる」伊勢大輔集に「九重ににほふを見れは櫻かりかさねて來たる春かとそ思ふ」（按に此歌は櫻許とよめるにや）紫式部集に「九重ににほふを見れは櫻かりかさねてきたる春のさかりか」（按に伊勢大輔集の歌に全く同じ）延文百首（五十二丁オ）「櫻かりかへる山ちはくれはてゝさらにや花を月に見るらん」（按に此歌新古今に載たり）夫木抄春三慈鎭「春駒の月毛のをかみ」云々（拾玉に見ゆ）同春四權僧正公朝「みよしのゝ春のしけのゝ櫻かり花やとたちのしるへなるらん」又隆祐朝臣（現存六帖にも見ゆ）「大原やをしほの山の櫻狩雲こそ春のとたち也けり」又家隆「櫻狩しはしかけ見ん」云々（壬二集同）同離四權僧正公朝「時うつるくるすのをのゝ櫻狩古根の萩をふみしたきつる」（按に此歌は小暗がり降とつゞけたりと見ゆ）菟玖波集春上「やさしく見ゆる花うつほかな」といふ句に藤原基政「ものゝふや櫻狩してかへるらん」撰集抄八の卷にも「櫻狩雨は降きぬ」云々の歌を出せりさて語意は櫻狩にて櫻花を尋求るよし也藥狩紫狩茸狩紅葉狩若菜狩など同例なるを思ふべしそれを櫻許の心にもいひよせ又さしくらがりて降よしによめる歌も後には出來し也紅葉狩（夫木秋六の六丁オ同廿七丁ウ藻鹽草十六の卷狩部）茸狩（古今秋下詞書夫木秋六の二紫丁オ藻鹽草十六の卷狩部）藻鹽草八の卷紫狩（萬葉十六ノ廿丁同十七ノ十二丁推古紀十九年五月五日同廿年五月五日同廿二年五月五日天智紀七年五月五日同八年五月壬午の條）若菜狩（藻鹽草十六の卷狩部）などの證歌後に引出べし

（六十六）精衛鳥　山海經北山經（廿丁ウ）に發鳩之山其上多ニ柘木一有レ鳥焉其狀如レ烏文首白啄赤足名曰ニ精衛一（コブ）其鳴自設是炎帝之少女名曰ニ女娃一（炎帝神農也娃惡佳反語誤或作レ階女娃）遊ニ于東海一溺而不レ返故爲ニ精衛一常銜ニ西山之木石一以堙ニ于東海一云々述異記上三丁（ウ）に黃炎帝女溺ニ死東海中一化爲ニ精衛一其名自呼每銜ニ西山木石一塡ニ東海一偶ニ海燕一而生レ子生レ雌狀如ニ精衛一生レ雄如ニ海燕一今東海精衛誓レ水處曾溺ニ於此川一誓不レ飮ニ其水一一名鳥誓一名寃禽又名志鳥俗呼ニ帝女雀一云々事物紀原十の卷蟲魚禽獸部に〔精衛山海經曰炎帝之女渡レ海溺死其魄化爲レ鳥爲レ此常啣ニ西山木石一以塡ニ東海一報ニ其寃也一〕云々三才圖會鳥獸部一の卷に〔精衛發鳩山有レ鳥狀如レ烏白首赤啄名曰ニ精衛一其鳴自呼是神農之少女名女娃昔

遊ニ東海一溺而不レ返化爲ニ精衛一常收ニ西山之木石一以塡ニ東海一云々文選五左思吳都賦に精衛銜レ石而遇レ繳云々また郭璞が精衛賛韓退之が精衛銜レ石塡レ海詩王建が精衛詞など類書に引用せり太平記卅四の卷曹娥精衛事の條に發鳩山ニ精衛ト申人他國ニ行テ歸ルトテ難風ニ船ヲ覆サレテ海中ニ沈テ無レ墓成ニケリ其子未幼クテ故郷ニ獨有ケルガ父ガ海ニ沈メル事ヲ聞テ其江ノ邊ニ行テ夜晝泣悲ケルガ尙モ思ニ堪カネ遂ニ蒼海ノ底ニ身ヲ投テ死ニケリ其魂魄一ノ鳥ト成テ波ノ上ニ飛渡リ精衛々々ト呼聲涙ヲ不レ催ト云ヘドナシ怨念盡ルヿナケレバ此鳥自ラ大海ヲ埋テ平地ニナサント思フ心ヲ挿ミ每日三度草ノ葉木ノ枝ヲクハヘテ海中ニ沈メテ飛歸ル尾澑洩セドモ不レ乾ヒ旱ホセ共曾テ一滴モ不レ減大海ナレバ何ナル神通ヲ以テモ爭カ埋メハツベキサレ共父ガ怨ヲ報ゼン爲ニ此鳥一枝一葉ヲ含テ海中ニ是ヲ沈ルヿ哀ナリケル志也サレバ此精衛ヲ題スルニ人笑ニ其功少ニ我恰ニ其志多シト詩人モ是ヲ賛タリ云々

（六十七）蘇武雁書　蒙求和歌三の卷蘇武持節の條に蘇武漢土ノツカヒトメ匈奴ヲセメニオモムキテ忠節ヲツクス程ニカヘリテエビスニトリコメラレニケリ匈奴王單于蘇武ヲオビヤカシテシタガヘントスルニ漢ノ節ヲウシナハズシテヒザマヅカズナホツルギヲカバヤカメセムレドモ蘇武堂々トメ云ク我漢ノ使也エビスニシタガヒニハコザリキトコタヘテ戈ヲトリテ自ラ刺スニ匈奴オホキニオドロキテトリハナチテ疵ニクスリヲツケテタスケテケリ後ニ深窖中ニコメオキテケリワヅカニ雪バカリヲクヒテイノチヲイキケリ七日ヲスギテヒラキテ見ルニ蘇武ツヽガナシ匈奴蘇武ヲ神也ト思ヒナリヌ北海ノホトリニ出メ羊ヲカハスルニナホ漢ノ節ヲウシナハズワヅカニイケルニ似タリトイヘドモ牡羊ノ乳ヲ期メ歲華ムナシクカサナリニケリ武帝カクレ玉ヒテ昭帝ノ世ニナリテ帝ノ使匈奴ノ國ニイタリテ蘇武ヲ尋ルニハヤクシニキトイツハリコタヘケリイマダアリトバカリヲダニフルサト人ニキカレバヤト思モカヒナシ秋ノソラヲムカヘテ都ノ方ヘユク雁ノアシニフミヲムスビツケテケリ雁南ヲサシテトビサリヌ帝上林苑ニアソビタマフヲリシモ賓雁書ヲカケテイタレリトリテ見タマフニ蘇武サリテヨリコノカタ十九年ノウレヘ

ヲカキツバケタルナリケリカギリナクアハレトオボシテタシカニ蘇武ヲタテマツレトセメラレテソノトキカヘシタテマツリテケリアマタノトシヲヘダテヽケレバカホノイロオトロヘカシラシロクナリテアリシニモアラズゾナリニケル「ヘタテコシミヤコノアキニアハマシヤコシチノカリノシルヘナラスハ」頭書歌ニ「サテモナホフミカヨフヘキクモチカハハツカリカチノタヨリナラテハ」俊頼口傳上に古今秋上友則歌也「秋風にはつかりかねそきこゆなるたかたまつさをかけて來つらん」此歌は漢の武帝と申ける御門の御時に胡塞といへる所ろに蘇武といへる人をつかはしたりけるがえかへらで年來ありけるを衞律といひける人又ゆきて蘇武はありやと問ければあるをかくしてその人はうせて年久しく成ぬといひければかくしてそら事をいふと心得て蘇武はしなざる也此秋雁の足に文をつけて奉りたり その文を御門御らんじて蘇武今にありとしろしめされたりとはかりごとをなしていひければさるにてはかくれなしと思ひてまことにはありといひてあはせたりけりさてこれによそへてかの雁の歌はよめる也云々 顯注密勘 秋上に蘇武胡

國に行て久しく歸らざりしかば衞律といふものを胡國へ遣して蘇武は有かと尋られしに侍らずと答しに此蘇武が書を雁の足に付て遣れりと申ければ其時に誠は侍りととてあはせたりければ相具して歸れりと申せり是より後雁の玉章をかくといひ又雁の便ともよめり但實に雁の足に文を付たりとも又さもなき事を衞律が計にて申たりとも申といふ說侍をぞ可レ尋云云此外蘇武が雁書の事を假名文に書やはらげたるもの少からず歌によめるは万葉八の卷四十九遠江守櫻井王奉二聖武天皇一歌に九月之其始雁乃使爾毛念心者所聞來奴鴨同九の卷十二泉河邊作歌に春草馬咋山自越來奈流雁使者宿過奈利同十五の卷廿一に安麻等夫也可里乎都可比爾衣氏之可母奈良能彌夜古爾許登都礙夜良武同十七の卷十九大伴宿禰家持歌に雁我禰波都加比爾許武等佐和久良武秋風左無美曾乃可波能倍爾同廿の卷廿六物部道足歌に比多知散思由可牟加里母我阿我古比乎志留志氏都祁氏伊母爾志良世牟などをはじめて雁の使とも雁の玉章とも後の歌に多くよめるは皆漢書蘇武傳の故事に據れる也衞律が

はかりごとをなしていへるといふ說は漢書に叶はず瑯琊代醉編廿の卷元使郝經が雁足書の事をいへる條に蘇子卿雁書云者不レ過二漢人詭言以紿一匈奴一因成二故事一とあるをおもへばさる異說ありけんも知がたし郝經が雁書の事は輟耕錄廿の卷にも見ゆ因云劉向新序節士篇に蘇武當二盛暑一以二旃厚衣一幷束三日暴と見えたるに漢書本傳の大窖中にて齧二雪與一旃毛一幷咽レ之數日不レ死といふに合考へて寒暑中の受苦のさま思ひやるべし

松屋筆記卷之六十六

東都　平與清文儒稿

(一)鷄冠花　『多識編』濕草類部に鷄冠和名今按土利左加久左俗稱二計伊士計一云々節用集計部草木門に鷄頭花鷄冠花也有二掃帚扇面瓔珞等一皆以二其花形一名レ之也云云大和本草卷七廿五丁オ花草類部に鷄冠花花紅白黃三色アリ品多シ鮮紅ニメ大ニ重ナル者上品ナリ錦鷄頭ト云南京ノ種尤ヨシ好種ヲマキテモ變メ醜クナルアリシゲクウエテ花初テ開ク時アシキヲバ早ク拔去テ好花ヲ養フベシ三四月根ヨリ苗ヲ生ズ六月ヨリ花サキ霜ニ萎ム凡五箇月ノ間シボマズ百日紅山茶花海紅ナド花久シクアリトイヘドモ花落テカハルヾ〳〵サキツヅク事久シキ也一花ノ如レ此久シキニ堪ル事鷄冠花ニシクハナシ其葉嫩キ時可レ食性アシカラズ草花譜曰有二紫白同帶者一名二色鷄冠一實ヲマキテ遲ク生ズルハ花ヨシ云々本草啓蒙十一の卷濕草類上廿三丁オに鷄冠ケイトウ一名洗手花群芳譜杜若藥園同春一朶雲間情偶寄紫冠蘇氏

頷輯 波羅奢（秘傳花鏡）俗ニケイトウト呼ブ鷄頭ノ意ナルベシ然モ此花ハ鷄ノ冠ニ似タリ鷄頭ニハ似ズ唐山ニハオホバスノ實ヲ鷄頭ト云鷄冠ニ數種アリ一種莖短ク僅ニ三五寸ニメ大ナル花ヲ開ヲ高麗ゲイトウ又南京ゲイトウチヤボケイトウト云漢名壽星鷄冠（群芳譜）廣東鷄冠（同上）一種花ノ形圓ニメ末尖レルヲヤリゲイトウ又スギナリケイトウト云漢名掃鷄冠（花史左編）一種花ノ形チ扁大ナルヲトサカゲイトウ又ヒラゲイトウト云漢名扇面鷄冠（群芳譜）此外ニモ種類甚多シ一種掃帚鷄冠ノ形ニメ花ノ末及傍ニ細枝ヲ出シ其梢各小扇面ノ如ナルモノ出テ多ク下垂スルヲミダレゲイトウ又イヤウラクケイトウト云漢名瓔珞鷄冠（群芳譜）一種紅黄二色間リ開クモノヲサキワケゲイトウト云漢名二色鷄冠（花史左編）二喬鷄冠（同上）唐山ニハ五色相間ルモノアリ五色雲（問情偶寄）トイフ云々滑稽雜談十六の卷八月下に鷄冠花春種をまく時器に入て其器の形に花形を發すといふ未レ考云云汝南圃史十の卷に鷄冠花佛書名波羅奢花形高三五尺葉似レ莧而尖亦可食其花褊而舒長狀類ニ鷄冠一有ニ紫白淡紅三色一亦有ニ紅白間者一就レ中又有下如ニ瓔珞一者上各種形狀不レ一浣花雜志云清明下レ子撒過即用レ糞澆可レ免ニ雀啄一子細黑藏ニ於花中一瑣碎錄云種ニ鷄冠子一立撒則株高坐撒則株低盛レ扇撒レ之則如ニ團扇一散レ鬚撒レ之則成ニ瓔珞一如欲ニ雙色一各披ニ半邊一紐麻縛レ之然屢試不レ驗又有ニ矮鷄冠一種自ニ金陵一來栽ニ置階下一若ニ侏儒一然一名壽星鷄冠此花秋深與ニ雁來紅十樣錦一爭レ奇競レ秀極爲ニ圃中點綴一唯白雞冠子主治ニ婦人淋症一最驗云々秘傳花鏡五の卷に雞冠花一名波羅奢隨在皆有三月生レ苗高者五六尺其矮種只三寸長而花可ニ大如一レ盤有ニ紅紫黄白豆綠五色一又有ニ妃央二色者一又紫白粉紅三色者一皆宛如ニ鷄冠之狀一扇面者惟梢間一花最大層々卷出可レ愛若ニ掃帚鷄冠一宜高而多頭又若ニ瓔珞一花尖小而雜亂如レ箒又有ニ壽星鷄冠一以レ矮爲レ貴者鷄冠似レ花非レ花開最耐レ久經レ霜始萎俱收ニ子種一撒下即用レ糞澆可レ免ニ蠹食一云々食物本草十八濕草類二本草綱目十五（卅九丁ウ）濕草類上廣群芳譜五十二の卷花譜などに見え詩賦などもおほかりまた海菜に雞冠菜あり和名抄十七海菜部に楊氏漢語抄云雞冠菜土里佐加乃里（トリサカノリ）式文用ニ烏坂苔一云々類聚名義抄にもトリサカノリと見ゆ以呂波字類抄二の卷止部殖物の條に鷄冠菜トサカノリ俗用ニ烏坂苔一云々節用集止部に雞冠海藻トツサカ云々宜禁本草追加にトツサカ又ムカデノリ云々和歌食物本草上（十三丁オ）止部にとつさかとよめる歌三首あり大倭本草八（四十一丁ウ）に雞冠菜和品順和名抄ニ出タリ其形雞冠ノ如シ食フベシ紅色也附レ石生云々輿清曰雞冠花は多識編にトリサカグサともケイトグとも云又（十二丁ウ）次に關白いし〳〵公卿しだいにちやくざす云々又（十五丁オ）そのゝち關白いし〳〵次第にまかで給ふ云々又（十九丁オ）御まうけの事ども御ましいし〳〵とけいめいし給ふ云々思ひのまゝの日記（十一丁オ）に近比まゐらぬしよしいし〳〵までもとゝのへさせ給ふ云々雲井の春八丁ウにいし〳〵の人々云々又（十一丁ウ）いし〳〵けんぞうの座にまゐり給ふ云々御湯殿上記（永祿五五十六の條）に今日は御祈禱どもあり女中の御なかへ御さかづきまゐりてみな〳〵御いし〳〵と御いはひあり云々按にいしいしハ以次々々の字音也西宮記正月部下五日叙位議の條の裏書に四條大納言說云著ニ議所一時一大臣入レ自レ南以次大臣以下入レ自ニ艮角一但雖ニ以次大臣一執筆之時可レ入レ自レ南而納言執筆之時猶可レ入レ自レ艮云々又著ニ御前圓座一之時以次大臣執筆者猶先著ニ自座一之後隨ニ御氣色一可レ著ニ上座一歟云々二水記大永二正二溜は花王に對し此君十八公などの稱をもおもひよりてのわざ也』

（二）いし〳〵『北山殿行幸記（八丁ム）に常の御所夜のおとゞの御衣いし〳〵の御まうけもいかめしき事どもきこえしかどもそれまではのぞきもまゐらせねば云

醉の條に下臈貫首勸盃事云々第一大臣之外取レ酌人無レ之歟已次之大臣只盃許歟云々などあるをかうがへ合せて知べし』

(三)だにだも　万葉一　十三丁オ　に三輪山乎然毛隠賀雲谷(シカモカクスカクモダニ)嘗情有南畝可苦佐布倍思哉此「だに」は俗言に「デモセメテ」(モコロアラムカクサフベシヤ)といふ意也頭書待賢門院堀川集古寫本戀歌に「夢のこと見し人にたもかたらぬなゐかにちかへてあはぬ成らん」和泉式部集上四十五ニモ伊物ニハセメテト云心ヲ下ニ含メザル「だに」有だも古今著聞十八ノ十三丁ウ

(四)せば　景行紀倭建命御歌に「尾津ノ崎ナルヒトツ松人トアリセハ太刀ハケマシヲキヌキセマシヲ」記紀チ考合スベシ　古事記履中段御歌に「丹比野ニ寐ントシリセハ」云々古今序に「いつはりのなき世なりせはいかはかり人のことのはうれしからまし」此外にもおほかり「ありせば」は「アラバ」也「しりせば」は「シラバ」也「なりせば」は「ナラバ」也又「つきせず」は「盡ず」也「たえせず」は「不レ絶」也此「セ」の詞の置やう一ツの格也

(五)ほうしごの稲　并袖の子　散木集俊頼歌に「よひに見しほうしこの稲けさははやみそうつまてに成にけるかな」此ほうしごの稲今俗にもボウズイチと呼て芒なき稲なり曲洧舊聞新安朱弁字少章撰にて知不足齋叢書中に收たり　に洛下一作中稲田亦多土人以二稲之無レ芒者一爲二和尚稲一亦猶二浙中人呼一師婆梗一其實一也云々又袖の子と云も稲の名也頭書爲忠初度百首に山田苗代爲忠「うち山のすそのゝなたの苗代にいくらかまきしそてのこのたれ」夫木秋三秋田花山院「秋のたな吹高風のかうばしみこや袖のこのにほひ成らん」又如覺法師「さよ衣たちのゝひたに耳なれて袖のこなたにすかるなく也」散木三「おほつかなたか袖の子に引かされほうしこのいねかふしそめけん」

(六)尾花粥尾花色　康富記嘉吉二年八月一日の條に晝過程參二清外史之文亭一依二遲參一先有レ使例式賞二甑粥一者一盞之後退出了外史被レ語云今日食二薫粥一之事未レ見二出處一若被二見及一歟予十節記之中不レ見二此粥之事一由返答了誠可レ尋二出處一也云々同書文安五年八月一日の條に八朔禮事何比より有レ之事哉之由尋申候處御鳥羽末方ヨリ出來歟但不レ得二所見慥一所詮先代より之沙汰歟鎌倉より事起之由所二語傳一也又今日尾花之粥之事其由來何事哉自然見及歟之由令レ問レ之給未レ見及知二子細一候ヒ由返答了云々海人藻芥中卷二丁に八月朔日小花粥内裏仙洞以下令レ用給良藥云云彼粥調法薄黒燒ニメ粥ニ入合スル也云々洗革に今世年中行事云八月一日供二薫粥一自二檳司一供レ之云々ヲバナハスヽキノ花也馬ノ尾ニ似タルユヱ尾花ト云尾花ヲクロヤキニシテ粥ノ中へ交ル也是又疫病ノマジナヒ也ト云信州諏訪ノミサ山ノ云々　速水見聞私記十二

の卷に近代年中行事曰八月朔日小花粥萩の御君ひづかさより供す小花粥とは儕に云つまみなる氷たえさいなり云々康富記嘉吉二年八月小一日己巳晝過程參二清外史之文亭一云々上ニ所レ引同故略同記曰文安五年八月一日云々上所レ引同故略或一冊年中御祝儀方供御八月朔日尾花粥但白粥新米(尾花歟)之黒燒入檳司調二進之一房常曰近代年中行事之祝大違也猶可レ尋云々故實拾要五の卷に八月一日供二小花粥一此御粥自二檳司一供レ之云々當時年中行事八月一日の條に夕方の御祝初献に添てをばなの粥萩の莖也を供ず是も初こんのうち也云々女房私記に八月朔日の御祝御盃御三ツ肴に居出ル初献かちん尾花の御かゆ萩の御はし出る云々橘經亮隨筆に外記師守記貞治三年八月一日今日小花粥如二例等一庭云當時ハ新米ノ藁ヲ黒燒ニシテ粥ニ和合ノヨシニ候按ニ本法ニテハ有マジク候云々倭訓栞五を部に昔は薄の黒燒を粥に雜へたりし今は早稲の黒燒を合すといへり内々行事には米の粉を黒胡摩にて煉交たる也と見ゆ云々與清按に空穗菊の宴六十三丁カにすぎばこよつに箸坏するゐて紅葉を折しきてまつのこくだものもりてくさびらなどしてをばな色の强飯などまゐるほどにかりなきてわたる云々同樓の上ノ下一丁カにをばな色の細長云々太郎百首駒迎「關の戸に尾花あしけの見ゆるかな穗坂の駒を引にやあるらん」などあるを思ふに尾花色は白色に少し薄黒(ウスグロ)を帶たるをいふ也げに尾花の色純白の物ならず青黒色の氣あるものなればさる色をいへるなるべし葦毛は白色なるに尾花葦毛といへば黒色まじれるにて鈍色に似て夫よりもはなやかなる也

(七)田上といふ地名　田上といふ地名は近江なるが名高くきこえ其外さる村里の名あり古事記日本紀に歌ありて後頼散木集には此里のことおほくいひたり雄略紀十一年五月の條に近江國栗太郡言白鷺鷥居二于谷上濱一因詔置二川瀬舍人一云々こゝに谷上(タナカミノ)と書たるにて谷の上(カミ)にあるゆゑの名と知られたり

(八)對治　合戰の書に退治とも書たれど對治をよろしとす慧琳音義四十九十丁大莊嚴論第十卷の條に對治上對字說文從レ𡍮(サムラヒ)音柴學反從レ士士音仕從レ寸下治字音持字書云治理也云々頭書三藏法數十四ノ二十五丁大藏法數十八ノ六丁

(九)雲板　小幡侯松平宮内少輔の藏物に古き雲板あり銘に大日本國關西道豊前州路下毛縣牛神村瑞雲山大興禪寺松閑中州叟置レ之應永丁丑結制記レ之とあり雲板は

三才圖會に雲板即今之更點撃ㇾ鉦唐六典皆撃ㇾ鐘也云云倭漢三才圖會十九佛具部に按雲板俗云ニ長鏁一唐金作ㇾ之腹有ニ空孔一撃ㇾ之則能鳴禪家用ㇾ之とあり淨土宗に雲板家とてあるは下總小金の東漸寺の住持其寺に古き雲板ありけるを物の紋に用しよりおこれりとなん[illegible]三才圖會器用十二卷卅三丁ォ羅山文集六十の卷十二丁ォ與ニ朝鮮進士文弘績一筆語に問雲板一隻雲板何物答雲板未ニ詳知ㇾ之但中朝大官坐ㇾ堂之時有ㇾ打ニ雲板一之說ㇾ以ㇾ此推測則如ニ寺刹之木魚一類也云々名物六帖器財箋三醫卜算候部に雲版クワンシヨウ三才圖會雲版即今之更點撃ㇾ鉦唐六典皆撃ㇾ鐘也

(十)はがくれにけり　六帖一　廿七丁ウ　ほしの歌に「月かけにはかくれにけりあかほしのあかぬ心に出てくやしき」此はがくれ聞えずはかられにけりの誤なるべし

(十一)武藏野の瓜茄子　昔年余がよめる歌に「むさしのもはたけとなりて紫のゆかりの色をなすひにそ見る」とよめるを世にいとあるまじ歌といひあざけるよしきこゆこは月卿雲客妬歌合　建保三年六月十一日當座群書類從卷百九十五收之栗本覆勘右大辨藤原定高歌に「むさしのゝ萩や薄やほりたてゝ瓜やなすひやうゑてもたはや」とあるを證歌とす此歌建保年中に武藏野の墾開の心をよめるは今昇平にあひておほくの新田出來たる前表といふべし武藏野開墾は御代官川崎平右衞門の先祖多摩郡押立村の富民なりしが官に請て新田をひらきその功によりて御代官には登用せられし也又松平伊豆守殿野火留を拜領し玉川用水を引分て新田を作れるにて方八百里ともいひけんひろ野らも穀種年登天下の大益詞にも述がたしさて藤原定高はかくし名にて詳ならねど定家卿にはあらじか可ㇾ考茄子を紫のゆかりの色とよめるは紫茄ともいひてその本色紫なればなり也[illegible]小大君集「くひ所見れはうひなる老なすひうゑたる人のつくるなるへし」和名抄茄子下學集下廿二丁ォ

(十二)杵築宮の古文書　大社幽冥誌一の卷八千戈神の條に後醍醐天皇綸旨を載て云

右以王道之再興者專神明之加護也仰當社之冥助欲ㇾ致ニ四海之太平一依ㇾ退ニ逆臣一爲ㇾ令ㇾ復ニ正理一擧ニ義兵一所ㇾ被ㇾ企ニ征伐一也速得ニ官軍戰勝之利一可ㇾ歸ニ朝廷一靜謐之化一旨凝ニ精誠一可ニ祈申一勅願令ニ成就一勸賞可ㇾ依ㇾ請者依ニ天氣一狀如ㇾ件

元弘三年三月廿四日　　左中將

杵築社神主館

此依ニ勅願一出雲國國富庄氷室庄兩所元弘三年四月十一日又肥後國八代高田鄕は建武二年五月廿六日有ニ御寄付一各賜ニ綸旨一也同帝爲ㇾ被ㇾ用ニ寶劔代一舊神寶之內有ニ御劔一可ㇾ奉ㇾ渡者綸旨如ㇾ此□□

元弘三年三月十七日　　左中將

杵築神主館

神代之寶劔二振有ㇾ之內一振者此時獻ㇾ之云々

凶徒對治祈禱之事　於ニ出雲大社一近日　殊可ㇾ被ㇾ致ニ精誠一之條如ㇾ件

觀應元年十一月九日　　尊氏判

杵築國造殿

(十三)出雲國造　同書三の下卷國造事實の條に出雲國造者天照太神二御兒天穗日命よりの神孫也神代卷に出たり日神の靈物以ニ神火神水一〇日と火とは陽物也則伊勢神は天火出雲神は地火　天穗日命は出雲神の御杖代とありて祭主なれば一神德一鉢といふ成べし天水は伊勢月讀命也水は陰德出雲神地祇の神火神水を授與し給ふ國造火繼に鑽神火領神水神嘗有其水火は日神の靈物なれば食する火は天人唯一の深妙其職一人に預りて凡慮の知る所にあらず小緣には述がたし神火神水受繼所國造家秘に記す又禁廷將軍へ備ニ高覽一園造義孝證文曰

大社御造營之次第注進如ㇾ此非ㇾ兼ニ帶國造神主一者ㇾ無ㇾ奉ㇾ遂ニ造畢遷宮一之例ㇾ然而國造職者自ニ天照太神一至ニ意宇足奴命一神々相繼十八代第十九代宮向宿禰之時自ㇾ賜ニ出雲國造一以來至ニ義孝一子々相承二十九代也雖ㇾ然從ニ往代一鑽ニ神火一領ニ神水一未ㇾ混ニ流俗一帶ニ舊記一存ニ舊例一奉ㇾ遂ニ造畢遷宮一自ニ往代一至ニ寶治二十ケ度之御造營雖ㇾ爲ニ一代一不ㇾ交ニ他人一之條寄卿廳宣明鏡也依注進言上如ㇾ件

弘安四年三月日　　國造出雲義孝判

此類之綸旨院宣廳宣御敎書幷神火神水之證狀數々雖ㇾ有ㇾ之爰に略す云々按に大社幽冥誌三卷あり第三の卷を分て上下とし都て四冊也源誠正漢文の序あり奥書に安永二年癸巳四月甲辰日雲陽清地鶴山下佐々木源誠正謹撰とあり蟾川越中守主藏本にて寫本也

(十四)樅の木　上野七日市侯の藩醫畑數馬時倚は余が門人にて常に來訪へるがある日講說のをり夕立して雷鳴ける事ありそれにつきて語れるは先祖畑隱軒主君の大坂加番の役にのぼり給へるに從て彼城內の樅の苗を二本もてかへり家にうゑたるは寬文二年のよし也さて百五十三年經て文化十二年の夏雷火のために燒たるを伐取れるにその伐口うづまきのさまして葉の數百五十三廻はたしかに見ゆれどその餘はさ

だかならず世人一年に一葉づゝ加はるよしいへるもさるとにや百五十三年の木百五十三回は鮮にてその餘はいと細小にて分明ならぬもといへり其木のめぐり一丈八尺許もありき葉は漸々に内はあらく外は細小也と云

伐小口の體如レ此

(十五)延喜式古寫本并由紀主基　卜定延喜儀式第二曰天皇即位之年大臣奉レ勅召二神祇官一密封令レ卜二定悠紀主基國郡一奏盡訖即下二知其國一

悠紀主基日本紀私記云師說湯者潔齋之義也今云由紀者湯之義云云主基者是其次云云然則湯者是伊波比岐與麻波留之辭也國史云悠紀是齋忌國主基次國云云撿按行事儀式云次以二大中納言二人參議一人一爲二悠紀主基兩所一撿按行事一四位各一人五位三人辨在二此中一諸司判官已上四人史在二此中一主典已下五人官掌一人使部直丁各一人

大祓儀式曰八月上旬卜二定大祓使一發遣左右京人五畿内七人七道各下旬別卜更役發遣左右京一人五畿内一人近江伊賀伊勢一人幣帛儀式曰發二遣奉天神地祇幣使大神宮一諸王五位已上一人中臣一人齋部一人山城大和攝津各一人河内和泉一人七道各一人中臣齋部二氏相半差也

卜定田及齋場儀式云耕畢賜二直會酒肴一次使與二國司一共卜二定稻實殿地一即以二木綿一繫二賢木一立二地四角一次卜二定御田六段田稱二大田一稻稱二撰子稻一即使及國司向二御田一以二木綿一繫二賢木一立二田四角一令二夫四人守一之

雜式人等儀式云次卜定物部人十五人男六人女九人造酒童女一人稻實公一人大酒波一人大多米酒波一人粉走二人相作四人燒灰一人採薪四人歌人廿人歌女廿人歌人歌女並不レ卜

摠盛以レ籠儀式云次以二韓櫃七合一各長二尺六寸廣一尺八寸深一尺二寸實二御稻一十四束一合別二束一合爲レ荷裹レ之以レ薦居二筥形一足高一尺四寸籠二合敬□深多小籠口徑各二尺深各一尺五寸合別實二御稻二束一二合爲レ荷荷別有二四脚一以二木綿貫木一挿二籠上一其擔丁外更有二攀相副者一下鋪設一夫擔レ之安同以第廻二立於内及蓋等一訖割取先板四束儀式云就中以二先板四束一別納二高萱御倉一會日稻實公所レ負稻也自餘爲二白黑一外握屋預先作備將卜齋場儀式云次應レ卜二定齋場一之狀竿二山城國一至二於其日一撿按以下率二神祇官一到二北野一卜二定其地一其儀神祇官悠紀主基兩國司幷山城國郡司等就二荒見河一陳二置秡物一各五色薄絁各一尺云々並國辨備訖行事以下雜色人以上共就二秡場一大秡訖各就二幄下一卜二定齋場一悠紀在レ東主基在レ西行事以下先同行二野中一執二其塊一將歸卜定其料物各酒一斗云々卜訖立二標四角一立二賢木一著二木綿一方四十八丈爲レ限即令二山城國葛野愛宕兩郡司守一レ之

鎭祭儀式曰次卜二定小忌院一訖宮主卜部率二行事幷小忌官人以下一鎭二小忌院一其料各五色薄絁各一尺云々並以二國物一備レ之

堀一處儀式曰次卜二定御井所一若當處舊井方一丈二尺内外兩院儀式曰次齋場預官人等點二定齋場内外院服幷雜殿地一外院方四十丈内院十二丈服院十丈　其内院悠紀在二外院西一主基在二外院東一服五許丈

其井二處儀式曰御井在二院外東北角荒見川東一童女井在二其東一儀式曰次各禰宜卜部郡司等率二造酒童女物部人六人工一人夫十人一始堀二齋場御井幷童女一于レ時童女先執二齋鉏一堀二御井一次禰宜執レ鉏堀二童女井一物部人工夫終レ之與清曰以上は古本延喜式第七踐祚大嘗祭式の裏書也延喜式古本は二卷缺本あり標紙は唐

織にて裏は慶長寛永の比の人の書簡の反古を張たり中に林道春に送れる書簡もありもと水戸西山君より林春齋に賜ひ春齋より文子園にあたふ文子園は一橋殿の御坊士にて中上順治が祖也今も順治が家に藏傳せり延喜儀式とて引たるは今の貞觀儀式也日本紀私記とて引たるは釋日本紀十五の卷五丁には私記曰古稱二須支一師說次二於齋忌一也今稱二主基一者訛也先師說曰謂二悠紀一者湯貴也是則浴レ湯齋忌之義也主基者相二繼于湯貴一同可二齋忌一之故用二次字一とあるに殊也

(十六)うるかの歌　濱眞砂といへる草子に後水尾院の御製「淀川の瀨にすむ鮎のはらにこそうるかといへるわたは有けれ」按に下學集氣形門に鮮鱗ウルカと見ゆ和名抄龍魚部に細魚漢語抄云細魚宇留里古云云節用集宇部に細魚ウルリコ云々此ウルリコの轉せしにや鮎の子にいへるは細鱗魚和名安由とあればよしありてきこゆ

(十七)兼好頓阿錢と米の狂歌　同書に世の中しづからざりしころ兼好のもとより頓阿法師の方へよねたまへ錢もほしといふ事をくつかむりにおきて

兼好

よも　ねさめ　たぎくら　ま袖も　へたて
かゝの　も　秋　なき
し　かりほ　に　かせ
返し　頓阿
よねはなし錢すこしといふ事を
よね　ねたく　はて　なほ　しはし
は　わか　は　さりに　こひ
なし　せこ　こす　たに　ませ

(十八)女今川の歌　女今川は西三條殿作也その中に「心たにまことの道にかなひなはいのらすとても神や守らん」「山川の木のはの下のうもれ水おとしてもゆくおとせてもゆく」「ものいへは父はなからのはし柱なかすはきしもうたれさらまし」「ほとゝきす人もとはのおほかるはしなすくなしと一こゑそなく」此等の歌中に引たりうけがたきもの也

(十九)柿本大明神贈位號　柿本法樂廿五首和歌の巻首に云石見國高角人麿の御社今度御神階の宣命

正一位柿本大明神與被レ勅候　二月朔日

禁中陣座に而其儀式有レ之勅使　吉田宰相上卿中院大納言其外役人三月十八日にも宣命石見國人麿寺へ中

院殿御越被レ成候事明石月照寺へは女房奉書被レ遣候

女房奉書寫

今度柿本社神號位之事一事のさはりもなく御さたをとげられいよ〳〵天下太平寶祚えん長の御きたうせい〳〵をぬきんずべきのよしはりまの國やしろつかさに申つたへられべく候〳〵もし

中院大納言どの
中山大納言どの

元正天皇養老七癸亥年三月十八日より享保八癸卯年迄千年也

霞始聳　法皇御製

あかし潟春とはかりにたちそめて島もかくれぬ朝霞かな

柿本人麿石見國高角郡に宮たちし給ふ今年千年に及べるにより法樂の和歌廿五首巻頭は

朝霞　藤原玄良前田隱岐守

朝まだき霞をわけて世は春ののとけさ告るうくひすのこゑ　巻軸は

寄神祇祝言　藤原資親長澤壹岐守

あふけなは幾千代かけてみしめ縄なかく榮る神の

めくみを

題者侍從資親　判者侍從賢長

與清按に侍從資親は飛鳥山十二景和歌出題の人也その跋に大中大夫拾遺補闕藤君資親とありて從四位上待從也長澤壹岐守とて表高家衆也賢長は前田伊豆守卷頭の作者玄良は前田隱岐守にてこれはた高家衆也

(廿)片舞諸舞　片舞とは樂人の口傳に求子駿河舞を諸舞といひ求子ばかりを片舞といへど何にても一對ある舞の一ッを舞を片舞といひ一對に舞を諸舞といへる也名目抄に其名見ゆ

(廿一)龜居　龜居といふは足先を開てゐるをいふ名目抄に載せ古書に所見おほかり

(廿二)乘尻　五月六日騎射の儀を記したる書に見ゆ近衞式には騎馬とありて騎馬の事を乘尻といへる也車より見れば騎馬は直に馬の背に乘る故に然いふにや

(廿三)籠樣　名目抄に見ゆ除目の時下名の事を行はざれば召名の中に別紙の下名を巻籠て墨を引わざあればその巻籠樣の威儀をいふにや詳解考合すべし

(廿四)尻付幷策勞啓將五紙禮　尻付はたとへば叙位の時藤原朝臣某二條院當年御給除目の時權掾正六位上某尸某内豎所執事勞如レ此名の下に注し付たるをいふ策勞は及第對策を度々したる勞をいふ啓將は看問抄に次將の下陣也と見ゆ五紙禮は桃華藥葉に禮紙の事見え立紙共に五枚なれば也いづれも名目抄に見ゆ

(廿五)平文幷漆薄　管見記永治二十廿六大嘗會御禊裝束宮槻記を引る條に赤懸緒左無文右平文押二摩食一と云々台記仁平三年春日詣の右の乘尻の裝束の中に懸緒紅打ノ絹銀薄ヲモテカタバミノ文ヲ押スと有是等を合考れば金銀白鍮などの平文と皆おの〳〵薄にて文を押たるをいへる也但薄紋は漆にて置たるも落やすければ別に仕法あるなるべし山槐記元暦元年大嘗會の條に平文師あり綾織羅織薄師平文師と並舉たり今も陸奥薄蒔繪とて塗たる器に薄の文を押す樣あり江戸にて漆箔といふ兩山の御靈屋日光の御宮御靈屋などの屋上塀などにおほし頭書富堅草千八丁すに四十ばかりなる男のひたゝれにゑぼしのさしきをたふたふさゝあけさせ云々

(廿六)紙薄　平戸記延應二年四月賀茂祭の條に紙薄非二制限一至二銅薄一爲二制物之内一云々此を考れば紙薄は金銀白鍮銅などの薄紙にはあらずそれより卑きは

雲母にやありけん

(廿七)散物　壽永元、信範記に移鞍の具散物鎧堅食散物轡堅食と見え飾抄移鞍の轡に或平文或金銅と見ゆ此等を合考れば散物は金物の上に漆して箔押たるをいへる也されば文有をば平文といひ但だみたるをば散物といへる也飾抄嘉保二四十七江記を引る條同抄矢尻の注の條などに水付散物また鐵散物など見ゆ物具裝束抄撢の注にも出たれば考合すべし

(廿八)ひらで貝　雅亮裝束抄のひらで貝は薄くすり平めたる貝也雜要抄宇治平等院御幸の御膳の臺の注に螺小鳥ひら貝是をすゆと有ひら文といふもあればひら貝ひらで貝も平にすりたるを云なるべし飾抄に平治秘記を引て押レ貝また舞人裝束の條に仁平元十一二十五秘記を引て赤紐有二螺鈿一と見えて雅亮裝束抄のひらで貝を同事ながら但貝とも螺鈿ともいひたればひらで貝といふ一種の貝あるにはあらず

(廿九)草のかう　くさのかうは夫木抄などにもよみてそはわれもかうの一名とおぼゆ

(卅)綾蘭笠竹笠　綾蘭笠は日笠也石山緣起繪今昔物語宇治拾遺增鏡など所見おほし竹笠は曾我物語富士野狩場の條に見ゆ頭書真文雜記八十七丁オ同四十五丁オウ同卅七丁ウ　竹笠真文雜記八ノ四十八丁オ

(卅一)和鞍　和鞍は異物あるにあらず常の鞍なれど唐鞍に對していへる也尤深さ淺さなどは古今の違あれど今常に用るが則和鞍也移鞍鐙鞍鉢鞍水干鞍なども皆和鞍の中也鐙鞍は古甚に海なき鞍の銀泥をもて彩色したる有是鐙鞍なるべし桃花藥葉に鐙地と有下に赤銅と注したれば銅をはりて鐙を螢くごとく水かねして光を付たるなるべし鐙地といふは上に文など附るゆゑの名なるべし文なきを鐙鞍といへりと見ゆ黑地といふは黑漆に螺鈿にても蒔繪にても紋ある也無文をば黑漆の鞍といふがごとし鉢鞍は裝束抄和鞍の中有其製未レ考移鞍は移馬の鞍也水干鞍未レ考

(卅二)屯食　田安中納言宗武卿の玉函叢說五の卷屯食の事の條に屯食の事くはしく書たる物を見ず顯俊朝臣の記にぞ順德院のいまだ東宮のほど御元服せさせ給ひし時の式の中に屯食百具南庭の東西に舁立とある末に其體謂二盛屯食一者盛レ筒居二二階一白木棚一荒屯食之樣人々頗成二不審一歟先例又無二所見一人々只以二短冊一下下行云々尤違レ例歟仍且歟具盛屯食許一舁二立之一可レ爲レ例歟と注せり注後花山院相國の記正元元年東宮御元服の條に屯食百具分二置版位東西南北行一坊舍人著二褐衣白袴一等自二東中門一舁レ之自二南庭一渡レ西尤奇異也和屯食在レ前荒屯食在レ後而今日荒屯食都不レ見人々不レ知二其體一且承元如レ此云々各調進人々以二短冊一給二諸司一云云とも有注以上もとは盛屯食を前に立荒屯食をば後に立るとなるに此比すでに荒屯食の事辨へたる人なくて短尺に書て下行せられける也さて二階の白木の棚とあなるも其樣例のとは違たらんいかにぞなれば常に棚ならば上のこしにも下のこしにも屯食を居べければ屯食百具とやはいふべき百具といふをもて見れば屯食一具を二階の棚一脚に居たるに疑なしされば其二階も棚にはあらで二階の臺なるを筆にまかせて棚とは書たるにや又その比は物に名つくることも今樣と違たり已に唐匣の蓋の上につくり付たる小箱を蓋の上の懸子といひ尺箱をも尺袋といひ香壺を小筥といふめればかの臺を二階の棚といふも其比なべていひたるなるもしらず注江次第御元服の條に螺鈿唐匣蓋上懸子中置二面脂口脂筥各一口一次懸子置一御本結三筋長短一御幘一條下略こゝに次の懸子とは身の中の第一の懸子の事也又雜要抄に尺袋また尺筥と有て其形はまたき箱の蓋はなからをつがひて箱の緣につけて左右をひらく樣にしたる物也又香壺箱二合其一合有二小筥四合一とありこゝに小筥とあるは彼香壺の事也その形は階の高欄の柱のうへのやうにていたゞきのとがりたる本にふたへばかり帶のやうに高き所ぞ蓋のかぎりなる合すれば全く玉形のやうになる也是等をもて見れば二重の臺を二階の棚といへるはちかき也已上注是をもて考れば今よめどりなどに二重の臺とて龜甲形の折櫃の樣なるに立ざまにすみ形をゑりてした臺とて少し大きなるを是もうへのさまに龜甲形ゑりたる高欄をつけて足は花足也さてうへなる臺の高欄のうちに龜甲形の筒を置て其筒に折立して餠をだいにて上にくだものを盛て床の上に二具置事の有也注此二重の臺も膳部の家によりてさま〴〵也是はいかまのやうがよろしければそれを用て書り但今は下臺にも折立をすれど是は後の人のくはへたる也上の臺にだに折立をせざる下の臺にすべきにあらず注已上又古き十二支の歌合の繪にも此二重の臺の下

臺なきを酒宴の座にするゐたるを書たり又保元の軍の繪巻物の中に是も下臺はなくて四方なるを酒宴の所に居たるを書けり是等もて見れば此二重の臺も古くより有し物也尤晴の時は下臺を加へ常には加へぬなどは是にもかぎらず又祝には龜甲形を用る常の事也此物かく古き繪にも見えながら古へ何といひし物と云ふ事をしりたる人なし思ふに是その用は食物を屯也其體は筒に盛て二階の臺に置顯俊朝臣の記に合ひ且幾具といふに叶ひぬ其上いにしへにも御賀注隆房が安元御賀の記に献物百棒中門よりとの南の脇に立屯食百荷おなじきらうの東の庭にたつと見えたり已上注 皇子御降誕注中右記元永二年皇子御降誕五夜七夜屯食を中門の外に舁立といふと見えたり已上注 帝東宮の御元服にも用られ注東宮の御元服の屯食の事は已に本文にあり已上注 親玉以下の元服注資長朝臣久安五年の記に左大臣の息元服雜事の中に屯食盛十具荒十具と有て末に屯食廿具兼日召二御庄一今夕分二賜之一膳部雜色大夫殿方宇治雜色 御厩主殿所前栽作釜殿牛飼政所大夫殿已上件所々相計分と有已上注 又女御參の家注玉藻に承元三年三月廿三日故攝政前太政大臣長女有二入宮事一とある條の末に屯食分給所々と有吉記壽永元年立后雜事の中に屯食六十具盛卅具荒卅具別廿具盛十具荒十具とも見えたる也已上注 五節の姫君出せし家雜要抄五節雜事の中に屯食十一具凡人の賀注台記久安三年知足殿院の七十の算賀の事をしるせし中に小舍人所御厩政所御車副政所法師已上屯食一屯食卅具盛廿具と見えたり已上注 又一の人の春日詣注台記一の人春日詣の中に屯食十七具餘分二具支配御車副八人二具牛飼二人一具神馬十人二具神寶所仕丁十六人三具御供仕丁七人二具居飼廿四人五具と見えたり已上注 などにも此物を用ると日記どもにあればむこざりの所あらはしにはまして用べし今もいはひする時饗するばかりもなき下の所々には干いをなどあたへて酒のますする事のあなり古へは是をさる方に用ひしかばすべてさるべき祝どもには用しなるべけれども家々の日記も公ざまのことをむねと書て家なることは洩す事常なれば載ざるにて用ざるにはあらぬ事しるべし是等合せ見れば今の二重の臺の盛ものぞ古くよりいひし屯食なると疑なし又それが中に荒屯食といへるは承元の比はしらで器などまでもかはるとやいひあへりけん顯俊朝臣も盛屯食の樣をかゝれしにも

盛樣をば書ずして器の事を書れき考るに類聚雜要抄に保延の仁和寺競馬行幸の御膳等の事をしるせし末に殿下の前の物の中に盛菓子六種と有て大臣の前の物には交菓子一坏と有一種の菓子も交菓子も坏に盛なれど一種もるなるを盛菓子といふなるは古きならはしの詞也けりかゝれば盛屯食とは一種をもりたるをいひ荒屯食とは種々の物を交盛たるをいひたりとはしりぬまことに一種なるはうるはしく盛なめりされば和屯食ともいへり種々なるは物のかたちおなじからねば盛たる姿荒々しければ荒屯食とはいふものなるべし和布荒布などもてもしらるべき也退紅をあらぞめといふも染樣のこまやかならねば也 またかのふるき繪の酒宴の座なる屯食どもは交盛なる也●是ぞ荒屯食にぞ有ける注義輝公の御元服の記に二重の事所々に見えたり殊に將軍宣下の御祝の條には二重を御所侍持出御座御向の方兩方向合て置也と有東宮の御元服には南庭の東西に相むかへて屯食を立るなればそれをうつされしにや又古くは凡人の元服などにも屯食を儲るほどにては庭上の前左右に相むかへて置たるを此時は萬いたく略されたれば殿の中ながら立られしもしらず近き比は家の中に床といふ物をつくりてあなるに彼二重をおなにむきにうしろを壁にして居る也此床には常にはおもく思ふ物を置に晴の時はかへりて蓬萊手かけ二重置鯉置鳥瓶子折櫃物などをおくめり蓬萊はむかしは庭によそひたると也鯉鳥は大饗の立作りの幄にて切てまゐらする料に鯉をおく也鳥は鷹飼持參りたるを彼幄におくされば是れももとは庭の事也瓶子又酒部の幄のうつしにて是も庭の事也折櫃物も式には捧物とてもてつらねて庭に出●るめり是等もとみな庭にあなる物を床に置なれば屯食はた庭に立る物なれば手かけ二重は屯食なるといよ〳〵疑なし但相むかへて置事は床の形横長なれば何をも皆むかふざまにおけば也已上注 今二重の臺といへるは五色の餅をむねとは盛なれどうへに昆布勝栗など樣のものを盛りて盛留には梨子をじくを上にして置なればかの荒屯食也又手かけ箸初の臺などいへるは二重の臺のやうにてやゝ小きに稻毛盛或はソギもり折盛などにしてうへに長き伸蚫を五枚ばかりはさみて立うへはかざりにて下は一色を盛たればこは盛屯食とやいふべからんなれども上なる伸ぞ專らの事にて下は何をもすれば

アラトジキにやつくべき（ニイ）（ニイ）　今は手かけも二重（もうにひろごり）に盛有いにしへにはなき事也たゞ塗桶のごとく盛あげたるぞ本也ける　さば今は盛屯食はなくて荒屯食のみ也古き繪の二の屯食も荒屯食なれば承元の比も荒屯食のみにや有けんさるを器の樣におもひつるより荒屯食を盛屯食と心得たるもしるべからず是は不用の考とやいふらんなれどもし承元の比の盛屯食の圖など今に殘りあらんもはかりがたければさる時の料にとて書加へたる也かく書付し程に上總國にては今も此物をどんじきといふと人いへりげに古き詞はひなに殘りたるぞおほきと云々 頭書筆記百二ノ九十一與曰屯食ハ頓食ニテ屯ト頓ト相通ズ今ノ辨當ノ一也能改齋漫錄六頓々ノ條可レ考杜詩ニ頓々食ニ黃魚一トアルハ辨當ノ度ゴトニ黃魚ヲ食ヘルヿ頓ハ一ニハカノ義俄ニ設ケタル食ヲ云一種ノ物ニアラズ類聚名物考飮食部三大光明藏三ノ六十四丁ヲ一頓草廬雜談下五丁ヲ世說襄陽羅友有二大額一少時多謂二之癡一嘗伺二人祠一欲レ乞レ食往太早門未レ開主人迎レ神出見レ問以二非時一何得レ在レ此答曰聞二鄕祠一欲レ乞二一頓食一耳頓食空華談叢四ノ卅六丁ウ貞丈雜記六頁五十一丁ヲ

（卅三）餅臍　和名抄に餅臍楊氏漢語抄云裏餅中納煮二合鵝鴨等子幷雜菜一而方截一名餅臍玉篇云臍達濫反肴也云々餅麥餅也饊は今いふ餅にて別也餅は小麥を主とし米粉を交せたる也モチヒはねばる物にいふ索餅といふも今昔にムギナハといへり索餅の製方大膳式に見ゆ今製餅臍法小麥粉一合（六勺）米粉六勺（鹽一勺）（大膳式素餅の方に據れば五撮なれど鴨卵を入るゆゑ陪すべし）鴨卵三　以上の分量にて方二寸厚五分許の物八枚を得る也先小麥粉と米粉をよく摺合せ鴨卵を入て又摺水に鹽をかき立入加へ又すり扱雜菜を入よくまじへわくにこめて蒸し上下及四方を切用ふ但本方は煮也其味も形も蒸したるに同けれど潰安し故蒸用を佳とす

（卅四）薯蕷粥　宇治拾遺に利仁將軍の家にて薯蕷粥製れるとありみせんといふものを加へたるよし見ゆみせんはにひせんにて山槐記に漿煎と書てニキセンオモユナリと見ゆ圭水式漿の料には米のみなれば常の漿はオモユ也又御粥漿料には澡豆料小麥二升五合と有薯蕷粥に用しは小麥にまじへたるニヒオモユなるべし米を飯に煮て布篩にてすり漉して澡豆の料の小麥をいれて夫に水を入てすき切にしたる薯蕷を烹たるをいもかゆといへりとおぼし和名抄の製方は唐法にて皇國の製とは別也又はみせんは密煎にて甘葛煎といふにや 頭書和名抄十六ノ十丁ウ

（卅五）荏裏（エヅヽミモムキ）　延喜式に荏裏六斗　瓜九苅（カウモリ）斗　冬瓜七斗　茄子六斗　菁根四斗　鹽一斗二升　醬未醬滓醬各一斗　按に荏裏は紫蘇の葉もて裏をいふ六年は紫蘇の分量也瓜は白瓜にや菁根は大根なるべし醬は醬油也未醬は味噌也滓醬は二番醬油

にや此細かに切て紫蘇卷にするをいふ

（卅六）衝重（ツイカサネ）幷三方　衝重はもと何にもあれ物の蓋を打かへして身の上に居たれば衝重とはいへる也後には折櫃にて身よりも蓋の大きなる製のものにいへりと見ゆ芝神明の九月の市にチギ桶とて飴を入て賣る物古の衝重によりて作り出しものにや身よりも蓋大きく蓋左前也今のフチ高の蓋も左前なればおなじよしにや衝重大三方中三方小三方廣三方繪三方などみな寸法傳はれり事長ければ此に省く繪三方は繪折敷の遺風也

（卅七）膳の定　膳の定も朱器ノ臺盤などをはじめ品おほし大膳式雅亮裝束抄江家次第大將饗の條攝關の子の書始の條賀茂祭使の條釋奠の條類聚雜要抄習取の條江次第御齋會の條玉海建仁元正廿三の條など考合すべし

（卅八）山緒　山緒といふは鳥を枝に付る緒をいへり

（卅九）揚の彩色金物　物具裝束抄に黃金物（大臣用レ之）散物（サンブツ）（大將用レ之）黑金物（納言已下公卿用レ之）と有黃金物とは眞鍮也散物とは黑金物の上に箔を押たる也黑金物とは黑漆にてぬりたる也春日驗記二條關白殿の出仕を書たるに揚の金物銀泥にて彩色たるは銀金物をも用られたるにや

（四十）魚綾　魚綾は山鳩色といへるはいかにぞや主計式に花綾などみなその織付たる形もて名付たれば魚綾もとは魚形を織たる綾なるべし御綾御料などの字義とおもへるは後の誤なるべし

（四十一）白藤の歌　常德院殿御詠草に白藤につけて藤原尙隆につかはしける「君か心するがの松山こさはこそ此藤波のかけてうらみめ」返し「藤波のかけてたのまはよもこさし深き契の末のまつ山」

（四十二）水向（ミヅムケ）　今俗水向とて佛前に奉るは閼伽の水にて物語書などの所見おほし儒家の玄酒も又水向也禮記禮運篇に玄酒以祭注に玄酒井中水也皇侃曰太古未レ有レ酒猶用レ水代レ之示レ不レ忘レ古也（通鑑綱目四十三ノ百十六丁ヲ唐玄宗開元廿四年の條引用）とあるを考て知るべし

（四十三）手爾乎波　學者は末學　通鑑綱目四十三の卷百廿二丁ヲ唐玄宗開元廿五年の條に勅曰進士以二聲韻一爲レ學多昧二古今一云々按に此聲韻の學は本朝の手爾乎波學者の類也 頭書「テニヲハ」ト云コトハ万十九ノ十七丁注に毛能波三箇辭闕レ之また毛能波氏爾乎六箇辭闕レ之ト見エタルガ始ニテ仙覺ノ万一ノ跋ニ見ユ

（四十四）散切髪　散切（ザンギリ）といへるは寛永の比の書に見えて今もしかいへり通鑑綱目四十三百廿三丁ウ唐玄宗開元廿七年の條に悉收二散髪之民數萬一云々とあり頭書曾我物語廿三ノ十六丁オ散髪

（四十五）女子髪をを切て男に送る事　今俗男女口說を生じ或は心を通ずるに髪を切て男に送る事あり通鑑綱目四十三百五十八丁ウ唐玄宗天寶五年の條に楊貴妃忤レ旨遣二歸於外舍一の後妃對二使者一涕泣曰金玉珍玩皆陛下所レ賜惟髪者父母所レ與乃剪二髪一綠一而献レ之と見ゆ

（四十六）嫁母　嫁母は父死後他人に嫁せる母をいふ也通鑑綱目四十三の卷百六十一丁ウに嫁母謂二父卒母嫁一と見ゆ

（四十七）寒族　親族の少き者を寒族といふ通鑑綱目四十三の卷百六十九丁ウ唐玄宗天寶六載の條に寒族則孤立無レ黨とあり

（四十八）烏悉　佛頂を烏悉といへると古書所見おほし慧琳音義四の卷六丁オ大般若經第三百八十一卷の條に烏悉膩沙焚語也如來頂相之號也觀佛三昧海經云如來頂上肉髻團圓當レ中涌起高顯端嚴猶如二天蓋一又一

譯云二無見頂相一各有二深義一也云々又八の卷八丁オ大般若經第五百七十二卷の條に烏悉膩沙梵語也此云二頂相一佛頂也云々玄應音義廿三の卷廿五丁ウ瑜伽師地論第四十九卷の條に烏悉膩沙又作二嗢悉尼沙一或言二鬱尼沙一此云レ髻謂頂骨涌起自然成レ髻也云々翻譯名義集五の卷廿三丁オに嗢悉尼沙此云レ髻無上依經云鬱尼沙頂骨涌起自然成レ髻故名二肉髻一烏悉膩沙此云二佛頂一云々祖庭事苑四の卷二丁ウに烏悉膩沙相謂二佛頂髪骨肉合成量如レ覆レ拳青圓殊妙二云々此等の說を考て知るべし通鑑綱目四十四の卷十七丁ウ唐玄宗天寶十載の條に吐蕃婦人辮髪戴二瑟瑟一最好者一顆易二一良馬一といへる瑟々は碧珠なれど頂上の具に瑟の字を用るとよしありげ也

（四十九）源氏姓　通鑑綱目四十四の卷四十六丁オ唐玄宗天寶十四載の條に元和姓纂云晉末南凉禿髪傉檀之子賀入二後魏一魏大武謂レ之曰與レ卿同レ源可レ姓二源氏一とあり本朝の源氏の字はやくかしこに見ゆ

（五十）封建治之本　同卷八十二丁ウ唐玄宗天寶十五載の條に李泌曰古者有レ功則錫以二茅土一傳二之子孫一太宗欲レ復二古制一大臣議論不レ同而止由レ是賞レ功以レ官夫以レ官賞レ功有二二害一非才則廢レ事權重則難レ制嗣使二祿山有二百里之國一亦惜レ之以遺二子孫一而不レ反矣爲レ今計莫レ若レ疏二爵土一以賞レ功臣一則雖二大國一不レ過二二三百里一可レ比二今之小郡一豈難レ制哉云々與清曰此治國の妙術也本朝は神祖一統の後悉く小封建となりて執政の職に大國の諸侯を用ず實に千載不拔の法といふべし

（五十一）告身并空名告身　同卷九十九丁ウ唐玄宗天寶十五載の條に空名告身空苦貢反唐選擧志親品及流外則判補皆給以レ符謂二之告身一其中有二褒貶訓戒之辭一空者不レ塡二寫名姓一從二其臨レ事自注授也云々また百十丁オ唐肅宗至德二載の條に是時府庫無二蓄積一朝廷專以二官爵一賞レ功諸將出征皆給二空名告身一聽二臨レ事注レ名有レ至二開府特進異姓王一者上諸軍但以二職任一相統攝不二復計一官爵高下一及レ是復以二官爵一收二散卒一由レ是官爵輕而貨重大將軍告身一通纔易二一醉一凡應レ募入レ軍者一切衣二金紫一名器之濫至レ是而極焉と見ゆ告身の事唐書選擧志通典通考六典などに出たれば考合すべし寶石類書四十三に諸書の所見を擧ぐ頭書告身ノ下ノ制度通四ノ廿丁ウ同廿丁オ僧ノ度牒も告身におなじ佛祖統紀四十二ノ五丁ウ東大寺要錄十卷雜事章之餘に貞觀二年朝廷設以二大會莊嚴一供養於二法會庭一賜二文武官五位下告身一即時著二緋衣一觀者羨レ之云々

（五十二）指を切ル　倡女指を切て信を示すと今の世のならはし也通鑑綱目四十四の卷百十三丁ウ唐肅宗至德二載の條に張巡睢陽を守れるに安祿山が將尹子奇これを攻ると甚しく孤城募兵にて危きをり南霽雲圍を犯して出臨淮の賀蘭進明に救を請へども事行ざるをり齧二落一指一以示二進明一曰霽雲既不レ能レ達二主將之意一請留二一指一以示レ信歸報座中皆爲泣下とあり通鑑考異曰韓愈書二張中丞傳一云拔二所レ佩刀一斷二一指一血淋漓示二加蘭一と見ゆこれ指を切て信を示せる也血判起請などおなじ血をすゝるはた似たり頭書百因緣集六ノ卷四丁ウ示郭事條に大國ニハ何ニテモ不審ナル事ニハ切指證トテ指チ切レバ必ズ用ル事也云々史記張敖鴦二其指一出レ血曰君何言之誤且先人亡レ國云々索隱曰鴦レ指以表二至誠一爲二其誓約一云々

（五十三）源賴貞が文書　松浦靜山殿より古文書をおこされて源賴貞といふ人の傳をとはれしに細川八郎次郎賴貞なるべくこたへまゐらせぬこは細川八郎俊氏が次男にて八郎四郎賴直が弟讃岐守賴春が叔父也文書の寫

新田義貞打取了與黨凶徒等爲二誅伐一引二率軍勢一馳參可レ被レ致二軍忠一候然者可レ被レ行二恩賞一之條如レ件

建武三年二月十一日　　源賴貞

(五十四)佐田の天滿宮　水玉集雜部に永井信濃守領し來れるさだと云所の天神の社荒廢して年久く成ぬるを修造の營功を終て彼社にこめ奉りたき念願とて御製を申請し時遣はさる「家の風よゝに傳へて神垣や絕たるをつく梅も匂はん」按に水玉集ハ御水尾院御製にて千三十六首井竪橫兩角十六首あり前橋少將源忠清所持の本上下二卷あり上卷は春夏秋下卷は冬戀雜也

(五十五)高良山十二景　老槐集に高良山十二景の中青天秋月「寺の名を月にもしれと秋風やあるより青き天にすむらん」老槐集一卷天和二年年內立春の歌を卷頭とす

(五十六)誕日七種のおくり物　同集に四月十三日予誕日を尋きゝて水戶中納言光圀卿より七算賀せられしに七種のおくり物の中に

七旬華旦月　南極爛儲精
轆々蒲輪輾　欣々槐木榮
嚴霜高氣節　蓺圃檀歌名
仁孝元惟壽　何爲美老彭
和韻

わかえよと若菜に增る七種を思ひつゝみけるはとも精しな
かきりなく君もふるすな行末のしるへと賴む千代の榮えを
もてはやすなさけそくむに淺からぬ世に七十のかすならぬ名を

(五十七)加行(クギヤウ)　加行といふは眞言宗などの僧が行をするといふその作法は彼僧家に就て問べしケギヤウと訓べし

(五十八)もらふと云詞　新撰字鏡食部卅丁に餬餌飴三形同云々寄食也云々阿佐利波牟(アサリハム)又毛良比波无(モラヒハム)云々定賴卿集古寫本詞書に右大辨花もらひ給ふとて「春くれて散はてにける花のうへは木の本にこそとはまほしけれ」云々群書類從本には缺たり平家物語三の卷十八丁ウ有王島下の條に片手ニハ魚ヲモラウテ持云々など見えて「モラフ」といふも近き俗語にはあらず

(五十九)ひゝな屋　御堂關白道長公の御もとよりひな屋まゐらせたまふとて「おもふといつとはいへとひたゝくみこまかに作るものならめやは」御返事「ことつくる飛驒の工のなかりせはなにをかつけてか雲ちしらまし」又ふのとの若宮の御ひゝな屋にさまざまの物うゑなどして山のうへに神の社ありわらはにみてぐらもたせてそれにかゝる「君か代に天くたりける神なれは千年の松の中(ナカ)にこそいはへ」云々此ひな屋ひゝなや共に同物にて小き家の形を作りたる也今も雛形といふは其物の形を小く作れるをいふにおなじ源氏若紫廿八丁にひゝなゝどわざと屋ども作りつゞけてとあるもひゝな屋也蜻蛉日記にひゝなぎぬといへるは衣の形を小く縫たるにてから國の掃晴娘今俗のてる〳〵ぼうしの類なるよしは既に擁書漫筆にいへりひゝなの假名は釋日本紀に據て比々奈と書べしひゝなの名空穗樓の上の下卷五十七丁同嵯峨院五十八丁源氏若紫十二丁廿二丁廿八丁廿九丁同紅葉賀十丁狹衣四の下卷十二丁榮花御もぎ(クリナ)同淺緣十丁などに見ゆ其外擧るに遑なし岩瀨醒が骨薰集を考合すべし

(六十)下名　江次第二の卷叙位篇廿五丁ウに上卿令レ持二下名於外記一入レ筥或上卿取二副於笏一云々又廿八丁オ上卿仰二外記一令レ進二硯續紙等一此間令レ參二議書一可レ給二二省一下名(近例請印了上卿參上問書レ之　書樣　四位五位書二姓尸名一六位不レ書レ尸依レ敎書二其本位一無レ漏二人一公卿不レ入二下名一)

四位　源朝臣、、　橘朝臣、、　平朝臣、、
五位　藤原朝臣、、　高橋朝臣、、　惟宗朝臣、、
　清原眞人、、
三位無位
　某、、(王氏叙多者可レ注二二世某人一三世某人四世某人一皆可レ注レ世)
六位　紀、、　長谷、、　中原、、
無位　源、、

年月日　書二叙位議日一

又廿九丁オ上卿給二下名一令レ挿二式部一筥之緣並兵部筥上一云々又廿一丁オ若二一者守一下名一不レ召二其外人一者叙位人等爲二之如何一云々同書四の卷除目の篇廿五丁ウに若當日不レ行二下名事一者召名中各卷籠別紙下名等同引レ墨給二外記一退出

下名書樣(雖二後任之人一無二同階人一可レ載)

四位　藤原朝臣、、　源朝臣、、　大江朝臣、、
五位　橘朝臣、、　高階朝臣、、　平朝臣、、
六位　紀、、　中原、、　藤原、、

年月日　式兵共如レ此

又四十丁ウ除目下名(除目下名往代天皇出二御南殿一有レ召唱レ之儀中古以來於二官廳若外記廳一行レ之)上卿

令ㇾ藏人奏ㇾ可ㇾ行ニ下名一由ヒ次著ニ議所一仰ニ外記一令ㇾ進ニ下名一（清書上不ㇾ行ニ下名一退出　若有ニ進任者一令ニ參議ㇾ他上卿參入給時例也）別紙ニ可ㇾ奏歟云々○一條禪閤江次第抄二の卷叙位の條に下名書ニ叙人姓名一下ニ賜二省丞一故曰ニ下名一是白馬節會日叙列二省丞以ニ此下名一引ニ四位已下一也三位已上不ㇾ書ニ下名一故二省不ㇾ引四位自ニ正上一至ニ從上一入ㇾ之但越階叙ニ從上一人任ニ本位一入ニ五位一歟或四位叙ニ三位一者猶書ニ下名一云々又云下名書樣五位已上者依ニ本位一叙日書ㇾ之无ㇾ煩有ニ六位官一者依ニ官次一故先外記史次式部民部諸司氏爵諸院宮給如ㇾ此書ㇾ之必不ㇾ守ニ薄書樣一也諸宮給無ニ本官一諸司有ㇾ官仍書ㇾ上也無位依ㇾ蔭者王氏幷一位嫡子等依ㇾ蔭也已上參議取ニ次第一也云々江次第考二の卷叙位の條に各々兩三書ニ於下名一下名ニハ一人モラスコトナク四位五位六位人ヲカクコト先例也云々薩戒記應永卅七年六月條に下名書樣（宿紙也即書ㇾ之先式次兵

四位
藤原朝臣宣光
五位
藤原朝房長
藤原朝俊國
六位
藤原則正
紀春弘
應永卅二年正月卅日

四位
藤原朝臣雅行
五位
藤原朝臣持季
藤原朝臣公有
六位
源雅秀
源安信
應永卅二年正月卅日

已上下名如ㇾ此每位任人多之時四位三人許五位四人六位三四人云々然而今度任人少々仍如ㇾ此雖ニ一人一依ㇾ有ニ其人一不ㇾ及ㇾ載ニ勅任並兼國之人一者也無ニ其位一人者雖ニ件等人一可ニ書載一也若又一向其位無ニ任官一人者不ㇾ書ニ其位一也又式下名六位民部丞彈正忠必書ㇾ之先例也又兵下名六位無ニ靭負尉一之時雖ㇾ有ニ將監一猶載ニ兵衛尉一者先例也如ニ此事一近年人々無ニ沙汰一云々（已上實石類書四十三の卷所ㇾ引　日本紀略寬弘元正廿五の條同五年正廿九の條に下名と見え同萬壽三年十廿六條に除目終有ニ下名事一云々おもひのまゝの記に南殿にてをり名くだされんなど有しかどそれはとゞまりぬ云々傳宣草下卷廿一丁オ　安齋後院下五十一丁カ　などにも出たり　頭書　實石類書四十四

（六十一）判井裏判　判とは花押の事也裏判は紙の表に名を書き紙の裏の名にあたりたる所に花押を書こと也裏判は必上書などの謹上せる狀に用る事也吾妻鏡三の卷に賴朝裏御判とあるも奏表也

（六十二）總講師權講師　松浦靜山殿より問おこされし古文書に

下　和泉國國衙方總講師職事

阿闍梨　良盛

右云々

故以下

正平十年三月十日

とあり始に押花あり　○按に此花押未ㇾ詳總講師職はたゞめづらし國の講師は類聚三代格三の卷延曆廿四年十二月廿五日官符に諸國國師任限六年益預ニ他事一煩以ニ解由一自今以後宜ㇾ改ニ國師一曰ニ講師一每國置ニ一人一擧ㇾ才堪ニ講說一爲ㇾ衆推讓者ㇾ申ㇾ官奏聞然後聽補一任之後不ㇾ得ニ輒替一但讀師者國分寺僧依ㇾ次請ㇾ之者云々と見えその外所見おほかり後には講師の員數おほくなりてその中に一人總講師といふものゝ有けるにや又按に延喜玄蕃式に諸國講讀師者察與ニ僧綱一俱孟冬一日簡定牒ニ送省一云々政事要略五十五の卷元慶五年九月十六日格に應ニ天台眞言兩宗定ㇾ次擬ニ補諸國講讀師一事云々寬平遺誡に諸國權講師權撿非違使等欤一兩許ㇾ之不ㇾ可ㇾ爲ㇾ例云々續日本紀延曆二ノ十庚戌の條に大國師小國師あり同延曆三五朔の條に國師遷替の事あり類聚國史延曆廿十二壬子符に改ニ國師一爲ニ講師一事あり太政官式に講讀師赴任給ニ

傳符ニ續紀寶龜元五乙丑國師乘驛朝集の事あり

(六十三)錢をえる　妙法寺記錄に錢ヲエルといふ事所々に見ゆ東寺文書抄四の卷卅九丁ウに定ニ錢撰一事

一百文の內口さしの分ふるせに十文洪武二文宣德二文永樂六文已上廿文なり

一地せにの內よき永樂五文大觀嘉定以下うらに文字のあるせによき錢の內たるべし

一少分づゝもこれをおふて用べし

一日本せにわれせにをのぞく但少かけたるはよき錢の內たるべし

一口ざしの程うり物をかふちきになす事あらば罪科同レ左

右條々堅被ニ定置一訖若有ニ違犯之輩一者男は頸をきり女はゆびをきらるべき也恣ニえり又えらする輩あらば町人として注進せしむべし見かくさば同罪たるべし私けんだん同爲ニ町人一可レ致ニ注進一之由所レ被ニ仰下一也下知如レ件

永正九年八月卅日　　對馬守平朝臣

散位神宿彌

近江守三善朝臣

美濃守藤原朝臣

按に錢を撰とは百文の錢串(ゼニザシ)の內を撰分て利を爭ふ也公の御定に不レ從して品をわかち錢串の法を守らざる也右の文中にてよき錢と惡錢の品分明也惡錢はビタ也鐚の字を用るは作り字也 頭書 甲陽軍鑑一ノ廿四丁オ東寺文書抄四ノ卅九丁ウ四十丁オに委シ

(六十四)座頭の房の妙音講　佐竹の家士平塚山城守瀧俊が文祿元年五月朔日肥前名古屋陣中より本國常陸留主の面々へ贈れる狀に何もノ〳〵新茶あぶり寄合ての雜談共推量申候ぢん中をも定而無ニ心元一とは何も思はれ候べく候へども國々不ちあん內にて候間座頭のみやうおんかうの座へ出て見物もの語の體たるべく候云々　按に座頭の事臥雲日件錄にくはし 頭書 妙音菩薩品法華經ニ有

(六十五)トックリいんべ燒御留山(トノヤマ)　平塚山城守瀧俊(佐竹家士)が文祿元年五月朔日肥前名護屋陣中より本國常陸留守の面々へ贈れる狀に「やけ山」と云山備前の境に而候山中は上道五里程候中々徒然なる道に而候(常陸北郡也)伊部(常陸)北の郡へ越候湯袋山に似候いんべと云村を某は通り候爰にてとつくりかめなど作る所にて候兼而は備前

の國中より作り出すべきと存候所に此村にかぎり候龜など燒候かまあまた候處に先年太閤樣御下向之砌御覽有てかゝる天下の重寶をあまたやき候ては口惜き由被レ仰とゞくうちやぶらせられ候唯一所指被レ置候きとつくり作候所見物申候更々つもりの外迄に候諸細工の中にも是程成義有まじく候老人にて日之內に百程作り出し申候もやう筆に書がたふ候歸國之上物語可レ申候云々　與清按にトツクリは樽(タル)をタルといふにおなじく酒を垂し出す物をタルといひ字も樽と書き陶口より酒のドクリ〳〵と出るより酒陶をトクリといへる也ドク〳〵の清水なども水の出る音によれる名也節用集登部食服門に陶トクリ又得利トクリと見ゆ運歩色葉集登部に陶トックリ酒ヲ入ルヽ器云々とも有得利と書るは音を借たる而已にて意義なし又今俗にお留筆(トノヅサ)お留山(トノヤマ)お留燒(トノヤキ)など官の御許なくてはものせねよしいへりインベヤキを貴くせんとて豐太閤のたゝ一所にせられたるはお留燒(トノヤキ)とやいふべき 頭書 海上行靈抄一にカヘイン印部燒物ヲ出ス所云々是は於布古崎より大多府へ到る間也類聚名物考調度十四常山紀談五之中卷池田家の長臣森寺秀勝が事ないへる條に其子の政右衛門へ稻葉伊豫守一鐵のもとより備前の陶とて德利を被レ送けり云々守武千句六丁オ猫何にて「むこ入の道のほとりの花すゝき」とくりをもたせ秋風そふく」

(六十六)軍役無役　慶長三年七月三日秀吉公御朱印にて加藤左馬之介へ被レ下たる狀に三万七千百石爲ニ御加增一被レ下レ之本知六万石　合九万七千百石之內壹万者無役八万七千石之軍役可レ仕候云々

(六十七)琉球　慶長年錄に慶長十四年七月七日島津家久所ニ討取一之琉球國家久へ被レ下候一本云四月島津琉球渡海攻敗而生ニ捕國王一七月歸朝於ニ彼島一令ニ撿地一漸十二万石餘有レ之云々琉球の事日本紀に夜玖島東鏡に貴賀井島など有琉球神道記中山傳信錄南島志駿府政事錄昆陽漫錄琉球事略など考べし

(六十八)若氣井男娼(ニヤクカゲマ)　今世のカゲマ垂髮の事をむかしは若氣といへり若氣勸進帳あり文明壬寅の冬の作也其文に平朝臣井尻又九郎忠勳(タノスキ)謹白ニ小僧喝食若衆一言云々また滑稽詩文一卷あり男色の詩多し江島兒が淵に身を投し白菊丸が歌も載たり男色の事海人藻芥に見えから國には龍陽君彌子瑕をはじめ史記漢書に佞幸おほかり後に男娼といふ癸辛雜識にくはし若衆を垂髮といふは玉海吾妻鏡に見ゆ詩經には總角とあり催馬樂にアゲマキの歌ありてころびあふよしいへるは男色也今ニヤケ男などいふは男娼(ニヤク)めきたる

男のよし也 頭書 志田章子十丁オに君もにやくに御座あり我等もわかき者なれば云々又四十丁オ御年もにやくに御座あるがいづくよりいづかたへ御こほりあるぞと問ければ云々

（六十九）三寶　三寶は佛法僧にて推古紀の憲法に見ゆ史記貨殖傳二丁ウ には農工商の三民を三寶といへり大論廿二の卷九丁ウ 祖庭事苑四の卷一丁ウ 翻譯名義集一の卷二丁ス 五の卷六丁ス 三藏法數八の卷廿四丁ウ 廿六の卷廿三丁ス 大藏法數八の卷十四五丁ス 卅五の卷五丁ス など考べし

（七十）かゞし燒かゞせ案山子そうづ　似我蜂物語中卷四丁ス に物くふとのつねならねばしだい〳〵におとろへ山田のかゞしのごとくにぞ成にける云々按にかがしはかゞせの轉語也日蓮書錄外□の卷に燒ガゞセとあるは節分夜の燒串の事にて鰯の頭を燒て柊に刺たる也江戸にてヤキガラシといひ武相の田舍にてヤッカゞシといへりヤッカゞシは燒令レ嬶の通音也山田のかゞしも猪鹿の嫌物をくゆらして令レ嬶おどろかしむるゆゑにさはいへりさて引板案山子などもおなじく鳥獸を驚して田實を食せざる物なれば俗にいひうつしてそうづをかゞしともよべる也そうづは古事記に山田の曾富騰又は久友彦ともいふ神にてそほづとは雨露にぬれそぼちて立るよしの名久友彦は崩彦にて立るまゝ古く成行ば自然崩るゝよしの名也玄賓法師が「山田もるそうつの身こそかなしけれ秋はてぬれはとふ人もなし」とよめるは僧都によせたる也是を案山子といへるは宋人の詩に見えたり引板は万葉にもよみて鳴子といへるも同物也繩して引延おきそを引搖して鳥獸をおどろかすもの也又水車などのさまにものして水の溢て器の覆るをり繩の自から引れて切竹を搖しおと立るもあり 頭書 東里新談上ノ十一丁ウ 鹿火カビ屋ナドノ鹿火ハ則チカゞシ也松永貞德ノ歌仙歌集「押紙」案抜書注五段ひびの條に委北條五代記五ノ十五丁ス案山子「案山子儕六如所レ著蔦原詩話曰吾邦ニテ田ヲ守ル鳥ヲドシヲカゞシト稱シ案山子ト書ク彼邦ニテハ何ト云ヤラン偏ク詩文等ニ氣ヲツクレドモ未レ得予曾テ惟有ニ蜀人贈ニ竹弓ト作レルモ據コロアルニ非ズ偶宋ノ利登ガ田家ノ詩ヲ看ル小雨初晴歲事新一聚江上迭ニ初春一豆畦種罷無ニ人守一縛得黃茅更似レ人トコレ正シク案山子ノコトナリ 事語篇ニ鷹備天工開物ニ出トアリコレハ案山子トハ別ナリ又曰松本愚山云カガシノコト鵠亭樂府ニ草防禦トアリ樂府ハ詩餘ノ書ニテソノ題ニミユ余按ズルニ元宋无詩ニ殘稅驅將兒子去豆畦却倩草人看是マサシク案山子ナリ

（七十一）へちまの皮のだんぶくろ　似我蜂物語中卷五丁ウ においとそなたの中だによくばふたりのおやはへちまのかはのだんぶくろ〳〵此小うたを母おやの次の間にゐるともいはず若きもの尻をたゝきてうたひけり云々按に絲瓜の皮もて縫合せたる袋は物も入らず破れて用なければ打捨てかまはぬよしのたとへなるべし

（七十二）鐘を叩て佛にならば　同卷六丁ウ に金をたゝいて佛にならば鍛冶丁の若衆はてんとしやり〳〵佛と云歌をひと比子共うたひけり云々按に此似我蜂物語は寛永の比のものとおぼゆるにその比かゝる小唄をうたひし也後には金ヲタヽイテ佛トナラバ神田鍛冶丁ハミナ佛とうたひかへたりテントシヤリ〳〵ハ鐵を打音なるを舍利〳〵佛とよせたるなるべし今世テットンカチといふはテントシヤリ〳〵の轉なるべし

（七十三）ざみさし蟣虱　酒醋醬油澁などの上に浮て凝るものゝ出來たるをば「ざみ」といへり似我蜂物語中十一丁カ に酒を酢に作りやうの事先はじめは上々酒一升酢一升水一升壺に入夏の內日のあたる所に出しほし付れば上々の酢になる也上にざみなどはる也皆々こし取て吉云々按に「ざみ」の名義未レ詳小蟲などの義かとおもへどさにもあらじ「ムシ」の約「ミ」なれば虱は白蟲也蟣は布蟲の略なるべし又蛆を「サシ」ともいふは小蟲の略也野馬臺詩注に小蟲をサイシと訓るはサムシの誤なるべし

（七十四）しゆらい錢　似我蜂物語中十五丁オ にあげ錢しゆらい錢急に乞ければのべるともくつろげる事もならずして島原の道心者主人にも親にも勘當せられ云云按に今もシユライ負などいふ語あり雜用の事にいへり字面は後に考べし

（七十五）御僧　今俗の語に出家を指てオシャウといふは御僧の誤也和尚の義にはあらず和尚は位號にて平僧にいふべき稱にあらず似我蜂物語下廿三丁カ に御僧始終を聞給ひて云々と見ゆ御僧樣といふをオシャウサマなど訛りいへる也 頭書 新撰狂歌集下十五丁オ雜に「あやしや御僧たれにかりきぬ」

（七十六）九子母　漢書成帝紀一丁ス に母曰ニ王皇后一元帝在ニ太子宮一生ニ甲觀畫堂一云々應劭曰甲觀在ニ太子宮甲地一畫堂畫ニ九子母一師古曰甲者甲乙丙丁之次也元后傳言レ見ニ於丙殿一此其例也而應氏以爲在ニ宮之甲地一謬矣畫堂但畫飾耳豈必九子母乎云々 老學菴筆記に錢穆父風姿甚美有ニ九子一都下九子母祠作ニ一巾紵美大夫一坐ニ于西偏一俗以爲ニ九子母之夫一故都下謂ニ穆父一爲ニ九子母夫一云々按に九子母は震旦上古の神仙にてそのめでたき子持なるをもて祭祀せるならん太

平廣記明一統志などに載ためれば後に考注すべし

（七十七）三昧火三昧五三昧火消三昧　本草綱目六の卷火部一丁陰火陽火の條に人之陰火二命門相火也起於北海玖火也遊行三焦寄位肝膽云々三昧之火也純陽乾火也云々大藏一覽一の卷入滅品第七に於是力士獨炬熬之終竟不然迦葉告言大聖寶棺三界之火所不能焚何況汝力而能燒耶如來胸中三昧之火隨聲而發迸出棺外漸々荼毗經于七日香捺乃盡云々注に三昧之火謂生死二法中生散死定故指墓處曰三昧云々三昧は翻譯名義集四の卷十五丁ウ示三學法第四十三に三昧此云調直定又云正定亦云正受圭峯疏云不受諸受名爲正受遠法師云夫稱三昧者何專思寂想之謂也云々三藏法數九の卷十七丁ウに三ノ三昧出法界次第梵語三昧華言正定亦云正心行處謂衆生之心從無始已來常不正直得是三昧心行正直故名三昧云々又十八丁ウ三ノ三昧出成實論梵語三昧華言調直定亦名正定正受云々平治物語參考本上の四十一丁ウ中の九十五丁ウ下の卅四丁ウ平家物語三の二盛衰記八の十一丁ウなどに般若野の五三昧といへる地名あり五三昧は五輪三昧の事にて三藏法數廿一の卷十三丁ウに五輪三昧出釋禪波羅蜜次第法門一輪有運轉摧碾之義梵語三昧華言正定謂行者修習禪定三昧亦必勇猛精進摧破惑業從淺至深從凡人聖亦猶輪之義也一地輪三昧二水輪三昧三風輪三昧四金沙輪三昧五金剛輪三昧とあり五三昧は行者の禪定三昧を修習せし處の義なるべし又田舍人墓處を三昧といへりこれ生散死定の義にて三昧に死定る也又五輪三昧より轉りて五輪の塔ある所なればにや又山臥火消三昧の法を行ふは煙火の上を歩ども熱きことなし水印を結び火消するよしの名目也

非書　續古事談二卷類從本上卅六丁ウ大習度論第四十七摩訶衍之餘に三昧の事くはしく論じたり可閲墓なき三昧と云事しづか草子廿一丁ウ火消三昧は宋高僧傳十七ノ十七丁ウ鹽尻一五三昧は類聚名物考凶事四

（七十八）學者必可知事亦不知でもあるべき事　學者の必知べき事は歷代の事蹟儀式作法詞言の用法などもたとへば神武天皇の御諱は云々御治世は云々崩御山陵は云々などは歷代の事蹟也元三朝賀などの禮は儀式作法也歌よみ文かくに詞づかひを正して不誤は詞言の用法也亦不知でもあるべき事は枕詞の意義物語詞の語釋やうの事ども也たとへば「あし引」は「山」といふ枕詞と心得「こよなく」は「殊の外」といふ義と心得て妨なきをさま〴〵に說を立ていひのゝしるは無益の勞也「こそ」とかゝれば「けれ」「けめ」「らし」など結び「そのやなに」とかゝれば「る」「ん」など結ぶよし宣長が詞の玉の緒紐鏡などによくいひたればそれに從てさてあるべし詞の自他の別は上よりつゞきては「花をちらしゝ」「おはしましゝ」などいひさらぬは「せしみそぎ」「かくぞせし」などいふにて「せし」「しし」の差別明かに又「他」には「とりぬ」「しぬ」などいひ「自」には「とりつ」「しつ」などいへるにて「つ」「ぬ」の別しらるゝ類皆古き例に從べしこは詞の八衢に例を擧たる限りはよし例なきはさるとわりありても用がたし都て例證に據べし道理の說は立べからずこれ學者の心得べき第一義なればかまへて小學者流の論になづみかゝはるとなかれ

（七十九）喝食の髮　喝食は僧になるべき兒童の未得度の內をいへり滑稽詩文寄喝食詩に昨日應情年少叢袈裟相忘待紅顏淡粧只以掛肩髮引傳雨中衰老翁云々此詩に掛肩髮と作られるは切髮のさまも此外喝食の事を作れる詩おほかり

頭書　禪宗にて垂髮童形を喝食といへり自然居士詩詞に爰に自然居士と申す喝食の御座候が云々

（八十）江島兒が淵井白菊投身　滑稽詩文に喝食之投身白名菊嶮イ崖嶮處棄生涯十有餘霜在刹那花質紅顏碎岩石峨眉翠黛雜塵沙云々此外戀の詩五首ありいづれも白菊を戀しくおもへるにや又歌二首あり白菊が辭世也「白菊トシノフノ里ノ人トハヽ思ヒ入江ノ島トコタヘヨ」「ウキコトヲ思ヒ入江ノ島ナラハスツル吾身ハ浪ノ下草」按に新編鎌倉誌六の卷卅三丁ウ兒淵の條に此事を載て建長寺の僧自休藏主雪下相承院の兒白菊といへり詩も七律にて下に衣襟只濕千行淚扇子空留二首歌相對無言愁思切暮鐘爲驅促歸家一の四句あり又自休が歌に「白菊ノ花ノナサケノ深キ海ニトモニ入江ノ島ソ嬉シキ」ト詠テ其マヽ海ニ沈ト云々

（八十一）少年易老學難成　康熙帝又は朱子の詩として人口に膾炙せる七絕に少年易老學難成一寸光陰不可輕未覺池塘芳艸夢階前梧葉已秋聲といへるは滑稽詩文に出て寄小人詩也又朱子の詩ともいへり出處可考

（八十二）御無心井玉の瑕　人にしひて物を請を御無心まうす又は無心をいふなど今の俗語也そは心もな

く乞求るよしの語也滑稽詩文美人の詩に毛頭(ケガシラノ)光臨如(タマキズカナ)月出(ル)又看一笑似(ル)花開(ク)承聞無心御座候嗚呼是此玉瑕哉 頭書 鉢源抄十本卷五丁ォ伶人物語條に八幡ニ永秀ト云僧侍ケリ云々アル時別當ノモトへ行キ侍リ別當定テヘツラフ心モヤト思ナガラ出アヒケリシカバ物語ノ後ニ無心申度侍由申スサレバヨト思シニ御頭知鎭西ニシカ〳〵ノ所ニ甘竹侍由承及候也所望ノ由申タリケレバ思ノ外ナル□ニテヤサシクゾ覺エケル云々

(八十三)若衆垂髪喝食兒若氣　滑稽詩文に寄ニ若衆一詩あり又喝食の詩おほし若氣勸進帳にも井尻(シリマタ)又九郎忠勳謹白ニ小僧喝食若衆一云々又比叡山謂ニ一兒(チゴ)二山王一專翫レ之云々催馬樂には角總(アゲマキ)の歌あり玉海文治元十七の條に可ニ垂髪一云々吾妻鏡には垂髪おほく出たり 頭書 垂髪をよめる歌義政公「常磐山とはにはさかずいはつゝし春の日數をたつれてもとへ」云々慈照院集に見ゆ柿沼覺書卅八丁ウ万重房が狂歌に「わかしゆとはたかいひそめし桶なれはそこの心はいれてこそしれ」閑吟集卅七丁ォにくい若衆をおもいらせうとて竹へげの丸橋をわたいた東寺文書抄四廿八丁ウ御兒樣云々

(八十四)高野六十那智八十六尺中間小者火番　滑稽詩文の文に以ニ不淨之糞門一爲ニ煩惱之塵穴一者也高野六十那智八十禪僧不レ擇レ年故自ニ六尺中間一至ニ小者火番一晝採レ薪汲レ水夜洗足淨レ身或與ニ客僧一同宿重ニ紙衾一或與ニ長老西堂一雙ニ蒲團一無レ貴無レ賤以レ情爲レ主者也云々高野六十那智八十は二山の僧六十八十に及べる老人をも嫌はざるよし也六尺は今もいふ駕(カゴ)六尺也岩淵夜話に六尺添肩替肩などいへり中間は吾妻鏡相國寺供養記塵塚物語などに中間男とも見ゆ 頭書 甲陽軍鑑九ノ下卅丁ウ御中間がしら衆十人云々親長卿記文明五八廿八ノ條小者中間等云々景濟草子十六丁ォに一時のまうでにも中間小者はなやかに云々高野六十那智八十の事東關子に高野の紙屋と云所より漉出す紙は一帖六十枚也今浪花にて傘を張紙也又熊野牟漏郡小塚村より出す紙は一帖八十枚なるゆゑ斯いへるよし見えたれどしひごと也武具要說上十四丁ォ中間衆室町日記一ノ十四丁ォ火の用心驚筑波二ノ十一丁ウ

(八十五)二度の食時　いにしへ食時は一日に二度にて滑稽詩文の文に二度之食一度減云々とあり瓦礫雜考にも出たるにや可ニ考合一

(八十六)念力岩をも徹す　俗言に念力石(イハ)をもとほすといへるは滑稽詩文の文に念力之矢十度放十度中云云又虎と見て石にたつ矢などもに歌によみて李將軍が石を射徹したる故事におこれる也石を射通したるためしから書に所見おほし楯人宿禰が鐵の盾を射貫たるたぐひ御國にもおほかりなん

(八十七)法界吝氣并水をさす　今の世リンキ者又ハホフカイリンキなどいへる俗語あり滑稽詩文の文に逢ニ法界吝氣一被ニ云立一如ニ亂桶一餘ニ世上人目一被レ指(ラシ)レ水似ニ茶釜一云々吝氣ハヲシム氣也人の上を吝(オシム)チタム也被ニ云立一如ニ亂桶一とは桶を結(ユフ)を云立(イヒタツ)るによせたる也亂桶とは破桶の事にや被レ指レ水似ニ茶釜一とは人のこき中に水を加(サシ)て薄くするよし今もいふ詞也

(八十八)念者遣人　滑稽詩文の文に念者占ニ下紐一遣人引ニ手袋一文之取替斷絕云々念者は若衆を念(オモフ)よりそのおもひ人をさして念者といへりオモヒビトヽ訓べし遣人は文を遣人(ヤルヒト)也念者は集中いとおほく出たり 頭書 南浦文集下五十三丁ォ昔々物語卅一丁ォに昔は衆道といふ事有て十四五六七八の男に生れ付よきは勿論大躰の生付にても念者といふもの持たぬ若衆は一人もなし云々

(八十九)昵話(チワ)　今俗チワヌルチワグルヒなどいふはもと昵話より轉りて男女の懸想戲の事にいへる也滑稽詩文の文詞に寺中老若共懸レ思門前男女皆引レ津通ニ錦木之千束文一其々盡ニ昵話一云々此昵話の事にてムツガタリの字音也

(九十)人を振付る井鬚籠に雹　俗言に人をふり付るといふは滑稽詩文の文詞に何歟時々馴始今者中々振(イツソヤトキ〳〵ナレソメテイマハナカ〳〵フリ)心兎角此身(コヽロトカク)「雹(アラレ)」于鬚籠(ヒゲコ)一死(ナハ)晴(ハラスガ)レ思(マシア)ヲ益阿唯浮世刀(ナタ)ニ于生木(ナマキ)ニ話流(ハナシタダス)レ涙(ヲ)量(バカリ)云々振心は振付心也鬚籠に雹は籠(カタ)に汲(クム)る水のたとへ俗にもかごに水といへり生木(ナマ)に刀とはキシミて切難きたとへにや未レ考 頭書 守武千句卅一丁ウ耳籠あり南浦文集下四十四丁ウヒゲコ室町日記十九ノ七丁ォ下學集下卷十三丁ォ器財門に鬚籠ヒゲコ云々枕草子五ノ四丁ォ物草大郎草子に栗柿梨ひげこにいれてしひと小刀取そへていだしけり云々ヒゲコ源氏初音四丁ォ浮舟四丁ウ

(九十一)欲の鵰股(サヽ)を割　滑稽詩文の文詞に欲鶉割レ胯云々此は欲心の女が誤て股をそこなふを鵰(トリ)が貪欲にて鳥獸などを捉誤て爪(ツメ)の股(マタ)を割(サク)にたとへたる也 頭書 砂石九ノ十八丁ウ欲心ニ頂ナシ

(九十二)男色をオカマと云事　滑稽詩文の詩に無レ限心中藏彌露灯前一夜淚如レ雨他時有レ時可焦レ思鹽竈烟兮松島浦云々此詩松島に待とよせ鹽竈に「オカマ」をよせたる也後世男色を「オカマ」といふも緣源あり

(九十三)神田橋　滑稽詩文の詩に請君他日相問家在ニ神田橋下邊一と見ゆこは鎌倉の地名なるべくおもはるれど名の同じければ江戸の神田橋の對話にせんとて抄出せり

(九十四)男色密道若道　男色の事を密道若道などいへり若氣勸進帳に三國有ニ密道一厥用雖レ同厥名各別支那謂ニ之押瓶一身毒謂ニ之非道一扶桑謂ニ之若道一通ニ用于三國一眞俗共賞翫矣殊本朝者桓武天皇御宇從ニ弘

法大師ニ此道專盛而京鎌倉之諸五山大和近江之四ケ大寺其外都鄙諸宗公家武家之人雪月爲レ便時歌爲レ媒云々また剩以ニ密道ニ容易流布而撫蘇女子小兒諳レ之擯レ之云々男色は周の代に彌子暇あり漢に鄧通董賢の類あり淮南河間王有ニ愛好童年ニその外棄に逸なし男倡といへるは男色を賣者にて本朝の「カゲマ」也鳥羽院男色を好給ひしよし海人藻芥に見え台記に陰陽頭が祈禱にて男色の叶へるよしあり增鏡八廿四丁ウには關白家平公男色を好給ひて童を法師の兒のやうにかたらひたまひ此御執心にて賴基も死たるよし見ゆ江戸の男倡家ふるくは外神田花房町にあり今はなし湯島天神の社邊よし町兩所猶繁昌せり頭書五雜俎八ノ四丁オウ鹽尻九ノ下同十五續古事談五詳本下五ノ十二丁オに或人に問テ云フ柿沼覺書六十二丁オに衆道の文に中條出羽守と有レ之候云々衆道は若衆の道と云心也物道若道昔々物語卅一丁オに衆道云々同卅一丁ウに男色云々谷響續集四ノ十九丁オ廿丁オウ東海道名所記一ノ五丁オ若道尙書伊訓の比ニ頑童ニ誠已ニ男色也

（九十五）大夫神職大夫猿樂大夫舞々大夫　大夫は二種の訓法あり左右京中宮修理などのカミを大夫といふは上下共に濁るべし五位の唐名にて衞門大夫兵衞大夫左右近大夫無官大夫なども皆清ていふべし唐名はすべて濁る例のよし多々良問答に見ゆこは宮職令妓にいひたれば考合すべし吾妻鏡二の卷廿二丁ウに太神宮權禰宜度會光倫號ニ相鹿ニ郎大夫ニ云々四の卷廿四丁ウに伊豆三島神主盛方號ニ東大夫ニ盛成號ニ西大夫ニ云々旅宿問答四丁ウに心玄門云其邊ハ何クノ人ゾ矣答曰關東武藏國ト申武藏ハ何レノ地ト問波羅ノ郡西別府ノ者ト答其邊ハ在家歟山伏歟ト問某ハ大夫ト答玄問曰於ニ大夫ニ神職モアリ舞々猿樂ヲモ大夫ト云何レニテ渡玉フヤ答曰我等神職ニテ候問曰神職大夫ト舞々ノ大夫トハ一ッ位歟各別歟大夫小嘆ノ舞々大夫ハ近年ノ者ニテ候神職大夫ハ神代ヨリノ者ニテ可レ例無レ類申ス云々久兒若ト曰フ因緣舞の上手アリ云々經實卿天奏ス二條院有ニ御叡感ニ叙ニ權大夫ニ云々按に神職の大夫は五位に叙せし神官を大夫といひしより轉りて後はすべて神職の通稱のごとくなれる也猿樂舞々の大夫は二條院の御宇因緣舞久兒若が權大夫に叙せしによりて呼ならへる也此權大夫はかりに五位に叙せしにて官職の權大夫にはあらじさて歌舞倡妓の稱に大夫とも轉しいへる也頭書神職大夫東鏡一ノ八丁ウ同四ノ廿四丁オ鰺中申次記十丁オ南浦文集下廿一丁オ廿二丁オ

松屋筆記卷之六十七

東都　平與清文儒稿

（一）くらふ　淀の川舟の夜中上下するもの枚方邊を過るをり酒食を賣小舟近くより來て旅泊の夢を打さまさせコリヤ〳〵餅クラハヌ歟酒クラハヌ歟と呼り近年は酒マキラヌ歟餅マキラヌ歟と改よべりとなん餅はくらふべく酒は呑べきをかく罵ては分別なきに似たれど瑯琊代醉編十一の卷知レ來者逆の條に潤レ之以レ風風未ニ嘗潤一也烜レ之以ニ日月一月未ニ嘗烜一也楊用修曰古人之文有ニ因レ此而援レ彼者一有ニ從レ此而省レ彼者一如ニ沽酒市脯不レ食酒非レ可レ食也大夫不レ得レ造ニ車馬一馬不レ可レ言レ造也如レ此類皆是とあるにおなじ

（二）賴母子無盡　下學集下卷態藝門に憑子（タノモシ）日本俗出ニ少錢一取ニ多錢一謂ニ之憑子一也云々撈海一得上卷に今人患難アル時ハ親類朋友社ヲ結ビ金ヲ彙テ相救フ賴母子ト云唐ニモ有ルコト也淸ノ趙恒夫が寄園寄所奇曰近時邑無賴子邀ニ百人一作ニ百子會一人出ニ銀幾兩一搖骰子ニ點多者先收（トル）毎月一應八九年而百人畢收然其先收者冀ニ其不レ能レ終レ局渙ニ社是欲レ圖ニ賴之一耳ト是也先ニ金ヲ收ル者ハ會ノ渙（ワブ）レンコトヲ願フ人ノ黠智和漢同情也云々與淸曰今世種々の憑子あり取拔（トリヌキ）無盡（ジン）といふは圍（クジ）に當て金を收たるもの跡の懸金を出さざる也家質講といふは當圍の者所持の宅地を宛たる券を出して跡の懸金了て後その券を取返す也封金講といふは金預（アッカ）りの當人に任じて封じ置て取るよし也積金講といふも亦似たり又湯島天神の富谷中感應寺の富目黑不動の富を江戶三富といふ萬人の小銀を集て一人百金に當る也文政年中になりては京江戶大坂の富何十ケ處といふ事をしらずこれを射得（アテ）たる一人の爲には富の名さもあるべし不運不當の萬人の爲には貧亡（講ともいひつべし貪欲の下人これがために產を傾け亡命するものおほかるぞなげかしきや頭書無盡と云名目は無盡財におこりてもと僧家の語也宋高僧傳十五ノ卷十七丁ウ唐杭州靈隱山道標傳に置ニ田畝一歲收ニ万斛一置ニ無盡財一與ニ衆共ニ之云々同廿の卷十三丁オ唐洛京慧林寺圓觀傳に李源父喪居守天寶末陷ニ於賊中一遂將ニ家業一捨入ニ洛城北慧林寺一即僧之別墅也以爲ニ公用無盡財一也佛祖統紀卅四ノ三丁オ法門光顯志に無盡財東大寺要錄六卷封戶水田章御筆勅書に伏願以ニ此無盡之財寶一因施鸞筑波集三の卷廿五丁ウ南部定之が句に「君が方にてこころいそがし」「三吉野のたのもしに行年の暮」光雙紙上十一丁オうれしき物

の品々の段にたのもしのふだつきあてたるはうれし云々新撰犬筑波夏部「おや子ながらぞ賀茂へまゐれる」「たのもしをとりの日にあふ祭りして」東寺文書抄八ノ廿四ウ無盡錢建武式目三丁オ世事百談四ノ廿一丁ウ見聞集三ノ廿五丁オ又廿七丁オ

(三)飲レ酒如レ飲レ藥并醉後吃レ茶　元の薩都剌が薩天錫詩集卷上擁レ爐夜酌嘲二張友寄レ詩謝一詩に張生不レ好レ飲飲レ酒如レ飲レ藥得二酒味濡一脣形影先落魄野人飲不レ辭飲盡盃中涸酒渇向二茶壚一松風語二幽壑一芳山道士胡不レ來一夜燈花向レ人落と作れるは俗に酒を呑を嫌て藥を呑がごとしといへると醉後好て茶を喫と人情同日の談也

(四)傘(カラカサ)の詩并天の說　唐笠のことは倭漢の書に所見おほし薩天錫詩集上卷に雨傘の詩あり開如レ輪合如レ束剪レ紙調レ膏護二秋竹一日荷葉影亭々雨裏芭蕉聲簌々晴天却陰雨却晴二天之說誠分明但操二大柄一常在レ手覆盡東西南北行此詩よく傘(カラカサ)のさまをいひたり又二天の名目あるを知べし今は日傘(ヒガサ)雨傘(アマガサ)の製殊なれど此詩に据れば晴雨に一物を用たるにや日笠の名はやく聞えて日笠の浦など名所にもあり頭書唐笠承久物語中廿八丁ウ良丈雜記六ノ廿丁ウ

(五)天燈　薩天錫詩集下卷に天燈の詩あり高掛長繩百尺餘直飛二紅焰一上二天衢一一包春髓蒸二元氣一九轉靈丹煉二太虛一綵鳳抱成吞二日卯一赤龍唧出照二天珠一高々不レ受二飛蛾撲一長使凡人仰面吁云々これ龍燈の類也丹後天橋立に天燈龍燈あり

(六)飛梅一夜松の詩　異稱日本傳上之三卷に新芳薩天錫雜詩妙選藥全集を引て天滿宮の詩を出せり無常說法現二神通一千里飛梅一夜松萬事夢醒雲吐レ月觀音寺裡一聲鐘云々松下見林が今按あり可レ考與清按に此詩異稱日本傳に引出し世の人口にも膾炙せりされど薩都剌が詩集を薩天錫詩集といひて上中下三卷ある中には見えず妙選藥を閱て疑をはるけまほし天錫は薩都剌が字也頭書飛梅ノ事扶桑拾葉廿二ノ卷ノ注

(七)歌讀も學問すべし　似雲法師が聞書礒の浪の上卷に超嶽院殿の仰とて云其方なども隨分書廣く見らるべし草庵集などのやうなる能歌ばかり見られてもあまり稽古にもならずあしき歌をもとりまじへて見候へばこちらのよき歌のよきといふ違ひめしらるゝもの也よき歌ばかり見候へばたとへば都のものが田舍へゆかぬものは都のよきことをしらずさのごとく其方などもをり〳〵は定家の未來記雨中吟など見らるべし夫にて草庵などのよき歌のよき所しらるゝ也云々

(八)歌の能見所見　磯の浪上卷十三丁ウに能見所見の事能見とは山幾のことを詠に此方より能見候たる所をよむ也所見とはその山がつに直になりたる心にて見らるゝ也云々

(九)りきみと云俗詞　同書上卷十四丁ウに力味ありてそれゆゑに歌心よからず隨分力味いれざるやうに只何ともなくよまるべしかく申す此方もりき味やゝもすれば入たく成て殊外歌の害になり候云々俗言にりきみを活用して「りきむ」「りきめ」などもいへり

(十)しをり　書籍讀さしたる所のしるしに挾おく箋をしをりといふは山ぶみのしをりにたとへたる名にて南嶺遺稿に說あり山岡明阿が類聚名物考人事部六に歌林記識論といふものを載て其圖說を著せり正治百首定家卿「柴の戸のあと見ゆはかりしをりせよわすれぬ人のかりにこそとふ」夫木抄如顯法師「しをりしてならひにけりな里人のかへる山ちに出る月かけ」新古今春上西行「よしの山こそのしをりの道かへてまた見ぬ方の花をたつねん」山家集下「しをりせて猶山深く分いらんうきこと聞かぬ所ありやと」これらの歌を引ていへり可レ考　朱書枝折は柴折ノ略也シバハ枝葉也紀に折取枝葉ヲ「シバヲリ」トヨメリ頭書シヲリの字「夾刺」と書べし趙文敏書尾跋に案レ書觀レ書亦匪二易事一觀レ書者淨レ几焚レ香澄レ心靜レ慮勿レ挼レ臘勿レ折レ角勿二以レ夾レ刺勿二以作レ枕勿二以倭レ字勿二以レ唾揭レ幅隨レ損隨修隨レ開隨拆レ之得二晉書一者井奉二贈此法一とある夾刺これシヲリ也此跋文海披鈔八の卷藏書に見ゆ枕草子春曙抄一ノ廿四丁ウに御草子に夾算して御(ミ)とのごもりぬるもいとめでたし云々類聚名物考人事部六枕草子一にけうさんと有はしをり也實石七十六

(十一)筆塚　智永禪師眞草千字文の跋に智永禪師王逸少之七代孫妙傳二家法一爲二隋唐間學レ書者宗匠一寫二眞草千字文一八百本散二於世一江東諸寺各施二一本一住二吳興永欣寺一積年臨書所レ退筆頭置レ之大竹篋受二一石餘一而五篋皆滿求レ書者如レ市所レ居戶限爲二之穿穴一乃用二鐵葉一裹レ之人謂二之鐵門限一後取二筆頭一瘞レ之號二退筆塚一長安崔氏所レ藏眞跡最爲二殊絕一命二工刋レ石置二之漕司南廳一庶傳二永久一大觀己丑二月十一日樂安薛嗣昌記姪万とある退筆塚は今の世の筆塚の緣源也頭書五雜俎十二ノ二丁ウ退筆塚

(十二)地氣盡則不レ可レ居　皇明通紀一の卷五十二丁オ元至正廿三年十二月の條に上平二一天下一即有二都レ燕之意一嘗御二謹身殿一親策問二廷臣一曰北平建レ都可レ以控二制胡虜一比二南京一何如翰林修撰鮑頻對曰胡主起レ自二沙漠一立レ國在レ燕及レ是百年地氣已盡不レ可レ居也今南

京與王之地宮殿已完何必改レ圖傳所謂在レ德不レ在レ險遂止云々與清按本朝往代天皇代々遷都し給ひ蝦夷人一代限に其家を燒失へるなど天地自然に叶へるにや周漢の兩都も八四百年の年代を經たる耳にて帝威耀（カヾヤク）るは僅の間也

（十三）聯句　本朝上代聯句の詩作最多し懷風藻に見えたるをはじめ朗詠などにも載たり今世はこれを作る人たえてなし皇明通紀二の卷廿八丁オに洪武元年四月以二翰林學士陶安一爲二江西參政一安在二翰林一上嘗賜二以一對一曰國朝謀略無雙士翰林文章第一家とありかしこにてはその比も聯句を弄べりと見ゆ頭書東見記下廿三丁ウ槐記ニモ

（十四）明の國號　皇明通紀二の卷廿丁ウに洪武元年八月十五日上夜夢當レ天兩日月齊出諸雪雜亂紛飛倏爾底定上謂二徐達一曰此夢何解徐達曰陛下夢二兩日月齊出一即大明字諸雪雜亂紛飛即胡元等賊擾二亂我中原一我明命レ將出レ師一鼓而擒レ之即倏爾底定此吉兆也云々此夢明の國號に叶ひたる吉兆也是の字の御夢の事おもひあはされていとかしこし

（十五）義塚　同書二の卷五十二丁ウに洪武三年令下天下郡縣設二義塚一禁中止浙西等處火葬水葬上凡民貧無二地以葬一者所在官司擇二近城寬閑地一立爲二義塚一敢有下狥二習元人焚一棄尸骸一者上坐以二重罪一命二刑部一著二之律一云々與清曰道路棄露の枯骨を葬るもの皆義塚といふべし余谷中感應寺に義塚を築き朽骨を叢（アツメ）て埋葬せり別に有レ記（ニンベツチヤウ）云

（十六）戶帳并勘合半印（オシアハセリヤウハン）　同書二の卷五十四丁オ洪武三年の條に詔二戶部一籍二天下戶口一書二各戶之鄉貫丁口名歲一以二字號（カシラジルシ）一編爲二勘合一用二半印一鈐記籍藏二各部一帖給二於民一云々與清按に戶帖は令の戶籍に同じく今世の人別帳也鄉貫は生國居地也丁口は人數也名歲は名と生年と也字號は名頭（ナガシラ）の字を類聚し見わけやすからしむる也勘合半印は勘へあはするために印を押切る也半印勘合の制三の卷廿丁ウにも見ゆ鈐記は非常のために記し置くよし也兵備に非常一曰レ鈐（クヽ）といふ字義に據れる也籍藏二各部一帖給レ民戶籍を各部役所に藏し置それに押切（アシキリ）したる戶帖は民に給て持たしむる也されば戶籍は「ヘブミ」と訓て官に留る帳戶帖は「ヘフダ」と訓て民に各々持居（モチヲラ）しむる札（フダ）也と知べし

（十七）鐵券　功臣に鐵券を給こと唐書五代史など所見おほかり皇明通紀二の卷五十六丁オ洪武三年の條の謹按に鐵券之制其形如レ瓦面刻二誥文一背鐫二免罪減死俸祿之數一字嵌以レ金と見え李善長が鐵券の全文を載たれば閱て知べし此本朝の御朱印御墨付御感狀などいへる類也

（十八）孟子　皇明通紀二の卷五十九丁オ洪武三年の條に上嘗覽二孟子一至二草芥寇讎之說一大不レ然レ之謂非臣子所レ宜レ言議欲レ去二其配享一詔有二諫者一以二不敬一論刑部尚書錢唐抗レ疏諫與擲自隨上怒命二金吾一射レ之唐袒レ胸受レ矢曰臣得レ爲二孟軻一死死有レ餘榮一上見二其誠懇一命二太醫院一療二其瘡一而孟子配享得レ不レ廢至レ是乃命脩二孟子節文一凡不二以レ尊レ君爲レ主者皆刪二去之一云々古學者孟子を排するは此說に依て也頭書筆記五十六ノ三段可レ考合二全浙兵制附錄日本風土記一日本古書五經則重二書禮一而忽二易詩春秋一四書則重二論語一而黜二孟子一云々五雜俎四に倭奴亦重二儒書一信二佛法一凡中國經書皆以二重價一購之獨無二孟子一云有レ攜二其書一往者レ舟輒覆溺此亦一奇事也義堂日工集康曆三九廿二講二孟子一趣林玉露七四丁オ

（十九）好男美男　好男美男いづれも「ヨキヲトコ」と訓めど好男は形貌の美醜にはよらず好聞の男子をいへり美男は美貌の男にて俗に云色男などの類也皇明通紀二の卷六十丁ウ洪武三年の條に元滅其臣擁レ兵屢征不レ下者惟王保々耶擴廓帖木兒也上嘗獲二家屬一原レ恩以招二徠之一終不レ至一日大會二諸將一問曰今天下孰爲二好男子一或對曰常遇春領レ兵不レ過二十萬一所レ向克捷足二以當一好男子一矣上笑曰未レ若二王保々一斯眞所謂好男子也上意蓋欲下倡二勇敢一使諸將憤發圖中之耳後保保走二沙漠一不レ知レ所レ終云々此文に據て好男子の義分別すべし

（廿）朱子迂學　皇明通紀三の卷十一丁ウ洪武六年條の謹按に順天日錄云高廟看レ書議論英發不レ襲二故常一每排二朱文公集註一常呼爲二宋家迂淵老儒一云々按に朱子を誹謗せる學派王陽明李干鱗王元貞楊升庵などにおこるにあらず太祖をもて明代非朱の魁といふべし朱熹在世にも陳賈也

（廿一）俚言抄國字解恒言釋　寬明の比より儒者漢籍を假名注して俚言抄と名づく物徂徠が徒これを嘲て國字解と號すいづれも本朝をいやしめたる稱呼にて心よからず余皇明通紀を讀て佳名を得たり三の卷十一丁オ洪武六年の條に詔二翰林脩撰孔克表御史中丞劉基奏府紀善林溫一以二恒言一註二釋群經一時上留二心經籍一以爲經之不レ明傳註害レ之傳註之害在二乎辭煩而旨

深ク乃詔ニ克表等ニ取ニ群經要言ヲ一析爲ニ若干類ニ一以ニ恒言ニ釋レ之使ム之皆得レ通ニ其說ニ一而盡ニ聖賢之旨意ヲ一とあるに据れば本朝の俗言はこれ本朝の恒言也俚言國字をもて稱せんより恒言解恒言釋恒言注などいはんかたしかるべし又漢籍に限らず古書を今の辭もて注せるにも然名づくべし

（廿二）八百孀婦（ヤモメ）　俚諺に越後新潟八百八後家（ヤゴケ）といへりそは新潟は北國の船舶輻湊の地にて倡婦色を衒ものおほし皆一女一室を攜へ一人住して客を曳くそのさま後家所帶の家に似たればこれを後家とよび又數の多をたとへて八百八後家といへりとなん八百を以て多數にたとへいふは若狹の八百比丘などの類也古言の八百日行濱の眞砂鹽の八百合などの遺辭也八百八をたとへにしたるは近江湖に八百八谷（ヤタニ）の水落入るあるは江戸八百八町（ヤチヤウ）などおほかり皇明通紀三の卷廿三丁ウ洪武十六年の條に沐英留ニ鎭雲南麗川之外一有レ國曰レ緬車里之外有レ國曰ニ八百媳婦一皆請ニ內附一云々清人尤侗が外國竹枝詞昭代叢書卷二十六收レ之に八百媳婦詞ありて漢宮嘗說三千女會長何居八百妻應得ニ房中彭祖術一トレ年恰與ニ定婚一齊自注に世傳上會有ニ妻八百一各領ニ一寨一故名元征レ之道路不レ通而返明立ニ八百大甸詞一云云これらの八百媳婦の名よしありてきこゆ八百八後家も八百孀婦にてやもめ住せる女の多きをいへるにはあらじか後家の名も鎌倉比の書に見えて古く聞えたれど倡女（オヤマ）にいはんは似つかはしからぬにや〔押紙〕說鈴崗翁繼志五丁ウ錢塘陸次雲雲士著八百媳婦傳其土酋有ニ妻八百一各領ニ一寨一故以爲レ名其人性緩剝ニ花鳥於眉之間一爲レ飾俗同ニ緬甸一相見以レ把レ手爲レ禮

（廿三）都城邊の喬木折るゝ時は腹心の者に災あり　皇明通紀三の卷廿六丁ウ洪武十八年の條に皇殿西邊喬木於ニ是年正月午刻一忽被ニ風雨擺折一上朝暮視レ朝每不レ悅侍臣請ニ其故一上曰今年爲ニ朕腹心一者恐不レ能ニ晏然一是以不レ悅時至ニ二月一徐國公果卒ニ於病一云々按近來江戶御城朝鮮馬場邊の松折たると有執政松平豆州卒去の應とやいふべき土井大炊頭殿阿部備中守殿などの卒去も同じ比なりき

（廿四）讀書一目十行俱下　明の方孝孺聰穎絕倫雙眸烱々如レ電讀書一目十行俱下よし皇明通記三の卷五十三丁ウに見ゆ余友萩野長號ニ梅塢一世稱は八百吉といへり讀書一目三行俱下云々余一行だに直に下らざるをもて其不才を嘆ことあまたゝび也頭書景德傳燈錄八の卷二丁ウ無業禪師傳に受ニ大乘經一五行俱下讀誦無レ遺云々同廿六ノ十四丁オ續高僧傳廿ノ十二丁ウ南史二ノ九丁ウ北齊書十一ノ一丁ウ〔押紙〕佛祖統紀廿七ノ十三丁オ法師延壽字沖玄總角誦ニ法華經一五行俱下九雜組六十二丁ウ齊曜雜記二卷三丁オ傳文忠公愛レ才條に傳文忠文學雖レ不レ深然於奏ニ牘案一目數行下云々

〔押紙〕讀書一目十行俱下

鵜飼金平名信勝ハ石齋鵜飼信之ノ子ナリ我亞相義公ニ奉仕ス今世ニ行ハル通鑑綱目ノ訓點ハ此人ナリ讀書ニ一目十行俱ニ下ルト云傳フ予コレヲ綠野先生川口長孺及家嚴四村重宣大凡先生鈴水及家嚴ニ聞ケリ綠野先生及ビ家嚴ハコレヲ赤水先生長久保玄珠ニ聞ケリト云後三國志ヲ見ルニ列傳二十一王粲傳ノ注ニ曰華嶠漢書曰應瑒祖奉字世叔才敏善諷誦故世稱ニ應世叔一讀書五行俱下著ニ後序十餘篇一爲ニ世儒者一云々コレヲ以テ觀ル時ハ十行俱下ノ說モ信ナル歟今松屋先生ノ筆記六十七卷ヲ以テコレヲ補フ曰明ノ方孝孺聰穎絕倫雙眸烱々如レ電讀書一目十行俱下よし皇明通紀三卷五十三丁ウニ見ユ余友萩野長號ニ梅塢一世稱ハ八百吉トイヘリ讀書一目三行俱下云々余一行ダニ直ニ下ラサルヲモテ其不才ヲ嘆コトアマタヽビ也ト云々コノ說ニテ金平十行見下シト云ヲ發明ス

（廿五）足底龜文雙痣　足の底（ウラ）に龜甲の文（スヂ）及三並たる痣（ホクロ）あるは貴相也皇明通紀三の卷六十丁オに文皇の足底龜文雙痣ありて後貴よし見ゆ余足底一痣あれど貧且賤にして雙痣の半減の福分を得ること能はされば且嗟且笑頭書唐書安祿山傳續高僧傳廿六十一丁ウ法響傳

（廿六）俗儒腐說　皇明通紀三の卷六十一丁ウ明太祖の皇明祖訓序に蓋俗儒多是レ古非レ今好更常舞レ文弄レ法とあり實に俗儒時情に通せず道理にくらくしてたゝ上古を尊信し今俗を正さんとするは實に腐儒偏見無用の學といふべし同書四の卷二丁洪武卅一年の條王叔英が方孝孺に遺れる書に天下之事固有レ行ニ於古一而亦可レ行ニ於今一者ヒ如ニ夏時周冕之類一是也亦有レ行ニ於古一而難レ行ニ於今一者ヒ如ニ井田封建之類一是也可レ行者行レ之則人之從レ之也易難レ行者行レ之則人之從レ之也難易則民樂ニ其利一從レ之難則民受ニ其患一此君子之用世所レ貴ニ乎得ニ時措之宜一也と見ゆ孝孺これを用るとあたはず儒見にひかれて遂に太祖の遺命を守るに力なく建文帝をして寶祚を失はしめ自己も身命を捨親族を亡し盡せば固陋の過也

（廿七）通天犀帶　三代實錄十八貞觀十二年十二月廿

五日の制に聽二六位已下著一烏犀帶一但有二通天文一者不レ在二聽限一云々和名抄十二腰帶類部に白犀帶白氏詩云通レ天白犀帶照レ地紫麟袍云々陸佃埤雅三の卷犀の條に舊說犀之通天者惡レ影常飮二濁水一重霧厚露之夜不レ濡其裏白星徹レ端世云犀望レ星而入レ角即此也云云本草綱目五十一の上卷十三丁ウ犀の條の集解に有二通天犀一角上有二一白縷一直上至レ端夜露不レ濡云々藏器曰通天者腦上之角經二千歲一長且銳白星徹レ端能出レ氣通レ天則能通レ神破レ水駭レ雞故曰二通天一云々李珣曰通天犀乃胎時見二天上物過形一於角上一故曰二通天一但于二月下一以二水盆一映レ之則知云々時珍曰犀角紋如二魚子形一謂二之粟紋一紋中有レ眼謂二之粟眼一黑中有二黃花一者爲二正透一黃中有二黑花一者爲二倒透一花中復有レ花者爲二重透一並名二通犀一相乃上品也花如二菽豆斑一者次レ之烏犀純黑無レ花者爲二下品一其通天夜視有レ光者名二夜明犀一故能通レ神開レ水飛禽走獸見レ之皆驚云々格知鏡原八十二の卷の條に海語云野犀有レ名二通天一者上角表夜光如レ炬亦奇物也云々三才圖會鳥獸三犀の條に犀之通天者必惡レ影常飮二濁水一云々皇明通紀四の卷十三丁オ建文元年の條に賜二景隆通天犀帶一云々按に通天犀帶の事通鑑綱目及唐書に所見おほし速見見聞私記八の卷螢雪餘筆などにも見ゆ可二考合一 頭書讀博物志

四百九十二

十八丁オ

(廿八)屍立爲二報レ怨之狀一 皇明通紀四の卷四十五丁オ建文五年の條に左僉都御史景清建文再興の義を思て成祖を刺んとを謀り露顯して誅に伏す其屍忽踊レ索行三步爲二犯レ駕狀一と見ゆ忠義の怒氣實に感ずべし大塔宮の御首級頭を含三浦荒次郎の首眼を合せざる類いとおほかり眉間尺が物語將門が米噛(コメカミ)の狂歌などもさもありけるにや 頭書佛祖統紀卅九丁ウ入鹿草子にくびもなきむくろがぬたる所なづんと立ていまたりをおしのけめでのなほしの下よりも氷りのやうなるけんなぬき御座へはしりかゝつて御しとれにいだきつきさりつばいつしごくしで北枕にぞふしにける云々

(廿九)諸神一階 諸神に一階を授けられし事盛衰記百錬抄園太暦等を引て已にいへり今革暦勘文の所見を抄出して考補に備ふ

○改二正治四年一可レ爲二建仁元年一依二承暦五年例一可レ作二詔書文一又天下諸神可レ增二一階一云々已上一卷中之抄出○改二文應二年一爲二弘長元年一次五畿七道諸神奉レ增二一階一之由被レ仰二大内記一云々○改二承暦五年一爲二永保元年一云々是日天下諸神可レ奉レ增二一階一之由被レ下二宣旨一云々○有二改元一事改二保延一爲二永治一云々是日左大臣宣下云應レ早奉レ增二一階一具注進本位管内諸國大小諸神上事今年支干相二當辛酉一典籍所レ載咎徵不レ輕非レ仰二諸神一冥助上何攘二一天禍殃一任二永保例一奉レ增二一階一云々○有二改元一改二正治一爲二建仁一是日天下諸神可レ奉レ增二一階一之由被レ宣下一召二大内記菅原爲長一云々○改二保延一爲二永治一云々是日左大臣宣下云應レ早奉レ增二一階一之由被レ宣下一仰二大内記菅原爲長一云々○次有二改元定事一改二保延七年一爲二永治元年一云云今年相二當辛酉一任二永保例一天下諸神奉レ增二一階一之由被レ下二宣旨一兼可レ令レ注二進本位一之由被レ仰二權右中弁藤原資信朝臣大内記中原師安等一云々○改二正治三年一爲二建仁元年一云々天下諸神可レ奉レ增二一階一之由被レ仰二大内記菅原爲長一云々○改二文應二年一爲二弘長元年一云々同日左大臣宣下云應レ早奉レ增二一階一具注進本位管内諸國大小諸神上事今年支干相二當辛酉一典籍所レ載咎徵不レ輕非レ仰二諸神一冥助上何攘二一天禍殃一任二永保例一奉レ增二一階一云々○有二改元一改二正治一爲二建仁一是日天下諸神可レ奉レ增二一階一之由被レ宣下一召二大内記菅原爲長一云々○改二文應一爲二弘長一是日天下諸神可レ奉レ增二一階一之由被レ宣下一仰二大内記菅原爲長一云々○改二文應一爲二弘長一云々是日天下諸神可レ奉レ增二一階一之由被レ下二宣旨一召二大内記藤原明範一仰レ之云々○次有二改元定事一改二承暦五年一爲二永保元年一依二辛酉一也此日天下諸神可レ奉レ增二一階一之由被レ下二宣旨一云々○次有二改元定事一改二保延七年一爲二永治元年一云云今年相二當辛酉一任二永保例一天下諸神奉レ增二一階一之由被レ下二宣旨一兼可レ令レ注二進本位一之由被レ仰二權右中弁藤原資信朝臣大内記中原師安等一云々○改二正治三年一爲二建仁元年一云々天下諸神可レ奉レ增二一階一之由被レ仰二大内記菅原爲長一云々○改二保延七年一爲二永治元年一云々同日左大臣宣下云應レ早奉レ增二一階一具注進本位管内諸國大小諸神上事今年支干相二當辛酉一典籍所レ載咎徵不レ輕非レ仰二諸神一冥助上何攘二一天禍殃一任二永保例一奉レ增二一階一云々○有二改元一改二正治一爲二建仁一是日天下諸神可レ奉レ增二一階一之由被レ宣下一召二大内記菅原爲長一云々○改二文應一爲二弘長一是日天下諸神可レ奉レ增二一階一之由被レ宣下一仰二大内記菅原爲長一云々○改二保延七年一爲二永治元年一云々天下諸神可レ奉レ增二一階一之由被レ仰二大内記藤原明範一仰レ之云々○次有二改元定事一改二保延七年一爲二永治元年一云云今年相二當辛酉一任二永保例一天下諸神奉レ增二一階一之由被レ下二宣旨一兼可レ令レ注二進本位一之由被レ仰二權右中弁藤原資信朝臣大内記中原師安等一云々○改二正治三年一爲二建仁元年一云々天下諸神可レ奉レ增二一階一之由被レ仰二大内記藤原明範一仰レ之云々○改二元應一爲二元亨一三月廿八日壬寅諸神位記事被レ仰レ之云々○改二康暦一爲二永德一是日諸國諸神可レ奉レ增二一階一之由被二宣下一召二大内記菅原言長朝臣一被レ仰レ之云々○改二承暦五年一爲二永保元年一此日天下諸社神可レ奉レ增二

一階ニ之由被レ下ニ宣旨ニ云々○改ニ保延七年ニ爲ニ永治元年ニ云々任ニ永保例ニ天下諸神奉レ增ニ一階ニ云々○改ニ正治三年ニ爲ニ建仁元年ニ又天下諸神可レ奉レ增ニ一階ニ之由仰ニ大內記菅原爲長ニ云々○改ニ文應二年ニ爲ニ弘長元年ニ次五畿七道諸神奉レ增ニ一階ニ之由被レ仰ニ大內記明範朝臣ニ云々○改ニ元應二年ニ爲ニ元亨元年ニ三月廿八日壬寅諸神位記事被レ仰レ之云々○改ニ康曆三年ニ爲ニ永德元年ニ任ニ承曆例ニ令レ作ニ詔書ニ又諸神一階可レ奉レ增之由被レ仰ニ大內記言長朝臣ニ云々 已上一卷中之抄出

已上革曆勘文五冊の中四冊に諸神一階の事あり卷次錯亂不レ詳これ紀傳明經笇道陰陽道曆等の勘文外記局勘例仗議定文宣旨等の革曆にかゝりたるを纂輯せる書也右の抄出中必竟は白河院永保元年崇德院永治元年崇德院永治元年土御門院建仁元年龜山院弘長元年後圓融院永德元年合て五度天下諸神に一階を授られたる事と後醍醐天皇元亨元年諸神位記之事被レ仰たるのみ也 內局柱礎抄上に柱史抄云天曆六年諸神一階其後連々不レ絕近例壽永二年日吉諸神幷丹生高野明神等被レ奉ニ階級ニ同三年北野宰相殿被レ增ニ正二位ニ和泉殿被レ增ニ從三位等ニ也云々また神位記の事も同書を引ていへり

(卅)領狀を取 革曆勘文に革命仗議記を載て正治三年二月十三日の條に通具云今日領狀參議只親經一人也仍每歟度雖レ催ニ兼忠卿ニ敢以下不歟參而已責ニ取領狀ニ了云々此に據れば領狀の書を取るよしにて見參文を見參といふ類にや

(卅一)勘文幷年號の訓法及唐音對馬讀 同條に親經問ニ其次第ニ予答云先紀傳次同勘文兩儒卿也次親經次同別勘文冥業也 □道次曆次陰陽道次外記例如レ此可レ讀也者親經次第讀申皆唐音讀其字總不レ用ニ對馬讀ニ也此事可レ尋 云々また建仁難□諱年號用ニ對馬音ニ御諱用ニ唐音ニ非ニ深難ニ歟愚按仁字已同和漢之音差別無ニ其詮ニ歟然而不ニ復言ニ□ 兩箇之間付レ輕可ニ計用ニ云々按に對馬讀は尼法明百濟より傳來せる訓法にて吳音也法明は山階寺維摩會興行の尼也年號の訓法は漢吳音付レ輕可ニ計用ニよし此文にて知べし

(卅二)そなれと云詞 そなれといふ詞は曾根好忠が「みよしのゝきさ山かけに立る松いく秋風にそなれきぬらん」家集詞花秋をはじめにて俊賴散木集上十四丁ウ同中一丁ウ二ウ同下卅七丁ウ夫木春四同雜八同雜十一同雜十八 顯季家集十二丁ウ同卅七丁ウ夫木雜十一 兼昌次郎百首 待賢門院安

藝千載戀三 清輔家上集 などその外よめる歌あげてかぞへがたし副馴を略してそなれといへる也礒馴松など心得たるは誤也藻鹽草にも說あり可レ考類聚名義抄一の卷走部に佯遁ソナルとよめり

(卅三)アブリコの雅名 俗にアブリコ又はテッキユウなどいふ物あり食物を燒器也アブリコ一名アミともいへり節用集天部に鐵器ウツキと見ゆ此を誤てテッキユウとは呼る也書言字考器財部に焙爐アブリコとあり按に鐵キユウは鐵器にて鐵を二本わたしたる也ワタシガヰとも方言にはいへりでんがくともいふよし已にいへり を燒に用ふアブリコ一名はアミにて餠を燒に用ふ類聚名義抄八の卷金部に鏾鎏アブリダナとあるは焙爐鐵アブリコナベ器にわたりたる雅言といふべし

(卅四)鐵杖 類聚名義抄八の卷金部に鑼カナヅエとあり鐵棒鐵杖鐵鞭などみなカナヅエと訓べしこは余が鎗棒長刀考に補べき說也

(卅五)家根をふく 負販の人商物して其日用分の利を得たるを家根をふくといへりこれ江戶近邊關東の藥仕市商などの語也其日の立前を取ともいへり類聚名義抄八の金部に金錢ヤナフキと訓るは負販者が其日得たる屋根葺料の金錢をいへるにや抑家根を葺といふよしは住處定めぬ人旅商人がかりそめの見世棚を搆へ雨もらぬやうにして物をうればなるべし

(卅六)十字緘 俗に十文字に結といふは十字緘といふべし內局柱礎抄下卷位記筥の事をいへる條に愚昧記云整ニ入黑塗筥ニ覆レ蓋緘レ之十字緘レ之云々また次緘レ筥云々柱史抄云覆レ蓋以如ニ十字ニ緘レ之云々愚昧記云覆レ蓋緘レ之十字緘レ之云々また仰ニ少內記ニ令レ緘レ之十字留緘レ之天結目當ニ中央銘上ニ諸鈴留結ニ留之ニ云也云々按に辻を十字街といへば十字緘は「ツジムスビ」とか「ツジユヒ」とか「ツジカラゲ」とかいふべしされど「カラゲ」は心違へば「ツジユヒ」「ツジムスビ」など訓んと然るべし

(卅七)「むく」幷「むくる」「むしる」と云詞 夫木抄雜十一四十一丁ウ栗部に信實「枝栗のしふる〳〵もわかゝたにむけるを見るそゑむ心ちする」此歌我方に向るに栗の澁皮を剝よしをよせたり平家物語劍の卷に南都衆徒朝家ヲ恨奉テ數万人ノ大勢京都へ攻上リシヲ爲義十六騎ニテ栗子山ニ馳向ヒ追歸ス同ク劍ノ用トゾ聞エケル其時山法師一首ノ狂歌ヲゾ立タリケル「奈

良法師栗子山迄シブリ來テイカ物具ヲムキゾ取ラルヽ」此歌も栗の澁(シブ)イガなどを剝(ムク)よしによめり古今著聞集十八の卷十五丁ウ飮食部に石泉法印祐性くらまでらの別當にてかれよりすゝをおほくまうけたるをある人のものとへつかはすとてよめる「この須々(スヾ)は鞍馬の食(飯)ふくにてさふらふぞさればとて又むか(ム)でめすなよ」須々は筭(タカシナフク)歟福は福酒などいひて祭神の物にいへり此筭は鞍馬寺の福物也さればとて皮をむかすして食給ふなと也又は須々は「スヾシロ」にて大根の事福に當をよせて難當の心をふくめたる歟又按にふくとは餅の事を「フクダ」ともいへば餅にて候へどもさればとて實は筭なれば皮をむかすしては食給ふなとなるべし福は備也禮記剔「ムク」剔「モク」又「ソル」又「ケヅル」切「キル」又「モク」などよめり「ムク」と「モク」は通音也字鏡集に刮を「ムク」ともケヅルとも訓るに類聚名義抄には同字を「ムシル」「ハグ」「ケヅル」など訓たれば「ムク」も「ムシル」も同義也宇治拾遺物語一の卷廿一丁ウ利仁暑預粥の條にうすらかなる刀のながやかなるもたるが十餘人ばかりいで來て此芋をむきつゝすき切にきれバ云々太平記廿五京勢重發向(ニハヒトリハゼ)天王寺ニ條に猛惡ノ下部共辻々ニ打散テ是非ナク奪取剝(ギリ)ムクリケレバ云々此「ムクリ」ハ「むく」を延(ノベ)ていへる語也されば「むく」「もく」「むくる」「むしる」など同語ながら「むく」は瓜の皮を「むく」栗の皮をむくなどにいへり「もく」は同音にて通ず「むくる」ハ強くふつゝかにいはん時の語にて珍寶(チンポウ)の皮をむくつたなどいへり「むしる」ハ草を「むしる」物の肉を「むしりくふ」などにいへり剝(ハグ)はその剝るべきものにいひ「むく」ハ剝(ハグ)れざるものを殺取(ソギトル)にいひ「むくる」は皮あるものを押脫(オシヌグ)にいひ「むしる」は毛立(ケバタテ)たるものを握扳(ヒキヌク)にいへり字鏡集に刮「ムシル」亦「ハグ」云々新撰字鏡虫部に蛤蜊蜈也螔(イヒ)伊比保牟志利蛸之母(ホムシリ)也云々こは和名抄にも見えて今「イボジリ」とも螳螂(タウラウ)ともいふ虫也字鏡集六の卷(艸部中)に芼(バウ)ムシル云々古今著聞集十六の卷四十二丁オウに其鳥をとらへて毛をつるりとむしりてけり二品きかれて比興の事に思ひて歌をよみてふだにかきて壬生の辻に立られける「ひえ鳥をむしりつゝみのはたかはらしかすすにしてなはわたる也」宇治拾遺物語四の卷十二丁ウにいけながら毛をむしらせければしばしはふた〳〵とするをおさへてたゞむしりにむしりければ鳥の目より血の涙をたれて目をしばたゝきてこれかれに見合せけるを見てえたえずして立てのくものもありけり

「もく」「むくる」「むしる」など同語ながら「むく」は瓜の皮を「むく」栗の皮をむくなどにいへり「もく」は同音にて通ず「むくる」ハ強くふつゝかにいはん時の語にて珍寶の皮をむくつたなどいへり「むしる」ハ草を「むしる」物の肉を「むしりくふ」などにいへり剝はその剝るべきものにいひ「むく」ハ剝れざるものを殺取にいひ「むくる」は皮あるものを押脫にいひ「むしる」は毛立たるものを握扳にいへり字鏡集に刮「ムシル」亦「ハグ」云々新撰字鏡虫部に蛤蜊蜈也螔伊比保牟志利蛸之母也云々こは和名抄にも見えて今「イボジリ」とも螳螂ともいふ虫也字鏡集六の卷艸部中に芼ムシル云々古今著聞集十六の卷四十二丁オウに其鳥をとらへて毛をつるりとむしりてけり二品きかれて比興の事に思ひて歌をよみてふだにかきて壬生の辻に立られける「ひえ鳥をむしりつゝみのはたかはらしかすすにしてなはわたる也」宇治拾遺物語四の卷十二丁ウにいけながら毛をむしらせければしばしはふた〳〵とするをおさへてたゞむしりにむしりければ鳥の目より血の涙をたれて目をしばたゝきてこれかれに見合せけるを見てえたえずして立てのくものもありけり

りこれがかくなくことゝ興じ笑ひていとゞなさけなげにむしるものもありむしりはてゝおろさせければ刀にしたがひて血のつぶ〳〵といで來けるをのごひのごひおろしければ云々同十の卷十二丁ウにえもいはず大なる猿のたけ七八尺ばかりなるかほと尻とは赤くしてむしり綿を著たるやうにいらなくしろきが云々藻鹽草五の卷海部わたつうみの條に「わたつうみの手にまきもたる」とよめるは綿むしることを海によせて云歟綿むしる手をはつむと云也しからばわたつむ歟みとむと同五音の故也云々倭訓栞(牟部)雅言集覽(牟部)などにも見ゆ集覽に源氏榊平家勘文の卷を引たり可レ考

(卅八)さくさめ　類聚名義抄(二の卷)の口部に噯サクサムとよめりこは後撰雜四の「まつにけぬへしさくさめのとし」の注によしあれば抄出せりさくさめ明神の事は懷橘談にくはし頭書(奥義抄能因歌枕俳案抄三代集問事袖中抄後撰正義)

(卅九)みづはさすみづわくむかいわぐむ　法華驗記今昔物語などに「美豆波佐須八十ア マリノ 老ノ浪」とよめり後撰集檜垣嫗が歌には「みづはくむまで老にけるかな」大鏡序にみづわくめる貌などものに所見おほしかいわぐむとも見え類聚名義抄にも出たり同書九の卷住部に支離ミズワサスとよめりこは瑞齒(ミヅバ)萌(クム)とも瑞齒生(ミヅバスス)とも通じて「クム」は「メグム」也「サス」は指生(サシフシ)也「かいわぐむ」は「かい」は打(ウチ)也「わぐむ」は輪組(ワグム)也後に三輪組は老人の貌(サマ)といへる說によりて出來たる詞也

(四十)くねる　古今序にをみなへしの一時をくねる云々源平盛衰記に太政入道くねりまうしてと云々類聚名義抄六の卷心部に憤を「イカル」「イキドホル」「クンヂル」などよめり「クンヂル」はくねる也今俗にまがりくねるといひ源氏にくね〳〵しなどいふ詞も見ゆぐち〳〵といぢわろくうらむさまをいふ也けり頭書(砂石集九の卷十六丁ウ值三惡緣發心事條に妻恨ミクヂリ打泣ナドシテサラバ暇チタベイカナル人チモ憑デスギントイフ云云砂石集三ノ二丁ウ築島草子に秋まちかぬる萩の花桔梗かるかやをみなへし露おもげにてくれるかや云々)

(四十一)まぐれ夕まぐれ　類聚名義抄二の卷日部に昳「カヾヤク」又「ヒグレ」又「マグレ」と訓たりこれによればゆふまぐれと云詞はもと「まぐれ」といふに夕をかうぶらせたる也「マグレ」は目暗(マグレ)にて目のくれふたがりて物の見えぬ比なればさいふなるべ

し

（四十二）とすれば　古今集の「とすればかゝりあふさきるさに」の歌の注に枕草子（春曙抄二の卷十三丁ウ）のとする人はなほ曉のありさまこそをかしくもあるべけれと有を引べし

（四十三）下衆の一寸　戸障子の出入に跡をしかと引立ずとばかり明おくを俗に下衆の一寸とていやしめいへり枕草子（春曙抄二の卷十四丁カ）にくきものゝ條にあけて出ぬる所たてぬ人いとにくしと有

（四十四）房州滑山の山祇大明神の神託　安房國長狹郡天津村より東方二里許に滑山（スカリ）の山祇大明神ありその神託いちじるくて巫女吉凶を示すこと露たがふとなしそこは上總木更須（キサラズ）より鹿野山清澄（カノウザンキヨスミ）を經て天津村には到れる也木更須より滑山まで十三里許と云々又同國浪合といふ所に名人の灸醫ありその說神のごとく病人必驗（ワカ）を得るといへり又同國高崎といふ所に冷泉あり湧して溫泉とす瘍療に功ありといへりいづれも木更須を經て行處也浪合高崎は近邊にて木更須より十二里許のほど也といへりいづれも水谷昌年足跡を極てものがたれるにてうきたるとにあらず

（四十五）金玉の聲　白氏文集に遺篇三十軸軸々金玉聲と作れるは文選一（四十六班固の東都賦に玉潤而金聲注に善曰尙書傳曰天子諸侯受ニ命於周一莫レ不ニ磬折玉音金聲一云々とあるをとれるにや

（四十六）忌服　喪葬令に凡服紀者爲ニ君（謂ニ天父母及夫本主一不レ在ニ此限一也）一年（謂以ニ十二月一爲レ限不レ計ニ閏一也）祖父母養父母五月（即謂其養子爲ニ本生一年一月也）曾祖父母外祖父母伯叔父姑妻兄弟姉妹夫之父母（謂養子之妻妾於ニ夫養父母一亦同）嫡子三月高祖父母舅姨嫡母繼母繼父同居異父兄弟姉妹衆子嫡孫一月衆孫從父兄弟姉妹兄弟子七日與清按に服は喪服也紀は集解に穴云紀者節也事也と見ゆ君は集解に古記云君者指ニ一人一天皇是也俗云ニ須賣良美己止一也云々父母は集解に俗云ニ知々於毛一也云々夫は集解に俗云ニ乎比土一云々本主は主人也文學は師也家令は附家老の類也此等は無服也其外家人奴婢は一年の服紀也一年は義解に以ニ十三月一爲レ限不レ計ニ閏月一といへり集解にも十三月といへり塙本に十二月とあるは一年十二月に據て改たるにや祖父母は集解に俗云ニ於保知於保波一云々養父母は養父養母也「トリハヽ」「トリゴ」などいふ詞あれば「トリオヤ」と歟「トリチヽ」「トリハヽ」と歟いふべくや曾祖父母は集解に俗云ニ於保保知一云々外祖父母は集解に俗云ニ母方於保遲於保波一云々伯叔父は集解に俗云ニ兄乎遲乎遲一云々伯父は兄乎遲也叔は乎遲也妻はツマ也兄弟はアニオトウト也姉妹は集解に俗云ニ阿禰於伊毛一也云々アヽイモウト也夫之父母は集解に謂養子之妻妾於ニ夫之養父母一亦同俗云ニ志比土志比土一云々嫡子は集解に俗云ニ母方乎遲乎婆一云々高祖父母曾姨は集解に俗云ニ母方乎遲乎婆一云々嫡母は集解に俗云ニ麻々母一云々繼母繼父同居は集解に俗云ニ麻々父一云々異父兄弟姉妹は俗云ニ麻々波良加良一云々衆子は集解に俗云ニ男女一云々嫡孫は集解に俗云ニ宇麻古一云々從父兄弟姉妹は集解に俗云ニ宇麻古一云々從父姉妹者俗云ニ伊止古波良加良一也從父姉妹俗云ニ伊止伎毛一也云々兄弟子は集解に俗云ニ乎備賣比一云々〇儀制令に凡遭ニ重服一有ニ奪レ情從ニ職並終一服不レ吊不レ賀（謂不レ吊ニ不レ預ニ宴於吉凶一賀謂雖ニ是公會一亦不レ得レ預）按に重服の中强て職を勤るは今の世忌服御免などとて或は半減し或四半減などして御役を勤ざるに同じされど日間立ざる內は他の凶事を吊はず吉事を賀せず酒宴の席には公より賜はる時にも出ざる也〇又云

凡凶服不レ入ニ公門一（謂凶服者縗麻也公門者宮城門及諸司曹司院其國郡廳院亦同但驛家厨院等者非也）其遭レ喪被レ起者朝參處亦依ニ位色一（謂入ニ公門及朝參處一並依ニ位色一也）在レ家依ニ其服制一按に凶服は喪服にて縗麻也和名抄葬送具縗衣唐韻云縗喪服也倉囘反與レ催同和名不知古路毛云々玉篇に縗喪服云々左傳襄公十七年注に縗在ニ胷前一云々說文に服衣長六寸博四寸直レ心云々など見えて法服の袈裟のごく胸に直る喪服を縗といひ麻もて作れば縗麻とはいへる也これ素服して縗を胸前に直るにやふちごろもといへるよしは賤が著る藤の衣は麻布よりもいと麁ければそれにたとへて平生の麻衣よりもとに麁きを著るよしの名也万葉二天武天皇崩後太后の御歌に荒妙乃衣之袖者乾時文無同五に麁妙能布衣遠佗爾伎世難爾など詠て古くは荒妙の衣といへりまた荒妙の藤原がうへに又荒妙の藤井が原になど荒妙の藤とつゞけたるも藤布は荒ければ也さて藤衣ともいへる也けり古今秋下に「ほにも出ぬ山田をもると藤衣稻葉の露にぬれぬ日はなし」後撰戀三に「伊勢の海にしほやくあまの藤衣」云々万葉にも「山田守翁が藤衣」又「須磨の海人の鹽燒ぎぬの藤衣」などもよみて此等は賤が著る藤の衣也古今戀三に

「おもふとちひとり〳〵か戀死なはたれによそへて藤衣きん」同哀傷に忠岑「藤衣はつるゝ糸はわひ人の涙の玉のをとそなりける」兼輔集に「藤衣うきをかきりにはつれつゝ涙の玉をぬきてかしつる」古今貫之が長歌に「あかすして別るゝ涙藤衣おれる心もやちくさの」云々後撰哀傷に「わひ人のたもとに君かうつりせは藤の花とそ色は見えまし」返し「よそにをる袖たにひちし藤衣涙に花も見えすそあらまし」拾遺源順が長歌に「藤衣ふたゝひたちし朝霧に心も空にまとひそめ」云々拾遺哀傷に敦忠「藤衣池さへきるそかなしかりける」云々又服ぬぎ侍るとてよみ人しらず「藤衣はらへてすつる涙川」云々又「藤衣はつるゝ糸は」云々又恒徳公の服ぬぎ侍るとて道信朝臣「限りあれは今日ぬきすてつ藤衣」云々又思ふめにおくれてなげく比よめる大江爲基「藤衣あひ見るへしと思ひせば」云々古今六帖四かなしびの歌に「藤衣おりける糸はふちなれやぬれはまされとかわく時なき」蜻蛉日記上に「藤衣なかす泪の川水は岸にもまさるものにそありける」源氏物語（湖月抄本）榊の巻（十四丁ウ）に藤のみそにやつれ給へるに云々少女（二丁）に「藤衣きしは昨日と思ふまに」云々若菜上（八十一丁オ）にいにしへより人の染おきける藤衣にもなにかやつれ給ふ云々夕霧（四十八丁オ）に「藤衣露けき秋の山人は」云々橋姫（四十丁オ）に藤衣たちかさねかなしきことを思ひ給へしほどに云々總角（十九丁オ）に藤の衣もあらため給へつらん云々河海抄榊に縫衣（フヅコロモ）和名ふち衣は服者の著物也本義は藤の皮にて織れる布也御素服に布を用此儀也主上は以レ日易レ月とて十三日著御して令レ脱御一也又裁麻とて麻布をも用也僧の著する墨衣（スミノコロモ）も佛の御服云々國史曰仁明天皇承和七年五月癸未後太上天皇崩二于淳和院一天皇除二素服一著二堅絹御冠橡染御衣一以臨レ期御簾及屏風縁並用二墨染細布一云々新釋に喪服は上代より麻を用ること万葉の歌喪葬令義解集解などに委し其後古今の歌に藤衣と有はいと〳〵荒妙を著るよし強くいはんとての事也然るを古今の歌に泥ていふ說はいふにたらず云々冠辭考四白妙の條に孝德紀に其葬時帷帳等用二白布一（王以下小智以上右ナホビトハに同じ）庶人云々可レ用二麁布一（アラタヘヲ）と喪葬令義解に錫紵者（シヤクヂヨハ）細布（ニギタヘ）云々同集解に不レ限二布麁細一皂色布也（アラニゴニクリイロノタヘナリ）云々これに万葉卷十三挽歌に大殿矣振放見者白細布飾奉而内

日刺宮舍人方雪穗麻衣服者（ヒサスミヤノトネリハタヘノホノアサギヌキレバ）云々抑喪服の色は素服なるよしは續日本後紀に素服（シロキイロ）万葉に雪穗の麻衣服者（アサギヌキレバ）などよみて素色也又皀色布（クリイロノヌノ）と見え後拾遺哀傷に一條院御製に「これをたにかたみと思ふをみやこには葉かへやしつる椎柴の袖」榮花物語月宴（三十九丁ウ）におなじ諒闇なれどこれはいと〳〵おぢろ〳〵しければたゞ一天下の人からすのやうなりよも山の椎柴殘らじと見ゆるもあはれになん云々秘藏抄上（八丁カ）に園香朝臣「はかなくてたまきはりにしたらちをのゆゑにそきつるしひしはの袖」たまきはるとは命極る也たらちを父を云也椎柴の袖とは色衣を云也深養父「たらちをの消にし日よりきつるかなこのもしからぬしひしばの袖」これ等の皀色（クリイロ）及椎柴（シヒシバ）の色は黑色也源氏若菜上に染おきける藤衣といへるも此色なるべし榮花晩待星にいろの御衣とあるはた此椎柴の衣也又藤衣といふより藤色衣をも著たりけん後撰哀傷に「藤の花とそ色は見えまし」とよめり埃嚢抄に親の喪に居人は淨衣を著れば色をきるといふよし見ゆ○公門は集解釋云市門倉庫國郡厨院驛家等類不レ稱二公門一但國郡廳院市司廳院門者是爲二公門一耳古記云不レ入二公門一謂市不レ在二公門之例一以二午後一集故自餘國郡廳院爲二公門一倉庫國郡厨院驛家等類不レ稱二公門一也穴云凡公門皆是宮城門亦爲二公門一也於レ市其曹司院是爲二公門一耳跡云公門謂二國郡廳門一皆同也朱云凶服不レ入二公門一者假五月服卅日而則卅日不レ入二公門一耳不レ願二本五月一也云々○假寧令義解に凡職事官遭二父母喪一並解官（謂選叙令職事官忠經二百廿日一緣二親患一假滿二二百日一者並解官其番官者本司判解准レ此言レ之分番遣二父母及餘親喪一者解官并給レ假並皆同二職事一其養子於二本生一亦解官也）自餘（謂非二重喪一者）皆給レ假夫及祖父母養父母外祖父母五月服卅日三月服廿日一月服十日七日服三日云々○凡無服之殤（謂未成人死曰レ殤也）生三月至二七歲一本服三月（謂其於二五月以上服親一無二無服之殤一故唯云二本服三月一者不レ帶レ官人遭二此喪一者准二假日數一心喪居レ憂伯文云二無服一故不レ可レ著レ服）給二假三日一一月服二日七日服一日○凡師經レ受レ業（謂師者博士也依レ律已成レ業者是也私學亦同也）者喪給二假三日一○凡改葬一年服給二假廿日一五月服十日三月服七日一月服三日七日服一日○凡聞レ喪舉レ哀其假減レ半（謂假有二官人遭一父母喪一本假卅日一者在レ遠聞レ喪所在舉レ哀者減レ半給二十五日一有二乘日一者入二假限一（謂假如二本假三日一減レ半以二所レ乘之類也一一日入二假限一給二二日之類也○凡給二喪葬假一三月服以上並給レ程○凡給二喪假一以二喪日一爲レ始（謂喪日猶二死日一舉レ哀者以レ聞レ喪爲レ始（謂凡給二聞喪假一者以レ聞レ時爲レ始不レ可レ追二計死日一其聞喪之人應二往會レ葬者給二喪葬假一也）按に假（ケ）ハイトマにて喪に遭時

ハ假を給はりて職を休也服は喪服にて假の程過て職を務るにも尚此服を著用する也○延喜治部式五丁に凡妾爲レ夫服一年夫爲レ妾無二報服一按に拾芥抄下本卷五十服紀部に委く見えたれば閲して知べし法曹至要抄下十三丁喪服の條永正記上一丁内外親族假服日限事の條制度通七の卷禮儀類典四百八十一の卷など考合すべし元文元年九月十五日御改服忌令亦同葬喪の事は吉事次第吉事略儀喪送式葬法密などに見えたり頭書 該餘叢考十六ノ廿一丁ウ

(四十七)アノ山見サイコノ山見サイ　山兒の辭にアノ山見サイ此山見サイといふことあり似我蜂物語上十丁ウ十三段にあの山見さい此山見さいいたゞきつれたをはら木を此舞は誰此うたふものはたそ急にまなこをつけよ〳〵と有てもと舞の詞也似我蜂物語三卷板本也作者未詳下卷廿六丁オに石田次部少輔古城と見え信長記をも引用せり上卷廿一丁オに烟筒同卷廿丁ウに中卷廿四丁ウに鐵炮下卷八丁ウに三絃などの名目見えたれば寛永已後のものなるべし又中卷十九丁ウに予が草庵又野僧もつれづれなるまゝなどあれば出家の作也下卷十一丁ウに江戸の沂所に在郷ありと見え又廿八丁オ夏物みじか物語といふ雙紙予が此以前作りたりとも有淺井了意などが作にや了意は東海道名所記江戸名所記などはじめ著作おほき法師也

(四十八)秋茄子あさゝの糟子漬　筆記一百廿三ノ卷ニモ出似我蜂物語中卷一丁ウに此歌春雨抄に出「秋なすびあさゝかのすにかきそへてよめにくはすなたなにおくとも」これはうら屋に御座候ばゝさまの盛作のよし云々按にあさゝのかすにかきそへて或はわさゝの粕につけませてともいへり未レ詳頭書節用集醋早酒也安齋隨筆續編にあり和語解ノわ部に醋わさは早き心歟又わく酒歟云々「ワサ、早酒ノ略新酒ノ粕ヲ「ワサ、ノカス」ト云ル也以呂波字類抄醋ワサ酒未レ漉也

(四十九)六尺　鴛與丁のとを六尺といひお六尺女六尺などもいへりいにしへ力士といふもこれ也似我蜂物語中卷二丁ウにくつきやうの六しやく共四人に輿ぞへの侍一人有と見ゆ

(五十)羊　倭名抄毛群部に兼名苑云羝一名羭羊也和名比豆之美一名羖羊子也云々日本紀略嵯峨天皇弘仁十一年五月甲辰の條に新羅人李長行等進二殺羭羊二白羊四山羊一麞二云々本朝世紀天慶二年六月四日甲戌の條に政又上卿奏二賑給一奏二爰上郷召一飼

歳人所羊二頭一於二軒廊柱一繫レ令二左近陣官一折二集木枝葉一令レ飼レ之宛如レ牛食レ草良久以レ角相競似レ牛云々百練抄高倉院承安元年七月廿六日の條に入道大相國進二羊五頭麝一頭於院一云々同十月の條に近日稱二羊病一貴賤上下煩二病患一羊三頭在二仙洞一人傳承暦之比有二此事一件羊返二却之一云々支干の未をよめるは和歌童蒙抄九の卷獸部に羊「ウラミカヲムヤマ〳〵トオモフマニケフモヒツジニナリニケルカナ」古歌也ト云々拾遺集物名によみ人不知「うまれよりひつしつくれは山にさるひとりいぬるに人ゐていませ」此外おほし方角の坤をよめる歌は曾丹集にひつじさる「袖ひつしさるもあはれといはゝこそたもとをふくとなしもはてゝめ」又「戀するに衣手ひつしさるかひのあらはしほりて見すへき物を」此外所見おほし羊の歩みをよめるは千載雜下赤染衛門「けふも又午の貝こそふきつなれひつしのあゆみ近付ぬらん」童蒙抄羊の條にも出せり此外多々不レ可二枚擧一人名に羊大夫あり神道集七の卷に見ゆ藻鹽草十一の卷八雲御抄三下の卷十八丁古今著聞集二の卷廿丁發心集六の卷十四丁宇治拾遺六の卷十三丁續古事談四の卷十八丁奥儀抄中下の卷四十丁など考合すべし

(五十一)けるかな　伊勢物語にむかし男いもうとのいとをかしげなるが琴ひきけるを見をりて「うらわかみねよけに見ゆる若草を人の結はんことをしそ思ふ」かへし「はつ草のなどめつらしきとのはそうらなくものを思ひけるかな」堀川右大臣賴宗集に道命阿闍梨はじかみの花をおこすとて「花のみなちりての後にからくして殘れるものははしかみの花」返し「君はさはからき花をそこのみける世のすきものと思ひけるかな」此等の思ひけるかなはいづれも「思ひけるものを」といふ心に用たり「かな」は歎息の「かな」にて其餘情にふくめたる語格也

(五十二)〆字卍字　祈禱の札の上方に〆字を書くは以の字を分たる躰也祖庭事苑一の卷五丁に以字不成其說有レ三一謂是嘔啊二字二謂是音字不レ譯是梵書心字並指二經籤題上以字一也嘔啊者清涼疏主云經首立レ如是一謂異二外道一故外道經首皆立二嘔啊一或云二阿優一以爲吉阿之言無優之言有萬法雖レ衆不レ出二有無一此則斷

常之計今如即眞如是即妙有對ニ破邪宗一以彰ニ中道一一代時敎不レ出ニ如是二字一高僧傳有ニ譯經新意六例一一譯レ字譯レ音例レ內分レ四一譯レ字不レ譯レ音謂陀羅尼二譯レ音不レ譯レ字謂佛胸前卍字三音字俱譯謂經律論四音字俱不レ譯謂經題以字所謂嘔啊經首如是我聞即不レ在ニ經外籤題之上一所謂音字俱不レ譯未レ詳レ起レ自ニ於誰一考ニ其二說一似ニ乎無稽一或者妄指爲ニ梵書心字一梵本且無ニ此說一尤謬愚嘗過ニ輿國之傳法院一竊取ニ西竺貝葉眞書一考レ之其未譯之書經題尙且未レ立何有ニ以字之文一蓋自ニ古習謬妄爲一其說一先聖法門不レ在レ斯焉或問經首以形自レ何而得蓋當時備書者運レ筆以覆ニ經題一固無レ疑矣然宗匠假レ此以接ニ來學一豈知識擬議哉云々同一の卷十五丁ウ卍字の事見ゆ 輿清以字卍字の說 谷響集亦法苑珠林廿四の卷にも見えたりき 頭書以字不成ハハ傳燈錄一字不是ハノ卜十二ノ廿丁ウ容齋三筆十六卷十丁オ佛胸卍字條に法苑珠林叙佛之初生云開ニ卍字於胃前一踰ニ千輪於足下一又占相部云如來至眞常於ニ胃前一自然卍字一大人相者乃往占世國ニ除鬚濁不善行一故予於ニ夷堅丁志中一載ニ蔡京胃字一言京死後四十二年遷葬皮肉消化已盡獨心胃上隱ニ起一卍字一高二分許如鐫刻所就正與レ此同以ニ大姦誤レ國之人一而有ニ此祥一誠不レ可レ曉也豈非ニ天崩地拆一造化定數故產ニ此異物一以爲ニ宗社之禍一邪

（五十三）斗撽　大平記などに斗藪の身などあり 祖庭事苑一の卷九丁カ に斗撽當レ作ニ抖擻一音斗叟擧索物也云云玄應音義に多く見ゆ

（五十四）猿欺レ虬不レ與レ肝　虬有レ婦懷姙思ニ獼猴心食一其時夫虬欺レ猿騎ニ背上一而行猿問ニ其故一以レ實對レ之猿曰我適留ニ心於樹上一來善友還回放レ我我取レ心來於レ是虬復ニ水岸一猿努力跳ニ上大樹一不ニ再下一といへる物語祖庭事苑一の卷十丁ウ に見ゆ

（五十五）招手　俗言に手まねきをするといふは招手と書べし祖庭事苑一の卷廿丁ウ に路人借問遙招レ手とあり

（五十六）板牌　板の札を板牌と書べし祖庭事苑一の卷廿一丁オ に立ニ板牌一一所書云云々とあり

（五十七）虫食の字　虫食の字の事續日本紀に見ゆ祖庭事苑一の卷廿二丁オ の蝕木の條に如ニ蟲食レ木偶得レ成レ文云々 頭書太平記十二ノ十五丁オ

（五十八）老婆心切　老婆心切の字 祖庭事苑二の卷十丁オ に見ゆ

（五十九）牋は色紙　紙に牋といへるは染たるをいふ祖庭事苑二の卷六丁オ に以レ色加レ紙曰レ牋とあり

（六十）輕野といふ船幷焦尾琴　輕野は記紀に見えてそを燒たる殘の板もて船に作りたるよし歌にもよめり祖庭事苑三の卷六丁オ に東漢蔡邕吳人有ニ燒レ桐而

爨者一邕聞ニ火烈之聲一知ニ其良木一因請而裁爲レ琴果有ニ美音一而其尾猶焦故時人名曰ニ焦尾琴一焉と見ゆ

（六十一）龍門登魚　祖庭事苑三の卷十丁カ に水經云鱣鮪出ニ鞏穴一三月則上度ニ龍門一得レ度爲レ龍否則點額而還鱣張連切鮪羽軌切二魚名云々二の卷十二丁カ にも龍門河水所レ下之口在ニ今絳州龍門縣一龍門水險不レ通ニ魚鼈之屬一莫レ能レ上ニ江海一大魚集ニ龍門下一者數千不レ得レ上上即爲レ龍云々又廿六丁オ 水經を引ていへるは三の卷の說におなじ大和國龍門の瀧はこれによりて名づけし也

（六十二）眉間尺　太平記に眉間尺の事ありそは祖庭事苑三の卷十四丁カ に孝子傳を引ていへる說に據て書たる也 頭書寶物集五ノ廿五丁オ 舊本今昔

（六十三）不器用　俗に器用者不器用者などいへり祖庭事苑三の卷十七丁オ に不器論語曰君子不レ器包氏曰器者各周ニ其用一至ニ於君子一無レ所レ不レ施雪竇謂至人者無レ所レ不レ至者也云々

（六十四）雲の峰　雲の峰は夏の雲によめり祖庭事苑三の卷十八丁オ に陶潛四時詩春水滿ニ四澤一夏雲多ニ奇峰一秋月揚ニ明輝一冬嶺秀ニ孤松一云々

（六十五）ひぐろみ　俗に日にやけるといふ詞を新撰六帖にはひぐろみとよめり祖庭事苑三の卷廿丁カ に莊生云夫鵠不ニ日浴一而白烏不ニ日黔一而黑と見えて莊子の日黔の字面ヒグロミと訓べし 頭書莊子外篇天運篇に夫鵠不ニ日浴一而白烏不ニ日黔一而黑云々

（六十六）螺髮　祖庭事苑四の卷二丁オ に佛頂成ニ螺文一を螺髮といふよし注せり髮毛の渦卷たる貌を螺のさまにたとへていへる也螺は法螺貝の事也法苑珠林十七の卷に見ゆ

（六十七）刼幷殺那　祖庭事苑四の卷三丁オ に梵云レ刼此言ニ時分一又云日月歲數謂ニ之時一成住壞空謂ニ之刼一云云刼の事法苑珠林一の卷にくはし事苑四の三丁オ に又殺那の注あり俱舍云有力丈夫一彈指頃有ニ六十三殺那一云々

（六十八）象渡來　詠象詩補遺に考象の記あり平仲綏字君舒が撰也其略云享保十三年七月長崎有レ象至廣南船主鄭大成載レ舟來貢雌雄二生七歲九月雌斃今年崎人引ニ其雄一將レ赴ニ于關東一聖旨下レ詔抵レ京入ニ內庭一士庶咸得ニ縱觀一焉寔出ニ天恩之所一及也大成淸福

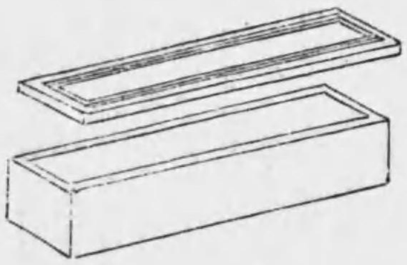
建漳州府人民往販二廣南一者按廣南古交趾嘗聞二遲羅譯人之說一遲羅出レ象形魁偉長丈餘或二三丈其極大者或十丈高一丈牙七八尺毛皆灰色六十年骨剛及レ歷二百年一毛盡白至罕三百歲死國人常駈レ象致レ遠惟其國王王娘駕每用二大白象一慣從調習能馴二於人一又能解レ語承レ敎听レ言性不レ邪知レ禮則跪死遺レ牙國人入レ山得レ之云遲羅南天竺所屬地或爲二眞臘一土沃而廣衍常暖無二冬夏之氣一多產二象水牯駱駝等屬一廣衡志以レ鼻爲レ用一軀之力皆在レ鼻等說太好南越志異物志其說二大小一與二遲羅一多不レ同蓋交趾所レ出恐如二二書一乎又載二帝王世紀左傳博物志等諸書一玆不二悉舉一云々按に詠象詩及補遺一卷享保己酉年京兆書肆二酉齋藏版にて搢紳家士庶の詠象の詩を集たりいづれも享保戊申の年廣南献二馴象一四月廿六日入レ京時の詩也余水戸の藩士佐々木晁が藏本を閲て其概略を抄す

(六十九)字伊江三音の差別　字は五十音中二處ありてアイウエオの所屬とワヰウヱヲの所屬と各別也字牟加斯とも於牟加斯とも通はしいへる字は「ア行」の字也烏はヲの假名に用ればワ行のウ也烏帽子の假字はエボウシなることワ行の所屬のヲウヱに通用すれば思ふべし嗚塢などもウの字なればヲの假名に用てこれはたワ行のウ也兎現などの字も乎佐伎乎都々など万葉に書たればワ行のウ也ヲケラウケラはたおなじ魚鱗などのウはイヲイロコと通へばア行のウ也ウヤマフのウも爲也備と通へば同じ然てア行は輕ワ行は重にて浮上などは輕の證居殖急居などは重の證也○伊は五十音中アイウエオヤイユエヨの二屬あり息をイキともオキとも礒邊をイソへともオシへともいふ類はア行の伊也老をオイともオユとも綏をオイカケともオヨカケともいふ類はヤ行のイ也行をユクともイクとも夢をイメともユメともいふはた同じア行は開顯浮上の意ありて出イヅル色イロ息イキ怒イカルなどの類此所屬也ヤ行は行遣除放の意有て射イル行イク入イルなどの類此所屬也○江は五十音中二字ありアイウエオヤイユエヨの二屬也越をコエコユ覺をオホエオホユ嘶をイハエイハユなどいふエはや行のエ也善をエキともヨキとも誤をアエマチともアヤマチとも疫をエヤミ役をエダチなどいふはたヤ行のエ也得をエともウともいふ類はア行のエ也かく所屬によりて差別あればイエウの三言もと六言なるこ

と知べし

(七十)文忌寸禰麻呂墓版　天保二年九月大和國宇陀郡八瀧村の農夫圃中にて銅版銅器等を掘出たり同年十月十日穗井田忠友其記一枚を記して版行せり忠友は奈良奉行(天保二年奈良奉行梶野土佐守貞村)の家臣なりといへり

鑄銅重五百匁



長九寸五分
廣一寸九分
高一寸五分
內收牌
錆色咸
紺綟

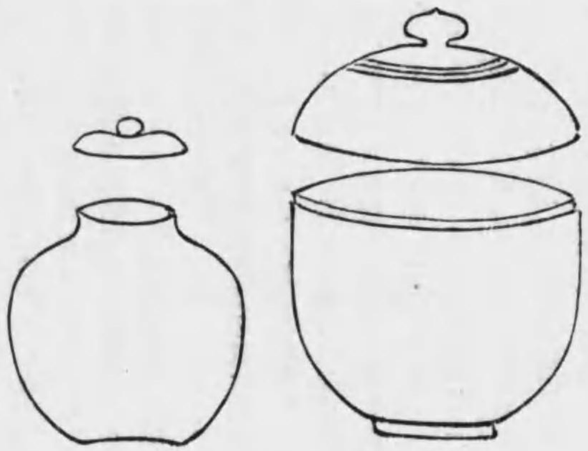
鑄銅鐫字長八寸五分 廣一寸四分

壬申年將軍左衞士府督正四位上文禰麻呂忌寸慶雲四年歲次丁未九月廿一日卒

銅牌記文

壬申年將軍左衞士府督正四位上文禰麻呂忌寸慶雲四年歲次丁未九月廿一日卒

鑄銅鍍金重一貫七百八十匁



高九寸
亘七寸五分
內收レ壺
外以レ炭藏レ之
高五寸五分
圍一尺六寸
口亘二寸
內實レ水水中有二粘滑者一壺破碎而水去乾枯如レ灰必是骨

○壬申年は天武天皇元年壬申六月の紀に甲申發レ途入二東國一事急不レ待レ駕而行之元從者皇后皇子已下書ノ首根麻呂之類二十有餘人○將軍は同年七月の紀に辛卯遣二書ノ首根麻呂等一掌二數萬衆一自二不破一出直入二近江一○左衞士府督は職員令に左衞士府右衞士府准レ此督一人掌下禁二衞宮掖一謂掖者正門傍之小門也檢二校隊仗一以レ時巡檢衞士名帳及差科謂差二配兵庫大藏二之類也大備陳設謂大備禮儀陳設兵仗也車駕出入前駈謂導引也後殿爲レ後殿事上佐一人大尉二人少尉二人大志二人少志二人醫師二人使部六十人直丁三人衞士云々弘仁二年十一月廿八日官符に應下改二左右衞士府一爲中左右衞門府上事云々參議正四位下藤原緒嗣兼二右衞門督一參議從四位上藤原冬嗣兼二左衞督一云々職原抄に左右衞門府兀衞士府嵯峨天皇御宇弘仁二年十一月改云二衞門府一云々○文忌寸は應神紀十六年二月百濟國貢二博士王仁一條に王仁者是書首等之始祖也古事記作二文首一古語拾遺作二河內文首一雄略紀九年七月有二河內國古市郡書首加龍一齊明紀二年九月有二高麗使中判官書首一天武紀十二年九月文首等三十八氏賜二姓連一十四年六月書連等十一氏賜二姓忌寸一○禰麻呂は續紀に大寶元年以二壬申年功一賜二食封一百戸一慶雲四年十月戊子從四位下文忌寸禰麻呂遣レ使宣詔贈二正四位上一幷賻二絁布一以二壬申年功一也按に誌に慶雲四年九月廿一日卒とし續紀十月戊子とす蓋可レ疑こは火葬して日を經て葬れるゆゑ贈位をもて記したる也又實は九月廿一日卒したるを公には十月戊子に告申ためれば續紀には後の月日を記せる也

（七十一）正朔月次の辨　正朔月次の辨陔餘叢考十六の卷四丁に引證して商周以來代々建寅の月を正月とし建丑の月を以て十二月とせるよしいへり實に確論なれば日本紀に東周平王の代に引合せて甲子を記したまへるもさること也

（七十二）殉死　殉死に換るに埴輪を用ること野見宿禰が計にて日本紀に其說くはし陔餘叢考十七の卷九丁に六朝無二殉節一よしいへり

（七十三）髮の貌　万葉十六八丁に三名之綿蚊黑爲髮尾信櫛持於是蚊寸垂取束擧而裳纏見解亂童兒丹成見此は宜き女兒等が貌ないへる條也云々又丁古歌曰橘寺之長屋爾吾率宿之童女波奈理波髮上都良武可左注に右歌椎野連長年說曰夫寺家之屋者不レ有二俗人寢處一亦僞二若冠女一

曰二放髮丱一矣然則腹句已云放髮丱者尾句不レ可レ重云著冠一哉云々決曰「橘之光有長屋爾吾率宿之宇奈爲放爾髮擧都良武香」按に女兒髮を搔垂又とり束ねて又童女にもするよし前の歌にて知らる次の歌には橘寺の長屋にて吾率寢し童女波奈利は髮上つらんかとおもひやれる也○同九丁に「八年兒之片生乃時從小放爾髮多久麻庭爾」云々按にこれは七年までは放の髮を八歲よりは肩に比べて切り十二三歲よりは項結放にすれば也小はキの通音集放にてウナキ放の事也○同七の卷廿三丁に「未通女等之放髮乎木綿山」云々按に少女が放の髮を結とかゝれる也○同卷十一十七に「振別之髮乎短彌春草乎髮爾多久濫妹乎師曾於母布」按に振別髮は八歲まで肩に比べて切たるが項の下より左右に別れ頰のあたりへ垂下れば振別髮とはいへる也それは擧るには短ければ春草を髮に擧らんとよめり○同卷十四廿五丁に「多知麥奈乃古婆乃波奈里我」云云按に多知婆奈は武藏橘樹郡あり古婆もそこの地名なるべし波奈里は童女の髮のさまもていへる也○伊勢物語に「くらべこしふりわけ髮も看過ぬ君ならすしてたれかあくへき」按に少女三四歲の比より七歲までの間は目剌にし八歲よりは肩にくらべて切るゆゑくらべこしふりわけ髮といへり然て十三四歲の比よりは延して擧るゆゑかくよめる也○万葉十三廿四丁に「歲乃八歲叫鑌髮乃吾何多叫過」云々按に伊勢物語の歌はこれによりたる也○同二十六丁に「多氣婆奴禮多香根者長寸妹之髮比來不見爾搔入津良武香」按に三方沙彌妾二園臣生羽之女一未レ經二幾時一臥レ病作歌也多氣はタグルの約多香根者はタグラチバの約也然て手操て髮擧すると也奴禮はヌルゝと解る貌也搔入津良武香は髮を搔擧て結つらんと歎とゆかしくその姿を思ひやれる也○又十六「人皆者今波長跡多計登雖言君之見師髮亂有等母」按に生羽が女の返歌也多計登雖言は人は髮を擧よといへどゝ也○万葉二の卷別記にいにしへ女の髮のさま幼きほどには目ざしともいひてひたひ髮の目をさすばかり生下れりそれ過て肩あたりへ下るほどに末を切てはなちてあるを放髮とも童放ともうなゐ兒ともいへり八歲子と成てはきらで長からしむそれより十四五歲と成て男するまでも

垂てのみあれば猶うなゐはなりともわらはともいへり云々又云上つ代には男の髪は頂に二處ゆひ女は頂に一所にゆひつと見ゆその後までも髪あげせしをいと後に垂し事有歟天武天皇紀に髪を皆結せられし事有て又故のごとく垂髪干背せよとの御制ありさて持統天皇紀にはいかにともなくて文武天皇の慶雲二年の紀に令下天下婦女自レ非二神部齋宮人及老嫗一皆髻髮上語在二前紀一重レ是重制也とあればその後すべてあげつらんかくて今ノ京このかたの書にはともかくも見えず物語書等には專ら垂たる樣を書たり只續古事談に高内侍云々圓融院の御時典侍辭しけれどもゆるされざりければ内侍所に屏風を立てさぶらひて申す事有時は髪をあげて女官を多く具して石灰ノ壇にぞ候けるとあり後に垂る御制あらばかくあらんやあぐるこそ後までも正しとせしこと知べし空穗物語の紀伊國吹上の卷に女は髪あげて唐衣著では御前に出ずといひ國ゆづりにも皆髪あげずと見えたりかくてそのあげたる形は内宴の樣書たる古き繪に舞妓の髪あげたる形と御食まゐらする采女が髪あげたる額の樣うなじのふくらなど大かたはひとしくて舞妓は寶髻をし采女はさる飾せぬ也且和名抄に假髮須以レ假覆二髮上一也といひ蔽髮比多波二髮前一也といへり雅亮が五節の事書るにおきびたひすゑ額といへるも是也かの舞妓の額の厚く中高きと采女が額のいと高からぬに此二ッのわかち有べし凡は紫式部日記に髪あげたる女房の事をからの繪めきたりとやうに書しもておもひはかるべし云々又冠注に卷四今十に「おほよそはたか見んとかもぬは玉の吾くろ髪をなひけてあらん」とよめるは少女の髪あげせぬ前はいと長くこちたければ私にまきあぐる事も有故にいふと見ゆ譬ば落窪物語にあこぎが一人してよろづいそがしきには髪をまきあげてわざするに主の前へ出るには搔下して出し事有がごとし伊勢物語の高安の女の髪を卷上て飯もりしも是也此くさ〴〵を分ていはゞうるはしく髪あげするは晴也たれてをるは常也まきあぐるといふは私也云々○按に目ざしはげに頭髪の目を刺ばかり生下れるをいへる也ウナキは項集にて項にて毛を集め結へば也項は和名抄に陸詞功韻云項ハ胡講反上聲之重顚後也和名宇奈之と見えて俗にいふエリの上の所也そのくぼみたる所を續世繼六の卷十三丁ウにうなじのくぼといひ源平盛衰記十三の卷十六丁ウ長門本平家物語八の卷一丁オなどには盆ノ窪といへり今俗ボンノクドといふは此ボンノクボの誤也盆は借字にて坊也バウといふを音便のまゝにボンといへり法師をボンサマとも坊サマともケシボウズの小兒をボンともバウともいふは其頭の圓きに依て坊主の僧をあがめいふ辭より轉れる也然ればボンノクボは坊主頭の窪き所といふ義也ハナリは放れ也髪の振放れ下りたる貌也ウナキは項集也項の邊にて毛を集め結ひて廻りの毛を下に放にする故にウナキハナリといへり

項卷放髪の圖

和名抄に後漢書注云髫髮ハ謂童子垂レ髮也和名宇奈爲俗用二垂髮一字一とあれど的當の熟辭にあらずワラハは亂端也切たる放髪の下り端の左右にわけ下れる也ワラハべといへば童子部にて童等といふにおなじ「べ」は「メ」と通ひ「メ」は群の約也和名抄に禮記注云童ハ未レ冠之稱也文選東京賦注云倀子ハ童男童女也倀子ノ讀師說ニ和良波倍童男ハ乎乃和良倍童女ハ女乃和良倍と見ゆ童男女の和名の倍は波の誤にて乎乃和良波女乃和良波なるべし古書皆然有て和良倍といへる例をさ〴〵聞えず聖德太子童形の肖像に振分髮あるはよし類聚名物考休部四にいへり こはウナキにせずしてハナリにのみしたるが末を肩に比べて切たるにもさらぬもいふ男女兒の稱也此男女の童は總名にて目刺にも放髪にもウナキにも渡りていへり

童男女の圖

放髪の圖

目刺の圖

子が年比に從て男は總角とて左右に角の如く擧て卷結也古くはこれを美豆羅といひ後にビンヅラともいへり女は童放にもあれウナキ放にもあれ年比に隨ひて鬢髮せし也○古事記上卷に刺ニ左之御美豆良一湯津津間櫛之男柱一箇取闕而云々又云即解ニ御髮一纏ニ御美豆羅一而乃チ於ニ左右ノ御美豆羅一亦於ニ御鬘一云々按に神代紀にも此事あり同說なれば擧す古事記傳六の卷十一にくはしくいへり後にはマゲアキともビンヅラともいふ是也○日本紀崇峻紀に古俗年少兒年十五六間束ニ髮於額一十七八間分爲ニ角子一今モ亦然之云々按に催馬樂に角總の歌あり神功紀に檜日浦にて御髮を解て海に入リ洗ヒ給ひて占給ふに御髮自分れたるを即分れたるまゝに結て髻とし給へるも男子の貌に出立

總角の圖

給ひし也○允恭紀に皇后曰妾自ニ結髮一陪ニ於後宮一既經ニ多年一云々文武ノ慶雲二年の紀に令テ天下婦女自レ非ニ神部齋宮ノ人及老嫗一皆髻髮語在ニ前紀一至此重創也至按に万葉の歌伊勢物語の歌などにたぐともあぐともよみたるを合せ考るに女兒はじめは目刺にて八歳より童放にしそれよりやゝ十二三にもなれば項結放にもし人に嫁に至ては結髮せし也項結放は半元服などいふ類なるべし万十六入丁に三名之綿蚊黑爲髮尾信櫛持於是蚊寸垂取束擧而裳纏見解亂童兒丹成見とよめるは廻りの髮を搔垂中の毛を卷揚て項集放にし又解亂りて童髮に成て見る也同卷十六に橘寺之長屋爾丁ウ吾率宿之童女波奈理波髮上都良武可此は橘寺の長屋にて吾抱寢し童女放は今は年比經れば髮上て人に嫁けん歟と也童女は例の亂端にて髮の項よりみだれ下りたるをいふハナリは放にて其放れかゝれる貌也ウナキハナリとは別也ウナキは項集にて項のあたりにて毛を集め結て廻りを搔垂れ放にするをウナキハナリといへり右の歌を椎野ノ連長年が決たるに橘之光有長屋爾吾率宿之宇奈爲放爾髮擧都良武香此意は橘の赤光長屋にて吾抱寢し童は今は十三四のほどなれば童放に髮結けん歟と也橘の光有はアカルともアカキイロに光れるをアカル橘とよみて女子の紅顏にもたとふれば下に紅顏の貌を含めたるにても有べし○和名抄二に毛詩注云總角ハ結レ髮也和名阿介万岐云々○催馬樂ノ呂歌に安介万岐也止宇止宇比呂波加利也止宇止宇左加利天禰太體止毛万呂比安比介利止宇止宇加與利安比介利止宇止宇○源氏物語總角に「あけまきになかき契を結ひこめておなし所によりもあはなん」河海抄に總角擧卷催馬樂云々花鳥餘情にあげまきに二ツ有童をもあげまきといふ髮をかしらにあげたる心也又車などに絲にてむすびてかくるをもあげまきといふ此あげ卷は糸を結びたるをいふ云々○夫木抄雜十七總角の歌に定家「あけまきはあとたにたゆる庭もせにおのれむすへとしける夏草」同雜十八戀の歌に定家「なかくとも結はさりける契りゆゑなにあけまきのよりあひにけん」○實方家集にある女に文やりたるかへりごとにあげまきを結ひておこせたれば「ひろはかりさかりてまろとまろねせよそのあけまきのしるしありやと」○神代記合解五の卷兼倶抄に結レ髮爲レ髻云々日本ノ冠ハ人皇三十代推古天皇ノ御宇ヨリ始ルゾ其前ニハ髮ヲ總角ニ兩方へワケテユフゾ其足ノアゲマキハ總角ヲ表スル也日神ハ男ノ躰ニナリテ著ニ甲冑一髮ヲアゲマキノヤウニ結ゾ今ノアゲマキト云モ自ニ日神一始ルゾ云々環翠抄に昔ハ總角ニメビンヅラノアマリノサガリハ總也上ハ角ニ似タリ和歌ニハアゲマキト云神功皇后異國對治ノ時ニ是ヲ表ス婦人ハサカワゲニメ櫛ヲソヘテ下ヘサゲテ置也女ハ陰ナレバ髮ヲ陰數ニ一ツニシテ置也男ハビンヅラニ二ツニスル陽數也此ハ男ノ形ヲシテビンヅラニ二ツニ髮ヲワゲタリ云々○景行紀廿丁四十三年の條に大歎之曰我子小碓王昔熊襲叛之日未及ニ總角一久頃ニ征伐一云々允恭紀一丁前紀に至ニ總角一仁惠儉下云々崇峻紀七丁前紀細注に十七八間分爲ニ角子一云々通證十一廿六丁景行條に今抄揚卷也角子即總角字出ニ詩齊風一疏云總ニ聚其髮一以爲ニ兩角一字典曰男女未ニ冠笄一曰ニ總角一云々同廿六五丁崇峻の條に角子即總角所謂左右髻也今天王寺太子像亦如レ此世說ニ王曇首年十四五便歌ス時作ニ兩丸髻一云々按に右に引たる和名抄已下の說を考わたして角子のさま思ふべし文選潘安仁が懷舊賦注に呂向曰惣角童子髻也とも見ゆ所謂美豆羅是也日本紀の訓も後のしわ

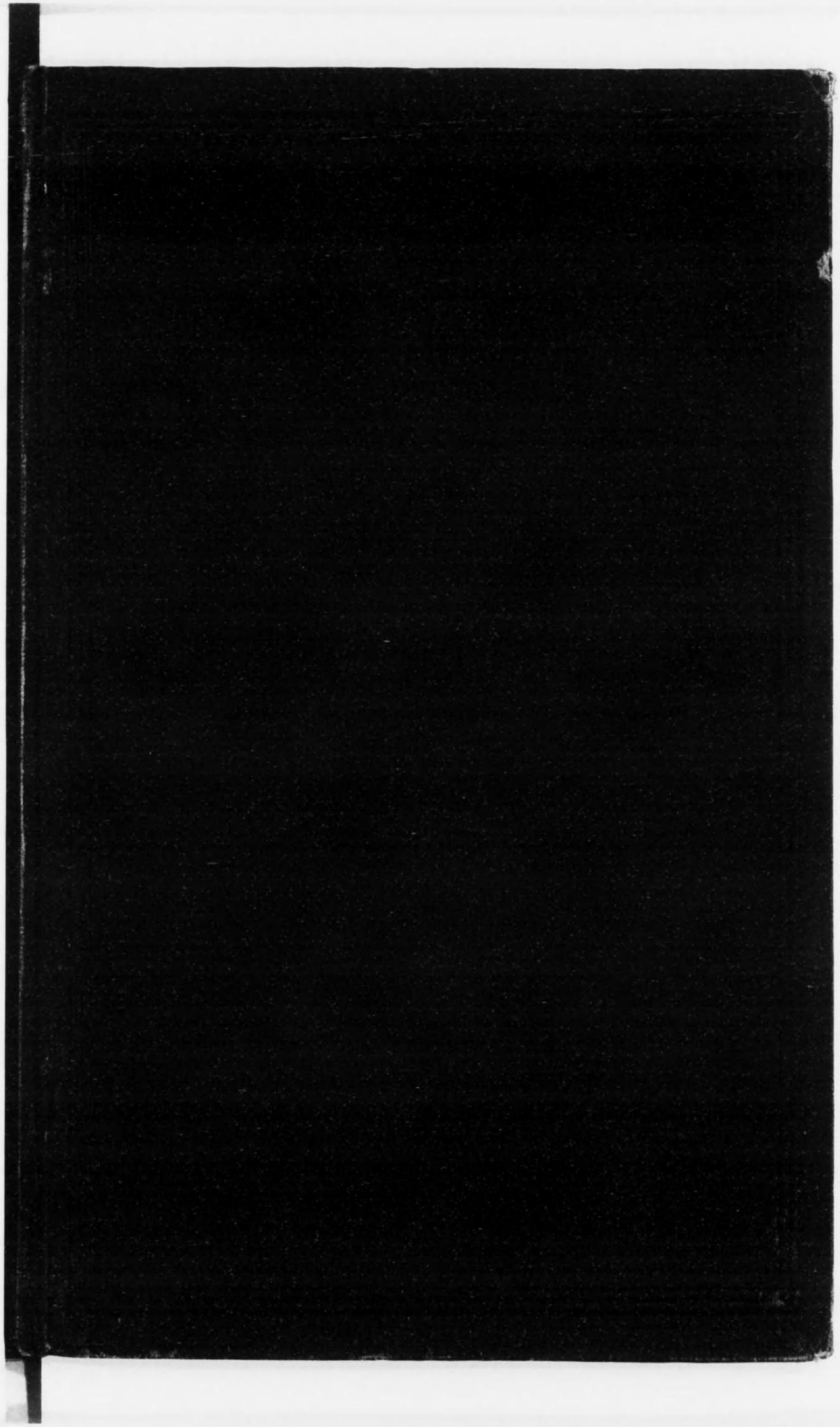
ざにて古代は必ミヅラとのみいへる也○和名抄二に禮記注云童ハ未レ冠之稱也和名和良波文選東京賦注云倆子ハ童男女也倆子讀師説ニ和良波倍童男ハ乎乃和良倍童女ハ女乃和良倍云々○万葉十六八丁に解亂童兒丹成見云々又十六童女波奈理ハ髮アゲツランカ又廿一小丁ウ兒等草者勿苅八穗蓼ヲ穗積ノ阿曾ガ鼻上ヲ穿レ同十八丗一丁オ に老人毛女童兒毛云々同十一丁オ 廿一に小童言爲流老人二四手同二十八丁オ に如手童兒云々一云多和良波乃如云々同四丗四丁ウ に手小童之哭耳泣管云々按に和良波は和々良波の約にや万八五十丁オ に玉貫不令消賜良牟秋芽子乃宇亂和和良葉爾置有白露とよめるは萩の末の垂下れるを和和良葉といへり万五丗丁に布肩衣ノミルノコト和々氣佐我禮流といへる和々氣又和々良と通ひて亂れ下れる也稻葉を和良といふはた亂垂ゆゑの名也されば童兒を和良波といふは髮毛の亂垂るより和良波といふこと疑なし波は端也髮の下り端也手童は手元を離たす愛するよりいへるにて手兒とも手兒女ともいへるにおなじ心の手也さて童は男女兒の總名にてそが中めざしといへるは前髮の目を剌すばかりなる小兒にいへり放は髮を垂放たるにいふ振分髮は項より左右へ分れ下りたる也ウナキは項にて集め結たるにてウナキ放は中の毛をば結と廻りの毛をば放垂たる也童放は肩に比べて切たるをいへり後に大童子といふは成人の人ながら頭の童なればさいへる也合戰の書に大童になりてなど書るも甲を脫ば下は童髮なれば也冠烏帽子の時は本鳥を結ひ甲冑を著る時は本鳥を放ちて童にする也 頭書 わらは後撰上卅丁ウ卅一丁オ 拾遺上四丁オ七十六丁ウ同下四丁ウ六十七丁ウわらはめ後撰下七十三丁オ 百因緣集九の卷廿三丁ウ平等供奉捨二名利一往生事條にヤセ衰タル者ノヲラワラトアルツヾリ許被テ云々八雲御抄三上雜四十丁ウ忍草條に大和物語に云下ゲ髮ノ説俗説辨四十四

明治四十一年七月五日印刷
明治四十一年七月十日發行

編輯兼發行者 東京市京橋區南傳馬町一丁目十二番地 國書刊行會代表者 市島謙吉

印刷者 東京市牛込區榎町七番地 大鳥居弁三

印刷所 東京市牛込區榎町七番地 日清印刷株式會社

非賣品

終